

---

# 仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア～ライダーシステムと心の大樹～

ソラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア〜ライダーシステムと心の大樹〜

### 【Nコード】

N67630

### 【作者名】

ソラ

### 【あらすじ】

舞台はハートキャッチプリキュアのメンバーが砂漠の使途との闘いを繰り広げている希望ヶ花市。

此処に一人のごく普通の高校生が川で偶然トランクを見つけてしまう事で物語は始まる・・・おなじみのハートキャッチの面々、砂漠の使途そして世界を我が物にしようと企む集団のそれぞれの思いが複雑に絡み合いながらも物語は進んでいく・・・

## プロローグ〜裏切りと消失〜（前書き）

ええ〜デビュー作でのいきなりカブトとプリキュアのクロスオーバーなんて無謀なことにチャレンジしようとしてる大バカ者ですが心広く見てもらえると幸いです。

## プロローグ 裏切りと消失

? 「はあ、はあ、はあ……何としてもこれだけは渡すわけには  
いかない……資格者を探さなければ……」

夜の街をフラフラとしたおぼつかない足取り歩いていく男がいた・  
・男は何やらデュラルミンケースを持ちながら何かから逃げている  
様子だった……そしてそんな男の前にある二人組が現れたのだっ  
た……。

? 「見つけたぞ? ……安西」

? 「手間をかけさせやがって……でもこれまでだ大人しく投降し  
る」

安西「大和、織田……お前たちその腕……まさか! ?」

安西と呼ばれた男は突如現れた二人の男にそう言う……二人の腕  
には何やらブレスレットのような機械が取りつけられている……  
するとそこに銀色のカブトムシと銅色のカブトムシがその上に止ま  
る。

大和&織田「変身!!」

電子音「HENSIN!!」

二人はブレスに止まったカブトムシの様なメカである「カブティッ  
クゼクター」を動かしブレスレットに収めていくと電子音が鳴り二  
人はヒイロカネと呼ばれる鎧に包まれていき大和はブロンズ色の仮  
面ライダーである仮面ライダーケタロスに変身していき織田はシル  
バーの色の仮面ライダーの仮面ライダーヘラクスへと変身していく  
のだった。

安西「お前達……俺を捕えに来たのか……それとも……」

大和「無論捕まえに来た……だが抵抗すれば……その命奪う事も辞さないとの上からの指示だ」

織田「悪い事は言わん……抵抗するな」

安西「大和……織田……」

安西は二人を見て哀しさにあふれていた……かつての旧友である二人に追われるという……それも自分が犯した罪の報いであると思いをながら二人を見ていくと……。

安西「……まだ俺は捕まるわけにはいかない……コレをお前たちの主人に渡すわけにはいかないんだ!!」

大和「ふん……まだ抵抗するとは無駄な足掻きを……」

安西はソレだけ言うその後ろを向いて走り出した……今は捕まるわけにはいかない……自分の犯した罪を償う為にも……しばらく走ると橋にたどり着く……此処までくればと一息ついたのだが……目の前にスーツ姿の男が立っていた……

安西「須藤か?……お前も……」

須藤「やっと思つきましたよ?……隊長……いえ元隊長」

須藤と呼ばれるその男も腕にブレスレットをはめているしかし大和や織田がしていたものとは造形が少し異なっている……

安西「お前は……ザビーに?」

須藤「ええ……裏切り者の貴方に代わって今はこの私がシャドウ隊の隊長です……恩師の貴方を傷つけたくはありません……大人しく捕まってください。そして早くソレを返してください……  
・変身!!」

電子音：「HENSIN!!」

須藤は飛んできた蜂のような造形をしたメカの「ザビーゼクター」を手に収めていくとヒイロカネの鎧に包まれていき蜂の姿をした仮面ライダーである仮面ライダーザビーに変身してゆつくりと安西に近づいていく・・・そして安西が動揺している間に大和達が安西を見つけて後ろから近づいて来る・・・

安西「これまでか・・・仕方ない・・・お前たちに奪われるぐらいなら!!」

安西はこの状況では成す術がないと悟ったのだがまだ本心では諦めて居なかった・・・デュラルミンケースを勢いよく橋の下の川へを投げ捨てたのだった・・・コレには大和と須藤はかなり動揺して川を見るが既にケースは川の沈んでいて流れていったのだった・・・

大和「貴様あつ!!・・・ライダーシステムをよくも!!」

織田「大和落ちつけ!!・・・取り合えずライダーシステムの捜索は後回しにして今はコイツを本部に連れていくぞ!!」

今にも安西の首を押し折りかねない大和をなだめていくように織田が大和を静止させる・・・そこに須藤が口を開く。

須藤「大和さん落ちついてください。寧ろ好都合というものです・・・我々があのシステムの資格者を探す手間が省けたというものです・・・それにもし我々に歯向かうようであれば排除すれば良いだけの事・・・」

須藤は安西を逃がさないように腕を掴んでいくとそのまま腹に拳を放つていくと安西を気絶させるとそのまま抱えていく・・・取り合えず裏切り者を捕えたのだから今はコレで良いだろうと大和をなだめていくと大和は納得したのか3人は安西を連れていくとその場を後にしていく・・・

しかしコレは彼らにとってかなりの誤算となるのだった・・・後の敵を作ると言う事になるとは今の彼らには想像がつかなかったのだ  
った・・・

## プロローグ〈裏切りと消失〉（後書き）

まずはプロローグと言うわけで敵サイドの紹介です。

ザビーに変身するのはオリキャラとさせてもらいました。名前の由来は・・・シザースの須藤さんです（大汗）



## 第1話「発見と再会」(前書き)

謎の組織が動き出している中とある町のとある高校生達は普通の日常を送っているのだった。

しかし彼らの日常もとあるベルトを捨つ事で無情にも動き出すのだった……。

## 第1話「発見と再会」

太陽が昇り朝を告げ火の光が大地を包み込みいつも通りの朝が来る。目覚ましの音が部屋に響き渡っていくとベッドに潜り込んでいる少年はいつも通りベットから起き上がるといつも通り下に降りて歯を磨きに行く。

そして彼はいつも通り朝食をとり学校へ行く支度を済ませると・・・

? 「いつてきまあゝす・・・」

母親 「行つてらっしやい 大人ひろと」

大人と呼ばれる少年はいつも通り学校へと向かう・・・何の変化のない日常が流れていく事に虚しさを覚えているがそれは変えようがないことであり諦めていた・・・すると後ろから突然衝撃が発生してきた・・・後ろを見るとそこにはイタズラ顔をしながら後ろから抱きついている少女の姿があった。

? 「なあゝに想いにふけてんの大人?・・・」

大人 「わああ!??・・・夕ゆう!??・・・お前また後ろから」

夕 「だって大人はいつも後ろが無防備なんだもん・・・」

大人 「だからつてお前はいつもいっつも・・・」

少女の名前は夕ゆう。大人幼馴染であり大人は否定しているのだが周囲から見れば大人と夕の関係は何処にでもいるカップルに見えるのだった。

? 「朝から御二人さん・・・ラブラブですねえゝ」

? 「全く羨ましいねえゝ」

そう言いながら言い合う二人に二人の少年が割り込んで来る

大人「傑すくろに琢磨たくま!!……だからそんなんじゃないっての!!」  
少年の名前は傑すくろと琢磨たくま……二人とも大人と夕の親友であり幼馴染でもあるのだった。4人は他愛もない雑談をしていきながら学校へ足を運んでいく……そんな中大人は何か思いついたかのように口を開く。

大人「そうだ……なあ久々に植物園にでも行かないか?ずっと言っ  
てなかったし薫子さんにも会いたいしさ」

夕「いいねえ」あ、そう言えば知ってる?そう言えばつぼみちゃん  
が引つ越してきたんだって」

琢磨「へえ、そうなんだ……」

傑「……夕はほんと色々知ってるのな……その情報源を教えてくださいわ」

大人「そうか……つぼみが引つ越してきたのか……」

4人は雑談をしながら学校へをたどりついく……大人は薫子の孫の事を知っていた……何せ幼いころはつぼみの兄貴役としてよく遊んだ過去が有る……それに夕や傑、琢磨達と混じってよく遊びに行った……今思えば懐かしい思い出ばかりだと大人は思いにふけているのだった。

時間は流れていき授業が終わり時が放課後なるとに4人は朝の話した通りに幼いころから通っていた植物園に久々に向かうのだった。

4人「こんにちはあゝ!!」

薫子「あらあゝ久々のお客様ね!!大人君、夕ちゃん、琢磨君、傑君お久しぶり」

夕「薫子さんも元気そうで……はあ、此処も小さい頃から変わら  
ないなあ」

琢磨「ホント……落ちつくなあ、花も綺麗だし」

傑「それに……雰囲気も癒されるよなあ」

夕達3人はそう言っていると薫子も嬉しそうに笑みを見せていく。すると

そこに大人が口を開く。

大人「そう言えば薫子さん・・・つぼみが此処に引つ越したんだって？言ってくれればよかつたのに」

薫子「あ、ごめんね大人君・・・言つてあげればよかつたんだけど・・・つぼみがね？」

大人「ああ、成程・・・たしかにアイツの性格を変えるきっかけにするのなら黙つておいた方がアイツの身の為か・・・」

大人は納得したようにうなづく・・・確かにつぼみの性格を考えたら最初は時間が必要であるし何よりその時に関われば大人自身も面倒な事になったかもしれないと言う事の配慮であると大人は思い3人に続き植物編の奥に入っていく。すると既に先客がいて4人の少女が植物園で寛いでいた。その中に見覚えのある顔・・・つぼみがいたのだった・・・。

？「あ、大人さん！！お久しぶりです」

大人「久しぶりだね！！つぼみ」

タ「つぼみちゃんお久しぶり」

琢磨「こつちに来たなら言ってくればいいのに」

傑「元氣そうだなによりだよ」

つぼみ「皆さんも元氣そうですね 言えなくてゴメンなさい。色々とあつて」

つぼみと大人たちは久々の再会にテンションが上がる・・・するとそこに3人の少女が割り込んでいった。

？「つぼみ、どうしたの？・・・その人たちは？」

？「見ない顔だね？知り合いかい？」

？「あら・・・タじゃないの・・・どうしたの？」

つぼみ「あ、えりか、いつきにゆりさんも！！紹介します。私の幼馴染の大人さんとタさんと琢磨さん傑さんです」

大人「上原大人です。よろしく君つぼみの友達かい？・・・コイツシャイで引つ込み思案だけど仲良くしてやってね？」

夕「あ、ゆりじゃない？・・・ゆりも此処に来るんだ〜知らなかった・・・あ、私は里中夕です〜宜しくね　一応大人の彼氏です〜？」  
大人「誰がじゃい！！！」

大人がツツコミのごとくそう言う。

琢磨「漆山琢磨だ。以後宜しく」

傑「景山傑です。よろしくね」

えりか「おお〜つぼみに年上の知り合いがいたなんて知らなかったあ〜・・・初めまして私はつぼみの同じクラスの来海えりかです！  
！宜しく願います〜！！」

いつき「明堂院いつきです。宜しく願います」

ゆり「月影ゆり・・・宜しく。」

夕「ゆり相変わらずクールだなあ〜」

大人「夕あの事知り合いなのか？・・・」

夕「え？うん。ゆりとは小・中学校と同じクラスだったから」

傑「へえ〜・・・こんな美人と知り合いとは」

琢磨「羨ましい」

大人「お前ら・・・それ以外言う事ないのか？」

大人のその言葉に夕やつぼみ達は笑う・・・そんな中植物園で談話しながら大人たちとつぼみ達は親交をふかめていくのだったが・・・そして時間が過ぎていき火が沈んでいくのだった・・・。

薫子「じゃあ〜そろそろ遅い時間だし今日はこの辺でお開きにしましょう」

大人「ホントだ・・・じゃあ〜そろそろ帰るか皆？」

夕「そうだね〜じゃあつぼみちゃんまたね」

琢磨「今日は楽しかったよ」

傑「また来ますね薫子さんじゃあ〜また」

つぼみ「皆さん・・・また会いましょうね」

えりか「今日は楽しかった〜また来てくださいね」

いつき「えりかが言っただうするの？」

ゆり「夕、またね」

お互いに挨拶を済ませると植物園を後にする大人たちは雑談をしながら河原を通って行く・・・。

大人「つぼみも成長したのかなあ〜・・・雰囲気変わったちゃって」  
タ「あ、大人お〜寂しいの？つぼみちゃんが離れていくのが」

大人「なっ!?!?・・・違うって・・・そう言うわけじゃ・・・」

傑「つぼみちゃん・・・小さい頃は大人にべったりだったからなあ」

琢磨「大人お兄様は少し寂しいのかなあ？」

大人「ば!?!?・・・だからそんなんじゃないっての!?!?!」

4人はそんな風にふざけ合いながら河原を歩いていく・・・すると大人は川の中で何かが沈んでいるのを発見する・・・。

大人「何だアレは」

タ「どうしたの？」

傑「何だ？」どうなんだ？」

大人「落し物みたいだ・・・ちょっと見てくるよ」

琢磨「気をつけるよ〜大人」

大人は河原から降りていくと川の中に沈んでいるケースの様なものを拾うのだった・・・かなりの重量で持ち運ぶのはかなり重労働だった・・・。

大人「なんだあ〜コレ？」

タ「さあ〜?・・・でもなんだろ？」

傑「開けてみない？」

琢磨「そうだな・・・なんか面白いものかも」

大人「おいおい・・・ちよ、」

大人の静止も気に止めずに傑と琢磨はそのケースを開けてしまうのだった・・・すると中には何やらベルトの様なものが3本入っていた・・・。

大人「何だろ?これ・・・」

夕「うゝん・・・番組の小道具かな？」

傑「かつこいいな・・・貰っちゃうか？」

琢磨「いいねえ〜・・・拾ったもん勝ちってやつかな？」

大人「そんなわけにいくかよ・・・明日交番に届けるぞ？」

傑&琢磨「ちえ〜・・・」

がっかりした二人をしり目に4人は帰宅の帰路につくのだった・・・

・・・しかし4人はまだ気がつかなかったのだった・・・このべ  
ルトが4人の運命を変える事になるとは・・・

**第1話「発見と再会」(後書き)**

先ずはほのぼの日常編。

次回はベルトの真相が・・・



**第2話「プリキュアの正体と太陽の神仮面ライダーカブト覚醒」(前書き)**

今回はちよいと急展開ですが・・・ハートキャッチのメンバーの正体とベルトの真相を描写いたします。

第一号は勿論・・・。

## 第2話「プリキュアの正体と太陽の神仮面ライダーカブト覚醒」

次の日に大人はまたいつも通り学校へと向かう・・・昨日拾ったあのベルトはなんだろうと考えながらもいつも通り授業を受けていきあつという間に放課後になっていく・・・取り合えず今日は一度家に戻ってあのベルトを警察に届けようと教室を出ていく。

校門の所まで歩いていくとまた後ろから衝撃が走る

夕「大人おゝ今日も植物園行かない？」

後ろを向くとまたもやあどけない顔をした夕が後ろから大人に抱きついている。しかし今日はなにやら夕の様子が違うのだった・・・何かそわそわしていると何か大人に言いたげな表情だ・・・

大人「なんだよ？今日俺ちょっと用事あるんだけど・・・」

夕「お願い・・・大人に今日伝えなきゃならない事が有るの・・・」

大人はそんな夕の態度には気がつかずにいつもよりも冷たい口調でそう言つて夕を突き離すようにそう言うのだが夕はそれでも強引に大人の腕を引つ張つていき嫌がる大人を無理やり連れて行く・・・

そして大人は植物園の行く途中で夕の腕を離していくと夕に問い詰めていく・・・

大人「何なんだよ？・・・夕・・・話つて？」

夕「大人・・・ホントに私じゃ駄目なの？・・・私大人の事がずつと・・・」

大人「夕・・・ごめん・・・その話ならまた改めて・・・」

大人は夕の言葉を聞いて戸惑つて思わずそう言ってしまった・・・いつもの冗談交じりの態度とは違い今の夕は真剣な目だった・・・こんな事は今まで夕と一緒にいてなかった・・・それだけ真剣なの

だと分かったのだがどう答えて良いのか分からなかった……。大人はソレだけ言うと大人はその場を後にして自宅へと帰ろうとその場から後にしていく……。

残された夕はというと……。

夕「大人の馬鹿あ！！……何よ……私はあの時からずっと大人の事が！！……」

泣きながらひたすら走る夕……。そして夕は植物園の近くの河川敷へたどり着くと……。河原の近くで腰を下ろしてしよぼくれているところに何やら怪しい影が……

？「あらあゝ貴女心の花がいい具合に萎れちゃってるじゃない

」

夕「！？……誰？」

？「サソリーナ……砂漠の使徒よあゝ……心の花よ出てきてえ

」

夕「えっ！？……きゃあああああゝゝゝ！！！！！」

突然金色の衣装を纏った謎の女性が夕に近づいてきたかと思うと突然夕の身体から光が発生していく……。そして夕の姿は消えてしまいい水晶玉の様な物とクリスタルの様なものがつながつた物体が出現する……。そして女は下の円い水晶型のモノを外す。そしてクリスタルの部分と夕のカバンの中から散乱している物の中でペンダントを目に付けてると……。

サソリーナ「デザトリアンのお出ましょおっ！！！！！」

するとペンダントの形の身体に手足が生えた怪物が出現する……。

デザトリアン（夕）「うああああ！！！！！」

そのころ大人は家に置いてあったケースを警察に届けるために私服に着替えてケースを持って出かけたのだったが……。なにやら植物園の近くで怪物が暴れているという話を聞いて警察に行くのを後回しにしてそっちに行くのだった……。そして同じころデザトリ

アンが暴れているとシプレたちから来たつぼみ達も現場に向かうのだった。

デザトリアン(タ)「大人の・・・バカアアア!!!私はその時から大人の事がずつとおおお」

つぼみ「あれはもしかして・・・」

シプレ「心の種を奪われたのはタさんですう」

コフレ「早くタさんをたすけるです!!!」

ポプリ「プリキュアに変身でしゅ」

シプレは女が放り投げた水晶玉をつぼみにみせていくとそこには中心でタが蹲っている姿が確認できた・・・

つぼみ「みんな!!!」

えりか&いつき&ゆり「うん!!!」

4人はデザトリアンにされたタを助けるべくプリキュアへと変身するシプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう(ですつ&でしゅ)」

つぼみ&えりか&いつき&ゆり「プリキュア!!!オーブンマイハート!!!」

四人はそれぞれのプリキュアに変身するべくつぼみ、えりか、いつきはココロパフォームとシャイニーパフォームをゆりはココロポットを取りだしていく・・・そしてそれぞれのプリキュアの種を使い変身する。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花!!!キュアブロッサム!!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花!!!キュアマリン!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花!!!キュアサンシャイン!!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花!!!キュアムーンライト!!!」

4人「ハートキャッチプリキュア!!!!!!!」

全員変身終わるとデザトリアン(タ)を助けるべく4人は向っていき・・・

大人「っ、つぼみ達がプリキュアだったのか・・・あの怪物は夕？」  
その後ろで大人はつぼみ達がプリキュアに変身した事になり動揺  
していた・・・まさかあのつぼみがうわさになっていたプリキュア  
・・・そして夕がああな化け物に・・・」

ブロッサム&マリナ「はあああっ!!!」  
ブロッサムとマリナはデザトリアン(夕)にむかって飛び蹴りを放  
つていく・・・

デザトリアン(夕)「ああああああ!!!・・・わ、私はずつ  
と大人だけを・・・想っていたのにいい!!!それなのに!!!  
大人はああああ!!!」

しかしその程度では怯まないのかデザトリアン(夕)はつぼみ達を  
跳ね飛ばしていきそのまま追撃のパンチを繰り出そうとしていくが  
・・・。

サンシャイン「サンフラワーイージス!!!」

ムーンライト「夕・・・」

デザトリアン(夕)「大人お!!!私の何処がダメなのよお!!!  
??？」

サンシャインがブロッサム達の前に立つとヒマワリの形をしたバリ  
アを発生させてその場は逃れる・・・4人は一度体勢を立て直すた  
めに距離いを置いていく・・・すると暴れ回る夕の本音をまき散ら  
していく・・・その本音を聞くと4人は攻撃の手が止まる・・・  
そんな夕の気持ちを聞いたサソリーナは・・・。

サソリーナ「ふん・・・くだらないわねえ〜そんな事で悩むなんて  
・・・」

その言葉につぼみは怒りを隠せず叫ぼうとしたのだが・・・その  
言葉を聞いた大人は怒りが抑えきれずサソリーナに対して凄まじい  
怒りを抱く・・・

大人「ふざけるなあ!!!お前に夕の何が分かるんだ!!!」

ケースを持った手の拳は凄まじいほどの力が感じられており大人が

本気で怒っているのが伺われる・・・。

サソリーナ「？・・・何よ？アンタ・・・目障りねえ？・・・デザトリアンやつちゃって！！」

大人「！！！？・・・うわあああつ！！！？」

大人の前にデザトリアン（夕）の拳が目の前に・・・しかし間一髪でブロッサムが大人をかかえて安全な場所へ移す・・・。

大人「つぼみ・・・すまないな。」

ブロッサム「え？大人さん！？・・・まさか見てたんですか？」

大人「ん？・・・ああ～全部最初からな」

その言葉を聞くとブロッサムはやってしまったという顔をする・・・

ムーンライト「大人君・・・夕の言ってる言葉・・・もしかして」

大人「・・・ああ・・・俺が原因だ・・・俺があの時曖昧な態度を取らなければ！！！」

大人は後悔していた。動揺していたとはいえ何で夕を傷つけるようなことをしてしまったんだと・・・自分を心の中で責め続けていた・・・。

デザトリアン（夕）「ああああああ・・・大人お～」

ブロッサム「大人さんは此処にいてください・・・私たちが必ず夕さんを助けます！！！」

そう言うブロッサム達は夕に向かっていく・・・残されや大人は・・・

大人「夕・・・俺には・・・何も出来ないのか・・・夕をあんな姿にしたのは俺のせいなのに！！！」

大人は悔しかった・・・年下であるつぼみ達がそして同い年であるゆりも必死になって夕を助けるべく闘っているのに・・・自分には何もできない・・・夕をあんな姿にした間接的な原因であるこの俺は・・・何も出来ないのかと！！！！無力な思いで自分を責め

続けていた……。

するとその思いにこたえるかのように時突然ケースが光りだした・  
・大人はケースをおもむろにケースを開けていく・・するとベルトの一本が光り輝いている・・そして次の瞬間大人の腰に巻かれていった・・。

何処からともなく赤いカブトムシのようなメカが大人の手に止まる・  
・

大人「これは……一体？」

腰に巻かれたベルト・・そして手に止まったカブトムシのようなメカ「カブトゼクター」が何やら大人にむかってしゃべりかけるように大人の顔の周りを飛んでいく・・その時大人は確信した・・  
これの力で夕を助けられると!!!

大人「な、なんだかよく分からないけど・・・待ってる・・・夕!!!」

電子音；「HENSIN!!!」

大人は直感で感じたままに行動する。再度手に止まったカブトムシ型のメカのカブトゼクターを手に取るとそのままライダーベルトにセットしていく・・すると大人の身体は見る見るうちにベルトから発生していく鎧の様なモノに包まれていく。そして彼はライダーシステムの一号機である仮面ライダーカブト（マスクドフォーム）に変身する……。

大人「これは？……あのベルトの力なのか？……何だから分からないが……夕!!!!待ってるよ今必ず助けるからな!!!」

まるで漫画の様な展開に驚いてばかりだが今はそんな場合ではない  
と大人は仮面ライダーカブトの力で夕を助けるべくプリキュア達と  
共に向っていくのだった!!!。



第2話「プリキュアの正体と太陽の神仮面ライダーカブト覚醒」(後書き)

やってしまった・・・しかし遅かれ早かれ夕と大人の関係は暴露しようと思ってたので今回は夕さんにデザトリアンになってもらいました。

次回はプリキュアとカブトの初共演バトルです。

### 第3話「共闘！プリキュアとカブト」（前書き）

前回までのあらすじ

大人は夕の告白を曖昧な返事で受け流してしまう・・・そこにサソリーナが漬け込み夕をデザトリアンとしてしまう・・・つばみ達はプリキュアになって夕を助けようとするのだが手こずってしまう・・・

大人はプリキュアの正体を知り自身も戦えればと思ったい時にトランクの中のベルトの正体を知ることとなった・・・

### 第3話「共闘！！プリキュアとカブト」

ブロッサム「あれは・・・プリキュア？」

マリ「でもプリキュアなら妖精がいる筈じゃ？」

サンシャイン「じゃあアレは・・・一体」

ムーンライト「多分プリキュア以外の力でしようね・・・でも感じられるあのパワーはもしかしたらプリキュア以上かもね」

突然変身した大人の姿に動揺する3人にそう言うムーンライト・・・少なくともプリキュアはあんな鎧を纏う事はないと分析してで結論だ。だがそれ以外にプリキュアにはない何かの力が感じられる・・・

・今は断定できないが相当強い力であると・・・。

大人「いくぞ・・・タ！！今俺がお前を助けてやる！！！」

変身したカブトはぎこちない動きで夕に向かっていく！！勿論闘いには慣れていない大人にとっては当然である。

デザトリアンと化した夕の同体に向ってパンチを放っていく・・・するとデザトリアン(夕)は勢いよくふっ飛ばされてしまう・・・パンチ一発で此処までの強さとはと大人は信じられないと言う様な態度を見せてしまう・・・

大人「嘘？・・・ば、パンチ一発でこんなパワーを秘めてるなんて・・・だけど攻撃だけじゃ夕を傷つけるだけだ・・・どうすれば・・・」

大人は分かっていた・・・このままデザトリアンを傷つけても解決にはならない・・・何とかしなければと想ったがその後夕の反撃のごとく大人にパンチとケリを放っていく・・・大人はそれを避けつつも夕を傷つけないで元にも戻す術を考える・・・そこにブロッサムが入り大人を援護するべく夕の攻撃を防ぐ。

ブロッサム「大人さん！デザトリアンを傷つけても夕さんは元には

戻りません。ですから！私たちが夕さんを浄化をします・・・大人さんは夕さんの注意を惹きつけていてください！！」

大人「分かった！！・・・夕こつちだあ！！」

ブロッサムに言われるがままに大人は夕の注意を引きつけるため腰の装着されているカブトの武器・・・「カブトクナイガン」を取りだし直感的に判断してソレを拳銃の様に構えていくと銃弾を夕にぶつけていく・・・夕を傷つけたくはないが今はこうする以外手段がない・・・夕にクナイガンを連射しながら注意を自分に引き付けていく・・・。

この状況に形勢が不利だと判断したサソリーナは腕に付いている黒光りする宝石がついたブレスレットをかざしていく・・・するとそれは光出す。

サソリーナ「ふっ・・・そろそろコレの出番ね？・・・闇に沈みダークな心に支配されるのよぉ・・・ダークブレスレット！！」  
サソリーナがそう言った次の瞬間サソリーナはデザトリアンの中に入っていく・・・そしてデザトリアンと化した夕の形相は凶悪なモノへと変化していくのだった・・・。

そして大人たちに向かって走ってくる・・・。

大人は動揺しながらも夕を止めていこうと夕に向かっていくが力負けして飛ばされてしまう・・・

ブロッサム「大人さん！！」

ブロッサムはふき飛んだ大人を受け止める・・・。

大人「夕！？・・・どうしたんだ！？・・・」

ブロッサム「アレはサソリーナが入り込んで支配してるんです・・・

・サソリーナ絶対に許しません！！」

マリン「早くしないと心の花が枯れちゃうよ！！」

サンシャイン「そんな事させない！！」

ムーンライト「当然よ」

大人「アイツ・・・そんなことまでして・・・どうして・・・」

大人には分からなかった・・・何でどうしてそこまでして人を傷つけるのが・・・そこまでする動機は一体何のだと・・・そんな大人に応えを教えるようにサソリーナが口を開いていく・・・

サソリーナ「はあ？・・・そこまでするも何も私たちの目的・・・地球を砂漠に変えると言う目的のためよ？・・・そのためにプリキュアを倒して心の大樹もからしてしまえばこの世界は我ら砂漠の使徒の物になるのよお」

世界を支配する！？・・・そんなくだらないことの為に夕を利用したのか？・・・大人はサソリーナの言葉に怒りは臨界点を超えた・・・こんな事の為に夕は巻き込まれたのかと思うと怒れずにはいられない

デザトリアン「ああああああつ！！！」

しかし凶暴化した夕は簡単には隙を見せず腕を更に何本も増殖させるとそのまま大人、ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトを捕えるとそのまま締め上げていく・・・

大人「ぐうっ！！？」

ブロッサム「んっ！！！」

マリン「きゃっ！！？？」

サンシャイン「ああつ！！？」

ムーンライト「うううっ！！？」

サソリーナ「ふん今日は調子がいいわあ・・・それに新しく出てきた変な奴も大したことないわね・・・アンタ達は此処で終わるのよ・・・このくだらないことで悩んでいたこの娘と一緒にね・・・」

サソリーナはそう嘲笑う・・・だがその言葉にブロッサムはとうとう怒りが爆発したのか低い声で・・・

ブロッサム「下らなくなんかありません！！・・・好きな人に拒絶

される事はとても怖い事なんです．．．でもそれが人を好きになる  
って言う事なんです！！．．．夕さんのそんな純粋な乙女心を利用  
するなんて．．．私堪忍袋の緒がきれましたあ！！！！」  
ブロッサムという言葉に大人は思った．．．確かに夕はあの時は本気  
の目だった．．．それを俺は．．．

そんな中でもデザトリアンの締め付けは激しくなっていき大人達は  
身体をきつく締め上げられてしまいそ身体が悲鳴を上げていく．．  
．このままでは負ける．．そんな事は許されるものか．．大人は  
夕を救いたい．．その思いが心に強く想ったその時だったカブト  
ゼクターから何やら声が．．．

大人「！！．．．角を倒せ？．．．それで真の力が解放される  
？．．．．．やってみるしかないか！！」

カブトゼクターがそう大人に伝えたのかように大人の脳裏に突如何  
かアよぎった．．．大人は思うがままにベルトのカブトゼクターの  
角を軽く押していく．．．すると鎧がまるで意思をもったかのように  
に広がっていく．．．それは昆虫がサナギから成虫へと成長していく  
ようにも見えた．．．大人はそのままカブトゼクターの角を一気に  
倒していく．．．すると鎧が四方八方に弾け飛ぶ．．．

電子音：「CAST OFF！！ CHANGE BEETLE！  
」

はじけ飛んだ鎧からカブトの新しい姿が現れる．ゴツイ鎧が取れたそ  
の姿はシャープであり顔は綺麗な赤い色に真つ青な青い瞳．．．そ  
して電子音と共にカブトムシの角が上がり誰が見てもその仮面はカ  
ブトムシと分かる様な姿になった．．．そう仮面ライダーカブト  
ライダーフォームへと進化したのだ！！

そして大人はカブトクナイガンの鞘の部分を外すとカブトクナイガ  
ンクナイモードへと変化させて縛られた身体の腕を切り裂いていく．  
．．．。

大人「コレが真の力・・・よし!!!・・・はああああ!!!」  
クナイガンでの残りの腕も切り裂きブロッサム達も解放していく・・・  
・・・そして大人はサソリーナがとりついているデザトリアンの方  
をむくと・・・

大人「自分たちの私利私欲の為だけに人の思いを利用する砂漠の  
使徒よ・・・俺は絶対に許さない!!!お前たちのその野望この  
俺が打ち砕く!!!」

ブロッサム「大人さん・・・」

マリン「凄い・・・」

サンシャイン「アレがベルトの力・・・」

ムーンライト「想像以上ね」

解放されたブロッサム達は驚きでその場で立ちすくんでいた・・・  
自分たちと互角・・・いやそれ以上の力を持つ大人の強さに圧倒さ  
れたのだ・・・  
そんな彼女たちをしり目に大人は怒りに溢れるセリフを言うとベル  
トの横のボタンに手をかけていく・・・そして大人は直感でどんな  
力があるか理解したようにこう言う・・・。

大人「クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP!!!」

電子音が鳴るとともに大人の姿は無くなっていた・・・そして次の  
瞬間デザトリアンは何かの攻撃を受けているかのようにバランスを  
崩していき倒れてしまう・・・動揺したサソリーナはナインが起  
こったのか分からないのかただ戸惑っただけだった・・・まるで光  
速のごとくの攻撃にサソリーナは押されているのだった・・・

電子音「CLOCK OVER!!!」

大人「まだまだあ!!!おりゃあああ!!!」

電子音と主に再びカブトの姿が現れる・・・そして怯んだデザトリ  
アンにカブトクナイガンで追撃の切り上げを仕掛けて弱らせていく・

・・・そして戸惑っていサソリーナを大人しくするべく正面から素早い動きでケリを入れて押し倒す・・・これで十分な隙は出来た・・・あとはブロッサム達の出番だ・・・

大人「今だ！！！！」

ブロッサム「はい！！皆いきますよ！！」

マリン＆サンシャイン＆ムーンライト「うん！！」

4人「集まれ花のパワー！！」

ブロッサム「ブロッサムタクト！！」

マリン「マリンタクト！！」

ムーンライト「ムーンタクト！！」

サンシャイン「シャイニータンバリン！！」

4人「はああっ！！！！」

それぞれの武器を取りすと辺りが輝きだしていく・・・その姿は正に神々しい女神の一言で見ていた大人もその美しさに見とれてしまふのだった。

ブロッサム「花よ輝け！！プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！！」

マリン「花を煌け！！プリキュア・ブルーフォルテウェイブ！！！！」

ムーンライト「花よ輝け！！プリキュア・シルバーフォルテウェイブ！！！！」

サンシャイン「花よ舞い踊れ！！プリキュア・ゴールドフォルテウェイブ！！！！」

4人と浄化する為に必殺技を放っていく・・・4つの光が夕の身体を包むように直撃していく・・・その優しい光に夕のデザトリアンは戦意をなくしていく・・・

4人「はああああああああああ！！！！！！」

ブロッサム、マリンはフラワータクトの中心部分をまわしていきムーンライトとサンシャインはタクトとシャイニータンバリンそのものをまわしていく・・・そして夕のデザトリアンは癒されるか



のような優しい顔つきになっていくと……

デザトリアン(タ)「ぼわわわわ〜ん」

浄化が成功した……目の前のデザトリアンは消滅しそこには心  
の花が収められているクリスタルが現れたのだった……。

大人は変身を解くとそのクリスタルを掴み……タが閉じ込めら  
れている水晶玉を取りだす……

サソリーナ「きいいい!!!……プリキュアだけじゃなく新参者  
も出るなんて……博士に報告しなきゃ……」

大人「!!!……待て!!!……くつそお!!!」

黒幕であるサソリーナを逃がしてしまつと大人は悔しさに握りこぶ  
しを作りながら怒りを見せる……だが今はそれよりもやるべき事  
が有る……

つぼみ「大人さん今はタさんを元に戻すのが先ですよ!!!」

大人「ああ……そうだな……」

変身を解いたつぼみにそう宥められると大人は落ちつきを取り戻し  
水晶とクリスタルを合体させタを元に戻す……。

タ「……んっ……此処は……大人?……私どうして此処に」

大人「タ!!!……よかつた!!!ごめんな……タ……お前  
の気持ちに素直に答えられなくて……」

タが目が覚めると大人は相当心配していたのか思わずタを抱きしめ  
る……普段の大人ならこんな事は絶対にしないのだがそれだけ  
タにした事を後悔したいのだった……あの時ハッキリと応えて  
いればこんな事にはならなかつたと……

タ「ちょ……大人……は、恥ずかしいよ……」

大人「あ、ああ……すまない」

タにそう言われると大人も状況が把握できたのかタを立てせる……  
・ど近くでその様子を見ていたつぼみ達はニヤニヤしながらも何  
も言わずに見つめていくのだった……。

大人「ちょ、ジロジロ見るなよ……別にそう言うわけじゃない  
んだからなあ!!!」

えりか「そうかなあ〜？大人さん顔が真っ赤だよ？」

大人「な、何言ってるのかな？えりかさん？……俺はそんなじゃ……」

つぼみ「でも顔が真っ赤ですよお〜？」

いつき「ホントだ……」

ゆり「ふふっ」

大人は顔を真っ赤にしながらそう言っただが夕やつぼみ達には大人の心中は完全にバレバレであり女子5人は笑って大人をからかうのであった……。

そして大人はこの日から決意した……もう二度と夕を悲しませないと……そして夕を命に代えて守り抜くと……

### 第3話「共闘！！プリキュアとカブト」（後書き）

はあ〜い第3話でした。

いやあ〜意外とカブトの力を発揮するのは難しいですね〜。

次回は・・・つぼみ達と大人が結束する場面が主体となります〜

#### 第4話「新しい仲間と仮面ライダー」

次の日に大人はつぼみ達から全てを聞き出すために植物編へと足を運んでいた……。もちろん昨日自分が解放した力の源であるベルトの入ったトランクを持ってきている……。コレがなんなのかつぼみ達なら分かるもしれないと思っただけの事である。

大人はトランクを担ぎながら植物編へと向かった……。そこには案の定つぼみが……。いやつぼみ以外にえりかやいつきゆりそして薫子もいた……。つぼみ達は大人が来たのが分かると真剣な顔になっただ大人に向う……。

つぼみ「大人さん……。お待ちしてました」

大人「つぼみ……。話してもらおうよ。君がいや……。君たちがプリキユアである事を何で隠していたのか……。そしてあのサソリーナという奴の事も」

えりか「はい。私たちも大人さんに聞きたい事がありますからそれには答えてもらいますよ?」

大人「ああ……。勿論だよ……。じゃ早速本題といこうか……。お茶で飲みながらね?」

午後のティータイムを楽しみながら大人は全てをつぼみ達から聞いた……。心の大樹の存在、自分たちが今までプリキユアとして闘ってきた経緯、そして敵の砂漠の使徒について……。大人はその話を聞きながらもつぼみが……。いやつぼみ達が抱えている問題がどれほどのものであるかを思い知らされた……。あの小さくて自分にべつたりだったつぼみが世界の為に闘っている……。自分が今までの日常を送っていられたのもつぼみ達が陰で砂漠の使徒たちと闘っていたからこそその平和だったのだと……。大人は思った……。俺にも何か出来れば……。このベルトの力でつぼみ達と共に戦

えれば……。

つぼみ「では今度は私たちの番ですね……大人さんはそのトランクは一体どこで拾ったんですか？そのトランクの中のベルトは一体……」

えりか「そうそう！私も気になってたんだよね！プリキュアとは違う力だったよねあのベルトの力凄く強かつよね！！なんていうかスツゴイパワーで」

いつき「それに凄くかつこよかった！！大人さんアレは貴方が？」  
ゆり「只ならぬ力を感じたわ……」

4人はあのベルトの力がそうよう印象に残っているのか大人を質問攻めにしていく……大人はつぼみ達の勢いに押されそうになるがすぐにこう答える。

大人「コイツは拾ったんだよ。一昨日の植物園の帰りにね……だからこのベルトは俺が作ったもんじゃないし最初は特撮番組か何かの小道具かなと思ったわけ。で昨日警察に届けようとアレを持って出かけたら……君たちと遭遇して。あとはあの通りさ……」

そう答えると4人は納得したのか一度静かになる……しかしここでまたえりかが口を開く……  
えりか「でもこんな力が有るベルトがどうして捨ててあったんだろっ？」

ゆり「たしかにそうね……それだけの力が有るのなら普通は厳重に保管されているものよね？」

いつき「わけありなのかな？凄い力だったしね……もしかしたら僕達より上かも……」

つぼみ「いつき……何言ってるんですかぁ！！そんな事言われたら私たちの苦勞は……」

いつきの言った言葉につぼみは力ない声でそう反論する……もしもこれからは大人のような力をもった者が現れれば自分達の存在意義は無くなってしまうかもしれないという不安から出た発言であった

のだ……それを察したのか大人も更にいつきを諭すように口を開く

大人「確かにこのベルトの力では君たち以上かも知れない……でもこのベルトの力ではデザトリアンを浄化できないから君たちの力は絶対に必要だよ……それに今まで君たちがいたからこそ待ちの平和は保たれてきたんだ……君たちの努力は人には真似できないよ……俺なら逃げ出してしまうかもしれない……」

大人の言葉に4人は感動したのか目を輝かせていた……ゆりも自分とはまた違う先輩としての魅力が彼からは感じられた……今後自分たちが絶体絶命になった時に大人のような人がいれば心強いと……中でも一番感動していたのはつぼみは興奮した様子で大人の腕を握ると

つぼみ「あ、あの大人さん!! 私達とこれからも闘ってくださいませんか!!?……大人さんがいればとつても心強いです!!」

大人「つぼみ……ああ!! 勿論だ!! もう君たちだけど苦しめたりたしない……俺でよければ力になるよ……」

大人は握られた腕を優しく握り返してそう言う……つぼみ達だけにこれ以上辛い思いをさせないという決意の目でえりか達も見る・

大人は4人に腕を出す……するとつぼみ、えりか、いつき、ゆりも腕を重ねていく……新しい同士を迎え入れプリキュアに上原大人……仮面ライダーカブトという最強の仲間が加わったのだ。もう砂漠の使徒など怖くないと……。

するとそこにシプレ、コフレ、ポプリの妖精たちが大人の前に富んできた……大人はつぼみのぬいぐるみが動いたと思い一瞬固まってしまうと……

大人「ぬいぐるみが動いた!?・・・へえ〜最近のぬいぐるみは凄いいよな・・・って!!!表情も変わつとる!!!!・・・ていうか飛んでる!!!!・・・な、なんだ君たちは!?!」

つぼみ「お、落ちついてください大人さん・・・彼女たちはプリキユアの妖精です」

大人「よ、妖精?・・・へえ〜・・・コレが妖精・・・カワイイね?」

可愛いと言いながらも大人は引き攣っていた・・・突然ぬいぐるみが動きだせば当然の反応だ。

シプレ「シプレですう!!!よろしくですう」

コフレ「コフレです!!!よろしくです大人さん」

ポプリ「ポプリでしゅ!!!これからは仲間でしゅ!!!」

大人「あ、ああ・・・改めまして宜しく。上原大人です!!!これからは俺達は仲間だ!!!」

妖精たちにも挨拶を済ませると大人は改めてベルトが入ったトランクを開ける・・・その中には自分がしたベルトと同型のベルトが後2本入っていた・・・そしてよく見ると・・・ベルトの下に分厚い書類の様なものが入っておりソレを取りだすと・・・拍子にこう書かれていた。

大人「マスクド・ライダーシステム?・・・これ・・・ベルトの説明書か?」

つぼみ「マスクド・ライダーシステム?」

えりか「どういう意味だろ?」

いつき「マスクは日本語で『仮面』だよな?・・・」

ゆり「ライダーは日本語で『乗るもの』・・・でも自然に訳す仮面とライダー?・・・」

ゆりの言葉につぼみ達はほお〜と言うような顔をしていく・・・すると大人がまたこう言う・・・

大人「仮面ライダーであつてゐるみたいだ・・・目次にも書いてある

よ・・・光を支配せし太陽の神仮面ライダーカブト、戦いを支配せし戦いの神仮面ライダーガタック・・・闇を司る黒点の神、仮面ライダーダークカブト・・・なんかすげえ名前

つぼみ「確かに凄い名前ですね〜でも太陽ってサンシャインと被ってますね〜」

えりか「いえてる〜!!・・・名前付けた人もセンスないね〜」

えりかが笑う様にそう言う・・・すると他の4人も笑うのだった・・・そんな中ゆりは突然とんでもないことを口を開くのだった・・・ゆり「でも後2つも大人君が変身した兄弟力が有る・・・もしもコレが砂漠の使徒にでもわたったら・・・考えただけでも怖いわね」

たしかに大人が味方になってくれたら良いがもしもコレが敵に渡れば・・・考えただけでも恐ろしかった・・・だがそんな空気を壊すように大人は言った・・・

大人「そんな事考えるだけ無駄だよ。それに奪われないようにすればいいだけ・・・違う?」

笑顔を見せながら大人はそう言う・・・確かにその通りだ・・・敵はまだ自分たちに力がある事は知らない。それに奪われないように守れば良い・・・大人は余裕を見せるようにそう良いつぼみ達を剥げます・・・

そんな大人につぼみ達はまたも感動をするのだった・・・大人という強力な仲間が出来たつぼみ達は砂漠の使途を迎え撃つ決意を固めていくのだった・・・



## 第5話「ライダーを追う者と砂漠の使徒」

薄暗い部屋で一人の男がいた・・・そう仮面ライダーケタロスの大和だ。彼は焦っていた・・・安西が投げ捨てたマスクド・ライダーシステムがまだ発見されないのだ・・・その事で上司から大目玉を食らい無能という烙印を押されると事になったのだ・・・なんとしても汚名を返上しなければと部下である須藤を使って血眼になって探している・・・早く見つけなければと思った矢先に須藤から通信が入りモニターを起動すると須藤の顔が移される・・・どうやら良くも悪くも知らせが有るようだ・・・

須藤「大和さん・・・やつと安西さんが投げ捨てたマスクド・ライダーシステムが見つかりました・・・どうやら希望ヶ花市の川に流れ着いたようです」

大和「希望ヶ花市にだと？・・・まあいい！！それでベルトは回収できたのか？」

須藤「いえ・・・どうやら我々の追手が来る前に何者かが見つけてしまったようです回収はできませんでした・・・更にもう一つ悪い知らせが・・・」

大和「何だ？・・・勿体ぶらずに言え！！」

大和は凄いい剣幕で須藤に問いたのだ・・・これ以上の悪いに二ユースが上に知れば自分が孤立するのも時間の問題だと不安が隠せなかった・・・須藤はそんな大和の様子を察しながらも重たい口を開く・・・

須藤「どうやらカブトの資格者が決定されたようです・・・しかもその資格者はその地元の高校生のようで・・・」

大和「高校生だと？・・・ふん・・・なら逆に都合がいい。」

須藤「は？・・・しかし・・・」

大和「高校生ならば上手くすれば俺達の為に働いてもらえるだろう

よ・・・邪魔になれば消せばいいだけの事だしな」

大和は安心したのかそう言うのだった・・・もしもコレが警察とかならば厄介だが高校生ならばいざとなれば力づくで擦じ伏せられるし高校生程度ならばどうにでもなると考えたのだ・・・それに希望ヶ花市と言えば・・・最近噂になってきているプリキュアと砂漠の使徒と呼ばれる連中が交戦していると言われている場所だ・・・上手くいけばマスクド・ライダーシステムと手土産としてプリキュアが砂漠の使徒の力も上層部にささげる事も出来る・・・そうならば自分の汚名は完全に返上され無能と言う烙印も消える・・・いやそれよりももっとと良いように利用できるかもしれない・・・

大和はモニター越しに須藤の顔を見るとにやりと笑みを見せていき・・・

大和「須藤・・・希望ヶ花市と言えば最近プリキュアと砂漠の使徒と呼ばれる連中が交戦している言われている地域だ・・・後で俺も合流するが先に貴様がつくだろう・・・俺がつく前にある程度力ブトの資格者とプリキュアについて探っておけ・・・では行け！！須藤！！仮面ライダーザビー！！任務を果たし我々の糧となれ！！」

須藤「はっ！！！！拝命たまわります」

大和「ふふふつ・・・プリキュアの力も上手くすれば利用できるかもしれない・・・そうなればZECTの野望も」

織田「大和・・・お前何を考えているんだ？」

通信が終わると大和は薄暗い部屋で笑みを浮かべながら高笑いしていく・・・そんな大和の様子を部屋の外から見ていた織田は何かあると思いつつもその場を後にするのだった・・・

場所は変わってまるで太陽が昇る事を忘れてしまったかのような漆黒の闇の世界・・・あたりは生き物の気配すら感じられないほどに

広がっている砂漠・・・その場所の中心部分で禍々しい気配を漂わせる城の様な建物が存在する・・・これこそが砂漠の使徒のアジトだ・・・

アジトの一室玉座の間でサソリーナは前回の作戦の失敗を報告していた・・・勿論あの新しい敵についても・・・

？「何？・・・仮面と鎧の新しい戦士が現れただと？」

サソリーナ「はい。前はプリキュアは後一步まで追いつめたのですがその仮面鎧の戦士の手にかかり作戦は失敗してしまいました。・・・」

上から響く声に耳を傾けながらもサソリーナは報告を続ける・・・玉座に腰かけている仮面の男に・・・そう彼こそが砂漠の使徒の地球侵略の総司令官のサバーク博士だ・・・

サバークは玉座に座りながらもその戦士の打倒を考えていた・・・報告を聞いた限りではプリキュアとは違う力でありその戦士だけではデザトリアンを浄化できない・・・ならばプリキュアよりも倒すことは簡単だろう・・・次はその戦士を集中的に狙えば・・・そう考えている所にサソリーナが口を開く・・・

サソリーナ「現時点ではプリキュアと同じらい・・・いえパワーではもしかすればそれ以上の脅威になる可能性も否定できません。」  
サバーク「そうか・・・力ではプリキュア以上か」

サソリーナは奴の力を見ているため今後は更に慎重になるべきだと考えていた・・・この頃は未熟だったプリキュアも力を付け始めているし更には散々手を焼いていたキュアムーンライトも復活し更に手強くなっている・・・その状況で新しい敵が参上するなどまさにバッドタイミングとかしか言えない・・・とにかく今後は慎重になるべきだと発言しようとした所に話しの腰を折る発言が出るのだつた・・・

？「ふん・・・要するにそいつとプリキュアをまとめて潰せばいい事だぜよ・・・前は失敗したが今度はその戦士も潰して汚名を

返上させてもらうじゃきー!!」

サバーク「ではクモジャキーやってみろ」

突然後ろから勇ましい戦士の声が響き渡った・・・赤い髪の長髪の男はクモジャキーと呼ばれるサソリーナと同じ幹部の一人だ・・・彼は作戦を考えるよりも力で相手をねじ伏せることしか考えられない為作戦も力任せのモノばかりだ・・・だが一度言い出したら人の意見に耳を貸さないのがこの男だ・・・それに新戦士情報を集める意味でもクモジャキーの方が適確な情報が集められるかもしれないと此処は何も言わないサソリーナだった・・・しかし一応は忠告してやるかと出撃する前のクモジャキーに一言こう言うのだった。

サソリーナ「クモジャキー・・・相手はプリキュアなんて比じゃないわよ?・・・精々怪我しないように頑張んなさい・・・」

クモジャキー「ふん・・・お前が忠告とは珍しい・・・まあいいぜよ」

クモジャキーもサソリーナの珍しい行動に驚きながらも地球に向かう為レポートしてその場から姿を消すのだった・・・」

しかし此処でまたもや彼らに誤算が起きるのだった・・・カブト以外に新しいライダーが覚醒すると言う事そしてプリキュアとその戦士以外にも自分たちの作戦の障害になる者の存在についても・・・この時点ではまだ誰も気がつかなかったのだった・・・。

第5話「ライダーを追う者と砂漠の使徒」(後書き)

今回はそれぞれのダークサイドの思考を中心にしました  
次回は戦いの神が……

## 第6話「蒼い戦いの神仮面ライダーガタック覚醒」(前書き)

前回までのあらすじ

大和達は遂にマスクドライダーシステムを見つけたのだがそこはプリキュアと砂漠の使徒が交戦している地域であった・・・更にカブトの資格者は既に決定されたと言う事を須藤から聞いた大和はそれを利用しようと目論む。

一方砂漠の使徒もカブト打倒のためにクモジャキーが動きだすのだった。

## 第6話「蒼い戦いの神仮面ライダーガタツク覚醒」

大和達と砂漠の使徒が互いに自分をターゲットにしているなどは全く思っていないかった大人は先日見つけたマスクドライバーシステムの分厚い説明書を読んでいた・・・つぼみ達と共に戦うと決めた以上はつぼみ達の足手まといになるわけにはいかないと思って自分の力であるカブトの機能を理解しておく必要があると思ったからだ・・・

大人「ふう〜ん・・・あの鎧が飛ぶのはキャストオフというのか・・・あの武器はカブトクナイガン？光速移動のクロックアップ・・・これホントに人が造ったものなのか？」

説明書を見る限りでは到底信じられなかった。ヒロカネという聞いた事のない名称や凄まじい破壊力・・・今の科学でこの様な兵器が作れると言うのか？・・・少なくとも戦争を否定している日本ではありえないだろう・・・だったら何処でこれが？そもそもなぜこれほどまでの兵器が川なんかに落ちていたんだ？・・・謎が謎を生んでしまい謎は深まるばかりだが今は考えても仕方がないと思い取り合えず一読した説明書を机に置いてベットに倒れ込む・・・すると窓からカブトゼクターが飛んでくる。

カブトゼクター「!!!」

大人「ん！？・・・どした？」

ベットで横になっていた大人の顔の前にカブトゼクターが飛んできた・・・何か言いたげに角を動かしながら大人の顔の隣に止まる。

大人「お前つてメカなのか？・・・でも生き物みたいだよな？・・・

大人は感じていた・・・コイツはメカのようなだが心が有る様にも見える・・・しかしこれからは戦いの相棒となる奴だから仲良くいこ

うと隣にいるカプトゼクターを撫でてやる。するとカプトゼクターもそれが分かつているのか飛び立ちお互い頑張ろうと言うようなアピールをしていく。

そして翌日の日曜日大人は夕に会いに行くため出かける事にした。  
・ 勿論カバンには万が一の時に備えてカプトのベルトを入れてある。  
・ 今日夕に自分の気持ちを伝えなくてはと。。。

時を同じくして大人の友人である琢磨と傑は学校に来ていた。．．．  
と言うのも琢磨と傑はバスケット部所属であり今日は大会のレギュラーが発表される大事な日であった。．．．しかし二人ともかなり暗い顔をしていた。．．．屋上で物思いに噴けながら。．．

傑「はあゝ。．．．またレギュラーになれなかつた。．．俺バスケットに向いてないのかなあゝ」

琢磨「傑も？。．．俺も。．．また駄目だつたよ。．．．はあゝ」  
食らい顔をしながら二人はため息をついていく。．．そう二人とも今回のレギュラー選定会でまたレギュラー候補から落とされたのだ。．．．今回こそはと気合を入れていた二人だけに今回落とされた事は相当ショックだつたようだ。．．．。

傑「はあゝなんかやつてられないなあゝいくら練習してもレギュラーになれないんなら。．．．時間の無駄って感じで。．．．」

琢磨「そうだなあゝ。．．．今までの努力はなんだつたんだか。．．．」  
二人とも愚痴をこぼしながらも自分がしてきた今までの事を振り返っていた。．．．今の自分に足りないものは何か。．．それさえ見つかればレギュラーになれるものならば何でもすると言うのに。．．

傑「はあゝ俺先に家に帰るわ。．．．今日はちよつと頭を冷やした



い……」

琢磨「ああ……俺はしばらく此処にいるよ……」

傑がそう言い立ち上がると琢磨はソレだけ言いまた物思いにふけるのだった……」

傑「はあ……俺バスケット止めようかなあ……なんか自信なくしちゃったよ」

歩きながらそう呟いてしまふ傑……今回は琢磨と共にレギュラーになるために人一倍頑張ったのに……それを考えると虚しさや悔しさが混ざり合った複雑な気持ちが出来てくる……いつそバスケットを止めてしまえばどれほど楽になるかとも考えるようになってしまった……すると

クモジャキー「ほう？いい具合に心の花が萎れてるぜよ」

傑「？……な、何なんだアンタ？……」

クモジャキー「心の花よ出てくるぜよ！！」

傑「うわああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

突然出てきたクモジャキーは逃げ遅れた傑に引き抜いた剣を向けると赤い光線を発して傑を包んでいく……すると傑の姿はなく現れたのはこころの花を閉じ込めているクリスタルと傑の肉体を閉じ込めた水晶玉であった……クモジャキーは水晶玉を外すとそれを放り投げていく……

クモジャキー「さてと……よしアレにするぜよ」

次にクモジャキーはデザトリアンの素材となるものを探す……デザトリアンのポテンシャルは取りついたモノによって強弱が決まる……何か手頃なモノはないかと探す。すると傑の荷物の中にあつたバスケボールが目がつく……アレが良いと笑みをニヤリと笑みを浮かべていく。

クモジャキー「デザトリアンのお出ましですよ！！！！！！」

デザトリアン（傑）「うおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

そのころ近くの丘で大人は夕と会っていた……この前の話しの返事をしようとして夕を呼んだのだ……

大人「夕……この前はその……」

夕「分かってる」

大人「え？」

夕「驚いたんでしょ？突然私があんな事言つて……」

大人「あ、ああ……うん……正直驚いたよ」

夕「でももう気持ち整理できたんでしょ？だから私を此処に呼んだんだもんね……じゃあ聞かせて大人の返事を」

大人「ああ……夕！答えはYESだ……だからこれからも宜しくな？」

夕「……嬉しいよ大人」

大人「俺もだよ……」

顔を赤くしながらも二人は恥ずかしい様子を見せあいながら時間が過ぎていく……大人はあの時から決めた事だ。もう二度と夕を悲しませない……そして夕を守ると。カブトの力ももしかしたらそのために自分の元に来てくれたのかもしれない……大人はそう思いながら夕の顔を見て笑顔を見せる……。すると町から悲鳴と爆発音が聞こえてきた……。ソレを聞いた大人と夕は急いで町へと向かうのだった。

同じころつぼみとえりかといつきの3人は休みを満喫していた。と言つてもファッション部の部活動に必要な服の生地やリボン、ビーズなどの買いだしで集まつただけであった。

つぼみ「えりかあ、まだ買うんですかあ？」

えりか「もう、つぼみだらしないぞお？後はあの色のリボンと……」

ミシンの糸も買わないと・・・」

いつき「それにしても買い過ぎな気が・・・」

既に両手いっぱい紙袋を持った3人だったがえりかはどうやらまだ買いだしを続ける様だ・・・するとそこに無いやら大勢の人々が逃げるように走って来るのだった・・・。

男「か、怪物だあ！！！」

女「は、早く逃げないと！！！」

逃げていく人々がそう呟いている・・・怪物とするともしかしたら・

・つぼみ達は怪物が暴れていると言う場所へ急いで向うのだった  
！！！！

デザトリアン（傑）「うああああああ！！！！何で何でレギユラーになれないんだよおお！！！」

クモジャキー「いいぞ！！デザトリアン・・・もつと壊して壊して壊しまくるじゃきり！！！」

悲痛な叫びを上げながらデザトリアンと化した傑は無差別に町を破壊していく・・・ソレを離れた場所から傍観しているクモジャキーがそう言うのだった。するとそこにつぼみ達3人ゆり、更に大人と夕が到着するのだった。

つぼみ「あ、あれは誰が」

シプレ「つぼみいっ！！！」

そこにシプレたちが傑のカラダが閉じ込められた水晶玉を持って合流する。

コフレ「こころの花を取られたのは傑さんですっ！！！」

大人「傑だって！？・・・」

夕「こころの花？・・・ていうかぬいぐるみが飛んでる！！！！ど、ど、どという事！！！！？」

夕は突然飛んできたシプレたちはかなり動揺する・・・これは夢か？そう思い思わず顔を抓るが痛みを感じたため本物だと理解した・・・あのバスケットボールのような怪物が傑？・・・どという事な

んだと混乱しているがそこに大人が口を開く。

大人「夕お前は安全な場所に逃げる!!」

夕「な、何言つてんのよ?大人も逃げなきゃ!!」

大人「・・・俺は傑を助けなければならぬ」

夕「助けるって・・・それって・・・あのベルト?」

すると大人はカバンからベルトを取りだし腰に付ける・・・そこにカブトゼクターが飛んでくる。

大人「いくぞ!!!・・・変身!!!」

電子音;「HENSIN!!!」

大人はカブトゼクターをベルトをセットしていくとカブト(マスクドフォーム)に変身していく。夕は大人が変身したその姿に目がきよんとしていた・・・まさか大人がヒーローに?その思いで身体が固まる・・・。

つぼみ「夕さん・・・此処は大人さんに任せて早く逃げてください・・・」

夕「え?・・・う、うん。」

つぼみの言葉に混乱しながらも正気を取り戻すと夕は非難の為にそこから離れていく・・・

つぼみ「それじゃ私たちもいきますよ!!!」

えりか「やるつしゅ!!!」

いつき&ゆり「うん!!!」

四人はプリキュアに変身するべくつぼみとえりかはココロパヒュームをいつきはシャイニーパヒュームをそしてゆりはココロポットを取りだしていく。

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう(ですっ&でしゅ)!!!!!!」

4人「プリキュアオープンマイハート!!!」

4人はそれぞれ赤、青、金、銀の光に包まれていくと徐々にプリキュアの姿へと変わる・・・そして4色の光が消える頃にはつぼみ達はプリキュアの姿へと変身が完了した・・・。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花！！キュアブロッサム！！！」  
マリン「海風に揺れる一輪の花！！キュアマリン！！！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花！！キュアサンシャイン！！！」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花！！キュアムーンライト！！！」

4人「ハートキャッチプリキュア！！！」

変身した4人は大人に続きデザトリアンと化した傑へと向かっていく・・・まずはマリンとサンシャインが円い身体をした同体へと果敢にケリを入れていくがバスケットボールがベースなだけに簡単に跳ね飛ばされてしまった・・・

マリン&サンシャイン「きゃああっ！！！」

大人「マリン！！サンシャイン！！くっ・・・自分を取り戻せ傑！！！」

接近戦では不利だと思った大人はカプトクナイガンのガンモードの銃弾をデザトリアンにぶつけていく・・・衝撃で土煙が上がり視界が悪くなってしまふ・・・やったか？・・・大人がそう思った次の瞬間・・・

大人「ぐああああっ！！！」

突然正面から大型のバスケットボールが飛んできた・・・その衝撃に大人は飛ばされてしまいコンクリートの地面に叩きつけられてしまふ・・・

ブロッサム「大人さん！！！」

大人「来るなあ！！！」

近寄るブロッサムを静止する大人・・・するとすぐ上から巨大な巨大なバスケットボールの嵐が大人の上に・・・大人はその下敷きになってしまふが・・・すぐにその山を崩して飛びあがる。そしてカプトゼクターの角を倒して行くとキャストオフを開始する・・・  
大人「キャストオフ！！！」

電子音「CAST OFF!!! CHANGE BEETLE  
!!!」

機械音と共にカブトはライダーフォームへとキャストオフしていき大人はカブトクナイガンをクナイモードに変化させてデザトリアンへと向かう!!!。

その頃琢磨は何が有ったと騒ぎが有った所に向っていた・・・すると夕を見かけたので声をかける。

琢磨「夕！一体何が有ったんだ？」

夕「それがバスケットボールの形をした怪物が襲ってきたの・・・琢磨も早く逃げた方が・・・って！！琢磨！！??」

夕が話し終わる前に琢磨は走り出していた・・・バスケットボールの怪物？・・・そう言えば傑とはあの後から連絡がない・・・まさか？・・・そんな思いを抱きながらも琢磨は走るのだった！！！！。そして怪物が暴れている場所を発見した・・・するとそこにはプリキュア達ともう一人赤いカブトムシの仮面をした戦士が戦っていた・・・。

琢磨「アレがプリキュアか？・・・けどもう一人のあの鎧の戦士は・・・」

琢磨が後ろから見ている事には気がつかないまま大人とブロッサム達は奮闘していく・・・しかし相手はバスケットボールの弾力を利用しての防御力、近距離ではものすごい力を見せつけていき遠距離では巨大なバスケットボールの発射していき中々責められない・・・此処で大人は一気に決めようとクロックアップを発動する。

大人「クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP!!!」

光速移動でデザトリアンにパンチをケリのラッシュをしていき翻弄していく・・・だが・・・

電子音「CLOCK OVER!!!」

大人「しまった・・・うわああっ!!!」

クロックオーバーのタイミングで出来た隙を狙われてしまい大人は反撃のパンチを受けてしまい怯んだ所を・・・キャノン砲ではない方の手で身体を掴まれてしまうと凄まじい力で締め上げられてしまう・・・大人は何かクナイガンで反撃しようとするも腕の動きも封じられてしまいへ反撃が出来ずにいいように締め上げられてしまうのだった・・・。

ブロッサム「大人さん!!!・・・大人さんを離してください!!!  
!やああああっ!!!」

ブロッサムが大人を解放しようと飛び蹴りを放つがその前にキャノン砲のバスケツトボールがブロッサムに直撃していく・・・更に追撃がマリン、サンシャイン、ムーンライトにも直撃していく。

大人「皆あ!!!・・・があああああああっ!!!!!!傑・・・や、止めるお・・・目を覚ますんだあ・・・ぐうっ!!!」

4人に大ダメージを受けてその場に倒れ込んでしまう・・・大人も何とかしたいが頼みの綱のクロックアップも腕が封じられて使えない・・・どうすればいいんだ?・・・大人は徐々に体力を奪われていく・・・すると・・・傑の叫びがデザトリアンから発せられるのだった・・・

デザトリアン(傑)「なんで・・・何で俺は試合に出れないんだよ  
おお・・・俺だってレギュラーになるために沢山練習したのに  
!!!!!!!」

大人「傑・・・そうだったのか・・・お前人一倍努力してたもんな  
・・・」

傑の本心を聞いて大人は傑の努力が分かっていただけにその言葉の  
重みが思いが理解できた・・・

その光景を琢磨は後ろで見ていた琢磨はあの怪物が傑だと分かる  
我慢できずに飛び出してきた・・・もうこれ以上親友の大人を親友  
の傑が傷つけるなんて哀しい光景に耐えられないと・・・

琢磨「もう止めるお傑!!! やめてくれえ!!!」

大人「た、琢磨?・・・危ない早く逃げるんだ!!! 琢磨あ!!!」

琢磨「逃げない!!!・・・傑・・・確かに俺達はレギュラーになれ  
なかった・・・でもそれはそれじゃないか!!!・・・また頑張る  
う!!!・・・俺達二人でレギュラーになろう・・・だからこんな事  
もう止めてくれ!!!」

琢磨の言葉が届いたのかデザトリアンの腕に入った力が緩んで大人  
を解放していく・・・琢磨を見ながら顔から涙がこぼれていくのが  
分かる・・・するとそこに面白くないのかクモジャキーが口を開く  
・・・

クモジャキー「ふん・・・一緒に頑張る?・・・それは弱い者のす  
る事ぜよ!!!・・・男は一人でつよくなるものぜよ!!!」

琢磨「弱いものじゃない!!!・・・人は一人じゃ立ちすくんで悩  
む生き物なんだ・・・困難にぶつかりながらそれを乗り越える事  
で人は強くなれるんだ!!!」

大人「そうだ・・・人は弱い生き物なんだ・・・何でもかんで  
も一人では解決できない・・・でも友達と力を合わせて問題を解決す  
る事も出来る・・・そうやって人は成長していくんだあ!!!・・・  
傑の弱った心を利用する砂漠の使徒よ・・・その野望この俺が打ち  
砕く!!!」

大人と琢磨がそう言った瞬間に大人に部屋に有ったトランクから蒼  
い光が放たれて突如トランクが開いていくとベルトの一本が飛び立  
ち大人達の元に向かう・・・そして青い光は琢磨の元へ近づいてい  
き光が琢磨の身体を包み込んでいく・・・すると琢磨の腰にベルト  
が巻かれていたのだった。そして突如蒼いクワガタムシ型のメカガ  
タツクゼクターが琢磨のもとに向うのだった・・・。



琢磨「こ、これはあの時のベルト？……」

大人「アレは……2本目のベルトの……琢磨！！変身だ！！！」

琢磨「え？変身？」

大人「いいから早く！！！」

琢磨「な、なんだかよくわからないけど……変身！！！」

琢磨はイマイチ状況が読めていなかったが直感で動くままにガタツクゼクターをライダーベルトにセットしていく

電子音「H E N D I N ! ! !」

ガタツクゼクターがセットされた瞬間に琢磨の身体ヒロカネの鎧に包まれていき仮面ライダーガタツク（マスクドフォーム）へと変身した……

ブロッサム「あれは？」

マリン「蒼い仮面の戦士？」

サンシャイン「カブトと同じ仮面ライダー？」

ムーンライト「琢磨君が変身した……」

グッタリトした4人は立ち上がりながらも変身した琢磨に驚いたが4人は確信した……コレで勝てる。

琢磨「こ、これは……これがあのベルトの力……よし大人いくぞ！！！」

大人「おう！！傑を助けるぞ！！！」

新しい戦士仮面ライダーガタツクの力に覚醒した琢磨はカブトに変身した大人と共にデザトリアンへと向かっていく……必ず傑を助けるという思いのみで向って行くのだった！！！！。

**第6話「蒼い戦いの神仮面ライダーガタック覚醒」(後書き)**

ガタックの覚醒の回です。

最初は夕さんにでも考えたけどガタックに合わないと思い琢磨くんに変身してもらいました。  
次回ガタックが暴れます!!。

第7話「カブトとガタツクの力！」（前書き）

親友を助けたい・・・その思いがガタツクの力を覚醒させた。  
琢磨はガタツクの力を使い傑を助けだせるのか？

そしてその様子を影で監視する者がいるのだった。

## 第7話「カプトとガタツクの力!!」

琢磨が変身したガタツクはカプトと同じオーラを放っていた・・・あの説明書での二つ名は「戦いの神」そしてカプトは「太陽の神」今この時2つの神がそろった・・・その勇ましさはクモジャキーだけではなく4人のプリキュアも一歩引くほど凄まじいものであった。クモジャキー「新しい戦士じゃと!?!?・・・ふふふっ面白いぜよ・・・デザトリアンそいつも捻り潰してやるぜよ!!!」

琢磨の変身したガタツクにクモジャキーは驚くが何処か面白いとでも言う様な笑みを浮かべてデザトリアンにそう命じる。その命令どおりデザトリアンは動き出す・・・。それに応戦するべくカプトとガタツク(マスキドフォーム)もデザトリアンに向かう。

カプト「いくぞ!!!」

ガタツク「傑を返してもらおう!!」

同時に二人もデザトリアンへと向かっていくカプトはクナイガンでデザトリアンを切りつけて転ばすここにすかさずガタツクのパンチでデザトリアンを弱らせる・・・しかしデザトリアンもいつまでもやられっ放しではなく反撃のバスケットボールキャノンを二人に放つのだがそれをガタツクのガタツクバルカンの砲弾であるバスケットボールを全て相殺する。

ブロッサム「す、スゴイ!!」

マリ「あの攻撃もいとも簡単に」

サンシャイン「あの蒼い戦士は・・・説明書にあった戦いの神?」

ムーンライト「仮面ライダー・・・ガタツク」

ブロッサム達はガタツクの強さに目を輝かせていた・・・カプトも初めての時は凄く強かったけどあの蒼い戦士もカプトと同じぐらいの力を感じられた。そして徐々に戦いの流れを大人達が掴んでいくのだった・・・。

クモジャキー「ちっ!!!……そろそろ俺の出番じゃな……闇に沈みダークな心に支配されるぜよ!!!ダークブレスレット!!!」

クモジャキーも形勢を不利と悟ったのかダークブレスレットの力を発動させてデザトリアンと融合していきデザトリアンを凶暴な外見へと変化させていく。その外見は目は赤く光釣り上がるとキャノン砲が更に強化化していくのだった……しかし二人はそれにひるむことなく……ガタツクに変身している琢磨はその外見の変化に驚くが大人はその琢磨に説明する。

ガタツク「な、なんじゃあ!!!アレは……」

カブト「落ちつけ琢磨……アレはクモジャキーがデザトリアンの中に入って凶暴化させて操っているだけだ……手がなくなっただか？だが同じパターンは俺には通用しない!!!」

ガタツク「大人……俺も進化出来るのか？」

カブト「ああ……琢磨キャストオフだ!!!」

ガタツク「了解……キャストオフ!!!」

電子音「CAST OFF!!! CHANGE STAGE BE E T L E!!!」

琢磨は分かっていた……大人と同じ力ならば自分にも大人と同じ様な姿になれると。そして初めから分かっていたようにガタツクゼクターのクワガタの顎を倒す……するとカブトの時と同じくマスクドフォームの鎧が広がっていくと勢いよくその重工な鎧は拡散していきクワガタの象徴である大顎が顔の横からせり上がっていく。また拡散した一部の鎧はデザトリアンに直撃していく。

クモジャキー「ぐおおっ!!!?……よ、鎧の癖に何と言う破壊力じゃ？」

鎧が直撃するとバランスを崩してしまいその場に倒れこんでしまう……その隙を二人は逃がさず……。

カブト&ガタツク「クロックアップ!!!」

電子音「clock UP!!!」

二人は同時にクロックアップすると超光速のダブルラッシュ戦法でデザトリアンを翻弄しながらも確実に攻め上げていく。更に二人はキャノン砲を封じるべくカブトはカブトクナイガンクナイモード、ガタツクは肩の鎧に収められている専用武器ガタツクダブルカリバーでデザトリアンのキャノン砲を切り裂き粉々にして完全に破壊する。

電子音「CLOCK OVER!!!」

クモジャキー「己え!!!いい気になるのもそこまでぜよつ!!!」  
ガタツク「それは俺のセリフだ・・・俺の親友を利用した貴様は例え神や仏が許してもこの俺が許さない!!!」

ガタツクはそのセリフにクモジャキーは我を忘れ怒りに任せて残った腕でパンチのラッシュを放つが二人には二人は冷静にそれを回避していく・・・そう怒りに任せたその攻撃は通用しないのだ。そして素早く飛びあがり後ろを取ると・・・

カブト「コレで決める!!!」

ガタツク「終わりだあ!!!」

電子音「ONE、TWO、THREE!!!」

カブト&ガタツク「ライダーキック!!!」

電子音「RIDER KICK!!!」

カブト「はああつ!!!」

ガタツク「うおりやああああつ!!!」

二人は申し合わせたかのようにそれぞれのゼクターのスイッチのフルスロットルを押す。すると電子音が鳴り更にゼクターホーンをマスキドフォームの時の状態に一度戻してから再度ゼクターホーンを倒すとゼクターから電子音が鳴る。そしてゼクターが輝きゼクターからタキオン粒子のエネルギーが流動していきそのまま二人の昆虫の象徴であるツノからカブトは青色、そしてガタツクは黄色の稲妻のようなエネルギーが発生していき二人の右足に集まる・・・そし

て二人は飛びあがると必殺技の名前を叫びながらデザトリアンに近づくと大人は脚に琢磨は飛びあがって同体に回し蹴りを放つ。

クモジャキー「ぐおおおおおおおおおっ!!!!!?????」  
クモジャキーに直撃した二人のライダーキックの破壊力は凄まじく中に憑依していたクモジャキーが飛び出してしまふ。完全に弱ったデザトリアンは既に反撃の力を残してはいなかった。今なら浄化容易く行える。

カブト「今だブロッサム!!!!」

ガタツク「後は任せたぜ?プリキュア!!!」

ブロッサム「はい!!!行きますよ!!!マリン、サンシャイン!!!」

マリン「やるっしゅ!!!」

サンシャイン「久々にアレで決める!!!」

サンシャイン「集まれ花のパワー!!!シャイニータンバリン!!!

!はあっ!!!花よ舞い踊れ!!!プリキュア・ゴールドフォルテ

バースト!!!!」

サンシャインが先ずはシャイニータンバリンを取りだしていくと先ずはゴールドフォルテバーストを発動させると太陽の光のゲートを作り出す。

ブロッサム&マリン「はあっ!!!集まれ二つの花の力よ!!!プリキュア・フローラルパワー・フォルテツシモ!!!」

そこにブロッサムとマリンの合体技のフローラルパワー・フォルテツシモが発動してサンシャインが造った太陽のゲートに入り込むと二人の身体は黄金に輝く。

サンシャイン「プリキュア・シャイニング!!!」

ブロッサム&マリン「フォルテツシモ!!!」

ブロッサム&マリン「ハートキャッチ!!!」

3人「はあああああああああ!!!!!!!!!!!!」

!!!!!!!!!!!!!!

黄金色に輝いた二人はそのままデザトリアンに突っ込んでいくとハート型に貫通し二人の姿は後ろに現れる。その瞬間に周囲に大爆発が起こりデザトリアンは3色の光に包まれていき浄化されていく。

デザトリアン「ぼわわわあ~~~~ん」

光に包まれたデザトリアンは消滅するとそこにはこころの花を封じ込めたクリスタルが現れる。

クモジャキー「ぐううっ……己え!!!!……プリキュアあそして仮面の戦士い次こそは必ずっ……」

カプトとガタツクのライダーキックで深手を負ったクモジャキーはその捨て台詞だけ吐くとそのまま姿を消すのだった。

大人「ふう……今回は手ごわかった。ありがとう琢磨……助かったよ。」

琢磨「何言っただよ〜親友なら当然だろ?」

つぼみ「ホントに助かりました。」

琢磨「つぼみちゃん?……あ、他の皆も」

かなりの時間が経ったのか既に太陽は沈みかけ夕焼け空になっていた。

変身を解いた大人はぼろぼろの姿になりながらも琢磨に礼を言うと琢磨は笑顔を見せてそう返す。そこいつの間につぼみ達がいたのだと琢磨は驚くのがあったがそのすぐ後に傑が目覚めます。

傑「うっつ……あれ?俺はどうして此処に?うわあ!!!大人ぼろぼろじゃん……どうしたんだ?」

大人「え?ああ〜ちよつと自転車で転んじゃってな(汗)そんな事よりもお前こそ大丈夫か?練習しすぎてぶっ倒れたって琢磨から来たぞ?」

琢磨「そ、そうそう(汗)お前家の帰る途中で倒れてたのを此処に運んだんだ……心配させるなよ〜」

傑「そうだったのか……たまには休まないといけないのかなあ〜」



？「あ、いたいた！おおい！！」

考えこんだ顔をした傑の所に一人制服を着た少年が近づいてきた。すると琢磨と傑は緊張したようにこう言う。

琢磨&傑「ぶ、部長！？ど、どうしたんですか？」

バスケット部長「試合の事で話が有ってね・・・実はレギュラーの2人が怪我をしましてしまって今回の大会に出れそうにないから二人の代わりに出てくれるように頼みに来たんだけど・・・出てくれるか？」

琢磨&傑「は、はい！！！精一杯頑張ります！！！！」

バスケット部長「よかったあ！！！！じゃあ明日レギュラーユニフォームを渡す。明日から練習は地獄だと思っ様覚悟してくれよ？」

琢磨&傑「はい！！地獄でも何でも耐え抜いてみせます」

その言葉を聞くと二人はそう言う。そして傑はこうしていられないと急いで家に変えるのだった。が琢磨は残り・・・。

琢磨「大人・・・明日話を聞かせてくれ・・・あのベルトの事」

大人「分かった・・・じゃ明日な」

琢磨「おう！！」

大人は琢磨との会話を済ませるまで明日全てを離す事を約束して今日の所は別れるのだった。そして大人はつぼみ達4人と一緒に夕焼け色に染まる空を見上げながら帰宅の帰路を歩くのだった。

大人「はあ〜今回は危なかったあ〜」

つぼみ「はい琢磨さんが来てくれなかったら私達が負けてたかもしれません」

えりか「でも大人さんと琢磨さん凄いコンビネーションだったね！

！お陰でデザトリアンもケチヨンケチヨンだったもん・・・なんだっけ？あのカブトとガタツクの必殺技・・・えつと〜ら、ら」

いつき「ライダーキック！！」

えりか「そうそう！！それぞれえ〜」

ゆり「まさにガタツクは戦いの神だったわ・・・でもコレで謎は深まるばかりね」

大人「何でこのベルトが川にあつたか・・・そしてこれ程のパワーを持つ兵器を誰が造つたのか・・・でしょ？」

大人達5人はガタツクの力について盛り上がっていた。アレだけのパワーがあれば今後また今日のようなデザトリアンが立ちはだかつても迎え撃てる。

だが大人は謎が更に深まるのだ。どうしてこれほどの強大な力を誰が開発したのか・・・そして何故あんな所に・・・。

須藤「ふふっガタツクの資格者も決定したか。これは面白い事になりそうだな・・・だが遊びも此処までだ・・・そろそろ回収させてもらうよ上原大人君?・・・そしてプリキュアの諸君・・・君たちにも我々ZECTの野望の糧になつてもらおう」

大人達がいた広場にいるのはスーツ姿の男・・・仮面ライダーザビの資格者である須藤だ。彼は大和の指令通りしカブトの資格者の監視ガタツクの資格者の誕生瞬間を目撃し更には今回の闘いでつばみ達プリキュアと砂漠の使徒のパワーデータの収集を行っていたのだ・・・大和と織田が自分と合流するのももうすぐだ・・・次は俺達が相手をするときで予告するような事を言つとその場から須藤は去り夕日に消えるのだった。

第7話「カブトとガタツクの力！」（後書き）

今回はカブトとガタツクの力を解禁させました〜かなり飛ばしまし  
たがそれはお約束。

次回は大和、織田、須藤が大人達の前に現れます〜。

第8話「強敵現る 敵は仮面ライダー!!」(前書き)

前回までのあらすじ

見事カブトとガタツクの協力によってデザトリアンを浄化できたつぼみ達。

しかしそれを蔭から須藤が監視しておりカブトとガタツクの資格者の偵察、更にプリキュア達のデータを収集していたのだ。

そしてとうとう大和達が合流し仮面ライダーが動き出す……。

## 第8話「強敵現る 敵は仮面ライダー!!!」

翌日琢磨は大人に呼ばれ薫子の植物園に来ていた。到着したときには大人だけではなくつぼみ達4人もいた。そしてつぼみ達4人から砂漠の使徒に関連する事と心の大樹について、大人からは自分と琢磨が変身したライダーベルトについて説明していく。その間琢磨は只黙ってつぼみ達が戦う理由そして自分が持つ力について聞くのだった。

大人「つまり俺が変身したのは太陽の神仮面ライダーカブト。で前から変身したのは戦いの神仮面ライダーガタックというわけ。」

琢磨「成程ねえ。つぼみちゃん達がプリキュアで世界を守るために……で大人もそれに協力していると。」

大人「そのとおり。」

琢磨「しかし戦いの神……なんて勇ましい名前なんだ……」

つぼみ「確かにそうですね。でもその名前に相応しく凄いパワーでした。」

えりか「それに二人のワザも凄かったよねえ」

いつき「うん!!とりついていたクモジャキーがデザトリアンから出てきちゃうんだもん」

ゆり「ホントに人が造ったとは思えない代物ね。」

大人「言えてる。……それに悪用させたらと考えるとぞつとずるよ」

琢磨「あともう一つベルトがあるんだよな?……ダークカブトだっけ?」

大人「ああ。説明書を見る限りではカブトのプロトタイプだそうだが、でもパワーはカブトと同等らしい。」

琢磨「つまりカブトがもう一人……だな?」

大人は持ってきた説明書を全員に見せていく。そこにはカブトとガ

タツクそしてダークカブトの力の詳細が書かれておりつぼみ達は説明書の堅苦しい言葉に戸惑うがゆりが翻訳していく事でなんとか理解出来た。その説明書を読んだ限りでは人が造れるものなのかという謎だけが深まっていくのだった。

その頃希望ヶ花市の駅周辺で大和達と合流していた。3人とモスーツ姿で一見会社員のように見えるのだが大和はサングラスをしていたために一人だけかなり目立っていたのだった。

須藤「大和さん、織田さんお待ちしてました。」

大和「須藤。ガタツクの資格者が現れたと言うのは本当か？」

須藤「はい。それも此処の地元の高校生と調べがつかしました。」

織田「流石シャドウ隊の隊長だな・・・仕事が早い」

大和「で？カブト、ガタツクの資格者及びプリキュアについては？」

須藤「はい。カブトの資格者は上原大人。ガタツクの資格者は漆山琢磨。プリキュア達は花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつき、月影ゆりの4人。上原大人と漆山琢磨は公立高校の生徒。プリキュア達4人は私立明堂院学園の生徒であると調べがつかしました。」

大和「流石だな須藤。お前は今までのシャドウ隊隊長でもトップクラスの仕事の出来だ。これからも期待するぞ？」

須藤「勿体ないお言葉です。大和さん」

織田「調べたのはいいがこれからどうするんだ大和？・・・まさかカブトで連れて行く気じゃ？」

大和「そのまさかだ。相手はガキだ。それにいざとなれば変身するまでよ。」

大和はニヤついた顔を織田に見せながらそう言う。須藤も同じように笑う。

そして場所は変わり砂漠の使徒のアジトの玉座の間。クモジャキーはガタツクの登場をサバークに報告くしていたのだった。

サバーク「今度は蒼い戦士が出ただと？」

クモジャキー「はっ。しかも赤い奴とのコンビネーションはプリキ  
ュア以上。」

サバーク「・・・プリキュアではないとすると一体何者なのだ」  
？「サバーク博士？」

サバーク「ん？・・・なんだ？ダークプリキュア？」

ダークプリキュア「次は私が行きます。3幹部で駄目なのならば私  
がこの手でプリキュアとその新しい戦士を倒してみせましょう。」

サバーク「・・・いいだろう。行けダークプリキュア!!!」

ダークプリキュア「はっ!!!」

サバークはそう言うため息をついてしまふ。此処まで計画に支障  
が出るとは誤算も此処までくれば自分の責任問題にも成りかねない。  
そんな不安が募るサバークに声をかけたのは3幹部よりも格上の戦  
士ダークプリキュアだ。彼女は見た目は普通の人間の少女に見える  
のだが人間ではない。その根拠は後ろに悪魔を連想させる漆黒の翼  
が生えていることだ。ダークプリキュアは3幹部を見下すようにそ  
う言うとお出撃許可を請う。サバークはそれを了承したのか出撃許可  
を与える。ダークプリキュアは地球へと向かうのだった。

？「ふん・・・偉そうに。まあまた失敗してくれればいいさ」

そう言ったのは青い長髪の男のコブラージャという3幹部の最後の  
メンバーだ。自分が出撃したかったがあのかのクモジャキーが深手を負  
ったのなら自分が行くよりもダークプリキュアに行かせる事で敵の  
情報を得る方が得だと判断したのだ。そして願わくは失敗して来い  
と言う思いも陰にひそませている。

時を同じくして大人達はカブトとガタツクの能力について分析をし  
ていた。分析と言っても資料はトランクの中にあつた説明書しかな  
くそれを読み漁ることしかできないのだった。

大人「はあ〜何度読んでも信じられないパワーだよ。それにつばみ  
達がプリキュアというのも。まるで夢見てるみたいだよ。」

琢磨「確かに。ていうか・・・いたんだな侵略者とかそれに立ち向

かうヒーローとか・・・あれでも女の子だからヒロインか？」

大人「違くない。なんか羨ましいよ。」

つぼみ「二人とも簡単に言わないでくださいよあ〜。」

えりか「そうだよ〜アタシ達今まで大変だつてんだからあ〜」

大人「ご、ごめん（汗）わ、悪気が有つて言つたんじゃないんだ。

只ちよつとした憧れが・・・」

ゆり「軽々しくそう言う事は行って欲しくはないわね・・・私たちは真剣に今まで戦つてきたの。遊びじゃないわ」

大人&琢磨「す、すみません。」

3人にそう責められるとすぐに謝る大人と琢磨。男はヒーローに憧れるものだが女の子にはそう言う主観はあまりないと言う事を忘れていたのだ。もとより命がけとなれば自分たちの発言が軽々しいものであつたと言う事もあり怒らせてしまうのも無理はなかつたのだ。大人と琢磨はとにかく謝り3人の機嫌を取ろうとしていく。そんな中に薫子が何やら慌てた顔で走つて来るのだった。

薫子「みんな！！ダークプリキュアが現れたわよ。」

つぼみ「なんですって!？」

大人「砂漠の使徒のメンバーか？」

えりか「うん。みんな行こう!!」

5人「うん!!。」

6人とシブレたち妖精は急いでダークぷキュアが出たと言う場所に向かうのだった。

大人達がダークプリキュアの元へ向かつた同じころ大和達も化け物が出たという話を聞くと。

大和「砂漠の使徒が出たようだな。コレは都合がいい我々の手間が省けると言うもの。では織田、須藤行くぞ。」

織田「ああ。」



須藤「はっ!!」

大和に続き織田と須藤もその現場に向かうのだった。もちろん砂漠の使徒討伐ではない。ライダーシステム及びプリキュアの力をわがものにする為だ。

ダークプリキュア「ふん。プリキュアどもそして新しい戦士よ早く出て来い!!この私が直々に叩き潰してくれろわぁ!!!」

町を破壊しながらプリキュア達を血眼になって捜すダークプリキュア。更にスナツキー達も町の人々を襲い始める。そしてある兄弟が逃げ遅れてしまう。

兄「ああ・・・」

弟「兄ちゃん・・・こ、怖いよぉ」

スナツキー「キー!!!」

大人「止めるお!!!」

スナツキーが兄弟を襲おうとした所を大人が正面からスナツキーにケリを入れる。ケリ飛ばされたスナツキーは他のスナツキーに激突していきそのまま遠くに飛ばされるのだった。

つぼみ「早く今のうちに逃げて!!!」

兄弟「ありがとう。」

兄弟は一言お礼を言うとそのまま一目散に走り逃げるのだった。

ゆり「ダークプリキュア!!!懲りずにまた来たみたいね?」

ダークプリキュア「月影ゆり・・・今すぐ貴様を葬り去りたい所だが今日は任務が有るので・・・新しい戦士は・・・そのこの二人か?」

大人「だったら何だ?俺達とデートでもするか?」

琢磨「まあ〜そうだとっても此方から願ひ下げだかな」

ダークプリキュア「ふん・・・ふざけた事を言えるのも今のうちだぞ?私は3幹部の様にはいかん」

大人「ふう〜ん・・・それは楽しみだ。みんな!!!行くぞ」

琢磨「おう!!!」

つぼみ「はい!!」

えりか「やるっしゅ!!」

いつき「これ以上好きにはさせない!!」

ゆり「暴れるのもそこまでよ!!」

大人の合図と共に大人と琢磨はライダーベルトを装着しつぼみとえりかはココロパヒュームを取りだしいつきはシャイニーパヒュームゆりはココロポットを取りだすと先ずはつぼみ達がプリキュアに変身していく。

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう!!（ですっ  
&でしゅ）」

4人「プリキュア・オープンマイハート!!!!」

それぞれのアイテムにプリキュアの種をセットしていくと4色の光に4人は包まれていきプリキュアの姿に変わり変身が完了する。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花!!!キュアブロッサム!!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花!!!キュアマリン!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花!!!キュアサンシャイン」

キュアムーンライト「月光に冴える一輪の花!!!キュアムーンラ

イト!!!!」

4人「ハートキャツとプリキュア!!!!」

大人「来い!!!カブトゼクター!!!!」

琢磨「来い!!!ガタツクゼクター!!!!」

大人と琢磨は手を空に伸ばしてゼクターの名前を叫ぶ。するとカブトゼクターとガタツクゼクターが空を先い空間から飛んできて二人の手に止まる。

大人「変身!!」

琢磨「変身!!」

電子音「HENSIN!!」

そしてそのままライダーベルトにカブトゼクターとガタツクゼクターをせつとしてカブトとガタツクのマスクドフォームに変身する。

カブト「光を支配せし太陽の神！！仮面ライダーカブト！！！」  
ガタツク「戦いを支配せし戦いの神！！！！仮面ライダーガタツク！！！！」

今回からはプロツサム達プリキュアのように自分たちのライダー名と二つ名を名乗る。

ダークプリキュア「仮面ライダー？ほう、それが貴様たちの名前か・行くぞ！！！！」

カブト「来い！！ダークプリキュア！！！！」

ダークプリキュア「先ずは貴様ら仮面ライダーを片付けキュアムーンライトを倒させてもらおう。」

ガタツク「ふん。簡単に俺達を倒せると思うなよ？」

ダークプリキュアと無数のスナツキー軍団との激闘が始まった。ダークプリキュアは先ずは指令を果たそうとカブトとガタツクに狙いを定めるカブトとガタツクもプリキュアと名乗る初めての敵に警戒心を強めながら果敢に立ち向かう。プロツサム達は無数のスナツキーを蹴散らすことを優先しスナツキー達に向かっていく。

プロツサム「ふっ！！！！たああ！！！！」

マリリン「うりゃああ！！！！はあああっ！！！！」

サンシャイン「ふんっ！！！！あああああっ！！！！」

ムーンライト「はあああっ！！！！たああああ！！！！」

4人は慣れた手つきでスナツキーをあつという間に片付けていきスナツキーは見る見るうちに数を減らしていくのだった。

ダークプリキュア「はあああっ！！！！」

ガタツク「ぐううっ！！！！！！！！」

カブト「ガタツク！！！！！！！！」

一方カブトとガタツクはダークプリキュアに苦戦を強いられていた。なにせデザトリアンよりもパワーとスピードのバランスが取れており戦いに慣れていない二人にとって形勢はやや不利だった。

カブト&ガタツク「キャストオフ!!!」

電子音「CAST OFF!!!」

電子音「CHANGE BEE TLE!!!&CHANGE S

TAG BEE TLE!!!」

カブト&ガタツク「クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP!!!」

カブトとガタツクはキャストオフしライダーフォームになるとそれぞれカブトクナイガンとガタツクダブルカリバー構えクロックアップでダークプリキュアに反撃してを狙うのだがダークプリキュアはクロックアップで光速移動している二人の攻撃を出来るだけガードガード出来ない攻撃は極力最小限のダメージに抑え込んでいく。

電子音：「CLOCK OVER」

ダークプリキュア「ぐっ・・・成程かなりのパワーだな？だがお前たち自身の力はまだまだ未熟。コレで決めてやるう。闇の力よ集えダークタクト!!!プリキュア・ダークパワーフォルテッシモ!!!」

ガタツク「カブト!!!」

カブト「ああ!!!行くぞ!!!」

電子音「ONE TWO THREE」

カブト&ガタツク「ライダーキック!!!」

電子音「RIDER KICK!!!」

ダークプリキュアのダークパワーフォルテッシモとカブトとガタツクのライダーキックがぶつかり合う。3人の技のぶつかり合いによって周囲には衝撃波と大爆発が起こる。3人は技の衝撃に耐えきれずに吹き飛ばされてしまう。何とか立ち上がるがカブトとガタツクもダークプリキュアも大ダメージを受けたのかすぐには立ち上がれないのだった。

ダークプリキュア「はあ、はあ、はあ・・・中々のパワーだな？  
・・・だが貴様ら自身の戦闘技術は未熟・・・今回はこの辺にして  
おいてやる。次までにそれぞれ首を洗って待っている!!!」

ダークプリキュアはその一言だけ言うとダークプリキュアはその場から消えるのだった。それと同時にスナッキーも消滅する。

カブト「はあ、はあ、はあ、はあ……凄まじい強敵だ……  
ダークプリキュア」

ガタツク「ああ。クロックアップもあまり通用しなかったからな。」

ブロッサム「カブト!!ガタツク!!」

マリン「二人とも大丈夫?」

カブト「ああ。なんとか……クロックアップを使って奴と互角って感じだったよ。」

サンシャイン「でも凄いよ。二人ともダークプリキュアに善戦できるなんて」

ムーンライト「でもまだまだ修行がいるわね?」

ガタツク「ムーンライトの言うとおり。俺達自身も鍛えないとな」

6人はダークプリキュアを退けた事を喜びあいながら今後の課題を整理する。するとそこに3人の人影が……

?「流石はカブトとガタツクのマスクド・ライダーシステム……砂漠の使徒ごときには負けるはずがないか。」

?「そしてプリキュア……凄まじい戦闘力。」

?「ふふふふっ」

カブト「誰だアンタら!?!」

大和「大和 鉄騎……仮面ライダーケタロス」

織田「織田秀成……仮面ライダーヘラクス」

須藤「須藤健一……仮面ライダーザビー」

大和達はそれぞれ名を名乗るとライダーブレスを左腕に装着していく。カブト達やブロッサム達は新たな敵なのかと身構えていく。とそこに蜂型メカザビーゼクターと大和達のカブティックゼクターが飛んでくる。

3人「変身!!!」

電子音「「「 HENSIN!!!!!!」」」

電子音「CHANGE BEE TLE!!!!」

3人がそれぞれのゼクターをライダーブレスに収めていくとそれぞれ仮面ライダーケタロス、仮面ライダーヘラクス、仮面ライダーザビーの姿が現れるのだった。

カブト「なっ!?!?!」

ガタツク「何っ!?!」

ブロッサム「えええっ!?!?!」

マリン「うそお!?!?!」

サンシャイン「仮面ライダー!?!」

ムーンライト「貴方達は何者なの?」

ケタロス「ふん・・・俺達は上原大人そして漆山琢磨が選ばれたカブトとガタツクのライダーシステムの関係者と言っておこう。大人しく我々に同行するなら何もせん・・・だが抵抗するなら・・・」

ザビー「少し痛い目を見てもらうかもね?」  
驚くカブト達をしり目にそう言うケタロス達はそう言う少しずつつ近づいていく。明らかに無理やりにも自分たちを拉致しようと近づいて来る3人にカブト達は身構えるがカブト達はダークプリキュアとの戦闘でかなり体力を消耗していた。それを察したブロッサムはカブト達を静止し。

ブロッサム「カブト達は休んでいてください。此処は私たちが引き受けます。」

カブト「しかし・・・」

マリン「無理しない〜二人はダークプリキュアとの戦いでかなりお疲れさんでしょ?」

サンシャイン「此処は私たちに任せて。プリキュアの力見せてあげるから。」

ムーンライト「無理して倒れでもしたら困るでしょ?少しは休みなさい。」

ガタツク「は、はい……」

カプト「すまない」

カプトはすまなさそうにブロッサム達にそう言うとブロッサムはカプトに笑顔で返すとケタロス達の方を向いていき身構えていく。

ケタロス「ふん……俺達も舐められたもんだな」

ヘラクス「……………」

ザビー「勇ましいのは結構だけど私たちの力を舐めてたら痛い目を見るよ？」

ケタロス達もプリキュアに対して身構えていきケタロスとヘラクスはゼクトクナイガンを装備していく。因みにケタロスはクナイモードにヘラクスはアックスモードで構えているのだ。

ブロッサム「みんな行きますよ!!!」

マリン&サンシャイン&ムーンライト「うん!!!」

4人は先手を取ろうとケタロス達に突撃していく。それに応戦するようにケタロス達もブロッサム達に向かっていくのだった!!!

**第8話「強敵現る 敵は仮面ライダー!!」(後書き)**

いやあ、今回は長くなってしまった(汗)。

次回はプリキュアVS仮面ライダーとなります。



## 第9話「大苦戦！？プリキュアvs仮面ライダー」（前書き）

（前回までのあらすじ）

カブトとガタツクはなんとかダークプリキュアを退けるのだったがそこに大和達が現れる。消耗した二人を気遣ったブロッサム達は大和達が変身したケタロス達に立ち向かうのだった。

## 第9話「大苦戦!?プリキュアvs仮面ライダー」

ブロッサム「明らかに怪しい貴方達についていくつもりはありません!!!」

ケタロス「ふん・・・ならば力づくで全員まとめて連れて行くまでだ。」

マリ「アンタ達がなんだか知らないけど・・・怪しい人には付いていくなって学校で習ったから全力で抵抗しちゃうもんね!!!」  
ヘラクス「・・・」

サンシャイン「貴方達がマスクド・ライダーシステムを造ったのね?どうしてこんな凄いものがあるのに私たちと協力して砂漠の使徒と闘おうとしないのよ?」

ザビー「さあ?ただ俺は上からの指示で動いてるだけ。君たちと砂漠の使徒の戦いなんて興味ないね」

ムーンライト「世界が砂漠になるとしてもそんな事が言えるの?」  
ザビー「勿論・・・何で?」

ブロッサム達とケタロス達はそれぞれターゲットを絞っていきブロッサムはケタロスをマリンはヘラクスをサンシャインとムーンライトはザビーにと互いに狙いを定め合い互いに格闘戦を繰り広げていく。最初は互角のように見えたがパワーではマスクド・ライダーシステムが勝る事や変身してるのが成人の男性である事もあり格闘技術でも差が見え始めていき徐々にブロッサム達が押され始めるのだった。

ブロッサム「んぐっ!!!?きゃああっ!!!」

ケタロス「うらあ!!!最初の威勢はどうした?」

ブロッサム「はあ、はあ、はあ・・・諦めません。カブト達は私たちが守ります!!!」

ケタロス「威勢がいいな?いつまでも持つか試してやる」

ブロッサム「はああああっ！！！！」  
ブロッサムとケタロスとの激戦はケタロスに有利に進んでいた。ブロッサムタクトとゼクトクナイガンクナイモードが激しくぶつかり合い火花をひらし合う。だがケタロスの巧みなクナイガンさばきでブロッサムは時間の経過と主に防戦一方の展開になる。だがブロッサムは諦めずにフラワータクトを剣のように振り防御に回りながらも逆転を狙う。

マリン「うわあっ！！？女の子相手に斧なんてズルイ！！！」  
ヘラクス「・・・しょうがねーだろ？俺は斧が合ってるんだから。」  
ヘラクスは戦いに気乗りしないのか本気を出せないでいた。ゼクトクナイガンアックスモードとマリンタクトがぶつかり合いながら互いに主導権を譲らない攻防を繰り返して行く。だが体力はヘラクスが上まらるのがマリンの動きにキレがなくなっていく。  
ヘラクス「どうしたキュアマリン？・・・口ばかりか？」  
マリン「はあ、はあ、はあ・・・まだまだあっ！！！！！」  
ヘラクス「来い・・・」  
息使いが荒くなるがマリンは諦めずにヘラクスに立ち向かう。対するヘラクスは本気を出さずにマリンを怪我をさせない程度に反撃していく。

サンシャイン「はあああっ！！！！」  
ムーンライト「ふんっ！！！！」  
ザビー「ぐっ！！・・・ほう中々やるね？だがお前たちのデータがあるから負けるつもりないよ！！！！」  
ザビーマスクドフォームはムーンライトとサンシャインの二人を相手にしながらも全く譲らずにザビーはマスクドフォームのゴツイ鎧には似合わない俊敏な動きで二人のパンチャケリを交わしながらヒットアンドアウェイ戦法で確実に攻撃を放ち互角の戦いを繰り返していく。

ザビー「さて・・・そろそろ本気を出そうかな？」

一度二人から離れるとザビーはザビーゼクターの羽を倒していく。するとカブト達と同じようにマスクドフォームの鎧が広がっていく。そしてそのままザビーゼクターを180度回転させる。

ザビー「キャストオフ!!!」

電子音「CAST OFF!!! CHANGE WASP!!!」

サンシャイン「危ない!!!。サンフラワーィジス!!!」

キャストオフした際に拡散したマスクドフォームの鎧をサンフラワーィジスで防御する。勿論ムーンライトもサンシャインの後ろに回ったのでダメージは皆無だった。

ザビー「ほう素晴らしい防御力だな？だが・・・これにはついて来れまい？クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP!!!」

クロックアップしたザビーの動きにサンシャインとムーンライトは惑わされてしまう。ムーンライトはダメージを最小限に抑えていくのだがサンシャインは見きれずザビーの光速ラッシュ攻撃を防ぎきれずダメージを受けていく。

サンシャイン「んんぐうっ!?!?・・・あああ!!!?」

ムーンライト「サンシャイン!!!・・・があっ!!!?」

電子音「CLOCK OVER!!!」

ザビー「人の心配よりも自分の心配をしたほうがいいよ?」

サンシャインをかばう為に駆け寄ったムーンライトはその隙を衝かれてザビーに思いつきケリを入れられて飛ばされてしまう。再び姿を現しそう言うザビーはゆっくりと駆け寄る。その目はまさに凶暴さが溢れ須藤の穏やかな口調が更に恐怖を煽るのだった。

カブト「皆!!!」

ガタツク「アイツらなんて強さ・・・このままじゃブロッサム達が・・・」

カブト「ガタツク俺達も行こう!!!」

ガタツク「ああ!!。カブトはブロッサムを頼む。俺はマリンを援護する。」

カブト「了解。その後サンシャインとムーンライトも必ず援護に向おう。サンシャイン、ムーンライト・・・必ず援護に行くからそれまでそれまで何とか持ちこたえてくれ!!!」

カブトとガタツクは消耗した身体に鞭を打ちながら立ち上がる。そしてカブトはカブトクナイガンクナイモードをガタツクはガタツクダブルカリバーを装備していくとカブトはブロッサムを援護するためにケタロスに向かいガタツクはマリンを先ずは援護するためヘラクスに向かう。早くしなければザビーにサンシャインとムーンライトを倒されてしまうと考えた二人は少し焦っていた。

ケタロス「さあゝそろそろ終わりか？」

ブロッサム「はあ、はあ、はあ・・・まだまだ私は戦えます!!」

ケタロス「ふん・・・そうは見えんがな」

カブト「止める!!これ以上好きにはさせないぞ!!!無理をするな。ブロッサム!!。此処からは俺も戦う!!」

消耗しきってフラフラになりそうなブロッサムにケタロスはトドメを刺そうと近づくのだったがそこにカブトが現れる。ブロッサムふらつくブロッサムに近づき身体を支えながらカブトクナイガンを構えてケタロスを威嚇する。

ブロッサム「カブト!?無理はしないで!!!その身体で戦ったら・・・」

カブト「何言っただよブロッサム!!!・・・お前こそフラフラじやんか!!俺はもう大丈夫だから一緒に戦うぞ!!それに言っただろ?お前だけを苦しませはしな言っただ」

ブロッサム「カブト・・・分かりました。一緒に戦いましょう!!」

ケタロス「カブトが来たか!!丁度いい・・・貴様も片付けてやる」

カブトの言葉にブロッサムは目を輝かせて残った力を振り絞りブロッサムタクトを構える。カブトが加われば自分も勝てる・・・その

思いを胸一杯に秘めて強敵仮面ライダーケタロスに立ち向かうのだ  
った。

マリ「はあ、はあ、はあ……」

ヘラクス「ガス欠だな？……お前もそろそろ終わりだな」

ガタック「それはどうかな？今から俺も混ぜてもらおう！」

マリ「ガタック！？来ちゃだめだって……うつつ」

ガタック「マリン！！……お前もフラフラじゃないか！！此処からは俺も戦うから！！それに俺達は仲間だろ？……君達プリキユアだけを苦しませたくないんだ！！」

マリ「ガタック……うん！！一緒にやるっしゅ！！」

ガタック「ああ！！やるっしゅ！！」

ヘラクス「……」

ガタックはふらついて倒れそうになったマリに駆け寄り身体を受け止める。マリはガタックの「俺達は仲間だろ？」と言う言葉を聞くとそうだったと思いたすように立ち上がりガタックと掛け声を合わせてハイタッチをして互いの顔を見ながらもう負けるものかと確信すると二人は共にダッシュしてガタックダブルカリバーとマリントクトをヘラクスに振う。しかしヘラクスはよけようとせずそのままゼクトクナイガンを盾にするようにして防御して二人を引き寄せるとひそひそ声でガタック達に本心を言うのだった。

ヘラクス「……ガタック。こっちはいいからサンシャインとムーンライトの方に行け。」

ガタック「何？」

マリ「アンタ……どういうつもり？」

ヘラクス「俺は元々お前たちを傷つけるつもりはない。キュアリン今からは戦う演技を……いや残ってる力の限りお前は全力で来い。

俺はそれを防御しお前が怪我をしない程度に反撃する。」

ガタック「アンタ……一体？」

マリ「ガタック！！彼を信用してあげよう。なんかこの人は信用

できるかも・・・大丈夫だよ。もしこの人が嘘でもついてたらブルーフォルテウェイブを使っちゃうし。」

ガタツク「しかし・・・」

ヘラクス「早く行け。でないとサンシャインとムーンライトが大怪我する事になるぞ?」

ガタツク「くっ!!!もしもマリンに怪我させたらアンタをライダーキックで火星までぶっ飛ばす!!!マリン・・・やばくなりたいつでも呼んでくれ!!!」

マリン「りょうーかい」

ガタツクは半信半疑になりながらも此処はヘラクスの言う事を信じてサンシャインたちの変声と向かう為に急いで走りだすのだった。

サンシャイン「きゃああつ!!!!!!」

ムーンライト「ぐうっ!!!あああああつ!!!」

その頃二人はザビーの完全なる攻撃に押されつつあり体力も残り少なくなり反撃するもことごとくザビーに裏を返されてしまっていた。

ザビー「ではそろそろトドメと行こうか?ライダーステイング!!!」

電子音「RIDER STING!!!」

サンシャイン「はあ、はあ、はあ」

ムーンライト「サンシャイン大丈夫?」

サンシャイン「はい・・・なんとか」

ムーンライト「そう。もう少し頑張るわよ。」

サンシャイン「はい・・・はあ、はあ」

ザビー「ふふっ・・・まだ来るきかい?でももう終わりだよ。恐怖をタップリ味わいながら果てるがいい。」

変身している須藤は口調はまるで子供を相手するかのような上から目線の口調でそう言うと必殺技のライダーステイングを発動するべくザビーゼクターのスイッチを押す・・・するとタキオン粒子が流動してエネルギーがザビーゼクターの先端に集めていき稲妻が集ま

る。二人は何とかしようにも既に体力が限界を迎えておりまともに動けなかった……。ザビーは散々甚振って最後にトドメを刺す事を楽しむかのようにあえてゆっくりとした足取りで二人に近づくのだがコレが彼にとって大きな誤算となるのだった。

ガタツク「それ以上二人に近づくなあ！！！」

ザビー「んっ？貴様はガタツクか？……ぐあああっ！！！」

サンシャイン&ムーンライト「ガタツク！！！」

ガタツク「二人とも大丈夫か？」

ガタツクはザビーがライダーステイキングを放つ寸前にガタツクダブルカリバーをブーメランのごとく投げていきライダーステイキングを不発に終わらせると二人の前に立ちザビーに立ちふさがるのだった。ザビー「己え……貴様あ！！俺の完璧な戦いに水を差すとは。先ずは貴様から始末する！！！」

此処で穏やかだったザビーの口調に変化が生じ怒り丸出しになるとガタツクに向う！！戦いのペースを乱されたザビーはその張本人であるガタツクを執着的に狙うのだがそこにサンシャインとムーンライトも乱入していきザビーに反撃のダブルパンチを放つ！！。

ムーンライト「私たちを忘れてもらっちゃ困るわね？」

サンシャイン「今までやられた分はキッチリ返させてもらおうよ？」

ザビー「ぐおおおっ！！？……き、貴様らあ！！この俺の完璧なプランを崩すとは！！タダでは済まさんぞ！！！！！」

ザビーは既にスマートな戦い方ではなくなってきたており攻めるだけの力任せの戦い方となる。だが3人はザビーの動きを分析しつつ冷静に確実な反撃をしていくのだった。

ケタロス「ぐううっ！！？……貴様ら中々やるな？だが……そろそろ決めてやるう！！ライダービート！！！」

電子音「RIDER BEAT！！！」

カブト「アンタもな？……こっちもとっておきで行くぞブロッ



サム！！」

ブロッサム「はい！！」

電子音「ONE TWO THREE」

カブト「ライダーキック！！」

電子音「RIDER KICK！！！！」

ブロッサム「集まれ花のパワー！！ブロッサムタクト！！！！はあっ！！花よ輝け！！プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！！」

カブト「合体！！ライダー！！！！」

ブロッサム「フォルテ！！！！」

カブト&ブロッサム「ウェイブ・キック！！！！！！」

ケタロス「そんなものが通用するかあ！！！！」

ケタロスはカブティックゼクターを回転させていき必殺技のライダービートを発動しクナイガンを持つ右手に力を溜めていく。対するカブトとブロッサムもそれぞれの必殺技の準備をする。そしてカブトの飛び蹴りのライダーキックとブロッサムのピンクフォルテウェイブを合体させた秘義「ライダー・フォルテウェイブ・キック」放つ。そしてケタロスのライダービートで最大限に強化された腕力を使ったクナイガンのアバンスラッシュがぶつかり合う。ぶつかり合った瞬間に辺りには凄まじい爆発と爆風が起こりカブトとブロッサムとケタロスは吹き飛ばされたのだった。

マリリン「ブロッサム！！カブト！！」

ヘラクレス「大和お！！！！」

マリリンは攻撃しヘラクレスはそれを受け流すという流れを続けていき激しい戦いの演技を繰り返していたのだったがカブト達の方で爆風が発生したのを見るとすぐに戦闘を中止し爆発があった方に向かうの合った。

マリリン「ちょ二人とも大丈夫！？」

カブト「マリリン？・・・なんとか五体満足」

ブロッサム「ちよつと無茶しちゃいました。」

ヘラクス「大和お!!無事か!？」

ケタロス「ああ・・・だがこれ以上は動けん」

マリンはブロッサムとカブトを起こすように支えたと二人をなんとか立たせるのだった・・・対するヘラクスもケタロスに肩を貸し立たせる。

ケタロス「ふふふっ・・・やるなあゝ貴様ら。流石カブトとプリキュアと言う事か」

ケタロスはそう言いながら立ち上がる・・・コレ以上は戦えない為今日は引き返すしかないがカブトとブロッサムの力を知る事が出来てかなり満足のようだった。一方ガタックとサンシャインとムーンライトは・・・

ザビー「はあ、はあ、はあ・・・今度こそコレで決めてやる!!  
!ライダーステイング!!!」

電子音「RIDER STING!!!」

ガタック「サンシャイン!!ムーンライト!!俺達も必殺技だ!!  
サンシャイン「うん!!」

ムーンライト「ええ!!」

電子音「ONE TWO THREE」

ガタック「ライダーキック!!!」

電子音「RIDER KICK!!!」

ムーンライト「私たちはフォルツテシモよ!!!」

サンシャイン「はい!!!」

サンシャイン&ムーンライト「プリキュア・フローラルパワーフォルテツシモ!!!」

ガタック「合体!!!ライダー!!!」

サンシャイン&ムーンライト「フローラル!!!」

ガタック&サンシャイン&ムーンライト「フォルテツシモ・キック

「！！！」

凄まじい勢いで攻防戦を繰り返して行くガタックとサンシャインとムーンライトとザビー。ガタックが加わったことで形勢は互角になったがそれでもザビーの強さは半端でなく中々自分に有利にはならなかった。ここでザビーは今度こそライダーステイニングを決めてやるうとゼクターのスイッチを押す。それに対抗するようにガタックとサンシャインとムーンライトも必殺技で対抗しようとガタックはライダーキックをそしてサンシャインとムーンライトは合体技のフォルツテシモを発動するそして3人はそれぞれのワザを合体させて秘義「ライダー・フローラル・フォルツテシモ・キック」でライダーステイニングに対抗する。

ガタック「うわあああああっ！！！！！」

サンシャイン&ムーンライト「きゃあああああっ！！！！！」

ザビー「ぐああああああああっ！！！！！！！！！！」

4人は必殺技のぶつかり合いの衝撃で跳ね飛ばされてしまう。既に体力は限界なのか立ち上がる事も出来なかったのだった。

ヘラクス「須藤！！大丈夫か？」

ザビー「織田さん？・・・ぐうつ！！！」

ヘラクス「無理すんな！！立てるか？」

ザビー「はい・・・貴様らあ・・・覚えていろよ？この屈辱は何倍にもしてかえしてやるからなあ！！！！！」

ヘラクス「今はそんな事はいい・・・一旦は引き揚げるぞ」

ザビー「くうう！！！！！！！！！！！」

ケタロス「はあ、はあ、はあ・・・はははっ！！！！今日の所はこれ位にしてやる。だが今のうちに考えておけ我々につくか否かを。そしてどちらが本当に正しいのかをな！！！！！」

ケタロス達は変身解くと人間の姿に戻りその場から消え失せるのだった。しかし変身を解いた大和の表情は悔しさよりもまるで喜んでいるかのような笑みだった・・・その表情はかなり不吉で不気味

なものだった。

ガタツク「うううっ……」

カプト「ガタツク!!!大丈夫か!!!?」

ガタツク「な、なんとか……」

ブロッサム「サンシャイン!!!」

マリン「ムーンライト!!!」

ブロッサム「二人とも大丈夫ですか?」

サンシャイン「ええ……」

ムーンライト「ぼろぼろだけど一応は無事よ」

カプト達はフラフラになりながらも爆発が合ったガタツク達の方へと向かい消耗しきったガタツク達に肩を貸して立たせるとそれぞれ変身を解く。気がつけば辺りは爆発で土埃が舞いコンクリートやアスファルトの地面はひび割れぼろぼろになっていたのだった。

大人「まさかあのベルトの関係者が仮面ライダーだったとは……」

琢磨「やつらは俺達のベルトを回収って言ってたな?それにプリキヤアや砂漠の使徒の事も知ってるような口ぶりだったし……あいつらもしかしたらプリキュアの力も?」

大人「その可能性はある……。もしかしたら第3勢力になるかもしれない……」

大人の言葉に琢磨は不安そうな顔をするがそこにつぼみが口を開く。つぼみ「絶対に大丈夫ですよ。例え第3勢力となっても私たちが迎え討ちます!!!」

えりか「アタシたちは絶対に負けない!!!……負けちゃいけないんだもん。」

いつき「それに僕らには大人さんたちもいる。……もつともつと強くなれば彼らにも負けないよ!!!」

ゆり「そうね……。今後は二人にも基礎体力を上げてもらおうわ。今

日みたいにならない様にね」

大人「みんな・・・ああ！！俺達は負けない！！」

琢磨「例え敵が仮面ライダーでも・・・」

大人「砂漠の使徒と敵の仮面ライダー・・・俺達は必ずこの町を・  
いや世界を守り抜く絶対！！」

琢磨「勿論！！！」

つぼみ「はい！！！」

えりか「やるっしゅ！！！」

いつき「うん！！！！！」

ゆり「ええ！！！」

6人は謎に塗れた新たな敵ZECTに所属するライダーの出現により三つ巴の展開を予想しながらも必ず人々を守り抜くと決心してお互いに笑顔を見せあう。これからは更に戦いが厳しくなるだろう・  
・だが俺達は負けないそう心に誓う大人達であった。

第9話「大苦戦！？プリキュアvs仮面ライダー」（後書き）

いやあ〜また長くなった（汗）。

しかしかなり盛り上がってきたと思います!!。

次回は平和に和やかに行こうと思います〜。

## 第10話「平和の時間」(前書き)

前回までのあらすじ

何とかケタロス達を退けたカプト達。だが辛くも収めた勝利であったため今後は自分たちの戦闘力を上げる必要があると考えるようになった大人達であった。

## 第10話「平和の時間」

前回の凄まじい戦いを何とか制した大人達。だがギリギリの勝利としか言えないものであり、今後は更に戦いが激しくなるという予感が流れていたのだが・・・アレから1週間砂漠の使徒も謎の仮面ライダー集団も現れず平和の日常が流れていくのだった。

大人「はあく平和だなあこの間の激戦がウソみたいだあ・・・この平和がずっと続けばいいのに」

学校の屋上で寝転がりながら大人は空を眺めていた。いつも通りの平和の時間を堪能しながら身体を休めていたのだった。自分がカブトに選ばれてからと言うものいろいろな出来事の連続で身体は疲れ切ってしまった。今のうちにタップリ休んでおこうと大人はいつも以上にリラックスしていた。

夕「お！！大人発見・・・よしちょっと脅かしてやるかあ」

大人「風が気持ちいいな・・・ちよつと眠くなってきたかも」  
するとそこに夕が現れる。何やら顔は悪戯を思いついた子供のような無邪気な顔をしながらゆっくりと大人に近づいていく。そんな夕の存在に気がつかない大人は気持ちがいよいよ秋風を受けながらウトウトと一寝入りしてしまう。そんな大人に夕のイタズラの魔の手が忍び寄るのだった。

夕「こらあ！！大人あく起きろお！！」

大人「んなあ！？・・・ゆ、夕！？・・・ちよ、お前何やっとなの？」

夕「何って・・・イタズラ？」

大人「イタズラって・・・お前」

すると突然上から何か乗っかって来るかのような衝撃が走り現実の世界に引き戻されるのだった。目を開けて身体をみると夕が自



分のカラダの上に馬乗りになっていたのだった。大人は夕の無邪気な笑顔を見ると怒る気にもなれず呆れたようにそう言つと馬乗りになつてゐる夕を優しく抱きかかえるようにしながら上半身を起こしていく。

大人「うんしょと」

夕「えへへへ」

大人「何がえへへだよ？夕は変わんないよなあ〜そう言う子供みたいなの」

夕「そう言う大人こそ小さい頃から空を見ながら昼寝してたよねえ」

大人「・・・そう言えばそうかもな」

夕は大人が起き上がると隣に腰掛けてお互いに幼いころの事を思い出す・・・小さい頃は大人と夕琢磨に傑・・・それにつぼみと共にいつも遊んだことが非常に懐かしく感じる。だがつぼみは鎌倉へ引っ越してしまい自分達もそれぞれの道へと歩き出したためかつての様に遊ぶことはなくなった・・・。

そんな物思いにふけていた大人に夕が自分の手を握ってきた。大人はそれに気が付き何か言おうと思つたがその前に夕が先に口を開くのだった。

夕「大人・・・聞いてもいい？この前大人あのベルト使つて変な鎧の戦士になつたよね。アレは何だったの？」

大人「え？・・・ああ〜アレは・・・そのお〜」

夕「それに傑があの変な怪物になつたときに変な妖精みたいなのが飛んできたよね？」

大人「う・・・」

夕「何か隠してるでしょ？・・・素直に言いなさい？」

大人「は、はい・・・信じてもらえないかもしれないけど言います」  
大人は夕に全てを説明した。あのベルトの事もつぼみ達が世界の為に戦つてゐる事も包み隠さず全て話した。夕はその話をただ黙つて

聞いていたのだ。

夕「ふうくん。そう言う事が合ったんだ」

大人「ああ。夕には黙っていようと思っただけだ」

夕「うんうん。聞けて良かった・・・だってそうすれば大人が気づいて私を支えられるじゃない。あの時助けてくれたのが私は分からなかった・・・でもそれが今は分かったんだもん。今度は私が助ける番」

大人「夕・・・」

夕は自分を助けてくれた相手が大人だと知る事が出来て満足したらしく笑顔でそう言った。その笑顔に大人も笑顔で返すとまた二人は午後の青空を見て昼休みを過ごすのだった。そして時間は過ぎていき昼休みが終わるチャイムが鳴る。

大人「さて～じゃそろそろ行きますか？」

夕「そうだね。ねえ～今日帰りに遊びに行かない？」

大人「それってデート？」

夕「それ以外何だと？」

大人「そんな顔すんなって。冗談だよ～何処行こうか？」

夕「うん～カラオケとかは？」

大人「いいね～たまにはストレス発散と行きますか」

夕「じゃあ決定!!」

二人はそんな会話をしながら教室に戻って午後の授業を受けるのだった。

場所は変わって学校の体育館。傑と琢磨は試合に向けて先輩たちと混ざって激しい練習をこなしていた。二人ともレギュラーになるために自主トレを重ねていたがその自主トレ以上の練習量に正直苦しかったがやつと掴んだレギュラーのチャンスが無駄にするものかと二人は文句一つ言わずに練習に励んでいた。そして練習が終わりそれぞれ帰宅する帰路で琢磨と傑は一緒に帰るのだった。

傑「はあく練習凄く大変だ」

琢磨「まあ覚悟してた事だしもう少しで試合だ。そこであればやろうじゃん!!」

傑「そうだな!!。俺達の実力を見せつけてやろう!!」

2人はそう言つてハイタッチをしてお互いに決意を見せていく。すると傑が何かを見つけたらしく琢磨にひそひそと話しかけるのだつた。

傑「あ!!あれは・・・タと大人じゃん!!」

琢磨「何っ!?!・・・あ、ホントだ。アイツらまさか・・・デート?」

傑「羨ましい!!!・・・っか俺らも彼女欲しい!!!」

琢磨「傑・・・それを言うな・・・俺らにはやるべき事があるだろ!!!」

傑「でも、でもよく大人お・・・お前・・・俺らを差し置いて・・・」

琢磨「・・・何も言うな」

二人は己の欲望を吐き捨てながら自分たちの家に帰るのだった・・・。

一方つぼみ達も平和に流れていく時間もそれぞれ過ごしたいた。

つぼみ「平和ですね」

えりか「ほんとだね」

いつき「ずっと平和が続けばいいのにね」

3人は久々にデザトリアンもダークプリキユアも攻めてこない日常を噛みしめながらゆったりとした時間を植物園で過ごしていた。午後のティータイムを楽しみながら植物園の花を見ながら羽を伸ばしていく・・・。

ゆり「でもおかしいわね?・・・1週間も何も起こさないなんて・・・」

そんな時間が流れていく中ゆりがそう口を開く。今までこんな事は

なかったために何かあるではないのかと考えてしまっただがそこにえりかが反論するようにこう言う。

えりか「もしかしたら大人さん達の仮面ライダーに怯えてるんじゃないのかな？・・・だってあのダークプリキュアとも互角なんだもん」

つぼみ「確かに凄いですもんね」

いつき「でもあの3人組・・・また来るのかな？」

ゆり「恐らくまた来るでしょうね。」

えりか「また来ても返り討ちにしちゃおうよ！！。大人さんたちもそう言ってたし」

コフレ「そうですねっ！！プリキュアとカブト達がいれば負けないですっ！！」

ポプリ「でしゅー！！」

コフレ達がそう言うと4人は笑いながら新たに決意を固めていくのだった。今度また仮面ライダーが出てきても返り討ちにしてやると思気込むのだった。

それぞれ大人達は平和の時間を過ごし疲れた体を癒すのだった。それは束の間かもしれないが束の間だからこそ後悔のない時間を過ごすのだった。

第10話「平和の時間」(後書き)

久々の休日と言う事を書かせていただきました。

次回は須藤とシャドウ隊が動き始めます

## 第11話「ザビーの執念!!!プリキュア絶体絶命!?!」

先日の戦いで大和はプリキュアとカブト達の実力を知る事が出来たため大和は非常に満足していたが須藤は不快感を募らせていた。ガタツクに邪魔をされなければサンシャインとムーンライトをこの手でZECTの手み上げとしてささげられたモノを・・・自分のプランでは今頃プリキュアのデータおよびカブトとガタツクのベルトも回収できたはず・・・だがそれを・・・

須藤はZECT本部のシャドウ隊長室で須藤は革張りの椅子に腰かけコーヒーをながらあの忌々しい出来事を思い出していた。

須藤「あのガキども!!!俺の戦いのプランを邪魔してくれるとはいい度胸だよ。この俺を怒らせたら蛇以上に性質が悪い事を教えてやる。」

須藤はコーヒーを飲み干すと隊長室を出て大和のいる総司令官室へと向かうのだった。

須藤「大和さん。失礼します。」

大和「入れ。」

須藤「大和さん。そろそろ先の戦いの傷も大部癒えてきました。ですので今度は私が率いるシャドウ隊に出撃許可を出していただけますか?・・・我々シャドウ隊の意地に掛けてプリキュア及びライダーシステムを回収してまいります。」

大和「ほう?珍しいな・・・貴様が自らシャドウ隊のみで出撃許可を請うなど・・・まあいい。よかろうやってみる須藤」

須藤「はっ!!!必ずや」

大和「・・・青二才だな。まあ俺の若い頃とそっくりだから憎めない」

須藤は敬礼をして部屋から出る。大和はそれを見ながら椅子に腰かけ須藤の姿と自分の姿を重ね合わせるようにそう言いながら大和は机のパソコンで先の戦いのデータを分析しコイツらをどう利用する

かを考えているのだった。

須藤「シャドウ隊隊員全員集合せよ!!。我々シャドウ隊でプリキユアをハントする。」  
部屋を出た須藤は無線機を取りだしシャドウ隊を召集する。狙いはプリキユア・・・プリキユアを餌にカブト達をおびき寄せてやると・・・。

場所は変わって明堂院学園のつぼみ達のクラスの教室。

つぼみ「最近砂漠の使徒が行動を起こしませんね〜どうしたんでしよう?」

えりか「さあ〜やる気なくしちゃったのかな?でもアタシ達は暇だよね〜」

つぼみ「でも平和なのはいい事です。私たちが暇なのもその証拠ですからね」

つぼみとえりかはその話をしながら学校の授業を受け普段通りの日常の時間が流れていく。そして放課後になり・・・

いつき「つぼみ、えりかあ〜!!」

えりか「いつき!!今日は部活休みなのか?」

いつき「うん。えりか達も?」

つぼみ「はい。ファッション部の買い出しに行こうと思って。」

いつき「じゃあボクも付き合おうよ。ファッション部の部員としてね」

つぼみ「ほ、ホントですか?・・・じゃ一緒に行きましょう!」

えりか「うん。」

つぼみ達が和気あいあいと話しながら徐々に3人で買い物に行こうとはしゃいでいたのだが・・・。

須藤「いいねえ〜中学生は・・・何も考えてなくてお気楽そうで〜」

つぼみ「あ、貴方は!」

えりか「あの時の!」

いつき「仮面ライダーザビー……!!」

須藤「覚えてくれたのか……まあいいよ。今日は君たちには捕まってもらうから。変身……!!」

電子音「HENDIN……!!」

須藤はライダーブレスにザビーゼクターを収めていき戦士である仮面ライダーザビーマスクドフォームへと変身する。ザビーの登場と主につばみ達の周りに何やら全身黒で統一した戦闘服とアーマーに黒い目のバイクのヘルメットの様なものを装備した兵隊の様な者たちが何十人も現れる。

つばみ「な、何ですか？貴方達は」

えりか「スナツキーみたいなもんかな？でも数多いね」

いつき「これは……一筋縄じゃいかないかもね？」

シプレ「す、凄い量ですう……!!」

コフレ「な、な、な……」

ポプリ「こ、こわいでしゅ……」

シプレたちは突然出てきたシャドウ隊のゼクトルーパーに戸惑い怯えてしまう……

ザビー「さあ、プリキュアに変身しなよ？……それとも素直についてくるかい？」

つばみ「そんなつもりはありません!!えりか、いつき!!行きますよ。」

えりか「やつしゅ……!!」

いつき「うん」

ザビーがそう挑発するがそれに言い返すと3人はプリキュアに変身するべくココロパヒュームとシャイニーパヒュームを取り出す。

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう……!!」(ですつ……!!&でしゅ……!!)」

3人「プリキュア・オープンマイハート……!!」

赤、青、金色の3色の光が発生していき3人を包んでいく。そして



光の中で3人はプリキュアのすが手に変わっていく。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花!! キュアブロッサム!!!」

マリ「海風に揺れる一輪の花!! キュアマリン!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花!! キュアサンシャイン!!!」

3人「ハートキャッチプリキュア!!!」

ザビー「あの時は不覚を取ったが今日はそうはいかないよ各小隊はブロッサムとマリを狙え。サンシャインは私が倒す。」

ゼクトルーパー「はっ!!!」

ザビー「来い・・・サンシャイン」

ザビーの指令の20人以上のゼクトルーパーがブロッサムとマリに向かいザビーはサンシャインをターゲットする様でゆっくりと歩き出す。

ブロッサム「どうやら敵は私たちを分断する作戦のようですね」

マリ「どうする? 下手に動いたら数じゃ不利だよ」

サンシャイン「此処はあえてザビーの作戦に乗りましょう。ブロッサムとマリは兵隊たちを片付ける事に集中して。私はザビーを倒す。」

ブロッサム「でもサンシャイン・・・」

サンシャイン「大丈夫 今回は負けないから!!!」

マリ「ブロッサム!!! サンシャインを信じよう。」

ブロッサム「マリ・・・はい!!!。」

コフレ「僕たちはゆりさん達をよんでくるですっ!!!」

マリ「分かった。頼んだよ!!!」

シプレ「はいですう!!!」

シプレ達はゆりや大人達を呼ぶべく猛スピードで飛び立った。ザビーはそれを分かっていたがあえて何もしなかった・・・援軍が来

る前に片付けてしまえばいいだけの事だと考えたのだった。

ザビー「援軍が来る前に片付けてあげるよ!!!。はあああっ!!!」

サンシャイン「!!!.....ふうんっ!!!」

ゼクトルーパーA「総員かかれっ!!!」

ブロッサム「マリン!!!相手は人間ですから力はセーブしながら戦いますよ!!!」

マリン「りょーかい 悪いのはあの蜂の仮面ライダーだもんね ゆりさん達が来るまで頑張ろう!!!」

ブロッサム「はい!!!」

ザビーはソレだけ言うのとサンシャインにダッシュで近づいていき先制攻撃のパンチを放つがサンシャインはそれを紙一重でガードしていく。そしてすぐにゼクトルーパーたちがブロッサム達にマガジンブレードを装備しブロッサム達を捕えるべく向っていくのだった。

ザビー「この前はあと少しの所をガタツクに邪魔をされたが今日はそうはいかないよ?.....先ずは君たち三人を手土産にしてくれる」

サンシャイン「どうしてそこまでした貴方はその組織に従うのよ?」

.....仮面ライダーザビーと言う素晴らしい力があるのに。」

ザビー「愚問だね.....答えは簡単。俺はザビーである前に組織の人間だ。組織の命令に従うのが仕事。まあ、中学生と言うガキのお前には分からないだろうけどね。」

ザビーはこの前の雪辱を晴らそうと先ずはキャストオフはせずにはパワーあるマスクドフォームでのラッシュでサンシャインを圧倒していこうとするがいつきが元々格闘経験がある問う事もありクロツクアップがなければ力は互角であるのらしい。二人は互いにパンチとキックを組み合わせていきながら一步も譲らない。

ブロッサム「ふっ!!!はあああっ!!!」

マリン「はっ！！！たりやああああっ！！」

ゼクトルーパーA「なんて奴らだ？」

ゼクトルーパーB「コレがプリキュアのパワーか・・・だが俺達シヤドウ隊の力は甘くはないぞ？各人フォーメーションデルタ！！奴らは本気を出す前に畳みかけるぞ！！！」

ゼクトルーパー「了解！！！」

シヤドウ隊のゼクトルーパーはブロッサムとマリンの動きに最初は翻弄されていたが数ではやはりシヤドウ隊の方が有利であり徐々にシヤドウ隊がペースを握り始め流れを掴んでいく。

ブロッサム「はあ、はあ・・・い、一体何人いるんですか！？」

マリン「こ、コレじゃ切りがないよ」

スナッキーの戦闘で数多い敵には慣れているが相手は人間と言う事もあり本気を出せないブロッサム達は徐々に追いつめられてしまう・・・。

場所は変わり植物園に場面は移る。その頃ゆりは植物園でココロポットを持って物思いにふけていたのだった・・・この中にあるこの種は自分が一度キュアムーンライトの変身能力を失う前に生きていたパートナーであるコロソンの思い出が詰まった大切な宝物であるが故に最近はどうしてポットを見ながらもものおもいにふけてしまっただった・・・するとそこにシプレたちが慌てた様子で向ってきた。

ゆり「どうしたの？そんなに急いで」

シプレ「た、大変ですう！！この前の蜂の仮面ライダーがブロッサム達を襲ってきたですう！！！！」

ゆり「なんですって！！！！」

コフレ「しかも今回は兵隊を連れてきていますう！！！！」

ポプリ「早くいかないと皆が・・・皆があぶないでしゅ！！！！」

ゆり「分かったわ。私もすぐに行く。シプレは私をその場所まで案内してコフレとポプリは大人達にこの事を伝えて頂戴。」

シプレ「はいですう!!!」

コフレ「了解ですっ!!!ポプリ!!!行くですよ!!!」  
ポプリ「はいでしゅ!!!!」

ゆりとシプレはブロッサム達の援護に向かいコフレ達は大人達を探  
すべく大急ぎで植物園から飛んでいくのだった。

ゆりたちが植物園を出た頃にはブロッサム達は絶体絶命のピンチに  
立たされていた。ブロッサム達はシャドウ隊のチームワークに翻弄  
され遂にはシャドウ隊に拘束されてしまいサンシャインも体力の差  
とキャストオフしたザビーのクロックアップによる攻撃で後がなく  
なっていた・・・

このままでは負けてしまうがブロッサム達が拘束されているため彼  
女たちを気遣ってしまい思う様に攻撃が出来ないのだ。

ザビー「ふふふっ・・・さあコレで終わりだ。ライダーステイン  
グ!!!!」

電子音「RIDER STING!!!!」

サンシャイン「はあ、はあ、はあ・・・くっ!!!サンフラワー・  
イージス!!!!」

ザビーがライダーステイングを発動する準備に入ると最後の抵抗を  
とサンシャインは防御に特化したサンフラワー・イージスを発動さ  
せる・・・だがザビーはそれに動揺することなく近づいていき・・・

ザビー「成程・・・守りに来たか。だがいつまで持つかな?」

面白いとばかりにザビーゼクターが装着されている左手で黄金のパ  
リアを何度も何度もパンチしていくザビー。体力が限界に近いサン  
シャインは何とか踏ん張るのだがイージスが耐えられずに5発目の  
ライダーステイングで罅が入る・・・。

サンシャイン「こ、これ以上は持たない・・・」

ザビー「終わりだよ。砕け散れえ!!!!!!」

サンシャイン「きゃあああああああああ!!!!!!!!!」

ザビーは勝ち誇る様に叫びながらトドメのライダーステイングをサンフラワー・イージスにぶつけていくととうとう限界を迎えた黄金の盾は碎け散りザビーのライダーステイングがサンシャインの身体に直撃していく。するとサンシャインはプリキュアの姿から変身する前のいつきの姿になってしまっていた。

ザビー「やった・・・これで汚名返上だ!!!」

いつき「はあ、はあ、はあ・・・ブロッサム・・・マリ・・・」  
「  
ブロッサム&マリ」いつきい!!!!!!」

いつきは何かもう一度戦おうと立ち上がるのだがライダーステイングのダメージがかなりのものだったせいもありその場に倒れこんでしまう。

ザビー「はははははは!!!!!!無様だねえ!!!!所詮はプリキュアもばらばらにしてしまえば大した事がないんだよ!!!!。初めから俺達の組織に従えばこんな目にあわなかったものを・・・馬鹿だねえ!!!」

ブロッサム「・・・馬鹿なんかじゃありません!!!」

ザビー「ん?」

マリ「いつきは・・・アタシ達を気遣って・・・本気を出せなかっただけ・・・それをアンタはあ!!!」

ゼクトルーパーC「なっ!!!・・・なんだこのパワー・・・データ以上の数値を」

ゼクトルーパー各員「うわああああつ!!!!!!」

ブロッサム&マリ「プリキュア・フルパワーダブルパンチ!!!」  
ザビー「何っ!?!?ぐわあああああ!!!!!!」

ブロッサムとマリはザビーの態度に腸が煮え繰り返りそうになっていた・・・いつきは自分たちのせいで本気をだせなかっただけ・・・それをあの男は!!!ブロッサム達はもう手加減など必要ないとフルパワーを出しシャドウ隊の拘束を解くと・・・ザビーにフルスピードで近づいていきダブルパンチをザビーの腹に直撃さ

せる・・・ザビーはガードが間に合わずにそのまま飛ばされてしま  
う。

ザビー「ほう?・・・貴様ら二人も中々やるな?・・・だが貴  
様らも片付けてくれるわあ!!!」

?「それはどうかしら?」

?「今度は・・・アンタが痛い目を見る番だ!!!」

?「俺達がいる事・・・忘れんな!!!」

ザビー「!!!?・・・やっときたか?キュアムーンライト・・・カ  
ブト!!!・・・ガタツク!!!」

大人「皆!!!待たせたな。」

琢磨「遅くなつてすまない。」

ブロッサム「皆さん!!!!・・・来てくれたんですね。」  
マリン「遅いよ!!!!・・・」

ようやく登場した大人達。先ずは力尽きて気絶しているいつきを琢  
磨が安全な場所へと移す。

大人「女の子をあそこまで傷つけるなんて・・・アンタ許さない  
よ?」

琢磨「・・・この仇は必ず取らせてもらおう!!!」

ゆり「二人とも・・・いくわよ!!!」

大人&琢磨「おう!!!」

ゆりはココロポットを大人と琢磨はライダーベルトを取り出して  
いきそれぞれ変身の準備をしていく。

ゆり「プリキュア・オーブンマイハート!!!」

大人&琢磨「変身!!!」

電子音「HENSIN!!!」

大人&琢磨「キャストオフ!!!」

電子音「CAST OFF!!! CHANGE BEETLE  
!!! (STAG BEETLE!!!)」

ゆりが銀色の光に包まれてプリキュアの姿に変身し大人達もライダ

ーベルトにカブトゼクターとガタックゼクターを装填していきマスキドフォームの変身と同時にキヤストオフしてライダーフォームへとフォームチェンジする。

ムーンライト「月光に冴える一輪の花！！キュアムーンライト！！」

カブト「光を支配せし太陽の神！！仮面ライダーカブト！！」

ガタック「戦いを支配せし戦いの神！！仮面ライダーガタック！！」

ザビー「ふふふっ……はははははははは！！！！まとめて来るがいい！！！！貴様らを全員ZECTの人柱にしてくれる！！！！」

カブト「そんな事……させるかよ！！！！」

ガタック「いつきの受けた悔しさや痛みをアンタに3倍にして返してやる！！！！」

ムーンライト「プリキュアを甘く見た事……そして私達を本気で怒らせた事後悔させてあげる……ブロッサム、マリン行くわよ」

ブロッサム「はい！！！！」

マリン「やるっしゅ！！！！」

シプレ「皆……頑張ってくださいですう！！！！」

ポプリ「いつきの仇をとってくださいっしゅ！！！！」

カブト達はザビー達シャドウ隊に立ち向かっていく……傷つけられた仲間の為に……そしていつきをか解放しながらそシプレたちは見守りながらも彼らの勝利の祈るしかなかったのだった。

**第11話「ザビーの執念!!!プリキュア絶体絶命!?!」(後書き)**

今回・・・ダークカブト登場させたけど話しの展開の関係で無理だった・・・orz

次回・・・シャドウ隊とカブト達がぶつかり合います。



第12話「敵か味方か！？地獄兄弟登場！！」（前書き）

前回までのあらすじ

ザビーの執念の攻撃によりサンシャインは敗れ去ってしまった。ブロッサム達はサンシャインの仇を取るべく合流したゆり達と共にザビーが率いるシャドウ隊に挑むのだった。

## 第12話「敵か味方か!? 地獄兄弟登場!」

ザビー「A小隊はカブトをB小隊、C小隊はブロッサムとマリンを狙え!! ガタツクとムーンライトは私がやる。」

ゼクトルーパー各員「了解!!」

ブロッサム「また分断するつもりですね。どうします?」

マリン「アイツ……」

ムーンライト「お望み通りにさせてあげようじゃない? でも何度も同じ手が効かない事を教えてあげよう。」

ガタツク「俺もいるんだ。実力は五部だよ。」

カブト「ガタツク頼んだぞ。相手は執念に燃えてるからな……何をするかわからない」

ガタツク「あああ!!」

カブト「よし……皆行くぞっ!!」

「またもや自分達を分断させようとするザビーだが今度は同じ手には乗らないとムーンライトとガタツクが狙いならば御望み通りにしてやるとカブト達はそれぞれ向っていく。」

カブト「アンタらエリート部隊みただけどサンシャインの仇は必ず取らせてもらうぞ!!」

ゼクトルーパーA「ちっ!!……コレがカブトの力……何としても我々が手に入れなくては」

ゼクトルーパーB「相手はガキだ!! 人海戦術で行くぞお!!」

「ゼクトルーパーのマシガンブレードで攻撃して来るのだがライダーフォームのスピードを活かして攻撃をよけながら着実にゼクトルーパーを一人ずつ気絶させていく。人間であるため殺すほどの攻撃は出来ないが戦闘不能にしてしまえばいいだけの事だとカブトは素手での格闘戦を駆使していく。」

ブロッサム「はあああつ！！！！さつきは手加減してしまいました  
もう容赦はしません！！！！」

マリ「うりやあああつ！！！！さつきとアンタ達を片付けてザ  
ビーに一発パンチを食らわせるんだからあ！！！！」

ゼクトルーパーC「な、何だコイツら・・・何処にこれ程の力が  
あ！？」

ゼクトルーパーD「はあ、はあ・・・コイツら化け物か！？」

ブロッサム「マリ！とつておきのあれを行いますよ！！！！」

マリ「ガッテン承知の助！！！！」

ブロッサム&マリ「プリキュア・大爆発う！！！！」

ゼクトルーパー「ぐわあああああつ！！！！！！！！！！？？？  
？」

ブロッサム達は今度は必ず足手まといになるまいと意気込みながら  
ゼクトルーパーをちぎっては投げの攻撃を繰り返していく。データ  
を頼りにしていたゼクトルーパー達はブロッサム達の気迫に押され  
始めてしまい更にブロッサム達の合体技をともに受けてしまう。

ザビー「ガタツクこの前は邪魔してくれたな？今度こそ貴様ら全員  
捕えてやる・・・覚悟しろ！！！！」

ガタツク「・・・そんな事の為にいつきをあんな目にあわせた  
のか？」

ザビー「ああ、貴様らをおびき寄せる餌にしようと考えてたけど？  
・・・それがどうかしたか？」

ムーンライト「・・・貴方そこまでして従う理由はなんなのよ？  
ザビー「・・・またその質問か只の仕事。それだけだよ？」

ムーンライト「ガタツク・・・本気で行くわよ？」

ガタツク「了解」

ザビー「来いよ・・・」

ムーンライトとガタツクはザビーの態度に何か吹っ切れたかのよ  
うにムーンタクトとガタツクダブルカリバーを構えていく。そんな

二人をさらにあおる様にザビーは指をクイクイと動かしていく。  
ムーンライト「私たちを怒らせたらどうなるか……一度体験した方が良いみたいね。」  
ガタツク「アンタだけは……許せない!!!」  
ザビー「ふん……貴様らごときに俺は倒せんぞ!!!」  
前回の戦いは冷静さを削がれていたために全力が出せなかったザビーだったが今はサンシャインを倒した余裕があるのかスマートな戦いを崩さずガタツク達の攻撃を着実に避けていきながらも得意のヒット&アウェイの攻撃でムーンライトとガタツクの二人相手に互角な戦いを展開していくのだった……

カプト「くっ!!!コイツら……何人いるんだ?」

ゼクトルーパー「各員遠距離での攻撃でカプトを集中砲火せよ!!!」

カプト「しまった!!!……うわあああっ!!!」

ブロッサム「カプト!!!」

マリリン「大丈夫?」

カプト「ああ……大丈夫だ」

シャドウ隊Aチームはカプトに対しては接近戦は不利と判断して装備しているマガジンブレードのガンモードでカプトに向けて集中砲火する。するとチリも積もれば山となる理論で一つ一つの銃弾もカプトに対するダメージは何十人単位のものであり流石のカプトもその集中砲火は大ダメージを受けてしまう。そこにB小隊C小隊を片付けたブロッサム達が駆け寄り集中砲火を受けたカプトに肩を貸す。シャドウ隊A小隊長「カプト……追いつめたぞ……」  
カプト「くっ……」

A小隊がカプトを拘束しようと近づいてくるがそこにブロッサム達が立ちはだかる

ブロッサム「そうはさせません!!!カプトは私たちが守ります!!!」  
マリリン「カプト!!!今度はアタシ達が助ける番だよ 一緒に戦おう」

カブト「二人とも……」  
シヤドウ隊A小隊長「ふん……無駄な足掻きを各員拡散してカブト達を追い詰める!!」  
ゼクトルーパー「了解!!!」  
カブトに加えてブロッサムとマリンが加わるが問題ないとばかりに遠距離戦法で再び集中砲火を浴びせようとしていく。

ムーンライト「ふんっ!!!はあああああっ!!!」  
ガタツク「うりやあああっ!!!たあああああっ!!!」  
ザビー「ふんっ、はああっ!!!……おおおおおっ!!!」  
その頃ムーンライト達とザビーは凄まじい攻防を繰り広げていた。  
ザビーがクロックアップをすればガタツクもクロックアップして對抗していきながら戦いの流れを五部に持ちこんでいくのだが元のポテンシャルはやはりザビーが上らしく互角の流れが変わらないのだった。

ザビー「どうした？俺が許せないんじゃないのか？」  
ガタツク「くっ!!!」  
ムーンライト「はあ、はあ、はあ……」  
ガタツクとムーンライトは体力面で差が出てきたのかザビーの挑発に言い返すことが出来なかった。

ザビー「そろそろ決めてやるよ!!!ライダーステイング!!!」  
電子音「RIDER STING!!!」  
ザビーがライダーステイングを発動させると二人は身構える……標的は誰だ?……二人はいつでも応戦できるようにするのだがザビーはムーンライトを狙おうと飛びあがる。ムーンライトはそれをガードしようとムーンライトリフレクションを発動しようとしたのだが突如ザビーの姿が消える……そうクロックアップを発動したのだ!!!。気が付くとムーンライトの後ろにザビーゼクターの針が

合ったが・・・

ガタツク「危ない!!!ぐああああつ!!!!!!」

ガタツクが間一髪でムーンライトの前に立ちライダーステイニングを受け止める・・・だが大ダメージに耐えきれなかったのかガタツクはその場に膝をついてしまう・・・

ムーンライト「ガタツク!!!大丈夫?」

ガタツク「・・・な、なんとか・・・」

ザビー「さあ、次はお前に当てるよ?ムーンライト・・・」

ザビーゼクターを向けながらムーンライトにそう言うザビー。次こそは決めてやると勝ち誇った態度を見せていきながら近づいていくがそこに突如・・・

何かを削る音「ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリ!!!!!

!!!!!!」

その場にいた全員「!!!!??????」

その音に戦闘をしていたカブト達は一斉にその音がする方向を見る。するとそこに二人の男がいて一人は座りながらカーボーイブーツの踵についている拍車を地面にガリガリと擦りつけていて火花を散らしていてもう一人はその男の近くで立つてその場にいる全員を睨んでいた。その男達の身形はぼろぼろの黒い革製のコートを身に纏った姿でいかにも怪しい雰囲気を漂わせている。

二人は凍りついた空気等気にせずにそのまま近づいていく・・・。

ザビー「あ、アレは・・・まさか!!!?」

ゼクトルーパーA「や、矢車さん!?」

ゼクトルーパーB「か、影山さん!!!」

カブト「新手か?」

すると矢車と影山と呼ばれる男たちは少しずつ近づいていく。するとゼクトルーパーが二人を捕えようとマシンガンブレードを装備して向っていくが二人はいとも簡単に向ってきたゼクトルーパーを蹴散らしていく・・・再び全員そのあり様に固まるのだった。

ザビー「な、や、矢車！！影山！！貴様らパーフェクト・ハーモニーはどうした？」

矢車「……ふん、もうパーフェクトもハーモニーも無いんだよ……」

影山「どうせ俺達は不協和音……」

矢車「お前はいいよなあ、仮面ライダーザビー……須藤健一。元は一般兵卒それが今は……」

影山「シャドウ隊長……全くかつこいいよねえ」

矢車「だがそれは元々は俺達がいた地位……」

影山「それをお前は軽々と奪った……」

二人はなにやら怨みのこもった暗い発言を言うと二人同士に付けていたベルトでありゼクトバツクルを開くそれに合わせたかのように二人の手にバツタ型のゼクターであるホツパーゼクターが飛んでくる。

矢車&影山「変身！！」

電子音「HENSIN！！」

電子音「CHANGE！！KICK HOPPER！！」

電子音「CHANGE！！PUNCH HOPPER！！」

二人はそれぞれホツパーゼクターを矢車は左から影山は右からゼクトベルトにセットしていくするとそれぞれバツタの姿をした仮面ライダーキックホツパーと仮面ライダーパンチホツパーに変身していく。

ザビー「！！！！」

5人「仮面ライダー？」

キックホツパー「はあ……行くぜ相棒」

パンチホツパー「兄貴となら何処までも」

変身した二人は大きく息を吐きながらゆっくりと近づいていく……ザビーやカブト達はわけが分からないが臨戦態勢に入っていた。

**第12話「敵か味方か！？地獄兄弟登場！！」（後書き）**

今回は前々から予告してました地獄兄弟登場です！！！！。

この二人はカブトのライダーでも一番好きですね。

さて次回は大乱闘が起こります。



### 第13話「初敗北」(前書き)

前回までのあらすじ

ザビーの策に翻弄されるカブト達。

しかし突如そこに謎の矢車と影山という二人組の男が現れる。

そしてなんとその二人も仮面ライダーだったのだ!!

### 第13話「初敗北」

シプレ「また敵が出てきたですか？」

コフレ「で、でもあ、あの二人・・ザビーの仲間にはみえないですっ！！」

ポプリ「こ、怖いでしゅう！！」

新たなライダーの出現にシプレは不安を募らせてしまうが自分たちには何もできない・・自分達の無力さを呪う様に歯がゆい思いをするしかできなかった・・そこに気絶していたいつきが目を覚めます。

いつき「ん・・ボクは一体・・」

ポプリ「いちゆき〜！！！！大丈夫でしゅ？」

いつき「ポプリ・・！！！！あのライダーは敵なのかい！？」

コフレ「分からないですっ・・でも凄まじい闘志を感じます」

いつき「くっ・・僕も戦えれば」

ポプリ「無理しちゃだめでしゅ！！！！此処はブロッサム達に任せるでしゅ！！！」

いつき「でも・・」

いつきはもう一度変身しようとシャイニーパヒュームを取り出すがポプリが変身を静止するようにいつきにしがみついて変身を止める・・いつきは何もできない自分が憎かったが今変身しても足手まといになるだけなのは事実でありポプリの顔を見ながら素直にポプリの言う事に従うしかなかった。

変身した二人はゆっくりと近づいていきキックホッパーはザビーの方にパンチホッパーはブロッサム達の方に向かっていくのだった。

キックホッパー「今誰か俺を笑ったか？・・あ？」

ザビー「矢車・・堕ちる所まで堕ちたか」

ガタック「何なんだこの人」

ムーンライト「今は応戦するしかないみたいね」

キックホッパーは低く唸る様にそう言いながらザビーとガタックとムーンライトにケリによるラッシュを放っていく。3人も相手だと言うのにキックホッパーは素早い身のこなしでザビー達3人に容赦のないケリだけでの猛攻で追いつめていく。

ガタック「なっ、なんて強さだ」

ムーンライト「タダ者じゃない・・・」

ザビー「矢車！！ZECTの敵はあの二人だけだ・・・殺れ！！」

キックホッパー「須藤・・・お前も一度挫折を味わうといい」

ザビーは元同僚の矢車を説得しZECTの為にガタックとムーンライトを攻撃するように指示するのだがキックホッパーはそれが気に入らなかつたのかザビーを睨んでいくとホッパーゼクターに手を伸ばしていき・・・。

キックホッパー「・・・ライダージャンプ」

電子音「RIDER JUMP!!」

ホッパーゼクターの脚の部分を左に倒すとキックホッパーのアンカージャッキが装備された左足に光が集まる。そしてキックホッパーはバツタが飛ぶ時のごとく飛びあがる。その高さはカブトやガタックが普通にジャンプするときと違い凄まじい勢いで地面の土が舞い上がるほどだった。

キックホッパー「ライダーキック!!!」

電子音「RIDER KICK!!!」

そしてジャンプで空中にいる状態でキックホッパーはホッパーゼクターの脚を元に戻す。すると左足に光が集まりそのままザビーに向かってライダーキックを放つ。

ザビー「なっ!!?ぐおおあああああっ!!!!!!??」

ライダーキックを受けたザビーはその場から凄まじい勢いで吹き飛ばされてしまう。ダメージに耐えきれなかつたのかザビーの変身は解かれてしまい地面に身体が叩きつけられる頃には変身が解除され

てしまう。須藤は矢車を睨みながら何とか立ち上がる。

須藤「や、矢車・・・貴様っ・・・くっ!!!・・・退却だ!!!全員本部に戻るぞ!!!」

ゼクトルーパー各員「・・・はあ、はあ・・・はあ!!!」

ガタツク「!!!・・・待てえ!!!逃がさねえぞ!!!」

深手を負った須藤は此処は不利と判断して退却を促すがそれをガタツクがさせるものかと須藤のもとに走ろうとするのだがそこにキックホッパーが立ちはだかり・・・

キックホッパー「お前はいいよなあ・・・戦いの神の力が使えて・・・どうせ俺なんか・・・あああああっ!!!!!!!」

ガタツク「ちょ、邪魔だ!!!どけえ!!!・・・ちっ!!!!」

キックホッパー「はっ!!!うらあああ!!!」

ムーンライト「・・・逃げられちゃうけど仕方ないわね。」

キックホッパーは今度はガタツクにターゲットを絞ったのがガタツクにもう攻撃を仕掛ける。ムーンライトもガタツクを援護しようとしてキックホッパーの猛攻に割り込んでいく。その隙に須藤達シャドウ隊はその場から逃げ出すのだった。

その頃ブロッサム達は・・・

カブト「アンタ一体何者だ?ザビーの仲間か?」

パンチホッパー「・・・違うよ。俺達は闇の住人・・・一緒に地獄に落ちようよ。」

ブロッサム「な、何ですかこの人」

マリン「地獄って意味分かんないし・・・っーか怖い!!!」

カブト「言ってる・・・と言うかイっちゃてる?」

パンチホッパーは狂気を伺わせるような事を言いながらブロッサム達に向かっていく。パンチホッパーもかなりの実力者でありクロックアップなしでカブト達を翻弄していく・・・カブト達は何とか反撃しようとするのだがシャドウ隊で体力を消耗した事もあり思う様な反撃が出来ない・・・

パンチホッパー「どうしたんだい？3人なのに全然弱いじゃないか」  
カブト「うるさい！！・・・このお！！！！！」

パンチホッパー「おっと」

ブロッサム&マリリン「はあああああつ！！！！！」

パンチホッパー「ほっ！！ほらあ！！！」

ブロッサム&マリリン「きゃあああああつ！！！！！」

ブロッサムとマリリンは全力のダブルパンチをパンチホッパーに見舞わせてやろうとしたがパンチホッパーは両腕で受け止めてしまうとそのまま二人を薙ぎ払う。二人はそのまま勢いよく地面に叩きつけられてしまう。

カブト「ブロッサム！！マリリン！！・・・貴様あ！！！！！」

パンチホッパー「怪我してやる・・・カブトの太陽の力・・・」

カブト「！？・・・ぐうっ！！！！！」

カブトはブロッサムとマリリンの仇討をとパンチホッパーにクナイガ  
ンで斬りかかるがそれもパンチホッパーに避けられてしまつて意味  
がなくパンチホッパーの得意のパンチの嵐を受けてしまうと反撃す  
らできなくなつてしまう・・・ブロッサムとマリリンも何とか立ち上  
がるがパンチホッパーはもう飽きたと言うような仕草で3人を見下  
していき・・・

パンチホッパー「教えてあげるよ・・・最悪は最高だつてことを・・・

・ライダージャンプ」

電子音「RIDER JUMP！！！！！」

パンチホッパーは粗方3人を攻め上げて切りがいいと思つたのかホ  
ッパーゼクターの脚を右側に倒していくとアンカージャッキが装備  
されている右腕に光が集まる。そして勢いよくジャンプしていく。

パンチホッパー「ライダーパンチ！！！！！」

電子音「RIDER PUNCH！！！！！」

ジャンプしたパンチホッパーはそのまま右手に溜めた力を一気に叩  
きつけるように拳を放つ！！狙いはブロッサムであったが・・・  
カブト「ブロッサム、危ない！！！！ぐうううううううううう！！！！！」

！！！！！！！！！！

ブロッサム&マリオン「カブトお！！！！！！！！！！」

ブロッサムにパンチホッパールのライダーパンチが炸裂する前にカブトが前に立ちふさがりブロッサムの代わりにライダーパンチを受ける。ライダーパンチを受けたカブトは勢いよく地面に身体を叩きつけられてしまうが何とか立ち上がる……

カブト「はあ、はあ……あ……」

ブロッサム「カブトお！！！！」

マリオン「しっかりとっえてえ！！！！カブトお！！！！」

だが限界を迎えてしまいその場にカブトは倒れてしまう……。ブロッサム達は駆け寄りカブトを介抱するように肩を貸すのだがカブトは気絶してしまったのか応答がない……

パンチホッパー「コレが闇だよ……ふふっ……ははははははははは！！！！！！！！！！」

パンチホッパーはそれだけ言うときックホッパーの方へと歩いていききックホッパーの方へと向かう。

その頃キックホッパーはガタツクとムーンライトをあと一步の所まで追い詰めていた……二人ともキックホッパーの巧みな格闘センスと隙のないケリ主体の戦術にはまってしまい反撃の糸口がつかめないまま体力だけ奪われてしまうというありさまだった……

キックホッパー「ほらあ！！どうした？戦いの神い！？」

ガタツク「くっ！！」

ムーンライト「ガタツク落ちついて……まだ反撃の糸口は必ずあるはずよ。」

ガタツク「ああ……諦めない。絶対に！！！！」

キックホッパー「お前らはいいいよなあ〜励まし合える仲間がいて……俺もぜひとも励ましてほしいもんだ……。どうせ俺なんか……。うおおおおおお！！！！！！！！！！」

どうやら今の行動がキックホッパーの触れてはいけないものに触れてしまったらしく2には更にキックホッパーの荒々しいケリのラッ

シユを二人は諦めずに応戦していくのだがガタツクはザビーのライダーステイングのダメージが響いていてキックホッパーの攻撃に上手く対応できないでいたのだった……

ガタツク「はあ、はあ、はあ……」

キックホッパー「はあ……歯応えのない奴らだな……もういいそろそろ終わりだ。」

ムーンライト「まだまだよ……私たちは諦めない!!!」

キックホッパー「ふん……ライダージャンプ」

電子音「RIDER JUMP!!!」

キックホッパー「ライダーキック!!!」

電子音「RIDER KICK!!!」

ガタツク「同じ手は食うか!!!」

キックホッパー「どうかな？はあああつ!!!」

ガタツク「なっ!?……またライダーキックが発動した?うわあああああつ!!!??」

粗方2人と闘う事にあきたキックホッパーはコレで終わらせてやるとライダーキックをガタツクに放っていく。ガタツクは腕で防御しようとして腕を組んでいきキックホッパーのライダーキックを防御に成功するのだがなんとキックホッパーの左足に装備されているアンカージャッキが稼働してそのままガタツクを踏み台にしていくようにまたジャンプしていくとまたもやライダーキックがガタツクを襲う。

ムーンライト「ガタツク!!!……大丈夫!?……はっ!?……」

彼は何処に?まさか……

キックホッパー「上だ!!!」

ムーンライト「しまっ、きゃあああああつ!!!」

ガタツクがライダーキックを受けてしまうとムーンライトはガタツクを介抱しようと近づいていくのだがその場にキックホッパーがいない事に気が付きあたりを見回すが何処にも姿見えない……

もしかと思いき空を見るとすぐそこにはキックホッパーが自分に向かってライダークックを放っている姿がありムーンライトは防御が間

に合わずモロにライダーキックを受けてしまう……。その凄まじいダメージにムーンライトは変身が解けてしまいゆりの姿に戻るのがあった。

矢車「はあゝ……………」

影山「兄貴……………」

矢車「……………ふっ……………そろそろ行くか相棒……………俺達を受け入れてくれる光を探しに……………」

影山「うん……………行こう兄貴」

ブロッサム「待つてくださいー！！！」

マリン「アンタ達……………何者よ!？」

矢車「俺達は地獄の住人……………」

影山「地獄の兄弟……………」

矢車「俺達に関わると怪我をするぞ」

影山「……………じゃあゝね」

マリン「待ちなさいよ!!!!」

ブロッサム「マリン……………今はカブト達を……………」

マリン「でも……………」

ブロッサム「今彼らを追つても二人だけでは振り返ちにあうだけです。とにかく全員一度植物園に」

マリン「うん……………分かった」

矢車達は変身を解くとため息をつき暴れたことに満足したのかその場から立ち去ろうとしたがブロッサム達が静止する。矢車達は二人を睨みながら自分達を”地獄の兄弟”や”地獄の住人”と名乗りそのまま後ろを向いて歩きだしその場から消えるのだった。……………マリンは二人を追いかけようとしたのだがそれをブロッサムが静止して今は全員安全な場所に移動するのが先だと諭す。マリンも納得したのかしぶしぶ頷く。



大人「・・・こ、此処は？」

薫子「気がついたのね」

大人「薫子さん？・・・俺は・・・そうだ！！新しい仮面ライダーが・・・ぐうっ！！」

薫子「無理しないで。傷がかなり深いから」

大人「そうだ・・・プロツ・・・あ、いや・・・つぼみ達は？」

薫子「つぼみとえりかちゃんの下にいるわ・・・。いつきちゃんや琢磨君、ゆりちゃんはそれぞれ別室で休んでる。」

大人「そうか・・・よかった。」

大人は気が付くと何処かの部屋のベッドの上にいた・・・どうやら此処は植物園の薫子の私室であるよう薫子がそばでいかにも心配していたという顔で大人を見つめていた。大人は先程までの戦いを思い出したのか勢いよくかららを起こすのだがそれと同時に激痛が身体を走る。パンチホッパーのライダーを受けた場所は相当傷が深かったようだ・・・

しかし何故俺は此処にいるんだ？と思いつつながらもつぼみ達の事を聞く大人。薫子が全員植物園に居ると言うのと安心したのか大人はもう一度ベットに横になるのだった。

薫子「大人君・・・何が合ったか説明してとちょうだい。」

大人「あ・・・その・・・あの」

大人は薫子の言葉に動揺してしまい何も言う事が出来なくなってしまう。今までの事を離せばつぼみ達がプリキュアである事も離す必要があるし大体信じてもらえるはずがない。必死に言い訳を考えると薫子が大人の思考を察したかのように口を開く。

薫子「つぼみ達がプリキュアなのは私も知ってるわ。私も50年前はプリキュアだったから」

大人「え・・・薫子さんが？そうか・・・だからつぼみも。分かりました全て話します。俺と琢磨が手に入れた力と・・・新しい敵について」

薫子がつぼみ達がプリキュアであると言う事を知っているなら自分

たちの力の事も信じてくれるだろうと大人は思い今までのいきさをすべて説明した。自分が手に入れたカブトの力、新しい敵の存在、そして今日起きた事も洗いざらい全て・・・

薰子「仮面ライダー・・・そんな力があつたなんて」

大人「でも本当なんです。俺も最初は信じられなかったけど・・・なんていうかとにかくものすごい力です。人が造つたとは思えないくらいの」

薰子「・・・とても信じられないわ普通の人なら」

大人「ええ。」

大人も薰子の言い分には同感だった。これ程のモノが幾つも造られているなんて考えたら恐ろしいの一言だ。もしかしたらまだ敵となる存在がいるかもしれない・・・

薰子「とにかく今日は此処に泊って行きなさい。その身体じゃどの道動けないでしょうし」

大人「はい。すみません・・・俺が不甲斐ないばかりに。」

薰子「いいえ。誰もが最初は通る道よ。でもつぼみも大人君も戦士として戦う事になるなんて・・・これからは私にも何かあれば言つてちょうだい。出来る限りのサポートはするから。」

大人「はい。・・・薰子さん・・・俺も頑張ります。つぼみ達の足手まといにならないように。」

突如現れた地獄の兄弟によつて初の敗北を味わつた大人・・・だがそれは只の敗北ではなかった・・・戦士としてのプライド、勇気、決意を固めさせる敗北だった。

つぼみ達も同じ敗北を味わい成長したのなら自分にもできるはずだと大人は決意を胸に固めていくのだった。

### 第13話「初敗北」(後書き)

初敗北!!・・・コレは地獄兄弟結成時のオマージュでもあり大人にとつてのターニングポイントである事を意識して書いてみました。

次回は大人達が特訓します!!!

第14話「特訓開始！！ブロッサムVSカブト」（前書き）

前回までのあらすじ

地獄兄弟の矢車と影山に完膚なきまで負かされてしまった大人達。

己の無力さを嘆く大人だがもう二度と負けるわけにはいかないという強い思いを心に誓う大人だった。

## 第14話「特訓開始！！ブロッサムVSカプト」

地獄兄弟の襲撃を受けてから数日経過した頃には大人達はすっかり身体も心も回復した大人は全員を植物園にへと呼び出すのだった。前回は命は奪われなかったがそれは運が良かっただけ・・・次はもしかしたら殺されるかもしれないと危機感を募らせての事だった。

大人「みんな・・・来てくれたか。」

つぼみ「大人さん・・・今日はどうしたんです？」

えりか「急に全員集合なんて」

いつき「・・・」

ゆり「この前の戦いの事？」

琢磨「おい・・・なんか言えよ」

つぼみ達は植物園に来て早々大人にどうしたんだと問いたただすのだから大人は何やら真剣な目をして黙っていた・・・そして5人がどうしたんだらうと大人を見始めた頃ようやく大人が口を開く。

大人「・・・この前の戦いで感じた事がある。・・・このまま敵が増えていったら今の俺たちじゃ勝てない・・・この前のあの地獄兄弟と名乗る二人組はカプトの力もプリキュアの力も寄せつけなかった。というよりもレベルが違ってた。アイツらは俺達に足りないものを持ってたよ」

琢磨「俺達に足りないもの？」

大人「・・・格闘センス・・・いや格闘経験と言う方が適切かな？ザビーやあの二人は相当鍛えているから俺達を追い詰められるほどのスキルとポテンシャルがある。・・・だけど俺達にはそのスキルもポテンシャルも足りない・・・俺思ったんだよ。このままじゃ何も守れないって・・・」

大人は悔しさで拳を作りながら皆にそう言った・・・今の俺達じゃ

残念だがアイツらから守ることは難しい……しかしつぼみとえりかは大人に反ろうするように口を開き……。

つぼみ「そ、そんなことないですよ！！私たちが力を合わせれば……」

えりか「そうだよ！！力さえ合わせればザビーもあの変な二人組も……」

大人「簡単に言うな……力を合わせてもこの前の戦いである二人に負けたじゃんかよ！！力を合わせるだけじゃ……アイツらには……勝てないんだよ。」

えりか「そ、それは……」

大人「ごめん……だけど現実的に考えると今の俺達には難しいんだよ？わかるだろ？」

つぼみ「……はい。」

自分たちが力を合わせれば敵など怖くはないと場を盛り上げようとする二人に大人はそう怒鳴って黙らせる……二人はバツが悪そうに黙りこんでしまう……二人の気持ちを察した大人は二人に謝りながら自分の考えを素直に言う。そこでまた大人は前を向いて全員に話しかける。

大人「だから……これからは全員の時間が合う時に特訓をしようと思うんだ。少しでも俺達のレベルが上がればマシになるはずだしゆり「成程……それでわざわざ私達を此処に呼び出したのね」

大人「ああ」

いつき「でも特訓で何を？」

琢磨「どうするつもりなんだ？」

大人「一番いいのが実践に近い形がいいと思うんだ。」

つぼみ「実践って……でも場所とかは？」

大人「それなんだよなあ……それが問題なんだよ……」

ソレだけが問題だった。何処かでやるにしてもカブトの力を誰かに見られたりザビー達の奇襲を受ける可能性もあるため簡単には行えない……何処かいい場所はないかと考えているとシプレ達が薰子

を連れてきていたのか薫子が口を開く。

薫子「プリキュアパレスはどう？あそこは此処とは別空間だから。」  
コフレ「そうです！！あそこなら誰にも邪魔されないしザビー達が来る事もないですっ！！」

つぼみ「成程！！確かにあそこは特訓に適してるかも知れませんね」  
大人「プリキュアパレス？」

ゆり「プリキュア達が試練を受けるために集う聖なる城・・・あそこなら私たちが行けないから都合がいいわね」

琢磨「そんな場所があるの？・・・なら今からそこに言っって早速特訓しね？」

大人「そうだな・・・皆時間ある？」

ゆり「ええ。」

つぼみ「はい。」

えりか「モチ」

いつき「うん」

大人「よし・・・じゃそこへ行こうか。案内してくれ。」

ポプリ「はいでしゅ！！」

大人達は全員一致でプリキュアパレスへと唯一の道筋である植物園の大きな樹木へと向かう。そこには木と扉が融合したような造りであり扉の真ん中には何かを入れるくぼみが合った。

大人「これは・・・あの不思議扉か？」

琢磨「俺達が小さい頃そう読んでた樹木」

大人と琢磨は驚きが隠せなかった・・・小さい頃遊び場に使っていた木であり昔から謎めいたいたもの・・・まさかコレがプリキュアパレスの入り口とは・・・

ポプリ「扉の種！！セットでしゅ！！」

ポプリが金色の心の種を扉のくぼみにセットすると扉が開く。大人達は扉の中に進んでいくとソコはメルヘンの話に出てくるような天空に聳え立つ強大な城であった。

大人「此処が・・・プリキュアパレス」

琢磨「マジかよ・・・こんな」

大人と琢磨はその光景に驚きが隠せなかった・・・というよりも信じられなかったと言う方が適切であろう・・・大人達6人と薫子とシプレ達はそのまま城の内部に進んでいくとそこには大ホールがあった。ここなら思う存分特訓が出来る・・・

薫子「ここなら思う存分特訓できるでしょ？」

大人「確かに・・・コレだけ広いなら激しく出来るかも」

つぼみ「そうですね。」

琢磨「じゃあ早速・・・」

えりか「始めましょうか？」

いつき「うん」

ゆり「・・・」

6人はそれぞれ変身するため変身アイテムを取りだしていき準備が終わると全員そろって変身しようとタイミングを計るのだった。

シプレたち「プリキュアの種いくですう!!!（ですっ&でしゅ!!!）」

4人「プリキュア・オープンマイハート!!!」

4人は赤、青、金色、銀色の光に包まれていきプリキュアの姿に変わる。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花!!!キュア・ブロッサム!!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花!!!キュア・マリン!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花!!!キュア・サンシャイン!

!!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花!!!キュア・ムーンライト!

!!!」

4人「ハートキャッチ・プリキュア!!!」

大人&琢磨「変身!!!」

電子音「HENSIN!!!」

6人は変身が終わると一度集まり先ずは特訓するかを話し合うのだった。



カブト「さてと・・・組み合わせはどうでしょうか？」

ガタツク「やつぱ全員一回ずつやった方がいいんじゃないか？先ずはライダーVSプリキュアみたいな感じで・・・」

ブロッサム「そうですね。でもライダーは2人ですけど大丈夫ですかね？」

カブト「問題ないんじゃないの？休憩すれば・・・じゃ手っ取り早くブロッサムと俺、ガタツクとマリンの順で始めるか？」

マリン「・・・色で分けたでしょ？」

カブト「うん。何か問題ある？」

ガタツク「シンプル・・・シンプルすぎるぞカブト!!」

カブト「・・・じゃやるか？ブロッサム」

ブロッサム「は、はい!!」

カブト「言っておくが・・・手加減はしないからな？・・・お前も本気で来いよ」

ブロッサム「はい・・・私も全力でお相手します!!」

先ずはカブトとブロッサムが組手をすると2人は前に出る。

カブト「ルールは最初の10分間はキャストオフ無し。決着はお互いの必殺技のぶつかり合いかギブアップのみ・・・こんな感じでいいかな？」

ブロッサム「はい。じゃあ行きますよ!!」

カブト「来い!!」

カブトとブロッサムは身構えながらジリジリと睨み合う。

カブト「はっ!!」

ブロッサム「遠距離で来る気ですね？・・・なら私もブロッサム・シャワー!!」

そんな沈黙の中先ずはカブトが動いた。ゼクトクナイガンのガンモードでブロッサムに対して遠距離攻撃を仕掛けた・・・だがブロッサムはソレをブロッサム・シャワーで相殺する。

カブト「やるな？・・・なら近距離で行くまでだ!!」

先ずは小手調べとクナイガンを連射したが見事それを相殺する力を見せたブロッサムにカブトもどこか嬉しそうにそう言うつと一気に距離を縮めて近づいていき近距離線の格闘戦に持ち込んでいくがブロッサムもカブトと互角の力で応戦する。

ブロッサム「カブトもまだそれほど戦いに出てないのにやりますね？でも・・・経験は私の方が上です！！ブロッサム・インパクト！！！！」

カブト「なっ！？・・・うわあああっ！！！！」

突如ブロッサムの拳がピンク色に光るとエネルギーを纏った拳がカブトの身体に叩きつけられるとカブトはホールの壁に叩きつけられてしまう。だがマスクドフォームの鎧はかなりの防御力でありカブト自身にはダメージはそれほどではなかった。

カブト「イってえゝ・・・なんてパワーだ・・・こりゃクロックアップがないと技の数だとライダーが不利だな・・・」

ブロッサム「でもパワーや防御力では私たちよりはるかに上ですよ？」

カブト「そうだなあゝ・・・一応そっちよりも武器もある事だしなあ！！！！」

カブトはカブトクナイガンのアックスモードを装備するとそのままブロッサムに向かっていく・・・だがブロッサムはブロッサムタクトでクナイガンを受け止めると火花を散らす。

カブト「思った以上だ。成長したんだなつぼみ・・・」

ブロッサム「大人さんもやっぱり男の子です・・・でも今の私はキユアブロッサムです！！」

カブト「そうだったな・・・俺も今はカブト。さて・・・そろそろ10分経ったかな？」

ブロッサム「はっ！！！？・・・まさか」

カブト「そのとおり・・・キャストオフ！！」

電子音「CAST OFF！！！！ CHANGE BEETLE！！！！」

ブロッサム「くっ!!!」

カブトは時間が経った事を言うとブロッサムはしまったと言う顔をするが時すでに遅くカブトはゼクターホーンを倒してキャストオフをする。ブロッサムは拡散した鎧をよけるため一度カブトから離れる。

カブト「クロックアップ」

電子音「CLOCK UP!!!」

此処でカブトは反撃のクロックアップを発動して一気に決着を付けてやろうと光速移動による光速攻撃によりブロッサムを翻弄する。

だがブロッサムも此処で隠し技を披露する。

ブロッサム「レッドの光の聖なるパヒューム!!! シュシュツと気でスピードアップ!!! これでスピードは互角です!!!」

カブト「そんな隠し技が・・・面白い!!!」

二人は超高速での格闘戦とクナイガンとタクトをぶつかり合いを繰り広げていく。それを見ていたガタツク達は二人の互角さに驚きが隠せなかったのだった。そしてクロックアップが終わるとブロッサムのレッドのパヒュームの効果も消える。

カブト「やるなあ〜ブロッサム・・・でも此処からがホントの勝負だよ?」

ブロッサム「そうですね・・・でも私簡単には諦めませんよ!!!」

カブト「・・・前のつばみからは想像できないセリフだね? いやキユアブロッサム。」

ブロッサム「私は昔と違ってチェンジしたんです。嫌な自分も受け入れてえりか、いつか、ゆりさん沢山の仲間と一緒に今まで戦ってきて自分を変える事が出来たんです。」

カブト「そうか・・・あの頃の弱かった君はもういないんだね・・・分かったよ。なら自分を変えたと言うのならソレを俺に見せてくれ。」

カブトは寂しそうにそう言う。クナイガンの鞘を抜いてクナイモードに変形させるとブロッサムに向かって走りクナイガンを振う。ブロッサムもタクトを構えていきカブトに負けじと向う。そんな中カブトである大人はカブトの仮面の下で寂しさを見せる様な顔をしながらもつぼみが此処までたくましくなり幼いころのつぼみはもういないという現実に対して複雑な思いを抱いていた。つぼみが変わったと言うのなら・・・今度は俺が変わる番かもしれない・・・。

カブト「はあっ!!ふっ!!」

ブロッサム「えい!!てりやあ!!」

クナイガンとフラワータクトがぶつかり合い火花が散る。時には肉弾戦も混ぜ合わせながら剣技と格闘戦の互角の交戦を繰り広げていく。そして粗方交戦し終わると二人は一度離れていきジリジリと睨み合う。

カブト「そろそろ決めるか？」

ブロッサム「ええ。そろそろお互いに必殺技をぶつけましょう」

カブト「俺のライダーキックかお前のフォルテウェイブか・・・勝負だあ!!!!」

ブロッサム「行きますよ？集まれ花のパワー!!!ブロッサムタクト!!!花よ輝けプリキュア・ピンクフォルテ・ウェイブ!!!」

電子音「ONE TWO THREE」

カブト「ライダーキック!!!」

電子音「RIDER KICK!!!」

カブト「うおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!」

ブロッサム「はあああああああああ!!!!!!!!!!!!」

ブロッサムのピンクフォルテ・ウェイブとカブトのライダーキックがぶつかり合うと凄まじい光が発生していき周囲は光に飲み込まれていく・・・光が消えるとカブトとブロッサムの二人ともが膝をついた状態であった。どうやら今回は引き分けて決着がついたらしい。

大人「はあ、はあ、はあ……ホントにやるなブロッサム。だが必ず決着を付ける。」

ブロッサム「はあ、はあ、はあ……はい……大人さんも凄いですよ。私も危なかったです」

大人「ふっ……よしじゃあ、次はガタツクとマリンの勝負だな……二人とも準備してくれ」

戦いが終わるとカブトは変身を時大人の姿に戻り大の字になって寝っ転がる。まさか此処までつぼみが変わったとは……嬉しいのか寂しいのか複雑な気持ちの大人だった。

第14話「特訓開始！！プロツサムVSカフト」(後書き)

一度してみたかったんだよね〜こつ言つ特訓。

さて次回はガタツクVSマリンです。

勝敗はどうするかなあ〜

**第15話「ガタツクVSマリン 秘義ライダーカッティング！」**（前書き）

前回までのあらすじ

プリキュアパレスで特訓をする事になり先ずはカブトとブロッサムが組手を行うが場はいは引き分けとなった。

## 第15話「ガタツクVSマリン 秘義ライダーカッティング！」

カプトとプロツサムの手が終わり次はガタツクとマリンの出番となった。ガタツクは準備万端とストレッチを行いながら身体を柔軟させて気合を入れていくと。

ガタツク「うし！次は俺だ。んじゃ俺達も始めるか？マリン」

マリン「よぉ〜し！プロツサムは引き分けになっちゃたけどアタシは負けないよ？」

ガタツク「言うねえ〜？でも俺だって簡単にはやられないぜ？戦いの神の力見せてやる。」

マリンはニヤニヤと笑いながらガタツクは声を和やかにそう言いながらも対抗心という炎を燃やししながらホールの中央に向う。同じ青い戦士の戦いが今始まるのだった。

ガタツク「行くぞマリン・・・先ずは小手調べ。行けえ！！」

先ずはマリンの戦術がどの程度のモノかを計る上での小手調べとしてガタツクのマスクドフォーム唯一の武器であるガタツクバルカンでマリンを射撃する。がマリンは少し笑みを見せなると・・・マリン「やっぱしそう来るか・・・ならこっちはマリン・シュート！！！！」

ガタツクの砲撃とマリンのマリンシュートでの水がぶつかり合うと爆発が起きる・・・爆風がガタツクの視界を包んでしまうとガタツクはマリンを探すのに手間取ってしまうのだった。

ガタツク「あらあ〜ちよっと飛ばし過ぎたかな？・・・マリンは何処だ？」

土煙が広がる中ガタツクはマリンを探すが無処にもいない・・・何処に？そう思いながらも闇雲にガタツクバルカンを乱射は出来ない。マスクドフォームのガタツクの唯一の武器はこれしかない・・・仕方がないためあたりを歩くガタツクだが・・・

マリン「はぁあぁっ！！！！」



ガタツク「なっ!?!?・・・くっ!」

マリ「やるじゃんガタツク?まさかガードしちゃうなんて」

ガタツク「一応俺警戒心だけは強いんでね?」

マリ「にひひ・・・でもそっちはカブトと違って肉弾戦以外はそのバルカン以外は武器ないよね?だったらアタシが有利かなあ」

ガタツク「・・・ばれてたか。そうだよぉ〜でもだからってマリが有利とは限らないじゃん?」

突然来たマリンのパンチを腕でガードして受け止めるとお互いに実力を認めあう様な事を言い合いながらも今度は肉弾戦を開始するがワザ数ではマリンが多いためにガタツクは押され気味になってしまふ。

ガタツク「くっ!!!」

マリ「マリ・インパクト!!!」

ガタツク「!!。うぉおおっ!?!?」

マリ「よっし!!快調、快調」

ガタツク「・・・プリキュアのパワー恐るべし」

ガタツクはマリインパクトを腕でガードしようとしたのだがマリンは逆にそれを狙ったかのように笑うとそのまま溜めたエネルギーを解放してガタツクを吹き飛ばす。ガタツクは何とか受け身をとって体勢を立て直そうとするが既にマリンの姿は無かった・・・

ガタツク「・・・何処だ?」

マリ「ここだよ!!マリ・ダイブ!!!」

ガタツク「何!?!」

上を見るとマリンが両足を突き出して自分の方に猛スピードで飛び蹴りをしてい来るのに気が付くガタツク。直撃は不味いと思わずに避けるが発せられたソニックブームで吹き飛ばされてしまい壁に叩きつけられてしまふ。

ガタツク「・・・ホントにすげえ〜なプリキュアの力。だけど今度はこっちの反撃の番だ。キャストオフ!!!」

電子音「CAST OFF!!! CHANGE STAGE BE

ETLE!!!」

マリ「うわあっ!?!?.....あ、あぶなあ」

ガタツク「じゃ行くぜ?クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP!!!」

マリ「ならこっちはレッドの光の聖なるパヒューム!!シユシユツと気分でスピードアップ!!!コレでスピードは互角だよ!!」

ガタツク「やつぱし.....そうなるか.....でも反撃はさせてもらうぜ!!!」

ガタツクはガタツクダブルカリバーを装備しマリンに向かって斬りかかるがマリンもマリインタクトでガタツクカリバーを受け止めてた。り時には身軽な身体を活かしてカリバーを避ける。

ガタツク「身軽だね。ていうか.....素早い」

マリ「そりゃ戦いには慣れてるもん」

ガタツク「そりゃそうか.....でもパワーじゃこっちの方が上だ!!!」

ガタツクはマリンのタクトをカリバーで挟むようにして掴みあげるとそのままマリンの身体を勢いよく投げ捨ててやる。だが身軽なマリンは受け身を綺麗に取るのだが目の前にいたガタツクがいないのだ.....まさかと思えば上を見ると。

ガタツク「秘義!!!ガタツク・イナズマパンチ!!!」

マリ「きゃあっ!!!?」

ガタツクは空中からマリンに向けて勢いよくパンチを放つ。マリンは避けるのは間に合わないかと判断してガタツクのパンチを受けとめようと身構え腕でパンチを受けとめるがパワーに勝てず力負けして飛ばされてしまう。

電子音「CLOCK OVER!!!」

ガタツク「どうだあ、秘義ガタツク・イナズマパンチの威力は?」

マリ「イナズマパンチで言うか只のパンチじゃん」

ガタツク「う、うるさい!!!そっちだってダイブって言うけど只の飛び蹴りじゃん」



マリン「やった！！・・・はあああああああああ！！！！！！！！」

ガタツク「コレがフォルテウェイブ・・・心が癒される・・・」

ガタツクはそのまま浄化される。コレがフォルテウェイブのパワーであるのかと身体で感じると安らぎの様な癒しを身体に受ける・・・

ガタツク「マリン強え〜じゃん？今回は俺の負けだ。だけど次は俺が勝つ！！」

マリン「はあ、はあ、はあ・・・ガタツクも強いよ〜 流石戦いの神」

ガタツク「ははは。御見それしましたキュアマリン。」

マリン「よるしい」

二人「ふふっ・・・はははは」

決着はついた。ガタツクは今回は負けてしまったが次は負けないとマリンにいいマリンもまた負かしてやるとお互いに茶化し合う。ガタツクは思った。これ程の力があるならお互いにもっと切磋琢磨釣ればもう二度と誰にも負けない・・・だって俺達には最高の仲間がいるのだからと・・・

第15話「ガタツクVSマリン 秘義ライダーカッティング！」（後書き）

今回はマリンに軍配を上げてみました。

因みにやけにマリンとガタツクが中が好く見えるのは・・・布石です。

どいう意味かの御想像は読者の皆様にお任せします（爆）

次回は太陽と太陽が戦います。

お楽しみに^^

## 第16話「太陽VS太陽」

大人「残念だったなガタツク。」

ガタツク「全く・・・マリンのヤツあの小さい身体の何処にあれほどのパワーを蓄えているのやら。大人これならお前が心配するほどでもないかもよ？」

大人「ああ、そうだな。次は俺の番だ。行って来るよ」

ガタツク「おう。暴れて来い」

大人とガタツクはハイタッチをしてガタツクはホールの壁側に戻り大人はホールの中央に足を運ぶ。

マリン「先ずは一勝出来たよ」

ブロッサム「流石マリン!!」

サンシャイン「次は私だね・・・マリンの頑張りを無駄にしないように頑張るわ」

ムーンライト「・・・あくまでもコレは特訓よ？大人を怪我させないようにね」

サンシャイン「はあ〜い」

マリンはブロッサムに抱きつきながら勝利報告をする。ブロッサムはマリンの活躍ぶりを喜びながら笑みを見せていく。そして次は自分の番だとサンシャインが前に出る。

大人「やはり次は君か・・・サンシャイン」

サンシャイン「ブロッサムは引き分けになっちゃったけど私は負けないよ」

大人「言うねえ〜だけど俺だってそのつもりさ。変身」

電子音「HENSIN!!」

お互いに対峙するように向い合って立ちあうと大人は変身しカブトの力を身に纏う。

カブト「サンシャイン。俺に君の力見せてくれ」

サンシャイン「貴方もねカブト。手加減はお互いに無しよ?」

カブト「分かっているよ。だけど怪我しない程度にしよう。じゃ・  
・行くよ?」

サンシャイン「うん。」

カブトとサンシャインは構えを取ると相手の隙を伺う様に睨み合う。そこでまずはカブトがサンシャインに向かって走って行く。するとサンシャインもカブトに向かっていき互いにパンチを放ち拳同士がぶつかり合う。

カブト「・・・（パワーは互角か・・・こりゃブロッサムより厄介だ）」

サンシャイン「まだまだあ！はっ！！！！」

カブト「！！・・・ぐうお!?!」

サンシャインのケリがカブトのボディに入る。ガードが間に合わなかったカブトはそのまま勢いよく飛ばされる。

カブト「強い・・・タダ強いだけではない。ブロッサムやマリオンと違い攻撃の一つ一つが的確で絶妙だ・・・面白い。」

サンシャインの身のこなしは恐らくマリオン以上に身軽で攻撃の一つ一つも素早いため戦いにはまだ不慣れな大人が変身するカブトにとっては強敵だ。まさか此処までサンシャインが強いとは・・・だが強い他相手と闘うほど腕が鳴るとカブトは立ち上がる。

カブト「肉弾戦が不利ならば・・・遠距離で行ってみようか!!」  
カブトはクナイガンを構えるとガンモードでサンシャインを狙撃して行く。勿論サンシャインは避けていくのだが狙撃のスピードがかなり速いため徐々にクナイガンの弾丸によって爆風が上がる。カブトのやみくもに打つのは無駄と判断して一度撃つのを止めて爆風が消えるのを待つ。そして次第に爆風が治まるとそこにはサンフラワ  
ー・イージスで射撃を防御しているサンシャインの姿が合った。

カブト「・・・やっぱりクナイガン程度ではサンシャインの守りには届かないか」

サンシャイン「コレが守りの力よ。私とポプリの力の結晶でもある。

カブト「凄い・・・でも必ず攻略してみせる!!!!」

サンシャイン「簡単にはさせないよ!!!!」

カブトはクナイガンをアックスモードにしてサンシャインに向かうのだがサンシャインはアックスを軽い身のこなしで避けると重たいアックスを振って隙が出来たカブトにパンチやキックを放っていきカブトを焦らせていく。

カブト「くっ・・・なんて身のこなしなんだ。攻撃が当たらない。」

サンシャイン「どうしたのカブト？ちよつとばててきたんじゃない？」

カブト「くっ!!!」

カブトは必死になって策を練っていたが得策が思いつかなかった。

マスキドフォームはパワーと防御力が勝る分スピードは遅いためサンシャインの素早い身のこなしに攻撃が追いつかないのだ。素早い身のこなしでカブトを翻弄してクロックアップを使えるライダーフォームになる前に体力を大幅に削るといふ作戦に攻略法はあるのか・・・

カブト「・・・ならば!!!!」

此処カブトはサンシャインにクナイガンのガンモードを乱射する。勿論サンシャインはクナイガンの弾丸をサンフラワー・イージスでガードするのだがカブトが乱射するためまたもや爆風の土煙が発生してしまい二人をつつむ。

サンシャイン「カブトどういふつもりなの？でもこの盾は簡単には破れないはず!!!」

カブト「盾はやぶらないよ」

サンシャイン「えっ!？」

カブト「盾が破れないなら盾を構えている本人を攻めるまで!!!!  
はあああっ!!!!」



サンシャイン「い、いつの間に私の真横に！！きゃああっ！！！！」  
そうカブトの狙いはコレだったのだ。サンフラワー・イージスは破壊はライダーフォームのRライダーキックでしか手段はないのだが守れるのはその特性上前方だけであり後方及び横は守る事が出来ないし死角になるのだ。カブトは土煙で身を隠しながらサンシャインの真横にまわりまんとその盲点をつきサンシャインに反撃のパンチを浴びせる。サンシャインはパンチで飛ばされるが身軽なカラダを活かして受け身をとる。

カブト「そろそろ反撃と行きますか。キャストオフ！！」

電子音「CAST OFF！！ CHANGE BEETLE！！」

サンシャイン「！！・・・はっ！！！！」

カブト「やっぱりサンフラワー・イージスは出さないか・・・」

カブトがキャストオフするとサンシャインはサンフラワー・イージスを出さずに素早くその場から離れていくのを見る限りではどうたら先程の攻撃を警戒したようだとかブトは察した。

カブト「攻めさせてもらうよ！！クロックアップ」

電子音「CLOCK UP！！！！」

カブトはカブトクナイガンでクナイモードにさせると同時にクロックアップを発動させていきサンシャインを惑わすように光速移動による攻撃を始めていくのだ。

サンシャイン「くっ・・・速い！！」

カブト「ついて来れるかな？この俺の攻撃に」

カブトは超光速で動きながらクナイガンで斬りつけていくのだがサンシャインは直感でカブトの斬撃を紙一重で避けていくのだがそれにも限界がありカブトのクナイガンによるアバランスラッシュを受けてしまう。

電子音「CLOCK OVER！！！！」

クロックアップが終わるとカブトはサンシャインの方を向くとその

ままサンシャインに近づいていく

カブト「ふふっ・・・流石にクロックアップとアバランスラッシュのコンボ攻撃には対応できないでしょ？」

サンシャイン「くっ・・・確かに速くて対応できなわ。でもまだまだあきらめないんだから」

カブト「・・・言うね〜。でもそろそろ終わりだよ!!!」

電子音「ONE TWO THREE」

カブト「ライダーキック!!!」

電子音「RIDER KICK!!!」

サンシャイン「なら私も集まれ花のパワー!!!シャイニータンバリン!!!花よ舞い踊れ!!!プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!」

カブトのライダーキックとサンシャインのゴールドフォルテバーストがぶつかり合い二人は飛ばされてしまう。

カブト「ちっ・・・」

サンシャイン「はあ、はあ、はあ」

カブト「どうやら引き分けたな・・・残念」

サンシャイン「そ、そうね・・・でも次は決着を付けるわ」

カブト「言うね〜。だが今度はこうはいかないよ?（ブロッサムだけどサンシャインも強い。これならあの二人にもザビー達にももう負けないかな?。どうやら俺の取り越し苦労だったかな〜）」

二人はフラフラになりながらも次は負けないと言う様にお互いに宣言しながら二人は握手していく。

カブトは手合わせして分かった事が合った。足を引っ張っていたのは自分やガタツクでありプリキュアじゃない・・・これから強くないといけないのは俺達だと。

**第16話「太陽VS太陽」(後書き)**

今回も引き分け。

次回は月光VS戦いの神です^^

更に告知!!近々あのお方たちが時空を超えてきます!!!  
お楽しみに

第17話「月光VSクワガタ!! 銀月と蒼戦士の激突」(前書き)

前回までのあらすじ

サンシャインとカブトの対決も引き分けに終わり特訓もいよいよムーンライトとガタツクの組み合わせのみとなった。  
果たして勝敗は……

## 第17話「月光VSクワガタ!! 銀月と蒼戦士の激突」

カブト「ふう」

ガタツク「凄かったな」カブト!!

カブト「ああ。だけどサンシャインもかなりの強さだったよ」

ガタツク「うし!! 次は俺だな」相手はムーンライトか・・・気合を入れていかないと」

カブト「頑張れよ!!」

ガタツク「おう!!」

カブトは疲れた身体を動かしながらホールの壁に向うとガタツクとそう会話するとガタツクはマリンの戦い以上に気合を入れてホールの中央にと足を運ぶ。

ブロッサム「サンシャイン!! 流石です。」

マリン「ホント普段武道で鍛えてるだけあるよ」

サンシャイン「でもカブトのパワーには敵わなかったわ」

ムーンライト「・・・でも次やるときは決着を付ければいいわ。次は私ね。」

ブロッサム「ムーンライト!! 頑張ってくださいね。」

マリン「相手は一応戦いの神なんて名前あるから油断しないでね」

ムーンライト「大丈夫よ。貴方たちやカブト達に戦いの見本を見せてあげるから」

サンシャイン「凄い気迫・・・」

ムーンライトは大人の余裕とでも言うべき何かを見せながらホールの真ん中で待つガタツクにもその気迫を見せるようだった。

ガタツク「(凄い気迫・・・長らく戦いをしてきた自信ってやつか?)」

ムーンライト「じゃ、さっさと始めましょうか?」

ガタツク「ああ。早速先手必勝といかせてもらいますか!!」

ガタツクはマリンとの戦いでキャストオフしたため既にライダーフ  
フォームであるがこの場合は10分間はクロックアップは使えないと  
言う制約に縛られる事になるのだった。そのため先ずは近距離用の  
武器であるガタツクダブルカリバーを使いムーンライトに向かつて  
斬りかかるのだがムーンライトはガタツクの攻撃を読んでいたのか  
ムーンタクトを取りだしてそれを受け止める。

ガタツク「なっ!?!」

ムーンライト「甘いわよ?・・・貴方の戦い方はそのカリバーによ  
る近距離攻撃かマスキッドフォームのバルカンのどちらかを最初に使  
う傾向がある。・・・気がつかなかった?」

ガタツク「!!」

ガタツクが気が付いていなかったが実際にガタツクの戦い方のパタ  
ーンはそうだった。最初はカリバーかバルカンでの先制攻撃を行っ  
てから相手の体勢を崩していき自分のパターンにへと相手を追い込  
んでいくという戦い方でありそれをムーンライトに見抜かれてしま  
ったのだ。

ガタツク「ちっ!!!」

ムーンライト「遅い!!」

ガタツクは力ならこつちが有利だと思いカリバーに体重を押しつけ  
てムーンライトを力で圧倒してやろうと思ったのだがそれも読まれ  
ていたらしく鏑迫り合いを解かれるとガタツクの背中に勢いを付け  
た回し蹴りを放つていきガタツクをふっ飛ばす。

ガタツク「くお!?!」

ムーンライト「やっぱりカブトもそうだけどまだ貴方たちは戦いに  
慣れてないわね」

ガタツク「いや・・・この前まで普通の高校生だったんだし・・・  
それは仕方ないかと」

ガタツクはムーンライトのセリフにそうツツコミを入れていきなが  
ら仕切り直しだとカリバーを構えるとムーンライトに向かつていく

がガタツクの攻撃はムーンライトに紙一重で避けられてしまったり斬撃が当たると思えばムーンタクトで防御されたりと体力だけを消耗してしまっただけだ。

ガタツク「くそ．．．なんで攻撃を読まれるだ？」

ムーンライト「簡単な事よ。貴方の攻撃がバレバレなだけ．．．」  
焦るガタツクに地アしてそう言うムーンライトはガタツクを更に焦らすようにムーンタクトをまるでレイピアのように振りガタツクのガタツクダブルカリバーをさばきそのままタクトでタクトでガタツクに着実にダメージを与えていく。ガタツクは消耗した体力にムーンライトの攻撃を受けてしまっただけでまともな反撃は出来なかった．．．。

ガタツク「はあ、はあ、はあ．．．くっ！！！」

ムーンライト「どうしたの？まだクロックアップが使える10分も経ってないわよ？」

ガタツク「くそ．．．なんて強さだレベルが違う」

これでは勝負にならない．．．だがクロックアップさえ使えばとガタツクは何とか時間まで耐えようとムーンライトに攻撃するのはなく寧ろ時間稼ぎをしようと目論んでいく．．．まともやり合っても勝ち目がないのならこうするしかない

ムーンライト「時間稼ぎするみたいね？．．．でもいつまで持つかしら？」

ガタツク「くっ！！！」

ムーンライトの予想通りだったガタツクはムーンライトの猛攻にカリバーを盾にする様に対応するしかできなかった。そして体力は確実に削られていき遂には．．．

ムーンライト「はっ！！！！！」

ガタツク「ぐおおおっ！！？」

体力を消耗したガタツクにムーンライトは容赦のない攻撃でガタツクダブルカリバーがガタツクの腕から飛ばされてしまう。

ガタツク「．．．やっぱりレベルが違いすぎる．．．コレがムーン

ライトの力なのか」

ムーンライト「そうよ。．．．でもこうなるのもかなりの努力が必要だったけどね。」

ガタツク「．．．くっ！（何も言えない自分が悔しい。．．．ていうかちよつとは手加減してくれよ）」

ガタツクは体力が既に限界を迎えてしまつてゐるためクロックアップする余裕もなかった．．．このままではギブアップする以外決着の手段がなくなつてしまふ．．．それだけは男のプライドが許せないとガタツクは立ち上がると．．．

ガタツク「．．．戦闘キャリアは皆無だけどパワーなら負けねええ！！」

電子音「ONE TWO THREE」

ガタツク「ライダーキック！」

電子音「RIDER KICK!!!」

ムーンライト「勢いだけじゃ勝てないわよ？集まれ花のパワームーンタクト！プリキュア・フローラルパワー・フォルテッシモ！！！」

ガタツクは此処で勝負に出たのだった。体力的にこれ以上はムーンライトと戦うのは不可能と判断してでの行動だったがムーンライトもそれに応戦する様な形で自身の最強のワザであるフローラル・パワー・フォルテッシモを放ち二人はぶつかり合う。

ガタツク「くっっ！！．．．（やはり体力が全力でないと．．．無理なのか．．．コレがキャリアの．．．経験の違いなのか．．．）」

ムーンライト「はああああああっ！！！！！！！」

ガタツク「ぐああああああああああっ！！！！！！！」

二人の技のぶつかり合いにも決着が付き爆発が起き爆風が収まる頃には膝をついたガタツクと優雅に立つムーンライトの姿が．．．。

ガタツク「はあ、はあ、はあ．．．クソ！！此処まで力の差があるなんて．．．」



ムーンライト「・・・私はあの3人とは力の差がありすぎるだけよ。貴方も努力すれば追いつけるわ。」

ガタツク「ムーンライト・・・俺は必ずアンタを超えてやる・・・必ず!!」

ムーンライト「ふふっ・・・楽しみよ その時また相手をしてあげるわ。」

ガタツク「ああ・・・必ず!!」

ムーンライトは膝をついたガタツクに手を貸し立たせると必ずムーンライトと互角にいや力を超えてやると誓いながら二人は身に秘めている闘志を見せていき必ずもう一戦戦つと心の中で誓い合っていた。

第17話「月光VSクワガタ！！銀月と蒼戦士の激突」（後書き）

は〜い。コレで特訓は終了したいと思います〜。

やけにムーンライトが強いのは・・一人でダークプリキュアと互角だと考えれば戦闘素人の琢磨はこうなるのが必然と考えた上でこうなりましたあ〜（汗）。

次回はカブトの敵サイドに新しい影と・・・あの戦士たちが時空を超えてやってきます。

次回もお楽しみに

**第18話「天の道を行き総てを司る男現る!!」(前書き)**

前回までのあらすじ

特訓を開始した大人達と同じころZECTはある敵をせん滅する作戦を開いていた。

その敵も着々と動き出していたのだった。

第18話「天の道を行き総てを司る男現る!!」

大人達がプリキュアパレスで激戦と言う名の特訓を行っていた頃の須藤は前回のプリキュア刈りの報告をZECTの上層部に報告するためにとある男の部屋に呼ばれていた。その扉は大和の部屋よりも上質に出来ていると言う事が扉を見るだけで分かるほどのモノであり須藤は身を縮めるような思いで扉の前にいた・・・

今度こそはと意気込んで特攻したものの結局は裏切り者の矢車と影山にまたもや邪魔されてしまつて撤退という醜態をさらす事になつた・・・コレは能力主義を徹底しているZECTにとってコレは命取りでしかない・・・しかし既に過ぎた事であり全ては自分がまいた種でありケジメをつけると須藤は覚悟を決めて扉をノックする。

？「来たか・・・入れ!!」

須藤「失礼します。」

？「呼び出されたり理由は分かっているな？須藤」

須藤「は、はい・・・三島さん」

三島と呼ばれるその男は黒スーツにメガネをかけた知的の容姿であるのだが実際の彼は何処か視線が冷たく人として何処か感情が抜けてしまつているのではないかと思わせるのだった。

三島「ふん。そううるたえるな。なに矢車や影山のようにすぐになると言うわけではない。」

須藤「え？・・・では私はまだ？」

三島「ああ・・・貴様はまだザビーである以上は隊長をする資格があるよ言う事だ。」

須藤「は、はい（よかつた。）」

三島「だが次からは気を付ける事だな？私の感に触れば貴様もすぐに矢車と影山のようになるのだからな」

須藤「!!・・・は、はい。」

三島「分かればそれでいい。では新たな任務を伝える。今後はカブトとガタツクとダークカブト及びプリキュアを我々の支柱に収める事は一度中断する。」

須藤「!?!?..それはまたどうして?」

三島「封印していた奴らが目覚め始めたのだよ。君もこの組織の間ならばこの組織が設立された理由を。そしてそのすべての発端となった太平洋に落ちた隕石の事を。」

須藤「ええ。7年前に宇宙から落ちた巨大隕石が太平洋に落下。そしてその隕石から未確認生命体。通称ワームが密かに現れた。それに対抗するためにカブトやガタツクなどのマスクドライバーシステムを開発した組織がZECTである...ですよね?」

三島「100点満点だ。その通り。逃げ出した安西、裏切り者の矢車と影山はそのワームを封印した初期のメンバーだった...」

そしてワームを封印し何もかも片付いた筈だったが昨今その封印が砂漠の使徒の干渉によって緩み遂には目覚めてしまったんだよ。」

須藤「では今度は私や大和さんと織田さんがワームを殲滅するのですか?」

三島「いや...お前たちだけではない。カブト達にも無理やりにも協力してもらおう。」

須藤「は?...しかし奴らはまだ素人に等しいのですよ?」

三島「それも計算のうちだ。何のために貴様らをカブト達にぶつけたのだと思う?」

須藤「!?!?じゃ...まさか初めから?三島さんはそのつもりで我々を」

三島「いや...上手くいけばベルトとプリキュアの力も手中に収めるつもりだったが状況が変わったのだよ...まずはワームの殲滅が優先だ...だが何れは回収する。そのつもりでいる。」

須藤「はい。」

三島「では任務に移れ。大和と織田にも私から連絡しておく」

須藤「はっ!?!?!シャドウ隊長として必ず任務を完全にこなして

みせます!!!」

三島「期待しているぞ。(我々の糧となれ・・・貴様のその命ごとな)」

須藤はお咎めがなかった事に安心したのか意気揚々と三島の部屋をでる。今度こそ汚名を編称すると・・・。しかし三島はそれ以外にも何か企んでいるのだがこの徳の須藤はまだ気が付いていなかったのだ・・・自らも三島のマリオネットでしかなかった事に。

場所は変わってプリキュアパレスの大ホール。特訓が終わったカブト達は自分たちの足りない部分についてミーティングしていた。お互いに戦って分かった事を指摘し合う事で今後の自分たちの課題を明確にしていく事がこの特訓の本当の意味であるのだった。

カブト「全体を通して思った事があるんだけどやっぱり俺やガタツクには戦闘の経験がブロッサム達と比べると明らかに差がありすぎる気がするね」カブトやガタツクの性能が良くてもそれに俺達が追いついていかないと意味がないって気がするよ。」

ガタツク「そうだなあ〜でも戦闘経験なんて中々詰めるもんじゃないしな〜やっぱりしこ言う特訓を続けていく以外にないんじゃないか?」

ブロッサム「そうですね〜。やっぱりそれしか無いかもですね。」  
マリ「あと私たちももっと頑張るべきかな?この前の変な二人組以外にもまだ仮面ライダーがいるかもしれないし・・・」

ムーンライト「そうね・・・それにそもそも仮面ライダーがどうして造られたのかもまだわからない以上は今後は更に戦いが激しくなる事を考えたら私たち自身もパワーアップするのが賢明ね。」

サンシャイン「うん・・・ハートキャッチミラージュの力を解放したスーパースルエットの力も4人がいる時にしか使えないし。私たち自身ももっと強くないと」

カブト「ハートキャッチミラージュ?・・・何だいそれは?」

ブロッサム「あ、そうでしたまだ説明してませんでしたね。ハート

キャッチミラージユは私達プリキュアに奇跡をもたらすと言われる伝説のアイテムです。私たちは4人がそろっている状態でハートキヤッチミラージユの力を解放してスーパーシルエットに変身できるんです。」

ガタツク「へえ、御約束のパワーアップ変身ってか、ホントにスゲエ、なプリキュアの力ってのは」

カブト「全くだ」

カブトとガタツクの言葉を聞くとプロツサム達4人は笑ってその場を和ませるのだった。そして時間がかなり経ちそろそろお開きとなった。そして翌日の放課後に大人は痛みが走る筋肉痛に悩まされることになるのだった・・・

大人「ああ、やっぱり筋肉痛だ、あ、身体中が痛え」

タ「大人、どうしたの？」

大人「え？・・・ああ、ちよいと激しい運動をね」

タ「もしかして特訓でもしたの？」

大人「タさん・・・貴女何でそう言う感は鋭いのでしょうか？」

タ「あ、当たったんだ」

大人「カマかけただけかいなあ！！！」

タ「ふふ、ねえ、今日も良かったら遊びに行かない？」

大人「特訓したいと言いたいとこだけど、タは根に持つから今日は付き合っただけよ」

タ「ああ、ヒドイ」

大人のツッコミに対してタは笑いかけてそう言う大人も笑顔を返す・・・彼女の為にも俺が強くなければと大人は心の中で思いながらもタとの時間を過ごすのだがそれもすぐに現実に引き戻されることになった・・・二人の目の前に突如見知らぬ男が立ちふさがり大人とタを睨んでいくのだった。そのありさまに大人は警戒心を強めながらタをかばう様にタを自分の後ろに下げる。

男「貴様・・・カブトだな？」

大人「何故それを？まさかZECTのライダーか！？」

男「違う・・・我々は貴様らマスクドライダーシステムの資格者の全ての敵・・・ワームだ！！！」

男は自信をワームと名乗ると突然カラダが光りだして人間の姿から緑色と茶色が混ざった様なの体色をした昆虫のサナギを連想させるような姿へと変貌するのだった。

大人「なっ！？」

タ「きゃああああっ！！？・・・か、怪物！！！」

大人「タすぐに此処から逃げて琢磨やつぼみ達を読んできてくれ・・・早く！！！」

タ「でも、大人は！？」

大人「俺は奴を引きつける。速く行け・・・タ！！！」

タは此処は大人に従おうと大人に背を向けて全力でその場から逃げる。大人の事が心配だが大人を信じて琢磨達を大人の元に連れてくるしか出来ない・・・悔しいが自分には力がないため素直に現実を受け止めるしかなかったのだった。

大人「ワームだかなんだか知らないけど・・・敵なら相手になつてやる。・・・変身！！！」

電子音「H E N S I N！！！」

大人はライダーベルトを腰に付けて手に飛んできたカプトゼクターをベルトに収めてカプトマスクドフォームに変身するのだった。

カプト「昨日の今日だけど特訓の成果を試してみるか・・・いくぞ！！！！！」

ワーム「来い・・・未熟な太陽よ！！！」

カプトはカプトクナイガンをアックスモードにして構えていくと謎の敵ワームに挑む！！

その頃琢磨は部活が休みな溜め久々の暇な放課後をどうするか考えながら下校路を歩いていたのだがそこにタが大急ぎで張ってきたの



で驚く。

琢磨「ど、どうしたんだよ？夕・・・そんなに慌てて」

夕「はあ、はあ、はあ・・・た、大変なのよ琢磨！！大人が・・・変な緑色の怪物に襲われて・・・はあ、はあ、はあ・・・ひ、大人が困になつて私を逃がしてくれただけ」

琢磨「何だつて!？」

夕「お、お願い琢磨！！ベルトの力を持つのは大人以外には琢磨しかいなんでしょ？・・・大人を助けてあげて！！」

琢磨「お、おう！！・・・って何で知ってる？俺がベルトの力を持つてるなんて・・・」

夕「大人から聞いたの・・・全部ね。」

琢磨「あのバカ！まあいいや。全部知ってるんならつぼみ達を探してアイツらも呼んでくれ！！。」

夕「分かったあ！！。」

琢磨は夕につぼみ達にもこの事を伝えるように促すと琢磨は大人が襲われたと言う場所に向うのだった。

その頃カブトとワームのサナギ体はまるで特撮のワンシーンであるかの様にぶつかり合っていたのだった。クナイガンの斧の刃がワームを斬りつけるのだがワームの防御力はかなりのモノで中々の確なダメージが与えられないのだった・・・

カブト「硬いな・・・甲殻類か昆虫の怪物か？」

ワーム「ぐるうつつ！！！！・・・ぐぐうおおおおおっ！！！！」

カブト「なっ、何だ？」

突如ワームのカラダが光りだすと何やら身体が変形していくかのようになり体被が向けていく。昆虫で言う脱皮の様なものでありこのワームは体色が黄色のコガネムシ型のワームであるコレオプテラワームへと進化するのだった・・・それはカブトのキャストオフと同じ様にも見えてるのだが実際は人が皮を剥いで新しい顔が出てくるかのようなモノであった・・・

カブト「こ、コイツ!!完全な化け物じゃん・・・」

コレオプテラワーム「コレがワームだ!!・・・死ねえカブト!!」  
カブト「なっ!?クロックアップか?ぐう!!!?」

コレオプテラワーム「ふふっ・・・クロックアップが出来るのは貴様らライダーだけではない。我々ワームも使う事が出来るのだあ!!」

カブト「くっ!・・・キャストオフ!!」

電子音「CAST OFF!!! CHANGE BEETLE!!」

カブト「クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP!!!」

カブト「そっちがクロックアップで来るのなら俺も使うまでだ!!」

クロックアップを発動した者同士の光速合戦を行うが互角の肉弾戦が続いていくが体力面では大人が不利であり戦いの差が出てきてしまう。

カブト「くっ・・・」

コレオプテラワーム「どうしたあゝ体力でもなくなってきたか?」

一人ではこの手の相手はかなりしんどい・・・だがガタツク達  
が来るまでの辛抱だと案とか耐えていく・・・このままでは自分が  
やられてしまうのも時間の問題だとカブトも焦り始めたその時・・・

?「そうはせさない!!!!」

コレオプテラワーム「!?・・・貴様ら何者だ!?ライダーか?」

?「ライダーは俺だ・・・だが後は違う。」

?「私達はカブトの仲間です。」

?「アタシ達の仲間を苛めるなんていい度胸じゃん?」

?「僕たちは伝説の戦士」

?「プリキュアよ!!」

コレオプテラワーム「プリキュア?ふんっ・・・なんだか知らんがっ

いにて貴様らも片付けてくれるわ」

カブト「ふっ・・・遅いぞ琢磨、つぼみ、えりか、いつき、ゆり」  
琢磨「遅くなつたな。コイツが夕の言っていた怪物か!!」

つぼみ「砂漠の使徒ではないみたいですね・・・貴方一体誰ですか!?」

コレオプテラワーム「俺はワーム・・・ライダーを狩り世界をワームのモノにする・・・貴様らも邪魔をするのなら死んでもらう!!」

えりか「砂漠の使徒の次はワーム・・・ワームってどういう意味?」  
いつき「英語でミミズ・・・虫の怪人ってこと?」

ゆり「恐らくね・・・何処から来たかは知らないけど世界を滅ぼそうとするのなら私たちが阻止するだけよ。みんな行くわよ!!」

4人「うん」

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう!!!（ですつ&でしゅ）」

4人「プリキュア・オープンマイハート!!!」

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!」

ムーンライト「月光にさせる一輪の花キュアムーンライト!!!」

4人「ハートキャッチプリキュア!!!」

4人は赤、青、金色、銀色の4色の光に包まれていきプリキュアの姿にへと変身していくと名乗り上げていく。

琢磨「変身!!!」

電子音「HENSIN!!!」

ガタツク「キャストオフ!!!」

電子音「CAST OFF!!! CHANGE STAGE BE  
ETLE!!!」

ガタツク「戦いを支配せし戦いの神!!!仮面ライダーガタツク!!!」

コレオプテラワーム「ほう？まさかホントにライダー以外にも我々の邪魔をする存在がいるとはな〜だが好都合というもの・・・貴様らまとめて片付けてやるわあ！！！！！」

カブト「そう簡単に行くかよ・・・俺達6人の力を見せてやる！！皆行くぞ！！！」

ガタック「おう！！！」

ブロッサム&サンシャイン「はい！！！」

マリン「やるっしゅ！！！」

ムーンライト「うん！！！」

カブトはクナイガンのクナイモードをガタックはガタックダブルカ  
リバーをブロッサム、マリン、ムーンライトはフラワータクトを構  
えていき敵であるコレオプテラワームに向って走る。

コレオプテラワーム「伝説の戦士か何か知らんがプリキュアとやら  
はコレにはついて来れまい？」

いきなりコレオプテラワームはライダーよりも先にブロッサム達プ  
リキュアを先に片付けてやろうとクロックアップを発動させる。

ブロッサム「まさかクロックアップ!？」

マリン「アイツまでクロックアップが使えるの?」

サンシャイン「でもその手はもう」

ムーンライト「手慣れているのよ！！！！」

4人「レッドの光の聖なるパヒューム！！シユシユツと気分でスピ  
ードアップ！！！」

4人はクロックアップに動揺することなく4人はレッドのパヒュー  
ムを発動してスピードを上げるとコレオプテラワームの攻撃を防御  
出来る攻撃は防御していきながらダメージを最小限に抑えていきム  
ーンライトがクロックアップの能力を一度停止させたコレオプテラ  
ワームに素早く近づいていきそのままケリを放つとコレオプテラワ  
ームは凄まじい勢いで飛ばされてしまう・・・

コレオプテラワーム「ぐおおおっ！！！！?・・・な、何だとお

!？」

クリーンヒットしたのか怯んでしまったコレオプテラワーム・・・そこにブロッサムとマリんとサンシャインのトリプルパンチが硬いボデイに炸裂していく。

コレオプテラワーム「ごおおあああああつ!!!?・・・き、貴様らあ!!!」

プリキュア達に怒りの反撃をしようとするコレオプテラワームだがその前にカブトとガタツクが立ちふさがり・・・

カブト「俺達を忘れんなよ？」

ガタツク「狙いはライダーだったんだろ？」

コレオプテラワーム「己えく・・・人間ごときがあ!!!」

カブト「はあああつ!!!」

ガタツク「おらああつ!!!」

コレオプテラワーム「ぐううつ!!!?・・・」

カブトとガタツクのクナイガンとガタツクダブルカリバーの斬撃がコレオプテラワームの両肩を思いっきり切り裂いていく・・・緑色の体液がドロドロと流れていく痛々しい姿を見せてしまう・・・。

だがカブトとガタツクはこれ以上の攻撃は無意味とカリバーとクナイガンを戻す・・・

カブト「もういいだろ?・・・これ以上の戦いは無意味だ」

ガタツク「お前だって死にたくはないだろ?・・・今なら手当てすれば助かる。」

ブロッサム「私たちだって貴方を殺すつもりはありません・・・」

マリ「もう止めようよ。」

サンシャイン「勝負はついたわ」

ムーンライト「私たちは命を無駄に奪うつもりはないわ・・・だから此処は潔く引きなさい。」

コレオプテラワーム「何の真似だあ?・きさまらあ・・・貴様らの様な・・・人間ごときの・・・人間ごときの慈愛などうけてたまるかあ!!!!!!うおおおおおおおお!!!!!!!!!」

カブト「くっ．．．仕方がない。ガタツク!!」  
ガタツク「おう。」

カブト&ガタツク「クロックアップ!!!」

電信音「「CLOCK UP!!!」」

クロックアップしを使用してきたコレオプテラワーム．．．例え刺し違えてでもカブト達を倒さなければという意地が感じられるのだっ．．．カブトも仕方ないとクロックアップで応戦していく．．．  
此処で二人はこの無益な戦いを終わらせるべくゼクターのフルスロツトルに手をかけていき．．．

電子音「「ONE TWO THREE」

カブト&ガタツク「「ライダーキック」

電子音「「RIDER KICK!!!」

カブト「はあああああっ!!!!!!」

ガタツク「うおおおおっ!!!!!!」

コレオプテラワーム「くおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおとおとおとおおとおおとおおとおお  
おおおおおとおおとおおとおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

電子音「「CLOCK OVER」

最期の断末魔と共に爆炎が上がる．．．殺したくはなかったがこうする以外手はなかった．．．カブトとガタツクは苦い想いをしながらも爆炎が治まるとどうしにクロックオーバーを迎える。

ブロッサム「カブト、ガタツク．．．」

カブト「．．．．．」

ガタツク「カブト．．．」

カブト「分かつてる!!!．．．だけど．．．」

マリン「．．．．」

ムーンライト「貴方は間違っていないわ」

サンシャイン「そうだよ．．．カブト」

ブロッサム達はカブトとガタツクを励まそうとそう言っていくのだ

が哀しい空気を味わっているのもつかの間だった……

? A「ふん……役立たずめ……所詮は下位クラスの兵隊アリだったか」

6人「!!?!?」

? A「ふん……何を動揺している?……私もワーム。我が人間名は間宮 麗奈」

カブト「ゴミだって……」

ガタツク「アンタらさっきの奴らの仲間なのか?なら何でそんな事言えるんだよ?」

間宮「言った筈だ所詮下位クラスの兵隊アリだと」

カブト「ふざけるな……ふざけんあ!!!!!!」

間宮「ふん……人間とは分かん生き物だな」

カブトは怒りに負かせて向かっていくのだがワームの間宮と言う女はいきなり成虫であるウカワームへと変身していき向ってきたカブトをあしらう様にふっ飛ばす。

カブト「ぐおおっ!?!」

ガタツク「カブト大丈夫か!?!」

ブロッサム「落ちついてください!?!」

カブト「……すまない。」

マリリン「コイツもワームとかく怪物なら倒すまでだよ!?!」

サンシャイン「うん」

ムーンライト「皆行くわよ!?!」

5人「うん!?!」

ウカワーム「ふん……無駄な足掻きだと言う事を教えてやる!?!」

ウカワームとカブト達が睨み合ったその時……二人のすぐそばで突如閃光がはしり衝撃波が走る。

カブト「な、何だ?」

ガタツク「アレは?……」

ブロッサム「雷ですか？」

マリ「違うと思うけど」

サンシャイン「一体アレは？」

ムーンライト「時空の狭間？」

あたりに凄まじい光と衝撃が走っていき徐々に3人の姿が薄ら薄らと現れていく・・・その中で二人はカブトとガタツクのような仮面ライダーの様な戦士と一般人の女の子の姿であった。

電子音「HYPER CLOCK OVER!!!」

？「ほう此処にもライダーとワームがいるのか・・・だがあの派手な格好の奴らは何だ？」

？「分からないけどどうやらピンチみたいだな」

？「ふん・・・助けてやるか・・・ひよりお前は離れてる」

？「言われなくとも離れるよ。」

ひよりと呼ばれる女の子はカブトに似た戦士にそう言われるとその場から離れていく。そしてカブトとガタツクに似た戦士は歩き出す。  
？「君たちもライダーみたいだな。なら協力する。」

？「せいぜい足手まといになるな。」

カブト「アンタらは一体何者だ？」

？「おばあちゃんが言っていた俺は天の道を行き総てを司る男・・・  
天道総司」

？「俺は加賀美新。君たちと同じ仮面ライダーだ。」

ガタツク「仮面ライダーだって」

ブロッサム「何人いるんですか!？」

マリ「・・・もう何が何だか・・・」

サンシャイン「・・・でも敵ではないみたい」

ムーンライト「今は信用するしかないわね。」

カブト達は謎の二人の戦士に半信半疑だが今はウカワームを倒す事が先決だと戦士たちはウカワームを睨むのだった。



第18話「天の道を行き総てを司る男現る!!」(後書き)

久々に長くなった・・・。

次回は久々に砂漠の使徒でも出そうかと考えてます。

第19話「それぞれが歩く天の道!!」(前書き)

前回までのあらすじ

怪しく動き出したZECTと海神ワームの出現。更にカブトとガタツクとにそっくりの仮面ライダーも出現し物語は進んでいく……果たして現れたライダーは敵か味方か？

## 第19話「それぞれが歩く天道!!」

ウカワーム「カブトとガタツクがもう一人だと・・それに貴様らハイパーゼクターを従えているとは・・・貴様は何者だぁ!!!!」  
ハイパーカブト(総司)「聞いてなかったようだな・・・まあいいもう一度言ってやろう。俺は天道の道を行き総てを司る男・・・天道総司!!!!」

ハイパーガタツク(新)「俺は加賀美新・・・戦いの神ガタツクに選ばれし戦士だ!!!!」

ウカワーム「天道総司、加賀美新・・・貴様らも邪魔をすると云うならまとめて片付けてくれる!!!!」

ハイパーカブト(総司)「そう言うお前は間宮麗奈だな?・・・この世界にお前らの分身の様なものがあるとわな・・・だがこの世界にもワームが存在するというのが俺達が一匹残らず倒すのみ」

ハイパーガタツク(新)「行くぞ・・・天道!!!!」

ハイパーカブト(総司)「言われるまでもない。」

間宮麗奈ことウカワームは驚いた様子で天道総司、加賀美新と名乗る男たちが変身するハイパーカブトとハイパーガタツクがウカワームにゆつくりと向かっていくがそこに援軍と思われるサナギのワームとそれを率いるクモ型ワームであるタランテスワームが現れる。  
ハイパーカブト(総司)「新手か・・・おい後ろの6人組!!!サナギのワームぐらいは倒せるだろ?お前たちはサナギを殺れ。俺達は成虫を倒す」

カブト(大人)「いきなり命令ですか!!!!」

ガタツク(琢磨)「だけどそれは賢明な判断かもな。此処は従おう

カブト」

カブト(大人)「・・・そうだな」

ブロッサム「皆さん行きますよ!!!!」

カブト(大人)「&ガタツク(琢磨)「おう!!!!」

マリィン「やるっしゅ!!!」

サンシャイン&ムーンライト「うん!!!」

カブト達は正直突然現れた彼らの事は半信半疑だがワームを倒すと言う共通の目的があるのなら此処は協定を結ぶのが無難だと考え言われたとおりにサナギのワームを6人が引き受けウカワームはハイパーカブトがタランテスワームはハイパーガタツクが相手をするべくそれぞれ定めた相手に向かう。

カブト（大人）「また殺さないといけないのか・・・」

ガタツク（琢磨）「カブト・・・」

カブト（大人）「くっそお!!!・・・どうしてこんな事を」

カブトはこれ以上は無駄に命を奪いたくはないと言うのが本音だが自分たちができる事は相手の存在を完全に消滅させると言う事のみ・・・つまりはまた命を奪う事なのだ・・・カブトは迷いを断ち切る様にカブトクナイガンをクナイモードに変形させて構えるがブロッサムはそれを察してカブトを静止する。

ブロッサム「カブト・・・辛いならもういいですよ。」

カブト（大人）「ブロッサム・・・でも」

ブロッサム「貴方はさっきの戦いで十分苦しみました。今度は私たちが苦しむ番です!!!皆、行きますよ!!!」

3人「うん!!!」

ブロッサムは今こそ自分たちの究極の力であるハートキャッチミラージュの力を見せる時だといつの間にか来たシプレたちがハートキャッチミラージュをブロッサムに渡すとハートキャッチミラージュに金色に光る種をセットするとミラージュが輝きだして4人を光に包む。

4人「鏡よ鏡プリキュアに力を!!!」

その言葉と共にブロッサムがハートキャッチミラージュの赤、青、金、銀に光る4つのボタンを順番に押していくとミラージュが黄金に光りミラージュの鏡の部分についていた部品の様なものがピアス

やティアラに変わり4人に装備されるそして今度は赤、青、金、銀の4色の光がそれぞれブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトを包んでいくと姿が一瞬で変わる。

4人「世界に輝く一面の花！！ハートキャッチプリキュア・スーパーシルエツト！！！」

カプト（大人）「アレがブロッサム達のパワーアップ形態」

ガタツク（琢磨）「天使・みたいだ」

カプトとガタツクは4人の姿に感動する以外何も出来なかった・・・4人の姿淡い色のドレスに包まれていてその姿は天使を連想させる様な神々しく美しい姿で神秘的でもあり聖なる力を感じさせるものだった。

ワーム達「グルルウウウウ！？・・・グオオオオオオオオツ！！！！」

4人「花よ咲き誇れ！！プリキュア・ハートキャッチオーケストラ！！！！」

姿を変えたブロッサム達にサナギのワームは動揺するのだがそれがどうしたと向っていくが4人はそれを待っていたとばかりに自分たちの最強技であるハートキャッチオーケストラを発動させる。すると4人の後ろに巨大な女神が姿を現す。4人のそれぞれの必殺技のアイテムを取りだすとブロッサム、マリンムーンライトはタクトを識者のように振りかざしサンシャインはシャイニータンバリンを叩いていつて音を出す。それを合図にしたかのように巨大な女神は巨体に合わないほどのスピードでサナギのワームに向かっていく。

ムーンライト「ふん！！！！」

サンシャイン「はああ！！」

マリン「たあああー！！」

ブロッサム「たああああー！！！！！！！！！！」

4人がそれぞれ掛け声を上げていくと女神はワームの後ろに立ち拳にエネルギーを溜めていくとその拳を一気にワーム達に振りおろす。



電子音「KABUTO POWER!! HYPER BLADE  
!!!!」

ハイパーカブト（総司）「はあああああつ!!!!!!」

ハイパーカブトはパーフェクトゼクターのグリップ部分にある赤黄色、水色、紫の4つのボタンの内赤いボタンを押すとパーフェクトゼクターにパワーが集まりそのまま光子の刃でウカワームを斬りつけると爆発が起こったのだが……

ハイパーカブト（総司）「逃げられてか。」

そう斬りつけたのはウカワームではなくサナギのワームだったのだ。ハイパーカブトはあたりを見回すのだが既にウカワームはクロックアップで逃げているため何処にいるかは見当がつかない……今から探すのは恐らく不可能だとカブトはウカワームを追うのを諦めるしかなかった。

ハイパーガタック（新）「うらあああつ!!!!!!おりゃああああつ!!!!!!」

タランテスワーム「グウウオオオツツ!!!!!!グウウウウウウツ!!!!!!」

その頃ハイパーガタックは加賀美新が得意のパワー攻め戦法に追いつめられていた。タランテスワームは何とか反撃しようとするのだがハイパーガタックのパワーに押されて既にフラフラのボロボロ状態であった……

ハイパーガタック「ハイパークロックアップ!!!!!!」

電子音「HYPER CLOCK UP!!!!!!」

電子音「MAXIMUM RIDER POWER!!!!!!」

電子音「ONE、TWO、THREE!!!!!!」

ハイパーガタック（新）「ハイパーキック!!!!!!」

電子音「RIDER KICK!!!!!!」

ハイパーガタック（新）「うおおおおりゃあああああああつ!!!!!!!!!!!!」

タランテスワーム「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!」

電子音「HYPER CLOCK OVER!!!!」

ハイパーガタツクはハイパークロップを発動させるとハイパーゼクターの角を倒してマキシマムハイパーパワーを流していく。そしてそのままドメのハイパーライダーキックをタランテスワームに見舞わせてやるとタランテスワームは断末魔を上げていきながら大爆発を起こすのだった。

ハイパーガタツク(新)「うしゃあああつ!!!!」

ハイパーガタツクはタランテスワームを倒すとガッツポーズをして勝利を喜ぶ。するとそこにカブトとガタツク更にブロッサム達もやってきて何やら冷やかな目でハイパーガタツクを睨んでいるようにみえていく。ハイパーガタツクはその視線に気がついたのか喜ぶのをやめ6人の勢いに押されそうになっていた所にハイパーカブトもハイパーガタツクに合流していった。

カブト(大人)「・・・アンタ・・・何で」

ハイパーガタツク(新)「何でって・・・ワームは人類の敵だからだ倒したまでだけど?」

ガタツク(琢磨)「だからって・・・簡単に殺していいはずはないだろうがよ・・・ワームと言つく奴らも生きてるんだぞ・・・命を簡単に奪う真似していいのかよ!？」

ハイパーカブト(総司)「甘い・・・お前たちもライダーならワームの一匹や二匹殺しているはずだろ?・・・つまらない事で騒ぐんじゃない」

ブロッサム「ワームなんて敵は今回が初めてですよ。私たちは沙漠の使徒と闘っているだけです。」

マリン「そうだよ!!あんな敵今まで私たちも戦った事ないんだから」

サンシャイン「今日出てきた・・・が正確だけどね」

ムーンライト「貴方たちあの敵に詳しいみたいね・・・話を聞かせ



てもらえないかしら？」

ハイパーガタツク（新）「砂漠の使徒・・・なんじゃそりゃ・・・  
ていうか本当に君達ワームを知らないのか？」

ハイパーカブト（総司）「詳しい話を聞く必要があるな・・・どう  
やらこの世界は俺達が今まで旅してきた界とは少し事情が異なるら  
しいな・・・」

ハイパーカブトとハイパーガタツクはワームを知らないというカブ  
ト、ガタツク、プロツサム達に自分達があ知っているワームの事を  
教えまた自分たちが知らないこの世界の事を聞くべく変身を解除す  
るとカブト達もそれに合わせるように変身を解除する。

つぼみ「此処で話すのもなんですしいい場所がありますからそこで  
話を聞きましょう。」

総司「そうか。いいだろうそのいい場所とやらに俺達を案内しろ。

ひより「！お前もいつもでも其処にいないで一緒に行くぞ」

ひより「信用できるのか？ホントに」

新「大丈夫だって・・・多分」

総司「いざとなれば俺がいる。心配するな」

ひより「加賀美の言う事はあてにならないが・・・天道が言うなら  
まあいいか」

新「何で俺の言う事は信用できなくて天道の言う事は信用できるん  
だ・・・」

ひよりのセリフにそうツツコミを入れる新だが二人はそれを無視し  
ている。

大人「この人たちホントに信用して大丈夫か？」

えりか「大丈夫だよ・・・見る限りじゃアタシ達を襲うつもりはな  
いみたいだし」

琢磨「確かに・・・襲うならわざわざ丸腰にはならないか」

大人「・・・仕方ないか。とにかく今は信用するしかないか」

大人はまだ半信半疑だったが琢磨とえりかに説得されて取り合えず  
今の所は信用することにした。そして場所は変わって植物園へと

移る。

総司「此処がいい場所か・・・確かにいい場所だな」

新「うわぁ」

ひより「凄い」

植物園につくと3人は・・・特に女の子であるひよりは植物園の花の美しさに見とれていた。

総司「では話してもらおうか？この世界で起きている事の全てを。」

大人「その前に名前を聞かせるよ。アンタ達の。」

総司「何を言う。名前は相手に聞く前に自分から名乗るものだろ？」

大人「くっ・・・それもそうだ・・・俺は上原大人」

琢磨「漆山琢磨・・・」

つぼみ「花咲つぼみです。」

えりか「アタシは来海えりか」

いつき「明堂院いつきです。」

ゆり「月影ゆり」

総司に言われたとおり先ずは自分達の名を名乗る。大人は正直この手のタイプの人間は嫌いだ。が今は情報が欲しいし駆け引きの為に素直に従った。

総司「大人・・・良い名前だな。俺は天道総司。天の道を行き総てを司る男」

新「俺は加賀美新。宜しく」

ひより「僕は・・・日下部ひより・・・」

3人も名乗り始めるが総司の偉そうな名乗り方に大人達は勢いに押されそうになるがまあいいかと無視していく。

総司「では改めて聞こうか？この世界の事とお前達が何処まで知っているかをな。」

総司は偉そうにそう言うとベンチに座りながら大人達の説明を促す。大人は正直その態度にムツとしたが琢磨やつぼみ達がなだめてその

場を取り繕う。そしてしぶしぶと大人は総司達に今までの事を丁寧に包み隠さず説明していく。つばみ達がプリキュアという伝説の戦士であることと自分達が仮面ライダーになった経緯や自分以外にも存在する仮面ライダーのこと、そして今日現れた謎の敵ワームについても……

総司「成程な……やはりzectは存在したか。だが砂漠の使徒とか言うやつらとプリキュアについては初耳だ……俺達のいた世界ではワーム以外は人類の敵の類は存在しなかったからな。」

新「だけど俺達の世界と共通点が多いな……まさか矢車さんや影山さんがこの世界にも存在して闇の住人を気取ってるなんてな……」  
「だけどサソードやドレイクはまだ出てきてないみたいだな。あと俺達が知らない知らないライダーがいるみたいだし。」

総司「ああ。ケタロスやヘラクスなんて名前のライダーや須藤というザビーの資格者も俺達の世界では聞いたことない……それに聞いた話しの限りではワームはこの世界には今まで姿を現さなかったがzectやマスクライダーシステムは存在した……聞く限りでも謎が多い」

新「ああ。どうやら俺達はしばらくこの世界にいた方がいいかもしれない」

総司「その通りだ。」

大人「何二人で納得してんのさ？さあ！！俺達の知る限りの情報は話したぞ！！今度はそっちの番だ！！すべて聞かせてもらおうか！！」

大体の話を聞いた所で総司と新は大人達を差し置いて勝手に話を始めていき勝手に物事を決め始めたので大人がそこに割り込んでいき今度はそっちが話す番だと促すのだった。

総司「慌てるな……ちゃんと説明する。一言でいえば俺達はこの世界の間人ではない。このハイパーゼクターの力の影響で時空を超えてやったきた……カブトとガタツクの力を知っているお前たちなら理解できるな？俺達はハイパーゼクターが暴走した影響で時空

を彷徨っているのさ。」

新「俺達の世界ではワームは人類の敵とみなされているんだ。何故ならワームは人を殺して殺した人間に擬態してその人間の記憶も何もかもコピーしてその人間として生活するんだ。それだけなら問題は小さいように見えるけどワームはそれを利用して人を絶滅させそうとするんだ・・・俺達がいた世界でもzectって組織が有るんだけどzectはそれに対抗してマスクド・ライダーシステムを造って選ばれた資格者がワームを戦うというワームと人間の戦争が起きてるんだ。だけどさつき天道が言ったとおりハイパーゼクターが暴走して俺達は現在に至るってわけ・・・」

ハイパーゼクターは突然総司の掌に現れる。それはカブトゼクターと似ているが色が銀色であり大人はみただけでもコレが凄まじいものであると理解できた。

大人「成程な・・・でもこの世界のワームがそうとは限らないと思うんだけど。それに何で戦う必要があるんだよ・・・擬態するにも理由があるんじゃないのかよ？」

総司「ふん甘いな・・・アイツらは人の夢や希望さえも踏みにじる奴らだ。そんな奴らを生かす事に何の意味がある？俺達はワームを倒すためなら非情に徹する。」

新「天道の言うとおりだ。ワームは無差別に人を殺して殺した人に擬態する。俺の弟もワームに殺されたんだ。奴らは生きるためなら簡単に人と人との信頼をも利用する・・・俺達は奴らに想いを踏みにじられた人々の為に戦ってるんだ・・・正直な事言えば子供には理解できる問題じゃない」

琢磨「なっ・・・簡単に子供扱いするなよ!!!俺たちだってアంతらが来る前から身体はって今まで戦ってきたんだ!!!突然出てきたアంత達なんか何が分かるんだよ!!!」

総司「それもそうだな・・・だが一応言っておく。ワームはお前達が今まで闘ってきた奴らなんかとは次元が違うぞ?・・・それでも戦える自信はあるのか？」

大人「……当たり前だろ？俺達の世界は俺達で守る。」

つぼみ「そのとおりです！！例えばどんな苦しい事があってもこの世界は私達が守ります」

総司「ほう。流石カブトと伝説の戦士プリキュアに選ばれただけの事あって度胸があるな？よし、そこまで言うなら。俺もたちも協力しようイパーゼクターが再び暴走する前までの話だな。」

大人「協力って……アンタら……」

新「ワームに詳しい俺達がいる方が戦いやすいだろ？……それに正直君達はまだまだ頼りないからな」

大人「……確かにその通り」

琢磨「俺達はまだ戦いに慣れてない……」

つぼみ「大人さん……琢磨さん」

新にそう指摘されると大人と琢磨は認めざる負えなかった……この二人に比べれば自分達等と……そんな二人を更に追い詰めるかのように総司が口を開いて……

総司「だからついでにお前達を鍛えてやる。カブトとガタツクの資格者ならそれに相応しい力を付けてもらわないとな……あとプリキュアも鍛えてやる。ワームと戦うにはお前達もまだ甘いからな。」  
大人「鍛えるって……マジで？」

総司「マジだ……言うておくが俺の特訓は厳しいから覚悟しておけ」

新「おい天道……相手は子供だぞ？ちよつとはハードル低くしてやれよ」

総司「心配するな加賀美。最初は基礎からしか教えん。」

大人「……いいじゃん？面白いじゃんか！！俺達を鍛えてくれるならどんな特訓でも耐えてやる！！例えばその訓練が地獄のように厳しくてもな！！！」

琢磨「お、俺もだ！！今以上に強くなるのなら絶対に耐えてみせる！！！」

つぼみ「私達も……鍛えてくれるならお受けします」

えりか「天の道か何か知らないけど」

いつき「僕たちだって・・・伊達にプリキュアしてないっ事を・・・

「  
ゆり「見せてあげた方がいいみたいね」

総司「・・・お前達にこの俺が歩く天の道が歩けるか？」

大人「天の道だろうが地獄の道だろうがなんだろうが俺は絶対に歩いてみせる！！！！・・・今以上に強くなってみせる！！！！」

琢磨「そうだ！！！！必ずアンタに付いて行ってみせる！！！！」

つぼみ「当然です！！！」

えりか「やつるしゅ！！！」

いつき「勿論！！！」

ゆり「歩いてみせるわ」

総司「なら見せてもらおうか・・・お前達の歩く天の道を！！！！」

総司は輝く太陽を指さしながら大人達にそう言う・・・これから二人には様々な試練があるのだが二人にはそんなものすべて自分の力にしてやるという決心が総司にも感じられてこそ総司はこの二人を鍛えると決めたのだった。

総司がそう思っている頃の大人は拳を握りしめて心に強い決心をも持って誓うのだった。今より確実に強くなれるのなら例え棘の道だろうが天の道だろうが何だって歩いてみせると・・・もう二度と負けない為にも！！！！

第19話「それぞれが歩く天の道！」（後書き）

砂漠の使徒出せなかつたあゝTT

次回こそは砂漠の使徒に番を与えて天道や加賀美と砂漠の使徒を  
ぶつけようと考えてますゝ

次回もお楽しみに

第20話「新兵器クロックダウンボール!!!」(前書き)

前回までのあらすじ

総司達からワームのすべてを聞いた大人達は戸惑いながらも砂漠の使徒や z e c t 更にワームとも戦う事を決まるのだった。



## 第20話「新兵器クロックダウンボール!!!」

とある薄暗い砂漠の使徒のアジトの一室でサバークは地上で起きている事をデータ化して整理していた。ここ1カ月でカプトとガタツク以外にも急遽姿を現したケタロス、ヘラクス、ザビー、キックホッパー、パンチホッパー、更にはワームという怪人やハイパーカプトやハイパーガタツクという強烈なライダーまでも登場した。ここまでの自体は想定外の一言であり今の戦力では自分達に勝ち目はないかもしれないと考えるほどだった……。だが逆にこの力を自分達のモノにできればプリキュアに勝つことも容易な筈だと

サバーク「仮面ライダーに怪人ワーム……。この二つを上手く利用してプリキュアを倒し世界を砂漠化するにはやはりどちらかの力を手に入れる必要があるな……」

サバークは今の戦力で邪魔者を消し去り心の大樹を枯らして世界を砂漠化するという野望を遂行する手段を考えていたダークプリキュアでさえもカプトとガタツクと互角であったのなら人海戦術で一気に叩き潰せるかとも考えたが……。すると突然モニターから通信が入る……。サバークはやれやれと思いながらその通信に応答するのだった。

？「サバークどうやらまだ地球侵略作戦に手こずっているようだな？・・・そろそろ私も地球に付く事だと言うのに時間がかり過ぎだな？」

サバーク「申し訳ありませんデューン様!!それがプリキュア以外にも新しい戦士が現れまして・・・侵略を邪魔させてしまい・・・」  
デューン「プリキュア以外の新しい戦士だと?・・・ほう、それほどまでにその戦士は強いのか?ふふふっ」

デューンと呼ばれる男はあどけない童顔で少年の様な身形であったが声は冷徹である事が伺える。そうこの男こそ砂漠の使徒のリーダーであり司令官のサバークにすら命令できるほどの実力者であるの

だ。

サバーク「はい。力だけではプリキュア以上かと。ですがご安心ください。既に対策は考えてあります。ただそれには暫し時間がかかりますが・・・」

デューン「ほう？流石私が見込んだ司令官だけの事はあるな・・・いいだろうその件は貴様に任せる。そしてもうひとつ・・・もうじき私も地球に到着する。その時までにある程度作戦を進めておくのだな」

サバーク「はっ！！！」

通信が終わるとサバークは私室から出る。何としてもデューンが地球に来る前に奴らのデータを集めなくてはとサバークは玉座の間へと足を運びながら意気込むのだった。

場所は変わって植物園のでは総司とひよりが自慢の料理の腕前をつぼみ達に披露していた。総司が何処からか持ってきたCDコンポにクラシック音楽をかけながら優雅な雰囲気を漂わせている。

総司「よし！！出来たぞお」

新「おっ！！待ってましたあ」

総司は完成した料理をテーブルの上に持ってくる。今回の天道流まかないは秋の旬のリンゴを使ったリンゴのケーキとリンゴタルトであり見た目も美しく食欲をそそるリンゴのいい香りが周囲を包む。

つぼみ「い、意外です！！天道さんがお料理得意なんて」

えりか「ひよりさんはイメージ付くけどね・・・お、出来たみたい。

おおお！！美味しそう」

いつき「見た目も凄い綺麗」

ゆり「ホントに何でもできるのね」

新「あゝアイツは凄いよ。強いし料理も一流だし」

総司が出したそのリンゴケーキとリンゴタルトにつぼみ達は言葉を失っていた。あの俺様キャラの総司がプロ並みにスイーツを作れるなんて・・・しかもイケメンだし全てにおいて人として完璧す

ぎる（俺様キャラの部分を除けば・・・）

総司「出来たてだから美味しいぞ。ほら早く食べる」

3人「はあ〜い！！いただきますう」

ゆり「いただきます」

新「いただきます」

つぼみ達と新は総司とひよりが作ったリンゴのケーキとタルトを食していく。その味は正に極上の一言でありつぼみ達はまるで天国に昇天するのではないかと思われるほどだった・・・

つぼみ「お、美味しいです！！ホントにプロ級です」

えりか「こ、こんなにおいしいもの生まれて初めてえ〜」

いつき「天道さん凄いく〜」

ゆり「美味しい」

新「流石だな天道・・・それにひよりも待て腕を上げたんじゃないのか？」

総司「当然だ。俺を誰だと思っている？」

ひより「・・・ふふっ」

総司の作ったケーキとタルトを頬張りながら新はべた褒めをする。総司は当然だと自身満々な態度でお決まりの人差指を空にかざすポーズをする。対するひよりは新のべた褒めされたことがうれしかったのかちよつと嬉しそうにほほ笑むのだった。

その頃大人と琢磨はと言うと・・・

大人「・・・ら、ら、来週からテストだとお！！！！???」

琢磨「・・・俺達今まで砂漠の使徒とかライダーとかワームとかと闘ってたから自分達が学生であると言う事を忘れていた・・・どうしようか大人」

大人「ど、どうするも何も・・・赤点だと補修だろ?・・・頑張る以外ないんじゃないか（泣）」

琢磨「だよねえ〜・・・はあ〜・・・」

大人と琢磨は来週からテストであると言う事をすっかり忘れていて

勉強など全く手を付けていなかったのだ・・・しかも大人達の高校は実はつぼみ達を通う明堂院学院と並ぶほどの進学校であり学業のレベルは高い。しかも二人は成績は中間ぐらいであるから少しでも油断したら赤点のオンパレードが発生するのは目に見えていた・・・二人は来週までに今まで習った所を全て隅から隅まで勉強しなければならなのだがそんな事出来るわけがない。どうすればあゝと途方に暮れていた二人の前に夕と傑が現れる。

夕「あらあゝ二人ともかなりお困りの様子でゝもしかしてテストがやばいとか？」

傑「つたく・・・計画性がないからだぞ？」

大人「え？・・・あ！！ゆ、夕さん！！それに傑さんゝ一生のお願い！！テスト勉強伝つて！！！！」

琢磨「お、俺もお願いします！！・・・親友としてお願いします！！！！」

夕「うゝん良いけど夕ダで教えるのなんて割に合わないなあゝ」

傑「言ってるなあゝなんか報酬がないと」

大人「う、わ、分かりました・・・この前お二人が行きたいって言うたケーキ屋に連れていきます。好きなケーキを好きなだけ奢ります。だから勉強教えてください（泣）」

琢磨「俺も奢ります・・・だから助けてえゝ（泣）」

夕「よおゝし交渉成立」

傑「ちやつちやつやりますか」

実は夕と傑は学年で勉強はトップクラスであり大人と琢磨に勉強を教えているのだった。もちろん報酬として二人に色々たかるので大人と琢磨の財布はテスト期間になると金欠になるのだった・・・二人はかなり痛い出費をする羽目になったのだが背に腹は変えられないと夕と傑と契約を結ぶのだった。

場所は変わって砂漠の使徒のアジトの玉座の間。

コブラージャ「サバーク博士今度はこの私に出撃命令を！！」

サバーク「いいだろうコブラー ज्या・・・だが今回はコレを使ってもらう。」

コブラー ज्या「コレは？」

サバーク「それは対仮面ライダー用に私が開発した新兵器クロックダウンボールだ。」

コブラー ज्या「この玉が？」

サバーク「それはスイッチを入れて投げるだけで半径100メートルは仮面ライダー特有のクロックアップを封じる効果がある・・・ただしそれはまだ試作段階で効果は30分が限界だ。」

コブラー ज्या「30分もあれば十分ですよ。この私が仮面ライダーとプリキュアを倒してみせましょう。」

サバーク「期待しているぞコブラー ज्या・・・」

コブラー ज्याは黒い水晶を手を持ちながらこの機会は必ず活かすと宣言するようにコブラー ज्याは瞬間移動で地球にへと向かうのだった。

大人「また今月もピンチか。とほほほ」

琢磨「夕と傑の奴・・・華奢だけど結構大食いだからな。覚悟しないとな」

大人「そうだよな」

大人&琢磨「はあ」

大人と琢磨は大人の家でテスト勉強をしていたのだが傑と夕が小腹がすいたと言う事で近くのコンビニで適当にお菓子を買っていた。

その帰り道に大人はクラスメイト大石快人の顔を見かける。

大人「あ、アイツ快人じゃないか？」

琢磨「お、ホントだ何してんだろ？」

大人「お〜い快人お〜」

快人「おお〜大人に琢磨・・・どうしたんだい？こんな所で？」

大人「テスト勉強での必要なモノの買い出しだよ。君は？」

快人「ちよつと気晴らしに散歩してたんだ。来月の事が気になって」

琢磨「お前の右目の手術は来月だったな？」

快人「うん」

大人「そうか。それで・・・そうだ一緒に俺の家に来ないか？夕とか傑のいるから盛り上がるぞ！！」

快人「いいの？・・・ならお邪魔させてもらおうかな？」

琢磨「おしく決まり。じゃあ行こうか！！」

快人「ありがとう」

快人は自身が幼い頃から右目に病気を患っていて快人の人生にとつてもそれは重い足枷になっていた・・・それでも快人は誰にも気遣いをさせずに親さえも心配させまいと頑張ってきた・・・そしてとうとう右目の病を完治できる手術が出来る事が決まり快人は最初こそ喜んだがそれは不安にもつながっていた・・・もしも手術が失敗したら・・・そんな恐怖が彼のこころの花を蝕んでいたのだった・・・。

大人達はそんな快人を励まそうとて捨て勉強をしながらも和気あいあいと時間を過ごしていくのだった・・・そして時間は過ぎていき夕方になり・・・

夕「あ、そろそろこんな時間だ・・・んじゃ大人今日教えた所はちゃあ〜んと復習しておくように！！」

大人「ハイよ〜明日も頼んだよ　んじゃ明日学校でなあ〜」

琢磨「ほいよ〜」

傑「ほんじゃなあ〜」

快人「じゃあね大人」

大人は4人を玄関まで見送るとすぐに部屋まで戻り今日やった部分を夕に言われたとおり復習しておく。また明日夕に教えてもらう際に文句を言われないようにと

快人「・・・僕の右目ホントに治るのかな」

琢磨達と別れた後の快人は夕方の道を当てもなく歩いていた。そして自分のお気に入り場所である湖に来ていた。此処は快人の秘密

の場所であり何か迷いが合った時にそれを消し去るために来る場所でもあった。琢磨達が励ましてくれたのはいいのだが逆にそれが治らなかつた時の不安を煽る事になり更にこのころの花をしおらせてしまつていくのだった。・・・するとそこにコブラージャが現れて。・・・コブラージャ「ほう？心の花がいい具合に萎れてるね？」

快人「!?!?・・貴方・・誰？」

コブラージャ「ふふつ・・名乗るほどの者でもないよ。君のこころの花頂くよ!!！」

快人「えつ？」

コブラージャ「こころの花よ出てくるがいい!!！」

快人「うわああああああつ!!!!!!????」

コブラージャ「さて何が言いかな?アレがいい!!!デザトリアンのお出ましかあ!!!!」

コブラージャは何かデザトリアンの器となるものを探していると湖の近くにあるボートに目をつけてこころの花のクリスタルと融合させていく。

デザトリアン「ぬおおおおおおお!!!!!!!!!!」

その頃の植物園にいたつぼみ達は。・・・

薫子「大変よ!!!デザトリアンが!!！」

つぼみ「久々に砂漠の使徒ですか!!！」

総司「ほう?とうとう出たか。・・・どんなに奴が楽しみだな加賀美俺達も行くぞ!!！」

新「勿論だ!!！」

つぼみ達4人と総司と新はデザトリアンが現れたと言う場所へと向かう!!！。

その頃自宅の大人は。・・・

大人「はあく大変だ。・・・何でこうなるのかなあくんつ?電話?琢磨か。・・もしもし?」

琢磨「大変だ！！デザトリアンが現れたぞ！！」

大人「何？・・・ちっ！！こんな時に俺もすぐに行く！！」

大人はベルトをカバンに入れて自転車に乗るとデザトリアンが泡られたと言う場所に向かう。

デザトリアン「ぐおおおおおっ！！！！」

コブラージャ「ふふふっ・・・いいぞ！！もつと暴れてすべてを破壊しろ！！」

そのころデザトリアンは町を無差別に破壊していき欲望のままに暴れていく・・・コブラージャもいい気分になりながら暴れ様を見物していく・・・だがすぐにお約束の彼女達がやって来るのだった。

総司「アレがデザトリアンか・・・締まらん身形だな」

新「でもデカイな」

つぼみ「あれは誰の心なんです？」

シプレ「こころの花を取られたのはこの人ですっ！！」

大人「快人！！」

えりか「知り合い？」

琢磨「俺達のクラスメイトだよ！！」

総司「コレはほっておいたらどうなるんだ？」

コフレ「こころの花がすべて枯れたらこの人はこのまま元には戻れないですっ！！」

新「何だって!？」

コブラージャ「現れたようだねプリキュアに仮面ライダー！！！！・・・

・ん？二人増えたみたいだな？だがボクの敵ではない」

総司「ほう？大した自信だな？この俺挑発するとはな」

新「俺達を舐めると怪我だけじゃすまないぞ？」

総司と新はコブラージャの挑発にそう言い返していくとカブトゼクターとガタツクゼクターが二人の手に止まるとライダーベルトにそれぞれカブトゼクターとガタツクゼクターを装填していく。

総司&新「変身！！！！」



電子音「HENSIN!!!」  
カブト（総司）&ガタツク（新）「キャストオフ!!!」  
電子音「CAST OFF!!! CHANGE BEETLE  
!!!（STAG BEETLE!!!）」  
まずはベテランの風格を見せてやろうと総司と新が変身する。大人と琢磨のカブトとガタツクとは違いそれぞれ戦いのベテランと言う事を象徴するようなオーラが放っていくのだった。

大人「あらら・・・先に変身しちゃったし・・・琢磨俺達も行くか？」

琢磨「勿論」

大人&琢磨「変身!!!」

電子音「HENSIN!!!」

カブト（大人）&ガタツク（琢磨）「キャストオフ!!!」

電子音「CAST OFF!!! CHANGE BEETLE

（STAG BEETLE!!!）」

大人と琢磨も総司と新たに続くようにそれぞれライダーベルトにカブトゼクターとガタツクゼクターを装填していき高校生カブトとガタツクが現れる。総司達と比べるとルーキーっぽく見えるがそれでも総司達に劣らないオーラを放っているのだった。

つぼみ「私達もいきますよ!!!」

3人「うん!!!」

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう!!!（ですっ

&でしゅ!!!）」

4人「プリキュア・オープンマイハート!!!」

4人4色の光に包まれていくとそれぞれの力の象徴であるプリキュアの姿に変わる。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!」

マリリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!」  
ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!」  
4人「ハートキャッチ・プリキュア!!!!」

カブト（大人）「お前が幹部の最後の一人のコブラージャだな？快人の心を返させてもらうぞ!!!」

コブラージャ「ふん・・・僕は今までの奴らとは違うよ？それに今日はお前達ようにとっておきがあるんだからな」

ガタツク（琢磨）「へえそれは楽しみだな・・・だけど快人を利用した報いを受けてもらう!!!」

コブラージャとカブト達の激戦が始まった!!!砂漠の使徒の新兵器であるクロックダウンボールに打ち勝つ手はあるのだろうか？

第20話「新兵器クロックダウンボール!!!」(後書き)

はあ〜いコブラージャさん登場です。

次回は・・・天道と加賀美の本気を大人達に披露します。

次回もお楽しみに

## 人物紹介 オリキャラサイド

上原大人 / 仮面ライダーカブト

仮面ライダーカブトの資格者。マイペースで誰にも優しい性格で人に好かれる。幼少期はやんちゃでよくつぼみと遊びに行くほどの仲良く昔は兄貴分だった。カブトの資格者として目覚めてからはつぼみ達の苦悩を知り自分もつぼみ達をサポートしていきたくて思っている。勉強は苦手であり期末テストではいつも一夜漬け。夕との事は気になってはいたが当初は夕を遠ざけていてそれが夕をデザトリアンにするきっかけになってしまった。カブトの力を手に入れた事を機に夕を守る事も視野に入れるようになる

漆山琢磨 / 仮面ライダーガタック

仮面ライダーガタックの資格者。バスケット部に所属でかなりの努力家。大人やつぼみ達とは幼いころからの付き合いであり大人とは大親友ムードメーカーな所もあるが偶に一言多いために周りから叩かれる事もある。大人と同じく勉強は苦手で大人と共にテスト前には一夜漬けをする事が多い。彼女はいるが最近はいないが最近はいりかゝの事が気になっているのか妙に仲がいい。

里中夕 / 仮面ライダーフェアリー

大人、琢磨の幼馴染。大人の事を好いていたが大人には届かずについて悩んでいた所をデザトリアンにされてしまった。しかしそれを機に大人に想いが届き見事二人は恋人関係になった。実は勉強はかなり得意で学年でもトップクラス。フェアリーに覚醒する際に命を落とすのだがライダーブローチの力で命を取り戻す。

影山傑 / 仮面ライダークワカブト

大人と琢磨の悪友。バスケット部所属で琢磨とはバスケットでパートナーを組んでいる。夕と同じく勉強は学年でトップで夕とは勉強面でライバル同士。琢磨と同じく彼女はいないのだが初対面でいつきの事が気になっているという噂が流れているが……

ダークカブトに覚醒の際に命を落とすのだがライダーベルトの力で命を取り戻す。ダークカブトに目覚めてからは作戦参謀として大人達をサポートする場面が多くなった。

すどつ けんいち  
須藤健一 / 仮面ライダーザビー

シャドウ隊隊長。かつては一般兵卒だったが初代隊長の矢車想、影山瞬の失脚の後安西が隊長になり安西が裏切った後にシャドウ隊隊長に就任した。ZECTで出世する事に野望を燃やしていたのだがZECTの真意を知り決別を決意する。

あんだい なおと  
安西直人 / 仮面ライダーコーカサス

矢車想、影山瞬に代わるシャドウ隊2代目隊長だったが三島の全世界ワーム化計画の真意を公表しようとした矢車、影山の意味を継ぐべくカブト、ガタツク、ダークカブトのベルトを奪いZECTから逃亡するも捕えられてしまう。その後ハイパーゼクターの被験者として三島に利用された揚句アンドロイドのように改造させられてしまう。

仮面ライダーフェアリー

蝶がモチーフの仮面ライダー。カブト、ガタツク、ダークカブトと同時期に開発されていたのだが資格者が見つからなかった為に当初は開発されている事が三島しか知らなかった。

変身アイテムはブローチ型の「ライダーブローチ」

標準装備「フェアリーレイピア」；レイピア型の武器。ガンモードに変形可能でバタフライゼクターと合体させる事で必殺技が発動可能。

必殺技：フェアリーレイプ使用時：レイピアモード「ライダー・ストライク」

ガンモード「ライダー・バース

ト」

フェアリーゼクターを右足にセットして放つ「ライダーキック」

第21話「パーフェクトゼクターの新しい力！」（前書き）

前回までのあらすじ

右目の病気の手術が決まりナーバスになる快人にコブラージャが漬  
け込み快人をデザトリアンに変貌させる。大人達は快人を助けるべ  
く奮闘するがコブラージャは対ライダー用の新兵器を隠し持ってい  
たのだった。

## 第21話「パーフェクトゼクターの新しい力！」

デザトリアン「手術しないと目が見えない〜でも手術で痛い思いをするのだが怖い!!!でも目は見るようになりたい〜」

カブト（大人）「快人・・・」

ガタツク（琢磨）「やっぱり手術の事を気にしていたのか・・・アイツの恐怖を利用するなんてゆるさねえ!!!」

デザトリアンは欲望のままに暴れていく・・・自身の悲痛な叫びを上げていきながら大人と快人はその声を聞き快人を利用したコブラー ज्याに怒りの視線を向けていた・・・コブラー ज्याはそれを静観しながらも大人達にとっておきのクロツクボールを見せつけるように取り出していくと・・・

コブラー ज्या「ふふふっ早速取って置きを使ってみようじゃないか。発動せよクロツクダウンボール!!!」

コブラー ज्याは大人達が変身する対面ライダー用の兵器であるクロツクダウンボールを空に向かって投げていく。するとクロツクダウンボールは赤い光を放つていくと大人達にその光が降り注いでいく。

カブト（大人）「!!!?・・・な、何も無い様だけど・・・」

ガタツク（琢磨）「そんな玩具で俺達と闘おうなんて舐めた事するな?一気に片付けてやる。クロツクアップ!!!」

ガタツク（琢磨）「え?・・・おい、何で!?おお〜い!!!、この、このっ!!!」

琢磨はクロツクアップで一気に片付けてやるとクロツクアップを発動させるべくベルトのスイッチを叩くが反応がない・・・発動すまで何度も叩くのだが反応がないままであった。

カブト（総司）「クロツクアップが封じられたようだな・・・仕方がない今回はクロツクアップ無しで戦うしか」

ガタツク（新）「ああ。詰まんねえ〜ことしやがって・・・行くぞ



天道！！」

カブト（総司）「ふん。」

総司と新は呆れたようにそう言う前に先陣を取るかのように走りデザトリアンの両足に凄まじいパワーのケリを放つ。そのパワーでバランスを崩すと同時に二人は飛びあがり同体に追撃の回し蹴りを放つ。二人の絶妙なコンビネーションの前にデザトリアンは凄い勢いで飛ばされて地面に身体を叩きつけられてしまい土煙が上がる。

ブロッサム「す、凄いコンビネーションです」

マリリン「二人ともやるう」

サンシャイン「それじゃ私たちも！！」

ムーンライト「行くわよ！！」

続いてブロッサム達が攻撃に移る。デザトリアンは何とか立ち上がるが立ち上がると同時にムーンライトとサンシャインが先ずはがデザトリアンの懐に入りラツシュで一気にダメージを与えていきラツシュの最期に二人のパンチで後ろに飛ばされると後ろに回り込んでいたブロッサムとマリリンが背中からケリを放って再度デザトリアンを地面に沈めていく。

カブト（大人）「すげえ……」

ガタツク（琢磨）「流石・天道さんと加賀美さん……それに戦いに慣れているブロッサム達」

カブト（大人）「俺達もそろそろ行くか？アイツらに負けないように。」

ガタツク（琢磨）「おう！！暴れてやる」

デザトリアン「うおおおおっ！！！！！！目が……目が見えるようにになりたい！！！！」

大人と琢磨が今度は自分達の番だとデザトリアンに向うのだがデザトリアンもいつまでもやられっ放しではないと腕をボートのカヌーの様なモノに変形させるとブロッサム達や総司と新更に向ってきた大人達に振り全員は凄まじい勢いで飛ばされてしまっが総司と新は飛ばされても鍛え上げた運動神経を使い何とか着地する。

デザトリアン「目が見える普通の人間に生まれたかったあ！！！！」  
コブラージャ「ふん・・・目が名乗るのにそれを恐れるなんて只の腰ぬけじゃないか」

カブト（総司）「ほう、腰ぬけか確かにそうかもしれんな？・・・だが貴様のように人の弱みに付け込んで自分は戦わないような奴に言う資格はない。大人、手を出すな今回は俺の力を見せてやる。加賀美。行くぞ！！」

ガタツク（新）「ああ。ブロッサム達も見ていてくれ。天道が起るとどうなるかを」

総司はどうやらコブラージャの態度が怒りにふれたらしく珍しく怒りのこもった口調でそう言うと大人達を生していき腕を天にかざす。すると総司の手の中で時空の狭間が発生してハイパーゼクターが総司の手の中に現れる。

カブト（総司）「よく見ておけ。本当の太陽の輝きがどんなものを！！！！ハイパーキャストオフ！！」

電子音「HYPER CAST OFF！！ CHANG H YPER BEETLE！！！！」

カブトはハイパーゼクターをベルトの左腰にセットしていくとそのままハイパーゼクターの角を倒す。すると総司のカブトのカラダが光出すとゼクターホーンが一回り大きくなることから変化が始まりハイパーゼクターのエネルギーを受けた事によりカブテクターという鎧が再構築されていき目の色も水色からエメラルドグリーンに変わっていく。そうコレが仮面ライダーカブトの最終形態であるハイパーフォームだ。

ガタツク「琢磨、ガタツクの本当の力お前も見るといい。ハイパーキャストオフ！！」

電子音「CHANGE HYPER STAG BEETLE！！！！」

新の手にもハイパーゼクターが現れて総司と同じようにハイパーゼクターをベルトにセットしてゼクターの角を倒すと角が大きくなり

光が集まりガタックプロテクターが再構築されてカブトと同じように装甲が強化される。だがクロっアップが封じられてしまっているのにどう戦うのだろうか？

コブラージャ「ふん・・・そっちがパワーアップするのならこっちもパワーアップさせてもらうよ！！闇に沈みさーくな心に支配されるのだークブレスレット！！！」

コブラージャはダークブレスレットを発動させてデザトリアンと融合する。それにより快人のデザトリアンは両腕がカヌーに変形していき目付きも鋭くなる。すると快人が封印されている球から快人の悲鳴が・・・

カブト（総司）「！？何だこの声は？」

ブロッサム「快人さんの声ですね・・・このままだとこころの花が枯れてしまいます！！」

ガタック（新）「なら一気に決めるぞ天道！！」

カブト「（総司）」その方がよさそうだ。」

デザトリアン「そんな簡単いくと思うなよ！！！！」

総司は腕を空にかざしていきパーフェクトゼクターを出現させ新はガタックダブルカリバーを強化されたハイパーガタックダブルカリバーを装備していくと強化されたスピードで一気に突進していく。

カブト（総司）「はあああああっ！！！！！！」

ガタック（新）「うおおおいりやあああああっ！！！！！！」

コブラージャ「おのれっ！！！！ぐううううっ！！！！？」

デザトリアンの攻撃を交わしながらパーフェクトゼクターとハイパーガタックダブルカリバー縦にも横にも斬りつけていく。その隙のない斬りつけラッシュはコブラージャの反撃の隙を与えない。コブラージャは次第にペースを総司達に掴まれたまま反撃が出来ずスタミナ切れを起こしてしまう。

カブト（総司）「離れてろ加賀美。アレを使う。」

カタツク（新）「分かった。」

総司はは此処でカブトの究極技を見せてやるとパーフェクトゼクターを空に翳す。するとそれに合わせたかのようにハチ、トンボ、サソリのゼクターが集まりパーフェクトゼクターに合体する。合体したパーフェクトゼクターはバチバチと火花を散らしながエネルギーを蓄えていて凄まじいパワーが感じられる。総司は更に赤、黄、水色、紫の4色のボタンを順番に押していく・・・

電子音「KABUTO - POWER!! THEBEE - POWER!!  
DRAKE - POWER!! SASSWORD - POWER!!  
All Zector Combine!!」

カブト（大人）「アレはザビーゼクターか？」

ブロッサム「どうしてザビーの変身アイテムが？」

ガタツク（新）「あれがパーフェクトゼクターの新しい能力。パーフェクトゼクターにザビー、ドレイク、サソードのライダーのゼクターが合体させる事で発動するパーフェクトモード。パーフェクトモードとなったパーフェクトゼクターは最強の武器と進化する。あの武器の威力はあらゆる敵を粉碎する。」

カブト（総司）「マキシマムハイパータイフーン・・・はあああああああつ!!!!!!!!!!」

電子音「MAXIMUM HYPER TYPHOON!!!!」  
コブラージャ「ちっ!!!!」

パーフェクトゼクターは電子音と共に刀身が巨大化していき総司はそれを横に振りデザトリアンを斬りつけるとデザトリアンは衝撃で飛ばされてあまりのダメージに動けなくなってしまふ・・・一方コブラージャはと言うとダメージの大きさを察したのか技を受ける前にデザトリアンから脱出するのだった。

カブト（総司）「今だ!!!浄化しろブロッサム!!!」  
ブロッサム「はい!!!」

4人「鏡よ鏡プリキュアに力を世界に輝く一面の花!!!ハートキャ

ツチプリキュア・スーパーシルエット!!!!」

4人はスーパーシルエットに変身するべくハートキャッチミラージュの力を発動させてスーパーシルエットに変身する。

4人「花よ咲き誇れ!!!!プリキュア・ハートキャッチオーケストラ!!!!」

ムーンライト「ふん!!!!」

サンシャイン「はああ!!!!」

マリリン「たあああ!!!!」

ブロッサム「たああああ!!!!」

女神を出現させるとその拳を一気にデザトリアンに叩きつけていきデザトリアンを聖なる光に包んでいき浄化させていく。

4人「はあああああああああああ!!!!!!!!!!」

デザトリアン「ぼわわわわあ~~~~ん」

デザトリアンの浄化が完了するところのはなのクリスタルが出現していきブロッサム達がそれをキャッチする。

コブラージャ「おのれ・・・まさかあんな隠し技があったとは次こそは貴様らを!!!!」

コブラージャは捨て台詞を吐いてその場から消える。それと同時に大人達は変身を解除していき人間の姿に戻った快人を解放する。

快人「・・・こ、此処は・・・大人? 琢磨も・・・僕は一体?」

大人「お前湖で寝てただぞ。」

快人「そうだったの?・・・そう言えばこの頃寝不足だったから・・・」

快人は湖で横になったいる所を大人に起こされる。辺りは真っ暗でどうやら日が暮れたようだった。快人は何かバツが悪そうに黙りこくるが大人がそこにまた口を開く。

琢磨「手術の事ですか?」

快人「うん・・・不安なんだよ。ホントに右目が見えるようになる

のこなつて・・・」

大人「大丈夫だよ。・・・絶対見えるようになる！！俺が保証する！！」

快人「ふふっ・・・君達の保障されてもな」

大人「お、言うね」

快人「ありがとう・・・何かスッキリしたよ。」

琢磨「そうか・・・頑張れよ！！」

快人は吹っ切れたのか意気揚々とした気分でその場を後にするのだった・・・これで不安も取れただろうと大人達もその場を後にする・・・

場所は変わり砂漠の使徒のアジトでは・・・

サバーク「アレがカブトの新しい力か・・・だが既にデータは集まった。後は時間さえあれば・・・ふふふふ・・・ははっははははははは！！！！！！！！！！」

サバークは今回の作戦の失敗を価値あるものとみたようだ・・・そうカブトのデータは集まった。後はそれに対抗する新戦力を作るまででありそのための下準備は既にできている。後は時間だけだとサバークは不敵な笑いを浮かべていくのだった。

第21話「パーフェクトゼクターの新しい力！」（後書き）

今回はちょっととびとびだと思いましたがご勘弁を。

次回はドレイクとサソードが……

次回もお楽しみに

第22話「気まぐれなトンボと高貴なサソリ」(前書き)

前回までのあらすじ

ハイパーカブトのパーフェクトゼクターの新しい力を見せつけるのだがサバークはそれを狙っていたかのようだった……





司のカウンタースタイルの術中にはまり総司の優勢という形で時間が過ぎていく・・・

電子音「CLOCK OVER!!!!」

カプト（総司）「センスはまあまだ。だが戦い方にムラがあるな」

カプト（大人）「はあ、はあ・・・」

カプト（総司）「焦っても強く離れない・・・確実に己を磨け。ブ

ロツサム達に追い付きたいのならなおさらな。」

カプト（大人）「天道さん・・・」

カプト（総司）「次はプリキュアだ。ブロツサムとサンシャイン・・・来い」

クロツクオーバーが終わるころには大人は完全に体力を使い果たし膝をついた状態でバテバテになっていた。総司は大人に焦らず自分のペースで強くなれと諭して手を貸して大人を立たせる。大人はその言葉に納得したようで自分に足りない何かを見つけた手がかりになったと確信するのだった。

その頃琢磨と新はと言うと・・・

ガタツク（新）「ほらもうばてたのか？・・・こんなんじゃガタツクの名が泣くぞ!!」

ガタツク（琢磨）「くっ!?・・・くそおっ!!!!・・・うおおおおっ!!!!!!」

新と琢磨は互いにガタツクダブルカリバーで斬り合いをしていたのだが新の慣れた剣技に琢磨は追いつめられる形になってしまったのだ。琢磨は何とか新の猛攻に耐え抜いていくのだが新は琢磨に容赦がなくカリバーで斬りつける。

ガタツク（新）「・・・どうした?こんな力じゃ誰も守れないぞ」

ガタツク（琢磨）「はあ、はあ、はあ・・・分かってるよ・・・そんな事!!」

フラフラになりながらも琢磨は何とか立ち上がりまだ諦めていないと言う様にカリバーを構えながら新に向かうが・・・

ガタツク（新）「はあああつ！！！」

ガタツク（琢磨）「うわあああつ！！??」

新は琢磨のカリバーを薙ぎ払うとそのまま琢磨の胴をカリバーで斬り裂く。流石にそのダメージにはガタツクのアーマー自体が耐えきれなかったようでガタツクゼクターが飛び去り琢磨の変身が解除されてしまう……

琢磨「はあ、はあ、はあ……」

ガタツク（新）「琢磨、お前はお前にしかなれない……だから戦いでも自分の戦い方を見つける。それがお前に足りないものだ。」

琢磨「加賀美さん……はい！！」

ガタツク（新）「よおしく次はマリンとムーンライトの番だ。二人は俺と組み手をしてもらう。」

新の言葉に琢磨は自分の戦い方を見直すチャンスだと思った……確かに琢磨の戦い方は何処か自分らしくなかった……それが何かは分からないが自分らしく戦えればと……

総司「今日の訓練はコレで終了だ。明日は更に厳しくするかのそのつもりでいる。では解散！！」やっ

と総司の号令と共に大人と琢磨は、つぼみ達はへとへとになりながらもそれぞれ帰宅の帰路につく。今回の訓練はまだ基礎編で次からは初級編に入るらしい。今日の基礎でもしんどかったのに今後は更にハードルが上がるのかと大人達は身が縮む思いだったがソレも強くなるため……ならば耐え抜いてやる……そう二人は自分に言い聞かせて口の一つもこぼさなかった。

そんなきび言特訓を続けていたある日の事つぼみ、えりか、いつきは特訓に明け暮れる大人と琢磨に気張りすぎないように何か出来いかと総司と新による特訓が始まる前に集まって話っていた。

つぼみ「もう今日で5日ですね……あの特訓が始まってから」

えりか「うん。2人とも焦ってる様にも見えるよね……なんか

頑張りすぎってどうか」

いつき「そうだね。・・・二人ともあの時負けたシヨックが相当大きかったみたいだし。」

つぼみ&えりか「うーん・・・」

いつきはあの時の地獄兄弟の負けた事を思い出していたが自分達も砂漠の使徒との戦いで負けた事はあるためそれほど気にはいなかったのが大人と琢磨は違ったらしいと3人は思う。

えりか「そうだとたまには皆で遊びに行くってのわ？」

つぼみ「いいですね！！。たまにはリフレッシュしてストレス発散しないと！！」

いつき「そうと決まれば天道さん達に言って来るよ。」

そう言うわけでつぼみ達の提案で今日は特訓は休みにして最近できたシヨップングモールに遊びに行く事になった。メンバーは大人、琢磨、夕、つぼみ、えりか、いつき、ゆり、総司、ひより、新というメンバーとなった。

大人「こんなのが最近できたなんて知らなかったな・・・」

琢磨「そうだな・・・さて今日はどうするか」

総司「俺とひよりは今晚の買い出しに行く事にする。お前達は適当に遊んで置け。」

大人「天道さん・・・此処でも自分中心とは」

夕「アレがもう一人のカブトに変身する人・・・ホント俺様キャラだね」じゃ私達も適当に遊びに行きますか！！」

つぼみ&えりか&いつき「おう！！」

ゆり「たまには買い物もいいわね」

大人「買い物・・・」

琢磨「嫌な予感が・・・」

新「俺達も何処かに行こうか？」

大人&琢磨「荷物持ちにされる前に・・・」

大人、琢磨、新は女性陣が買い物をするという言葉を聞くと嫌な予感しかしなかった・・・大体このパターンからすれば男が先ず女性

の買い物でさせられる荷物持ちという辛い役目をさせられる……  
そうなる前に自分達も総司とひよりと同じく何処かに適当に散ろう  
とするのだがつぼみ達がそれを許すわけがなく……

つぼみ「大人さあ〜ん何処に行くんですか？」

大人「え？……ああ〜……いや、その……」

えりか「まさかあ〜荷物持ちが嫌だで何処かに逃げようとか考えて  
ないよねえ〜？た・く・ま・さ・ん〜」

琢磨「……ちよ、ちよっとトイレに……」

タ「トイレはあつちだよ？」

大人「いや、だからあ〜その……」

新「もう無理だ……諦めよう」

大人&琢磨「はい……」

3人は観念したと言う様に女性陣の買い物に付き合うのだが……  
やはり荷物持ちをする事になりその量は3人ではさばききれないほ  
どの量であった……

大人「……やっぱりこうなったか……」

琢磨「お、重い……」

新「ど、どんだけ買うんだ……」

大人、琢磨、新はそう思いながらもまだ買い物続けると言う5人  
につきあいながら増える荷物を絶妙なバランスで支えていくのだっ  
た。そして買い物も終わり植物園への帰り道。

大人「あの一つ質問何ですが……もしかしてこの荷物それぞれ  
自宅まで運ぶのでしょうか？」

タ「当然でしょ？」

えりか「だつてね〜？」

ゆり「男の子なら黙って運んでくれるかと思つたけど」

大人&琢磨「「ああ〜〜」やつぱりい〜〜」

大人と琢磨はやはりかと思つて落ち込みながらも荷物を運ぶ……だがコ  
しも修行のうちだと思つて黙って運ぶのだった。そしてやつと重た  
い荷物を植物園まで運び終わり休憩だとだらけるのだがそこに二つ

のカブトゼクターが飛んできて何やら急げと促すような仕草をする。大人「どうした？そんな風に慌てるなんて・・・」

総司「どうやら・・・ワームが出て様だな。丁度いい特訓の成果を試す時が来たようだ。」

新「皆行くぞ!!!」

二つのカブトゼクターは二手に分かれていく。どうやらワームは複数現れたようで総司、新、いつき、ゆりのメンバー、大人、琢磨、つぼみ、えりかのメンバーに分かれる事となった。大人達が向った場所には帽子をかぶりギターケースを持った男とそのツレの少女がワームのサナギに襲わそうになっていたのだがその男はワームの攻撃を避けていて逃げるそぶりを全く見せなかった。

大人「何やってるんだよアンタ早く逃げて。」

？「そう言う貴方こそ早く逃げた方がいいのでは？やつは私が狙いのようですし・・・仕方がない。不本意ですが渡されたコレを使いますか。」

大人「え？」

男は何やら棒の様なものを空にかざすと巨大なトンボ型のメカであるドレイクゼクターが現れ男が持つ棒の様なアイテムであるドレイクグリップに合体して銃になる。

大人「!!!?・・・まさかアレは」

えりか「このパターンは」

つぼみ「もしかして・・・」

琢磨「・・・ライダーか？」

？「変身!!!」

電子音「HENSIN!!!」

4人はまたもや新しいライダーの登場かと思いつつも男の変身を見度とけていく。男は変身と言葉を発すると身体はヒイロカネに包まれていき仮面ライダードレイクへと姿が変わっていく。

ドレイク「ゴン・・・離れてろ」

ゴン「分かった・・・」

男が連れていた少女はゴンという名前らしく男の言う事を素直に聞いて大人達の元に行く。そしてドレイクはワームに向かっていくのだ。

ドレイク「ふん!!はっ!!!!」

ワーム「グウウツ!!?.....グオオオオオオツ!!!!」  
ドレイクはどうやら遠距離型のライダーのようでドレイクゼクターの銃撃でワームに反液の隙を与えない.....そしてドレイクはドレイクゼクターのフリップを引いていき.....

ドレイク「キャストオフ」

電子音「CAST-OFF!!! CHANGE DRAGON-FLY!!!!」

キャストオフしたドレイクの鎧が拡散するがワームのサナギはそれを紙一重で交わし反撃をしようと突進をしていくのだが男はドレイクゼクターの羽を畳み変形させると.....

ドレイク「ライダーシューティング!!!」

電子音「RIDER SHOOTING!!!!」

ドレイクゼクターに凄まじいエネルギーが溜まり一つのエネルギーの固まりが放出されワームに命中すると大爆発を起こす。

?「ふゝ終わったか。」

ゴン「大介!!!」

?「行くぞ〜ゴン。」

大人「待つてくれ。貴方はライダーなのか?」

?「その通りです。ですが私が望んだわけではありません。」

琢磨「なら.....俺達の仲間にならないか?」

?「ふつ.....風は気まぐれ.....好きな所に吹くだけです.....したがって群れるつもりはありませんよ。」

大人「ならせめて名前だけでも教えてくれ。俺は上原大人」

琢磨「俺は漆山琢磨。」

?「.....名前ですか.....私は風間大介。とだけ言っておきます。」

「

男は名前だけ名乗ると正に風のようにどこかにどこかに去っていくのだった……

その頃総司達は……

総司「今回はかなり多いみたいだな……」

新「ああ。でもサナギばつかだし大丈夫だつて」

いつき「特訓の成果を」

ゆり「見せるときね」

4人はそれぞれ変身するためのアイテムを取りだそうとするのだがそこに一人男が割り込んでくる。

？「お前ら……何してる？……ふっ……まあいい助けてやるから早く逃げる。」

いつき「何言ってるんですかそれは貴方の方でしょう」

総司「あいつは……まさか」

新「剣！！」

？「この俺の名を知っているのか？……ふん」

男は良突きの言う事を無視していき前に出ると何処からかとりだした剣を構えるとそこからサソリ型のメカであるサソードゼクターが現れる。

電子音「STANDBY！！」

？「変身！！！」

電子音「HENSIN！！！」

男はサソードゼクターを剣型の武器サソードヤイバーにセットしていくとヒロカネの鎧に包まれていき仮面ライダーサソードの姿に変わっていく。

いつき「あの人も仮面ライダー！！！」

ゆり「一体何人いるのよ！？」

いつきとゆりはいい加減に新しいライダーが出てきても戸惑う事はしなくなつたが彼が敵ならかなり厄介な事になると思いながらも彼の戦いを静観することとした。



サソード「ふん・・・すべてのワームはこの俺が倒す!!!」

サソードは複数のワームを相手にしても全く引けを取らずにドンドンサナギのワームを倒していき残るは一匹となったときワームがサナギから脱皮してジオフィリドワームへと進化した。サソードもそれに合わせてサソードゼクターのサソリの尻尾の部分を一度起こしていき再び元の戻すとアーマーが拡散していきキャストオフが開始される。

電子音「CAST OFF!!! CHANGE Scorpio  
n!!!!」

サソード「クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP!!!」

ジオフィリドワーム「グウウツ!!!ガアアアアアアアアアア!!!」  
両者ともクロックアップで格闘戦を繰り広げるがサソードの剣さばきにジオフィリドワームが追いつめられクロックオーバーの頃には傷だらけの姿でありボロボロであった。

サソード「ライダースラッシュ!!!」

電子音「RIDER - SLASH!!!」

サソード「うおおおおおおお!!!!!!!!!!」  
サソードがキャストオフの時と同じ手順でサソードゼクターを操作するとサソードヤイバーにエネルギーが溜まり更にサソードのサソリの属性を活かしたポイズンブラットも共にサソードヤイバーの刀身に送り込むとそのままサソード敵に向かっていきめった切りにしていくとジオフィリドワームは見緑色の体液を流しながら大爆発を起こす。

?「ふん・・・」

男は変身を解除するとその場から立ち去ろうとするがそれをいつきとゆりが止めに入る。

いつき「待つてください。貴方は一体何者なんですか?」

?「俺か?・・・俺は神に代わって剣を振る男・・・神代剣だ。全  
てにおいて頂点に立つ男」

総司「やはり剣は相変わらずか・・・」

新「やつぱり・・・」

総司と新は剣の態度に相変わらずかという様に呆れながらもそう言うとうとワームは消えたので植物園に帰る。いつきとゆりも後に続く。

大人「何だつたんだ・・・あの人？」

琢磨「気ままな風とかなんとか・・・」

つぼみ「またライダーが増えましたね・・・」

えりか「でも敵じゃないみたいだし良いんじゃない」

先に植物園戻っていた大人達は話し合っていた。そんな中総司達が帰って来た。

総司「風間も出てきたか・・・ドレイクとサソードが出てきたと言う事は他にもいるかの性があるな・・・」

新「ああ。だけどドレイクとサソードホッパーシリーズ変身者は俺達の世界と共通みただな・・・」

総司「ああ。アイツらなら敵になる事はないだろう」

新「そうだな。アイツらならZECTのライダーになる事もないだろうし・・・ほつといても大丈夫でしょう」

総司達の方も新しいライダーであるサソードの出現の事を報告し大人は警戒するべきだろ考えていたが総司達がそう言うとな本当なの不安だが今は大人は今それを信じることしかできなかったのだった。

第22話「気まぐれなトンボと高貴なサソリ」(後書き)

はい、ドレイクとサソリの登場です。

これでHYPERに必要なライダーは揃いましたね。

次回は再び須藤が登場します。

第23話「ワーム殲滅作戦前篇〜夕と傑と少年〜」（前書き）

前回までのあらすじ〜

新たなライダーであるドレイクとサソードが登場しライダーが増加するのだがそれはワームとの激戦の予兆でしかなかったのだった。

### 第23話「ワーム殲滅作戦前篇〜夕と傑と少年〜」

希望ヶ丘市の薫子が経営する植物園野前に見知らぬ車が止まっていた。そう仮面ライダーザビーこと須藤健一である。本来は敵としてカブトやプリキュアに立ちはだかる存在だったが今回は事情が異なっていた。

須藤「此処がプリキュアとカブト達がいる植物園か・・・よし」

須藤は相変らすのスーツ姿の身形で植物園の中に入っていくと須藤は様々な花の美しさに見とれそうになるが今回は花を身に見たわけではなく大人達に会いに来たのだ。大人達を探すべくあたりを見回す。すると大人達がベンチでだらけているのを見つけた。

須藤「相変わらずいいねえ〜学生と言うのは」

大人「あ、アンタどうして此処に？」

琢磨「まさかまた俺達を狩りに来たのか!？」

須藤「違うよ・・・今回は君達に依頼が合ってきたんだよ」

つぼみ「依頼・・・なんなんですか？」

えりか「・・・そっちの仲間になれって言うんじゃないでしょうね？」

いつき「そう言う話ならお断りだよ。」

ゆり「・・・」

大人達は当然現れた現れた須藤に敵意剥き出しにしながらも睨みつけていくのだが須藤はその視線を受けても仕方ないと思いつつもやれやれと思いつつため息を付いていきながら大人達を見ていき事情を説明しようと大人達の方を向き治ると

須藤「そう怖い顔しないでよ・・・今回は君達の力を借りただけだよ。」

大人「力を狩りに来た？」

須藤「君達・・・ワームって解る？」

琢磨「ワームがどうしたんだよ？人に擬態するって奴だろ？」

須藤「ふっ・・・知っているなら話が早い。実はこの町のとある廃ビルがワームの巣だと分かっている。被害が出る前に我々ZECTは巣を破壊する事に決めたんだ。その作戦に君達の力を狩りたいと言っわけさ。」

大人「ワームの巣が・・・この町に!？」

琢磨「そんな・・・」

須藤「この際だから君達にZECTの事を教えておくよ。ZECTとは元々ワームに対抗する為に作られた組織なのだよ」

大人「ワームに対抗するための組織だった?・・・」

琢磨「じゃああのライダーシステムも・・・」

須藤「その通り。事の始まりは七年前に起き太平洋隕石墜落事件・・・君たちも学校で習っただろう?あの隕石の中にワームがいたんだ。国連は秘密裏にワームの存在を感知しその対抗組織としてZECTは誕生した。そのZECTによって開発されたのが私や君達が持つマスクドライバーシステム」

大人「・・・じゃあワームとの戦いは砂漠の使徒が地球侵略する前から始まっていたと言っのか?」

つぼみ「・・・そんなじゃあ裏であの怪物達によって人が殺されていたんですか?」

須藤「ああ。そして近年プリキュアと砂漠の使徒の存在もZECTは感知していて砂漠の使徒の撃退を我々人間にも出来ないかと上層部は考えた・・・私達が君たちを無理やりにも抑えようとしたのはワームに対抗するための戦力を確保するためでもあり砂漠の使徒からこの星を守るためでもあったのだよ。」

いつき「でも・・・だったら何であんな強引な真似を?」

須藤「ワームの事を話したとしても理解されずに逆に警戒されるのが面倒だったからね・・・それにZECTの方針は無理やりにも従わせると言っ事・・・私はそれに従っただけだ。」

ゆり「従っただけって・・・貴方は」

須藤「とにかく・・・今回の任務に協力してもらえると嬉しいな」人

手不足なんだよこっちは……。それに君達にもいるはずだよね守りたい人が……」

大人達はライダーベルトの真相を知り困惑していた……。まさか自分が知らない間にこんなSFチックな事が起きていたとは……。だが今は困惑する入りもこの町にあるワームの巣を破壊する事が先決だと判断し須藤の方を向くと。

大人「分かった……。そう言う事なら手を組もうじゃん。だけど今回限りだ。」

須藤「ふん……。では後日作戦の内容を伝えに来るよ。私はコレで失礼する。」

須藤はまた後日来ると言ってその場から消える。怪しい笑みを残していきながら……。

場面は切り替わり夕と傑はそのワームの巣であると言う事は知らずにその廃ビルの前に来ていた……。と言うのも夕がこのビルに伝わる希望ヶ丘市に伝わる不思議の一つにこのビルで悲鳴と得体のしれない音が聞こえると言う噂を聞きつけて夕がその謎を解明したいと言いだしたからである。

傑「何で俺がこんな事に付き合わなければならんのだ。」

夕「良いじゃないの。この私わざわざ彼女のいない君を誘ってあげたんだから。」

傑「その言い方……。癩に触るな」

傑は夕の言う事にしぶしぶと従いながらも夕と共に立ち入り禁止の札があるのも無視してビルの中に入っていく……。ビルの中は薄暗く人の気配は感じられずに夕の噂であったのかと二人は思ったのだが……。

悲鳴「ぎゃああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

夕「な、何?今の……」

傑「奥みたいだ……。行ってみよう!」

二人は悲鳴のした方向に向かっていくとそこには警備員の服を着た

男が血まみれで倒れていて何者かに殺された直後であった・・・。コンクリートの床には夥しいほどの血が流れていて辺りには血液の衣の衣が充満していた・・・。

タ「きゃあああああっ！！！！！！」

傑「な、何なんだ

するとタの悲鳴を聞きつけたのかプラキペルマワームとジェノミアスワームが現れる。

傑「な、なんじゃああああ！！！！ありやああああ」

タ「アレは・・・この前の怪物！？傑・・・逃げよう」

傑「に、逃げるったって・・・な、なんかふえてるんですけどお！！！！」

タ「え？・・・う、うそお・・・こ、こんな数が・・・」

傑とタは徐々に増えていくワームの数に腰が抜けて動くように動けない・・・。

？「お兄ちゃん、お姉ちゃん！！こっちに来て！！」

傑「え・・・君は？」

？「そんな事はいいから早く！！！！」

タ「傑・・・早く！！」

傑「りよ、了解！！！！」

ワームが自分達の目の前に近づいていくのだが傑とタはその声の持ち主の所にダッシュで向うと声の主は少年であつたらしく自分達を安全な場所にへと誘導する・・・そしてビルの地下の部屋に案内される。

傑「このビルにこんな場所があるなんて・・・」

タ「助けてくれてありがとね」

少年「ねえ・・・水か食べ物持ってないの？」

傑「いや・・・生憎そう言うのは」

少年「なんだあゝ助けて損した・・・」

タ「あ、でもこれならあるよ」



夕はカバンからスポーツドリンクとビスケットを取りだすと少年はそれを素早く手に取りががつと口の中に放り込んでいく。

傑「君……ずっと此処に？」

少年「うん……お父さんと住み込みで働いてたんだ……でもボク見たんだ……人があの化け物に殺されるのを……でも誰も信じてくれなくて……遂にお父さんも……」

少年は涙ぐみながらそう言う。夕はそんな彼を慰めるように抱きしめると……

夕「怖かったんだね……でももう一人じゃないよ……私達と一緒に逃げよう。君の名前は？」

少年「真……嫌だよ!!!。もう何度も試したけど何度も捕まりそうになっただ……」

傑「大丈夫だよ!!!いざとなったら俺達を守るから。」

真「ええ〜弱つちいじゃん……信用できないよ〜」

傑「それは……、でもいつまでも此処にいるわけにはいかないだろ!!!」

真「……分かったよ」

少年は何やら人形を持つと覚悟を決めたかのような視線を見せる。そして先程と負った道を上げる……。どうやらワームはいないようだが……。少年が人形を落としてしまうとその音にワームが効いてしまったらしくワームが泣き声を上げていく……。このままではまずい!!!

傑「真君はあの部屋に戻れ!!!必ず俺達が助けを呼んでくる!!!」  
夕、早くいくぞ!!!」

夕「うん!!!」

二人は急いでビルの入口まで走る……。だがそこにジェノミアスワームが現れる。絶体絶命のその時にザビーが現れて二人と助ける。

ザビー「二人とも逃げる。」

ザビーはジェノミアスワームに攻撃を仕掛けていくのだがジェノミアスワームは形勢が不利と判断してその場から立ち去る。ザビーは

変身を解除していき二人の方を見る。かなり怒っている表情であり二人はその顔に引いてしまふのだったが真が中にいると言う事を思いう出す。

傑「な、中に怪物が・・・ひ、人が殺されて・・・男の子も中に・・・」

須藤「知っている！！・・・既に調べは付いていたんだ・・・君達が勝手に中に入ったせいで我々の動きも奴ら感づかれてしまったじゃないか！！！！どうしてくれるんだ？」

夕「か、勝手に入ったのは謝ります。でも中に男の子が！！」

須藤「馬鹿馬鹿しい！！・・・そいつも奴らに殺されたにきまつている」

傑「そんな・・・」

夕「どうしてそんな事が！！」

須藤「あのビルはワームの巣だつてことは分かっていたんだ・・・ワームと言うのは人に擬態する・・・その男の子も既に殺されてワームになっていると考えるのが自然な考えだ。」

夕「でも・・・」

須藤「計画は変更だな・・・明日にこのビルごと殲滅作戦を開始する。」

傑「殲滅つてそんなあ！！！！中の男の子は？」

須藤「言っただろ？・・・既にワームになっている可能性が高いと君達も今日の事は忘れて早く帰るんだな。」

須藤は冷たくそう言うとその場から立ち去る様に傑と夕を促す・・・夕と傑はどうすればいいかと考えながらも夕は何か思いついたかのような顔をする。

夕「傑。大人のところに行こう！！」

傑「何だよ急に？」

夕「いいから！！！！」

夕はライダーベルトを持つ大人にこの事を伝えようと大人の家に傑と共に行く事にした。

大人「どうした？タそれに傑も・・・」

タ「大人！！大変なの・・・」

タと傑は事の真相を大人に話す。大人は話に来ていない傑にも自分の持つ力とワームについて説明していき傑も話しの真相がやっと理解できた。

傑「真君ががそのビルの中に残されてるんだ・・・早くしないと明日化け物ごと殺されちまう！！」

タ「今から助けに行こう！！」

大人「駄目だ・・・須藤さんの言う事も一理ある。危険な真似はできない。」

傑「そんな！！お前までそんな事を・・・」

大人「とにかく・・・作戦が明日になったなら明日その少年を助ければいい。それまで待つんだ・・・焦りは禁物だ」

タ「・・・もういいよ！！！！」

傑「タ！！大人・・・お前変わったな」

大人「おい・・・タ！！傑！！！！」

タと傑は大人の態度に呆れたようにそう言うと大人の家から去る・・・その時大人の部屋のトランクが光輝いていたと言う事はその時誰も気がつかなかった・・・

場所は再び変わりZECT本部・・・ZECT本部ではマスクドライダーシステム計画の要のあるモノの開発が最終段階まで進んでいたのだが資格者がZECTの本部にはいないと言う状況だった・・・そこでZECTのスーパーコンピューターとそのライダーシステムのゼクターであるバタフライゼクターが選んだ資格者をサーチした結果・・・

三島「里中タ・・・バタフライゼクターが選んだ資格者がまたしても希望ヶ丘の高校生とはな・・・ふん」

三島はコンピューターが出した結果に不満が隠せなかったが資格者をゼクターが選んだのなら仕方がないと須藤を呼び出してアゲハゼクターの事を伝える。

三島「バタフライゼクターの資格者が決定した。・・・明日の作戦の前にバタフライゼクターをこの女に渡せ。」

須藤「この娘は！・・・まさかこの娘が資格者に選ばれたなんて・・・」

三島「なんだ知り合いか？」

須藤「いえ・・・そう言うわけで張りません。では明日の殲滅作戦の前に彼女に渡します。」

三島「頼んだぞ・・・お前には期待しているぞ。矢車や影山何かと違って・・・お前は出来る奴だからな。・・・一つ言い忘れたが明日の作戦にはサソード味方につける。情報ではワームはあのビルをワームの繁殖場所に行っているとのことだ・・・また念には念を入れて新型爆弾のBM990の使用も許可する。」

須藤「はっ！！！」

三島はいやらしい笑みを浮かべながら須藤にそう言う。須藤は明日の殲滅作戦の準備を行う為に三島の部屋から出ていく。

タ「どうすれば・・・」

傑「タ・・・」

タ「あの子を見殺しになんてアタシにはできない！！・・・うう・・・うわあ~~~~んんっ！！！！！」

傑「俺だって同じ気持ちだよ・・・でも俺達には何もできない。ちくしょおおおっ！！！！！！！」

タは泣きながらもあの男の子を助ける方法を考えていたがどうしようも出来なかった・・・自分に力があればそんな事さえ考えるようになった・・・このまま自分達はあの子を助ける事が出来ないのかと・・・二人は己の無力さを嘆き悲しんでいた・・・

だが夕も傑もこの時はまだ知る由がなかった。自分達もライダーとしての力を手に入れる事・・・そしてあの少年の残酷な正体を・・・

第23話「ワーム殲滅作戦前篇〜夕と傑と少年〜」（後書き）

今回はカブトの本編のガタツク登場編がベースになっております。

今回は二人の新戦士が誕生します。一人は黒点の神。

そしてもう一人は……

次回もお楽しみに

第24話「ワーム殲滅作戦後篇〜黒いカブトと白銀の蝶〜」(前書き)

前回までのあらすじ

夕と傑はワームの巢に少年がいる事を知ったのだが非情にもそのビルはZECTにより破壊される事に・・・おのれの無力さを嘆く二人だが二人の運命は着々と進んでいた・・・

## 第24話「ワーム殲滅作戦後篇〜黒いカブトと白銀の蝶〜」

夕「真君……必ず私達が助けるからね!!傑……行くよ!!!」  
傑「勿論……まさかこんな事に俺のバイクが役立つ時が来るなんてな。ああ〜初デートの時までとっておこうと思ったのに……」  
夕「いいでしょ〜私が後ろに乗ってあげるんだから」

傑「はいよ……しっかり捕まっけてくれよ」

二人はどうするか考えた末に自分達で真を助ける道を選んだ……ワームの事を知る人間ではあてには出来ない……ならば自分達の出来る事をするしかない。傑は夕を後ろに乗せてバイクのエンジンをかけると荷物を持った夕を乗せる。荷物には金属バットなどのワーム達に対抗する武器が入っているが奴らには恐らく効果がないだろう……。朝日が眩しい中二人はバイクであの廃ビルへと向かう。真を助けるために

傑「待つてるよ……真君」

夕「必ず私達が助ける!!」

その頃須藤は夕にバタフライゼクターを渡すために夕の家に向かったのだが夕がいない事を知ると仕方がないと思いワームの巣を殲滅すべくあの廃ビルへと向かうのだった。するとそこには既に大人琢磨、つぼみ。えりか。いつき、ゆり、剣のライダーとプリキユア更にはシャドウ隊が集まっていた。

須藤「全員揃った所で作戦を今回の作戦プランを説明する。我々シャドウ隊突入の後に以下の班に分かれて行動してもらう。先ずAチームはカブト、プロツサム、マリソ。Bチームはガタツク、サンシヤイン、ムーンライト、サソード。Aチームはビルの2階から地下まで。Bチームは3階から最上階の5階までのワームを一掃してもらう。また全員コレを携帯してもらう」  
大人「コレは?無線機みたいだけど?」



須藤「そのとおり我々シャドウ隊はこのビルを爆破するのが任務。爆破準備が完了したらそれでしらせる。全員爆破準備が完了したらこのビルから速やかに脱出するように。」

大人「ビルごと爆破とは・・・大掛かりだな」

琢磨「だけどその方が安全だろうよ」

つぼみ「・・・今回は失敗できませんね・・・希望ヶ丘市の人々の為にも」

えりか「うん」

いつき「・・・」

ゆり「皆いつも以上に気合を入れるわよ!!」

つぼみ達3人「はい!!!」

琢磨と大人はそう思いながらも突入準備のためにライダーベルトを取りだす。つぼみ達も今回の作戦の重要性和重さを認識しながらも絶対に失敗できないと思いながら気合を入れる。すると後ろからバイクの音が・・・

バイクの音「ブルルルルンンンンンンンンンンンンンンンンンツ!!!」

!!!!!!」

その場にいた全員「!!!!???」

突然バイクが廃ビルの策を飛び越えてビルの中に入る・・・そのバイクとバイクに乗っていた人物に大人は信じられないと言う様な声を上げる・・・しかもバイクの突入と主にワームが合われてしまう・

タ「真君!!!アタシ達よ助けに来たの!!!」

傑「今行くからな!!!!」

二人はワームの群れを恐れることなく進んでいきビルの中に入っていく・・・真を助ける為にと無我夢中で二人は金属バットを片手に・

大人「アレは傑!!!!それにタ!!!!」

琢磨「アイツら何を考えてるんだ！！！！おい早く突入命令を！！！！」  
須藤「あの民間人は昨日の！！！！？・・・・ええい突入だ！！！！」  
ゼクトルーパー「はっ！！！！」

大人「アイツら・・・変身！！！！」

琢磨「変身！！！！」

須藤「変身！！！！」

剣「変身！！！！」

電子音「・・・・HENSIN！！！！！！！！！！」

つぼみ「私達も変身です！！！！」

3人「うん」

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう！！！！（です  
っ&でしゅ）」

4人「・・・・プリキュア・オープンマイハート！！！！！！！！！！」

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム！！！！」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン！！！！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪花キュアサンシャイン！！！！」

ムーンライト「月光に冴える一輪花キュアムーンライト！！！！」

4人「・・・・ハートキャッチプリキュア！！！！！！！！！！」

須藤の突入の号令と共にジャシャドウ隊突入していきソレと共に大  
人と琢磨と、須藤、剣がライダーに変身しつぼみ達はプリキュアへ  
と変身する。

カブト「ブロッサム、マリンいくぞ！！！！」

ブロッサム「はい！！！！」

マリン「ガッテン承知！！！！」

ガタック「サンシャイン、ムーンライト、それにもう一人の人俺達  
も行くぞ！！！！」

サンシャイン&ムーンライト「うん！！！！」

サソード「俺の名は神代剣だ！！覚えておけ」

それぞれ須藤の指示どおりAチーム、Bチームと分かれてそれぞれ  
が担当するエリアのワームを掃討にかかる。早くしなければこのビ

ルは爆破されてしまう為傑と夕の搜索もしなければと大人は焦りながらもビルの中に入る。

カプト「タ！！傑！！何処だ・・・何処にいるんだあ！！！」

ブロッサム「カプト焦らないで！！・・・私達が一階と二階を探します。カプトは地下を探してください。」

カプト「何を言う。お前達だけで行動させるわけには・・・」

マリリン「今はそれより夕さんと傑さんの身が心配じゃないの！！アタシ達は大丈夫だから早く夕さん達を！！！！」

カプト「マリリン・・・分かった。出来るだけ早く見つけ出す。二人は持ちこたえてくれ！！！」

ブロッサム「勿論です！！！」

マリリン「とーぜん！！！」

カプト達はブロッサムの提案をのみ夕と傑の搜索をするべく地下へと向かう。立ちはだかるワームを倒しながら傑と夕を必死に搜索する。早く探し出さなければ夕と傑が！！！！

傑「真君！！どこだあ！！！」

夕「返事して！！・・・お願い！！！」

真「お兄ちゃん！！お姉ちゃん！！！」

傑「無事だったか！！早くここから出るよ！！夕！！！」

夕「うん。真君いくよ！！！」

傑と夕はワームの群れをかいくくりながら必死に真を探す。すると真が待っていたぞとばかりに二人の前に現れる。二人は安心してすぐこの地獄から脱出するぞと真を連れて自分達が此処に来た道に戻ろうとしたのだがそこにワームが現れ3人の行く手を阻む・・・3人は必死に他の逃げ道を探しながらこのワームの巣からの脱出ルートを探す。そんな中3人はとあるビルの大ホールに気持ちの悪い緑色の巨大な球体は何十いや・・・何百個もあるのを発見する・・・

傑「コレは卵!？」

タ「あの化け物の・・・もしもコレが一斉に孵化でもしたら」

傑「希望ヶ丘市が・・・俺達の町があああの化け物だらけに・・・くっ!!今  
は早く出よう!!後は大人達にすべてを任せるんだ」

タ「その方がいいわね。真君行くよ!!」

真「うん!!」

3人はワームの卵に恐怖を煽られ身を震わせるのだが今はそんな事  
をする前に此処から出る事が先決だと再びビルを走り出す。だがそ  
んな二人の前に・・・何と二人の姿をしたワームが・・・

タ「う、嘘!!」

傑「・・・お、お前達は何者だあ!？」

擬態傑「ふん・・・誰かと思えば俺かあ」

擬態タ「怖がらなくてもいいのよ・・・これからはアタシ達が貴女  
達になるんだから」

傑「そんな事・・・させるわけないだろうがあ!!!!」

タ「アタシ達はどうなっても・・・真君だけは守ってみせる!!!!」

傑「うおおおおおおお!!!!!!」

タ「はあああああああ!!!!!!」

二人は自分の姿をしたワームに怯えるながらも真だけは守ってみせ  
ると持つてきた金属バットを構えながら自分達の擬態に向かってい  
くがタと傑の擬態はそれぞれプラキペルマワームとジェノミアスワ  
ームに変身していき二人を腕で薙ぎ払う。当然二人は飛ばされてし  
まうがそれでも諦めるものかと立ち上がるのだが真が二人に近づい  
てきた・・・

傑「真君危険だ!!離れて・・・」

真「もういいよ・・・お兄ちゃんとお姉ちゃんを使えば殲滅作戦を  
引きのばせるかと思っただけど・・・結局役に立たなかったね・・・

タ「え・・・何を言って・・・」

真「だからもう用済みさ！！！」

傑「真君・・・まさか」

タ「う、嘘だよね・・・」

真「さようなら・・・お兄ちゃん、お姉ちゃん」

二人は真の言葉に呆然としながら立ちすくんでしまいがそんな二人の胸に突然怪物の触手が突き刺さる・・・二人の胸から真つ赤な血がドロドロと流れ行く・・・二人は痛みにも耐えながらも刺された胸をみながら触手がある方向を見てみる・・・するとその触手は真の方から伸びていたのだ・・・そして真の姿が以前現れたとタラントスワームの別個体へと変身していくと触手が二人から引き抜かれる・・・二人は致命傷を受けてしまいその場に膝を付くのだがそこにトドメとばかりに3匹のワームが触手で2人の顔以外の部分をめつた刺しにする・・・二人はその場に仰向けに倒れる。ワーム達は倒れた二人には目もくれずにその場を立ち去る。その頃には二人は瀕死の重傷で意識がもうろうとなりながらも確実に命の灯が消えかかっていた・・・そして二人は力尽きてしまい命の灯が静かに消え目を閉じてしまう・・・

今生の希望・・・それはすべて打ち砕かれねばならない・・・絶望の底に堕ちた時・・・人は・・・新の希望で己を救う事が出来る・・・

倒れた二人に近づく足音があつた・・・その者はタが受け取るはずだったバタフライゼクターが入ったトランクを持っている。その者はトランクを開けるとバタフライゼクターを起動するためのアイテムライダーブローチをタの首に付けていく。次に男はトランクの中にあるリモコンの様なモノを操作して立ち去る。男が立ち去った後に大人の部屋のトランクから飛び出した最期のベルトが傑の身体にまかれる。タの首にあるライダーブローチと傑のライダーベルトは二人のカラダに共鳴する様に輝きを放つ・・・すると消えた命が蘇り二人の眼が開く・・・

その頃真と擬態傑、擬態夕は早くここから出るべく歩いていたのだが後ろから足音が・・・振り返るとそこにはこの手で殺したはずの夕と傑がいたのだ・・・二人とも服が血まみれで満身創痍の身体だが自分達の方を睨んでいる・・・まるで自分達を哀れんでいるかのよう・・・

夕「人の心を踏みにじるワーム！！・・・」

傑「自分達が生き残るためなら・・・平気に人を殺すワーム！！」

夕&傑「俺&アタシは絶対に許さない！！！！」

二人は腕を天にかざすとビル窓から漆黒の変身アイテムダークカブトゼクターが傑の手に・・・ZECTが新開発したマスクド・ライダーシステムの要のライダーである仮面ライダーフェアリーの変身アイテム、バタフライゼクターが夕の手に収まる・・・

傑&夕「・・・変身！！！！」

電子音「HENSIN！！！！」

二人はそれぞれ自分の手に止まった変身アイテムを見つめていくと傑はダークカブトゼクターをライダーベルトに夕はバタフライゼクターをライダーブローチに収めると二人はヒイロカネの鎧に包まれていく・・・傑はカブトのプロトタイプである故に姿はカブトと変わらないが複眼が黄色の仮面ライダーダークカブトマスクドフォームに夕は白を強調した女性らしさを残した純白の蝶のサナギの姿をモチーフにした仮面ライダーフェアリーマスクドフォームへと姿が変わる。

擬態傑「ふん・・・」

擬態夕「変身した所でアタシ達に勝てるわけないわ・・・」

真「・・・」

3人のワームはそれぞれプラキペルマワーム、ジェノミアスワーム、タランテスワームにへと姿を変えて応戦する

ダークカブト「・・・うおおおっ！！！！！！」

フェアリー「・・・はあああああっ！！！！」

ブラキペルマワーム「グウウツ!!!ガアアアガガアアアア!!!」  
「  
ジエノミアスワーム「グルグルウウウウ!!!グガア  
アアアアアオオオオツ!!!」  
「  
ダークカブトはダークカブトクナイガンのアックスモードをフェア  
リーはフェアリー特有の標準武器フェアリーレイピアを構えていき  
それぞれ格闘戦を繰り広げる。するとそこでフェアリーがレイピア  
を変形させてフェアリーレイピアガンモードを起動させる。

フェアリー「食らいなさい!!!はああああつ!!!!!!」

ジエノミアスワーム「グウウツ!??ガアアアアアアアアア  
アアアアアアアアツ!!!」

フェアリーレイピアガンモードの銃撃にジエノミアスワームは爆発  
炎上して消滅する。同じ頃ダークカブトとブラキペルマワームの勝  
負にも決着がついていた・・・

ダークカブト「うおりやあああああつ!!!!!!」

ブラキペルマワーム「オオオオオオツ!!!!!??ガアアア  
アア・・・アオオオオア!!!」

ブラキペルマワームはダークカブトクナイガンの刃に身体を斬りつ  
けられワームの体液を大噴射しながら大爆発を起こして消滅する・・・  
・残りは真に擬態したタランテスワームのみ・・・

ダークカブト「・・・」

フェアリー「・・・」

二人は残ったタランテスワームを睨みつけながら静かに近付いてい  
くが・・・タランテスワームは最期の足掻きを見る・・・そう  
真の姿を見せて二人を惑わせようとうのだ・・・

擬態真「止めて!!!二人とも・・・僕を消したりしないで・・・

「  
ダークカブト&フェアリー「!!!!!!」

擬態真「僕が消えたら真君の記憶も消えちゃうんだよ?・・・それ

でもいいの？」

「ダークカブト&フェアリー」

二人は分かっていた・・・真は・・・人間の真はもういない・・・  
だけでも目の前にいるタランテスワームは真の記憶を受け継いでい  
る・・・攻撃を躊躇している所を擬態真はニヤリと二人には気がつ  
かれないように笑みを浮かべる・・・だがそこに大人が変身したカ  
ブトが現れる。タと傑を探しながらも大人は着実にワームを倒して  
いた・・・その証拠に彼はキャストオフしており構えているク  
ナイガンにはワームの緑色の体液が滴り落ちていたのだ。

「ダークカブト「カブト？」

「フェアリー」

カブト「アンタらZECTのライダーか？何を躊躇ってるんだよ  
・・・どけ！！こいつを殺れないのなら・・・俺がトドメを刺す」  
幻影真「お兄ちゃん！！お姉ちゃん！！助けて・・・」

大人は正体不明のライダーに退くよう指示しながらもタランテスワ  
ームに近づく。タランテスワームは危険と判断すると二人に自分を  
守る様に真の声で助けを求める・・・ダークカブトとフェアリーは  
カブトの前に立ちふさがると・・・

「ダークカブト「止める大人！！！」

「フェアリー「お願いちょっと待って。」

カブト「お前ら・・・タと傑？・・・何でライダーに」

フェアリー「後で説明するわ・・・お願い手を出さないで。」

「ダークカブト「此処は俺達に任せてくれ・・・」

二人はカブトを静止すると前を向き直りダークカブトはダークカブ  
トゼクターのゼクターホーンをフェアリーはライダーブローチのバ  
タフライゼクターの羽を畳みバタフライゼクター左にを動かすとそ  
れぞれ鎧が広がっていく・・・そして・・・

「ダークカブト「キャストオフ」

「フェアリー「キャストオフ」

「電子音「CAST OFF!!!!」」



電子音「CHANGE BEE TLE!!!」

電子音「CHANGE BUTTERFLY!!!」

ダークカブトはカブトと同じ手順で角を右にフェアリーはライダーブローチに収まっているバタフライゼクターを左に半回転させていくとそれぞれ鎧が拡散しダークカブトは漆黒のカブトムシを象徴する角が起立する。フェアリーは白銀の身体とコバルトブルーの複眼をした蝶の身体をモチーフにした仮面が現れる。

擬態真「!!!」

タランテスワームは二人がキャストオフするともう戦うしかないとクロックアップで二人を叩き潰そうとするが二人も覚悟を決めダークカブトはベルトの右側のスイッチをフェアリーはバタフライゼクターの真ん中のスイッチを押していき・・・

フェアリー「クロックアップ!!」

ダークカブト「クロックアップ!!」

電子音「CLOCK UP」

超高速移動をしながらもフェアリーはフェアリーレイピアレイピアモード、ダークカブトはダークカブトクナイガンクナイモードでタランテスワームを斬りつけていきタランテスワームにダメージを与えていくタランテスワームはもう一度二人を惑わそうと真の幻影を二人に見せる。

擬態真「二人とも・・・まさかボクを？」

フェアリー「・・・・・・はああああああああああああつ!!!」

!!!」

ダークカブト「・・・・・・うっおおおおおおおおおおおおおおつ!!!」

二人は無言で真の幻影を見つけていきながらも迷いを振り払う様に二人は唸りながらそれぞれの武器を構えながらタランテスワームに向かっていき一度クナイガンとフェアリーレイピアでタランテスワームを吹き飛ばす。カブトにはそのワームが本気を出しているようには見えなかった・・・あのワームの実力なら戦闘初心者の二人く

らい軽くあしらいこの場から逃げる事も出来る筈だ・・・なのにそれすらしない・・・そんな思いを抱いてる中無線機から通信が入る。須藤「爆破準備が出来た。君も早く友達を連れて回避しろ。」

カブト「・・・すまないが今ちよつと手が離せない状況だ。俺は俺で何とかするか作戦通り爆破をしていくれ」

須藤「しかし・・・分かった・・・必ず脱出しろよ。カブトのライダーシステムは重要だからな」

カブト「了解」

カブトは通信を切るとフェアリーとダークカブトの戦いを静観する。あのワームはやはり・・・

カブト「（あのワーム何故本気度出さないんだ？・・・もしかしてあの二人に自分の命を・・・）」

電子音「CLOCK OVER!!!」

擬態真「・・・二人ともお人よしだね。本気で攻撃すればいいのに・・・」

ダークカブト「ぐうっ!?」

フェアリー「きゃああっ!?」

タランテスワームは二人を嘲笑うかのようにそう言つと再度クロックアップで二人に攻撃を仕掛けるがすぐにクロックアップを解除する。そして二人に向かって走り出す・・・二人に楽にしてもらう為に・・・

ダークカブト「真君・・・」

フェアリー「さよなら・・・」

二人は哀しい声を上げながらそれぞれの必殺技を発動する。

電子音「ONE TWO THREE」

ダークカブト「ライダーキック」

電子音「RIDER KICK!!!」

ダークカブトはダークカブトゼクターのフルスロットルのスイッチを押しライダーキックの発動準備を行うとそのまま飛び蹴りをタ

ランテスワームに放つ。同時にフェアリーは……  
フェアリー「ライダーストライク」

電子音「RIDER STRIKE!!!」

フェアリーはバタフライゼクターをフェアリーレイピアにのグリッ  
プの部分に合体させバタフライセクターの羽をマスキドフォームの  
状態に戻してフェアリーレイピアのトリガーを引く。するとエネル  
ギーがフェアリーレイピアの刀身に集まりそのまま刀身をタランテ  
スワームに突き出しエネルギーを叩きこむ。

タランテスワームにダークカブトのキックとフェアリーレイピアの  
刀身が炸裂する。それと同時に……

ゼクトルーパー「爆破準備完了……」

須藤「ああ……無事でいるよカブト……爆破!!!!!!」  
ゼクトルーパー「はっ!!!!!!」

須藤の命令で爆弾のスイッチを押すとビルは大爆発を起こす。ブ  
ロツサムやガタツク達はカブトと夕と傑乃無事を祈ることしかでき  
なかった。

爆炎と爆風がビル内を包んでいき3人にも飛んで来る……フェア  
リーとダークカブトがいた場所はちょうど爆炎と爆風の通り道だっ  
たようで2人を爆炎で包もうとする……流石にライダーとはいえ  
アレはマズイ!!!

カブト「ヤバっ!!二人とも!!」

カブトは二人を助けようと二人の元に走り出すのだがその前にタラ  
ンテスワームが二人の盾になり爆炎から守る……まるでこうなる  
事を望んだかのように……

ダークカブト「真くん!!!」

フェアリー「私達を守ってくれた?……いやあああつ!!!!!!」  
タランテスワームは指でピースの様なポーズを取るとそのまま静か  
にワームの炎を上げて安らかに消滅する……まるで最後の最後  
で少年の心を取り戻したかのように……

ダークカブト「ああ……」

フェアリー「う、うう……」

二人は茫然としたまま立ちすくんでいる。爆炎がやむ頃になるとあるものが落ちていた……それは真が持ってた特撮ヒーローの人形だった。熱で所々溶けている部分があった……

カブト「……辛いかな？……二人とも」

ダークカブト「……ああ。何もできなかった自分の無力さがな。」

フェアリー「でも……コレでよかったんだよね……真君」

カブト「ああ……彼の為にも……俺達は戦わなければならないんだ。例えどんなに傷ついても」

カブトは二人を励ますようにそう言う。3人はやりきれない思いを残しながらも炎が残るそのビルから出ていく……黒いカブトと白銀の蝶の戦士の覚醒は非情であった……だが二人は忘れるわけにはいかなかった。自分達を助けてくれたワーム……いや人間であつた真の為にも……

第24話「ワーム殲滅作戦後篇〜黒いカブトと白銀の蝶〜」（後書き）

はい〜ダークカブトとオリライダーフェアリーの登場です!!  
話しのベースは言うまでもなくガタツク登場回です。  
個人的にはガタツクの登場回は好きな話に入ります。

次回はワームとZECTに新しい動きとあのアイテムが遂に完成します!!

次回もお楽しみに

第25話「もう一人のハイパーフォーム登場！？大人と琢磨の最後の試練」(前

前回までのあらすじ)

ダークカブトとフェアリーの力に覚醒した傑と琢磨。だがそれは心が痛む覚醒だった・・・しかし二人も誓うのだった傷ついても戦い続ける。

第25話「もう一人のハイパーフォーム登場!? 大人と琢磨の最後の試練」

カブト（大人）「たあああつ!!」

カブト（総司）「ふっ!! はあああつ!!」

ブロッサム「やあああつ!! ！今回は凄い数ですね」

マリリン「うりやあああつ!! ！つたく!! ！一体何匹いるのよ？」

希望ヶ丘市のとある地下駐車場でワームの大集団と大人、総司、ブロッサム、マリリンが戦っていた。しかし今回のワームのサナギは量が凄まじく既に戦いを初めて1時間以上かかっていた。そろそろ全員体力の消耗が激しくなってきた。このまま大海戦術で来られれば此方が不利なのは明らか。・・・此処で総司はハイパーカブトになろうと手を空にかざしハイパーゼクターを召喚する。だが総司がハイパーカブトになるその前に・・・

電子音「HYPER CLOCK UP!!!」

突然電子音が流れると共に凄まじい衝撃波があたりを包み込み大人達を吹き飛ばしながらワームをすべて消し去ってしまう。

カブト（大人）「い、今は・・・なっ!!」

カブト（総司）「・・・」

ブロッサム「アレは・・・でもそんな事が」

マリリン「ハイパーカブト!？」

そう4人を助けたのは何とハイパーカブトだったのだ。だがハイパーカブトに変身できるのは総司だけの筈。・・・だが総司が今ハイパーカブトに変身しようとする前目の前にいるハイパーカブトは現れた。ハイパーカブトはゆっくり歩いていきながら4人に近づいていく。・・・だがすぐに彼の姿は・・・

電子音「HYPER CLOCK OVER!!!」

電子音の発生と共に光り輝きだし再び姿が消える。総司以外にカブトと言えば大人しかいないが大人はハイパーゼクターは持っていない。・・・大人、ブロッサム、マリリンは戸惑いが隠せなかつあが総司

だけは違ったようだった・・・その頃別の場所でも同じ事が・・・

ガタツク（琢磨）「おおおおおっ！！！！・・・くっ・・・何匹いるんだよ」

ガタツク（新）「おりゃああああっ！！！！油断するな・・・まだ奴らはわいてくるぞ」

サンシャイン「はああああっ！！！！・・・ホントにキリがない！！」  
ムーンライト「ふんっ！！このままじゃ消耗戦に」

同じころ別の場所で琢磨、新、サンシャイン、ムーンライトが別のワームグループと交戦していた。此方もかなりの数で長期戦になっていた・・・新はハイパーゼクターを召喚しようよとするのだがその前に・・・

電子音「HYPER CLOCK UP！！！」

電子音と共に衝撃波が発生しワームの集団を一掃する。彼らを助けて者の正体に4人は驚く事になった・・・

ガタツク（琢磨）「あ、あれは・・・まさか」

ガタツク（新）「・・・」

サンシャイン「でも何で？」

ムーンライト「ハイパーガタツクが・・・」

そう現れたのはハイパーガタツクだったのだ・・・しかし新以外のガタツクの資格者は琢磨だけ・・・謎が深まる中で琢磨は近づこうと知るが彼はハイパーゼクターを起動させるとそのまま姿を消す。

場所は変わりZECT本部の幹部室・・・

三島「そうか遂に完成したか・・・監視を強化しておけ・・・特に奴らに気づかれんようにな」

間宮「奴らとは・・・私達の事か？」

三島「貴様・・・いつの間に」

間宮「遂に完成したか・・・ハイパーゼクターが。だが哀れなモノ



だに既にもう一人のハイパーカブトとハイパーガタツクが現れたと言うの事は何れ貴様らが開発したハイパーゼクターもカブトとガタツクに奪われると言う事。」

三島「そんな事させるとでも思っているのか？・・・心配せずとも手は打ってある」

どういうことだろうか？人間である筈の三島とワームである間宮が協定を組んでいるかのように話し合っている・・・三島の本心は何なのか？・・・謎を残しながらも間宮は三島の部屋から出ていく。

場所は再び変わり薫子の植物園。

総司「そうか・・・そっちにはハイパーガタツクが」

新「ああ。だが俺達以外となると・・・」

大人「俺達が・・・」

琢磨「何れ手に入れる・・・」

総司「そのとおりだ。さて・・・そうとわかったらこれから最後の特訓を開始するぞ。今までで一番ハードだぞ？」

新「二人とも・・・覚悟しとけ？」

大人&琢磨「・・・はい！！」

総司「覚悟は出来ているようだな。・・・つぼみ達も来い。コイツらの覚悟をプリキュアとしてやってみてくれ。」

つぼみ達4人「はい。」

総司達は特訓の為にプリキュアパレスに向かう。総司と新はいつも以上に気合が入っているのかオーラが凄まじいものだった。

総司「変身！！！」

大人「変身！！」

新「変身！！」

琢磨「変身！！」

電子音「・・・HENSIN！！！！」

4人はそれぞれカブトとガタツクに変身しそれぞれ向い合う。総司と新はいつもと違う・・・いや・・・正確にはいつも以上に殺気の

様なものがオーラのようなモノとなつて放たれていた……カブト（総司）「さつきも言ったが今日からは特訓の内容もハードだ……根を上げるなよ？」

カブト（大人）「……勿論そのつもりです。貴方とおなじ所に立つたためならば……」

カブト（総司）「……覚悟は出来ているようだな……来い。」

ガタツク（新）「怪我しないように自分で自分の身は守れ……」

ガタツク（琢磨）「……はい。」

カブトとガタツク同士での組手が始まり大人と琢磨の最終試練が始まる。だがそれはただ単に力が強くなると言う事ではなかった……強くなるとは己自身にある心の壁と戦う事であったのだ……そしてまた場所は変わる……

ZECTの地下施設……此処はマスクドライバーシステムを研究・開発している場所であった……此処でカブトやガタツクは造られた……だがそれだけではなく実験も行われていた……

？「こ、今度は俺をどうするつもりだ？……」

三島「今度は今では違う……貴様の命もなくなるかも……

安西？」

安西「……ハイパーゼクターか……とうとうアレも……」

そう今まで実験に使われたのは安西だった……それだけならまだよかったが彼はこのシステムがどうやって作られているかを知つてしまったのだ……安西は今度こそ自分の命は無くなると思ひ何もかも投げ出した思ひだった……だがそれさえも三島に利用されることとなる……自身を彼のマリオネットとして……

第25話「もう一人のハイパーフォーム登場！？大人と琢磨の最後の試練」(後

というわけで久々に安西さんの登場及び天道と加賀美による最後の  
試練のスタートです。

今回はそれぞれのハイパーと大人と琢磨がぶつかり合います。

そして三島と間宮の企みも及び安西の未来も……

次回もお楽しみに

第26話「VSハイパーフォーム!!!大人の足りないモノ」(前書き)

前回までのあらすじ

突如現れたハイパーフォーム。総司達はその正体が未来の大人と琢磨であると推測し二人に最後の試練を課す。その内容とは……

第26話「VSハイパーフォーム！！大人の足りないモノ」

カブト（大人）「うおおおおおおおっ！！！！！」

カブト（総司）「はああっ！！！」

二つのカブトクナイガンがぶつかり合い火花を散らす。今までの特訓で大人は総司にかなり鍛えられ体力、スピード、パワーの面でも総司と互角に渡り合えるほどの力を身につけたため序盤は一步も引かない戦いが繰り広げられる。

カブト（大人）「たあああっ！！！！！」

カブト（総司）「！？・・・ぐう！？」

カブトクナイガンのアックスモードの斧の刃が罅迫り合い刃と刃がぶつかる中で大人は罅迫り合いを解くとそのまま鍛え上げた身のこなしで総司が変身するカブトのボディにキックを見舞わせる。総司は腕でガードするも大人のパワーに押されて飛ばされる。

カブト（総司）「やるな？流石この俺が鍛えた甲斐が有ると言うもの。だが本番はここからだ。キャストオフ」

カブト（大人）「！！・・・キャストオフ！！」

電子音「CAST OFF！！！ CHANGE BEETLE  
！！！！」

カブト（総司）「クロツクアップ」

カブト（大人）「しまっ・・・ぐああ！！！！・・・がはああっ！！？・・・うわあああっ！！！！」

電子音「CLOCK UP！！！！」

二人は同時にキャストオフすると鎧はぶつかり合う。同時にキャストオフする事で鎧同士が相殺されて総司と大人の二人のキャストオフによるダメージは皆無だったのだが総司が一瞬先にクロツクアップを発動して大人にキレのある超光速ラッシュを見舞わせて大人にダメージを与えクロツクアップが終わる数秒前に大人にコレで終わりとはかり飛び蹴りを見舞わせる・・・大人は思いつきりホルの

床に叩きつけられてしまうが・・・立ち上がる・・・この程度など  
もう自分には効かないと示すように・・・

カブト（大人）「まだまだ・・・俺だっていつまでも立ち止まって  
いるわけにはいかないんだ・・・つぼみが変わったように・・・今  
度は俺が強くならなきゃならないだ・・・」

つぼみ「大人さん・・・」

つぼみは大人の言葉を聞いて胸に刺さる何かがあった・・・小さい  
頃は彼をまるで本当の兄として甘え慕って彼女・・・だがあの時の  
特訓でプロツサムと戦った時にかつて自分に寄り添っていたつぼみ  
はもういない事を知った大人・・・彼はホントは寂しいのと同時に  
自分は何も変わっていない事にコンプレックスを抱いているのかも  
しれない・・・つぼみは彼のセリフの意味をそんな風に感じられ  
た・・・まるで自分を変える事に焦っているかのように・・・

カブト（総司）「そうか・・・だが変わる事と強くなる事は俺は違  
うと思うぞ・・・おばあちゃんが言っていた自分を変えることと  
は心を成長させる事だつてな」

総司は天に指を指して自身の教えを大人に教える。この闘いで強く  
なってもそれは本当の意味で自分を変えた事ではないと大人に釘を  
さすように・・・

カブト（大人）「・・・例えそうだとしても俺は・・・俺は・・・  
アンタみたいにならなければならぬんだあ！！！」

カブト（総司）「俺みたいに」か・・・なら俺を殺す気で来い！  
！！その覚悟すらなければお前は一生かかってもこの俺とは同じ所  
に立つ事はできんぞ」

カブト（大人）「うおおおおおおおおおおお！！！！  
！！！」

大人は総司の言葉に何か吹っ切れたように向っていく。総司もそ  
れに対応するかのよう大人の元に走っていき同時にパンチを放ち

拳と拳がぶつかり合いその衝撃で爆発が起きる。

カブト（総司）「お前がそこまで自分を強くしようと思う理由は何だ？」

カブト（大人）「俺は・・・俺自身に与えられた力でこの町の人を・・・タやつぼみ達を守りたいんだ！！。その為にも今の俺じゃ駄目なんだ！！！」

カブト（総司）「ほう？・・・ならその決意を俺のフルパワーから守ってみろ。ハイパーキャストオフ」

電子音「CHANGE HYPER BEETLE！！！」

カブト（大人）「・・・ハイパーカブトが相手でも俺は負けない！！！」

総司はハイパーゼクターを取りだすとそのままベルトにセットする・・・そう最後の試練とはハイパーカブトを超えろと言う事だったのだ。大人はクナイガンを構えながらハイパーカブトとなった総司に向かっていく。総司は容赦なくパーフェクトゼクターを取りだしていくとカブトの鎧に刃を向ける。

ハイパーカブト（総司）「はああっ！！！」

カブト（大人）「くっ！！！！・・・うおおっ！！！！！」

総司のハイパーゼクターとクナイガンがぶつかり合い火花を散らす。がパワーではやはりハイパーゼクターが上回っており大人はパワーで押されてしまう。長期戦は不利と思いい大人は此処で勝負に出る。

電子音「ONE TWO THREE」

カブト（大人）「ライダーキック！！！」

電子音「RIDER KICK！！！」

大人がライダーキックの準備をすると同時に総司もハイパーカブトの最強技を発動させべくザビー、サソード、ドレイクのゼクターを呼び寄せて合体させる。

電子音「KABUTO - POWER！！ THEBEE - POW

ER！！ DRAKE - POWER！！ SWORD - POW

ER！！ All Zector Combine！！ MAXI

MUMIHYPERITYPHOON!!!!」

カブト「来い・・・はああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」  
大人のライダーキックと総司のマキシマムハイパーティーンがぶつかり合い周囲に光と衝撃が走る・・・そして光がやむ頃には・・・

大人「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

総司「はあ、はあ、はあ、はあ・・・やるな？だがまだお前にはハイパーゼクターを使う事は出来ない」

大人「ど、どうして？やつと互角になったのに」

総司「力の問題ではない・・・お前の心の問題だ。その本当の意味は自分でみつけるんだな。」

大人「心の問題・・・」

総司は大人にそう言うのと笑顔を見せながらそう言う・・・ハイパーカブトと互角ならば大人もハイパーゼクターを使えるだけの力量もあるだろう。だが大人にはまだ足りないものがある。だがそれは大人自身が見つける事にこそ意味がある・・・

その頃新と琢磨の方はと言うと・・・

ハイパーガタック「ハイパークロックアップ!!!!」

電子音「HYPERCLOCKUP!!!!」

新が変身するガタックがハイパーフォームとなり琢磨に容赦のない攻撃を仕掛けていた。だが琢磨はどんなにハイパーガタックの攻撃を受けても立ち上がる・・・何度も何度も倒されても・・・

電子音「HYPERCLOCKOVER!!!!」

ガタック(大人)「はあ、はあ、はあ・・・」

ハイパーガタック(新)「まだ耐えられるとはな。流石に俺と天道が鍛えただけはあるな」

ガタック(琢磨)「はあ、はあ、はあ・・・まだまだあ!!!!」

ハイパーガタック「なら・・・そろそろ終わりだ。ハイパークロックアップ!!!!」



ガタツク（琢磨）「俺も全力で行くまで！！！」

電子音「ONE TWO THREE」

ガタツク（琢磨）「ライダーキック」

電子音「RIDER KICK！！！」

琢磨はコレで勝負を決めてやるとライダーキックの発動体勢になるが新もガタツクの最強技を見せてくれるとハイパーゼクターに手をかけていき・・・

電子音「MAXIMUM RIDER POWER！！！」

ハイパーガタツク（新）「ハイパーキック！！！」

電子音「RIDER KICK！！！」

ライダーキックとハイパーライダーキックがぶつかり合うと凄まじいエネルギーのぶつかり合いにより衝撃波と爆発が起きる・・・ガタツク（琢磨）「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

ハイパーガタツク（新）「・・・」  
「どうやら決着は引き分けの様であるが明らかに琢磨はギリギリの様であった・・・」

ハイパーガタツク（新）「流石だな？・・・これならお前もハイパーゼクターを使いこなせるはずだ。もう俺に教える事は何も無い・・・」

ガタツク（琢磨）「はあ、はあ、はあ、はあ、はい。ありがとうございまして」

琢磨は新にやっと認めてもらえたと素直に喜ぶ。コレで自分は更に進化できるそう信じて・・・

特訓が終わりますべてがきれいに収まったかに見えたがそれは琢磨だけであり大人はずっと考えこんでいた・・・総司に言われた足りなもの・・・それは一体何なのか・・・

大人「俺に足りない何か・・・心の問題・・・一体何なんだ？琢磨は認めてもらえたのに・・・何で俺がダメなんだ？・・・」

大人は部屋に閉じこもり総司の言葉の意味をずっと考えていた・・・

心の問題・・・その言葉の意味を・・・力の強さではない・・・心の強さ・・・どういう事なんだ？自分の決意が間違っているとも言うのか・・・大人は必死に考えてが答えが見つからない・・・琢磨にあつて俺にないモノそれは何なのか・・・

翌日大人は総司に言われた事を事を一日中考えており学校の授業も手がつかなかった・・・そして時間が流れていき放課後・・・大人「・・・（俺に足りないモノ・・・心の強さ・・・分からない。どういう意図なのか）」

大人はあてもなく総司に言われた事を考えながら歩いていた・・・そうやって只時間を浪費していくのだがその後ろから大人に飛びかかる影が・・・

タ「どおっくん!!」

大人「うお!!?・・・またお前は後ろから・・・」

タ「無警戒な大人が悪い!!・・・ってどうじたの？何か考え込んでいるみたいだけど・・・」

大人「え?・・・ああ〜ちよつとな」

タ「まあ〜たそれだ・・・アタシもライダーになつたんだから困つた事あるなら相談乗るよ?」

大人「・・・そうだったな・・・実は・・・」

後ろから体当たりしてきたのはタだった・・・大人はいつもの事かのため息をついていくがタは大人の心境の変化を察したのかすぐに聞いてきた・・・大人は黙っていてもしようがないと思いついに昨日の事を話す・・・自分足りないモノとは何かについて・・・タ「足りないものかあ〜大人の心の力・・・それって力を持つ事の覚悟じゃないかな?」

大人「力を持つ事の覚悟?」

タ「うん。アタシもフェアリーの力を手に入れて分かつたんだよ力を持つ事の怖さを」

大人「力を持つ事の怖さ?」

夕「そう。私達の力は・・・ううん。つばみちゃん達の力も悪い様に使えば人を不幸にする・・・大人は強くなりたいと思っただけだと強くなると言う事はそれだけの覚悟がいるってことを天道さんは伝えたかったんだと思う・・・」

大人「力を持つ事の覚悟・・・ありがとう夕！！」  
夕「え？・・・ちよつと何処行くの？」

大人はやつと答えが分かったと植物園にある薫子の家へと向かう。総司の出した問いに応えるために。

総司「なんだ？そんなに慌てて」

大人「貴方が伝えたかった事が分かったんだ・・・」

総司「そうか・・・なら聞こうか・・・コレが出来たらな」

そう言つて総司は台所で何か調理している。大人はそれを待つ。何も言わずに・・・そして30分後ようやく出来たらしく台所から皿を大人が座っているテーブルに持ってくる。

出てきたのは総司が得意と言う料理である麻婆豆腐だった。

総司「では聞こう。お前の導き出した答えを・・・」

大人「・・・俺に足りなかったのは力を持つ事の覚悟だった・・・俺は強さに執着するあまり力の本当の意味を忘れてた・・・そんな俺がハイパーゼクターなんか使ったら力の使い方を謝る・・・」

総司「その通りだ・・・ではさらに問おう。覚悟とは何だ？」

大人「覚悟とは・・・その力に自分が飲まれまいと常に力と自分を戦わせる事・・・そして常に自分を見つめ自分を見失わない事・・・」

総司「合格だ。コレでお前にハイパーゼクターを使いこなせるだろう・・・だがコレも覚えておけ。力の使い方を誤れば自分の大切なモノを失い事になる。」

大人「・・・はい。」

総司「肝に命じておけ・・・よし。じゃあ食べる飯が冷める」

大人「はい。いただきますあゝす！！」



第26話「VSハイパーフォーム!!大人の足りないモノ」(後書き)

今回で天道と加賀美の役割は終盤に差し掛かりました。

さて次回は・・・とうとう二人が超進化を・・・

次回もお楽しみに

## 第27話「超進化!!」(前書き)

前回までのあらすじ

大人は自身に足りないモノを見極めやつと総司にハイパーゼクター  
をさせる器として認められた。

時同じくして三島は”コーカサス計画”とハイパーゼクター量産計  
画が間近に迫りワーム、砂漠の使徒、そして大人達やつばみ達プリ  
キュアを潰す策略を練っていたのだった・・・



織田「……」

三島「ハイパーゼクターの実験の被験者にしたらちよつと……おかしくなつただけだ……気にするな」

須藤「実験つて……人体実験を」

三島「ああ……ZECTの人柱としてな」

須藤「そんな……まさか」

三島「では行け須藤、大和、織田……ZECTの為にハイパーゼクター及びコーカサスの実践テストを奴らで行え……」

須藤&大和&織田「はっ！！」

須藤、大和、織田は三島にけ入れすると部屋から出ていく……だが須藤と織田は納得がいかなかった……人体実験を行つて彼を使うなど許されるはずはない……そんな二人を思考の世界から現実に戻すべく大和が二人に声をかける。

大和「二人ともいくぞ……久々に奴らとやれるとは……ふふふ  
ふっ」

須藤「（大和さん……貴方は何感じないのか……彼があんな姿にされたと言うのに）」

織田「大和先行つてくれて。須藤……話がある。来い。」

須藤「織田さん？……はい。」

織田は大和に先に行くように促すと須藤を呼び出して別の場所に移る。その顔は真剣でまるで自分に警告するかのよう……

織田「須藤……お前はアレを見てどう思った？」

須藤「それは……この組織の忠誠心が揺らぎそうに……いいえ。揺らぐきっかけになりました。」

織田「そうか。お前も矢車や影山と同じだな。」

須藤「え？あの二人と同じとはどういう事です？」

織田「あの二人は……かつてこの組織が人体実験を行っていると言ふ事実を世間に告発しようとしたんだ……だがそれを大和と三島に邪魔されZECTを追放。更には追われる身となつた……」



「須藤「そうだったんですか……だからかつてのシャドウ隊の英雄と呼ばれたあの二人があんな様に……」

織田「だがアイツらは勇敢だった。だからこそ自分達を闇の住人と名乗り“光”を求めて俺達に追われながらも世界を旅していた……その目的も自分達に代わってZECTとワームの両方を潰す戦士を探すために。」

須藤「……彼らはそのためにホッパーを奪い裏切り者となった……私達にも出来る事はないんですか？」

織田「……今の俺達にできるのはハイパーゼクターをアイツらに託すことしか無い。ハイパーゼクターを量産されでもしたらそれこそ手遅れになる。」

須藤「はい。ではこの事を彼らにも……」

織田「いや。それはマズイ。俺達の行動を感じられるのは避けなければならぬからな。俺がハイパーゼクターをなんとか強奪して何とか届ける。お前は大和やアイツがプリキュアとカブト達を倒さないように見張っておけ」

須藤「……分かりました。」

織田「大和はどう思っているかは知らんが……俺はもうこの組織の方針に……いや三島の考えについていけん……」

須藤「私もです……アレを見るまでは……」

織田「では後ほど……」

須藤「はい。」

アレを見るまで須藤はこんな事は考えたくはなかった……だが三島が人体実験を行って彼をあんな目に……須藤はもうこの組織と決別し矢車や影山と同じように戦う覚悟を決めた。この行動は織田と須藤の運命を決める事になるとはまだ彼らにはわからなかった……

場所は変わりとなる河川敷。

影山「兄貴・・・まだかな？」

矢車「焦るな相棒・・・もうすぐだ」

影山「そうだね・・・ごめん」

矢車、影山は何かが出来たのを待っていた・・・そして矢車の時計がアラームが鳴ると・・・

影山「兄貴。」

矢車「ああ。時間だ。」

二人は後ろからカップ麺を取りだしふたを開ける。因みにラーメンの名前は兄弟ラーメン兄貴塩と兄弟ラーメン弟味噌だった。

矢車&影山「いただきます」

二人はラーメンを食べ始める。会話もなくただ無言で食べ進めていく。

影山「兄貴・・・見つかるのかな？俺達の光が・・・」

矢車「分らん・・・だが何処かにはあるはずだ・・・俺達を受け入れる光が」

矢車はラーメンを食べながら影山にそう言う・・・二人を受け入れる光は本当にあるのだろうか・・・それは今の段階では誰も知る由もない・・・

再び場所が変わり植物園・・・

大人「アレからワームも砂漠の使徒も動きを見せないな・・・」

琢磨「ああ。嵐の前の静けって感じ。」

つぼみ「平和なのはいい事ですけど・・・こつも続くとおかしいですな」

えりか「確かに・・・でも平和なのはいい事だと思うよ」

タ「そうそう」たまには休まないと」

大人「お前はいつも休んでるだろうが・・・」

タ「ひどい」

傑「事実だろうが」

ゆり「確かに夕はいつものんびりしてわね」

夕「ゆりまで」

夕のセリフにその場にいた全員が笑う。するとそこに総司が今日のおやつを持ってきた。

総司「今日はチョコレートケーキだ。」

夕「うわあ〜美味しそう」

傑「大人から聞いた通り・・・凄い」

大人「だろ?・・・料理も出来て強くて・・・正に完璧だよな  
いつき「じゃあ食べますか」

新「賛成」

9人「いただきます」

全員は総司が作ったケーキを頼張る。やはり総司の料理はプロクラスであり全員満足そうな顔をしながら食していく。そして全員食べ終える。だがその頃にシプレ達が大慌てで飛んでいく。

総司「どうしたんだ?お前達も食うか?」

シプレ「そ、そんな事言っている場合じゃないですう!!」

コフレ「き、き、き、き、」

大人「”き”がどうしたんだ?」

ポプリ「金色の仮面ライダーが現れたでしゅ!!!町を破壊してるですう!!!」

琢磨「またライダーかよ・・・」

夕「敵の噂なんかするかだよお」

傑「仕方がないな・・・皆行くぞ!!!」

7人「うん!!!」

新「天道・・・俺達も・・・」

総司「いや・・・今回はお前達で行け。コレが俺の出す最終試験だ。」

大人「はい!!!」

大人達8人はシプレ達が現れたと言う金色の仮面ライダーが現れたと言う場所に向かう。その場所とはビル街の高層ビルの屋上であっ

た。巢の場所には既に大和や須藤がいた。

大和「来たな・・・プリキュア・・・それに選ばれしライダー達よ」  
須藤「・・・」

大人「須藤さん・・・アンタやつぱZECTに従うのか・・・」  
須藤「・・・今日相手をするのは私達だけじゃない。出て来るが  
いい仮面ライダーコーカサス。安西直人!!!」

須藤の掛け声と共に目の光が消えかけている安西が現れる。身体は  
何かの機会でつながっていて人と言うよりはアンドロイドに近いも  
のだった。

大人「あれは・・・人間？」

琢磨「・・・サイボーグか」

タ「ひどい・・・」

傑「なんて事を」

大和「ふふっ・・・裏切り者には相応しい末路なだけだ。」

つぼみ「裏切り者って・・・」

えりか「こんな事間違えてるよ・・・」

いつき「人間がする事じゃない・・・」

ゆり「・・・」

大人「みんな・・・行くぞ!!!」

琢磨&傑「おう!!!」

つぼみ達女性陣「「「「「はい!!!」」」」」

大人&琢磨&傑&タ「「「変身!!!」」」」

電子音「「「HENSIN!!!」」」」

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう!!!」(で  
すっ&でしゅ)

4人「プリキュア・オープンマイハート!!!」

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!」

4人「ハートキャッチプリキュア!!!!」  
大人、琢磨、傑、夕の4人はカブト、ガタツク、ダークカブト、フェアリーのそれぞれのライダーに変身していくと同時につぼみ達もプリキュアの光に包まれてプリキュアに変身する。それと同時に大和と須藤も・・・

大和「変身!!」

須藤「・・・変身」

安西「へん・・・しん」

電子音「HENSIN!!! (CHANGE BEETLE!!!)」

須藤と大和もザビーとケタロスにそれぞれ変身していく。そして安西黄金のもカブティックゼクターが飛んでいくとそのままライダーブレスに収めていく。安西が変身したコーカサスは他のライダーとは違うオーラが放たれていたがそれにまだ大人達は気が付いていなかった・・・

カブト「俺とガタツクはあの金色のライダーを相手をする。残りはザビーとケタロスを頼む。」

全員「了解!!!」

ブロッサム「貴方の相手は私達です。」

マリリン「この前はブロッサムを苛めてくれたみたいだけど今度はアタシもいるからお返ししないとね!!」

フェアリー「女の子を苛める男はアタシが成敗しちやる!!!」

ケタロス「ふふふ・・・良いだろう!! 貴様らガキに俺が倒されるとでも思っているのか?」

ケタロスの相手は前回のリベンジをとブロッサムとマリリン更にフェアリーが相手となった。ケタロスはそんな3人にかかって来いと促すように。

ザビー「・・・ (織田さん。まだですか!!!)」

ムーンライト「よそ見してる余裕があるのかしら？」

ザビー「……」

サンシャイン「この前は負けちゃったけど今日は負けない!!!」

ダークカブト「お前がサンシャインを倒して奴か?……」

ザビー「来い……(織田さんが来るまでの辛抱か)」

ザビーは織田が来るまでの間はこの3人を戦うしかないと言わしめて、シャドウ隊を呼び寄せながらムーンライト、サンシャイン、ダークカブトに向っていくが本気を出すわけにはいかない為織田が来るまで辛抱するとになるのだった……

コーカサス「……おおおおおおつ!!!!!!」

カブト「ぐううつ!!!?!?!?!?」

ガタツク「がああああつ!!!?!?!?!」

カブト「くつ……クロックアップ!!!」

ガタツク「クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP!!!」

コーカサスと闘うカブトとガタツク……だがコーカサスの強さは凄まじいものであり二人掛りでも敵わない……此処で二人は一気に攻めてやろうとクロックアップを發動させてやろうとしたのだがコーカサスは慌てることなく……

コーカサス「……ハイパークロックアップ」

電子音「HYPER CLOCK UP!!!」

そうハイパーゼクターを召喚しそのままベルトにセットするとハイパークロックアップを發動させていくのだった。カブトとガタツクはハイパークロックアップの衝撃とコーカサスの攻撃に飛ばされてしまう。

カブト「くう……な、こ、コイツもハイパーゼクターを……」  
ガタツク「くつ……くそお!!!俺達にもハイパーゼクターがあればあ!!!」

コーカサス「……」

コーカサスの圧倒的な力にカプトとガタツクは何とかしてこの相手を何とかしなければと二人で何とか向かっていくのだがコーカサスのパワーとハイパークロックアップの攻撃に押されてしまい不利な形勢を強いられてしまう……

ケタロス「はあああつ!!!」

ブロッサム「ふつ!!! たあああつ!!!」

マリ「はあああつ!!! ありやああああつ!!!」

フェアリー「フェアリーレイピアガンモード!!! つけえええええええつ!!!」

ケタロス「!!!??. . . ぐおおおつ!!!??. . . コレが白銀の妖精の力か!?. . . だがこの俺とてタダではやられんぞおつ!!! クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP!!!」

ブロッサム「その手は通用しません!!! マリ!!!」

マリ「やるつしゅ!!!」

ブロッサム&マリ「レッドの光の聖なるパヒューム!!! シュユツと気分でスピードアップ!!!」

ケタロス「何?!?. . . 貴様らそんな小細工をつ!!!」

フェアリー「キャストオフ!!!」

電子音「CAST OFF!!! CHANGE - BUTTERFLY!!!」

フェアリー「クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP!!!」

ケタロスのクロックアップにブロッサムとマリはレッドのパヒュームでフェアリーはクロックアップで対抗していく。総司に鍛え上げられたブロッサムとマリは以前とは違いケタロスを追いつめていく。

ケタロス「くつ. . . おのれえ. . . 貴様ら」

サンシャイン「ふんっ!!はあああつ!!!!」

ムーンライト「ふん、はああつ!!!!たあああつ!!!!」

ダークカブト「たああ!!ふんっ!!!!」

ザビー「ちっ・・・くっ!?!?... (織田さん・・・まだですか?)

」

ザビーはサンシャインとムーンライト、ダークカブトの攻撃を只受けるしかなかった・・・ダークカブトは初めての為に何とも思わなかったのだがサンシャインとムーンライトはザビーの動きに不信感を抱いていたのか攻撃の手を緩める。

サンシャイン「どうして本気を出さないの?」

ムーンライト「何か策でもあるのかしら?」

ザビー「・・・俺は・・・もう信じられないだけだ」

ダークカブト「どういう意味だ・・・」

サンシャイン「貴方・・・」

ムーンライト「まさか・・・」

ザビー「あんな人体実験をした組織にもういたくない・・・それだけだ」

ダークカブト「・・・」

ザビーはそれだけ言うつとマスクドフォームのまま3人に向かって行く。だが本気は出さない。織田が来るまでの辛抱だったから・・・そしてそんな中・・・一人の男の影が・・・

織田「はあ、はあ、はあ・・・待たせたな須藤!!」

ザビー「織田さん!!」

織田「カブト、ガタツク!!受け取れえ!!!!」

カブト「アレは・・・」

ガタツク「ハイパーゼクター!!」

織田はハイパーゼクターが入ったケースをカブトの方に投げる。織田の身形はボロボロであり唇からは血が出ていた。恐らくハイパーゼクターを奪ったために裏切り者とみなされてZECTの追手に追



われたのだろう。その姿を見たケタロスは織田に向かって憤怒を露わにして叫ぶ。

ケタロス「織田あ！！貴様・・・裏切るのか？」

織田「俺だけじゃない。須藤！！」

ザビー「はい！！。私達は・・・ZECTから抜けさせてもらいます。私達はZECTの道具じゃない・・・ましてやワームと手を結ぶような組織なんて信用できません。」

ケタロス「貴様あ！！」

ザビー「カブト、ガタツク・・・ハイパーゼクター託したぞ！！！！」

カブト「ああ！！。ガタツク！！」

ガタツク「おう！！。」

二人はハイパーゼクターの入っているケースから二つのハイパーゼクターを取りだす。そして迷わずベルトの左腰にセットする。

カブト&ガタツク「ハイパーキャストオフ！！！！」

電子音「HYPER CAST OFF！！！！」

電子音「CHANGE HYPER-BEETLE！！！！」

電子音「CHANGE HYPER-STAGB EETLE」

ハイパーカブト「ふっ！！」

ハイパーガタツク「ふん！！」

ケタロス「己えく・・・」

コーカサス「・・・」

二人は遂にハイパーゼクターを手に入れハイパーカブト、ハイパーガタツクに超進化した！！ケタロスとはそれにかなり動揺していたがコーカサスは何も感じなかった・・・いや既に感情すらもなくてしまったかのようにただ立っていた・・・

ブロッサム「遂に二人ともハイパーフォームに！！！！」

マリリン「凄い！！大人さんと琢磨さん」

サンシャイン「二人とも・・・カツコイイ」

ムーンライト「やったわね！！二人とも」  
ブロッサ達は二人が超進化出来た事に感激しハイパーカブトとハイパーガタツクにガッツポーズを送る。二人もそれに応えるように親指を立ててグーサインを送る。その後裏切り者となったザビーと織田ブロッサム達プリキュアとハイパーカブトとハイパーガタツク、そして敵のケタロス、コーカサス、シャドウ隊との大乱闘が始まるのだった。

第27話「超進化!!」(後書き)

とうとう二人がハイパーフォームに進化しました。

コーカサスはオリジナルが迷いましたが安西さんにしてもらいました(汗)

次回は再び大乱闘が始まります。あの兄弟たちも気まぐれで……

次回もお楽しみに

第28話「大乱闘！！コーカサスVS カプト&ガタック」(前書き)

前回までのあらすじ

須藤と織田は安西が人体実験の被験者となり精神崩壊させられ人ではなくなった事を知るとZECTの離反を決心ハイパーゼクターを大人に託す準備を進める。織田と須藤の作戦は成功し遂に二人はハイパーフォームへと超進化した!!。

ケタロス、コーカサス、シャドウ隊VSハイパーカプト、ハイパーガタック、ブロッサム達プリキュアにザビーとヘラクスを入れたの大乱闘が始まるのだ!!!!

## 第28話「大乱闘!!!コーカサスVS カブト&ガタック」

織田「変身!!!」

電子音「HENSIN!!! CHANGE - BEETLE!!!」

織田はヘラクスのカブティックゼクターを召喚しライダーベルトに収めていき銀色のライダー仮面ライダーヘラクスへと変身する

ヘラクス「ブロッサム達・・・すまないが大和は俺達に相手をさせ  
てくれ」

ブロッサム「え?・・・でも・・・」

ザビー「お願いだ・・・自分達の身内は自分達で倒させてくれ・・・」

マリリン「・・・分かった・・・ブロッサム!!!アタシ達はシャドウ  
隊のゼクトルーパーを」

ブロッサム「はい。お二人とも・・・負けないでくださいね!!!」

サンシャイン「ザビー!!!負けたら承知しないよ!!!」

ムーンライト「貴方には私達を襲った事を謝ってもらわないといけ  
ないんだから。」

ザビー「ああ。」

ヘラクス「須藤・・・いくぞ!!!」

ザビー「はい!!!」

ザビーとケタロスは二人で暴走しているケタロスを抑えるべくブロッサム達プリキュアにゼクトルーパーを任せ自分達はケタロスの所  
に向かう

ケタロス「織田あゝ須藤うゝ貴様らZECTを裏切るとはいい度胸  
だなあゝ?裏切り者である貴様らをこの俺が消してくれるわあゝ」  
ザビー「大和さん!!!貴方はあんな目にあつた安西さんを見て何も  
感じないんですか!!!?確かにマスクドライバーシステムを奪い川  
に流した事は重罪です・・・でもあんな目に会う必要がどこにあつ

たんですか!!!」

ケタロス「青いな・・・貴様も所詮は矢車や影山と同じ安っぽい正義感の塊だな。裏切り者の末路として当然の結果だろうが?・・・」

矢車と影山のバカも同じことを言っていたな・・・」

ヘラクス「あの二人を潰した原因はお前だろうがあ!!!あの二人を愚弄する事は例えお前でも許さない!!!」

ザビー「矢車さんと影山さんの無念シャドウ隊長として・・・いやザビーの資格者としてこの俺が晴らして見せる!!!」

ザビーとヘラクスは狂気が溢れるケタロスへと向かっていく・・・ヘラクスもザビーもかつての仲間であつた大和が変身するケタロスと闘うと言う事は望んでなかつたのだが大和が人としての心がなくなつたのなら自分達が目覚めさせるしかないと・・・だがそこに噂をすれば影と言う事かあの二人も現れる・・・

矢車「今・・・俺達の事を笑つたのはお前か?」

影山「誰かと思えば・・・大和!!!」

ヘラクス「矢車、影山!!!」

矢車「もつと笑ってもらおうか・・・変身!!!」

影山「地獄を見せてやる・・・変身!!!」

電子音「「HENSIN!!!」」

電子音「「CHANGE KICK-HOPPER!!!」」

電子音「「CHANGE PUNCH-HOPPER!!!」」

ケタロス「貴様らぁ・・・いいだろうまとめて片付けてくれる!!!!!!」

ゼクトルーパー小隊長「矢車と影山も登場するとは・・・各員大和隊長を援護するぞ!!!」

ゼクトルーパーはケタロスを援護するべく30人以上の団体が向うのだが・・・その前にブロッサム達ハートキャッチプリキュアメンバーとダークカブト、フェアリーが立ちはだかる。

ブロッサム「貴方たちの相手は私達です!!!」

マリ「あの二人の決意の邪魔はさせない!!!」  
ゼクトルーパー小隊長「貴様らあゝええい全員片付けるお!!!」  
ムーンライト「皆行くわよっ!!!」  
ブロッサム&サンシャイン「はい!!!」  
マリ「やるっしゅ!!!」  
フェアリー「りよ〜かい!!!」  
ダークカブト「おう!!!」  
ゼクトルーパー達は散開するとそれぞれ5人一組でブロッサム達に向かっていく。

コーカサス「……………」  
ハイパーカブト「ガタツク……この人を楽にしてやろう。(まるで魂が抜けたのようだ……ZECTは平気でこんな非道な真似を!!!)」  
ハイパーガタツク「ああ。(俺達しか彼を救えない……なら攻めて安らかに)」  
コーカサスはまるで機械の様にでありゆっくりと二人に向かっていく。ハイパーカブトとハイパーガタツクは彼の悲痛な叫びが聞こえて聞こえて来たようだった……二人は苦しむ彼を救おうと本気で相手をする事を決意する。

コーカサス「……………あああああっ!!!!!!」  
ハイパーカブト「ふうっ!!!」  
ハイパーガタツク「はあああっ!!!」  
コーカサスの拳とハイパーカブトとハイパーガタツクの拳がぶつかり合う。二人と言う事もありコーカサスをと互角に戦うがコーカサスはダメージを受けても怯むどころか向ってくる……アンドロイドのように改造されてしまった安西には既に感覚と言うものすら存在せずに只相手を破壊するだけの戦闘兵器となってしまうのだ……このまま闘いを続ければ安西自身も死んでしまう……二人は彼を何とか気絶させて変身を解こうとするのだが……

ハイパーカブト「くっ!! どんなにダメージを与えても怯む仕様すら見せないなんて・・・」

ハイパーガタック「どうすれば・・・この人を解放できる!?!」

二人の攻撃を受けとめていくコーカサスだったが突如彼に異変が・

コーカサス「あああああっ!!!!・・・!!!!・・・くううあうううあうう・・・あああああ~~~~~」

ハイパーカブト「どうしたんだ?」

ハイパーガタック「急に苦しみだした?」

コーカサスは暴れまわると変身を解いて安西の姿に戻る・・・その様子を見たケタロスはザビー達を相手するのを中断していきコーカサスの元に近づき乱闘している全員に呼び掛ける様に大声を上げる。ケタロス「全員撤退だ!!! コーカサスの資格者が暴走を始めた!!! 聞こえたか? 全員撤退せよ!!! 死にたくなければな!!!」ケタロスの号令に従い全員が散り散りになりながらも撤退する。ハイパーカブト、ハイパーガタックは追撃は無駄だと思い変身を解除する。

大人「あの金色のライダー・・・様がおかしかつたがどうしたんだ・・・」

琢磨「暴走って言ってたけど・・・」

大人「・・・」

プロツサム「大人さん!!」

マリン「琢磨さん!!」

フェアリー「二人とも大丈夫?」

大人「ああ。」

琢磨「この通り何ともないさ。」

変身を解除した大人と琢磨にプロツサム、マリン、フェアリーが二人に走って来ると二人に抱きつくようにダイブしていくる。



大人「ちょ、ブロッサム・・・夕」

琢磨「うあ！？マリン！？」

ブロッサム「遂にやりましてね！！ハイパーフォーム超進化おめでとうございます！！」

フェアリー「やっじやん！！二人ともお」

マリン「天道さんと加賀美さんの修行の成果だね！！ホントにおめでと琢磨さん」

琢磨「マリン・・・ありがとな」

大人「ありがとう二人とも・・・ふふっ」

大人と琢磨はブロッサム、マリン、フェアリーの祝福を受ける。あの地獄の様な特訓を見ていたブロッサムとマリンは知っていた。二人がハイパーフォームに慣れたことの喜びを・・・3人の女神たちに祝福されながら大人と琢磨はハイパーフォームになれた感激を胸に秘めながら感動に浸っていくのだった・・・

その頃ザビー達も変身を解除して・・・

須藤「・・・さあ〜てこれからどうしようかなあ。」

織田「そうだな・・・俺達はもうZECTに戻れない・・・恐らく追手が来ることとなるだろう・・・」

須藤「ええ・・・」

須藤は寂しそうにそう言う・・・自分がした事は本当に正しかったのかとさえ思うほど何か失ったような喪失感が溢れ出てきたのだ・・・

・そんなん二人にムーンライトが近づいていき・・・

ムーンライト「なら私達の仲間になれば良いじゃない。」

須藤「！？・・・簡単に言ってくれるね・・・いいのかい？織田さんはともかく俺は君達を殺そうとしたんだよ？」

ムーンライト「確かにあの時は任務にこだわって渡したいの命を奪おうとしたわね・・・でも今日は違った。貴方たちの行動げなければ私達はあの金色のライダーに殺されていたのよ？・・・貴方達の行動する勇気があったからこそ私達は今ここにいるの。」

須藤「確かにそうだけど・・・でも俺は・・・」

織田「須藤・・・彼女達についていこう。」

須藤「織田さん・・・しかし!!」

織田「それが俺達のすべき償いなら・・・いいじゃないか。罪を償うには・・・一番いいと思う」

須藤「・・・はい。」

須藤と織田はムーンライトの誘いを受ける事にした。ZECTと決別を決めた今は大人達や彼女達プリキュアと共に戦うことこそが自分達の贖罪であるのならソレを受けれると。

その頃地獄兄弟はと言うと・・・

矢車「はあ・・・行くぞ相棒」

影山「うん。行こう兄貴・・・」

サンシャイン「待つて!!」

矢車&影山「!?!」

ダークカブト「何処に行くんだ」

矢車「・・・何処でもない・・・何処か」

影山「俺たちみたいな半端モノを受け入れてくれる”光”を探しに・・・」

ダークカブト「・・・なあアンタら俺達の仲間にならないか？」

矢車「仲間?・・・お前何も言って」

影山「俺達に仲間なんて・・・」

ダークカブト「アンタらはそうやって逃げてるだけでいいのかよ？」

矢車「何？」

サンシャイン「貴方達がどんな闇を持っているかはわからない・・・でも私に貴方地の闇を癒す事が出来るのならその心の闇を私の光で照らしてみせる。だから私達と来てほしいの・・・貴方達の心を元に戻すために・・・」

影山「兄貴・・・コイツ・・・」

矢車「ああ。キュアサンシャイン・・・お前本当に俺達の闇を照ら

せると言うのか？お前の太陽の様な心で・・・俺達のような闇の住人を」

サンシャイン「・・・私の兄は太陽みたいにすべてを受け入れてくれる人。私もお兄様みたいにすべてを受け入れられる人になりたい。だから貴方たちの闇の闇も受け入れてみせる。」

影山「・・・」

矢車「いいだろう。群れるつもりは無かったが・・・相棒・・・見つかりそうだな俺達を受け入れてくれる・・・」

影山「光」が・・・分かったよ兄貴・・・俺は兄貴に一生ついていくよ例え地獄の果てまでも」

矢車「相棒・・・ふっ」

ダークカブト「・・・（この二人が怪しく思えるのは俺だけか？）  
二人はサンシャインの説得に魅かれる何かがあったのかそれともただの気まぐれなのか・・・サンシャインとともに大人達の元に向かう・・・」

大人「須藤さん・・・それとアンタは・・・」

織田「織田秀成・・・仮面ライダーヘラクスだ。」

ブロッサム「宜しくおねがします。あ、貴方達は！！地獄の・・・マリン「兄弟！！・・・何でアンタ達が？」

サンシャイン「私の説得を聞いてくれたのよ」

矢車「一応名を名乗っておく・・・矢車想。仮面ライダーキックホッパー。」

影山「影山瞬・・・仮面ライダーパンチホッパー。」

ムーンライト「貴方達も仲間達に？」

矢車「・・・キュアサンシャインの言葉に魅かれてな」

影山「やっと見つかるかもしれないんだ・・・俺達を受け入れてくれる・・・」

矢車&影山「“光”を」

矢車と影山のどす黒い何かを感じたブロッサム達は思わず引いてし

まうが・・・自分達と一度は倒した仮面ライダー・・・心強い存在になると確信した・・・（かなりネガティブな部分さえなければ・・・）

大人「・・・大丈夫なのか？この人たち・・・」

サンシャイン「大丈夫・・・私が必ず変えて見せるから。」

ブロッサム「頼みましたよ・・・サンシャイン」

大人、ブロッサム、サンシャインは小声でそう言っていると周囲は冷や汗をかいた顔をしながらも空を見つめている二人を見るのだった・・・

新しい仲間が加わり大人達ライダーやつばみ達プリキュアのの心は一つに固まりつつあった・・・犠牲になった安西の為に必ずZECTとワームの両方の野望を叩き潰さなくてはならない・・・8人の若き戦士達はZECT、ワームとの最終決戦に向けて着々と動き始めていたのだった・・・

第28話「大乱闘!!! コーカサスVS カプト&ガタック」(後書き)

今回はカプト編の終盤の第一ステージを意識してみました(笑)

次回からはワーム&ZECT編の終盤を描いていきたいと思ひます

!!!。

思えば長かったなあ^^;

では次回もお楽しみに

## 第29話「固まった決意」(前書き)

前回までのあらすじ

コーカサスの暴走により辛くも勝利をおさめた大人達。新たに矢車、影山、須藤。織田というかつてのZECTのメンバーを仲間になり戦力の大幅強化に成功したのだった。



三島「そうか・・・後少しだな。人類がネイティブと化するのも・・・この世界がネイティブのモノになるのもな」  
根岸「ああ。そうなれば彼らも救われるだろう。」  
三島「そうだな数多くの”実験材料”も無駄ではなかったという事だ」  
根岸と呼ばれる大柄な男が現れると二人はそう言っただけで笑う・・・ZECTによる・・・いやネイティブによる全人類ネイティブ化計画は着々と動き出していたのだ・・・だが彼らはまだ気がつかなかった・・・自分達の計画を邪魔する存在に・・・

その頃植物園ではつぼみ達プリキュアは勿論のこと大人達やドレイクの風間大介、サソードの神代剣なども集められていた。  
全員を集めたのには理由があったのだ。矢車、影山から須藤や織田が知らないZECTという組織について話を聞くという立派な理由が・・・総司と新は矢車と影山がこの世界でも義兄弟として生活していたのかと呆れているような目だった。そんな彼らを本能的に敵であると認識した矢車と影山は二人を睨むが大人が話をしてくれるように促すと場の空気は何とか丸く収まった。

矢車「あの組織・・・ZECTは人間のモノではない。ネイティブのものなんだ。」

大人「ネイティブ？」

総司「やはり・・・この世界にもネイティブがいたか」

琢磨「天道さん？」この世界のものにもって」

総司「ああ。俺達の世界のもいた説明してもいいが俺の説明の前に矢車達話を聞いた方がいいだろう。」

総司はそう言うのと口を閉じる。矢車や影山は話を止められて機嫌を損ねた様な態度を取ったが話を続けるべく口を再びは開く。

影山「須藤や織田さんが知らないのも無理はないよ・・・この事は7年前のワーム殲滅作戦に参加した者の中で前線部隊の一部しか知らないんだから・・・」



織田「そうか・・・お前達は7年前はシャドウ隊の初代隊長。あの頃のシャドウ隊は1番隊と2番隊があっただったな。」

矢車「そのとおり。かつて俺や相棒のシャドウ隊、安西、大和、そして三島の率いる安西班、大和班、三島班の4部隊が隕石の調査に向かった。調査した結果隕石の中にはあの未確認生命体、通称ワームの存在が明らかとなった・・・」

影山「だけど・・・隕石が落ちたのはそれが最初じゃなかったんだ・・・」

大人「それが最初じゃなかった？」

つぼみ「どういう事ですか？私達が学校で習ったのも教養として知っているのも7年前の事だけです。それに隕石が落ちてきたなんて他に聞いた事も・・・」

矢車「世間体ではそうだ・・・だが7年前から更に時をさかのぼって43年前・・・つまりは50年前にも隕石は落ちていたんだ。」

ゆり「50年前って・・・たしか」

つぼみ「私のおばあちゃんがプリキュアして戦った時・・・砂漠の使徒の王のデューンと相打ちしたのと同時期に？」

矢車「その隕石の中にいたのがネイティブだった。奴らはワームとは違い争いを好まない。だが当時の調査団は奴らを敵視していた。未知の生命体となれば当然の判断だ。そこで奴らは人類に気に入られようとある”取引”をした。」

傑「取引？」

影山「ネイティブは予言したんだよワームが来る事を。ソレを予言した事で人類を混乱させてから自分達の”力”を人類が使えるようにすると取引をした。」

タ「力を使えるようにするって・・・もしかして」

須藤「マスクド・ライダーシステム!!」

矢車「正解だ。ネイティブはマスクド・ライダーシステムを造る事を、人類はワームからネイティブを守る事を取引したんだ。」

大人「じゃあ・・・ライダーもネイティブのモノだって言うのか？」

影山「そうだよ。だけどそれだけですんだらよかつただけだね。最近奴らは化けの皮を剥がしてきたんだよ」

矢車「やつらは・・・ワームが殲滅されたのちに自分達がこの星を支配しようと目論んでいたんだ。人類を自分達と”同じ”にする事だな」

いつき「自分達と”同じ”つてもしかして僕達を・・・」

影山「そう・・・全人類をネイティブにするという事さ」

大人「馬鹿な！！・・・そんな事どうやって？・・・！！・・・もしかしてそのためにあんな非道な人体実験を？」

矢車「感が鋭いな？そう・・・その計画を進めるためにZECTは身寄りのない子供から飢えに苦しむホームレスまでの”実験材料を”無作為に集めて人類をネイティブ化する研究を行ったいた。もちろんネイティブ化するだけではなくマスクライダーシステムの研究の材料としてもな・・・」

影山「その実験の為に・・・多くの命が使われたんだ！！・・・人手が足りないといつらは組織の一員すら材料として使う事を躊躇しなかった・・・そのせいで俺達の部隊の仲間も！！！」

影山は拳を握りしめて怒りを露わにしてそう言う。矢車のそんな影山の態度を見て瞳の中に燃えるものがあつたのを大人やつぼみ達は感じ取っていた・・・

矢車「俺達はこの事を世間に暴露するべく離反計画を進めていたがそれを察知した三島に止められ俺達はZECTを追放され奴らに追われることとなり・・・この様だ」

矢車達はそう言うて自分を自分で蔑むようにそう言う・・・事実俺達は何もできずにZECTに追われると言う地獄を見せられた・・・自分達で何もできないのならこのまま世界が地獄と化するのを見るしかないと思つたのだ・・・そんな二人につぼみ達が口を開く。つぼみ「なら今度は私達も手伝います。こんな間違つた事をさせない為に」

矢車「お前・・・」

ゆり「そう言う事なら私も戦い続けるわ。命を奪われた人のすべて心が満ちるまで・・・」

いつき「ぼくも協力する。・・・命を奪われた人の闇を照らすために・・・」

えりか「この世界を・・・アタシ達の大事な世界をネイティブの物になんかにさせない。絶対に!!」

影山「・・・ふっ」

つぼみ達の言葉に矢車と影山は思わず笑みをこぼす・・・あの時の自分達にもこんな仲間がいたらとさえ思った・・・それに続き大人達も口を開く。

大人「勿論・・・俺達も協力する。カブトの・・・いいや俺達の持っている力の為に犠牲になつた人の為に!!」

琢磨「こんな間違つた事を終わらせるために!!!!」

傑「人々の笑顔を・・・哀しい涙を流さない為に!!」

タ「アタシ達の未来を・・・大切な人を守る為に!!!!」

矢車「お前達・・・」

影山「・・・」

大人達の言葉も二人は感激のあまり言葉が出なかった・・・自分達はやさぐれてすべてを投げ出したのに・・・俺達は何処まで馬鹿だつたんだと思うほどだった。すべてを知つた織田と大和も決意を新たに口を開いていくと・・・

須藤「・・・俺も戦います。安西さんの為に・・・彼の意味を継ぐために!!!!」

織田「・・・俺達自身の罪を償う為に!!」

二人はかつての自分達の罪を償うという意識が強かつた・・・自分達は知らなかつたとはいえ下手すれば人類を滅ぼす事の片棒を担いでいたのかもしれない・・・そんな愚かな自分達の罪を償う為に戦うと。

大介「私も・・・そう言う事なら戦いましょう。風は気まぐれ・・・ですが女性がネイティブ化するのをほつてはおけません」

剣「俺も共に戦おう・・・姉さんを殺したワームがそこにいるかもしれないからな」

大介と剣もやる気が満ち溢れていた。大介は女性の為に。剣は自分の姉を殺した仇を取るためにと・・・

総司「決意は固まったな・・・そうと決まったら全員で必ずZECTを叩き潰すぞ。俺がいれば上手くいく。なぜならば俺は選ばれし者だからな」

新「俺達も協力する・・・ライダーとしてな」

総司と新もそれに賛同するという意思を見せる。かつて自分達の世界もネイティブのモノになりかけたのだがそれを潰したのも自分達だったからだ。自分達の頃は敵が少なかった今回はライダーや間宮も存在する。計画を確実に潰すためにも自分達の協力は必要だと思っただのだ。

矢車「ふん、どいつもこいつも・・・いいだろう。”俺達”で必ずZECTを潰す。世界を守るためにも・・・」

影山「兄貴・・・勿論俺も付いていよ。兄貴となら何処までも!!」  
矢車と影山はかつての”正義の味方”の炎を再び宿すようにそう言う。今度こそ必ずZECTの計画を止めるためにと・・・

今ここに全員の意思が固まった。ZECTの作戦を叩き潰し犠牲になつた人々の為に・・・今此処にネイティブとプリキユアそして仮面ライダーの最終決戦の幕が上がる!!!!!!

## 第29話「固まった決意」(後書き)

最終章プロローグ編でした。

原作の擬態天道が元は人間であったと言う事と人間を使った人体実験をした事を強調して書いてみました。

矢車と影山のポジションも原作とは違いますがもしも彼らが原作でこの事を知れば同じように戦ったと思います。

今回はネイティブとつばみ達プリキュア、大人達正義のライダーとの激戦が始まります。最終章本編突入です!!!!。  
次回もお楽しみに

第30話「ZECT&ワーム編最終章?」突入ZECT本部大決戦!!!」

前回までのあらすじ

矢車と影山から50年前にも隕石が落ちていた事、その中にネイティブと呼ばれるワームがいる事、マスキドライダーシステムはネイティブによって造られたもの、更にはネイティブが全世界の人間をネイティブ化すると言う計画を進めていた事を知った大人達。

彼らはZECTの野望を止めるべく一致団結し戦う事を決意する。

そんな中ZECTでは三島と根岸による全世界ネイティブ化計画が着々と進んでいた……

### 第30話「ZECT&ワーム編最終章?」突入ZECT本部大決戦!!!!」

戦士達が決意を固めた翌日の早朝いつもならこの時間は植物園は閉まっているのだが今日は違っていた。まだ太陽が出たばかりだといふのに施設には明かりがついていた。そこにはつぼみ達プリキュア、大人達ライダーが集まっていた。全員平日と言つのに私服であり顔を真剣そのものだった。

矢車「全員来たようだな・・・いよいよ今日最終決戦だ。全員覚悟は出来てるな?」

大人「勿論・・・俺達が勝つか」

琢磨「ネイティブが勝つかの最終決戦」

傑「俺達は負けるわけにはいかない・・・」

夕「絶対に!!!」

つぼみ「この世界を守るために」

えりか「アタシ達の未来の為に!!!」

いつき「犠牲になった人々の為に」

ゆり「これ以上犠牲を出さない為に」

矢車「お前達のその闘志が頼もしく見えるな。」

影山「兄貴・・・今度こそ」

矢車「ああ。必ず奴らを潰す」

総司「俺らの世界の矢車達も見習ってほしい・・・」

新「そうだな・・・」

大人達の闘志を聞いた矢車と影山も普段着ているボロボロの皮コートではなく整ったスーツを着用していた。と言うのも今回は絶対に負けられない最終決戦の願掛けでもあるのだ。二人は懐かしい着心地にため息をついていたがその二人に剣と大介が質問の声を上げる。

剣「矢車・・・どうやってZECT本部に行くつもりだ?」

大介「まさか歩きでとか?」

ZECTの本部の場所は分かっているのだがそこまでどうやっているのかと二人は当然の質問をするがその二人に須藤と織田が矢車達の代わりに応える。

須藤「そんなわけないだろう“足”はちゃんと用意した」

織田「外にある。来い」

須藤と織田に外に来るよう促されると全員外に出る。すると外にはカブト、ガタツク、ダークカブト、フェアリーのそれぞれの専用バイク、「カブトエクステンダー」「ガタツクエクステンダー」「ダークエクステンダー」「フェアリーエクステンダー」があった。更にサソード、ドレイク、ホッパー、ザビーヘラクス用の「マシンゼクトロン」があった。

大人「うおゝカッコイイ」

琢磨「こう言うのが有るなら初めからだしてくれよな」

須藤「本当は渡すつもりだったが・・・タイミングがなくてね」

大人と琢磨が感動に浸る中須藤はそう言う。本当ならばもっと早くにも渡せたのだが何せ最初は敵対した事もあるため今まで渡せなかったのだ。

影山「つぼみちゃん達は大人達の後ろに乗ってくれ。君達の力も必要だからな」

つぼみ&えりか&いつき&ゆり「……はい!!」「……」

総司「コレで準備は整った・・・全員ZECT本部に突っ込むぞ!!!!」

全員「おー!!!!」

全員はすべての準備が整ったと総司が号令をかけるとそれぞれの“脚”となるバイクにへと向かう。大人、つぼみがカブトエクステンダーに琢磨とえりかがガタツクエクステンダーに傑といつきがダークエクステンダーにそして夕とゆりがフェアリーエクステンダーに乗ることとなった。また総司と新は前日に買っておいたバイクでの出撃になった。矢車達もそれぞれのライダーのモーターフとなるエンブレムがついたマシンゼクトロンにへと乗る。



それぞれバイクのエンジンをかけるとヘルメットを被りつぼみ達4人は後ろに乗ることとなった。

大人「つぼみ振り落とされるなよ!!!」

つぼみ「了解です。」

琢磨「ちよつと飛ばすけどはしゃぐなよ!!!」

えりか「りょーかい!!!」

傑「いよいよ最終決戦・・・必ず俺達が勝つ!!!」

いつき「うん・・・僕達は負けれない絶対に!!!」

タ「まさかこんなところでバイクの免許が役に立つなんてね・・・ゆりしつかり捕まってるね」

ゆり「あまり飛ばさないでよ・・・いくら最終決戦だからってね」

8人はそんな会話をしながら矢車を先頭としてZECT本部へと向かう。これから始まる最大の激戦と哀戦を終わらせるために・・・

その頃ZECT本部の最上階の情報電波管理室では全世界ネイティブ化計画の下準備が最終段階まで進んでいた。情報管理室では50年前の隕石が何かの機会であつていて見ただけで怪しいと思える・・・

三島「ふっふふこの隕石の中に眠るネイティブのエネルギーを電波に変換して一般の回線に忍び込ませる・・・そうすることで電波は日本を中心に全世界に拡散する。そうなれば人間はあつという間にネイティブと化す!!!」

根岸「もうすぐだ・・・もうすぐこの世界は我々ネイティブのものとなるのだ。愚かなる人間の時代は終わり我々ネイティブの時代となるのだ!!!」

大和「そうなればこの世界は”浄化”される・・・」

三島と根岸、大和の3人は”その時”が来るのを待っていたあともう少して自分達の望む世界が手に入るとしかしそんな彼らの目論みを壊すように通信が入る・・・

ゼクトルーパー「大変です!!!矢車達が奇襲を・・・ぐあああああ

っ！！！！」

三島「アイツら・・・ついに来たか」

根岸「大和・・・そして我々の同志たちよ！！敵を迎え撃てえ！！」  
大和「はっ！！！！」

大和達は自分達の野望を打ち砕かんとする敵を迎え撃つべく自らが率いるネイティブ部隊、更に一時的に同盟を組んでいるワーム部隊が大人達の元に向かう！！この計画を必ず成功させて世界を“浄化”する為にとそれぞれの野望を胸に秘めながら・・・

大人「コレがZECTの本部か・・・」

つぼみ「大きいですね！！」

えりか「二人とも見入ってる場合じゃないよ」

ZECT本部のビルは軽く50階以上はあるかもしれないと思われるほどの大きさだった・・・大人達はその大きさに圧倒される・・・

琢磨「団体さんのお出ませ。」

えりかと琢磨の言葉に合わせたかのように本部からゼクトルーパー更にはワームのサナギまで混じって自分達の方に向かってくる・・・だが大人達は今更焦ることなくそれぞれの变身アイテムを取り出す。

大人「皆・・・最終決戦だ・・・行くぞお！！！！」

全員「おーーーー！！！！！！！！！！」

大人&琢磨&傑&タ「「「变身！！！！」」」

電子音：「「「HENSIN！！！！」」」

大人&琢磨&傑&タ「「「キャストオフ！！！！」」」

電子音「「「CAST OFF」」」

電子音「「「CHANGE BEETLE」」」

電子音「「「CHANGE STAG-BEETLE」」」

電子音「「「CHANGE BUTTERFLY」」」

大人達は先陣を切る様に変身しキャストオフする。それに続き今度はつぼみ達も变身するために潮売れたち妖精と变身アイテムである

ココロパヒューム、シャイニーパヒューム、ココロポットを取りだしていくと……

つぼみ「皆行きますよー!!!」

えりか&いつき&ゆり「うんー!!!」

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう!!!（ですつ&でしゅ）」

つぼみ&えりか&いつき&ゆり「プリキュア・オープンマイハート!!!!!!!」

それぞれ赤、青、黄色、藍色のプリキュアの種をココロパヒューム、シャイニーパヒューム、ココロポットにセットしていき赤、青、金銀の4色の光に包まれていくそして光がなくなる頃には4人の少女達は伝説の戦士にへと姿を変える。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!」

4人「ハートキャッチプリキュア!!!!!!!」

つぼみ達4人ががプリキュアの姿になると同時に総司、新、須藤、大介、剣、織田ライダーに変身する準備をする。

総司&新&須藤&大介&剣&織田「!!!!!!変身!!!!!!!」

電子音「「「「HENSIN」」」」  
「「「「CHANGE BEETLE!!!」」」」

総司&新&須藤&大介&剣「「「「キャストオフ!!!!!!!」」」」  
電子音「「「「CAST OFF」」」」

電子音「「「「CHANGE BEETLE」」」」

電子音「「「「CHANGE STAG-BEETLE」」」」

電子音「「「「CHANGE WASP」」」」

電子音「CHANGE DRAGON-FLY」  
電子音「CHANGE Scorpion」

総司達6人が変身し終わると最後は矢車達がホッパーゼクターを取りだしていきゼクトバツクルのふたを開いていく。

矢車「行くぜ・・・相棒」

影山「うん。・・・今度こそ終わらせるために」

二人は決意を秘めた強い目でホッパーゼクターをそれぞれ矢車は左側から影山は右側からベルトにセットする。

矢車&影山「変身!!!」

電子音「HENSIN」

電子音「CHANGE KICK-HOPPER」

電子音「CHANGE PUNCH-HOPPER」

二人が二種類のバツタのライダーに変身が終わり戦士達がプリキュアと仮面ライダーの戦士達がそろった。変身し終わると同時に大人達全員が走り出してzect本部に突入しワームとゼクトルーパーを蹴散らしていくが数が多く中々本部の中に進む事が出来なかった。・・・数では向こうが有利なためこのままでは消耗戦になってしまう。・・・見かねた総司と新はハイパーゼクターを召喚する。

カブト（総司）「此処は俺達に任せてお前達は上にあがれ。加賀美いくぞ!!!」

ガタツク（新）「おう!!!皆必ず奴らの野望を打ち砕いてくれ。」

カブト（大人）「分かった・・・二人とも死なないでくださいね!!!」

カブト（総司）「俺を誰だと思っている?この俺が雑魚に負けるなどあり得ん」

二人はそう言うのとハイパーゼクターをベルトにセットして起動させてハイパーフォームに進化している。大人達は二人の事が心配だったが二人を信じて先へと進む。本部の中はかなり複雑に入り組んで

いて上に進むのが骨の折れる・・・そして上に上るエレベーターのゲートを見つけたのだがその前に人影があった・・・なんとその正体は黒い服を着た剣の姿をした男だった。

擬態剣「ここから先には行かせんぞ・・・貴様らにはワームの頂点に立つこの俺に殺されてもらう」

サソード「貴様この俺に擬態するとは許し難い！！・・・」

擬態剣「貴様は俺か？ふふふふ・・・生きていたのか？貴様の姉を殺し貴様に擬態した時のあの快感・・・今でも忘れられんよ」

サソード「貴様が姉さんを殺した・・・サソリのワームか！！？」

擬態剣「その通りだあ！！・・・貴様も貴様の姉と同じようにあの世に行くがいい！！！」

擬態剣はサソードを嘲笑う顔に様にそう言うとサソリ型ワームのスコルピオワームに変化する・・・全員はスコピオワームに向かおうとするのだがサソードが前に出て全員静止する。

サソード「お前達は先に行け・・・姉さんの仇はこの俺が取る！！！」

サソードはそう言うと全員を先に行くように促す。長年探し続けた仇をこの手で仕留める事をどれだけ待ち望んだ事か・・・サソードは武者震いをしながらサソードヤイバーを構えている。大人は彼の気持ち伝わったのか顔を縦に振ると・・・

カブト（大人）「分かった・・・必ず勝てよ」

サソード「当然だ・・・お前達も目的を果たして来い！！」

大人達はサソード一人を残してゲートを入ろうとするのだがそれをスコルピオワームが大人達の前に立ちふさがり触手を伸ばして攻撃しようとしたのだが・・・

スコルピオワーム「誰が先に言っただけいいと言った？」

ガタツク（琢磨）「くっ！！」

サソード「はああっ！！・・・貴様の相手はこの俺だあ！！！」

スコルピオワームが大人達を攻撃しようとする前にそれをサソードがサソードヤイバーで触手を切りつける。

スコルピオワーム「……いいだろ……なら貴様から片付けてくれるう！！！！」

スコルピオワームもサソードを標的にする事に決めたらしく大人達を無視してサソードの方に向かっていく。

大人達はエレベーターのゲートを開けて上にかかる。だがこのエレベーターでは本部のビルの間までしか行けないらしく15階ほど上がってエレベーターから降りる。また上にかかるエレベーターを探すべくあたりを走る大人一行だったが今度はその前に間宮麗奈が変化するウカワームが現れる。

カブト（大人）「今度はアンタか？」

ウカワーム「人間とは……愚かなモノだな。何も知らなければ命を落とす事はなかっただろうに……」

マリリン「アタシ達の世界を自分達のモノにしようとしてる癖に何言ってるのよ！！……この世界はアンタ達のモノじゃない！！」  
ウカワーム「ふん……下らんな……まあいい。私のレクイエムを聞きながら息絶えるがいい！！」

ウカワームがそう言ってゆっくりと近づいて来る……大人達も応戦しようと身構えるがそんな彼らを差し置いてドレイクが前に出る。

カブト（大人）「ドレイク？」

ドレイク「此処は私に任せなさい……今は時間がありません……全世界の女性の為にも貴方達は先に行きこのふざけた計画を止めてください。」

ダークカブト「了解した……此処はアンタに任せる。大人先に進むぞ！！」

カブト（大人）「ああ……頼んだぞ！！」

大人達はドレイクに此処は任せて先に進む。ウカワームは大人達を止めずにドレイクの方を見て行きながらゆっくりと近づいていく……

ウカワーム「ふん．．．先ずは貴様から私の歌を聞くがいい」  
ドレイク「ご自由に．．．しかし私は気まぐれな風．．．貴方に捕まえられますか？」

ドレイクはドレイクゼクターを構えながらウカワームに向っていく。必ず生き残ると誓いながら．．．

この階のエレベーターを見つけて10階ほど上がるとやっと半分の25階までついたと言う所だ．．．ワームをゼクトルーパーを蹴散らしながらもひたすら上へと目指す大人達はようやく最後のエレベーターを見つけるのだがその前にはZECT戦闘部隊長大和が立ちはだかつていた。

大和「とうとうここまで来たか？．．．」

ヘラクス「大和お！！．．．お前はこの組織がどんなのか分かってるか？．．．今からでも遅くない俺達の仲間に」

大和「下らんなあ！！．．．俺は最初から知っていたさ．．．この組織がネイティブの者であるという事も．．．だがそれがどうした？」

ザビー「貴方は．．．最初からすべて知っていたのか？．．．分かってて今まで従っていたのか？」

大和「ふふふふっ．．．ははははははははははははっ！！！！！！！！その通りだ．．．そして俺も“進化”したんだ詰まらな  
い人間というものからネイティブと言うモノになあ！！！！！！」

カプト（大人）「どうしてそこまでして？」

大和「．．．それを知ってどうする？貴様らは此処で死ぬ。この俺の手でな．．．変身！！」

電子音「HENSIN CHANGE BEETLE！！！」

大和はケタロスに変身すると大人達の前に立ちふさがるのだがそれと同時にヘラクスとザビーは前が出る．．．。

ヘラクス「お前達は先に行け。」

ザビー「大和の相手は俺達が引き受ける！！！！．．．君達は計画を

ぶっ潰して来てくれ!!!」

フェアリー「須藤さん・・・皆急ごう!!!」

カブト（大人）「・・・ああ。」

ケタロス「ほう？織田と須藤が俺と闘う気か？・・・いいだろう貴様らはこの俺の手で葬ってくれる!!!」

ゼクトクナイガンを構えながら自分達を殺そうと立ちふさがるケタロスをザビー、ヘラクスは迎え撃つべく立ち向かう

ヘラクスとザビーの二人相手にケタロスは上等だとゼクトクナイガンを構えながら二人の相手をするとう。大人達は最後のエレベータに乗り上を目指す・・・そしてとうとう根岸、三島、そしてコーカサスがいる最紹介の情報管理室へ辿り着く・・・カブト（大人）「そこまでだあ!!!」

キックホッパー「三島、根岸!!!覚悟しろ・・・貴様らの狂った計画俺達が止める!!!」

三島「ほう？ここまでたどりついたか？だが我々の計画の邪魔はさせん!!!安西!!!」

安西「・・・へん・・・しん・・・」

電子音「HENNSIN CHANGE BEETLE」

三島の命を受けると感情を失った安西が前に出る・・・今回は機械にはつながってはいないのだが今度は全身が強化スーツの様な物を装備して完全顔以外は人ではなくなっていた・・・安西の腕にコーカサスのカブティクセクターが腕のライダーブレスに収まるとコーカサスの姿に変わる・・・

パンチホッパー「安西さん!!!・・・三島・・・貴様まともじゃない!!!」

三島「何を言う？私も人間ではない・・・既にネイティブだあ!!!  
! 貴様ら全員血祭りにしてくれるわあ!!!」

三島は激昂したかのように顔を震わせながらメガネを外すと足で踏み潰す。そして彼のカラダが光出したかと思うとそのままコウロギ



型のワームグリラスワームにへと姿を変化させる……

根岸「愚かなる人間の時代は今日終わるのだ……誰にも邪魔はさせん!!!!」

根岸もドスの効いた声を上げるとカブトムシ型のワームギガンテスワームへと変化する……コーカサス、グリリスワーム。ギガンテスワームという最凶の3幹部が大人達の前に立ちふさがるが……カブト(大人)「上等だ!!!抵抗するなら必ず叩き潰してやる!!!皆行くぞ!!!!」

ガタツク(琢磨)&ダークカブト「おう!!!!」  
フェアリー「いつでもいいよ!!!」

ブロッサム「絶対に私達の世界を守って見せます!!!」  
マリン「アンタ達の好きにはさせない!!!!」

サンシャイン「私達の大事な人を奪わせたりしない!!!」  
ムーンライト「貴方達の野望で犠牲になった人の無念を晴らしてみせる!!!!」

キックホッパー「俺達が味わった地獄を身を持って味合わせてやる!!!!」

パンチホッパー「覚悟しろ?……最悪は最高を教えてやる!!!」

グリラスワーム「来るがいい!!!貴様らの思いも踏みつぶしてくれ  
るわあ!!!!」

大人達はそれぞれが戦いの前に誓った思いを述べると3人に向かっ  
ていく。今も戦っている仲間の為に必ず勝つという思いを秘めなが  
ら……対するグリラスワーム、ギガンテスワーム、コーカサス  
も迎え撃つべく向ってくる。お互いの思念と野望がぶつかり合う最  
終決戦の火ぶたが切って落とされた……果たして勝つのは大人達  
正義の戦士か?それとも三島達の邪悪な野望なのか?

大人達仮面ライダーはつばみ達プリキュアは世界をネイティブか  
ら守る事が出来るのか?果たして世界の運命は!!!? 次回最終決  
戦突入!!!!

第30話「ZECT&ワーム編最終章?」突入ZECT本部大決戦!!!」

久々に長くなつたなあ(汗)

さて次回は最終章?に突入します・・・そして安西に異変が・・・

次回もお楽しみに

第31話「ZECT&ワーム編最終章?」(コーカサス散る) (前書き)

前回までのあらすじ)

ZECT本部に突入した大人、琢磨。傑、夕、つぼみ、えりか、いつき。ゆり、矢車、影山達は最上階の情報管理室へとたどり着く。そこには完全に機械化された安西とネイティブと化した三島、そして全ての計画の首謀者である根岸との最後の戦いが始まった。そして同じころ大人達に思いを託した剣、大介、須藤、織田達もそれぞれの因縁の相手と決着をつけるべく戦っていた。

### 第31話「ZECT&ワーム編最終章?」 「コーカサス散る」

大人達を先に行かせたサソードは自分の姉を殺した因縁の相手であるスコルピオワームと激戦を繰り広げていた。流石に自ら最凶を自称する事だけはあり剣技を得意とする剣が変身するサソードと実力は互角・・・いやそれ以上だ。

サソード「貴様を今までどんな思いで探していた事か!!!・・・今日こそ必ず貴様を倒し姉さんの仇を討つ!!!」

スコルピオワーム「暑苦しいな!!!」

サソード「ぐあああっ!!!」

サソードはサソードヤイバーの刃ををスコルピオワームの身体に押しつけて斬りつけようとするのだがサソリの特性を持つその装甲は凄まじい硬さであり刃で斬りつけても傷の一つすらつかない・・・そして今度は此方の反撃だと頭のサソリの触手を伸ばしてサソードの身体に絡めつけるとそのまま投げ飛ばす

サソード「やるな?流石ワームの頂点を名乗るの事はある・・・だが俺は全てにおいて頂点に立つ男・・・貴様のようなコピーに負ける俺ではない!!!」

スコルピオワーム「出来るかな?ワームの頂点に立つこの俺を倒すなど!!!」

サソードは諦めずに何度も何度もサソードヤイバーでスコルピオワームを斬りつける・・・だが奴の硬い装甲は何ともないかのように攻撃を受けとめる・・・スコルピオワームはそろそろ飽きたとも言つかのようにサソードの腹部に自身のサソリの毒針を刺す・・・サソード「ぐおおおおお!!!」

サソードはそのダメージが相当響いたらしくその場に膝をつく・・・だがスコルピオワームは更に追撃をと彼のボディに思いつきりケリを入れて吹き飛ばす・・・

スコルピオワーム「どうしたあくもう終わりか?」

サソード「はあ、はあ、はあ、．．．うおおおつ!!!!!!!」  
スコルピオワーム「まだ来るのか?無駄な事を．．．」  
スコルピオワームはサソードが自棄やけになって自滅に來たかと蔑むの  
だが．．．

サソード「はあああつ!!!!!!!」

サソードはサソードヤイバーをスコルピオワームの腹部のど真ん中  
に突き刺す。そう昆虫や甲殻類は外骨格はかなり頑丈だがそれは拡  
散する衝撃を抑えるのに適しているに過ぎない．．．どんなに硬い装  
甲でも何度の何度も斬られれば必ずダメージは蓄積する。そこに力  
を一点集中させる事で奴の身体を貫き通す言う事が劍の狙いだつた  
のだ。

スコルピオワーム「があああああ．．．き、責様あ!!!!．．．は、  
初めからコレが狙いだったと言うのか?．．．」

サソード「その通り．．．コレで終わりだあああつ!!!!!!!  
ライダースラッシュ!!!!」

劍はサソードヤイバーを引き抜き素早くサソードゼクター本体を操  
作してライダースラッシュの発動体勢に入る。スコルピオワームは  
最後にサソードを道連れにしてやろうと触手を伸ばすのだがサソー  
ドは触手を切り裂きスコルピオワームにトドメの一閃を炸裂させる  
!!!!!!!!

スコルピオワーム「がああああああああああああああつ!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

サソードのライダースラッシュを受けるとスコルピオワームは最後  
の断末魔を上げながら大爆発を起こして消滅する。

サソード「やったよ．．．姉さん。」

サソードはサソードヤイバーを振りながら仇を取ったと歓喜に身体  
を震わせながら大人達に合流するべく自身も最上階にを目指す。

その頃ドレイクとウカワームも激闘を繰り広げていた。

ドレイク「ふん!!!!!!たああつ!!!!!!」

ウカワーム「くうつ!!?・・・風間大介・・・中々やるな?」

ドレイク「それはどうも・・・ですがワームに褒められても嬉しくはありませんね」

ドレイクは得意のドレイクゼクターの遠距離戦法でウカワームに責め込んでいくがウカワームもやられっ放しではなく接近戦に持ち込んでドレイクにダメージを与えていき監視は五分五分であり両者譲らない。

ドレイク「貴方はどうしてこんなふざけた計画に賛同してるんですか?・・・ワームである事を隠して生きていけば人間としても生きていけるはずでしょう?」

ウカワーム「愚問だな・・・私は人間の様な下らないモノと共同するつもりはない・・・人間は地球を汚し自然を破壊する・・・自分の住む場所すら守れない下等生物など存在価値がない」

ドレイク「・・・それは違う!!。確かに人間は愚かにも自分の住む場所を自分で汚し自分で自分の首を絞める真似をします・・・しかし人はそれを悔い必死に償おうと努力もできるんです!!・・・貴方達の考える下らないエゴの為に世界をネイティブのモノになどさせません!!!!」

ウカワーム「下らんな・・・なら貴様の言う決意を見せて見せてみるがいい!!」

ドレイク「必ずやって見せます。ライダーシューティング!!!!」

電子音「RIDER - SHOOTING」

ドレイクはライダーシューティングをウカワームに打つのだがウカワームはクロックアップでライダーシューティングのエネルギー団を避けていく。

ドレイク「クロックアップ!!!!」

電子音「CLOCK UP!!!!」

ドレイクも応戦するかのようクロックアップを発動させる。クロックアップが発動したことでライダーシューティングのエネルギー弾もスローの動きになる・・・ドレイクとウカワームは銃撃戦と接

近戦を交えた戦いを繰り返すのだが動き回る事で気がつけばウカワームの後ろに先度ほど発射したライダーシューティングのエネルギー弾が・・・ドレイクはこの時を待っていたと再びライダーシューティングを発動させる

ドレイク「・・・ライダーシューティング!!!」

電子音「RIDER-SHOOTING」

ウカワーム「バカめ!!そんなもの私には効かんわ!!!」

ウカワームはライダーシューティングなど防いでくれるとばかりに左腕に盾を発動させてガードするのだが・・・その衝撃に後ろに身体が下がる・・・そして後ろにあるライダーシューティングのエネルギー弾がウカワームに近付いて来る・・・しまったと思った時には既に手遅れでありライダーシューティングをまともに受けることとなる

ウカワーム「ぐううううっ!!???.あああああああ  
っ!!!!!!!!!」

そしてウカワームは力尽きて間宮の姿に戻る。ドレイクもそれに合わせるように変身を解除する・・・。

大介「・・・ワームとは思えない美しい姿ですね・・・貴女のメイクを試してみたかった」

間宮「・・・ふん・・・人間とは面白いものだな・・・私も人間の心を持っていれば・・・よか・・・った・・・の・・・かもしれない・・・」

間宮は最後に純粋な人としての笑顔を見せるとそのまま眠る様に息を引き取る・・・大介は彼女の亡骸を見ながら戦いの虚しさを感じる・・・なぜこのような争いをする必要があるのかと・・・そして彼女の亡骸を優しくその場に置き大人達が向った情報管理室へと向かう。

時を同じくして情報管理室へと繋がる唯一のエレベーターの通路ではザビーとヘラクスは人の魂を売った大和との因縁の対決の真最中





ケタロスはダメージのあまり変身が解除されて大和の姿に戻る。大和は屈辱に顔をゆがませていくと・・・

大和「貴様らぁ・・・タダでは済まさんぞ・・・貴様らも安西と同じ実験材料にしてくれる!!！」

大和は身体を光らせるとケンタウルスオオカブトムシ型のワームケンタウルスワームへと変化していくと邪悪さを露わにしたかのようにザビーとヘラクスに向って来る。

ザビー「彼の末路を知りながら止めようとしなかったアンタだけは許さない!!！」

ヘラクス「矢車達の受けた苦しみ・・・その身に刻めえ!!！」

ケンタウルスワーム「くおおおおお!!!！！・・・な、なぜだぁぁあつ!!!????」

ケンタウルスワームは形振り構わずザビーとヘラクスに攻撃を仕掛けるのだが冷静さを失った攻撃には二人には通用せず逆に追いつめられる形になる・・・

ヘラクス「終わりだ大和お!!!ライダービート」

ザビー「安西さん達の受けた苦しみをその身に受ける!!!ライダービースティング!!!」

電子音「RIDER・BEAT&RIDER・STING!!!」

ヘラクス&ザビー「うおおおおおおお!!!!!!  
!!!!!!!」

ケンタウルスワーム「ぎいやああああああああああつ!!!  
!!!!!!!.....己えくだが我が魂はZECTと共にある・・・我が魂はZECTと共にある」

ケンタウルスワームはライダービートとライダーズティングを受けると最後の断末魔を上げながらワームの爆炎を上げて消滅する。

ザビー「安西さん・・・仇を取りましたよ」

ヘラクス「大和・・・安らかに眠れ」

ザビーとヘラクスはそれだけ言うと大人達に合流するべく情報管理

室の入口であるエレベーターに入る。

その頃の大人達はグリラスワームギガンテスワーム、コーカサスとの最終決戦の真つ最中だった・・・カブト、ガタツクはグラリスワームをフェアリー、ダークカブト、キックホッパー、パンチホッパーはギガンテスワームをそしてプロツサム達プリキュアはコーカサスと激戦を繰り広げていた・・・

グラリスワームはパワー、スピード、防御と全てにおいて完璧なステータスを持っておりカブトとガタツクの二人を相手にしても全く歯が立たない・・・

カブト「はああああっ！！！！！」

ガタツク「うおおおおああああっ！！！！！」

カブトクナイガンとガタツクダブルカリバーを振りながらも凄まじい防御力には刃が立たず傷の一つすらつかない・・・

カブト「負けるかああああっ！！！！！」

ガタツク「絶対に・・・負けるわけにはいかないんだあああ！！！！！」

二人は諦めるものかとクナイガンとカリバーを構えながらグラリスワームに向かう。自分達の居場所を・・・世界を守るために！！！！

キックホッパー「はああああっ！！！！うらあああああっ！！！！！」

パンチホッパー「ふんっ！！！！おおおっ！！！！！」

ダークカブト「はああああっ！！！！！」

フェアリー「フェアリーレイピアガンモード！！！！いつけえ！！！！！」

カブトムシ型ワームのギガンテスワームに向かっていく4人のライダー。キックホッパーとパンチホッパーのダブルコンビネーションの接近戦とフェアリーとダークカブトの遠距離戦による攻撃によりギガンテスワームを着実に攻撃していくのだがカブトムシの防御力は凄まじく簡単には追いつめられない。

ギガンテスワーム「この程度か？貴様らの攻撃とやらわあ！！！！！！！！」

キックホッパー達4人「うわあああああつ！！！！！！！！！！」

ギガンテスワームは巨大なカブトムシのツノからエネルギー弾を発生させるとキックホッパー達に直撃する。4人は凄まじいダメージを受けるのだが立ち上がり……

キックホッパー「はあ、はあ、はあ……俺の見た地獄はこんもんじゃない……この程度で俺達は屈しんぞお！！！！」

パンチホッパー「はあ、はあ、はあ……この程度の攻撃……何ともない！！！！」

ダークカブト「はあ、はあ。はあ……絶対に俺達は負けるわけにはいかない……」

フェアリー「アタシ達の……大切な世界を……守るために！！！！！！！！」

4人は立ち上がるなりギガンテスワームに向かう。自分達の世界を守るために！！！！

ブロッサム「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！！」

マリリン「プリキュア・ブルーフォルテウェイブ！！！！」

ムーンライト「プリキュア・シルバーフォルテウェイブ！！！！」

サンシャイン「プリキュア・ゴールドフォルテバースト！！！！」

ブロッサム達プリキュア達はコーカサスに自身の必殺技をぶつけていくのだがコーカサスはそれを片手で受け止めると握り潰すように消滅させる。

ブロッサム「そんなあ！！！！」

マリリン「アタシ達の4人分の必殺技が効かないなんて……」

ムーンライト「くっ！！！！なんて力なの！！！！」

サンシャイン「どうすれば……」

コーカサスの圧倒的な力を見せつけられてしまう4人……だが勢いでは負けないとそれぞれ身構えながらコーカサスに突撃してい



コーカサス「!!!!?」

絶体絶命のその時突如桜色の花卉が舞う・・・そしてコーカサスは飛ばされてムーンライトとサンシャインは気がつけばブロッサムとマリンの隣に・・・ブロッサム達はもしやと思い自分達の前を見るとそこには白いコートを羽織りマフラーをしてメガネをかけた青年が立っていた。

ブロッサム&マリン「コツペ様!!!!」

ムーンライト「はあ、はあ・・・!!!!?・・・来てくれたんですね」

サンシャイン「はあ、はあ・・・ありがとうコツペ様」

そう4人に万が一の事があった時の為に薫子がコツペに監視をさせていたのだ。そしてみごと4人の窮地を救ったのだ。コツペは4人に”しばらく休んでいろ”とでも言う様に目で合図を送るとコーカサスに向かう。コーカサスはハイパーゼクターの力で一気に叩き潰そうとするもその前にコツペがコーカサスの懐に入りコーカサスにパンチとキックのラッシュでハイパーゼクターを発動させる隙を与えない。だがコーカサスはすぐにコツペの動きを分析すると・・・コツペのボディに強烈なパンチを放ち怯ませるとハイパーゼクターの角を倒していきライダーキックを発動させてコツペにマキシマムライダーパワーで強化されたミドルキックを見舞わせる。

コツペ「ぐうっ!!!?」

ブロッサム「コツペ様あ!!!!」

だがコツペはミドルキックを両腕で受け止めるとベルトの左腰にあるハイパーゼクターを奪う。コーカサスは”それを返せ!!!”とでも言うかのようにコツペに更にキックで吹き飛ばすだがコツペはハイパーゼクターを持ったままブロッサムの所に飛ばされる。

4人「コツペ様!!!!!!」

飛ばされて床に叩きつけられると同時にコツペは青年の姿から元の妖精の姿に戻る・・・そして奪ったハイパーゼクターを最後の力を

振り絞りハイパーゼクターを破壊すると力尽きて気絶してしまう・

・  
コーカサス「……………うううううううううあああああああ！！！！  
あああああああ~~~~~うううううう~~~~…  
・ががあがああああああがああああああ~~~~~うう  
うううううううう！！！！！！！！！！」

ハイパーゼクターが破壊されるとコーカサスは悶え苦しみながら無差別に暴れ回る・…まるで何かにリミッターが外れたかのように・

・  
ブロッサム「急にどうしたんでしょう？」

サンシャイン「きつとハイパーゼクターが彼のコントロール装置の様な物だったんだ。それが破壊されてリミッターの様な物が外れて暴走を始めたんだよ！！！！」

マリン「そうか・…だからあんなに苦しみながら暴れるんだ。早く止めないと！！！！」

ムーンライト「ハートキャッチミラージュで彼の苦しみを終わらせるわよ・…もうこれ以上彼に辛い思いをさせない為に」

ブロッサム「はい！！！！コツペ様ありがとうございます！！！！。今度私達が頑張る番です！！！！」

4人は苦しむコーカサスを解放しようとハートキャッチミラージュを取り出しスーパーシルエットになる準備を始める。

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「鏡よ鏡プリキユアに力を！！！！世界に輝く一面の花！！！！ハートキャッチプリキユア・スーパーシルエット！！！！！！」

4人はハートキャッチミラージュの力を受けてスーパーシルエットにへと変わる。コーカサスは無差別に暴れていきながら悶え苦しんでいる・…4人はその姿を見ながらも自分達の合体究極技をコーカサスに放つ。

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「花よ咲き誇れ！！！！プリキユア・ハートキャッチ・オーケストラ！！！！！！！！」



れた揚句こないたいけな少女を傷つけたと言う事も・・・彼は呪ったのだ己の無力さを・・・だがブロッサムは彼の心中を察して安西を励ます言葉をかける。

ブロッサム「そんな事はありません!!。貴方がライダーベルトを川に流してくれたから私達はZECTの計画を阻止する為に戦う事ができたんです・・・」

安西「ははは・・・そう言ってくれと・・・嬉しいよ・・・」

安西は力なくそう言う・・・だがそれを見ていたグリラスワームは面白くないとばかりに憤怒の声を上げる。

グリラスワーム「プリキュアあゝ我々の”道具”をよくも壊してくれたなあ?・・・先ずは貴様たちから死ねえええ!!!!!!」

カブト「ブロッサム!!!!」

ガタツク「マリソッ!!!!」

ダークカブト「サンシャイン!!!!」

フェアリー「ムーンライト!!!!」

キックホッパー「4人も避けるおっ!!!!」

パンチホッパー「くっ!!!!間に合わない!!!!!!」

グリラスワームはカブト達を押さえつけ動きを封じると先ずは消耗したブロッサム達プリキュアから片付けようと猛毒が染みついた触手を伸ばす。ブロッサム達は避けようと身体を動かそうとするが先程のダメージの激痛で身体が動かない・・・誰もが”マズイ”と思ったその時誰かがとつさに4人を突き飛ばしてグリラスワームの触手から4人の守る。そう盾になったのは安西だ・・・彼の機械のカラダはグリラスワームの2本を退けたのだが残りの2本は装甲が薄い腹部を直撃していた・・・

カブト達全員の視線が安西に向けられる・・・安西は何も言うことなくその場に倒れこんでしまうのだった・・・身体から赤い血液を流していきながら・・・それと同時にグリラスワームである三島の高笑いが部屋中に響き渡るのだった・・・



第31話「ZECT&ワーム編最終章?」(コーカサス散る?) (後書き)

それぞれのライダー達の因縁の対決が残り残るはラスボスのみとなりました・・・果たして安西の運命は!?

次回大人達の怒りが爆発!!!

次回もお楽しみに

第32話「ZECT & ワーム編最終章?」心が持つ希望と未来」(前書き)

前回までのあらすじ

ライダーたちのそれぞれの因縁対決にも決着が付き残ったのは三島、根岸、安西の3人だけとなった。プロツサムたちはハートキャッチオーケストラで安西の心を取り戻させるのだがそこに三島の魔の手が迫る。

だが4人は安西が身代わりになることで間一髪助かった・・・だが安西は・・・

第32話「ZECT & ワーム編最終章?」心が持つ希望と未来」

ブロッサム「安西さん!!安西さん!!目を開けて下さい・・・  
安西さん!!!」

自分たちの身代りになり致命傷を受け倒れた安西のもとにブロッサムたちプリキュアが近づく。安西は貫かれたカラダから赤い血を大量に流している・・・ブロッサムは彼の身体を抱えて必死に彼の名を叫ぶ・・・すると安西は残った力を振り絞るようにブロッサムの方を見る・・・

安西「ぶ、無事か?プリキュア」

ブロッサム「安西さん!!!」

マリリン「どうしてアタシ達を?・・・貴方もボロボロなのに」

何とか目を開けた安西にブロッサムはほつと腕をなでおろすがすでに安西の体力は今までの無理な改造と闘いで限界を迎えてた・・・そんな彼は4人のプリキュアという女神達の顔を見ながら自分の想いを伝えるべく口を開く

安西「命の恩人だから・・・」

サンシャイン「!!!私達が貴方の?」

安西「そうだ・・・私を奴らの兵器という地獄から救ってくれた恩人だ。それに私は今までマスクド・ライダーシステムの実験の為に多くの命を奪ってきたんだ・・・私がこうなるのも当然の報いだ。」  
ムーンライト「そんな・・・だからって貴方自身がこんな事をする必要は・・・」

安西「いいんだ・・・奴らの道具となった私が唯一出来る償いなんだ・・・最後に君たちに出会えてよかった・・・それに私がした行動も無・・・駄では・・・なか・・・った・・・」

安西の言葉に4人は彼の誠実で優しさに溢れる思いが伝わってきた・・・彼は心の底から実験を行った事を後悔していたんだ・・・だからこそ身の危険を知らながらもライダーベルトを強奪して罪を償お

うとしたのだと・・・自分の思いを必死に伝える安西も徐々に意識が遠のくように言葉が途切れ途切れになっていく・・・  
ブロッサム「！！それ以上は喋らないで下さい！！このままじゃ貴方の命が！！」

安西「こ、これが私の最後の償い・・・約束して・・・くれ・・・この世界を奴らの・・・魔の手から・・・守ると・・・」

ブロッサム「はい！！だからもうこれ以上は喋らないで下さい・・・このままじゃホントに貴方が！！！！」

安西「・・・あ・・・りが・・・とう」

安西は最後に笑顔を見せて自分の言いたかった事を全て言い終わるとカラダの力がゆっくりと抜けていく・・・まるで眠るように・・・最期の最期で彼は人間に戻ることが出来たのだ・・・三島や根岸の道具ではなく一人の人間として・・・

ブロッサム「！！・・・安西さん！！！！安西さん！！！！・・・そんな・・・やつと人の心を取り戻したのに・・・こんな酷すぎます・・・」

マリン「ううう・・・えぐっ・・・あんまりだよ・・・目を開けてよおっ！！！！！！」

サンシャイン「私は何もできなかった・・・彼の闇を照らす事すら・・・」

ムーンライト「・・・私も・・・彼の心を癒す事すら出来なかった・・・貴女だけのせいじゃない・・・」

ブロッサムとマリンは悲しみのあまりその瞳から涙を零す・・・サンシャインとムーンライトは己の無力さに憤怒しながらももう二度と動かない彼を見つめる・・・グリラスワームの足に踏み潰されている大人と琢磨もギガンテスワームに苦戦している夕、傑、矢車、影山も同じ思いだった・・・だがそんな彼らの思いを踏みつぶつかのように三島と根岸が嘲笑う高笑いが響く。それと同時に全員視線が二人に向けられる。

グリラスワーム「ふふふふっ・・・あははははははははははっ！！

「！！！！バアかな奴だ〜大人しく我々の操り人形となっていればよかつたものを」

ギガンテスワーム「全くだ！！！！何も知らなければ無駄に命を落とす事もなかつただろうに・・・そして彼自身も人間と言う”下等生物”からネイティブという”最高の地位”を与えられただろうに・・・それを自分から投げ出し拳句命を落とすとは愚かにも程があるというものだ・・・」

根岸と三島はそう言って安西の事を見下し彼の行動を無駄なものだと蔑むのだが・・・

カブト「黙れ・・・」

ガタツク「その汚い口・・・閉じてろ」

グラリスワーム「！！！？・・・何い！？」

突如グラリスワームの足の下から強烈な力が入るとグラリスワームをカブトとガタツクが払いのける。そしてカブトとガタツクは立ち上がる。カブトは安西のもとに近づき・・・彼を闘いの影響がない場所に移す。そして二人はハイパーゼクターを召還させると振り返る。

カブト「何が人間だ・・・何がネイティブだ・・・そんなもの関係ない。この世界に存在する全ての生き物はみな等しい・・・だが人間は自分を変えることが出来る。他者（ひと）を思いやり自分を変えると言う素晴らしいことが出来るんだ！！！！」

ガタツク「人間は過ちも犯す・・・だけどそれを悔いて償おうとすることもできる・・・安西さんのように自身の罪を悔いて自分で償おうとする・・・自分のためじゃなくお前たちの下らない実験で命を奪われた他者（ひと）のために！！！！」

カブトとガタツクの言葉にブロッサムたちも立ち上がり涙を拭くとグラリスワームとギガンテスワームをギロリと睨む。4人とも怒りの臨界点を超え拳は震えていた。自分たちが彼を救えなかったのは

紛れもない事実。だが彼の最期の勇気を嘲笑った事に心の底から怒りが込み上がったのだ。

ブロッサム「カブトの言うとおりです。確かに人間は自然を破壊し無益な戦争を行います。でも人はその過ちに気づき悔いて償おうと努力できるんです!!!」

マリ「アタシ達自身が時間がどれだけかかっても一歩ずつ良い方向に進めるだよ・・・アタシ達の未来のために!!!」

サンシャイン「未来を希望あふれるものにするのも私達の努力次第・・・人類すべてが愚かなんて事は絶対はない!!! 私達の明るい未来は私達の手で切り開く!!!」

ムーンライト「貴方達のように人間の事を知ろうともせずただ見下して邪魔なものと判断するような者に私達の未来を奪わせはしない!!!」

カブト、ガタツク、ブロッサム、マリ、サンシャイン、ムーンライトの言葉を聞くとギガンスワームはカラダを震わせて怒りのこもった唸り声を上げる・・・そして反論するべく口を開く

ギガンスワーム「ならあえて言おう!!! そんな世界は必要ない・・・ましてや人間なんて必要ない!!!」

カブト「所詮・・・お前たち”心”はその程度か・・・”心”がある限り人は変わることが出来る。自分の為に世界を変えるんじゃない・・・自分を換えようとする”心”があれば世界も変わるんだ!!!」

グリラスワーム「そんなもの私が叩き潰してくれろ!!!」

グリラスワームは触手を無数に伸ばしていき先手必勝のごとく攻撃していくのだがその前にサンシャインがサンフラワージェスを発動させて攻撃を防御する。その隙にカブトとガタツクがハイパーゼクターを起動させてハイパーフォームに進化する。

電子音「HYPER-CAST-OFF!!!」

電子音「CHANGE!!! HYPER-BEETLE!!!」



グリラスワームは”バカめ”と触手を伸ばして攻撃しようとするのだがそこにハイパーカブトのハイパーキャノンが触手を全て破壊する。

グリラスワーム「何っ!？」

ムーンライト「ムーンライト・シルバー・インパクト!!!!!!!」

グリラスワーム「がああああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

渾身のシルバーインパクトがグリラスワームの堅い装甲の胸に叩きこまれるとグリラスワームは思いっきり飛ばされてそのまま情報管理室の鋼鉄と同じぐらいの強度の壁に叩きつけられる。それを見ていたギガンテスワームはこのままではまずいと援護しようとして角でのエネルギー弾を放とうとするが……

キックホッパー「野暮なことはするな……貴様が出る幕はない!!!!!!」

パンチホッパー「安西さんの犠牲……無駄にはしない!!!!!!」

キックホッパーはエネルギーをためる隙について得意のキックでの喧嘩戦法での攻撃を見まわせる。ギガンテスワームは遠距離戦に燃し込もうと離れるのだがそこにダークカブトとフェアリーがクナイガンとレイピアの斬撃と射撃で角を集中的にギガンテスワームの角を押し折る事に成功する。

ギガンテスワーム「ぎいやああああああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!」

キックホッパー「全員必殺技の準備をしろ!!相棒行くぜえ!!!!!!」  
パンチホッパー「うん。覚悟しろ!!!!!!」

キックホッパーの合図にパンチホッパーは合わせるように二人でギガンテスワームに向かっていく。ギガンテスワームはそんな二人を力で捻じ伏せてやると押し倒す。だが二人はそれが狙いだったのだ。

キックホッパー＆パンチホッパー「ライダージャンプ!!!!!!」



電子音「RIDER JUMP」

そうライダージャンプは自信を飛ばすだけが能ではない。相手に足をいた状態で発動させることで相手にジャンプのエネルギーを叩きこみ身体を吹き飛ばす事も出来るのだ。ギガンテスワームが二人の目論見に気がついた時にはもうすでに手遅れでありライダージャンプを受けて身体が宙に飛ばされてしまう。そしてキックホッパー、パンチホッパー、ダークカブト、フェアリーはそれぞれ必殺技の発動体勢に入る。

キックホッパー「ライダーキック!!!」

パンチホッパー「ライダーパンチ!!!」

ダークカブト「ライダーキック!!!」

フェアリー「ライダーキック!!!」

電子音「RIDER KICK!!!」

電子音「RIDER PUNCH」

ギガンテスワーム「ぐぐおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおつ!!!!!!????????」

4人の必殺技がギガンテスワームのカラダに突き刺さるとギガンテスワームは最後の断末魔をあげて爆散消滅した。その頃ハイパーカブト、ハイパーガタック、ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトは・・・

グリラスワーム「はあ、はあ、はあ、・・・貴様ら何処にそんな力が・・・」

電子音「All Zector Combine!!」

ハイパーカブト「まだ分からないのか?・・・人間は”心”がある限り無限の可能性を持っているんだ!!!」

グリラスワーム「そ、そんな事私は認めんぞお!!!!!!」

ハイパーカブト「うおおおおおおおおおおおつ!!!!!!」

グリラスワームは大人のセリフを否定するかのようには嘘るとハイパーカブトに向かってくる。ハイパーカブトは止めとパーフェクトゼ

クターをパーフェクトモードにするため今この本部に有る全てのゼクターを呼び集めて合体させる。そして何度が斬りつけてその刃をグリラスワームのカラダに押し付けたままパーフェクトゼクターのトリガーを引く。

電子音「MAXIMUM - HYPER - TYPHOON!!!」

ハイパーカブト「はあああああああああああああああああああああっ!!!!!!」

マキシマムハイパーティーンを発動させてグリラスワームを一刀両断しようとするのだが最期の抵抗を見せる。そしてどちらも既に体力は互角・・・だがグリラスワームがパーフェクトゼクターを弾いて飛ばしてしまう。

ハイパーカブト「し、しまった!!!!!!」

グリラスワーム「私の勝ちだあああああああっ!!!!!!」  
グリラスワームは耐えきつてやったぞと勝ち誇りながら消耗してフラフラの大人に止めを刺そうとゆっくりと近づくがそこにハイパーガタックのハイパーガタックダブルカリバーがブーメランのごとくグリラスワームの身体を切り裂くとその攻撃に怯んでしまう。

ハイパーガタック「はあ、はあ・・・」

ハイパーカブト「皆行くぞ!!!!!!」

ハイパーガタック「よしっ!!!!!!」

ブロッサム「はい!!!」

マリン「やるっしゅ!!!」

サンシャイン「うん!!!」

ムーンライト「ええ!!!」

ハイパーカブトの合図と主にブロッサムたちプリキュアとハイパーガタックが走り出す。

ハイパーカブト「ライダーキック!!!!!!」

ハイパーガタック「ライダーキック!!!!!!」

ブロッサム「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ!!!!!!」

マリン「プリキュア・ブルーフォルテウェイブ!!!!!!」

サンシャイン「プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!!」  
ムーンライト「プリキュア・シルバーフォルテウェイブ!!!!」  
ハイパーカブト、ハイパーガタック、ブロッサム、マリン、サンシ  
ヤイン、ムーンライトは最後の力を振り絞りそれぞれ必殺技をグリ  
ラスワームに放つ。6人の必殺技を受けたグリラスワームは悶え苦  
しむように暴れながらも気概に仕上がった隕石にもたれかかる  
様に倒れ込んでいくとそのまま大爆発を起こす。

ハイパーカブト「はあ、はあ、はあ……やったあ!!!!!!……  
・やったおぞおおつ!!!!!!」

ハイパーガタック「勝った……勝っただあ!!!!!!」

ブロッサム「やったりました……私達かったですね!!!!!!」

マリン「うん!!!!うっしやあ!!!!!!」

サンシャイン「これで人々はネイティブになる事はないんだね!!!!!!」

ハイパーカブト達は黒幕である三島と根岸を見事倒すことに成功し  
た。これで全人類がネイティブとなることはなくなった……  
根岸を倒したキックホッパー達もハイパーカブト達に合流すると全  
員は一度変身を解除する……全員闘いのダメージで服やカラダは  
ボロボロだった……

矢車「終わったな……全ての闘いが」

ゆり「ええ。黒幕は全て倒したわ……尊い犠牲を払ったけど」

ゆりの言葉に全員が安西のほうを見る……彼がいなかったら自分  
たちは恐らく負けたいた。全員の命はなかったら……矢車  
は安西の亡骸に近づくと……

矢車「安西……お前は最期まで人間だった。それは俺達が証人だ。  
お前のお陰で世界は救えたんだ。だからもう罪悪感を持たなくて  
い……安らかに眠れ。」

影山「黙禱!!!!!!」

矢車がそう言い終わり影山が大声で黙禱の合図を送ると全員目を閉

じて手を合わせる。一人の戦士に安らかな眠りを送ったもらうために……。その直後に須藤、大和、大介、剣も到着する。そして大人達から全てを聞いた……須藤は安西の死を聞いて一人涙で顔を濡らすのだった……。

そして全てを終わらせた大人達は情報管理室の器具を使いZECT本部のアナウンスで自分達が勝利したことを本部中にアナウンスで知らせると生き残ったゼクトルーパーやワーム、ネイティブ達はあつけなく降伏し全員が本部の外に集められる……敗北した自分達に未来はないと彼らは思っていたのだが……

大人「安心してくれ……貴方達を殺しはしない……これからいろいろ辛い事があるかもしれない……でも精一杯生きるんだ。生きていれば必ず希望はある。」

ゼクトルーパー&擬態したワーム達「……」

琢磨「約束してくれ。人間として生きるって……お願いだ。」  
大人達の言葉を聞くとその場にいた全員が首を縦に振る。彼らも分かっていたのかもしれない……自分達も人間として生きれる事を……大人は話はそれだけだと集めたゼクトルーパーとワームを解散させる。そして大人達は最後の仕事があると大人と総司がもう一度カプトに変身してハイパーカプトになる……

カプト（総司）「大人……最後の大仕事だ。八デに行くぞ!!!」  
カプト（大人）「はい!!!。」

電子音「All Zector Combine!! MAXI  
MUM HYPER CYCLONE!!!」

そう最後の大仕事とはZECT本部を跡形もなく粉々にすることだったのだ。二人のハイパーカプトによるダブルマキシムハイパーサイクロンをZECT本部に発射する。こうすることでもう二度と全世界の人がネイティブとなる事は永久になくなったのだ。

こうして大人達戦士達の活躍により根岸と三島の野望は完全に破壊

されて全人類ネイティブ化計画は阻止された・・・だが大人達の闘いはまだ続くのだ・・・「砂漠の使徒」との心の大樹を守るための闘いが・・・そしてこの時点で既にサバクの新しい仲間が誕生していたということはまだ大人達ライダーもつぼみ達プリキュアも知る由がなかったのだ・・・

第32話「ZECT & ワーム編最終章?」心が持つ希望と未来」(後書き)

これにてカブトの原作をベースにしたエピソードは終了します

次回からはハートキャッチサイドがベースとなります。

完結は原作のハートキャッチが終わるまで続くと思います

近日新章突入です!!お楽しみに

## ZECT&ワーム編エピソードグライダー計画始動

砂漠の使徒の実験ラボでサバ　クは研究の最終調整をしていた・・・  
そして遂に完成したと4つの培養ホットから4つの何かを取り出す  
べく培養液を抜き去る・・・すると4つ・・・いや4人の高校生く  
らいの人間がバイ用ポットから出てくる。男子が3人女子が1人と  
いうメンバー構成だった・・・

？「ここは何処？・・・」

？「私誰？・・・」

？「・・・」

？「・・・」

4人は無邪気な子供のようにそう言つとそこにサバ　クが登場する。

サバ　ク「ようこそ砂漠の使徒へ・・・君たちは我々の”同志”だ」

？「同志？・・・僕達が？」

サバ　ク「そうだ・・・君たちは”同志”」

？「僕達が・・・同志」

4人はサバ　クのその言葉に反応してサバ　クをまるで父のように  
慕うのだった・・・彼の真意がどういうものかはまだ見当がつか  
ないまま・・・

**ZECT&ワーム編エピソード〜ライダー計画始動〜（後書き）**

今までの伏線をここで出しておきます。

感の言い方は大体想像できますよね？分からない方にヒントを〜プリキュア5の映画とサバクの側近が誰なのか・・・そしてサバクがどうしてコブラージャに新兵器を持たしたのにそれっきり使わないのか・・・

次回から新章「砂漠の使徒編」に突入！！！！お楽しみに



## 新章プロローグ「ゼロナンバーズ」

ブロッサム「はああああっ！！！！」

マリン「たりやああああああっ！！！！」

サンシャイン「やああああああっ！！！！」

ムーンライト「ふんっ！！はああああっ！！！！」

ZECTが壊滅してからの数週間が達今度は砂漠の使徒の侵略作戦がかなり表面化してきた。大人達ライダーもつぼみたちプリキユアもまだ戦いは終わっていないかった。今度は砂漠の使徒を壊滅させて地球を守らなくてはならない。今ブロッサム達は希望ヶ丘市の丘公園でサソリーナが乗り移って強化されたデザトリアンと交戦州だった。

サソリーナ「きいいいい！！！！何で攻撃が当たらないのよお！！！！」

サソリーナはヒステリックにそう言いながらも我武者羅に攻撃を続けていくのだがそんな攻撃が彼女達に当たるわけがなく時間だけが過ぎていった。ブロッサム達はそろそろ決めてやるとハートキャッチミラーージュを取りだしてスーパーシルエットにへと変身する。

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「鏡よ鏡プリキユアに力を！！！！世界に輝く一面の花！！！！ハートキャッチプリキユア・スーパーシルエット！！！！」

サソリーナ「はっ！！！！このパターンは・・・」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「花よ咲き誇れ！！！！プリキユア・ハートキャッチオーケストラ！！！！」

サソリーナがはっと思った瞬間に4人の究極技のハートキャッチオーケストラがサソリーナに向かってくる・・・そして抵抗できないままハートキャッチオーケストラを受けてしまうと・・・

サソリーナ「ぼわわわわわ・・・って！！浄化されるわけにはいかないのよお！！！！」

デザトリアン「ぼわわわあゝん」

サソリーナは急いでデザトリアンから脱出するが浄化されかけた事もありその場に膝をつく。それを4人が逃がすものかと走っていくのだが突如サソリーナとブロッサムの間銃撃が走る。ブロッサム達とサソリーナも何が起こったのだと銃弾が発射された所を見るとそこには何と漆黒の鎧を身に纏ったカマキリの顔をした仮面の戦士とアリの仮面を纏った戦士が立っていた。ブロッサム達は直感的に理解できたが信じられない表情だった。なぜならば z e c t が壊滅した今あり得ないのだ。だがどう見てもアレは。仮面ライダーだ。

ブロッサム「貴方達は。仮面ライダー？」

マリ「そんな。z e c t は壊滅した筈なのに」

二人の仮面戦士はそう言うブロッサム達の方を見る。仮面ライダーと似ているがどこが違う。仮面ライダー？

「仮面ライダー？違うね。」

「何だか知らないけどなんなんだいそれは？」

サソリーナ「あ、アンタ達は？」

「貴女達大幹部の仲間入りを果たしたものと言っておきましょうか」

ブロッサム「新幹部?!?!？」

「そのとおり。」

「今日はほんのごあいさつさ。でも次会うときは君たちの最後だよ」

二人はサソリーナを連れて消える。ブロッサム達は信じられなかった。まさか砂漠の使徒にも仮面ライダーのような者が存在したなんて。疑問に思うのが砂漠の使徒は何故今までそれを出さなかったのかという事。だがその謎も何れ解ける事になると言う事は4人にはまだわからなかった。

翌日。

大人「新幹部が現れたって？」

つぼみ「はい。でも見た目はライダーそっくりでした」

琢磨「ライダーそっくりだったって・・・ライダーのデータはもうこの世に無い筈じゃ」

傑「確かに・・・本部を破壊した後に天道さん、加賀美さん、須藤さん、織田さん達が世界中散り散りになって z e c t の支部を壊滅するために旅に出てるし。ライダーのデータも矢車さんと影山さんが押収して全部消去した筈・・・つまり”人間が造った”のではないと言う事になる・・・」

そう実は天道達は今この場にはいなかったのだ・・・z e c t の本部だけ破壊しても計画が再発する恐れがあるためかつて z e c t の狗だった須藤と織田の情報を元に z e c t を完全に破壊する行動に打って出たのだ。此処まですればもう二度と狂った計画を実行など出来ない全員で話し合って決めた事だ大人達は砂漠の使徒との戦いがあるため天道達が気を使い大人達にはここに残る様に取り計らってくれたのである。

タ「じゃあ砂漠の使徒がライダーを造ったていうの？」

ゆり「その可能性が高いわね・・・現に彼は大人達のライダーの固有能力のクロックアップを封じるクロックダウンボールなんてモノを造ったし・・・彼の科学力ならライダーの一人や二人は簡単に作れるのかもしれないわ」

えりか「じゃダークプリキアのように」

いつき「造られたってこと？」

大人「・・・」

全員が深く考え込んでいるとシプレ達が慌てた表情で飛んできた。シプレ「大変ですう！！！！砂漠の使徒の新しい敵が現れたですっ！！！！」

傑「噂をすればか・・・」

大人「丁度いいや。敵がどういのか知りたかったからね。皆行こう！！！！」

大人達はカブトエクステンダー、ガタツクエクステンダー、ダークエクステンダー、フェアリーエクステンダーに乗り込んで砂漠の使徒が現れたと言う現場に向かう。

？「来たようだな」

？「ふふふ」

？「貴方達がライダーとプリキュアですか？」

？「待つてたわ・・・貴方隊が来るのを・・・いい加減壊すのも飽きたしね」

大人達が到着すると4人の仮面戦士は大人達が来るのを待っていた様だ・・・4人は黒いフードをかぶった姿で顔は何やら仮面でおおわれて素顔が見えなかった・・・

大人「お前達は何者だ？」

？「我らは貴様らを倒すために造られた戦士。ゼロメンバーズ！！」

？「君達を倒す事が僕たちの宿命・・・」

？「最大の目的・・・」

？「アタシ達の使命」

4人は一斉にローブを脱いで手をかざすと何かが飛んできて手に止まる。それはカマキリ、カミキリムシ、羽アリ、ガの様なメカであった・・・大人達は固唾をのんだ・・・まさか・・・だがあり得ない・・・

4人組「・・・ダークチェンジ」

電子音「DARK CHANGE!!!」

それぞれ手に収まったアイテムを全員左肩に装着すると鎧に身を包まれていった。そして4人はカマキリ、カミキリ、アリ、ガのモチーフの複眼を持つ目が現れた・・・大人達はその姿をただ呆然と見るしかなかった・・・

新章プロローグ「ゼロナンバーズ」(後書き)

新幹部登場です。これから荒れるでしょうが頑張ります(汗)

次回もお楽しみに

## 第1話「ゼロメンバーズの脅威」(前書き)

前回までのあらすじ

z e c tを完全にこの世から破壊するために旅立った総司達の遺志を継いだ大人達は砂漠の使徒との交戦に明け暮れたいた。しかしそんな彼らに新なる影が・・・

ゼロメンバーズと名乗る彼らは大人達ライダーと類似した戦士に変身するのだった。

## 第1話「ゼロメンバーズの脅威」

サソリーナ「サバーク博士コレは一体どういう事ですか？私達を差し置いて新しい幹部なんて・・・」

クモジャキー「・・・奴らは人間なのか？」

サバーク「違うな・・・奴らは私が”造った”のだよダークと同じようにな」

砂漠の使徒の玉座の間で3幹部は驚かさされた。自分達の組織に仮面ライダーに対するものが新しく仲間になったとは・・・だがコレは自分達の存亡にもかかわるかもしれないとサソリーナ達は内心冷や汗をかいているのだった・・・だがもしかしたら奴らがサバークに”造られた”存在ならば今日こそライダーの息の根を止められるかもしれないと言う期待も持てたのだった・・・

大人「なっ！！！！！」

琢磨「マジかよ・・・ホントライダーじゃんか」

傑「そんな馬鹿な・・・砂漠の使徒は此処まで出来るのか？」

タ「あり得ない・・・こんな事が・・・」

大人達はゼロメンバーズと名乗る者たちが自分達と似た仮面ライダーに・・・いや仮面ライダーとは違う黒い戦士に変身した事に動揺が隠せなかった・・・まさか本当にサバークが仮面ライダーを造ったとも言ったのか・・・だが短時間で造れるほど簡単なものではないはずだ・・・大人は考えた結果一つの答えにたどり着いた・・・そう。今までの自分達の戦いをサバークがデータとして取っていたとしたらどうなる？・・・今まで砂漠の使徒が単調にデザリアンでの攻撃しかしなかった事やクロツクダウンボールの実験を行っていたとしたら全てが説明がつくのだ・・・つまり今までの戦いは全てサバークのデータ収集のための実験に過ぎなかったのだ・・・大人はその思考にたどり着いた時感じた・・・”この闘い俺達に勝

「ち目はないかもしれない」と・・・そんな大人を現実の世界に呼び戻すべくつぼみが声をかける。

つぼみ「大人さん!!!!・・・?・・・大人さん!!!!私たちも変身しますよ!!!!!!」

大人「!!!!!!・・・あ、ああ。」

大人は我に返ると全員にアイコンタクトを取りカブトゼクター達を呼び集める。

大人&琢磨&傑&タ「変身!!!!!!」

電子音「「H E N S I N」」

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう!!!!!!(です&でしゅ)」

つぼみ&えりか&いつき&ゆり「プリキュア・オープンマイハート!!!!!!」

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!!!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!!!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!!!!」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「ハートキャッチ・プリキュア!!!!!!」

大人達はヒイロカネの鎧に包まれてそれぞれのライダーにつぼみ達は伝説の戦士プリキュアへと変身していくとゼロメンバーズの4人はゆっくりと近づいて来る・・・大人達は敵の威圧感を感じながらも身構える・・・

?「カブト、ブロッサム・・・貴様ら二人は俺が相手だ。」

カブト「・・・(なんだこの威圧感は・・・サソリーナ達とは何かが違う)」

ブロッサム「望む所です!!!!!!」

カブト「貴様・・・名前は?」

?「ふん・・・本来は殺す前に教えるのだが・・・いいだろう特別



だ。俺はゼロメンバーズのリーダー……マンティス。貴様らの命を我が死神の鎌で刈り取ってくれ……」

カブトとブロツサムは黒い体色が特徴の緑色と赤の最終非対称の複眼をもつカマキリの戦士マンティスに戦うよう要求される。・ブロツサムはやる気十分だったがカブトはいつもと様子が違った。そんな様子を気にすることなくマンティスはカブト達に自身の特有武器である大型の鎌のデスサイズと小型の鎌のデスシクルの二つを器用に構えて向ってくる。

？「ガタツク、マリン……君たちの相手はボクだ僕の名はアント。記憶したかい？」

ガタツク「ふざけやがって……マリン。アイツを一気に叩き潰すぞ……!!」

マリン「ガッテン勝利の助!!!行くよガタツク!!!」

アント「ふふふっ……すぐにその自信も砕いてあげるよ」

アントと名乗った黒い鎧にアリの顎と青の複眼をもつ仮面の戦士はガタツクとマリンを挑発していくと特有武器であるアリの顎をモチーフにしたアントフアングを腕に装備してガタツク達に向かう。

？「ダークカブト、サンシャイン貴方達の相手は私です。申し遅れました私の名はホーンドと申します」

ダークカブト「ホーンド……カミキリムシの戦士か」

サンシャイン「……貴方たちもこころの大樹が目的なの？」

ホーンド「いいえ。私達はそんなものはどうでもいいのです。貴方達を倒す事が私達の目的なのですから。」

ダークカブト「俺達を倒すなんて事が簡単できると思うなよ？サンシャイン行くぞ……!!」

サンシャイン「うん!!!。皆を苦しめるのなら私も全力で立ち向かうのみ……!!」

ホーンド「行きますよ……!!」

黒いカミキリムシの戦士は黒の鎧に白い複眼という身形のホーンド

と言う戦士は丁寧そう言うと専用武器カミキリ角をモチーフにしたのホーンドロッドを構えてサンシャインとダークカブト達に向かっ  
ていく。

？「貴女達の相手はこのアタシよ・・・フェアリー、ムーンライト  
！！！！アタシの名前はモスよ覚えておきなさい」

フェアリー「砂漠の使徒なんかと手を組むなんて・・・アタシ達  
が目を覚ましてあげる」

ムーンライト「貴女に何があつたか知らないけどこころの大樹は私  
達プリキュアと」

フェアリー「アタシ達ライダーが」

フェアリー&ムーンライト「守ってみせる！！！！」

モス「出来るかしら？」

モスと名乗る黒鎧の銀色の複眼をもつ者は女性の様な口調でそう言  
うと専用武器であるモスサーベルを構えてフェアリーとムーンライ  
トに向かっっていく。

ブロッサム「ふんっ！！やああああっ！！！！」

カブト「はあああっ！！！！！！」

マンティス「遅いぞ？・・・それで本気か？」

マンティスはブロッサムとカブトのバランスのとれたコンビネーシ  
ョンでの攻撃を軽くあしらい鎌で二人を斬りつけていき着実にダメ  
ージを与えていく・・・此処でカブトはクロックアップで決めてや  
るとキャストオフするのだが・・・

カブト「くっ！！・・・キャストオフ！！！！」

電子音「CAST-OFF CHANGE-BEETLE！！！！」

マンティス「そんなもん・・・こつするまでだあ！！！！」

カブト「何っ!？」

何とカブトのマスクドフォームの鎧をデスサイズの一振りからおこ  
る突風で跳ね返してきたのだ。カブトはブロッサムをかかえてその

場から離れる事で二人とも無傷だったがマンティスはカブトの後ろに回しこむと背中をデスサイズとデスツシクルで斬りつけてケリを入れて地面に身体を叩きつけていく。

カブト「うわああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」  
ブロッサム「きゃあああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

二人は地面に身体を思いっきり叩きつけたれてしまうのだがカブトはブロッサムをかばう様に懐に彼女の身体を抱きかかえる。そのおかげでブロッサムのダメージは最小限に抑える事が出来た・・・  
マンティス「どうした？お得意の光速移動で俺を追い詰めてみるよ？」

カブト「ぐうう・・・はあ、はあ、はあ・・・大丈夫かブロッサム？」

ブロッサム「はい。!!!!!!!!カブト貴方こそボロボロじゃないですか!!!!!!!!」

カブト「大丈夫だこの程度ならまだまだ行ける。アレで一気に決めよう。」

ブロッサム「はい!!!!!!」

マンティス「ほう？策でもあると言うのか？だがどんな技もこの俺には効かん!!!!!!」

カブト「それはどうかな？お前の攻撃パターンは既に見つけた。ハイパーキャストオフ!!!!!!」

電子音「HYPER CAST-OFF!!!! CHANGE-HYPER-BEETLE!!!!!!」

ブロッサム「レッドの光の聖なるパヒューム!!!!シユシユツと気分でスピードアップ!!!!。貴方の攻撃のパターンはもう把握できました。もう私達は負けません!!!!!!」

カブトはハイパーカブトに進化してブロッサムはレッドの種のパヒュームでスピードを強化する。

マンティス「とうとう本気になったか？だが貴様らのデータは既に分析済みだ。俺には通用せん!!!!!!」

ハイパーカブト「能書きはいい一気に決める。ハイパークロックアップ!!!」

電子音「HYPER-CLOCK-UP!!!」

ハイパーカブトはパーフェクトゼクターを構えて一気に決めてやるとマンティイスに迫るのだが……

マンティイス「……キャパシティダウン!!!!!!!」

マンティイスは左手に変身アイテムであるマンティイスチェンジャーのスイッチを押すとマンティイスチェンジャーから光が放たれていくと……

ハイパーカブト「なっ!?!?……ハイパークロックアップが……どうしたんだ?」

ブロッサム「レッドのパヒュームのパワーも!?!?!?……どうして?」

二人はもう一度力を発動させようとハイパーカブトはハイパーゼクターを何度も叩きブロッサムはパヒュームにレッドの種を入れて身体に噴きつけるのだが……反応がない……

マンティイス「教えてやろうか?……お前達的能力を封じ込めたのだよ……もうこの戦闘では貴様らは特有の力は発動できない……」

ハイパーカブト「そんな……!!!!!!……まさかっ!?!?!?」

ハイパーカブトはもしかやと思いついてパーフェクトゼクターのスイッチを押してみても反応がない……自分達のワザを完全に封じ込められてしまったのだ……そしてマンティイスはマンティイスチェンジャーの別のスイッチを押していく……

マンティイス「キャパシティアップ!!!!!!」

マンティイスに光が集まるとデスサイズとデスシクルが合体していき両端に刃のついたロッド上の武器に変化する……

ガタック「ライダーカッティング!!!!!!」

マリリン「プリキュア・ブルーフォルテウェイブ!!!!!!」

アント「ほっ!!、よつと!!!!」

ガタツクとマリンのダブル攻撃を軽く避けるとアントファンクにエ  
ネルギーと溜めると・・・それを大地に叩きつけていく・・・  
アント「アントボルテック!!!!」

ガタツク「あぶないマリン!!!!・・・ぐああああああああ  
ああ!!!!??」

マリン「きゃああっ!!!?!?・・・が、ガタツク!!!!!!」

ガタツクはマリンをかばう様にマリンを突き飛ばすと一人だけアン  
トのワザを受ける・・・ガタツクは大ダメージを受けてしまうと  
その場に膝をついてしまう・・・

マリン「もうく馬鹿あ!!!!何カッコつけてんのよ!!!!」

ガタツク「こう言う事してみたくてね・・・はあ、はあ」

アント「君達バカ?・・・つまらない馴れ合いをするなんて・・・  
不快だね」

アントは先ずはガタツクから片付けてやるとアントファンクでガタ  
ツクのアーマを攻撃していきガタツクにダメージを与えていくが・・・  
マリンがアントに立ちふさがる・・・

アント「女の子だからって僕は容赦しないよ・・・キャパシテ  
イダウン!!!!」

アントは左手にある変身アイテムアントチェンジャーのスイッチを  
押していくと二人に光線が当てられていく・・・見た目は特に変化  
がなかったのだが・・・

ガタツク「何だか知らないが・・・一気に決めてやるクロツクアッ  
プ!!!!?・・・!?!?・・・発動しない・・・」

アント「当然だよ・・・だって君達の能力は使えなくなったから  
・・・」

マリン「何ですって?」

ガタツク「くっ!!!!」

アントはアントファンクを構えていきながら一気に二人を追い詰め  
ていくと・・・

アント「そろそろ終わらせてあげるよ……キャパシティブ  
!!!」  
アントのアントファングに光が集まると顎の刃が伸びていく……  
そして二人に更なる追撃が……

ホーンド「はあああつ!!!!!でやあああ!!!!!」

ダークカブト「ぐうつ!?!?!ちっ!!!」

サンシャイン「ふっ!!!!!たあああつ!!!」

ホーンドの長い槍ホーンロッドを使った攻撃にサンシャインとダークカブトは苦戦を強いられていた……何せホーンドの長い槍による攻撃は隙がなく近づく事が出来ないのだ……

ホーンド「どうです?私の實力は」

ダークカブト「確かに……強い……だが俺たちだって伊達に今まで闘った手わけじゃないんだよ!!!」

サンシャイン「そう!!!私達は負けられないの……全てのこころの花を照らす為に!!!」

ホーンド「そうですか……ですが私も貴方達に負けるわけにはいかないですよ……私達の為にもね……」

ダークカブト「?……どういう意味だ?」

ホーンド「おつと。お喋りが過ぎましたね……そろそろ終わりにしますよ?キャパシティブダウン!!!」

ホーンドは一度ホーンドロッドを地面に突き刺していくと左手のホーンドチェンジャーのスイッチを押していき光を二人に浴びせる。

ダークカブト「今のは?……」

ホーンド「貴方達の能力を封じさせていただきました……これで私の勝ち揺るぎません」

ダークカブト「くっ!!!」

サンシャイン「集まれ花のパワー!!!……!!?!?!?……そんな」

ダークカブト「ま、まさか……クロックアップ!!!……」

「!!こつちもか!!!」  
ホーンド「言ったでしょう?・・・貴方達の能力は全て封じました・  
・・貴方達は終わりです。」  
ホーンドはホーンドロッドを地面から抜き取りホーンドロッドを構  
えて二人を追い詰めるべく向っていくと・・・  
ホーンド「キャパシティアップ・・・はあああつ!!!」  
ホーンチェンジャーを操作していくとホーンドロッドのカミクリム  
シの角の部分が刃のように変形していく・・・

モス「ふん!!!はあああつ!!!」  
フェアリー「くつ!!!」  
ムーンライト「フェアリー・・・大丈夫?」  
フェアリー「ええ・・・それにしてもなんてパワーにスピード・・・  
能力じゃ私達を完全に上回ってる・・・」  
モス「ふふふつ・・・当り前よ?アタシ達は貴女達を倒すために”  
造られた”のよ」

フェアリー「!?!」  
ムーンライト「貴女もダークプリキュアと同じ存在と言う事?」  
モス「さあ?そこまでは教えられないわね・・・じゃ貴女達に  
は消えて貰うわ・・・発動しなさいキャパシティダウン!!!」  
モスチェンジャーのスイッチを押していき二人に光を浴びせていく・  
・フェアリーは咄嗟にクロックアップを発動させようとフェアリ  
ーゼクターを操作するのだが・・・反応がない・・・  
フェアリー「まさか・・・」  
モス「うふふ その通りよ・・・アタシ達ゼロメンバーズの特有能  
力・・・相手の特殊能力を全て無効にするのよ」  
ムーンライト「くつ!!!・・・フェアリーこうなったらコンボ攻

撃で行くわよ!!!」  
フェアリー「オツケー!!!」

モス「ふふふつ……貴方達は既に丸裸……素直に消えなさい!!!」

モスはモスサーベルを構えていきムーンライトとフェアリーに襲いかかる。クロックアップが使えないが手数では有利だと……だがそんな二人を更に驚かせられる事が……

モス「キャパシティブアップ」

モスのサーベルが光出すとサーベルが分離して双剣の様な者に変化していきスピードと手数でも二人を追い抜くこととなった……

ハイパーカブト「くっ!!!?」

マンティス「どうした?お前は所詮その程度の三下か?……」

ハイパーカブト「ぐううっ!!!」

ブロッサム「やああああっ!!!」

マンティス「おっと……おらああ!!!」

ブロッサム「きゃあああああっ!!!!!!!?」

ハイパーカブト「ブロッサムう!!!お前……女の子になんて事を!!!!」

マンティス「それが?……女なんて関係あるか重要なのは貴様らを殺す事だろ?」

ハイパーカブト「お前ええ!!!!!!」

ハイパーカブトは力を解放できないパーフェクトゼクターを構えていくがマンティスの強化されたポテンシャルに追い付けずに追いつめられてしまう……このままでは全員殺されると思ったその時……

サバーク「もういいぞゼロメンバーズ!!!!今日はこの辺にしておけ……」

マンティス「サバーク様?……分かりました……おい!!!!全員今日はこの辺で終わりだ!!!!全員本部に戻るぞ」



アント「ちえっくまたね？ガタツク、キュアマリン」

ホーンド「仕方ありませんね・・・命拾いしましたね？ですが次は貴女達を狩ります」

モス「なあ〜んだ・・・もう終わり？残念」

マンティスの合図を聞くと3人は戦いを止めてマンティスの元に瞬間移動で移動する・・・中心にはサバークがいて禍々しい雰囲気を漂わせていた・・・

サバーク「プリキュア、そしてライダー達よ・・・貴様らの命ももうすぐ尽きる事になるだろう・・・全てのこのころの大樹を枯らし世界は我々の者だ！！！！」

サバークのセリフを最後に全員がその場から姿を消す・・・大人達はゼロメンバーズの攻撃を避けるだけが精一杯であった・・・今のままでは自分達に勝ち目がないと感じる一戦となったしまったのだった・・・

大人達は新たな敵ゼロメンバーズを迎え撃てるのか？・・・ゼロメンバーズの「キャパシティダウン」の攻略法は存在するのだろうか？・・・

## 第1話「ゼロメンバーズの脅威」(後書き)

はい、ゼロメンバーズの詳細を明らかにさせました・・・彼らには活躍してもらおう事になるでしょう

今回はサソリーナさんが主役のあの回を描きます・・・物語の質が壊れないか心配です(汗)

次回もお楽しみに

第2話「サソリーナの涙〜砂漠の使徒のこころの花〜」(前書き)

前回までのあらすじ

ゼロメンバーズは大人達ライダーとスペックが互角なだけではなく大人達の能力を封じる「キャパシティダウン」と自信の能力を最大限に強化する「キャパシティアップ」に大苦戦を強いられた。だがこれは彼らとの戦いの序章でしかなかった……

## 第2話「サソリーナの涙と砂漠の使徒のこころの花」

サソリーナ「はあ……ねえ？アタシ達このままでいいのかしら？」

クモジャキー「なんじゃと!？」

サソリーナは砂漠の使徒のバルコニーで永遠に落ちる事のない月を見ながら寂しそうにそう言う。そんなサソリーナの力のないセリフを叱責するかのように拳を上げて声を出すのだがそれをコブラージヤが静止する……クモジャキーは何だと言わんばかりに彼を睨んでいくのだが……

コブラージヤ「恐らくプリキュアの聖なる力を浴び過ぎて邪悪さが削がれているんだろうね……」

クモジャキー「くっ!?!?!」

コブラージヤの言葉にクモジャキーは納得がいかないとはかりにその場を後にする……コブラージヤもそれに続く……そして一人残されたサソリーナは考え込むようにたそがれるのだった……

時同じくして明堂院学院の屋上では……

つぼみ&えりか「えええ!!!生徒会長を辞める!?!?!?」

いつき「うん。今月いっぱい任期も切れるし。砂漠の使徒との戦いもこれからますます激しくなっていくと思うんだ」

えりか「確かに……」

いつきの突然の生徒会長止める宣言を聞いた二人は驚きが隠せなかった……確かに近頃は砂漠の使徒との戦いが激しくなってきた今は自分達がいつでも戦える体勢にしておく事は必要かもしれないがいつきが生徒会長を止める必要はないと二人は言いたげに名残惜しそうな声を上げる……

いつき「プリキュアに専念したいから生徒会長選挙には出ないつもりだよ」

えりか「ちよつと待ってよ!!!いつきが生徒会快調に当選して以  
来うちの学校つてすごく良くなつたじゃん皆いつきのお陰だよ!!  
!」

いつき「ありがとう。でももう決めた事だから。会長選には今の副  
会長の佐藤君に出馬してもらおうと思ってるん。」

つぼみ&えりか「佐藤君?」

二人は頭の上にクエスチョンマークが出ているような顔をする・・・  
そんな二人の気持ちを察したいいつきはその相手を紹介しようとして生徒  
会室に向かうのだったが・・・そこにはやっと自分の時代が来る  
と有頂天になつた佐藤の姿があつた・・・

つぼみ「彼が佐藤君・・・」

えりか「あんなんで大丈夫なのか?」

二人はそんな不満を生徒会室の外でこぼしているといつきの存在に  
気がついた佐藤が慌てて言い訳を考えている姿が二人の目に移つた。  
いつきは佐藤に生徒会長の心構えを諭すのだが佐藤は自分の本音が  
いつきにバレた事がかかり恥ずかしかつたのかいつきに謝りながら  
生徒会室から猛スピードで走り去るのだった・・・

場所は変わつて大人達も学校の屋上に集まつていた・・・  
大人「ゼロメンバース・・・」

琢磨「俺達のライダーの力をベースにあんな奴らを誕生させるなん  
てな・・・」

傑「しかも俺達の能力を無効化するキャパシティダウン・・・更に  
は自信を強化するキャパシティアップ・・・完全に俺達の力に対抗  
した対ライダー・・・いやプリキュアの力にも対抗して造られたの  
だろう。厄介すぎる・・・」

タ「それに装備も奴らのスペックもアタシ達以上・・・この前は  
何とかなつたけど今度来たらヤバイよね・・・」

大人「関係あるか。俺達は負けられないんだ。この町を奴らから守  
るために。」

琢磨「大人の言うとおりで。俺達が弱気になるわけにはいかない。絶対に」

傑「ただど気合だけだは勝てない。何とかして対抗策を考えないとな・・・」

タ「うん。」

ゼロメンバーズの対策について作戦会議をしていた大人達。今後は戦いが更に激しくなる事が予想できる・・・だが自分達が負けるわけにはいかない・・・だが傑の言うとおり気合だけでどうにかなる問題ではなく対策を考えなくては。これが今の自分達の課題となる。そんな事を考えていくと時間が過ぎていき昼休みの終わりを告げる鐘が鳴る・・・

また場所は変わり砂漠の使徒のアジトの玉座の間・・・

クモジャキー「サバーク博士。サソリーナを幹部の座から下ろし惑星城に返すぜよ。」

コブラージャ「博士もお気づきだとは思いますがもう彼女には戦う気力がありません・・・」

サバーク「うん・・・」

サソリーナ「ちよつと待ちなさい!!!アンタ達なに勝手な事言ってるのよお!!!」

クモジャキー&コブラージャ「・・・」

クモジャキーとコブラージャはサソリーナの事を考えての上でサバークに彼女を惑星城に帰還させて邪悪さを取り戻させようと思ったのだがサソリーナがそれに抗議するように玉座の間に現れる・・・二人は彼女を見るのだがサソリーナの目は納得がいかないとでも言う様な眼であった・・・

サソリーナ「サバーク博士、もう一度アタシに出撃命令を!!!本気を出さばプリキュアなんか!!!」

サバーク「・・・」

サソリーナはもう一度チャンスを貰おうとサバークに出撃命令を請

うのだが後ろからクモジャキーが止めると言わんばかりに彼女を静止する・・・

サソリーナ「何よ？・・・」

クモジャキー「今のお前では無理ぜよ」

コブラージャ「・・・」

サソリーナ「くっ！！！！アタシを見くびるんじゃないわよ！！！！

サバーク博士是非アタシにアタシにお任せください！！！！」

サバーク「分かった。出撃を許そう・・・だがコレが最後だと思え」

サバークは目を光らせながらそう言う・・・サソリーナの覚悟を試す上での威嚇でもあるがこの程度で彼女が怯まない事は分かっていた・・・

サソリーナ「望む所よおん・・・本気になったアタシの強さを見せてあげるわぁん」

サソリーナは上等だと玉座の間を後にする・・・そしてバルコニーの月を眺めていき決意を固める・・・コレで失敗すれば自分は終わりだ・・・絶対に失敗はできないと・・・

クモジャキー「サソリーナ！！」

サソリーナ「！！」

すると後ろからクモジャキーの声がして振り返ると彼は何かを自分に投げてきた・・・それは何と二人のダークプレスレットだ。

コブラージャ「持ってきたまえ3倍のダークパワーがあればプリキユアどもを倒せるかもしれない」

クモジャキー「ただし身体に相当負担がかかるき勝負は短時間でつけるぜよ」

サソリーナ「礼はいわないわよおん」

二人はサソリーナに勝って来いと目で訴えるかのようにサソリーナを見ていく・・・サソリーナもそれを察したかのようにそれだけ言う瞬間移動で地球に向かう。コブラージャとクモジャキーは最期まで彼女を見送る様にその場にいるのだった・・・

その頃佐藤はいつきに自分の本音を見られた事をかなり悔いていた。・・にあんな誰かが来るかわからない所で自分の本音を言った事大失態であり下手をしたら生徒会選挙に推薦してもらえなくなるのではないかとかなり落ち込んでいたのだった

佐藤「はあくなんて恥ずかしい所を見られてしまったんだあ!!!  
!!!」

?「あらあくん?」

佐藤「え!?!」

サソリーナ「うん?こころの花を潮らさている坊やがいたわあ。・・こころの花よできてえん!?!」

佐藤「わあああああああああ~~~~」

サソリーナ「んふふふ。・・デザトリアンのおでましよあ~~~~!!!」  
つぼみ&えりか&いつき「!?!?!」

いつき「ボクは学校の中を見てくる。二人は外に逃げて。」  
えりか「いつき?」

突如学校の様子が変わりまるで空間が歪んでいる様になっている。・・3人は何事だとあたりを見回す。いつきは以上の原因を探ろうと二人に逃げるように言うとその場を走る。えりかはそんな彼女に声をかけるがいつきは振りむかずに走って行ってしまった。・・学校は何やら怪しい雰囲気を漂わせていきながら稲妻を走らせている。・・この異常事態に生徒達も急いで学校から避難していく。・・徐々に学校は稲妻を行くと光を発していきデザトリアンへと変化する。そして同時につぼみの所に光る何かが降って来る。・・何とそれはこころの花を抜かれて封印された佐藤だった。

つぼみ「佐藤君!?!?!」

3人は何と言う事だと動揺が隠せなかった。・・するとデザトリアンは動き出す。生徒達はパニックになって大慌てで逃げる。・・つぼみ&えりか&いつき「あああ~~~~」

ゆり「貴女達何してるの!?!皆を守るわよ!?!」  
つぼみ&えりか&いつき「はい!?!」



ゆりの言葉に動揺を振り払った3人はデザトリアンを倒すべくプリキュアに変身するためにアイテムを取りだしていく。

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう！！！！！！（ですっ&でしゅ）」

つぼみ&えりか&いつき&ゆり「プリキュア・オープンマイハート！！！！」

4人は光に包まれていきプリキュアの姿に代わっていく……そして光がなくなると4人の戦士の姿が現れる。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム！！！！」

マリ「海風に揺れる一輪の花キュアマリン！！！！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪花キュアサンシャイン！！！！」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト！！！！」

4人「ハートキャッチプリキュア！！！！！！」

ブロッサム「プリキュア・からだパーンチ！！！！」

4人はボディイアタックをデザトリアンにぶつけていくとデザトリアンの動きが止まる。そこにサソリーナが姿を見せる。

サソリーナ「現れたわねプリキュア！！」

サソリーナは待っていたぞとばかりにいつもと違う何処か自信にあふれたくようでそう言う……

マリ「またアンタなの！？」

マリ「いい加減にしるあきれるようにそう言うがサソリーナはそこで自分の腕を見せつけていく……何処か自信ありげに……」

サソリーナ「ふん。今日こそ決着をつけてあげるわぁん！！三倍の力を持つこのダークブレスレットのパワーを使ってね！！！！」

ムーンライト「あなどっては駄目よ……今日はいつも違うわ」

サソリーナの腕にはダークブレスレットが3付けられていた……これさえあればお前達に負ける要素はないと……ムーンライトは

ソレを察したかのように全員に警戒するように促すのだった。そのすぐ後にサソリーナは力を解放させていく……3倍の力を持つ

ダークブレスレットのパワーを

サソリーナ「ううう!!!...闇に沈みダークな心に支配されるのよおん!!!...ぐう!!!ダークブレスレット!!!今こそ砂漠の使徒の底力を見るがいい!!!合体!!!」

三つのダークブレスレットの宝石が怪しく光を放つとサソリーナはデザトリアンと合体する。するとデザトリアンは強化されていく。

サソリーナ「こ、コレがダークブレスレット3つ分の力...これなら勝てるわああ!!!ゲオオオオツ!!!!」

サソリーナは勝てると思しにして4人に向っていくが4人は散会してバラバラになってサソリーナを窓すように攻撃を仕掛けていく。

ムーンライト「ふんっ!!!はあああっ!!!」

サンシャイン「はあああっ!!!」

ブロッサム&マリン「ダブル・からだパーンチ!!!」

サソリーナ「うううあ!!!」

サソリーナは4人のコンビネーションに惑わされてしまうが負けるものかと食らいつく...ここでブロッサム、マリン、ムーンライトが一気に決めようとタクトを取りだすと...

ムーンライト「プリキュア・シルバーフォルテウェイブ!!!」

ブロッサム「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ!!!」

マリン「プリキュア・ブルーフェルテウェイブ!!!」

3人の必殺技がサソリーナに直撃していき浄化しようとするのだが

...

サソリーナ「ふふふっ...今の私は無敵よおん!!!ううう!!!はあああっ!!!」

サソリーナは目を光らせると浄化技を打ち消す...4人はサソリーナの執念ともいえるパワーに圧倒されてしまうそうになるが諦めなかった...更にサソリーナは追撃を仕掛ける...4人は何とか追撃を避けながら反撃の糸口を掴もうとする...だが次第に力

で追い詰められていく……  
4人「くっ!!!」

サソリーナ「やられたくないなら変身アイテムをよこすのよ!!!  
うう……さあ早く!!!」

サソリーナは焦っていた……ダークブレスレットのパワーは凄まじいのだが身体の負担はかなりのモノ……一気に決着をつけるべく4人にこれ以上甚振られたくなければ変身アイテムをよこすように要求するが……

ブロッサム「私達は諦めません!!!サソリーナ佐藤君の心を返してもらいます!!!」

サソリーナ「まだ戦う気なお?くっ!!!」

4人は決してあきらめないと佐藤の心を奪還するためサソリーナに向かう。自分達の責務を果たすために……そして何より自分達の学校を取り戻すために。

サソリーナ「何がこころの花よ!!!何がプリキュアよ!!!下らない!!!」

サソリーナは自信の本音を言葉に表すと更に追撃を激しくしていく……サンシャインがサンフラワーイージスでソレを防いでブロッサム。マリン、ムーンライトに攻撃させる。

ブロッサム&マリン&ムーンライト「はあああああっ!!!  
!!!」

サソリーナ「己っ!!!プリキュア!!!」  
此処で3人の渾身のケリが命中する……だがサソリーナも今回は負けるわけにはいかない為4人に反撃のパンチを見舞わせようと拳を放つが……

サンシャイン「はあっ!!!」  
間一髪サンシャインが間に合い攻撃をガードする……だが二発目には耐えられずにサンフラワーイージスが壊されてしまう……  
4人は「うわあああああっ!!!」

4人は体育館の壁に叩きつけられてしまう……身体は衝撃でコン

クリートにめり込んでいる・・・かなりのダメージですぐには動けない・・・そんな4人にトドメをさそうとサソリーナ近づいていく・・・

サソリーナ「これで終わりよおん!!!」

ブロッサム「くっ!!!（もうダメ!!!）」

サソリーナの両手の拳が4人を潰そうと近づいて来る・・・4人はもうダメだと諦めかけるのだが・・・

電子音「MAXIMUM・HYPER・CYCLONE!!!!」

サソリーナ「あはははははっ!!!!!!おわりよっ!!!!!!・・・!!?ぐあああああっ!!!!!!」

突如サソリーナに凄まじい威力の光線が叩き込まれるとサソリーナは倒れてしまう・・・この攻撃が出来るのは彼しかない。もしかやと思ひ4人はあたりを見ると下でパーフェクトゼクターを構えたハイパーカブトの姿があった。

4人「カブト!!!!!!」

ハイパーカブト「4人とも諦めるな!!!俺達は負けられない・・・そうだろ?」

ブロッサム「・・・はい!!!!カブトありがとうございます」

ハイパーカブト「さあ此処から反撃開始だ!!!!」

ハイパーカブトの先導の元4人は壁から脱出して地上で身構える。

此処から自分達の反撃だと

サソリーナ「己えゝカブト!!!!!!・・・ぐうっ!?!?・・・な、何っ!?!?」

突如サソリーナの身体に稲妻が走るとデザトリアンにも稲妻が走る・・・そうダークブレスレットのパワーが暴走して抑えきれなくなっているのだ・・・

ハイパーカブト「力の暴走か・・・哀れだな。」

ムーンライト「ハートキャッチミラーージュで苦しむを終わらせるのよ!!!!!!」

ムーンライトの合図に合わせてハートキャッチミラージュの力を解放して4人はスーパーシルエットに進化する準備をする・・・  
ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「鏡よ鏡プリキュアに力を!!!世界に輝く一面の花!!!ハートキャッチプリキュア・スーパーシルエット!!!!!!」  
ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「花よ咲き誇れ!!!プリキュア・ハートキャッチオーケストラ!!!はあああああああああああああ!!!」  
サソリーナ「こんな所で・・・私は砂漠の使徒の大幹部よお・・・ぼわ・・・ぼわ

サソリーナがはっと思っただ瞬間に4人の究極技のハートキャッチオーケストラがサソリーナに向かってくる・・・そして抵抗できないままハートキャッチオーケストラを受けてしまう・・・  
コブラージャ「マズイ!!!!!!」

クモジャキー「アイツらもう戦えんぜよ・・・ならば此処まま・・・」  
コブラージャ「・・・ふっ・・・君も甘いね」

近くでサソリーナの最期の戦いを見ていたコブラージャとクモジャキー・・・コブラージャがサソリーナの救出に向かおうとしたがそれをクモジャキーが止める・・・もう彼女は戦えない。ならばこのまま静かに休ませてやるのが俺達のケジメとコブラージャを諭すとコブラージャも納得したようにクモジャキーにそう言う・・・

デザトリアン「ぼわわわ〜ん」

デザトリアンは光を放つと衝撃と共に消滅するすると学校は元に戻り天から心の花が姿を見せる・・・だが喜びは此処までだった・・・  
ポプリ「うん?・・・あああ!!!」

サンシャイン「?・・・ああ!!」  
ハイパーカブト「はっ・・・」

ポプリが何かに気がついたかのように大声を上げる。全員ポプリが

見る方を見ていくとそこには今にも力尽きようとしているサソリーナの姿があつた・・・そこにはクモジャキーが彼女の最期を解放するかの様に身体を抱いていてそばにコブラー ज्याの姿も・・・二人とも哀しい表情であり仲間であるサソリーナの最期を見届けていた。

ブロッサム「ああ・・・」

ハイパーカブト「つぼみ・・・」

ブロッサムはその姿に哀しい表情を見せる・・・いくら敵とは言え命を奪う事は好まないつぼみの優しさがあるからだ・・・ハイパーカブトである大人はそんな彼女に肩を置き最期まで彼女の姿を見るように促す・・・コレが戦いなのだと言われたいように・・・

クモジャキー「サソリーナ・・・お前にしてはよくやったぜよ」

サソリーナはクモジャキーの言葉に目を開くとダークブレスレットを彼に渡す自分の分も含めて・・・そしてどこか満足したような今までに見せた事のない優しさが溢れる表情を見せていくと・・・

サソリーナ「クモジャキー・・・コブラー ज्या・・・ありがとう」

彼女はそれだけ言うと涙で瞳を潤す・・・クモジャキーもコブラー ज्याもその態度に驚く・・・そして彼女の涙はブロッサム達にもはつきりと見えた。

ブロッサム「あああ!!!・・・」

ブロッサムは驚きが隠せなかった・・・アレだけ邪悪なサソリーナから純粹な涙が出るなんて・・・そしてサソリーナのカラダが光出す・・・最期の涙を流して瞳を閉じると光の粒子となって消滅してそしてその場に残されたのはこころの花が封印されているクリスタルが現れた。

ブロッサム「カタクリの花・・・花言葉は（嫉妬・寂しさに耐える）」

ブロッサムがそれだけ言うところの花が封印されたクリスタルは何処かに飛び立っていき空に消えていった・・・空は青空に戻り4人は哀しさに溢れるが此処でクモジャキーが声を上げる。いつ

も以上に怒りが籠っているのが分かった……

クモジャキー「この事は忘れんぜよ!!!」

コブラージャ「遊びは終わりだ……次は必ず君達を倒す!!!」

二人はサソリーナの仇は必ず取ると宣言する言葉だけ述べるとその場から光を放ち消えるブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトは何も言う事が出来なかった……だがそこでハイパーカブトは4人を諭すように口を開く……

ハイパーカブト「……皆コレが戦いなんだ……俺は天道さんから”守る”ことの辛さを教わった。」

ブロッサム「守ることの辛さ？」

ハイパーカブト「そう、辛さだ。何かも守る事は必ず犠牲が出る。

此方の大切なモノを守るためには相手を潰さなければならぬ……その覚悟がなければ簡単に潰される……だからこそ俺達の意思は揺らぐてはいけない……例えばどんな犠牲を払っても……自分達が傷ついてもな」

マリン「……アタシ達がどんなに傷ついても……」

ハイパーカブト「俺はその事を彼から学んだ……あの戦いからもな。」

サンシャイン「!!!」

ハイパーカブト「皆、これからもっと辛い思いをするかもしれない……だけど俺達はそれから目を離しちゃいけないんだ……悲しみは全員で分け合い相殺しよう。この世界の皆の笑顔を守るとのために!!!」

ムーンライト「カブトの言うとおりだわ……私達は負ければ地球は砂漠と化す。それだけはさせては駄目……皆、これからはどんなに傷ついても前に進むわよ!!!」

ブロッサム&マリン&サンシャイン「はい!!!」

ブロッサム達は大人の言葉に戦いの辛さを再認識させられる……だが大人の言っている事は正論であった……自分達が負ければ地

球は砂漠と化す．．．．それだけは何としても防がなくてはならないのだ。4人はサソリーナを倒した事で戦いの覚悟を固めるのだ。．．．

そして場所は変わりとする山の診察所に光が下りる．．．この花の持ち主にこの花が帰っていたのだ．．．すると一人の女性が目を覚ます．．．

女性「うん？．．長い間悪い夢を見ていた気がする．．．あっ」

女性はそう言つて久しぶりにその景色をみながら呟く．．．自分は一体今まで何を？．．．そんな彼女の所に小鳥が近づいて来る。まるで彼女の目覚めを祝福するかのよう．．．

女性「あ．．．ふっ」

女性は笑顔を見せた．．．自分が今までどうしていたのかはわからないが誰かに救われたんだと理解したからだ

そしてまた場所は変わり散らかった明堂院学院．．．そこには必死に片付けを行う佐藤の姿があつた．．．それをつぼみ、えりか、大人が眺めるのだった．．．

シプレ「あっ！！！！心の種が生まれそうです！！はッ！！プリプリプリ．．．プリリ〜ン」

こころの種が生まれるとソレをココロポットに収める．．．3人はサソリーナが消滅したグラランドに目をやる．．．

えりか「サソリーナ涙を流してた．．．」

つぼみ「．．．やっぱり砂漠の使徒にも心があるんです。」

えりか「クモジャキーやコブラージャ．．．きつともっと手強いよね」  
大人「恐らくね．．．」

えりかの言葉に大人はそう言っていく．．．恐らくあの二人は必ずサソリーナの仇を討つべく今まで以上に自分達を付け狙うだろう．．．  
・だがそこにつぼみが口を開く

つぼみ「でもどんな時でも私達は負けません！！！！」



えりか「うん！……もちろん！……オーツシャー……！頑張るぞ  
……！」

大人「その通り。必ずこの世界を守りぬいてみせる！……よぉ〜し俺も片付け手伝うよ」

つぼみ「はい！……行きましょう」

えりか「あ、つぼみ待ってよぉ〜」

大人「おいおいそんなにはしゃぐと転ぶよ〜」

つぼみの言葉にえりかと大人は決意を示す。そして3人は明堂院学の片付けに向かうのだった……

## 第2話「サソリーナの涙〜砂漠の使徒のこころの花〜」（後書き）

はい〜サソリーナさん退場エピソードです。如何でしでしょうか？個人的にはこの回はハートキャッチプリキュアの好きなエピソードに入ります。

ハートキャッチプリキュアは私が今まで見てきたアニメでも暖かさがあつてどれも好きなエピソードばかりですがコレとムーンライト復活エピソードは別格です。

大人の言葉は私の言葉でもあります。守る事の辛さをつぼみ達も痛感したでしょう。・・・だからこそ力は正しい事に使うべきだとつぼみ達も理解したと個人的には感じています。つぼみは優しいですからね。

さて次回は・・・ゆりさん回にしようと思つてますが・・・やはり先に妖精たちのプリキュア劇団が先にします（汗）。

第3話「妖精たち劇団デビュー!?プリキュア劇団結成!」(前書き)

前回までのあらすじ

サソリーナの最期の猛攻に立ち向かったつぼみ達。なんとか彼女を  
退けるが彼女が流した涙に砂漠の使徒にも心がある事を知る・・・

### 第3話「妖精たち劇団デビュー!?プリキュア劇団結成!!!」

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュア・オープンマイハート!!!」

シプレ「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!」

コフレ「キュアマリン!!!」

ポプリ「キュアサンシャイン!!!」

シプレ&コフレ&ポプリ「ハートキャッチプリキュア!!!」

大人「おお〜!!!!!!凄い!!!!!!」

植物園にてつぼみ、えりか、いつき、ゆり、大人はポプリ達のプリキュアのポーズの真似を見て大人は思わずその演技力に拍手喝采してしまう。

ゆり「皆よく見てるのね」

えりか「マリンはもつとかつこいいってばあ!!」

大人「まあまあ」

えりかはコフレのマリンの演技に不満がある様でコフレを弄る様にそう迫る。大人は後ろからなだめる様にえりかに言う。すると突然植物園の扉が開いて少女の声が響く

?「うわあ〜んコフちゃあ〜ん」

シプレ&コフレ「うお!?!」

つぼみ「るみちゃん!!!」

大人「誰だこの子は?」

つぼみ「ファクション部の志久ななみさんの妹さんです」

大人「ふ〜ん・・・ってコフレ達の事は覚えてるみたいだけどいいの  
かい?」

えりか「だいじょーぶ この子は信用できるから」

大人「そういう問題じゃない気がするんだが・・・」

大人はそう心配するがえりかは軽い態度でそう言い返す・・・大人はまあ〜問題なければいいかと思いきやそう言うが今度はもう一人つぼみ達と同じ年の女の子が入ってきた・・・

？「こらあゝるみ！！」

大人「お、噂をすればお姉さまの登場か？」

えりか「なみなみ」

つぼみ「志久さん……るみちゃんどうしたんですか？」

ななみ「保育園に来るはずの人形劇団が来られなくなっちゃって……皆ガツカリしちゃってさ」

つぼみ「そうだったんですか？」

ななみ「うん……あつ！！ねえそのぬいぐるみで人形劇って出来る？」

えりか「人形劇？」

ポプリ「！！！」

大人「！！！！（ちよ、ポプリ）目が人形じゃなくなってるぞ！！！！」

大人のそんな心配を余所ゆよにポプリは目を突如輝かせる……大人は嫌な予感しかしなかったがその予感的中することとなった……

つぼみ「えーつとそれは……」

ななみ「そうだよね……つぼみちゃんの大事にしてる人形だもんね」

ななみが残念そうに後ろを向いてそう言うがその際に妖精たちは動き出して……

シプレ&コフレ&ポプリ「やります！！！！！！（しゅ）（しゅ）（しゅ）」

つぼみ「（ちよ、ちよつと！！！！）」

大人「！！！！！！（こ、こらあ！！！！！！お前らあ！！！！！！）」

ななみ「ええっ！？」

大人とつぼみは心の中で3人の行動にツッコミを入れるがななみが驚いて後ろを向く……それに合わせてシプレとコフレはるみに戻りポプリはいつきの所に戻る……

つぼみ「ああ……やりましゅ！！！！」

ななみ「しゅ？」

大人「（つ、つぼみ・・・）」

つぼみは何とか誤魔化そうと急いでポプリの口調を真似していく・・・それに大人は冷や汗をかく・・・更にいつきも合わせる様にポプリを人形であるとアピールするようにしながら

いつき「よ、喜んでやらせてもらうよ」

つぼみ「すす、凄いですいつき!!!」

えりか「わぁーあ、アタシ達そう言うの1回やってみたかったんだよね」

ななみ「ありがとう!!!」

るみ「やったあ!!!」

シプレ&コフレ「しゅっ!!!」

大人「（はあく何とか誤魔化せた）」

つぼみ達の苦労を余所にシプレ達はガッツポーズを取る・・・仕方なく6人は今度の土曜日のに人形劇をすることとなった・・・

大人「劇かあく・・・物語はどうしよう？」

つぼみ「そうですね」

シプレ「プリキュアを主役にするのはどうですう!？」

大人「お前達それがしたかったのか・・・分かった・・・じゃそうしよう。敵の玩具とかは俺が用意する・・・須藤さんに貰ったのがあるからね」

えりか「りょーかいーじゃ大人さんに敵は任せるね」

大人「俺が敵の役ですか?・・・はあく」

大人は貧乏くじを引いたなとため息をつくのが仕方ないと今日の所は帰宅する・・・そしてあつという間に時間は流れて土曜日・・・

大人「はあくとうとうこの日が来てしまったか・・・」

つぼみ「頑張りましょう!!!」ところで大人さんが持って来たと言う敵の玩具と言うのは・・・それですか？」

大人「うん。須藤さんから貰った奴・・・子供には怖すぎるかな？」

えりか「そんな事はないと思うけど・・・それ蟹？」

大人「うん・・・前にマスクドライダーシステムに蟹が考えられたんだって・・・それで前に出た金色の蟹のワームをモデルにして考えられ完成イメージだったんだと・・・そしてコレがモデルになった蟹のワームのフィギュア。」

いつき「蟹・・・ライダーに見えないね」

えりか「なんか弱そう・・・」

大人「言えてる・・・たしか名前がシザースだがジーザスだからそんな名前だった気がする。」

大人は前に須藤に貰ったマスクドライダーの企画イメージとして造られたフィギュアを持ってきた。その中でも一番敵に見えてなお且つ子供が怖がらない奴を選んだらこの金色の蟹のライダーの模型となった・・・それは左手にハサミ型の武器を持ちベルトは何故か蟹のエンブレムが描かれていたのだった。名前は確か・・・シザース？

そして会場の準備が出来たようで部屋の会場からCDラジカセから歌が流れる。それと同時に子供達の声も響くのだった・・・

大人「お、どうやら準備が出来たみたいだね」

つぼみ「緊張してきました」

えりか「さあ出番だよ!!!」

つぼみはこう言う事に慣れていないのか緊張した様子だったがえりかがそれを解すようにつぼみに話しかけると4人は中に入る。すると園児達の拍手で迎えられる・・・そして全員位置につく。

つぼみ「きゃー!!!」

いつき「た、助けてくれー」

先ずはつぼみ達が用意した男の子と女の子の人形が助けを求める声を上げる・・・それに合わせ敵役である大人のシザースが姿を現す。その後に金色の蟹型ワームの模型も姿を現す

大人「ふーっふふっ!!!誰も助けになど来ませんよ。はーははははっ!!!」

大人「キシヤアーーーーーボクはトマトなんて大嫌いだあ!!!!!!  
キシヤーーーーー!!!!!!キシヤーーーーー!!!!!!キシヤ  
ーーーーー!!!!!!」

大人は始めて見るとかなり敵役がはまり役になったようでのりのりで敵役を演じる。その勢いに園児達は少し怖がってしまった。

つぼみ「大人さん・・・迫力ありすぎです」

えりか「というかノリノリだ・・・」

ゆり「ふふっ」

大人の迫力ある演技につぼみ達も徐々に楽しくなっていく・・・そして此処で主役である妖精たち演じるプリキュアの登場である。

コフレ「ええい悪者め」

シプレ「止めなさいです」

大人「現れましたねプリキュア。今日はこの私が相手です!!行きなさいデザトリアン!! キシヤーーーー!!キシヤ、キシヤ!!!!!!

園児達「プリキュアがんばれ!!プリキュア負けるなあ!!」

デザトリアンなんてやつつけちゃえ!!」

コフレ「マリーーндаイブ!!」

ポプリ「サンフラワーイージス!!」

大人「キシヤーーーー!!」

徐々に盛り上がりを見せるプリキュア劇場。だが一人だけ玩具箱で遊んでいる園児がいるのだった・・・此処の保育園の先生であるのりこはその子にも劇を見る様に言おうと近づく

のりこ「ヒロ君も近くで見たら?」

ヒロ「あんなの子供ほくてつまらない」

ゆり「もしかして怪物が怖いのかしら?」

ヒロ「ち、違う!!!」

ゆりはちよつと意地悪をするようにそう言つとヒロはムキになって劇の方へと走る



のりこ「ヒロ君が素直に言う事聞くなんて・・・」

のりこは驚いていたあのやんちゃなヒロくんが素直になるなんて・・・ゆりのリーダーシップとでも言うべきものに驚きが隠せなかった・・・

シプレ&コフレ&ポプリ「えー！ーい！ー！！！！！！」

大人「ぼわわわわ~~~~ん・・・覚えていなさい！！とおう！！！！！！」

大人はシザースの人形を後ろに飛ばして逃げる演技をする。これにより自分の出番は終わった。

シプレ&コフレ&ポプリ「悪者は私達が許さないです！！！！」

劇の最後のセリフを聞くと園児達は感動して拍手喝采が起こるのだった。

つぼみ「大成功みたいです！！」

えりか「だね！！」

大人「・・・以外にこう言うの楽しいかも」

いつき「すっかりはまっちゃいましたね大人さん？」

大人「え？・・・うん」

ステージの後ろでつぼみ達は自分達の劇が大成功した事に喜びを感じる・・・特に大人は敵役が相当楽しかったらしくいつも以上に機嫌の様子だった。此処でゆりはエンディング曲を流すと人形を動かしてダンスを始める。それに園児達はノリノリであり曲に合わせてながら身体が動く・・・

ゆり「皆も一緒に踊っていいのよ」

園児「うん！！！！はははは」

つぼみ「皆ノリノリです！！！！」

大人「だね」

のりこ「あの私よりよつぼど先生みたい・・・それに比べて私は・・・」

のりこはゆりの統率力に一步引いてしまうのだが自分と比べてしま

う……自分は彼女と比べると何もできない……その劣等感が心の花をしおらせる事になるのだった

そして時間は流れて全員でお昼を食べることとなった。

一同「いただきまあ〜す」

つぼみ「おいしいですね」

るみ「うん!!」

全員弁当を食べながらワイワイガヤガヤと話をしながら食べるこつ言つのもたまには悪くない……と大人は思う。だが園児達のパワーは食事中も元気にあふれているためのりこ先生はそれに対応するためにあつちこつちに走る。

つぼみ「先生はお昼もゆつくり食べられないんですね〜」

のりこ「いつもの事よ。でも本当は彼女みたいにしつかりしないといけないのに」

のりこは不意にゆりの方を見る。ゆりのいる所の園児達は大人しく弁当を食べている……どうやら自分の力をゆりと比べてしまっているらしい……

大人「ああ〜こらこら、ちゃんと座つて……ある人のおばちゃんがついていたぞ〜（ちゃんと御飯を食べないと大きくなれない）つてね。今は御飯を食べよう」

園児「はあ〜い もぐもぐ」

大人「いい子だ 食べた後は沢山遊ぼうな」

大人もわんぱく園児達を大人しくさせようと天道の教えを天道が言っていたみたいに園児達に教える。すると園児達は納得したかのよう。つぼみはそんな大人の姿を見ると……

つぼみ「（大人さんつて以外に子供好きなんですね……私も小さい頃はあんな感じだったのかな？）」

つぼみはそんな事を思いながらるみと楽しい食事の時間を満喫すると……

ヒロ「ミカン魔人だぞ」

のりこ「もうヒロ君！！そんなことしちゃ」

ヒロ「わあ〜い」

コウタ「ボクもやるう〜！！」

ヒロがミカンを使つて遊び出すとそれに便乗してコウタという男の子がもはしやぎ始める。そのせいで女の子にヒロがぶつかつてしまいい女の子が泣きだしてしまふ。そのりこが先生として止めようと声をあげよう立ち上がるのだが・・・

大人「こらあ！！止めるんだ。大丈夫？びっくりしたね。よしよし」

大人が二人の男の子を止めると泣いている女の子に寄り添い泣きやませる。そして大人は真剣な顔をして二人を叱る。

大人「二人ともよく聞いて・・・ある人のおばあちゃんが言っていた。（男してはいけない事が2つある。女の子を泣かす事と食べ物を粗末にする事）だつてね・・・ほら二人ともこの子に謝つて。それと遊びは御飯を食べてからだよ。」

ヒロ「はあ〜い。ゴメンなさい」

コウタ「ゴメンね」

のりこ「あの二人を大人しくさせちゃうなんて・・・私先生なのに何もできないなんて」

ヒロは反省したように大人にそう言つたと女の子に謝る。その姿を見たのりこはまた自分が何も出来なかつた事に自分の無能さに更に思い知らされることなつた・・・

場所話変わり砂漠の使徒のアジト玉座の間

サバーク「サソリーナを失う事になるとは・・・」

クモジャキー「アイツは最期までよう頑張つたぜよ！！」

コブラージャ「やはりハートキャッチミラージュのパワーは凄まじいかと」

クモジャキーは拳を震わせながらサソリーナの事を思い出すように

そう言う。

サバーク「デューン様の到着が近付いているその前に我々の手で何としてもプリキュアを始末するのだ」

コブラージャ「はっ！！！！クモジャキー？」

クモジャキー「サソリーナの仇はこのクモジャキーが取るきハートキャッチミラージュなど木っ端みじんにしてくれるぜよ！！」

クモジャキーはいつも以上に気迫にあふれた表情で表情でその場を後にする……

その頃保育園では昼寝の時間が来たようで全員が熟睡しているのだ。つたがのりこは大人が持ってきた蟹の玩具を見ながら自分の無力さをかみしめる事になった……。だがそこにクモジャキーが近づいてくる

クモジャキー「丁度いい所にいたぜよ」

のりこ「ど、どなたですか？」

クモジャキー「俺は砂漠の使徒の大幹部クモジャキー！！その弱ったところの花でプリキュア度もおびき寄せてもらおうかあ！！！！このころの花よで手くるぜよお！！！！」

のりこ「いやぁーーーーっ！！！！！！！！！！」

クモジャキー「デザトリアンのお出ましぜよお！！！！」

のりこはこのころの花を盗られてしまい水晶玉に封印されてしまう。そして近くにあつた蟹の玩具と融合させられて蟹型のデザトリアンを召喚する。

デザトリアン「キシャーーーー！！！！！！！！！！」

つぼみ「！？……デザトリアン！！！！」

大人「一体誰が？……」

コフレ「このころの花を盗られたのはのりこ先生です」

えりか「すぐに変身しよう」

ゆり「子供達は私に待させて」

つぼみ「お願いします」

大人「よし・・・いくぞ！！！！」

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう！！！！」（ですっ&でしゅ）」

つぼみ&えりか&いつき「プリキュア・オーブンマイハート！！！！」

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム！！！！」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン！！！！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪花キュアサンシャイン！！！！」

3人「ハートキャッチプリキュア！！！！」

大人「変身！！！！」

電子音「H E N S I N ! ! ! !」

カブト「光を支配せし太陽の神仮面ライダーカブト！！！！」

つぼみ達はプリキュアに変身して大人はカブトに変身してでデザトリアンに向かっていく。

カブト「保育園に被害が及ぶのはマズイ・・・皆パワーを抑えて戦うぞ！！！！」

ブロッサム&マリン&サンシャイン「はい！！！！」

クモジャキー「現れたな・・・俺はサソリーナのようにはいかんぜ

よ。今日こそ目にモノ見せてやるぜよ！！！！」

デザトリアン「キシヤアーーーー！！！！！！！！」

カブト「はっ！！！！カブトクナイガン！！！！」

サンシャイン「はあああああああ！！！！！！！！！！はああっ！！！！」

ブロッサム「たああああああっ！！！！！！！！！！」

カブトが先ずクナイガンの銃撃でデザトリアンを怯ませるとそのままサンシャインが向っていきパンチのラッシュそして最後にキックでデザトリアンを空中に飛ばす。そこにブロッサムが回り込んでいき後ろからのキックでデザトリアンを保育園のグラウンドに叩きつけていくがこのままでは衝撃が走る。ゆりは咄嗟にプリキュアの種を取りだすとバリアを張って衝撃波を防ぐ

カブト「だから・・・パワーをセーブしろって！！！！」

ブロッサム「すみません・・・」

カブトはパワーをセーブするようにもう一度全員に言い聞かせる。今は場所が良かったらがいいものを……。しかし大人は正直焦っていた……。この場では鎧を飛ばすキャストオフも出来ない……。何とか場所を移動しなければと思ったのだが此処でデザトリアンのこころの声が……

デザトリアン「子供達がカワイイ……。でももっと言う事を聞かせなくっちゃ……。今のままの私じゃだめ……。どうやったらあの子みたいになれるの？……。どうやったら先生らしくなるの？」

ゆり「……。デザトリアンみなさい！！！」  
デザトリアン「キシヤア？」

るみ「うわあ〜ん……。のりこ先生何処お〜？」

はるか「のりこ先生〜怖いよ〜」

園児「のりこ先生〜！！！」

ゆりは唐突にカーテンを開けるとそこにはのりこの名前を呼びながら泣き叫ぶ園児の姿が……。その姿にデザトリアンは動きを止めてしまふ……

ゆり「聞こえるでしょ？目覚めた事もたちが真っ先に叫ぶのは大好きなのりこ先生の名前なの！！！貴女の代わりだ何処にもいない。それなのに自分を見失ってどうするの！！！」

その言葉にデザトリアンは戸惑い困惑する……。クモジャキーはデザトリアンに攻撃を指示するがデザトリアンは動かない……。そして此処で保育園の中からヒロが出てくる。

ゆり「ああっ！！！」

カブト「はっ！！！！危ない……。戻れえ！！！」

ヒロ「怪物め！！のりこ先生をどこに隠したんだよ！！！」

ヒロはカブトの制止も聞かずにそのままデザトリアンに小さい拳でパンチをしていきながらそう叫ぶ……。そしてそれに続くかのように園児達がデザトリアンに向いのりこ先生を返せと向っていく……。カブト「皆……」

ブロッサム&マリリン&サンシャイン「……………」

ゆり「子供達の声信じて!!皆のりこ先生が大好きなの!!!」  
るみ「のりこ先生!!!」

はるか「のりこ先生!!!」

ヒロ「のりこ先生を返せえ!!!!!!」

デザトリアン「キシヤ・・・」

デザトリアンはゆりと園児達の声を聞くと力を失ったかのようにだらんとする・・・クモジャキーはそれに業を煮やし・・・

クモジャキー「ええい!!!なんちゅう何弱なデザトリアンぜよ!!!」

カブト&ブロッサム達「!?!?」

クモジャキー「闇に沈みダークな心の支配されるぜよダークブレ  
スレット!!!!!!」

クモジャキーが合体するとデザトリアンは強化されて凄まじい形相  
に変化する・・・このままでは危険すぎる・・・

ブロッサム「此処じゃ危険です。人気のない所へ行きましょう!!!」  
マリン&サンシャイン「うん!!!!!!」

カブト「ゆり・・・子供達を頼んだぞ」

ゆり「うん・・・」

ブロッサム&マリン&サンシャイン「はああつ!!!!!!」

カブト「とう!!!!!!」

クモジャキー「逃がすかあ!!!!!!」

カブト達はこのままでは園児にも被害が及ぶと思いきその場からジャ  
ンプしてクモジャキーをおびき寄せる。

カブト「キャストオフ!!!!!!」

電子音「CAST OFF!!!!!! CHANGE - BEETLE!  
!!!!!!」

サンシャイン「えい!!!!!!はああつ!!!!!!」

カブトは此処で一気にケリを付けるとキャストオフしてライダーフ  
ォームにチェンジする。それに合わせる様にブロッサム達は散会す  
る。そして先ずはサンシャインが巨大化した蟹の身体にパンチをキ

ツクを放つが蟹だけに防御力は相当高い・・・

ブロッサム「たあつ!!!」

マリン「はあああつ!!!」

続いたマリンが後ろからブロッサムが前方から挟み撃ちでのケリを放つのだが手応えがない・・・

クモジャキー「その程度の攻撃なんざ効かんぜよ!!!」

ブロッサム「きゃあああつ!!!」

マリン「わあああつ!!!」

サンシャイン「大丈夫?」

二人はクモジャキーの反撃を受けて飛ばされてしまう・・・そこにサンシャインが駆け寄る。

カプト「クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK-UP!!!」

カプトは今度は自分の番だとクロックアップでの光速移動でクモジャキーに向かいパンチとキックの光速ラッシュを放つのだが何度やっても手ごたえが感じられなかった・・・

カプト「なんて防御力だ・・・ならライダーキック!!!」

電子音「RIDER-KICK!!!」

カプトはライダーキックを放つのだがそれすらも蟹の鉄でガードされてしまう

カプト「そんな・・・うわあああああつ!!!!!!」

ブロッサム「カプト!!!大丈夫ですか?」

カプト「ああつ・・・だが奴の防御力は凄まじすぎる・・・どうすれば・・・」

そのま振り回される鉄に飛ばされてしまうカプト・・・なんとか着地して体勢を立て直すのだがその直後に蟹の口から泡が発射される・・・そしてこの泡はただの合戦ではなく直撃したブロッサムを大爆発を起こして4人は飛ばされてしまう。

4人「うわあああああああつ!!!!!!!!!」

4人は気に叩きつけられてしまう・・・その隙を逃がすものかとク



モジャキーが向ってくる。このままでは……4人はそう思ったその時突如光弾がクモジャキーに直撃する……そうムーンライトだ。サンシャイン「ムーンライト!!」

ムーンライト「待たせたわね……いい口から泡を出すときに隙が出来る……そこを一気に狙うわよ!!」

ブロッサム&マリリン&&サンシャイン「はい!!!!」

カブト「了解!!。ハイパーキャストオフ!!」

電子音「HYPER - CAST - OFF!! CHANGE - HYPER - BEETLE!!」

カブトは此処でハイパーフォームになるとパーフェクトゼクターのガンモードを構えていきザソードゼクターを呼び出して合体させる。そして先陣を切ったムーンライトがデザトリアンに向かう

ムーンライト「ふっ!!!!!!はああああああ!!!!!!!!!!」

クモジャキー「己え!!!!吹き飛ばされたいかあ!!!!」

クモジャキーは泡を出そうとするがそこをムーンライトがその隙を逃がさずキックで逆にクモジャキーを吹き飛ばすそして泡が発射されるがムーンライトはそれを回避する。

サンシャイン「サンフラワーージュス!!!!」

サンシャインがサンフラワーージュスで泡を防ぐと後ろいいいたブロッサム、マリリン、ハイパーカブトが宙に舞う

ブロッサム「ブロッサムシュート!!!!」

マリリン「マリンドライブ!!!!」

ハイパーカブト「ハイパーウェイブ!!!!」

電子音「HYPER - WAVE」

先ずはブロッサムがエネルギー弾を放っていきクモジャキーを怯ませる。そしてマリリンの超フルパワーのキックをクモジャキーに放っていく。クモジャキーは負けるものかと向かっていくがマリリンのキックが見事デザトリアンの身体に命中していきそのまま地面に叩きつけられる。クモジャキーは流石によるめくのだがそこにハイパーカブトの追撃のハイパーウェイブがクモジャキーを捕える。ハイパ

「ウェイブは効果は敵の動きを封じると言うものだったのだ。  
クモジャキー「ぐおおおっ!!?・う、動けんぜよお!!!」

ハイパーカブト「今だ!!!」  
ブロッサム「はい!!!」

ハイパーカブトの声と共にブロッサム達はスーパーシルエットに変身するべくハートキャッチミラージュの力を解放する。

ブロッサム&マリリン&サンシャイン&ムーンライト「鏡よ鏡プリキュアに力を!!!!!!世界に輝く一面の花!!!!ハートキャッチプリキュア・スーパーシルエット!!!!!!」

ブロッサム&マリリン&サンシャイン&ムーンライト「花よ咲き誇れ!!!!プリキュア・ハートキャッチオーケストラ!!!!」

ムーンライト「ふん!!!!!!」

サンシャイン「はああっ!!!!!!」

マリリン「たあああー!!!!!!」

ブロッサム「たあああー!!!!!!」

ブロッサム&マリリン&サンシャイン&ムーンライト「はあああああああああああ!!!!!!」

クモジャキー「くっ!!!!!!いかんぜよっ!!!!!!」

クモジャキーは浄化される前にデザトリアンから脱出する。そして女神の上でデザトリアンは浄化されていく……

デザトリアン「ぼわわわわ~~~~ん」

コフレ「こころの花を戻してあげます!!!!!!」

浄化されるところの花が出現しそれを回収して封印されたのりこに戻す。

るみ「先生?」

のりこ「!?!?……」

そしてのりこは保育園で目が覚める……目の前には心配顔で目が潤んでいる園児達がいた……のりこは自分が好くわからなかったが……園児は更に近づいていく

るみ「のりこ先生大丈夫？」

はるか「先生・・・もつとお昼寝する？」

こうた「先生何処かカラダ悪いの？」

のりこ「心配させてゴメンね・・・ヒロ君もこっちにおいで」

ヒロ「コレあげる」

ヒロは一人離れていた・・・どうやら照れくさいようだ・・・のりこのそう言われるとヒロは近づいていく・・・そして箱を渡す箱を開けると中から玩具が飛び出してのりこに当たるが・・・

のりこ「もっとう〜ビックリしたあ!!!」

のりこはそうってヒロを抱き寄せる様に自分に近づけさせる・・・

ヒロ「先生・・・ゴメンなさい」

のりこ「ふふっ・・・皆もおいで!!!」

園児一同「うん!!!」

のりこ「（みんなありがとう・・・みーんな大好き）」

のりこは園児達全員に抱かれる・・・のりこは全員にこころの中で思う・・・自分は自分らしく皆と日々を過ごさばいい・・・他人なんて関係ないとこの子達が教えてくれたのだと・・・

つぼみ「ベニバナの花言葉は（包容力）子供達を包み込む優しいこころそれを持つている自分自信を思い出したんですね」

いつき「きつとあの子達今よりもっともーとのりこ先生を好きになると思うよ」

大人「うん・・・絶対にね」

シプレ「あっ!!!心の種が生まれそうですう!!!はッ!!!プリプリプリ・・・プリリ〜ン」

コフレ「コレでまた少しこころの大樹がげんきになったですっ」

こころの種が生まれるとソレをココロポットに収める。5人は彼女の笑顔を見ながら保育園に入り園児達と一日を過ごすのだった。

そしてその頃砂漠の使徒のアジトのサバークの私室・・・

サバーク「クモジャキーもミラージュの力には敵わんか」  
マンティス「サバーク博士・・・次は我々ゼロメンバーズに出撃命令を」

サバーク「いいだろう・・・次はお前達に任せる。」

マンティス「はっ！！！！（カブト・・・次でお前達は終わりだ・・・）」

マンティスは出撃命令を受けると作戦の準備のために部屋から出る・・・そして次は自分達の番だとマンティスは意気込むのだった・・・

第3話「妖精たち劇団デビュー！？プリキュア劇団結成！！！」（後書き）

はい〜妖精たちが主役（？）の回でした。

須藤が渡した人形はモチロン・・・アレです。皆さんも大好きなアレです・・・

さて次回はゼロメンバーズの最登場&ゆりのラブレター回を書いていこうと思います。

次回もお楽しみに

#### 第4話「ゆりへのラブレター前篇」(前書き)

妖精たちのプリキュア劇は大成功したのだが保育園の先生であるのりこがデザトリアンと化してしまう。だが園児達の思いが先生に届き大人達は彼女を救う。

そして園児とのりこの絆はさらに深まっていくのだった。その一方でゼロメンバースが再び動き出すのだった……

#### 第4話「ゆりへのラブレター前篇」

つぼみ&えりか&いつき「ああ〜．．．．．」

ゆり「．．．．．」

つぼみ&えりか&いつき「はあ〜．．．．．」

いつも通り植物園の花は綺麗に咲いている。つぼみ達は薫子に頼まれて花の手入れをしていたのだがいつもとは雰囲気が違うのだった。．．．と言つのもつぼみ、えりか、いつきの3人がゆりの方を見ていて百合の仕草を真似しているのだった。．．．そしてそれに妖精達がどうしたんだと言つ様な顔をしてつぼみ達の方に近づいていく。．．．

シプレ「なにしてるんですう？」

ポプリ「皆なんか変でしゅ」

つぼみ「あ、ゆりさんの真似を」

ゆり「私の真似？．．．．．どうして？」

ゆりは何で自分の真似なんかをと3人に問いかけるそれにえりかが照れくさそうな顔をしながら．．．

えりか「大人の女性おとなって感じがしてかつこいいんだもん」

いつき「お花の水やり一つとっても動きが繊細で優雅で」

つぼみ「そうなんです！はあ〜憧れちゃいます〜」

ゆり「そうかしら？自分じゃ良く解らないのだけど」

えりかのセリフにつぼみといつきも続いてそう言う。中学生という立場からすれば高校生のゆりの行動一つ一つが大人の雰囲気おとなを漂わせているのか3人にとってはゆりの行動一つ一つが憧れなのだろう。．．．だがゆりにとっては普段と何も変わらない行動の為理解が出来なかつたのだ。．．．そんな彼女達を外から見る小さな影があつた。大人「こんにちは〜．．．？．．．．．どうしたんだ？3人とも」

つぼみ「あ、大人さんこんにちは」

するとそこに大人が来た。何やらいつもと違う雰囲気おとなに思わず4人

に問いかけてしまうのだった。．．．そこに薫子が代わりに答える  
薫子「3人ともゆりちゃんの仕草の真似をしてるのよ」

大人「はい？」

大人は更に困惑するのだった。その姿を見て4人が思わず笑うのだ  
った。そのせいで大人は更に困惑するのだった。．．．

大人「取り合えず俺も手伝いますよ。今暇ですから。」

薫子「ありがとう。じゃあうちの花をお願いね」

大人「了解です」

大人も折角来た事だしと思いい花の手入れの手伝いをする事にしたそ  
して数十分後。．．．

大人「ふう〜コレ全部か。．．コレはコレでかなり大変だな」

やっと頼まれた範囲の花の手入れが終わり一息つく大人に薫子の声  
が聞こえてきた。．．．

薫子「皆お手伝いご苦労さま」

大人「おお〜待ってました」

つぼみ「わあ〜美味しそうです。いただきま〜す」

えりか「おほ〜」

5人は手伝いをしてくれたご褒美と薫子がケーキと紅茶を用意して  
くれたのだ。

5人は椅子に座って紅茶を飲みケーキを食すのだが窓を見ると小さ  
な影が。．．．。

えりか「あ!」

いつき「誰がいる!？」

大人「え?。．．あ、ホントだ。．．琢磨か?それも夕?。．．にし  
ては影が小さいか。．．って何処行くの!??たく。．．」

大人の言葉を切るようにつぼみ、えりか、いつき、ゆりの4人は影  
の主の正体を知るべく外に出る。大人も外に向かう。

いつき「逃げられたか。．．」

つぼみ「いったい何だったんでしょう。．．あら?」

大人「ん?。．．あれは手紙?」



つぼみ「これは・・・」

えりか「&いつき「え？」」

つぼみ「&えりか「&いつき「ラブレター!?」」

つぼみ「&えりか「&いつき「わぁー」」

えりか「すごいラブレターだ」

大人「今時手紙とは・・・。どんだけアナログなんだ?・・・。つてゆりは先に戻ってるし・・・。おい3人とも戻るよ」

つぼみ「&えりか「&いつき「はぁ〜い」」

大人の声を聴くとつぼみたちも植物園の中に戻る・・・そしてケーキを食べ終えた後もつぼみたち3人はラブレターを見ながら何やら騒いでいるのだった・・・

つぼみ「私ラブレターって初めて見ました。」

いつき「差出人の名前も当て名も書かれていない」

えりか「とりあえず開けてみる」

大人「いや・・・それはまずいでしょ」

ゆり「そういうのマナー違反だと思っけど?」

えりか「そうですね〜あはははははは・・・。はぁ〜ごめんなさい」

えりか「大人とゆりの言葉を聴くとハツとした顔をして苦笑いしながら謝罪をすると手紙をテーブルの上に置く・・・」

つぼみ「とりあえず植物園で預かっておきますね。・・・!?!?・・・

あれ?」

つぼみが手紙を取ろうとする前にポプリが手紙を手にとってなんと手紙を開けてしまったのだ。

ポプリ「ええ〜昔から・・・」

つぼみ「&えりか「&いつき「ああ!?!?!」」

いつき「駄目だよポプリ!?!?!」

大人「あらあ〜・・・ダメだこりゃ」

ポプリ「どうしてでしゅ?お手紙読みたいでしゅ!?!?!・・・続きを讀むでしゅ〜昔からずっとあなたが好きでした」

ポプリがつぼみ達3人の言い分を無視して手紙を讀んでしまった・・・

・3人は叫びながら耳に手を当てるしぐさをするのだがちゃっかりと内容を聴いていたのだった・・・

つぼみ「昔から・・・ず、ずーっと?」

いつき「す、すごくストレートだね」

つぼみ&えりか「うんうん」

大人「ちゃっかり聞いてるし・・・(女の子ってこういう話題は好きだよなあ〜)」

大人のツツコミを無視して更に3人はラブレターの事で盛り上がるのだった・・・大人はそんな3人のテンションの高さにため息をつきながらも紅茶を飲む。

つぼみ「もしかして私宛てだったりしたらどうしましょう」

えりか「つぼみはないでしょ〜」

つぼみ「?」

えりか「だって昔からって書いてるんだもんつぼみは春に引越してきたばかりなんだからさ」

つぼみ「あっ!!・・・ううう〜」

大人「それはそうだな。確かにつぼみは除外だね」

つぼみ「ひ、大人さんまでえ〜」

ポプリ「きつと、いつきでしゅ!!!」

いつき「ええ?」

ポプリ「だっていつきはモテモテでしゅ!!!」

いつき「あはは〜」

えりか「女の子にね」

いつき「うっ」

つぼみ&えりか&いつき「あははははは」

えりかのセリフにいつきは一瞬ハツとした顔になるのだがすぐに笑って和むそして今度はえりかが自慢げになると・・・

えりか「これ・・・とうとうきちゃったかな!!あたしの時代が」

つぼみ「あ!!もしかしてこれゆりさん宛てだったりして」

えりか「ってスルーかい!!」

大人「つぼみ・・・」

えりかの言葉を軽くするーしてつぼみはそう言ってゆりの方を見つめる。えりかは無視されて拗ねた顔をしてさういう。大人もあきれたようにさう言う。ゆりはティーカップを置くと少し考え込んだ顔をして立ち上がる。

ゆり「私・・・夕飯作らないといけないから。これで失礼するわ」

大人「相変わらずクールだね・・・さてと取りあえずこいつはどうするんだい？」

つぼみ「そうですねーやっぱりここで預かっておいた方が」

ゆりはそれだけ言うとさっさと帰ってしまう。残された4人はそんな彼女を見送るのだった。そして大人はこの手紙をどうするのかと3人に問いかける・・・そんなやり取りをしている中外で手紙の差出人が必死に手紙を探しているのだった・・・

？「ない・・・ない・・・ない！！！何処だあ〜？このへんなんだけどなあ〜」

大人「あ・・・」

つぼみ&えりか&いつき「あ！！！」

そろそろ時間も遅くなったので帰ることにした4人だったが先程手紙を拾った場所で少年が何かを探している・・・もしかしたらと思いい4人はSの少年に近づいていき・・・

えりか「探してるのってコレ？」

？「え？・・・わあっ！か、返せよ！！！」

つぼみ「あの〜ごめんなさい」

いつき「中の手紙読んでしまったんだ」

大人「この3人がね」

？「ええ！！！」

少年は手紙を読まれたことになんか焦っていた。普通に考えれば当然の反応だ・・・そんな彼にえりかは何に更なる質問をする。

えりか「で・・・君が好きな人って誰なのよ〜もしかしてあたし？」

？「はあ？お前らみたいなお子ちゃまには興味はないね！！！」

つぼみ&えりか「お子ちゃまあ〜!?!」

大人「2人とも落ち着いて・・・まあ〜的はいてるけど」  
つぼみ&えりか「はい!?!」

大人「・・・何でもないです!?!」

大人は2人を落ち着かせようとするのだが少年のセリフに納得した部分もあり思わずそう言ってしまうとつぼみとえりかが大人を睨む・・・大人は普段見ない2人の勢いに押されて身を縮めるのだった・・・

いつき「じゃ・・・もしかしてボク?」

?「え?」

つぼみ「ああ、この人はお姉さんです」

少年が顔を青くしたのでつぼみはいつきが女の子であることを少年に教えると少年はほっとした様子を見せる・・・

?「な、なんだそうだったのか・・・もしかしてゆり姉ちゃんの彼氏かと」

大人&つぼみ「ゆり姉ちゃん?」

?「ああ!?!!・・・」

少年は手紙の宛名の相手を思わず口に出してしまうと口に手を当てて顔を赤くする・・・どうやら手紙の相手はゆりだったようだ

えりか「もしかしてラブレターの相手って・・・」

つぼみ&えりか&いつき「ゆりさん!?!」

少年は顔を真っ赤にしたまま黙ってしまふ・・・仕方が無いので大人は少年に近付くと・・・

大人「こんなところで話すのもなんだ・・・中で話を聴こうか?」

面白くなってきたと大人もニヤけ顔になり少年をと共に植物園の中に入る。

大人「きみ名前は?」

?「・・・は、ハヤト」

大人「ハヤト・・・いい名前じゃないか!?!俺は大人。」

ハヤト「そんなこと言われたの初めてだ・・・」

大人「そうか・・・」

どうやらハヤトは同じ男である大人には素直になれるようだ・・・  
つぼみたち3人は手紙を読んでしまったことをバツが悪そうにしているが、つぼみが謝ろうとハヤトに近づいていく・・・

つぼみ「ハヤトくんラブレターの事、本当にゴメンなさい!!」

いつき「あれは事故と言うか・・・勿論ゆりさんには内緒にしておくよ」

えりか「そういうわけだからさアタシ達に洗いざらい話しちゃいなさいよ」

大人「おいおい・・・いきなりだね～えりかは・・・」

えりか「いいじゃないですかあ～・・・でゆりさんのどこが好きなの?」

いつき「つ～～」

つぼみ「えりか」

大人「はあ～」

ハヤト「誰が言うかよ!!!」

えりか「ええ～何でよ?ゆりさんの事、昔から好きだったんでしょ?」

つぼみ「もう～えりかだったら!!!」

えりか「ああ～何よ?」

つぼみは流石にこれ以上のえりかの暴走はみていられないとえりかに近づいて注意するが、えりかは詰まんなさそうに反論する・・・そこでつぼみはえりかの口に手を当てて黙らせる。

つぼみ「でも私ハヤト君の気持ちわかる気がします」

いつき「ゆりさんって僕たちから見ても憧れの存在だからね」

大人「確かに大人びて見える・・・あのクールさは魅力がある」

つぼみ「ハヤト君はゆりさんの事を昔から知っているんですか?」

ハヤト「うん同じ団地だからよく遊んでもらったんだ」

えりか「なるほどね～」

ハヤト「なあお前らはどうしてゆり姉ちゃんが最近昔みたいに明る

くなつのかか知っているか？」

えりか「えーっとそれは」

いつき「色々あったからね」

大人「・・・」

つぼみ「とにかく元気になってよかったですよね、ゆりさん」

ハヤト「うん」

大人「？」

えりかといつきははぐらかす様にそう言う・・・ゆりがプリキュアの闘いで敗れて傷ついた事・・・そしてもう一度戦う決意をした経緯をハヤトに話すわけにはいかないからだ・・・なんとか誤魔化す・・・だがハヤトは何処か寂しそうな眼をしていた・・・

つぼみ「ハヤト君？」

ハヤト「お父さんが居なくなつてから・・・ゆり姉ちゃんずっと元気なかつた・・・オレゆり姉ちゃんに何もしてあげられなかつた・・・オレが子供だつたから」

大人「それは仕方が無いんじゃないか？・・・誰だつてそう言う事はある・・・それに俺は子供とか関係ないと思うけどな」

ハヤト「関係あるんだよ！！！！・・・でも俺・・・今度こそゆり姉ちゃんの笑顔を守りたいんだ！！！！」

つぼみ「ハヤト君・・・」

ハヤトの決意に皆が感動する特にえりかは眼を化が瘦せていた・・・えりか「ハヤト君アンタ男だよ！！！！」

つぼみ「だからゆりさんにラブレターを渡そうと思つたんですね」

ハヤト「うん」

つぼみ「私たちに任せてください！！！！」

ハヤト「え？」

えりか「ゆりさんにラブレターを渡せるようにアタシ達がセツティングするよ」

いつき「ラブレターを読んでしまったお詫びに。。。ダメかな？」

つぼみ「ね！！！！」

ハヤト「え？・・・ああ・・・はい！！」

大人「（いいのかなあゝこんなことして・・・）」

大人は正直こう言う事は乗り気でなかったのだが別にいいかと思いい協力することにした・・・

翌日の明堂院学院の屋上・・・

ゆり「作戦会議？確かに次の砂漠の使徒の襲撃に備えるのは備えるのは大切な分かったわ。じゃ放課後に」

つぼみ&えりか&いつき「はい！！！！」

3人はプラン通りに事を進めるべくゆりを丘に呼ぶことにしたのだ。そしてその

丘にはすでに待機していたシプレが待機していたのだった。そしてそのすぐ後に

準備していたハヤトが割られる

ハヤト「ゆ、ゆり姉ちゃん・・・」

ゆり「ハヤト君？」

ゆりは久しぶりのハヤトの登場に驚いた表情だった・・・そんな二人の様子をコツソリとシプレ達とつぼみ、えりか、いつき、大人がいるのだった。

シプレ「あーあー聞こえるですう？どうぞ」

えりか「バッチリですどうぞ」

ゆり「久しぶりね」

ハヤト「え！？う、うん」

シプレ達は上から様子を見るのだがどうやら二人は盛り上がっていない・・・

コフレ「全然盛り上がってないですゝどうぞ」

つぼみ&えりか&いつき&大人「・・・」

すると下から4人はジェスチャーで合図を送る。もちろんゆりには見えないように細心の注意を払いながら・・・

ハヤト「！！！！・・・ゆり姉ちゃん最近ないしてるの？なんか忙し

そうだけど」

ゆり「最近？最近は・・・いろいろよ」

ハヤト「何だよ・・・オレには言えないの？」

ゆり「ゴメンなさい・・・ちよつとね」

ハヤト「それって俺が子供だから？」

ゆり「え？」

ゆりはハヤトの質問の意図が分からなかった・・・ゆりからすれば当然のことかもしれないがハヤトからすればかなりおおごとの事なのだ。

ハヤト「ゆり姉ちゃん・・・これ・・・」

ハヤトはラブレターを渡そうとするのだが・・・その前にゆりが口を開く・ゆり「ねえ覚えてる？私たちここでよく遊んだわよね・・・追いかけっこしたりかくれんぼしたりして・・・ハヤト君はよく見つかるのを待っている間に眠ってしまつて」

ハヤト「昔の話だよ」

ゆり「そう？昨日の事みたいに思いだせるわ」

ハヤトは過去の事を離されて正直面白くなさそうだ・・・そんな様子をシプレ達はつぼみたちに伝える・・・

シプレ「ハヤト君がちっちゃかつたころの話で盛り上がってるです  
う」

ポプリ「ゆりちゃんは楽しそうだけどハヤト君はつまらなそうだし  
ゆ・・・どうぞ」

えりか「思い出話はダメだつて、どうぞ！」

つぼみ「何とか話を中断させませんか？どうぞ」

えりか「あんた達、妖精でしょなんかミラクルでスーパーなパワーとか使つてさあ、どうぞ」

シプレ&コフレ&ポプリ「無茶言わないです！！どうぞ」

ゆり「ハヤト君がいてくれて良かったわ」

ハヤト「？」

ゆり「私、兄弟が居ないしょ？ハヤト君のおかげで弟が出来たみた



いで」

シプレ&コフレ&ポプリ「あああ!!」

つぼみ&えりか&いつきつぼみ&えりか&いつき&大人「ああ〜・  
・」

ゆりは全く悪気はないのだがこれはハヤトには言っではいけない言葉だった。ハヤトはゆりの事を本気で想っている故に触れたはならない部分だ。これにハヤトは耐えきれず。

ハヤト「お、オレ。オレ。ゆり姉ちゃんの弟じゃない!!」  
ゆり「ハヤト君。」

ゆりは理由が分からなかった。ハヤトを弟と想っていたのは本心だし悪気はなかった。

大人「ああ〜やっちゃったな。しゃーないオレがハヤトの様子をみてくるから3人はゆりをこの場にとどめておいてくれ。」  
つぼみ「分かりました。」

えりか「ああ〜ゆりさん鈍いなあ〜」

大人はハヤトを探すべくつぼみ達と別れるのだがハヤトを探すのはかなり手間取った。何せハヤトの行きそうな場所が見当がつかないのだから当然だ。だがやつと公園でしょんぼりしているハヤトを見つけたのだった。

大人「ここにいたか。探したよ」

ハヤト「何だよ」

大人「ゆりだつて悪気話ないんだ。仕方が無いよ」

ハヤト「そうだけど。」

大人「確かにお前とゆりは一回り近く年の差がある。でもそれは仕方が無いさ。それは変えられない」

ハヤト「うん。」

大人「でも気持ち伝えるってことに年は関係ない。違う?」

ハヤト「うん」

大人「なら。分かるだろ?」

ハヤト「大人。」

大人「うし！！じゃ戻ろうか？」

ハヤトを説得した大人はもう一度ゆりと会わせようとゆりの所に行こうとするのだがそこに・・・聞き覚えのある声が・・・  
マンティス「ヒトの心配より自分の心配をしたらどうだ？・・・カブト！！！」

大人「！！！？・・・その声はマンティス！！！」

アント「マンティスだけじゃないよ？」

ホーンド「他のメンバーが居ないのが残念ですが先ずは一番厄介な貴女から片付けて上げましょう」

モス「ハイパーゼクターを使うアンタを倒せばプリキュアの戦力も大幅にダウンだしね」

大人「・・・ハヤト逃げる！！！」

ハヤト「何言つてんだよ！！！！大人も逃げないと・・・」

大人「俺は奴を引きつける。変身！！！」

電子音「H E N S I N ! ! !」

大人はやむを得ずにハヤトの前でカブトに変身する・・・ハヤトは大人の姿に驚いてしまい固まってしまう・・・それと同時にマンティス達ゼロメンバーズが大人が変身するカブトに向かう。

カブト「くっ！！ハヤトお！！！！早く逃げるんだ！！！！ここはオレが食い止める！！！！」

ハヤト「！！！！・・・う、うん！！！！」

カブトはなんとかハヤトを逃がすとゼロメンバーズたちに立ちふさがる・・・

カブト「お前達・・・砂漠の使徒の目的を知っているのか？人間ならば止めようと思うはずだろ？」

マンティス「ふん・・・くだらねえな・・・それがどうした？」

カブト「何？」

アント「言つたよね？僕達は君たちを狩る事が目的だって・・・」

ホーンド「私たちは地球などどうでもいいのですよ・・・ただ貴方達を殺せばね」

モス「我々影のモノが生き残る唯一の手段……」

カブト「影のモノ？何の事だ？」

マンティス「さあ〜な？お前が死ぬ前に教えてやるよ!!!はあああ!!!」

ゼロメンバーズはそれぞれの武器を構えるとカブトに襲いかかる・  
・カブトは一人でも恐れることなく立ち向かう!!!。

そここのころ逃げたハヤトはゆりにこの事を伝えようとさっきの丘に戻っていた・・するとそこにはゆりだけではなくつぼみ達もいた・  
・・・・

ハヤト「はあ、はあ、はあ、ゆり姉ちゃん!!!」

ゆり「ハヤト君・・さっきはゴメンなさい・・・貴方が嫌がっているのに気がつかずに・・」

ハヤト「そ、そんなことは今はいいよ・・ひ、大人が変な4人組に襲われてるんだ!!!」

ゆり「なんですって!?場所はどこの？」

ハヤト「近くの公園だよ・・」

つぼみ「まさかゼロメンバーズ!？」

えりか「いくら大人さんでもあの4人はやばいよ!!!早くアタシ達も助けにいかないよ」

いつき「すぐに僕達も行こう!!!」

ゆり「ええ。ハヤト君は家に戻ってて。話はそれからね」

ハヤト「え!？ちょ、ゆり姉ちゃん!??」

つぼみ達は早く大人の援護に向かうべくハヤトにそれだけ言うと急いで公園に向かう・・ハヤトは一人取り残される・・わけが分からないのだが自分には何もできないと他の大人を呼ぶべく走る。

カブト「くっ!!!はあああ!!!」

マンティス「ふん・・そんなもは効かんぞ・・マンティスストーム!!!」

カブト「!?・・・あの鎌そんな出鱈目な事も・・・」

カブトはクナイガンの乱射でマンティス達に遠距離攻撃を挑むの・  
・というのも既にマンティスにキャパシティいダウンを使われてい  
るためクロックアップは使えないのだ・・・だがそれもデスサイズ  
の起こす突風でかき消されてしまった・・・更にマンティス達は  
それぞれキャパシティアップでパワーアップすると先ずはマンティ  
スがデスサイズとデスシックルを合体させて長刀の武器デスハン  
ターにするとそのまま風の力をデスハンターに宿して大きく振り回  
す・・・

マンティス「食らいな・・・マンティスデストロイヤー!!!」

カブト「ぐあああああああああつ!!!!!!!」

カブトに太刀風カマイタチを發動させてカブトのカラダを無数に切り刻んでい  
く・・・さらに今度はアントがアリの特性を生かして地中に潜ると  
カブトを惑わす・・・カブトは何とかアントを探そうとするのだが  
・

アント「アントボルテック」

カブト「ぐううつ!!!?」

アントの武器のアントフアング秘義であるアントボルテックのエネ  
ルギー覇がカブトに直撃する・・・だが更に追撃は続き今度はホー  
ンドが・・・

ホーンド「行きますよ。ホーンドビュート」

カブト「!!!?・・・だがこんなもの!!!」

ホーンド「それはどうですかね?ふん!!!」

カブト「がああああつ!!!?・・・こ、これは電撃?・・・ぐう  
ううつあああああつ!!!!!!」

ホーンドのホーンドロッドのカミキリムシの刃がカブトを捕えると  
動きを封じて電撃を放つ・・・更にモスがモスサーベルの羽の部分  
を広げてカブトに鱗粉の様なモノを浴びせるとカブトは動きが封じ  
られてしまう・・・

カブト「はあ、はあ、はあ・・・な、なんて強さだ・・・がああ

っ！！！！？」

カブトは両膝をついて動けなくなる・・・そこにマンティスがカブトの肩にかかと落としを浴びせるとカブトに近付き・・・

マンティス「この世に”俺は二人も” いらぬお前が消え俺が生き残れば良いのだ」

カブト「そ、それはどういう意味だ？・・・あああ」

マンティスがカブトにデスハンターを近づけてトドメを刺そうとしたその時！！

？「止めなさい！！！」

？「アタシ達の仲間をこれ以上好きにはさせない！！！」

声の方をみるとそこにはつぼみ、えりか、いつき、ゆり、更には知らせを聞いた琢磨達もかけつけたのだ7人が立っていた・・・全員凄まじい怒りの表情だった・・・

カブト「皆・・・」

マンティス「来たか・・・プリキュア・・・それにガタック達も」

ホーンド「ふん・・・手間が省けたというものですね・・・ワザわざ

貴方達から出向くとは」

アント「なあ〜んだ・・・詰まんないなあ〜」

モス「ふふっ・・・」

つぼみ「私達の大切な仲間によくもこんなひどい事を・・・わたし堪忍袋の緒が切れましたあ！！！！」

「

えりか「たった一人で戦ってた大人さんをそんな目に合わせるなんて・・・海より広いアタシのこころも此処らが我慢の限界よ！！！！」

特につぼみとえりかの怒りは臨界点を超えたらしく拳が震えていた・

・・・全員変身アイテムを構える。

琢磨&傑&夕「変身！！！！」

電子音「HENSIN」

琢磨&傑&タ「キャストオフ!!!」

電子音「CAST-OFF!!!」

電子音「CHANGE STAG-BEETLE&BEETLE & BUTTERFLY」

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう!!!!!!(ですつ&でしゅ)」

つぼみ&えりか&いつき&ゆり「プリキュア・オープンマイハート!!!!!!」

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪花キュアサンシャイン!!!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト」

4人「ハートキャッチプリキュア!!!!!!」

7人は変身してすぐにマンティス達に突進するとカブトを救出する・

・カブトは既にボロボロであるが立ち上がると・・・

カブト「ありがとう皆・・・うつしゃあ!!!此処からが俺達の反撃だあ!!!!!!」

カブト達はゼロメンバーズ達と睨み合う・・・此処からが俺達の反撃のターンだとも言わんばかりに・・・

#### 第4話「ゆりへのラブレター前篇」(後書き)

今回はコブラさんは登場させませんでした・・・だってゼロメンバ  
ーズが空気になるんだもんさあ^^;

次回ゼロメンバーズの弱点が明らかに・・・

次回もお楽しみに

第5話「ゆりへのラブレター後篇」（前書き）

ゆりへのハヤトの気持ちに感動したつぼみ達はハヤトがラブレターを渡せるように取り計らう事にした。しかしゆりの鈍感さのせいで作戦は失敗してしまう・・・ハヤトを励ましイにいった大人の前にマンティス達が現れる・・・



## 第5話「ゆりへのラブレター後篇」

カブト「はぁあつ!!!うらぁあぁあ!!!」

ブロッサム「たぁあぁあ!!!」

マンティス「ちっ!!!?・・・食らえマンティスデストロイヤー!!!」

カブト「危ない!!!」

ブロッサム「はぁあつ!!!」

この前の戦いのときと同じようにカブト、ブロッサムvsマンティス ガタック&マリンスアント ダークカブト&サンシャインvsホーンド フェアリー&ムーンライトvsモスという風に別れて戦うこととなった・・・だがゼロメンバーズは既にキャパシティアップを発動したため猛攻が激しいが一つ疑問に思う事があった・・・カブト「(何故キャパシティダウンを発動しない?・・・俺は既に受けたがブロッサムはまだ能力が使えるはずだ・・・なのに何で使わない?・・・使えない理由があるのか・・・)」

ブロッサム「やぁあぁあつ!!!」

マンティス「ふん!!!遅いんだよ!!!」

カブト「はぁあつ!!!」

カブトはそんな疑問を抱いていた・・・何でもう一度キャパシティダウンを使わないだと・・・アレを使えば戦いを自分達の有利に進めることなど容易い筈なのに・・・何故だ?何か制約でもあるのか?・・・だとすれば何なんだ?そんな事を考えながらもマンティスの責めの勢いは更に増していく・・・だが何処か焦っているようにも見えた・・・

マンティス「ちっ・・・」

カブト「(奴は何を焦っている?・・・さっき俺と闘ってたていた時の余裕は何処に行ったんだ?・・・もしかしたらキャパシティダウンは一度の戦闘でしか使えないのか?・・・だがそれだけで焦る理

由になるだろうか？・・・他に考えられるのは何だ？・・・余裕・  
・余力・・・エネルギー・・・」

カブトは思考をフルに活用しながらもマンティスの猛攻にブロッサムと共に応戦するがマンティスはなぜかカブトを執着的に攻撃して  
い来る。そしてカブトをデスハンターで捕えると・・・

マンティス「カブト・・・貴様を倒す・・・それが俺に与えられた  
運命さだめ！！！」

カブト「どうしてそこまで俺を・・・何故だ！？」

カブトの身体にデスハンターの刃が迫る・・・だがそこにブロッサムが援護に入る。

ブロッサム「はああああつ！！！！大丈夫ですか！？」

カブト「ああ・・・」

マンティス「己えゝ邪魔をするなあ！！！！」

ブロッサムの援護にとつてカブトは救出される。マンティスはブロッサムを睨みながらも二人に向かう

アント「はあああつ！！！！」

ガタツク「！！・・・地面に潜った！？モグラかよ！！！！」

マリソ「きゃあああつ！！！！」

ガタツク「マリソ！！！！」

アント「ふふつゝ油断は大敵だよ？・・・それにボクはアリだ」

ガタツク「くつ！！ちよこまかと・・・」

マリソ「素早すぎ！！！！」

ガタツクとマリソはアントのアリの能力を活かした戦法に翻弄されてしまう・・・ガタツクとマリソは必死にアントの動きを見極めようとするのだがアントは素早い・・・そしてアントは地中からガタツクの脚を捕えてしまう・・・

ガタツク「なっ！？・・・」

アント「キャパシティダウン！！！！」

アントはガタツクにキャパシティダウンをあてて能力を無力化して

しまっ……ガタツクはしまったと思つた時には光を浴びてしまつていた……そしてアントは地上に上がるとそのままガタツクの首にアントファンクの刃を挟む……そして近づき……  
アント「君を倒さなければ……ボクはボクでいられない……だからボクは必ず君を倒す……!!」  
ガタツク「ぐうっ!!!!……お前がお前でいられない?」  
このままではガタツクの首を千切られてしまっ……だがそこにマリンの攻撃が……  
マリン「マリンシュート……!!」  
アント「!?……ちっ!!!!」  
ガタツク「サンキュー……マリン」  
マリン「危なかつたね……大丈夫?」  
ガタツク「ああ……何とか首は繋がつてる」  
アント「……あと少しでつてとこで邪魔しないでくれるかな?」  
アントはそれだけ言うつとマリンも視野に入れて向つていく。

ホーンド「だりやああ!!!!はあああつ!!!!」  
ダークカブト「ふんっ!!!!うおおおつ!!!!」  
サンシャイン「やああああつ!!!!はあああつ!!!!」  
ホーンドとダークカブト&サンシャインとの戦いも凄まじさを感じられた……ホーンドのホーンドロッドの接近戦モードとカミキリムシのツノをモチーフにした刃の部分を伸縮自在に操るホーンドビュートの遠距離戦モードを巧みに操りダークカブトとサンシャインの攻撃を巧みに回避しながら攻撃していく……  
ダークカブト「はあ、はあ、はあ……接近戦はロッド……遠距離はビュート……全く隙がない……」  
サンシャイン「どうすれば……」  
ホーンド「簡単な事です……私に今すぐ倒されなさい!!!!」  
ホーンドは先ずダークカブトを片付けようとホーンドビュートでダークカブトを締め上げる……そして地面に何度か叩きつけていき

ダークカブトを動けなくすると自分の方に近づけていくと・・・  
ホーンド「ダークカブト・・・貴方が私のどちらかが消えなければ  
ならない・・・それは避けられない宿命・・・」

ダークカブト「お前か俺のどちらかが消える？・・・だって・・・」  
「  
ホーンドビュートの締め上げが更に強くなるとダークカブトは苦し  
さに暴れる・・・このままでは負けてしまっ・・・そして電撃が走  
る・・・

ダークカブト「ぐああああああああっ！！！！！！！！！！」  
「！！！！」

ホーンド「トドメです・・・死になさい！！！！」

ホーンドはホーンドロッドとホーンドビュートを分離させるとホー  
ンドロッドをダークカブトを貫こうとするのだが・・・

サンシャイン「ダークカブトお！！！！はああああっ！！！！！！」

ダークカブトの身体にロッドが突き刺さる前にサンシャインがホー  
ンドのロッドをキックで飛ばす・・・

ホーンド「サンシャイン・・・邪魔をするつもりですか？」

サンシャイン「当然よ・・・仲間を傷つけさせはしない！！！！」

ホーンド「仕方ない・・・では貴女を先に消します・・・キャパシ  
ティダウン！！！！！！」

ホーンドは作戦変更と先にサンシャインを潰すとキャパシティダウ  
ンを浴びせサンシャインのボディにパンチを浴びせるとサンシャイ  
ンをふっ飛ばす・・・ダークカブトはその様を見ると何とかホー  
ンドビュートを身体から解くと・・・

ダークカブト「うおおおおおっ！！！！！！！！！！」

ホーンド「ううう！！！！！！！！！！」

ホーンドに渾身のキックを放つとそのままホーンドとふっ飛ばす。

ホーンドは立ち上がる頭を垂らしてユラリと身体を揺らすと・・・

ホーンド「そうですね・・・分かりました・・・二人ともまとめて  
消してあげます！！！！！！！！！！」

ホーンドは二人を睨むとダツシユするが二人もそれに向かう様に応戦する・・・絶対に負けないと!!!

モス「ふん・・・はあああ!!」

フェアリー「ふっ!!おおおおっ!!!」

ムーンライト「やあああっ!!!はあああっ!!!」

フェアリー&ムーンライトはモスのサーベルさばきにフェアリーとムーンライトもかなり手こずっていた・・・だがその動きはフェアリーと似通った点が多い・・・モスはムーンライトに向かってモスサーベルのガの羽のがモチーフの鰐を展開させると羽ばたかせる

と鱗粉らしきものがムーンライトに浴びせられると・・・

ムーンライト「うっ!!?!?・・・う、動けない!?!?・・・」

モス「ふふっ・・・このモスウイングの鱗粉を浴びた者は動けなくなるのよ・・・貴女はそこで大人しくしてなさい・・・」

フェアリー「ムーンライト!!!」

モス「人の心配してる暇は貴女に無いわよ?はあああっ!!!」

モスサーベルにフェアリーが斬りつけられる・・・フェアリーもフェアリーレイピアで何とか応戦するも自分よりも早い剣さばきに翻弄される・・・夕の身体能力もあるのかもしれないがモスはそれ以上

にフェアリーを執着的に攻撃して追いつめていく・・・

フェアリー「はあ、はあ、はあ・・・強すぎる・・・」

モス「このままアタシに倒されなさい・・・そうする事でアタシはアタシになれるのだから」

フェアリー「!?!?・・・アンタがアンタ自身になる?・・・」

フェアリーの首にモスのサーベルの刃が当てられる・・・まるで覚悟しろとでも言わんばかりに・・・そしてモスはサーベルを勢い良く振り上げてそれを下ろす・・・だが何かがフェアリーを守る・・・モス「!?!?・・・これは!!!・・・貴様あ!!!」

ムーンライト「私がいる事を忘れないでほしいわね・・・」

モス「馬鹿な・・・まだ効果は続いている筈なのに・・・何故動け

る!?」

シプレ「それはこれのおかげですう!!!」

ムーンライト「イエローの種の光・・・この効果は自分に向けられた負の力をすべて消し去るのよ」

モス「そんな出鱈目が・・・」

間一髪ムーンライトのムーンライトリフレクションがフェアリーを守る・・・モスは信じられなかったのだがモスの疑問にシプレ達が答える・・・そうコロポットのこころの種の効果でしびれを解毒したのだ・・・そしてフェアリーのレイピアがモスを切り刻む・・・此処から反撃開始だと!!!

マンティス「流石だなカブト・・・だが此処までなあ!!!」

マンティスはデスハンターを振りかざしてフルパワーのマンティスデストロイヤーを放とうとするのだが・・・ここでマンティスのベルトが光り始める・・・マンティスはそれに気が付くと攻撃を止める・・・

マンティス「ちっ!!!時間切れか・・・おい!!!全員撤収だ!!!そろそろ時間だぞ」

アント「ちえ・・・後少しの所で・・・」

ホーンド「ふん・・・」

モス「・・・くっ!!!」

マンティスの言葉にアント達3人は攻撃を止めると全員公園の中央に集まる・・・

マンティス「次は必ず貴様らを殺す!!!」

アント「・・・今度こそね」

ホーンド「・・・この手で・・・」

モス「狩る・・・」

それだけ言い残すと全員が消える・・・まるで急ぐように・・・

カブト「はあ、はあ、はあ、はあ……」

ガタツク「どうしたんだ？アイツら……」

ダークカブト「焦ってたな……だが何故急に戦いを中断したんだ？」

ブロッサム「分かりません……でも強さは本物です……」

マリリン「2人掛りでもやつとだね……」

サンシャイン「うん……」

ムーンライト「それ以外にも何かが他の砂漠の使徒の幹部と違うわ……特に貴方達4人を倒す事に執着してた……」

カブト「ああ……俺達を目の敵にしてるようだ……」

ガタツク「でも何でだ？」

ダークカブト「分からない……それに奴らの言動が気にかかる」

フェアリー「まるでアタシ達を殺す事だけが目的みたい……」

カブト「いずれにしても……俺達が必ず倒す……」

何とかゼロメンバーズとの戦いを終えた8人はゼロメンバーズの言動が引つ掛かっていた……なぜ自分達を倒す事にあそこまで執着するのか……だが必ず負けられない……全員は変身を解くと公園のベンチに一息つく……するとそこにハヤトが現れる。

ハヤト「大人……!!!」

大人「おお〜ハヤト……」

ハヤト「"おお〜"じゃないっての……!!心配したんだぞ……!!あの4人組は……」

つぼみ「大人さん……まさか」

大人「……状況がヤバかったから変身してしまった……」

つぼみ&えりか&いつき「ええええええ……!!!」

ハヤト「大人が変身してたのは何だよ……!!!」

大人「……ハヤト。君を信用して君だけに放すよ……」

つぼみ&えりか&いつき「(ちよ、大人さん……!!!)」

大人「実はあれ特撮の撮影なんです……!!!」

ハヤト「はあ？」

つぼみ&えりか&いつき「（誤魔化したあ!?!）」

ハヤト「撮影……」

大人「映画のね……俺高校で映画部でさ（ホントは帰宅部なんだけどね）」

琢磨「（しかもうちの高校に映画部なんてないぞ）」

夕「（絶対ばれる……）」

傑「（大人……）」

ゆり「（もうちょっと上手い嘘つけないの……）」

ハヤト「……なあ〜んだ……だよなあ〜あんな特撮みたいなもん現実にはありえなもんなあ〜」

大人「（信用してくれたか……）」

つぼみ&えりか&いつき「（嘘お!?!信用した!?!!）」

ゆり「（意外と……単純なのね……男の子って）」

ハヤトが大人のごまかしにだまされた事に4人は信じられなかったのだが取り合えず何とかなつたと冷や汗をこころの中で書くのだった……するとハヤトは突然深呼吸するとゆりの方に近づき……

ハヤト「あの……その……これ受け取ってください!!!」

ゆり「え?……」

ゆりは渡された手紙を読む……すると書かれていたのは自分への告白だった……

ゆり「!!!!……ありがとう……でも……」

ハヤト「いいんだよ」

ゆり「え?」

ハヤト「俺の気持ち……ゆり姉ちゃんに知ってほしかったただけから。オシたくさん食べて、たくさん寝てすぐ大人になるよ。ゆり姉ちゃんを守るような一人前の男になるから」

ゆり「……ええ」

ゆりはハヤトの言葉にそう返す……小さかった彼もちゃんと成長しているんだなと感じているのだろう……自分がつぼみ達のお陰



で笑顔を取り戻す事が出来た様に・・・

えりか「男だあ！！男だなあ〜ハヤト君！！！」

つぼみ&いつき「ふふっ」

大人「ふっ・・・（取り合えずは作戦成功・・・かな？）」

つぼみ「小さな恋人・・・サクランボの花言葉です。」

いつき「ハヤト君はまさにゆりさんの小さな恋人・・・だね」

えりか「ゆりさんモッテモテ〜」

夕日がハヤトとゆりを照らす・・・大人達は後ろで二人を見ながら

ハヤトが大人おとなになりいつかゆりと対等になれるその日が来る事を待

ち望むのだった・・・勿論ゆりも・・・ラブレターを持ちながら

もいつかハヤトが自分に追い付くその日を待っている事だろう・・・

## 第5話「ゆりへのラブレター後篇」(後書き)

はい！！ラブレター回でした。今回はゼロメンバーズの登場のせい  
でかなり変化球になりました(汗)心苦しいかもしれないですがご  
了承ください。

さて今回はクリスマスも近いのであの回を書きます・・・勿論伝説  
の彼女も登場しますよ^^・・・勿論若い方でね

次回もお楽しみに

第6話「クリスマスの奇跡！〜キュアフラワー復活〜」（前書き）

ハヤトのサポート大作戦は成功しゆりにハヤトの気持ち伝わった。  
・・・二人の絆は今までとは違うものになるのだった・・・

## 第6話「クリスマスの奇跡！〜キュアフラワー復活〜」

植物園の外にあるクリスマスツリーに希望ヶ丘の人々が集まるのだ  
った・・・何故ならば・・・

集まっている人々「5、4、3、2、1・・・ゼロ　！！！」

カウントダウンが終わるとクリスマスツリーに光がともり歓声が上  
がる。特にはしゃいでいたのは・・・

えりか「イエーイ！！とおう！！いえい！！！！」

そうえりかだったのだ・・・実にえりからしいと言うかそんな姿を  
大人達もほほえましく見ていた。

大人「全くあんなにはしゃいじゃって・・・えりからしいな」

夕「だね・・・でも気持ちわかるなあ」

琢磨「ふっ・・・」

傑「ふふ・・・」

大人達も昔はあんなかんじだったなあ〜と言う事を思い出しながら  
物思いにふける。

薫子「皆ありがとう。これでクリスマスまで希望ヶ花を憩いの灯火  
で照らす事が出来るわ」

薫子のその言葉に全員が拍手をする・・・すると一人の少女の姿が  
見えた・・・何やらクリスマスツリーに向かって手を合わせていた。  
・・・まるで流れ星にお願いをするかの様に・・・

大人「？（あの子笑ってない・・・どうしたんだろう？）」

大人はその少女に目が止まった・・・他の同年代の少年や少女は笑  
顔であふれているのにどうしてだと思いつながらしばらくして集まっ  
ていた人々が帰宅する頃になるとえりかが何かに気がついたようだ。

えりか「あっ・・・んっ？」

えりかはクリスマスツリーに何かが付いているのを気がついた・・・  
つぼみ「よいしょっと」

えりか「つぼみー！！肩車ー！！」

つぼみ「え？・・・うつ、うわあ！！・・・い、いきます！！ふん  
~~~~！！！」

えりか「がんばれ！！あと少し・・・たっ！！！！・・・なにになに？・・・  
（プリキュアと仮面ライダーに会えますように）だって」

？「ダメ~~~~！！！」

つぼみ「お？」

つぼみ&えりか「うわあ~~~~！！！！ああ~~~~」

えりか「いたたたた・・・」

つぼみ「うう」

？「大丈夫？」

紙に書いてある事をえりかが読むとそこに先程の少女が二人に紙を  
読むなど近づいてきた・・・もともと非力なつぼみはえりかを抱え  
るのがかなりしんどかったのだが少女が来ると完全にバランスを崩  
してしまい二人とも倒れてしまう・・・

つぼみ「うーん・・・ん？貴女は確かまゆかちゃん！！」

まゆか「！！！」

つぼみ「植物園の橘さんのお嬢さんですよね？」

まゆか「・・・」

つぼみ「短冊を付けたの貴女何ですか？」

まゆか「うん」

えりか「七夕じゃないんだからサンタさんにはクリスマスプレゼント  
ントをお願いするんじゃないの？」

まゆか「プレゼントなんかいらないもん」

つぼみ「え？・・・まゆかちゃん！！？」

えりか「泣かしちゃったかな？」

まゆかはそれだけ言うとうと父親のほうに走って行ってしまっ・・・  
つぼみとえりかはわけがわからないのだが・・・あの紙に書いてあ  
った事を思い出す・・・

えりか「プリキュアとライダーに会いたいか・・・」

つぼみ「はい・・・とても真剣そうでした」

大人「……………」

二人のすぐ後ろで大人も同じことを考えていた……あの子の願い……叶えてあげられるなら叶えてあげたい……そんな事を思っていた

つぼみ「まゆかちゃん会えるかな？」

？「アツハハハ」

時は流れて翌日つぼみはまゆかに会いに行こうと橘家に向っていた……その通り道で何故の少年らしき人物とすれ違ったのだがこの少年の正体は後に知ることとなるのだ……

少年A「嘘だー！！！！」

まゆか「う、うそじゃないよ！！！！あたしプリキュアと仮面ライダーの友達だもん！！！！」

少女？「本当に？」

少年B「そんなのうそに決まってるだろ？」

少年A「まゆかちゃん……先生から嘘付きは良くないって言われたよね」

まゆか「う……嘘つきじゃないもん……昨日だってプリキュアと仮面ライダーと一緒に遊んだもん！！！！」

少年B「だったら僕達にも会わせてよ」

まゆか「え？」

少年A「なあ〜んだやつぱり嘘じゃん」

まゆか「いいよ……プリキュアと仮面ライダーに合わせてあげる！！！！」

少年達&少女「え！！！！？」

少女「本当に？」

少年「いつ？」

まゆか「クリスマスイブの5時に……植物園ののクリスマスツリーの前で……」

そして橘家に向かう途中の公園でまゆかとまゆかの友達数人がなにか話しているのを目撃する・・・

まゆかはどうやら友達にプリキュアと仮面ライダーと友達だと嘘をついてしまっているらしい・・・だからあんな願い事をしたのだ・・・まゆかの友達の少年達は半信半疑の顔をしながらも公園から立ち去る・・・つぼみはまゆかの方を見るとまゆかはその場に座り込んで目に涙を浮かべていた・・・詩文の付いた嘘に後悔しているのかもしれない・・・そこにつぼみが近づいて来る・・・

つぼみ「こんにちは」

まゆか「こ、こんにちは・・・」

つぼみ「昨日私達と一緒にでしたよね？お友達にしたプリキュアと仮面ライダーの約束どうしてあんな嘘をついちゃったんですか？」

まゆか「・・・嘘じゃ・・・ないもん。プリキュアと仮面ライダーは絶対来てくれるもん」

まゆか「はつぼみにそれだけ言うとか園から走り去ってしまう・・・一人取り残されたつぼみ・・・そして植物園の職員である父親に公園で起きた一部始終を報告するのだった・・・」

まゆかの父「まゆか、そんな事いつてたんですか。すみません心配をおかけして」

つぼみ「いいえ。勝手に会いに行っただけですから・・・」

まゆかの父「この間・・・担任の先生にも注意されました。あの子ちよこちよこ嘘をつくらしいんですよ。最初は他愛のないものだったらしいんですが最近ではエスカレートしてママは女優だとか家は大金持ちだとか・・・あの子は中々友達が出来ないんです人見知りか激しい子で」

薫子「小さい頃のつぼみにそっくりね」

つぼみ「はい。きつと皆の気を引きたくて嘘を言ってしまうんだと思います。」

つぼみはそれだけ言うとかクリスマスツリーを眺めていたまゆかのところに行くのだった・・・

まゆか「・・・？」

つぼみ「フフッ」

つぼみは笑顔を見せながら手を振る・・・そしてつぼみはまゆかを連れていき植物園のパンジーの花畑まで散歩すると・・・

つぼみ「私ね子供の頃はまゆかちゃんと同じで恥ずかしがりやで中々お友達が出来なかつたんですよふふっ・・・」

つぼみはかつての自分の事をまゆかに言い聞かせながらかつての事を思い出す・・・自分も昔は同世代の他の子と一緒に遊ぶ事が出来ずにお花が友達と言っていたほどだった・・・

つぼみ「だからね・・・まゆかちゃんの気持ちよく分かります。」

まゆか「・・・」

つぼみ「でも嘘はつきませんでした!!」

まゆか「・・・」

つぼみの真剣な顔を見るとまゆかは目をそらしてしまう・・・恐らく嘘つきな自分自身を後悔しているのだった・・・

つぼみ「プリキュアも・・・仮面ライダーも嘘付きさんには会いに来てくれないと思いますよ。」

まゆか「え!？」

そしてつぼみは笑顔で再びそう言う・・・まゆかはその言葉に驚いてつぼみの方を見なおす・・・踊りいた顔で・・・そしてつぼみはあたりを見わすような仕草をすると・・・

つぼみ「実は・・・わたしプリキュアと仮面ライダーのお友達なんです」

まゆか「え!？」

つぼみ「うんうん。」

まゆかは驚いた・・・というのも真面目そうな印象のつぼみの口からまさか言葉が出たから当然であるつぼみは自慢げに笑顔を見せるのだが・・・まゆかは信じられないとでもいうような顔でつぼみを見ていく・・・沈黙が続いていくとだんだんとつぼみの顔が冷や汗の表情に変わっていく・・・そしてまゆかが口を開く・・・



まゆか「うそー！ー！！！！」

つぼみ「う、嘘なんかじゃありません！！お友達がプリキュアとライダー・・・じゃなくてプリキュアと仮面ライダーがお友達なんです！！ホントなんですよ！！ホントです！！信じてください！！！！」

「  
まゆか「ふふふっ・・・あはははは・・・あははははははは」

まゆか「つぼみの必死の口調に思わず笑ってしまう・・・それにっられるようにつぼみも笑う・・・そして笑いが終わると

つぼみ「ふ〜」

まゆか「ねえお姉ちゃん」

つぼみ「お、おねえちゃん？・・・お姉ちゃん！！甘美な響きです！！なにになに？」

まゆか「ふふっ・・・嘘つかないって約束すればプリキュアと仮面ライダー会いに来てくれるかな？」

つぼみ「勿論です！！！！」

まゆか「だったら・・・あたしもう嘘つかない！！」

つぼみ「うん。じゃ約束です。」

まゆか「うん」

まゆか「つぼみは約束だとゆびきりをする・・・そしてその日の夜にえりかの家に全員が集まることとなった・・・

えりか「えーっ！！そんな約束しちゃったの？」

つぼみ「皆さん協力してください」

いつき「つぼみらしいね。ボクはいいよ」

ゆり「私も付きあうわ」

つぼみ「はああ〜！！！！」

えりか「しゃーない！！付き合っか」

大人「異議なし！！！！」

琢磨「オッケー」

傑「クリスマスプレゼントを与えるのも悪くないしね」

タ「つぼみちゃんの頼みならしよーがない」

つぼみ「ありがとうございます！ありがとうございます！ありがとうございます！ありがとうございます！！！！」

つぼみは今までにない感謝の気持ちを皆に示す。えりか、いつき、ゆり、大人達もそんな彼女に笑顔を見せて返すのだった・・・これより「クリスマスプレゼント大作戦」が開始されることとなった

そして時間は流れクリスマスイブ・・・

大人「来てる来てる。」

つぼみ「ふふっ 時間まであと少しですね」

琢磨「でも意外だったな」プリキュアは当然だとして俺達ライダーも結構有名なんだな！！」

傑「そりゃデザトリアンとあんだだけ派手に戦っていたら当然じゃないか？」

タ「そうだね。それにしても・・・いつきちゃん遅いね」

えりか「そうだね・・・どうしたんだろ？」

ポプリ「大変でしゅ！！！！」

えりか「ん？・・・うわあっ！！！」

いつき以外のメンバーは集まっていたのだがいつきが珍しく遅い・・・どうしたんだろうと全員に不安の空気が流れるのだった・・・だがそこに扉からポプリが大急ぎで入ってきた・・・えりかは扉に頭をぶつけて倒れてしまう・・・

ポプリ「デザトリアンがあらわれたでしゅ！！！！」

大人「なにっ!？」

ポプリ「サンシャインが1人で戦ってるでしゅ！！！！」

えりか「どうしよう!？」

ゆり「決まってるでしょ。被害者を救出するのが先決よ」

琢磨「つたく!!こんな時に・・・砂漠の使徒も空気が読めない連中だぜ!!!!」

傑「仕方がない・・・皆行こう!!！！」

つぼみ「……………」

夕「つぼみちゃん……………」

ゆり「さあ……………」

つぼみ「でも……………」

ゆり「行くわよ」

つぼみ「……………まゆかちゃん」

つぼみは約束を破る事になるため行きたくないと言うのが本音だったがデザトリアンから町を守るのが自分達の役割……………ゆりに諭されるような視線を送られるとやむを得ずデザトリアンの元に向かう。

サンシャイン「プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!!」

デザトリアン「!!!!!!??」

サンシャイン「はああああっ!!!!!!」

その頃サンシャインは一人でデザトリアンと闘っていたのだがそこにコブラージャとクモジャキーが乱入してきた……………

サンシャイン「あっ!?!」

コブラージャ「一人で頑張ってるじゃないか?」

サンシャイン「くっ!?!?」

コブラージャの素手の攻撃がサンシャインに降りかかるがサンシャインはそれをガードして距離を取る……………だが今度は……………

サンシャイン「!?!?」

クモジャキー「でやあああ!!!!!!大人しくするぜよ!!!!!!」

クモジャキーの乱入にサンシャインは焦り離れるのだがそれをコブラージャが見逃さず後ろから羽交い絞めにしてサンシャインの動きを封じてしまう……………そしてクモジャキーがトドメと拳でサンシャインにトドメを刺そうと走って来るの

クモジャキ「サンシャイン……………これで終わりぜよ!!!!!!」

サンシャイン「くっ!?!!!」

ムーンライト「ふん!!!!!!」

サンシャインが覚悟を決めたその時ムーンライトが現れてクモジャ

キーの拳を受けとめる。

ムーンライト「たった一人に寄ってたかって・・・感心しないわね  
!!!!・・・ふん!!!!」

ガタツク「全くだな・・・はあああつ!!!!」

ムーンライトが素早い身のこなしでクモジャキーをそしてクロツク  
アップでコブラー ज्याの後ろに近づいていたガタツクがコブラー  
 ज्याをケリ飛ばしてサンシャインを解放する。そしてデザトリアン  
 前にはブロッサムとマリんとマリんと、そしてハイパーフォームにな  
 ったハイパーカブトとフェアリーが立ちふさがると・・・

ブロッサム&マリントプリキュア・クリスマスインパクト!!!!」

ハイパーカブト「ハイパーレーザー!!!!」

電子音「HYPER-Laser!!!!」

フェアリー「フェアリーキャノン!!!!」

ブロッサムとマリンの合体技のクリスマスインパクト、ハイパーカ  
 ブトのハイパーレーザー、フェアリーのフェアリーキャノンが命中  
 しデザトリアンを弱らせる・・・後もう少しと言う所だったがコブ  
 ラー ज्याとクモジャキーが・・・

コブラー ज्या「所詮デザトリアンではここまでだね」

クモジャキー「ならば見せてやるぜよ!!!!」

クモジャキー&コブラー ज्या「ダークブレスレット!!!!!!」

なんと今回は二人が合体しデザトリアンのダークパワーが2倍とな  
 った・・・

クモジャキー「はーっははははは!!!!!!」

コブラー ज्या「幹部が二人は言ったデザトリアンの強さ・・・見る  
 がいい!!!!!!」

クモジャキー「食らうぜよ!!!!!!」

8人「うわあああああああ!!!!!!」

突如口からの吹雪が8人に襲いかかり8人は飛ばされてしまう・・・

これほどまでのパワーを持っているとは思わず全員かなりのダメー  
 ジを受けてしまうのだがクモジャキーは更に追撃を放つ。

クモジャキー「次はコレぜよ！！！！でやああああっ！！！！！」

ハイパーカブト「なっ！！！！！」

ガタツク「くっ！！！！？」

ダークカブト「はっ！！！！？」

フェアリー「ううっ！！！」

サンシャイン&マリリン「ああっ！！！！！」

ブロッサム「あっ！！！」

なんと突如氷が発生し全員の身体を凍らせて動けなくしてしまった。  
・・逃げ出すにも身体が動かない。・・そこに今度はコブラー  
ジヤが勝ち誇る様な口調で口を開く。・・

コブラージヤ「僕達からのクリスマススプレゼントだよ！！！！！」

8人「うわあああああああっ！！！！！！！！！！！」

するとデザトリアンのカラダから氷柱のようなモノが発射されて全  
員に命中する。・・そして大爆発が起こると全員クリスタルの様な  
ものが突き刺さった状態でクリスタルの様に固められしまったの  
だった。・・

そしてその頃時間は流れてしまい約束の時間である5時を過ぎてし  
まった。・・まゆかもまゆかの友達も

全員がしょんぼりした顔になりながらもただそこにいた。・・まゆ  
かは思った。・・つぼみが嘘をついたのかと。・・だがつぼみの笑顔  
を思い出すと嘘とは思えなかった。・・まゆかは涙目になると。・・  
まゆか「プリキュア。・・仮面ライダー。・・来てくれるよね？」  
少年A「やつぱり嘘なんだよ」

その言葉にまゆかは歯を駆使ばって大声で反論する。

まゆか「来てくれるもん！！プリキュアも。・・仮面ライダーも絶  
対に来てくれるもん！！！」

その姿を見ていた薫子は扉を閉めると。・・コツペに話しかける。・・  
薫子「コツペ。・・まゆかちゃんにクリスマスプレゼントをあげた  
いの。・・頑張ってるつぼみ達の為にも。・・力を貸して」

コッペは薫子の方を見る・・・そうかつて自分達が戦っていたあの姿に変身しようと言うのだ・・・

シプレ「ブロッサムー！目を開けるですう！！・・・あつ！！！」

シプレ達は固められてしまったブロッサム達に必死に呼びかける・  
・だが反応は無くクモジャキーとコブラージャがトドメを刺してやろうと近づいていき・・・

クモジャキー「プリキュアも・・・ライダーも終わりぜよ！！！」

コブラージャ「まあ待て」

クモジャキー「うん？」

コブラージャ「メインディッシュはもつとゆっくりと楽しむものさ・  
・その前にサラダをいただこう」

クモジャキー「もつと暴れて人間どものこころの花を枯れさせようってことか？よおーし！！！」

コブラージャの言葉にクモジャキーも賛同しプリキュアとライダー  
いトドメを刺すのを後にすることとした・・・そして空に飛びあがり目に付いたものがあつた

コブラージャ「おや？」

クモジャキー「アレをいただくぜよ！！！！！」

それは植物園の近くにあるクリスマスツリーだった・・・コブラー  
ジャ達はアレを破壊する事で人々の心をも壊すつもりなのだ・・・  
同じころまゆかの友達ももう付き合いきれないと帰ろうとしていた  
のだがそこにクモジャキー達が現れる。

コブラージャ「はっはっはっ！！！！このツリーを倒せばさぞや多くのこころの花が枯れるだろう！！！！！」

クモジャキー「いくぜよお！！！！！」

デザトリアンがツリーに攻撃を仕掛けようとしたそのとき光が発生してその光がツリーを守る・・・

その正体は・・・

まゆか「うう……?……ああつ!!」

そこにはプリキュアがいたのだ……。だがその姿はブロッサムでもマリンでもサンシャインでもムーンライトでもない……。だがまゆかは確信した……。彼女はプリキュアだと

まゆか「プリキュア……」

コブラー ज्या「プリキュアだと!？」

コブラー ज्याとクモジャキーは驚きが隠せない……。ブロッサム達は完全に固めた筈だからこの場には来れないはずだ……。では彼女の正体は?……。そんな事を考えている内に突如光が変化してデザトリアンの身体を縛り上げる様な糸の様なものになり締め上げる。

クモジャキー&コブラー ज्या「あああああつ!!!!!!?????ぐあああああああー!ー!ー!ー!?!?!?!」

そしてそのまま身体を地面叩きつける

少年A「すごい……」

少女「でもなんてプリキュア？」

少年B「キュアブロッサムでもキュアマリンでもない」

?「ふふつ……。私の名前は」

まゆか「名前は？」

?「聖なる光に輝く一輪の花キュアフラワー!!!!」

コブラー ज्या「キュアフラワーだと?デューン様を破ったと言う伝説のプリキュアか!!!!」

クモジャキー「面白い!!!!……望む所ぜよ!!!!」

フラワー「まゆかちゃん達を安全な所へ」

クモジャキー「食らえ大吹雪!!!!」

フラワーの合図に変身したコップが現れてまゆか達を避難させる……。それと同時にクモジャキーの攻撃がフラワー目掛けて発射される。がフラワーはそれを難なくかわしていきバリアで防ぐと……

フラワー「プリキュア・フラワー・キャンドル!!!!」

クモジャキー&コブラー ज्या「ぐわあああああああつ!!!!」

「！！！！」

デザトリアンの舌に大きな花の模様が現れるとそのまま大回転を開始する・・・それによりデザトリアンも大回転していきクモジャキー達は目を回す事になった。さらに追撃を行う為フラワーはダッシュで近づいてくと・・・

フラワー「プリキュア・フラワーカーニバル！！！！」

自身を分身させて分身をデザトリアンの中に入れるとデザトリアンの中にいるクモジャキーとコブラージャに攻撃していき直接大ダメージを与えていく

クモジャキー&コブラージャ「ぐううつ！！！！うわあああああああつ！！！！！！！！」

フラワーはダイブダメージを与えた後はブロッサム達の救出だと思っていたところにコツペがフラワーを気遣う様に後ろに立つとフラワーはコツペにもたれかかる・・・

フラワー「はあ・・・今の私にはコレが精一杯フェルテウェイブゆえ使えないもの・・・皆を迎えに行きましょう」

そしてブロッサム達の救出のためにフラワーは飛び立つ。その姿をまゆか達は植物園の中から眺めているのだった・・・

そして全員が固められている場所にたどり着く・・・

フラワー「こころの花よ！！プリキュアを戒めから解き放て！！！！」

フラワーは先ずブロッサム達を解放するべく自身の胸のクリスタルを光らせるとブロッサム達のクリスタルも光る・・・そしてブロッサム達が目を開けるとクリスタルが砕けて解放される・・・次はハイパーカブト達だ。

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「キュアフラワ  
ー！！！！」

フラワー「次は彼らを解放する番よ」

ブロッサム「でも・・・どうすれば？」



フラワー「フェルテウェイブをカブト達のゼクターに当てるのよ。」  
マリ「フェルテウェイブを?」

フラワー「ええ。彼らの力は私達とは違うけど同じ地球を守る戦士・  
・彼らの心に私達の思いが届けば戒めは解かれるはず」  
ムーンライト「やってみましょう」カブト達はいつも私達を助けてくれたわ」だから今度は私達が助ける番よ」

ブロッサム&マリ「サンシャイン」はい!!!」

ブロッサム「カブト」今助けますからね!!!」

ブロッサム&マリ「サンシャイン&ムーンライト」集まれ花のパワー!!!」

ブロッサム「ブロッサムタクト!!!」

マリ「マリンタクト!!!」

サンシャイン「シャインーターンバリン!!!」

ムーンライト「ムーンタクト!!!」

4人はタクトを解いり出してそれをれのフォルテウェイブの発射準備をするとブロッサムはハイパーカブト、マリはガタック、サンシャインはダークカブト、ムーンライトはフェアリーに向かってでの体制である。

ブロッサム「花よ輝け!!!プリキュア・ピンクフォルテウェイブ!!!」

マリ「花を煌け!!!プリキュア・ブルーフォルテウェイブ!!!」  
サンシャイン「花よ舞い踊れ!!!プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!」

ムーンライト「花よ輝け!!!プリキュア・シルバーフォルテウェイブ!!!」

それぞれのフォルテウェイブがカブト達のゼクターに命中していくとゼクターが輝きだし全員の目に光が点るとゼクターに突き刺さっていたクリスタルが砕けていき動きを封じていたクリスタルも砕け散る。

ハイパーカブト「ぐうっ!!!?」皆、無事だっ

たのか?・・・あ、貴女は・・・キュアフラワー?」

フラワー「ふふっ・・・話は後　あとは貴方達で決めなさい!!」  
その合図と共にデザトリアンが空から舞い降りてきた・・・先ずはハイパーカブトが借りを返してやるとパーフェクトゼクターを呼び出し全てのゼクターを合体させる。

電子音「KABUTO - POWER!!　　THEBEE - POWER!!  
DRAKE - POWER!!　　SASWORD - POWER!!  
All Zector Combine!!」

ハイパーカブト「・・・これは俺達ライダーからのクリスマスプレゼントだ・・・ありがたく受取なあ!!!!」

電子音「MAXIMUM HYPER TYPHOON!!!!」  
ハイパーカブトはマキシマムハイパーティーンを発動させてデザトリアンを斬る付ける。流石のクモジャキーとコブラージャもコレは避けきれずにパーフェクトゼクターの刃が直撃する。

そして次は・・・

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「鏡よ鏡プリキュアに力を!!!!世界に輝く一面の花!!!!ハートキャッチプリキュア・スーパーシルエット!!!!」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「花よ咲き誇れ!!!!プリキュア・ハートキャッチオーケストラ!!!!」

ムーンライト「ふん!!!!」

サンシャイン「はあっ!!!!」

マリン「たああー!!!!」

ブロッサム「たあああー!!!!」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「はあああああああああああ!!!!」

デザトリアン「ぼわわわあ〜ん」

クモジャキー「くっ!!!!」

コブラージャ「覚えてろ!!!!」

デザトリアンに女神の拳が降りかかり浄化を開始する・・・コブラ

ージャ達はデザトリアンからだ集出し事なきを得たのだった。そしてこのころの花を元の戻し被害者を近くにあつた街路樹に寝かせておく・・・その手にはブロッサム達の直筆サイン入りのクリスマスカードが握られていた。

ブロッサム「おばあちゃん!!!」

フラワー「あらあら・・・」

シプレ「ブロッサムは甘えん坊ですう!!!」

ハイパーカブト「昔からね・・・さてと俺達も最後の仕事を片付けに行こうか？」

ブロッサム「はい!!!」

ガタツク「よっし!!!じゃあ全員俺達に掴まれ!!!超光速で植物園に行くぞお!!!」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「おお~~~~!!!」

ブロッサム達はカブトに捕まりクロツクアップの光速移動で植物園に向かう。まゆかとの約束を果たすために

そして全員植物園のクリスマスマスツリーに集合する。まゆかの友達は驚きが隠せない表情だった・・・そしてまゆかに向かって謝るのだ少年A「まゆかちゃん、ごめん!!!嘘付きなんて言つて」

まゆか「ううん。謝らないで」

少年B「でもホントにプリキヤアと仮面ライダーとお友達だったなんて」

まゆか「・・・」

まゆかはブロッサムの方を見た・・・本当は違うのに・・・ブロッサムは笑顔を返すのだがまゆかは気が付いていた・・・これはいけない事だ・・・本当は違うのだから・・・

まゆか「ううん。違うの」

ブロッサム「!!!」

カブト「はっ!!!」

ブロッサムとカブトは驚いた……だがまゆかはためらうことなく  
真実を友達に述べるのだった

少女&少年B「ええ？」

まゆか「嘘だったの……プリキュアと仮面ライダーは私のお願い  
を聞いてくれただけなの……本当は嘘なんて付くつもりなんてな  
かったの……ただ皆となかよくなりたかっただけなの……ご  
めんなさい」

少年達「……………」

少女「何言ってるの？まゆかちゃん！！」

まゆか「えっ？」

少女「私達まゆかちゃんの事ずっと友達って思ってたよ……ね？」

少年2人「うん」

まゆか「え？」

彼らの言葉にまゆかは驚きが隠せなかった……そこにブロッサム  
が近づきまゆかに笑顔を見せる……まゆかもそれに応える様に笑  
顔を返す……

そしてしばらくまゆか達子供達はプリキュアとカブト達と時を過  
した……まゆか達にとって一生の思い出になるだろう……そし  
て夜も遅くなりまゆか達は仲良く家に帰るのだった……プリキュ  
アとライダー達に手を振り笑顔を見せながら……

マリ「でもおばあちゃんが変身するとはなー！！」

フラワー「今はキュアフラワーよ！！」

ブロッサム&マリ「はははっ！！！！ふふふっ」

フラワー「あっ！？」

ブロッサム「んっ？おばちゃん？」

フラワーは何かに気が付いたように後ろをみる……すると少年が  
こっちに近づいてきている……

フラワー「貴方は……………」

？「あっははははは！！！！……久しぶりだねキュアフラワー」

フラワー「デューン!!!」

その場にいた全員がその言葉に凍りついた……そして少年の方を見る……

ムーンライト「彼が……砂漠の王!？」

全員の視線がその少年に向けられた……まさかこんな少年が砂漠の王!？……

第6話「クリスマスの奇跡！〜キュアフラワー復活〜」（後書き）

何とか間に合った！！クリスマス編です・・・次回からハートキ  
ヤッチ本編も怒涛の最終章の予感です！！

次回もお楽しみに

特別編「対談！～ソラ&プリキュア&ライダー」(前書き)

今回は対談です^^お相手は勿論・・・

## 特別編「対談！ソラ&プリキュア&ライダー」

ソラ「どうも」 皆さん如何お少しでしょうか？小説（仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア）作者のソラです。今回はこの小説の裏話をすくしゲストの皆さまと行おうと思います！！では早速ゲストを紹介しようと思います。この方々です！！どうぞ」

大人「ああ〜・・・どうもこんにちは〜上原大人です」

琢磨「漆山琢磨です〜！！」

傑「影山傑です・・・」

夕「里中夕でえ〜す〜！！」

つぼみ「こんにちはは・・・は、花咲つぼみです」 顔が真っ赤

来海「どお〜も！！来海えりかです〜！！」

いつき「明堂院いつきです〜宜しくお願いします」

ゆり「月影ゆりです・・・よろしく」

ソラ「はいどうもどうも！！」 一人だけ拍手

大人「ていうか・・・突然呼び出されていきなりコレですか？」

ソラ「いいじゃないですか〜どうせ私は暇だし」

夕「クリスマスなのに？」

ソラ「・・・今聞いてはいけない事を聞いたな・・・」

琢磨「な、なんかどす黒いオーラが・・・」

傑「俺達と同じ側か・・・」

ソラ「そうですね！！さっきまで一人でとんかつ食べに行ったん

だよ・・・周りカップルだらけでさあ〜（泣き）」

大人「そりゃ・・・クリスマスですしね」

ソラ「うあ〜」 一人泣きだす

つぼみ「なんか雰囲気か・・・」



えりか「そろそろ始めすか？」

ゆり「その方がよさそうね……」

いつき「うん……」

1 何故カブトとハトプリをコラボさせたの？

ソラ「最初の質問には相応しいね。そうだね。今年の春にカブトの動画を見てカブトにハマってですね。それ同時期にやっていたハトプリに共通点があったからかな？」

大人「共通点？」

つぼみ「私達プリキュアとカブトにですか？」

ソラ「うん。まず最初が主人公がおばあちゃん子だって事！！」

大人「確かに……天道さんとつぼみはおばあちゃん子だ……」

「

えりか「でもそれだけで？」

ソラ「いいや。あと光速移動とかさ」

ゆり「クロックアップとレッドの種？」

ソラ「うむ！！PIXIVで見たのはツボだったね！！！」

いつき「ははは……でもアレってあんまり出番がない気が……」

琢磨「そうだぜ。だってこの小説でも出番が出たのは特訓の時か

らじゃん！！！」

ソラ「いや……それは話の都合というものが……では次に行こ

うか！！！」

大人「流した……」

2 ザビーをオリキャラにしたのはなぜ？

ソラ「ああ。コレはね……最初は矢車さんとか考えたんですけど……」

・矢車さんにはやっぱり影山と相棒を組んでほしかったんだよね

「

つぼみ「確かに……あの二人はザビーよりもホッパーとしての方

がインパクトありますからね」

えりか「この小説の初登場でアタシ達以外の皆がボコボコにされたしね・・・」

ゆり「あの二人にやられた時は驚いたわ」

いつき「ボクは気絶して戦えなかったしね」

ソラ「いやあ〜自分でも書いていてインパクトありすぎるな〜と思っただけそれには理由があるんだよ〜。最初は大人、琢磨、傑、夕にはさつさとライダーになってもらおうと思ったんだけど・・・ふと気がついたんだ・・・」

夕「気がついた？」

ソラ「あまりのもマンネリ化するって・・・それで路線変更して地獄兄弟を登場させたんだよね。」

琢磨「それで俺達をあんなに痛めつけたわけだ・・・」

ソラ「そんなに怒らないでよ〜・・・あとがきにも地獄兄弟初登場のオマージュって書いたじゃない〜」

大人「でもカブトの本編じゃ二人とも消耗してたよね？」

ソラ「だからザビーと戦わせたじゃん・・・」

傑「それも伏線だったとは・・・」

ソラ「ボクだって常に考えているんだよ〜では次に行こう!!」

3フェアリーの誕生経緯は？

夕「そうそう!!コレ気になってたんだよね!!」

ソラ「いやあ〜コレにはホントに参ったよ・・・4人目のライダーの構想が固まるまでに5日はかかったからね」

大人「そこまでしてやっと出たのがフェアリーなんだ」

ソラ「そうそう・・・モデルを蝶にするのは決めてただけで名前がね〜」

つぼみ「実際どれだけの名前が挙がってたんですか？」

ソラ「バタフライ、アゲハ、ウイング、イマジン、そして最後がフェアリー」

えりか「いろいろ考えたんだね〜じゃあフェアリーにした理由は？」  
ソラ「フェアリーは妖精という意味があるから女の子に相応しいと  
思ってたさ！！！！」

8人「成程〜」

ソラ「では次！！！！」

4 今後の話の予定は？

ソラ「う〜んそうだね。ライダーサイドは終わったから次は君達プ  
リキュアが主役だよ！！！！本編じゃあの方出たしね」

つぼみ「次回から私達が頑張る番ですね・・・私達は絶対に負け  
ません！！！！」

えりか「勿論！！アタシ達の世界はアタシ達の手で守る」

いつき「僕達の大切な人々を」

ゆり「大切な場所を・・・」

つぼみ&えりか&いつき&ゆり「守ってみせる！！！！」

ソラ「盛り上がっているとここで悪いんだけど大人達の事も忘れない  
ですよ〜」

大人「俺達も同じ気持ちだ」

琢磨「砂漠の使徒なんか俺達の大切なモノを奪わせるもんか」

傑「俺達ライダーも・・・」

タ「この世界の為に戦う」

ソラ「そうだ！！君達もつぼみ達と共にがんばりたまえ！！！！では  
そろそろラスト！！！！」

ソラ「ええ〜小説初心者ですが今後もこの物語は続いていきます。

皆さんも楽しみにしてください！！！！では今日はお開きとさせ  
てもらいます！！！！また機会があれば全員集させますので。お楽しみ  
ください〜」

大人「俺達の活躍を楽しみにしてくれ！！！！」

つぼみ「私達プリキュアも頑張ります！！！！」

ソラ」では今回はこの辺で、皆をまめりークリスマス&ハッピーニ  
ユイヤー……」

第7話「砂漠王デューン登場・・・地球最後の日!？」（前書き）

前回までのあらすじ

まゆかの思いをかなえるため薫子はキュアフラワーの力を復活させて見事まゆかの願いを叶える事が出来た。

しかし喜びのつかのまであり遂に砂漠王デューンがっぼみたちの前に姿を現したのだった

第7話「砂漠王デューン登場・・・地球最後の日!？」

ブロッサム「んっ?おばちゃん?」

フラワーは何かに気が付いたように後ろをみる・・・すると少年がこっちに近づいてきている・・・

フラワー「貴方は・・・」

?「あっははははは!!!!・・・久しぶりだねキュアフラワー」  
フラワー「デューン!!!」

全員がフラワーの言葉に目を疑った・・・何せ姿はあどけない少年そのものだったのだ・・・

ハイパーカブト「こいつが・・・砂漠の使徒の・・・」

ガタツク「親玉か・・・」

ダークカブト「・・・」

フェアリー「とうとうボス自ら登場ってわけね・・・」

全員が身構えながらデューンの出方を伺う・・・ボスが自ら出てきたということは自分達を倒す為であるに決まっているからだ

デューン「会えてうれしいよ・・・キュアフラワー・・・50年前お前がハートキャッチミラーージュで封印した私の力今こそ返してもらうぞ・・・ん?」

デューンはあどけない笑顔を崩さないまま手を伸ばしそう言う・・・だがブロッサムはそれに抗議するかにようにフラワーの前に立つと・・・

ブロッサム「そんなのお断りです!!!」

マリン「大体砂漠の王って言ったて全然迫力ないじゃん!!!なのになんか偉そうに喋っちゃってさ!!!」

デューン「ふっ・・・随分威勢がいいな・・・さあ・・・誰からだ?」

デューンはカラダに赤い稲妻を発してそれだけ言うとかかって来いとばかりに挑発していく・・・その顔は自信に溢れていて勝つのは



マリン「もしかしてやつつけた!?」

とマリンが興奮した声でそう叫んだのだが・・・稲妻の音が響くと爆風から風が吹き荒れるとそこから赤い稲妻が辺りに走りブロッサム達を襲う。

マリン「うわあっ!?」

ブロッサム「うわああああああっ!!!!!」

マリン「ブロッサム!!!」

稲妻がブロッサムを直撃してブロッサムは近くの木まで飛ばされてしまいブロッサムは気絶してしまう・・・

ハイパーカブト「大丈夫か!?!」

ハイパーカブトはブロッサムの事が気になり彼女のもとに向かう・・・そして稲妻が消えるとデューンが服に付いたゴミを掃うかのよう  
に服を叩くと先ほどまで見せていた余裕の顔を見せつけると・・・  
デューン「他愛もない・・・行くぞ!!!」

そう言うのとクロックアップ並みのスピードでムーンライトの懐に入るとそのまま真っ赤な光線を放ってムーンライトに浴びせるとムーンライトは変身解除されてゆりの姿に戻ってしまう・・・

マリン&サンシャイン「ムーンライト!!!・・・!?!?...うわあああああああっ!!!!!!」

デューン「愚かな奴らめ」

マリンとサンシャインがムーンライトに気を取られている隙にデューンが二人の後ろに回り込むと二人にも光線を浴びせると二人ともえりかといつきの姿に戻ってしまう・・・

フェアリー「ゆり!!!大丈夫?...しっかりして!!!」

ダークカブト「いつき!!!いつき!!!...しっかりしろ!!!」

ガタツク「えりか!!!大丈夫か?えりかあ!!!」

ガタツク、ダークカブト、フェアリーの3人はゆり達に近づき呼びかけるが反応がない・・・どうやら先ほどの攻撃だけで気絶しただけのようであった・・・3人は怒りに身体を震わせながらデュー



ーンのほうを見ると・・・

ガタツク「貴様あ!!!」

ダークカブト「3人の敵は取らせてもらうぞ・・・」

フェアリー「絶対に許さない・・・」

ガタツクはキャストオフしてガタツクダブルカリバーをダークカブトはクナイガン・クナイモードにフェアリーはフェアリーレイピア・レイピアモードを構える・・・

デューン「ほう?・・・では貴様たちの力見せてもらおうか」

デューンに向かっていく3人だが攻撃が全く当たらない・・・ならばスピードで追い抜かすだけだとクロツクアップを発動する・・・デューン「ほう?そんな能力があったのか・・・だがその程度など私には通用しない!!!」

デューンは残像のような分身を作ると3人を翻弄する・・・そして3人が戸惑っていき好きにフェアリーとダークカブトにデューンの光線が浴びせられる・・・

ダークカブト&フェアリー「うわああああああああっ!!!」

!!!」

光線を受けてしまった二人は変身が解除されて傑と夕の姿に戻されてしまう・・・

ガタツク「傑!!!、夕!!!」

ガタツクは光線を浴びせられて飛ばされた二人に呼び掛けるがやはり反応がない・・・勿論その隙をデューンが逃すわけがなくガタツクに光線を放つが・・・

ガタツク「同じ手が何度も通じると思うなよ!!!クロツクアップ!!!」

電子音「CLOCK-up」

ガタツクは紙一重で光線を交わすとデューンの後ろに回り込みカリバーでライダーカッティングを発動させて一気に決めてやるうとしたのだが・・・

デューン「ふん・・・遅いぞ」

ガタツク「なっ!?・・・」

デューン「消える!!!」

ガタツク「ぐあああああああ!!!」

なんとガタツクが斬りつけたのはデューンの残像であったのだ・・・まさか光の速度を超えるクロツクアップをも惑わず程のスピードで移動していたとはガタツクも思わず戸惑っていた隙に光線を浴びせられてガタツクは琢磨の姿に戻されてしまう・・・

デューン「ふっ・・・あつはははははっ!!!」

フラワー「もう止めてちょうだい!!!」

笑い声を上げるデューンにフラワーが叫ぶ・・・そして次はお前の番だとデューンがフラワーのほうを向くのだがそこにブロッサムとハイパーカブトが立ちふさがる。

ブロッサムキュアフラワーに手出しはさせません!!!」

ハイパーカブト「絶対にフラワーには指一本触れさせない!!!」

ブロッサム「はあああああー!!!」

ハイパーカブト「うおおおおおー!!!」

ブロッサムはタクトをハイパーカブトはパーフェクトゼクターを構えていきデューンに立ち向かうだがデューンは指を二人に向けて大爆発が起こる・・・爆風がなくなるころには変身が解除されたつぼみと大人が立っていた・・・タクトとパーフェクトゼクターが地面に突き刺さる頃には二人は力尽きて倒れこんでしまうしまう・・・

フラワー「つぼみ!!!大人!!!」

シプレ「しっかりするですう!!!」

デューン「さあ行こうか?キュアフラワー」

シプレは呼びかけるのだが当然反応がない・・・そこにデューンが迫っていく手を伸ばすのだがフラワーが応じるわけがなくデューンにキックを放っていくのだがデューンは両腕でガードする。二人は光の速度で攻防を繰り返す・・・月光が二人を照らす中でフラワーのパンチをデューンが受け止めるとそのまま光線を浴びせて地

面に彼女を叩きつけてしまう・・・土煙が消えると穴が開いた地面には薫子がグッタリしているのだった・・・

コツペ「グアアアッ!!!」

その姿にコツペが唸るとデューンに向かう・・・だが光線を浴びせられてあえなく散ってしまふ

デューン「妖精如きが生意気な」

薫子「コツペ・・・」

薫子は力なくコツペの名前を言うとそのまま意識を手放してしまう・・・すると月明かりが何かにさえぎられてしまふ・・・なんと空にはデューンの移動要塞である惑星城が浮かんでいたのだ・・・

サバ　ク「お迎えにに上がりましたデューン様」

つぼみ「ダメ...」

大人「ぐう...ま、待て・・・デューン...」

惑星城からサバ　クの声がするとゲートが開き光が発せられる・・・意識が残っていたつぼみと大人は力なくそう言うのだがそれもむなくデューンはそれを無視して薫子を抱いて惑星城の中に消えてしまふ・・・

つぼみ「お、おばあ・・・ちゃん」

大人「...くっ...」

大人とつぼみは何もできずにそのまま力尽きてしまふ・・・

場面は変わり惑星城からデューンは地球を眺めながら薫子とかつての事を語り合う・・・まるで昨日の事のように・・・  
デューン「覚えているか？キュアフラワー・・・かつて私とお前が戦ったこの場所を」

薫子「・・・はっ!!!...こころの大樹」

薫子が声を上げるとそこにはいつきがサンシャインとして覚醒した時にポプリの守りの力で封印した心の大樹が現れたのだ。プリキュアパレスに守られたいたはずなのに・・・まさかデューンに見

つかってしまっただのか・・・薫子がそう考えているうちにデュオンが薫子のペンダントを奪う・・・

薫子「何をするのぉ!!!!!!」

デュオン「私の力を返してもらおう」

デュオンはペンダントを粉々に砕くと彼にまがまがしい赤い光が集まると少年のから青年に成長するかのように姿が変わる・・・そして守りの力の決壊を簡単にに砕いてしまう・・・

デュオン「来い・・・」

気がつくとき薫子はこころの大樹の前に立たされたいた・・・そして後ろにはデュオンが立っていて・・・

デュオン「見るがいい・・・こころの大樹が枯れる瞬間を・・・」

薫子「お止めなさい!!!!!!」

デュオン「お前が後生大事に守ってきたものを全て滅ぼしてやる」

薫子はデュオンにそう叫ぶのだがそれも彼には無駄でありこころの大樹に彼が手を触れるとその大樹は枯れてしまいそのまま倒されてしまう・・・

薫子「なんということを・・・」

デュオン「心の大樹は滅びこれで地球を守るものはなくなった・・・

・さあ地球の終わりだ」

デュオンの言葉は現実となり世界中に砂漠の種「デザートデビル」

がばらまかれてしまい全世界を破壊する・・・それは世界の終わりを示すかのように・・・

デュオン「人間どもよ・・・お前達の地球は我々（砂漠の使徒）によって征服された・・・海も川もお前達人間も全て砂に埋もれるがいい!!!!!!はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!!!」

薫子「地球が・・・」

地球がドンドン砂漠になっていく様をただ見ることしかできなかつた・・・

つぼみ「おばあちゃん・・・」

シプレ「つぼみ．．．つぼみ!!!」

シプレの呼びかけにやっとつぼみたちが目覚める．．．目覚めた場所は植物園だった。

えりか「あれ？アタシ何でここに？」

大人「うとう．．．皆無事か？」

琢磨「何とか五体満足．．．」

傑「どうして俺達は此処に？．．．」

タ「分からない．．．いつつう．．．体中に激痛が．．．」

つぼみ「4人とも大丈夫ですか？」

大人「何とか．．．」

つぼみたちとは違い人体に多大な影響を受けるライダーシステム．．．デューンから受けたダメージはかなりのものであり大人達4人はポロポロであった．．．だが今はそんな事はどうでもいいと何とか立ち上がる．．．するとそこにコフレがえりかの顔に飛びつく

コフレ「大変ですう!!!大変ですう!!!」

ゆり「どうしたの？」

ポプリ「このころの大樹がかれちゃったでしゅ!!!．．．守り切れなかつたでしゅ．．．」

いつき「ポプリ．．．」

いつき「ポプリ．．．」

ゆり「このころの大樹が枯れてしまったと言う事は」

タ「まさか．．．」

大人「考えたくないが．．．あり得る．．．」

8人は急いで植物園の外に出る．．．すると辺りは砂漠と化していた．．．まるで文明が滅んでしまったかのようだった．．．

つぼみ「あ．．．」

えりか「何これ．．．」

いつき「たった一晩で砂漠に．．．」

ゆり「デューン仕業ね．．．この温室だけはコッペさまが守ってくれていたんだわ」

つぼみ「お母さん．．．」

えりか「つぼみ・・・待って!!!」

いつき「僕も・・・」

ゆり「コツペさま・・・ここをお願いします」

大人「皆・・・一旦解散だ・・・後で此処に集合しよう」

夕「うん。」

琢磨「ああ。」

傑「・・・了解」

大人達も一度家族のもとに戻るべく一度解散する・・・一面は砂漠だらけでかつて家だったものも砂に埋もれて町の面影などどこにもなかった・・・ゆりのアパートも、いつきの家も、つぼみとえりかの家も・・・大人達の家も全て砂に埋まっていた・・・また人々はクリスタルのようなものに変えられていたのだ・・・つぼみ、えりか、いつき、ゆり、大人、琢磨、傑、夕の家族も・・・8人は絶望のどん底に叩き落とされた気分だった・・・中でもつぼみはショックが大きかったようで自分の家の前で涙で顔を濡らすのだった

全員一度植物園の温室に集まり状況を報告する・・・

ゆり「無事なのは此処だけのようね・・・」

つぼみ「はい・・・」

ゆり「とにかく中に入りましょう」

8人が中に入ろうとするのだがえりかがフツと後ろを向く・・・何か気配を感じたのだが・・・気のせいかな？

いつき「どうしたんだいえりか？」

えりか「ううん・・・何でもない」

気のせいかと思いい温室に入ろうとしたのだがそこに何か近づいてきた

？「えりか!!!」

えりか「ああああっ!!!?・・・いたたた・・・あ!!!もも姉!!!」  
ももか「よかった・・・心配したんだから!!!」

えりか「え．．．うん！！！」

なんとその正体はえりかの姉のももかだった．．．ももかは目に涙をためながらえりかに抱きつく．．．えりかも同じように涙ぐみながらそう答える。

いつき「これって一体．．．」

傑「分からない．．．だがももかさんが無事なら他に生存者がいるかも．．．」

大人「ああ。その可能性は高い．．．！！．．．皆あれを！！！」

大人の言葉に全員が前を見る。何とそこにはかつてデザトリアンにされて一度つぼみ達プリキュアに救出された人々だったのだ．．．いつきの兄のさつき、つぼみのクラスメイトのケンジやななみ、ハヤトまでもいたのだ．．．どうしてだ？．．．

つぼみ「番くん．．．」

ゆり「ハヤトくん．．．」

いつき「お兄様！！！」

つぼみ達は自分達がかつて助けた人々の所に向かう．．．大人達は後ろでこの状況を冷静に分析したいたのだが答えが見つからない．．．なぜだ？．．．植物園の温室以外は砂で埋もれているし人々もクリスタル化されたのに．．．

大人「．．．これは．．．」

琢磨「どういうことなんだ．．．奇跡か？．．．」

傑「．．．それ以外表現の言葉が見つからない」

夕「でもどうして？．．．」

大人「分からない．．．だが一つ言えるのは彼らの心はまだ諦めていない」

大人の言葉を聞いてつぼみは薫子に聞かされた事を思い出していた．．．

つぼみ「（あきらめない．．．自分だけの心の花．．．同じものは一つもない．．．大切な花）」

つぼみ「私は．．．私は．．．くじけてしまいそうだった自分の心

に・・・堪忍袋の緒がきれましたあ！！！！」

えりか「つぼみ！！？」

突然そう叫んだつぼみに周囲の視線が集まるのだがつぼみはかまわず言葉を続ける

つぼみ「皆さんの心が希望を失わない限りプリキュアは決してあきらめる事はありません！！」

大人「プリキュアだけじゃないだろ？・・・」

つぼみ「大人さん？・・・」

琢磨「ライダーも・・・だろ？」

傑「ふっ・・・」

夕「ふふっ」

ゆり「うん」

つぼみの言葉に絶望に落ちていたえりか、いゆき、ゆり達プリキュア、そして大人、琢磨、傑、夕のライダー達にも戦う勇気が蘇った・・・必ず地球を元に戻すと8人は目で誓い合うのだった。

デザートデビル「グオオオオオオオ！！！！！！」

ゆり「はっ！？」

つぼみ「皆さん早く中へ！！！！私達は8人ですが・・・でも8人ではありません！！！！」

いつき「ああ！！心は皆とつながっている」

えりか「よーし！！こうなりゃ絶対に負けらんないっての！！！！」

ゆり「行くわよ・・・皆」

大人「ああ。必ず俺達が」

琢磨「地球を」

傑「世界を」

夕「守って見せる！！！！」

全員変身アイテムを取り出す・・・そして・・・

シプレ&コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですう！！！！」(ですつ&でしゅ)



つぼみ&えりか&いつき&ゆり「プリキュア・オープンマイハート  
!!!!!!」

それぞれ赤、青、黄色、藍色のプリキュアの種をココロパヒューム  
シャイニーパヒューム、ココロポットにセットしていき赤、青、金  
銀の4色の光に包まれていくそして光がなくなる頃には4人の少女  
達は伝説の戦士にへと姿を変える。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!!」

4人「ハートキャッチプリキュア!!!!!!」

大人&琢磨&傑&タ「「「変身!!!!!!」」」

電子音「「「HENSIN!!!!」」」

大人&琢磨&傑&タ「「「キャストオフ!!!!」」」

電子音「「「CAST OFF」」」

電子音「「「CHANGE BEETLE」」」

電子音「「「CHANGE STAG-BEETLE」」」

電子音「「「CHANGE BEETLE」」」

電子音「「「CHANGE BUTTERFLY」」」

シプレ「シプレ達も変身ですう!!!!!!」

コフレ&ポプリ「はいですっ!!!!(でしゅ)」

全員編塩を終えると今度はシプレ達がマンとに変化してブロッサム  
達に装備される。

ブロッサム「行きます!!!!!!」

ブロッサムの合図に先ずはプリキュア達4人がマツハのスピードで  
デザートデビルに攻撃を仕掛けていくそしてよめいたところをカ  
プト、ガタック、ダークカプト、フェアリーの4人がデザートでビ  
ルの足元に近づき・・・

電子音「「「ONE TWO THREE」」」

カブト&ガタツク&ダークカブト&フェアリー「ライダーキック！  
！！」

電子音「「「RIDER KICK！！！！」」」  
カブト&ガタツク&ダークカブト&フェアリー「はああああー  
ー！！！！！！」

4人のライダーキックでデザートデビルをのバランスを崩して倒す。  
・デザートデビルはすぐに起き上がるのだがそこに背中にブロッサム  
のパンチを喰らいバランスを崩すとそこにムーンライトのパンチと  
キックを受けてしまい反撃が出来ないでいた……

ケンジ「いいぞ！！プリキュア、カブト、ガタツク！！！」  
アヤ「ダークカブト、フェアリーも頑張つてえ！！！！」

仲間達の声援が更にプリキュアとライダー達に力を与える……デザート  
デビルもいつまでもやらねばなしではないぞと背中 of 蛇のような  
ものでブロッサム達に攻めこんでいくのだがそれも8人のスピード  
には追いつけずに逆に自身を自滅に追い込むことになる……  
そしてスタミナ切れを起こしたところにムーンライトのキックが再び  
ヒットしてデザートデビルは砂に埋まったビルに身体を叩きつけ  
る……

カブト「皆離れてる……はあああつ！！！！」

カブトはビルにカブトクナイガン・ガンモードで攻撃する。デザート  
デビルが怯んでいる隙にビルの一部を破壊してデザートビルを  
下敷きにする……。

ムーンライト「今よ！！」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「鏡よ鏡プリキ  
ュアに力を！！！！世界に輝く一面の花！！！！ハートキャッチプリ  
キュア・スーパーシルエツト！！！！」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「花よ咲き誇れ  
！！！！プリキュア・ハートキャッチオーケストラ！！！！」

ムーンライト「ふん！！！！」

サンシャイン「はああっ！……！」

マリン「たああー！……！」

ブロッサム「たあああー！……！」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「はあああああ  
あああああああああ！……！！……！！……！！……！！……！！」

デザートデビル「グオオオオオオオオオオ！……！！」

デザートデビルの浄化が完了してすべてが片付き高に見えたのだが……  
なんと地中からもう一匹デザートデビルが出現したのだ！！  
！。

ブロッサム「そんなあ！？」

カブト「これじゃきりがない！！！」

8人はまた倒そうと身構えたその時……

電子音「RIDER - SLASH！！！」

電子音「RIDER - STING！！！」

突如デザートデビルに攻撃を放ったものがいた……その陰には8  
人が見おぼえがある人物だった……そうその正体は剣が変身する  
サソード、須藤が変身するザビーだったのだ

カブト「無事だったのか！！」

サソード「当たり前だ……俺は生き残ることのいおいても頂点に  
立つ男だ」

ザビー「何とか間に合ったみたいだね」

ブロッサム「お二人とも無事でよかったです」

だが歓喜にひあるのもそこまででありデザートデビルは立ち上がり  
攻撃しようとするのだが再度デザートデビルに攻撃を放つ影があっ  
た……

電子音「RIDER - SHOOTING！！！」

電子音「RIDER KICK！！！」

電子音「RIDER - PUNCH！！！」

電子音「RIDER BEAT！！！」

その正体はすぐに理解できた……。矢車が変身するキックホッ

パー、影山が変身するパンチホッパー織田が変身するヘラクレス、大輔が変身するドレイク、そして総司が変身するカブトと新が変身するガタツクであった。

マリリン「皆・・・来てくれたんだあ!!!」

キックホッパー「当然だ・・・」

パンチホッパー「俺達もライダーの端くれだからな」

ドレイク「風は気まぐれ・・・ですが私は呼ばれば何処にでも現れますよ」

マリリンの言葉にキックホッパー達がそう答える・・・世界中に散り散りになった仲間達が再び此処に集まった・・・しかし喜んでいる暇はないとムーンライトが口を開く

ムーンライト「喜ぶのはあとよ・・・今はあのデザートデビルを倒すわよ!!!」

全員「おー!!!」

ムーンライトの言葉に全員が答えデザートデビルに全員の必殺技を叩きこむ・・・

ブロッサム&マリリン&サンシャイン&ムーンライト「集まれ花のパワー!!!」

ブロッサム「ブロッサムタクト!!!」

マリリン「マリインタクト!!!」

サンシャイン「シャイニータンバリン!!!」

ムーンライト「ムーンタクト!!!」

ブロッサム「花よ輝け!!!プリキュア・ピンクフォルテウェイブ!!!」

マリリン「花を煌け!!!プリキュア・ブルーフォルテウェイブ!!!」  
サンシャイン「花よ舞い踊れ!!!プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!」

ムーンライト「花よ輝け!!!プリキュア・シルバーフォルテウェイブ!!!」

電子音「「「ONE TWO THREE」」」」  
カブト&ガタツク&ダークカブト&フェアリー「ライダーキック！  
！！」

電子音「「「RIDER KICK！！！！」」」」

サソード「ライダースラッシュ！！」

ザビー「ライダーステイング！！！！」

ドレイク「ライダーシューティング」

キックホッパー&パンチホッパー「ライダージャンプ」

キックホッパー「ライダーキック！！！！」

パンチホッパー「ライダーパンチ！！！！」

カブト&ガタツク「ライダーキック！！！！」

ヘラクレス「ライダービート！！」

電子音「RIDER - SLASH！！！！」

電子音「RIDER - STING！！！！」

電子音「RIDER - SHOOTING！！！！」

電子音「RIDER JUMP&RIDER KICK！！！！&R

IDER - PUNCH！！！！」

電子音「「RIDER KICK！！！！」」

電子音「RIDER BEAT！！！！」

全員の必殺技がデザートデビルに叩きこまれるとデザートデビルは  
消滅するこれで当分は大丈夫だろう……

ムーンライト「心の大樹を救うためにもすぐに薫子さんを助けに行  
きましょう」

ブロッサム「私……おばあちゃんを助けるためなら何だって出来ま  
す」

サンシャイン「でも一体どこに？」

カブト「……恐らく敵のアジトだろう……だがそれがどこにあ

るかが問題だ」

確かに敵を倒しに行こうと思っただけでも場所が分からなければ話にならない……そう思っていた時コツペが空を指差す……

マリ「コツペ様？」

ブロッサム「もしかしてあそこにおばあちゃんがいるんですか？」

ダークカブト「宇宙……か……」

マリ「うわぁ！？……おお？」

コツペがマリを自分の背中に乗せる……

サンシャイン「コツペ様も一緒に来てくれるとか？」

どうやらそのようである……

マリ「目指すは敵のアジト！！いざしよっばーっ！！！！」

カブト（大人）「天道さん達は地球を頼みます……デザートデビルから皆を守ってください」

カブト（総司）「……いいだろう。此処はお前らに譲ってやる……

・だから必ず勝って来い！！！！」

8人「はい！！！！」

天道の言葉に全員が力強く返事を返す……必ずデューンを倒し地球を守ると……8人が飛び立とうとしたその時後ろから番達が彼らを呼びとめる。

ももか「頑張ってください！！！！」

さつき「どうかケガをしないように」

マリ「は……はい」

サンシャイン「ありがとうございます」

ももかとさつきの言葉にマリとサンシャインが答える……どうやら自分達の正体に気付いていないらしい……複雑な気持ちだが絶対に負けられないと言う気持ちが高まるのだった……愛する人々の為に……

アヤ「皆で無事を祈ってます」

ブロッサム「はい」

かなえ「あ、あの……よかったら皆さんの写真を撮らせてください

！！」

ブロッサム「……」

ブロッサムはどうかと困ったがムーンライト、マリン、サンシャインの顔を見てOKだと判断し……

ブロッサム「はい。よろこんで！」

カプト（大人）「プレミアものだぜ！大事にしなよ？」

ガタック（琢磨）「一生の宝にしてくれよ！！」

かなえ「それじゃあ笑って！！」

かなえがカメラで8人の写真を撮る……恐らく彼女達にとっても……そしてつぼみたちにとっても一生の宝になるだろう

写真を撮り終わるとブロッサム&カプト、マリニア&ガタック&コッペ、サンシャイン&ダークカプト、ムーンライト&フェアリーのグループに分かれて飛び立つ……総司達は彼らを見送りながら彼らに声援を送る……

空に飛び立ったブロッサムは砂漠化した町を見渡していた……必ずこの世界を守ると心に誓いながら……

ブロッサム「（必ず私達が助けます……どうかそれまでまっすぐにしてください！！！！）」

その頃惑星城では……

デューン「プリキュアとライダーが近づいている？……こころの大樹は枯れたはず……妖精もプリキュアも……もといただの間であるはずにライダーがなぜ生きている？」

デューンはそうサバクに問うのだがサバクの代わりに薫子が答える……

薫子「こころの大樹は完全には枯れていない……希望にあふれた心をもつ人々がまだ残っていると言うことよ！！」

サバク「デューン様……プリキュアとライダーが惑星城に着く前に必ずや我々の手で始末します」

デューン「ああ……任せたよ」





第7話「砂漠王デューン登場・・・地球最後の日!？」（後書き）

遂にハトプリも最終章突入・・・この小説も終わってしまいました。  
さびしいですが仕方ありませんね。

さて今回はクモジャキーとコブラージャの最期そしてゼロメンバー  
ズの正体を明かします。

次回もお楽しみに

特別編「花咲家の新しい家族〜つぼみのお姉ちゃん修行〜」(前書き)

今回はつぼみのお姉ちゃん修行エピソードです。

クリスマスエピソードを優先したら書けなかったので^^ ;  
ではどうぞ

特別編「花咲家の新しい家族」つぼみのお姉ちゃん修行」

いつも通り大人は学校での授業が終わり琢磨、傑、夕と4人で帰宅するのだった……が今日は事情が異なっていた……

大人「つぼみ……どうしたんだろ？」

琢磨「さあな？……えりかからの話だから確かなはずだけど……」

傑「とにかくつぼみの家に行ってみよう。百聞は一見に如かずだ」  
夕「そうだね」

そう突然えりかからメールが来てつぼみがつぼみが学校を早退したと言った話を聞き4人は心配してのだった……つぼみに電話をかけても繋がらないしメールの返事もない……いったい何があったんだと大人は更に不安になったのだった……とにかく今はどうということなのか事実確認がしたいところだった……

つぼみの家に着くと既にえりか、いつき、ゆりがいてつぼみとつぼみの父親の陽一

大人「つぼみ!!!!」

つぼみ「大人さん!!!!……どうしたんです？凄くあわてた表情ですけど」

大人「どうしたんですかって……お前が学校を早退したってえりかに聞いて心配になって様子を見に来たんだよ!!!!……何度電話しても出ないし、メールも返事無しだし……」

つぼみ「早退……ああそれはですね実はお母さんの具合が悪いって連絡があつて……」

琢磨「具合が悪いって……大丈夫なの？」

つぼみ「はい!!!実はお母さんに赤ちゃんが出来たって……」  
傑「へえへえ赤ちゃんが……」

夕「成程だから病院に……」  
大人&琢磨&傑&夕「ええええええええええ!!!!!!????????」

えりか「ちょ、落ち着いて4人とも!!」

大人達4人は驚きが隠せずに思わずそう叫んでしまう・・・えりかは4人をなだめようとそう言っただけで落ち着かせる・・・そして数十分後・・・

大人「はあ、やっと精神的に落ち着いてきた・・・とにかくおめでとう!!これでつぼみのお姉ちゃんになるわけだ・・・とにかくそういうことだったのならよかったよ。」

琢磨「ほんとだよ、大人のやつ心配しまくりなんだから」

大人「ちょ、おま・・・余分な事を!!」

傑「確かに・・・学校でも授業そっちのけでつぼみと”連絡とれない”って騒いでたよな」

大人「・・・」

タ「アタシが呼びかけても上の空だったしね」

大人「う、うるさいなあ、もう!!」

大人は3人に弄られながらもそう言い返す・・・するとえりか達もクスクスと笑い周囲の雰囲気が見るようになるのだった・・・そして時間は流れ今日の所は全員解散することとなった・・・

つぼみ「明日は日曜日・・・頑張るぞ!!!」

その日の夜・・・つぼみは母親のみずきの代わりに夕食を作ることにしたのだが・・・

つぼみ「とほほ・・・」

薫子「そんなにあわてなくても大丈夫よ」

なにせ普段料理しないこともあり初料理は目玉焼きは焦がすはご飯はおかゆにしてしまうのは失敗だらけだったが・・・陽一はつぼみの料理を美味しいと言って食べてくれた・・・つぼみは初めて料理をしてみて普段母親がしている事はとても大変な事であるのだなと改めて感じる事が出来たのであった・・・そして翌日の日曜日・・・

薫子「じゃあ私は出掛けるわね」

つぼみ「はい」

薫子「あら・・・素敵なお客さまよ」

つぼみ「?・・・皆!!」

いつき「僕達も手伝うよ」

えりか「たまにはお花さんもいいかなって」

大人「助っ人は多いほうがいいだろ？」

夕「ふふ」

つぼみ「大歓迎です!!!」

思わぬ助っ人の登場につぼみは感激してうれし涙で目を輝かせる・  
・そして全員が作業を分担して仕事をするのだがこれが意外に重労働であったのだ・・花の移動や手入れ、更には通りの掃除までと幅広く6人でもかなりの仕事の量となった・・・  
いつき「毎日この通りを掃除しているのかい？」

つぼみ「はい。お花は土が落ちたり葉っぱが落ちたりするので気をつけないとすぐに汚れてしまっんです」

いつき「ふ〜ん・・ん？」

シプレ「お掃除ですう!!」

コフレ「おてっだいですう!!」

いつき「ははははっ!!!」

シプレ「コフレがしつぽを使って通りを掃除しているのを見ていつきは笑う・・すると陽一が植木鉢を持ってくる・・がゆりとえりかがシプレ達を見られないようにしてその場をやり過ごす・・・えりか「お花屋さんの仕事って結構重労働だね」

つぼみ「はい。でもお花が好きな人には最高の仕事だってお母さんが言っていました。私もそう思います皆がお花で笑顔になったり喜んでくれるのがうれしんです!!」

大人「・・・(つぼみはホントに花が好きなんだな・・・昔からそうだったけど今もこれからも変わる事はないだろう・・・この笑顔を守るためにも俺達は負けるわけにはいかないんだよな)」

陽「そろそろ開店しようか」

つぼみ&えりか「はい!!!」

そう実は今までしていた仕事は店を開店する前の準備だったのだから、これからは本番だ。つぼみは更に気合いを入れるのだった。

場所は変わり砂漠の使徒のアジト……

ダークプリキュア「サバ　ク博士……今度は私に出撃命令を……」

「

サバ　ク「ダーク……しかしお前はまだパワーアップしたばかりだぞ？今出てダメージを受ければまたお前はメデイカルポット行きだ」

ダークプリキュア「しかし……私なら大幹部どもとは違い必ずやつらを!!!」

サバ　ク「カブトとガタツクはハイパーフォームにパワーアップを果たした……新しいライダーのダークカブト、フェアリーも油断ならん強敵だ……お前は重要な戦力だ……失うわけにはいかん!!!」

マンティス「では……我々とともに出撃すると言っただけか？しょう?」

ダークプリキュア「貴様……新参者の分際で!!!」

アント「何を焦っているのさ?……そんなにキュアムーンライトを倒す事にこだわっているのかい?」

ダークプリキュア「ふん……貴様らこそ自分達が倒さなければならぬ相手は私に倒されるのが怖いだけじゃないのか?」

ホーンド「さあ?どうでしょうかね……」

モス「ふふつ貴女なんか倒せるとは思えないけどな?」

ダークプリキュア「何だと!!!??」

サバ　ク「ええい喧嘩はやめろ……分かった今回はダークプリキュアおよびゼロメンバースで作戦を進めよ。ゼロメンバースはダークプリキュアの指示に従うのだ……よいな」

ゼロメンバーズの4人「はっ！！！！！」  
ダークプリキュア「必ず奴らを・・・」  
サバク「期待しているぞ・・・」  
ダークプリキュア「必ずや！！！！・・・行くぞ！！！」  
マンティス「はいはい・・・」  
ダークプリキュアはゼロメンバーズを率いその場を後にするのだっ  
た・・・

その頃花咲家ではというと結婚式のブーケを依頼されたのだった。  
・しかしブーケはみずきの担当であったためつぼみはどうすればい  
いかと奮闘中であった・・・

つぼみ「う〜ん・・・ふ〜む」

陽「ブーケ悪戦苦闘してるみたいだね」

つぼみ「どの花を使うか・・・どんなデザインにするか・・・もう頭  
の中が混乱しちゃって」

陽「お母さんに聞いてみたらどうかかな？」

つぼみ「・・・はい！！！」

つぼみは思い切って母に頼ることにした・・・こういう時こそ母に  
アドバイスをもらいよりよい物を依頼してくれた人に届けたい・・・  
その為にもプロである母に聞くのがいいと判断してのことだった・・・

・早速母のみずきと連絡を取る

つぼみ「二人は親に結婚を反対されてずっと式をあげていなかった  
んです。でも子どもが二人生まれてようやく結婚を許してもらえて  
しきをあげてもらったことになったそうです」

みずき「じゃあ子供と一緒に式をあげることになるのね？それって  
最高の幸せよ！！！」

つぼみ「成程！！二人だけじゃなくて家族みんなでお祝いできるん  
ですもんね！！・・・あ・・・」

みずき「どうしたの？」

つぼみ「長女のかすみちゃんが無処かさびしそうな顔をしていたん

です」

みずき「そう・・・それでどんなブーケにしたらいいか迷っているのね」

つぼみ「はい。お母さんはどう思いますか？

みずき「式を挙げる人にも・・・かすみちゃんにも家族みんなに幸せを運ぶようなブーケがいいと思うわ・・・つぼみならきつと大丈夫。大事なのはブーケを作るつぼみの気持ちを込めることよ」

つぼみ「ありがとう・・・お母さん！！また何かあったら電話しますね。」

みずき「頑張れつぼみ！！」

つぼみは母親に励まされて自信をつけて電話を切る・・・みずきはわが娘の成長を見守る様にそう言うのだった・・・

つぼみ「お父さん、ブーケを作るためにかすみちゃんに会いたいですけど」

そして次の日つぼみと陽一はブーケを作るためにかすみに会うことにした・・・その途中つぼみは陽一にこんな事を聞くのだった・・・  
つぼみ「ねえお父さん・・・私が生まれた時の事聞いてもいいですか？」

陽一「ああ、いいとも。つぼみが生まれた日は一日中雨でな生まれただかりのつぼみだけが泣いていてお父さんもお母さんもおばあちゃん達もみんな笑っていていつの間にか雨が止んでいて木漏れ日が花のつぼみを照らしていてね・・・そうしたらみずきが言ったんだ。"つぼみはやがて美しい花を咲かせる"・・・"その花はきつと皆に幸せを運ぶ・・・だから名前をつぼみにしたい"って」

つぼみ「それで私の名前は"つぼみ"に」

陽一「赤ちゃんにも素敵な名前をつけようね」

つぼみ「はい！！！！」

自分の名前の由来を聞いて感動するつぼみ・・・自分の妹か弟にも素敵な名前を付けてあげたい・・・そう思っている霞の家に向かうの



だった・・・

かすみ「姫！！お迎えにあがりました。 貴方は？ 私の西の国の皇子です。」

つぼみ「こんにちは！！！」

かすみ「？お花屋さん・・・」

つぼみ「お姫様ですか？」

かすみ「アタシの考えたお話」

つぼみ「今日はね、かすみちゃんに聞きたい事があるんです・・・ブーケの事なんですけど」

かすみ「ブーケなんか知らない！！・・・アタシに関係ないもん」

陽「かすみちゃんお父さんとお母さんは？ひとりで遊んでいるのかい？」

かすみ「・・・パパもママもお店が意思がしいから・・・でもそれだけじゃないもん・・・妹が生まれてから妹ばかり可愛がって・・・アタシの事なんか忘れちゃってるもん」

陽「・・・かすみちゃん、パパもママも絶対かすみちゃんの事を忘れてなんかいないよ」

つぼみ「私もそう思います。あ、そうだかすみちゃん一緒に結婚式ブーケを作りませんか？」

かすみ「アタシが？」

つぼみ「ええ。家族みんなで幸せをは請うようなブーケを。お父さん、お母さん、かすみちゃん、勿論妹さんにも」

かすみ「・・・その妹があたしから・・・パパとママを取っちゃったんだもん！！！」

つぼみ「ああ！！・・・かすみちゃん！！！」

かすみはそう言って走り出してしまった・・・そして近くの土手で一人しよぼくれている時・・・そこにダークプリキュアとゼロメンバーが姿を見せる・・・

マンティス「ふっ・・・ちょうどいいのを見つけたな・・・」

かすみ「!!!・・・誰？」

マンティス「我々は砂漠の使徒の幹部ゼロメンバース」

ダークプリキュア「そして私はダークプリキュア」

アント「君のこころの花プリキュアとライダー達を倒すのに使わせ  
てもらおうよ？」

ホーンド「ふっふっふっ!!!」

かすみ「ああ・・・」

モス「こころの花よ出て来なさい!!!」

かすみ「うわあああああっ!!!!!!」

ダークプリキュア「さあ〜デザトリアンのお出ましだ!!!」

ダークプリキュアの言葉とともに事前に持ってきたいた砂漠の使徒  
製のサーベルと合体させる。すると西洋の騎士をモチーフにしたデ  
ザトリアンが現れるのだった

つぼみ「かすみちゃんあ〜ん!!!何処ですかあ?かすみちゃんあ〜ん!

!!!・・・はっ!!!デザトリアン?」

シプレ「こころの花を奪われたのはかすみちゃんですう!!!」

シプレがかすみを封印された水晶玉をもってくる・・・どうやら砂  
漠の使徒の誰かにデザトリアンにされてしまったらしい・・・

つぼみ「かすみちゃん今助けます!!!」

つぼみは一人でもかすみを助けて見せるとココロパヒューム取り出  
して大地の戦士へと変身するべく先達の準備をする。

シプレ「プリキュアの種いくですう!!!」

つぼみ「プリキュア・オープンマイハート!!!」

つぼみは光を放ったネグリジェのようなも姿で赤いプリキュアの種  
をココロパヒュームにセットしていき香水を自分の身体に吹き抱え  
ていく。すると衣装がプリキュアの姿となり髪の毛の色もピンク色  
となると変身が完了する。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!」

デザトリアンは剣を振りかざしながら暴れていく・・・かすみの本

音をさらけ出しながら

デザトリアン「ママも・・・パパも私の事なんなんか好きじゃないんだあ！！！！！」

ブロッサム「いいえ子供が好きじゃない親なんていません！！！！どんな子供も愛があつて生まれてくるんです！！だから赤ちゃんは幸せを運んでくるんです！！！！」

デザトリアン「赤ちゃん・・・幸せ・・・」

ブロッサム「私の家にも赤ちゃんが生まれますそれが楽しみでしようがないんです！！！！思い出してください！！！！かすみちゃんだって妹さんが生まれるのを楽しみに待っていたはずですよ！！！！」

デザトリアン「私が妹を・・・妹と会うのを楽しみにしてた・・・」  
ブロッサム「かすみちゃんも本当は妹さんが大好きなんですよね？」  
デザトリアン「うん・・・大好き・・・」

つぼみの説得にそう答えるデザトリアン・・・私はただもつとパパやママに甘えたいだけ・・・でも二人とも私よりも妹を可愛がる・・・寂しいゆえに妹に嫉妬を抱いていたのだ・・・だが本当は・・・妹が大好きなんだ・・・そんな思いを抱いたかすみのデザトリアンは攻撃をやめてしまう・・・だがその有様を嘲笑う声が後ろから響く・・・声の主はマンティスだ・・・

マンティス「ふん・・・くだらねーな・・・家族？愛？・・・バカバカしくて反吐が出るぜ」

ホーンド「そんなものがあるから人は弱いんですよ・・・我々のように心を捨てることこそ己を生かす道なのですよ！！！！」

ブロッサム「下らなくなありません！！！！かすみちゃんの家族や妹さんを思う気持ちを闘いの道具に利用するなんて・・・私堪忍袋の緒がきれましたあ！！！！！！」

アント「うるさいね・・・じゃ行くよ？」

ホーンド「貴女を餌にカブト達をおびき寄せさせてもらいます」

モス「大人しくアタシ達に負けるのね」

ブロッサム「はああああああ！！！！！！！！！！」

ブロッサムはダークプリキュア、マンティス、アント、ホーンド、モス。更にデザトリアンの大勢を相手でも怯むことなく向かっていく。自分と同じ”お姉ちゃん”のかずみを助けるために・・・だが・・・

マンティス「マンティス・デスウェーブ!!!」

ブロッサム「うわあああああつ!!!」

ブロッサムはマンティスの風の技にあえなく飛ばされてしまう。そこにデザトリアンの剣が迫る。マズイと思ったその時光の壁がブロッサムを守った・・・この技はまさか!?

マリ「ブロッサム!!!」

そこにはマリ、サンシャイン、ムーンライト、更にはカブト、ガタック、ダークカブト、フェアリーの姿が・・・そうブロッサムのピンチをシプレから聞いた7人が駆け付けたのだ。

ブロッサム「皆!!!」

ダークプリキュア「来たか・・・キュアムーンライト!!!」

マンティス「探す手間が省けたな」

アント「今日こそ・・・」

ホーンド「貴方を・・・」

モス「この世から消す!!!」

ムーンライト「いくわよ!!!」

ムーンライトの合図とともに全員がそれぞれの敵と戦うために散る。カブトVSマンティス、ガタックVSアント、ダークカブトVSホーンド、フェアリーVSモス、ムーンライトVSダークプリキュア、そしてデザトリアンVSブロッサム・マリ・サンシャインと別れることとなったのだ

カブト「マンティス・・・なぜ俺を必要以上に狙う?・・・この世に二人の俺はいらぬとはどういう意味だ?」

マンティス「お前が太陽ならば俺は太陽から生まれる黒点のようなもの・・・俺だけじゃない。アントもホーンドもモスも・・・俺と同じ同志・・・貴様らを倒しこの世から消す事が俺達が俺達でいれ

る唯一の手段……」

カブト「俺達の影？……お前がお前でいられる？……太陽の黒点？……お前を生み出したのが俺達であるかのようなセリフだな？……」

マンティス「ふふ……答えはお前を殺す前に教えてやるよ……話は終わりだ……今日こそ貴様を倒す！！！」

デスサイズとデスシックルを構えながらカブトに向かうマンティス対するカブトもカブトクナイガン・アックスモードで応戦しながらもマンティスと互角にやり合うガタツク、ダークカブト、フェアリも同じ状況だ……やはりこいつらは他の連中と何かが違う……いったい何だ？4人の頭の中で戦いながらもその疑問がしつかりとあつた……

ムーンライト「ダークプリキュア……貴女が私を付け狙うのは……彼らと同じ理由なの？」

ダークプリキュア「前にも言ったはずだ……私は月の影の部分だと……光の貴様を取り込み月を一つにすることが私の使命だと！！！」

ムーンライト「どうしてそこまで私を？……」

ムーンライトとダークプリキュアの闘いも前回にまして凄まじさを増していた……互いに譲らずフォルテウェイブや技のぶつかり合いを繰り返して互いに譲らない……

ムーンライト「集まれ花のパワー！！ムーンタクト！！プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ！！！」

ダークプリキュア「闇の力よ集えダークタクト！！プリキュアダークパワーフォルティシモ！！！」

ムーンライト「あああああ！！！！！！」

ダークプリキュア「うわあああああ！！！！！！？」

そして二人の超必殺技はぶつかり合い爆発が起こる……今回は痛み分けて終わったようだ……その頃のブロッサム、マリリン、サン

シャインはというと・・・

ブロッサム&マリリン&サンシャイン「プリキュア・トリプルインパクト!!!」

元々ブロッサムの説得で戦意をなくしかけていたデザトリアンではブロッサム達のチームワークの前では勝負にならずにあと一步のところまで追い詰められていた・・・そして3人は浄化の準備を行う。ブロッサム「マリリン、サンシャイン・・・ひさびさにアレをだしますよ!!!」

マリリン「やるっしゅ!!!」

サンシャイン「ええ!!!」

サンシャイン「集まれ花のパワー!!!シャイニータンバリン!!!はあっ!!!花よ舞い踊れ!!!プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!」

サンシャインがゴールドフォルテバーストの力で黄金の太陽のゲートを作るそして次にブロッサムとマリリンがタクトを構えていくと・・・

ブロッサム&マリリン「はあっ!!!集まれ二つの花の力よ!!!プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ!!!」

二人の合体技がサンシャインのつくった太陽のゲートに向かって発動する・・・そして二人のは太陽のゲートをくぐって身体を金色に輝かせる

サンシャイン「プリキュア・シャイニング!!!」

ブロッサム&マリリン「フォルティシモ!!!」

ブロッサム&マリリン「ハートキャッチ!!!」

3人「はあああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

デザトリアンの身体をハート型に貫いていきそのまま3人は浄化を開始する・・・デザトリアンはそのまま浄化されて消滅してしまいこころの花のクリスタルが現れる。

マンティス「ちっ！！！！・・・このままではまた邪魔がはいるか・  
・今日は引き上げだな」

アント「くそ！！！！」

ホーンド「形勢不利ですね・・・」

モス「もう少しのところでもいつもいつも！！」

ダークプリキュア「はあ、はあ、はあ・・・キュアムーンライト今  
度こそ必ずお前と決着をつける！！！！」

5人は捨て台詞だけ残してその場から消える・・・ブロッサム達は  
こころ花を戻してかすみを元の姿に戻す・・・

そしてかすみを家に送り届けると・・・

かすみの父「かすみ・・・ごめんな寂し想いをさせてしまって」

かすみ「うんうん・・・わがまま言っでごめんなさい・・・アタシ

お姉ちゃんだからちよつとだけなら我慢する」

つぼみ「流石先輩ですね 私ももうすぐお姉ちゃんになるんです。

だからかすみちゃんはお姉ちゃんの先輩です」

かすみ「そうだ・・・つぼみお姉ちゃんアタシにブーケ作る手伝わせ  
て」

つぼみ「はい！！一緒に作りましょう」

ゆり「スズランの花ことばはく降伏の訪れ」

いつき「かすみちゃんの家族にもいっぱい幸せが訪れそうだね」

えりか「うん。そうだね！！そしてつぼみの家族にも」

シプレ「あっ！！！！心の種が生まれそうですう！！はッ！！プリプ  
リプリ・・・プリリッーン」

コフレ「コレでまた少しこころの大樹がげんきになったですっ」

大人「（幸せか・・・つぼみも新しい家族の誕生でちゃんと成長して  
いくんだな・・・あのころが懐かしい・・・それにしてもマンティ  
ス達のあの言動・・・俺達をあそこまでつけ狙う理由は何だ？・・・  
自分を影と称し俺達を倒す事に異常な執着心を持っているが・・・

まあ考えてもしょうがないか・・・遠くない未来に全ての答えがわかる気がする・・・」

夕「どうしたの？大人・・・」

大人「え？・・・ああ、何でもないよ」

その様子を離れて見ていたえりか達・・・だが大人は一人深く考え込んでいた・・・マンティスの言葉・・・その言葉の意味が遠くない未来に解ける気がする・・・その直感は当たっている事にはまだ気がつかなかったのだが・・・

そしてその数週間後かすみの両親の結婚式のブーケが完成し結婚式の写真を陽一がみずきにみせてつぼみがつくったブーケを報告するとあまりの出来の良さにみずきは感動してつぼみを電話でべた褒めするのだった

みずき「つぼみ素敵なブーケね」

つぼみ「かすみちゃんと一緒に家族みんなの誕生花で作ったんです。家族がこれからもしっかりつながっているように願いを込めて」

みずき「そう」

つぼみ「私、もっと頑張ってもっと、もっと立派なお姉さんになります！！」

つぼみは今回の事で確実に自信を付けた。これから生まれてくる新しい家族に恥ずかしくない姉としての立派な姿を見せるためにもっと頑張るという思いを胸に秘めながら彼女は意気込みながら日々を大切に過ごしていくのだった。だがその日常もクリスマスを境に砂漠王に壊されることとなるのはつぼみ、えりか、いつき、ゆりのプリキュア達そして大人、琢磨、傑、夕の4人のライダー達も気づくことなかった・・・着実に地球をかけた最終決戦の時が近づいていると言っ事も・・・



特別編「花咲家の新しい家族」つぼみのお姉ちゃん修行」(後書き)

つぼみのお姉ちゃん回でした

次回はとうとうゼロメンバーズの正体およびクモとコブラの最後で  
す・・・

次回もお楽しみに

第8話「大幹部との最後の闘い！！・・・明かされるゼロメンバーズの素顔」

デューンの圧倒的な力の差に敗北してしまうつぼみ達・・・そして砂漠の使徒の総攻撃により世界は砂漠と化し人々もクリスタルと化してしまう・・・8人は絶望し一度は戦意を失ってしまう・・・だが生き残った人々の声援がつぼみ達に力を与え再び戦意を取り戻す・・・そして8人は砂漠の使徒と最後の戦いに挑むべく敵のアジト・・・惑星城へと爆進するのだった！！！！

第8話「大幹部との最後の闘い！！・・・明かされるゼロメンバースの素顔」

コブラージャ「とうとうプリキュアやライダーと決着をつける時が来たね」

クモジャキー「ああ・・・ふっ・・・」

コブラージャ「何だい？こんな時に」

クモジャキー「プリキュア、ライダーそして俺・・・どちらかが倒れるまで力の限りぶつかり合う・・・俺はこの時を待っちよったぜよ！！！！」

コブラージャ「君って奴は・・・最後まで戦う事にしか興味がないんだね・・・まあボクは君のそう言うバカっぽい所はともかく君が戦っている姿は美しいと思うけどね」

クモジャキー「何ぜよ急に？気持ち悪い」

コブラージャ「別に・・・素直に感想を述べたまでの事さ」

クモジャキー「俺はお前のそう言う妙にカッコつけた所が好かん・・・！！・・・けんどお前の強さは認めるぜよ！！！！」

コブラージャ「君に認めてられても嬉しくないな！！！！」

クモジャキー「俺もぜよ・・・」

コブラージャ「ふん・・・」

クモジャキーとコブラージャはお互いに皮肉を込めながらお互いの本音をさらけ出す・・・もしかしたらもう二度と会う事が出来なくなるかもしれない仲間に最後の別れを告げるかのように・・・

マンティス「ついに来たか・・・」

アント「いよいよ・・・だね」

ホーンド「コレが私達の最後の戦い・・・必ず勝ちましょう」

モス「ええ・・・アタシ達の残りの命の為に・・・」

マンティス「・・・俺達が生き残るために・・・いくぞ・・・皆」

アント&ホーンド&モス「了解・・・リーダー！！！！」

クモジャキーとコブラー ज्याの様子を近くで見ているマントイス達は仮面にローブと言った最初の姿でそう言う・・・俺達の戦いもいよいよ終盤・・・俺達の素顔を見せるに相応しい・・・お互いに勝つと誓い合う様にそう言いながらクモジャキーとコブラー ज्याに続く。

クモジャキー「此処から先には一歩も進ませんぜよプリキュア！！」

マントイス「カブト・・・決着をつけてやる・・・今日は絶対に逃がさない！！そして冥土の土産だ・・・俺達の正体を教えてやる・・・」

マントイス達は自分の顔に覆われている仮面を外す・・・その素顔にカブト達そしてブロッサム達は驚愕した・・・

8人「！！！！！！」

マントイス「コレが俺達の正体だ・・・カブト！！！！」

アント「コレがボク達が君達を狙っていた理由だよ・・・」

ホーンド「貴方達を倒すことが宿命といった意味も理解できましたか？」

モス「アタシ達はアンタ達の・・・」

マントイス&アント&ホーンド&モス「コピーロイド！！！！！！」

その彼らの素顔は大人、琢磨、傑、夕の4人そのものだった・・・瓜二つ・・・いや同一人物と言ってもいい・・・そして彼らの正体にカブト達はおもろに口を開く・・・

カブト「そうか・・・そうだったんだな・・・お前は・・・俺の・・・」

ガタツク「だから・・・あそこまで俺達に執着したのか・・・」  
ダークカブト「この世に二人の俺はいらない・・・そう言う意味だったのか」

フェアリー「アタシ達の分身・・・ってこと・・・そんな・・・」

ブロッサム「貴方が・・・カブトの・・・大人さんの影・・・」

マリリン「・・・嘘だ・・・こんな事！！」

サンシャイン「貴方達は人間なの？」

マンティス「ああ．．一応な．．だが俺達は造られた存在故にその命は短命．．俺達は長くは生きられない．．」

アント「ボク達の力は強大だけど副作用も強くてね．．確実に身体は犯されている．．」

ホーンド「故にもうキャパシティダウンは使えません．．ですが私達は負けられないそして．．私達には夢があります．．仲間と未来を共にするという夢が！！！」

モス「でもオリジナルを消せなければアタシ達は陰の存在のまま．．そんなの耐えられるわけない！！．．アタシ達はアタシ達．．他の誰でもない．．でもアタシ達の顔も性格も全て貴方達をベースに造られた．．」

ムーンライト「だから貴方達は彼らを消す事で彼らになり変わろうとした．．そう言うことなのね」

マンティス達は自分達の本音をすべてさらけ出した．．自分達が作られた理由も自分達がやりたい事も．．彼らはただ自分達の人生を生きただけなのだ．．だがそれは許されなかった．．オリジナルがいる限り自分達は自分達でいられない．．ならばもう手段は一つしかない．．オリジナルを消す事だ．．ムーンライトとの言葉にゼロメンバースの4人は頷く．．

マンティス「そうだ．．そうしなければ俺達は光を見ることなく消えるしかない．．」

アント「そんなの嫌だ．．ボク達はボク達の人生を生きたい．．」  
ホーンド「誰にも邪魔されたくない．．」

モス「貴方たちみたいに．．笑ったり、泣いたり、怒ったり．．そんな生活をしたい！！」

マンティス&アント&ホーンド&モス「だからお前達を消す！！！！  
そしてお前達の全てを奪ってやる！！！！ダークチェンジ！！！！」

電子音「DARK CHANGE！！！！」

マンティス達は思いをすべてさらけ出し自分達の夢の為に戦う・・・  
それにカブト達は合わせる様に前にでる・・・

カブト「皆・・・先に行つてくれ・・・」

ブロッサム「でも・・・」  
ガタツク「アイツらの相手は俺達だ・・・アイツらもそう望んでい  
る・・・」

ダークカブト「大丈夫・・・必ず追い付く」

フェアリー「アタシ達を信じて・・・」

ブロッサム「皆さん・・・はい！！・・・必ず後で合流ですよ！  
！！」

カブト「ああ・・・必ず！！」

ブロッサム達はカブトを信じて先に進もうとするが・・・クモジャ  
キー達がさせるわけなかった・・・

コブラージャ「そんな事させないよ・・・君達には此処で・・・消え  
てもらおう！！！！」

サンシャイン「はあああつ！！！！」

コブラージャはさせるものとカードを投げて攻撃するのだがサン  
シャインがサンフラワイージスを発動させていく攻撃をガードす  
る・・・カードは燃えて灰となる・・・

コブラージャ「相変わらず・・・やっつけてくれる！！！！」

サンシャイン「・・・此処は私に任せてください」

ムーンライト「一人で戦うのは危険過ぎるわ・・・此処は私も」

ムーンライトが前に出ようとするのだがその前にマリンが前にでる  
・・・

マリン「くっ・・・うんアタシがサンシャインと此処に残る・・・

ブロッサムとムーンライトはおばあちゃんの所へ」

ブロッサム「え？」

マリン「大丈夫・・・絶対に追い付くから・・・それともアタシ達  
の事は信じられない？」

マリンとサンシャインの決意の目線にブロッサムは困惑するのだが彼女達の決意の目線と闘志を信じるとブロッサムは笑みを見せる・

ブロッサム「いいえ!!!」

4人はアイコンタクトでお互いに笑みを見せあいながらブロッサムとムーンライトはクモジャキーとコブラージャを飛び越えて先に進む・・・だがクモジャキーとコブラージャはさせるものかとブロッサムとムーンライトを睨むと・・・

コブラージャ「そうはさせないよ!!!」

コブラージャはカードを投げて攻撃するのだがサンシャインが二人の後ろに立ちイージスで攻撃をガードする・・・今度はクモジャキーが動く・・・

クモジャキー「んんんん!!!ぬあああ!!!」

クモジャキーがDダークパワーの籠った腕で地面を叩くと地面から円柱が出現して2人を呑みこんでしまう・・・

ブロッサム「うわああ!!!?」

コブラージャ「中々やるじゃないか」

マリン「はっはっはっは!!!その程度であの二人がやられるわけないじゃない」

カブト「当然だ・・・あの程度で二人はやられないぞ?」

サンシャイン「うん」

二人は飲み込まれて姿が見えなくなるがマリンがそう言って自身を見せる・・・サンシャインそしてカブト達も賛同したかのように頷く・・・マリン達の言うとうりブロッサム達は円柱を避けて地面に着地するとムーンライトが地面に穴を抉じ開けて地下から進むのだった・・・

クモジャキー「ふん・・・お前らプリキュアは4人そろわなければどうという事ないぜよ!!!」

コブラージャ「キュアサンシャイン・・・君はボクと闘うに相応しい然るべき戦いの場にご招待するよ・・・」

サンシャイン「望むところ・・・」

サンシャインとコブラーは光に包まれて地面に吞まれるようにワープしていく・・・そしてそれに合わせる様にゼロメンバー、カブト達も・・・

マンティス「カブト・・・俺達も然るべき戦いの場に移動しようではないか・・・」

カブト「マンティス!!!・・・いいだろう・・・」

アント「ガタツク・・・ボク達のコロシラムへと行こうじゃいか・・・」

ガタツク「アント・・・望むところだ・・・」

ホーンド「ダークカブト・・・私たちもいきますよ?」

ダークカブト「ああ・・・」

モス「フェアリー・・・ふふふつ・・・」

フェアリー「モス・・・」

マリンとクモジャキー以外のメンバーは全員光に包まれてそれぞれの戦いの場所へとワープする・・・

クモジャキー「ふふふつ・・・」

マリン「何よ?世界を砂漠にできたのがそんなに嬉しいわけ?」

クモジャキー「俺は世界がどうなるかと興味はない」

マリン「はあ!?!」

クモジャキー「ただ己の強さを極め強い奴と闘うそれだけが俺の望みぜよ!?!」

場所は変わり月面が見える場所でサンシャインとコブラーが対峙していた・・・

コブラー「美しい僕と美しい君が美しく戦いを繰り広げる・・・

・世界の終焉にはピッタリの余興じゃないか」

サンシャイン「世界中の人々を苦しめておきなながらにが美しい

♪だ!?!」

コブラー「生憎ボクは美しくないモノには興味がない・・・特に



人の心にはね！！！！」

マリン「アンタねえ・・・」

クモジャキー「精々俺を楽しませるぜよ・・・キュアマリ・・・！！！？」

クモジャキーのセリフが言い終える前にマリンがクモジャキーの顔にパンチを入れる・・・

マリン「その勝手な望みの為にどれだけの人のごころの花が利用されたと思ってるのよ！！！！」

クモジャキー「ふっ・・・」

サンシャインは我慢できずにキックを放つのだがそれは紙一重でコブラージャに避けられてしまった

サンシャイン「そんな歪んだ思いあがり決して認めない！！！！」

コブラージャ「ふん」

カプト「マンティス・・・」

マンティス「カプト・・・貴様を倒す・・・そして俺は陰から光に俺が俺になるために！！そしてそれまで死ぬわけにはいかん・・・

俺の仲間たちと普通の日常を生きるために・・・」

カプト「俺は・・・お前に負けるわけにはいかない・・・地球を・・・俺達の大切な人を元に戻すために！！！！！！」

マンティス「それはどうか？・・・いくぞ！！！！」

カプト「来い！！！！」

カプトはクナイガンでマンティスをデスサイズを構えながらぶつかり合う・・・自分達の大切なモノのを掛けて・・・

アント「やっとこの時が来た・・・ボクが君になり変わる時が・・・

」  
ガタツク「アント・・・」

アント「ボクは・・・君が羨ましかったそして憎かった・・・ボクの姿でありながら光を常に見ている君がね!!!」

ガタツク「お前も・・・光は見れるさ・・・だからこんな事は!!!」

アント「無理だよ・・・もうボク達は陰の存在・・・今更君たちと一緒に場所には立てない・・・君を消さない限りね・・・」

ガタツク「・・・やるしかないんだな・・・」

アント「そうだよ・・・ボクは必ず君を倒す!!!」

ガタツク「そんな事させない!!!」

ガタツクとアントの戦いも始まった・・・自分達の本音を全て曝け出しアントフアングとガタツクダブルカリバーがぶつかり合う金属音が響き渡る・・・その音は虚しく感じ二人の哀しき戦いを物語っていた・・・

ホーンド「ダークカプト・・・私と同じ黒い戦士でありながら光の立場・・・私にとってこれほど悔しい事はないですよ・・・貴方になれればと私はいつも思っていました・・・」

ダークカプト「ホーンド・・・お前・・・」

ホーンド「こんな理不尽な事がありますか・・・同じ顔、同じ思考・・・それが故に私達は影の道を歩く事を強いられた・・・私だつて・・・光を見たい・・・堂々とね・・・」

ダークカプト「だから俺達を消すのか？」

ホーンド「ええ。それが唯一の方法と私達の生みの親であるサバーク様が言っていましたからね!!!」

ダークカプト「それは・・・違う!!!・・・お前達の純粋な思いをサバークが利用してるだけだ!!!何故それに気づかない!？」

ホーンド「例えそうだとしても・・・私達はもう後戻りできません・・・戻るには手を汚しすぎました・・・」

ダークカプト「そんな事ない!!!止めるんだ・・・こんな悲しい事無意味だあ!!!」

ホーンド「黙りなさい．．．貴方が私の立場なら止めますか？」

ダークカブト「．．．．．わかったよ．．．．．お前の覚悟は本物だな．．．お前の気が済むまで俺はは戦う！！！」

ホーンド「やっと分かりましたか．．．いきますよ！！！」

ダークカブト「．．．おう！！！」

ダークカブトの説得もホーンドには届かなかつた．．．ホーンドのセリフの意味をダークカブトは考えると戦う事を決意する．．．彼は自分の分身であるのなら彼の闇を消せるのも自分しかない．．．ダークカブトはその決意を胸にホーンドと対峙する

モス「．．．やっと二人つきりになれたわねフェアリー」

フェアリー「．．．貴女が私のコピー．．．そして陰の存在．．．なら私しか貴女の全てを受け入れられない．．．貴女の闇を私が照らす．．．私の白銀の翼で！！！」

モス「出来るかしら？．．．私の闇の翼が貴女を取りこんであげる．．．そして私は私になる！！！」

モスとフェアリーは互いにレイピアとサーベルを構えながら斬り合いを開始する．．．

ブロッサム「．．．．．（皆．．．絶対無事でいてください）」

ムーンライト「マリンとサンシャイン．．．カブト、ガタツク、ダークカブト、フェアリー．．．私達の仲間が身体を張って私達を先に行かせてくれた事を．．．その意味を考えなさい．．．」

ブロッサム「．．．．．」

その頃ブロッサムとムーンライトは地下道を着実に進んでいた．．．だがブロッサムはマリン、サンシャイン、カブト、ガタツク、ダークカブト、フェアリー達の事が気がかりで仕方なかつた．．．そんな彼女の心中を察したムーンライトが彼女に彼らの意思を考えようように促す．．．そう今は迷ってはいられない．．．こころの大樹をおばあちゃんを救うために私達は此処まで来たのだ．．．大丈夫

えりかもいつきも大人も琢磨も傑もタも必ず戦いに勝つてくれる・・・  
・ブロッサムはそう信じててムーンライトと共に先に進む・・・

デューン「はっはっはっはっ・・・精々足掻くがいいプリキュア  
どもよ」

その様子をモニターで傍観していたデューンは見下すようにそう言  
う・・・例え自分の所に来れたとしても勝てるはずなど億に一つあ  
り得ない・・・そう思ってでのセリフだった・・・

マリン「はああああー!!!」

クモジャキー「うーん!!!やあああっ!!!」

マリン「だあああっ!!!」

クモジャキー「ぬあああっ!!!」

マリン「はあああああああ!!!!!!!!!」

クモジャキー「効かん・・・効かんぜよ!!!うおおおっ!

!!!」

マリン「きゃあああー!!!」

マリンとクモジャキーの戦いはマリンの怒りに任せたフルパワーと  
クモジャキーの剣技のぶつかり合いが繰り広げられていたのだがマ  
リンのスピードに任せた戦法もクモジャキーという武道の達人には  
中々通用しない・・・マリンから分離したコフレはマリンの戦い  
を見守っていたが・・・クモジャキーはマリンとの戦いに飽きたの  
かダークブレスレットのパワーをフルに解放し剣にダークパワーを  
集中させる

クモジャキー「俺の求める強さはこんなもんじゃないきに!!!  
ぬあああっ!!!でやあああ!!!」

マリン「はっ!!!?・・・ぐっ!!!きゃあああー!!!  
ーっ!!!」

剣からのソニックウェーブがマリンに直撃して円柱に身体を叩きつ  
けられてしまう・・・彼女は円柱を貫通しながら飛ばされてしま

やっと止まったと思ったがダメージは凄まじいものであった・・・  
マリン「あああっ！！！！！」  
コフレ「マリーーン！！！！」

サンシャイン「はあああっ！！！！！！」

コブラージャ「ふふふっ・・・はははは・・・」

サンシャイン「ふっ！！！！・・・え？」

コブラージャ「この美しき戦い・・・」

サンシャイン「はっ！！！！！！」

コブラージャ「やはり君こそボクの戦う相手に相応しい・・・」

サンシャイン「はあああっ！！！！！！」

コブラージャ「ふっ！！！！！！」

サンシャイン「はあっ！！！！！！・・・！？・・・あああ！！！！？」

コブラージャ「ボクを失望させないでくれキュアサンシャイン！！

！さあこの闘いをもっと美しく芸術にまで高めようじゃないか！！！！」

サンシャイン「はああ！！！！・・・！？・・・うわあああああああああっ！！！！！！」

ポプリ「サンシャイーン！！！！！！」

コブラージャとサンシャインの戦いも徐々に激しさを増していた・・・

・サンシャインの巧みな格闘技をコブラージャは瞬間移動を交えたテクニカルな戦法で彼女を惑わしながら優位な形勢を保ちつつあった・・・コブラージャはそろそろ攻めに転じてくれるとカードを投げて攻撃するがサンシャインは得意のサンフラワーイージスをカードを消滅させようとしたがカードがイージスを貫通してイージスを砕いてしまった・・・爆風と共にコブラージャはサンシャインを更に挑発して煽りサンシャインは自身の戦い方を乱されてしまう・・・瞬時にキックを放つがコブラージャの姿はなくカードの攻撃がサンシャインを直撃してサンシャインは大ダメージを受けてしまう・・・ポプリの悲鳴にも似た声がある場に木霊するのだった・・・

ブロッサム「此処は？……」

ムーンライト「……！！！！」

ブロッサム「アレは！？……」

ムーンライト「ダーク……プリキュア！！……ブロッサム  
行きなさい！！」

ブロッサム「え？ムーンライト！！！！」

ムーンライト「私は決着をつけないといけないのダークプリキュア  
と……そしてかつての自分と」

ブロッサム「《かつての自分》？」

ムーンライト「仲間というものを信じられずに妖精を失いダークプ  
リキュアに敗れた私に……ダークプリキュアに勝つ事はその私  
自身に打ち勝つ事なのよ」

ブロッサム「ムーンライト……」

その頃のブロッサムとムーンライトは惑星城の中間視点らしき広場  
まで進んでいた……すると敵意の視線を感じたムーンライトが不  
意に上を見るとそこには黄色い眼光を放つダークプリキュアがいた・

・ムーンライトはブロッサムを先に行かせダークプリキュアとの  
最後の戦いに挑む……それは今もなお自分の中に巣食う自分の影  
との決着をも意味していた……此処は自分一人で全てを終わら  
せなければならぬ……ブロッサムも彼女の決意を邪魔するわけ  
にはいかないとムーンライト……いやムーンライトだけではない・  
・マリン、サンシャイン、カブト、ガタツク、ダークカブト、フ  
エアリーという仲間の全ての思いを受け継ぎ先へ進むのだった……

薫子「サバーク……貴方とダークプリキュアさえいなければ……  
……ダークプリキュア……彼女は自分の事を造られたプリキ  
ュアだと言ったわ貴方でしょ？彼女を造ったのは……そしてゼロメ

ンバースもね・・・でも此処で一つ疑問が残るわライダー達はそれぞ  
れ似せて作るのともかくとして・・・どうしてダークプリキュアを  
ムーンライトに似せて造ったの

「サバークに似せて造っただと？」

薰子「そうよ・・・本当に気づいていななの？ムーンライトが光なら  
ダークプリキュアは影二人は瓜二つだわ・・・」

その頃捕えられた薰子の前にサバークが現れ薰子はずっと引掛か  
っていた事をサバークに問うのだった・・・どういう事だ？ムーン  
ライトとダークプリキュアが瓜二つ・・・しかし彼女がゼロメンバ  
ーズと同じ存在ならばコピーロイドで全てがつながる・・・だがど  
うやらそれだけで片付く問題ではないらしい・・・一体薰子の意図  
は何なのだろうか？

マリ「きゃあああーっ！！！！・・・ううっ・・・ふう・・・  
・・・くっ！！！！？」

クモジャキ「コレ絵終わりぜよ・・・」

コフレ「ぬあああああ~~~~！！！！させないですっ！！！！」

クモジャキ「！！！！？？？ぐうっ」

マリ「コフレ！！何やってんの・・・いくらなんでも無茶だよ！  
！！」

コフレ「マリンの為ならどんな無茶だってするのですっ！！！！うわ  
ああ！！！！？」

クモジャキ「ふん！！なんの力もない弱い妖精がこのクモジャキ  
ーに一撃を食らわすとは」

コフレ「ひええええっ！！！！？」

マリ「はああっ！！！！」

クモジャキはとうとうマリンを追い詰めたばかりに剣を地面に  
倒れたマリンに向ける・・・コレで終わりだと勝ち誇るクモジャキ  
ーにコフレが突進して顔に張り付く・・・大切な相棒をこのまま黙  
って倒させるものかとコフレが身体を張ったのだ・・・マリンは何

とか九死に一生を得た……だがクモジャキーは此処で先ずは邪魔な雑魚を蹴散らしてくれると剣をコフレに向かって振り下ろすがマリリンがさせるものかと剣を足で叩き折る

クモジャキー「っ!!?!?……まだこんな力を残していたか……面白ろくなってきたぜよ!!!キュアマリン俺と本気で勝負ぜよ!!!」

マリリン「行くよコフレ!!!」

コフレ「はいです!!!」

マリリン「はあああああっ!!!!!!……たあああ!!!!!!」

クモジャキー「ぬあああああ!!!!!!……ぬおおおっ!!!!!!」

マリリン「はっ!!!!!!」

クモジャキー「うう!!!!!!?」

マリリン「はあああっ!!!!!!……たあああ!!!!!!」

クモジャキーとマリリンの素手によるぶつかり合いはあたりに衝撃波を放ちながら繰り広げられるがマリリンがクモジャキーの腕を掴みそのままボディと背中パンチを食らわせ追撃のキックを放つがキックはなんとかガードするクモジャキー……

クモジャキー「うう……何ぜよこの力は!?!?……キュアマリン!!!なにが此処まで強くしたぜよ?」

マリリン「……《強さ強さ》ってアンタが言っているのは本当の強さじゃない!!!!!!」

クモジャキー「何!?!?」

マリリン「さっき言ったよね?コフレの事なんの力もない弱い妖精だつて……でもコフレは立ち向かった!!!アタシを守るために一生懸命!!!例え戦う力はなくてもコフレはアンタなんかより一億万倍強い!!!!!!」

コフレ「です!!!!!!」

マリリン「誰かを守るためなら頑張れるその心が本当の強さだと思う



「！！！！」

マリンから青いオーラが発せられると一面が青い光で包まれていく。  
・・・

サンシャイン「くっ！！！！うわあああっ！！！！？？うつつ・・・  
はあ、はあ、はあ・・・」

コブラージャ「無様だねキュアサンシャインこれ以上君の身に醜い  
姿は見たくない・・・美しい僕の手で美しく散るがいい」

ポプリ「コブラージャは全然美しくなんかないでしゅ！！！！」  
サンシャイン「ポプリ！！！！」

コブラージャ「あああ？妖精ごときに僕の美しさが分かるわけない  
じゃないか！！！！」

ポプリ「わかるでしゅ！！！！」  
コブラージャ「何！？」

ポプリ「どんな時でもみんなを守るために頑張るサンシャインのこ  
ころがポプリには一番美しく見えるでしゅ！！！！」

サンシャイン「ポプリ・・・ありがとう！！！！」  
コブラージャ「言った筈だよ？人の心には興味がないってね！！！！」

サンシャインの攻撃の流れを乱しながら彼女を追い詰めていた・・・  
これ以上もが必要はない・・・素直に自分に消されると言うコブ

ラージャにポプリがコブラージャに美しいのはコブラージャではな  
いと言う・・・サンシャインの守るために自分の全てを捧げる心

こそが美しいのだと言い返す・・・コブラージャはそれがなんだと  
でも言う様にカードを投げて攻撃するがなんとポプリの守りの力と  
サンシャインの守りの力が融合したサンフラワーイージスが攻撃を  
完璧にカードしたのだった。

サンシャイン「どれだけ醜くても無様でも構わない！！！！私は世界  
を・・・皆の太陽のような笑顔を守りたい！！！！」

サンシャインの決意の言葉と共に彼女から金色のオーラが放たれて  
あたりを包む・・・それはまるで太陽の様だった・・・

薫子「私・・・ずっと考えていたの・・・あの時貴方がダークプリキュアを差し向ければ完全に倒す事が出来た筈・・・でも貴方はそれをしなかった・・・いえ出来なかったんじゃないの？心のどこかで何かが引つ掛かってて」

サバーク「何を馬鹿な事を！！！」

薫子「結果ムーンライト・・・ゆりちゃんは助かった」

サバーク「！！！！・・・ううう・・・スナツキー見張っておけ！！！」

薫子「・・・サバーク・・・どうして？」

サバークはうろたえながらもその場を後にする・・・確かにあの時ムーンライトを完全に倒す事が出来た筈だ・・・だが言われてみれば何故それをしなかったのか自分でもわからない・・・自分は一体誰だ？・・・そんな事を考えながらもダークとムーンライトの戦いを静観しに・・・いや願わくば自身のこの手でムーンライトを・・・

マリ「クモジャキー・・・アンタは確かに強いよ・・・でも強くなつて何がしたいの？」

クモジャキー「何がしたい・・・じゃと？」

マリ「そうだよ・・・アタシはプリキュアの力でこの世界を守りたいブロッサムと・・・皆と皆とこれからも楽しく生きていきたい・・・そのためならいくらだって強くなる！！！！絶対に負けない！！！」

マリ「の言葉に青い光に包まれていた周囲は青い光を放つ花で包まれる・・・その花はマリ「の思いそのものであり美しかった・・・マリ「でもあんたはただ自分が強くなる事ばかり考えてさ・・・そんなのって何だか虚しいよ」

クモジャキー「・・・確かにお前の言う通りかもしれない・・・じゃが、じゃがあ！！！！俺はそれを分けるわけにはいかんぜよ！！！！ぬ



コブラー ज्या「うわああっ!!!?」

コブラー ज्याはサンシャインとポプリの見える心の美しさに目を輝かせた……。人の脆く儂い心がこれほどまでに美しきものだったとは……。だがこの美しさを自分のモノにするには手を汚し過ぎた。

「もう今更人の心を理解する資格になどボクにはない……。その後戻りが出来ないのだ……。ならばこの美しさだけを否定しサンシャインを倒す事で更なる美を追求するだけだ……。コブラー ज्याはサンシャインに向かってカードを放つがそれも防がれてサンシャインのサンシャインインパクトによってダークブレスレットのダーククリスタルを破壊されると自分の全ての力を失ってしまう……。

コブラー ज्या「あ!!!!!!」

サンシャイン「まだ間に合うわコブラー ज्या!!!!その心の闇私の光で照らして見せる!!!!」

サンシャインは彼の心の闇を自身の光で照らすべくシャイニータンバリンを召喚する……。

サンシャイン「集まれ花のパワー!!!!シャイニータンバリン!!!!はっ!!!!」

サンシャイン「花よ舞い踊れ!!!プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!!」

サンシャインのゴールドフェルテバーストがコブラー ज्याの身体を包む……。コレが心の美しさ……。暖かい……。何でもっと早く気がつかなかったんだ?……。こんなに美しいものが近くにあったのに……。ボクは……。なんて愚かだったんだ……。

・  
・

マリン「はあああああ~~~~!!!!!!!」

クモジャキー「俺の負けだよ……。キュアマリン……。世界には俺の知らん強さがまだまだ沢山あるぜよ……。」

クモジャキーは最後にそれだけ言って消滅した……。もっという  
いろな強さを知りたかった……。そんな思いだけを残しながら……。



その頃ブロッサムは先にへと進みやつと薫子が捕まっている所にまでたどり着いた・・・もちろんボスナツキーがブロッサムを捕えようとするが片方をブロッサムがもう片方をコツペが撃退して薫子を救出する

薫子「ああ・・・ありがとう・・・つぼみ!!」

シプレ「キュアフラワー・・・心の大樹を元に戻すにはどうすればいいですか?」

薫子「ココロポットよ皆の気持ちが籠ったところの種を捧げれば必ずこころの大樹は蘇るわ・・・でも先ずは強大な力を手にしたデューンを倒さなければ」

ブロッサム「!?・・・ムーンライト!!!アタシ行きます!!!コツペ様おばあちゃんをお願いします!!!」

薫子「つぼみ!!!・・・お願いサバークとムーンライトを戦わせなさい!!!」

突然モニターからムーンライトとダークプリキュア・・・更にはサバークが映し出されたブロッサムは薫子の武士が確認出来たからムーンライトの援護に向かおうと来た道に戻る・・・その彼女に薫子がそう言う・・・《サバークとムーンライトを戦わせるな》・・・どういふ事なのだろうか?・・・薫子はサバークの正体に気が付いていると言うのか?

ダークプリキュア「闇が光を呑みこむときが来た・・・」

ダークプリキュアはこの時を待っていたとムーンライトにそう言う・・・自身の正体・・・そしてムーンライトに込めた思いが籠ったセリフでもあったのだった・・・

第8話「大幹部との最後の闘い！！・・・明かされるゼロメンバーズの素顔」

更新遅れてすみません・・・風邪と下痢でダウンしてました（大汗）  
今回は長いうえにライダーの出番がなかった・・・次回はライ  
ダー達の決着を描きたいと思います・・・まあゼロメンバーズの正  
体もうすうす気が付いていたかもしれませぬ・・・

次回もお楽しみに

第9話「生きるとは？」（前書き）

マリンとクモジャキー、サンシャインとコブラージャの戦いに決着  
がついていた頃・・・ゼロメンバーズとカプト達の最終決戦が繰り  
広げられていたのだった・・・光と影・・・太陽と黒点の戦いが・  
・・



## 第9話「生きるとは？」

カブト「はああああっ！！！！！！！！！！」

マンティス「うおおおっ！！！！！！！！！！」

月光が光る砂漠の使徒が支配する惑星場で赤いカブトと黒いカマキリが互いの存在意義をかけてクナイガンとデスサイズで火花を散らしていた……もうマンティス達は自身の命の限りの為にキャパシティいダウンは使えない……だが死んでしまつては元も子もないとマンティスは最後の賭けにです……

マンティス「はあ、はあ、はあ、はあ……くっ！！！（コイツ……やはり強い……だが俺は負けられない！！！負けるわけにはいかないだ……俺達の夢の為に！！！！）……こうなれば最後の賭けだ！！！！キャパシティ……」

カブト「止めるマンティス！！！！キャパシティダウンを使えばお前の命が！！！！」

マンティス「ふん……そんな事心配されるいわれは貴様にないな……どの道貴様に倒されれば終わる……ならばどんな手を使つても勝つだけだあ！！！！！！！！！！」

カブト「止めるおっ！！！！！！！！！！」

カブトはマンティスにキャパシティダウンを使わせるものかとクナイガンで彼を乱射してキャパシティダウンをさせる隙を与えない……  
マンティス「貴様はバカか！？……何故俺の命に対して真剣になれる？」

カブト「……例え姿形が俺と同じでありお前が俺の陰の存在だったとしても……お前はお前だろう！！！！他の誰でもない……お前の心が有るんだろうが！！！！！！！！！！」

マンティス「俺の心……だと？」

カブト「そつだ……心に同じものなんてない……お前にはお

前だけの心があるんだよ！！！！」

マンティス「……………」

マンティスはカブトの言葉に迷いを感じた……俺にしかない心……俺だけのモノ……そんなもの本当にあるのか？……いや……ない……俺は所詮《上原大人》という存在の影……影が光を倒さなければ俺は影のまま……マンティスは迷いを振り払うかのようにデスサイズを構えながらカブトに向かう！！！！

アント「はあああつ！！！！やあああーっ！！！！」

ガタツク「ぐうっ！！？……があああつ……うおおおつ！

！！！！！！」

アントのスピードを活かした攻撃にガタツクは翻弄されていた……コイツの闘志は今までとは比べ物にならないくらい凄まじい……それだけ自分の命を掛けて戦いに挑んでいる……

ガタツク「アント！！お前は俺になり変わってなにがしたいんだ？」

アント「何がしたい？……………」

ガタツク「そうだ……お前はただ生きたいと言った……でも生きる目的はなんだ？」

アント「それは……………」

ガタツク「お前も分かってるんじゃないのか？……こんな事望んでない……お前はお前自身だって……………」

アント「ボクはボク自身？」

ガタツク「そうだ……お前はお前他の誰でもない！！お前はお前の為に生きていいんだよ！！！！」

アント「ボクはボクの為に……………」

アントはガタツクの言葉に決心が揺らいでいた……ボクは本当にボクの為に生きる資格があるのか？……確かにボクはボクだ……他の誰でもない……でも……影であるという事実は変わらない……こんな気持ちのままボクは……ボクは胸を張って生きることなんてできない！！！！



モスも同じです．．．私達はただ生きていただけなのに！！！」

ダークカブト「．．．．．」

ホーンド「はあああああつ！！！！！！！」

ダークカブト「ぐううううう！！！！！！？」

ホーンドの本音を聞いたダークカブトは突如攻撃を止めた．．．そしてホーンドの猛攻をただ受けていく．．．自身のカラダがボロボロになるまで．．．

ホーンド「．．．何故攻撃をしない？．．．このままでは貴方が死にますよ？」

ダークカブト「．．．お前は敵じゃない．．．」

ホーンド「何？」

ダークカブト「俺はこの力に覚醒した時．．．決めただこの力は敵を倒す事にしか使わないって．．．この力の為に犠牲になった人々．．．そして真くんの為に．．．今のお前はただ純粹に生きたいと望んでいるだけ．．．悪意などない．．．」

ホーンド「確かに．．．私は．．．いいえ私達は砂漠の使徒の野望などどうでもよかった．．．ただ生きればそれでいい．．．そのためだけに今まで行動してきました．．．」

ダークカブト「命は生きるためにある．．．それ以外の存在意義などない．．．そうだろ？」

ホーンド「．．．ふっ．．．全く貴方は．．．いいえ貴方達はお人よしですね．．．」

ホーンドは納得したように武器を下げる．．．このまま影として生きていくのも悪くないかもしれないと納得したかのように．．．いや．．．もう私は陰ではないかもしれない．．．ただ生きる事を望んでいる私達は．．．ダークカブトがいなくなった後もホーンドはそう考えていた．．．答えは見つかった．．．後は償うだけ．．．砂漠王を倒す事で．．．そう思ったホーンドはゆっくりと惑星城に向かつて歩き出すのだった．．．

モス「やあああああつ！！！！！」

フェアリー「てやああああつ！！！！！」

白銀の蝶と漆黒の蛾の建議による戦いは互いに互角のまま動かなかった……剣と剣が交わりながらも言葉を交わすことなく互いに意思が伝わり合っているかのようだった……

モス「はあ、はあ、はあ……」

フェアリー「はあ、はあ、はあ……」

モス「はあ、はあ、はあ、はあ……」

フェアリー「どうして本気を出さないの？」

モス「何？」

フェアリー「気付かないの？貴方は手加減してるのよ？……無意識にアタシを殺したいのなら本気でかかって来る筈……なのにそれをしない……心のどこかで引つかかっているんじゃない？自分がしてる事が正しいかどうか……」

モス「黙れえ！！！！私……私……私……！！！！！」

私はただ……光を見たいだけ……ただそれだけなのに……目の前の相手を殺せば……全てが片づくのに……何故それが出来ないの？……どうして？……

フェアリー「もう止めよう……こんな事無意味だよ……」

モス「……そうね……私はただ光が見たいだけ……行きなさいよ……貴方達の戦いに決着をつけるといいわ」

フェアリー「……うん……」  
モスはフェアリーを先に行かせ一人考えていた……私達の生きる目的は何だと……その答えは彼らの中にあるかもしれない……モスはフェアリーの元に向う……答えを見つけるために……

カプト「ハイパーキャストオフ！！！」

電信「HYPER - CAST - OFF CHANGE HYPER

BEE TLE!!!!!!」

マンティス「キャパシティアップ！！！」

カプトとマンティスの戦いも決着がつこうとしていた・・・マンティスのデスハンターとハイパーカプトのパーフェクトゼクターがぶつかり合う・・・だがマンティスはカプトのパワーに押されて遂にはデスハンターが壊されてしまった・・・マンティスはその瞬間覚悟を決めた・・・詩人が殺される覚悟を・・・だがハイパーカプトは何もせずにハイパーフォームを解いた・・・

マンティス「何故だ？・・・何故と止めを刺さない？」

カプト「お前は・・・一人の人間だ・・・」

マンティス「違う！！！！・・・俺は・・・」

カプト「俺は・・・人間は殺さない・・・お前はお前の人生を生きる・・・」

マンティス「待て・・・カプトお！！！！・・・カプトお！！！！待てええええ！！！！！！」

カプトはその場を後にする・・・マンティスはその場に膝まづきながらも彼の名を呼ぶ・・・俺は人間だ・・・確かにそうだ・・・でも奴の影・・・その事実は揺るがない・・・そんな俺に生きると言うのか？・・・そんな事許されるはずはない・・・残されたマンティスはソレを必死に考えながらカプトを追う・・・自身の答えを・・・カプトに示し自分達がしてきた過ちを正すために・・・もう光だの影だの関係ない・・・俺達は俺達の道を自分で決める・・・そして自分の足で歩いていくんだ・・・俺達の命が続く限り・・・もう誰にも縛られるものか！！！！

第9話「生きるとは？」（後書き）

ゼロメンバーズ的心情回でした。．．．彼らは純粹に生きたかった  
だけなのです．．．それをサバーク．．．いやデューンは．．．．  
次回はまたハトプリの本編が進むまでお休みです。

次回もお楽しみに

第10話「俺達・・・」

俺達はただ今までを生きてきた・・・ただ今までを・・・でもそれは許されなかった・・・影の存在である俺達は・・・影が光になるためには光を呑みこみしかない・・・光をすべて取り込んで一つになる事が影である俺達が救われる方法・・・でもカブトは・・・大人は違った・・・俺達をただ一人の人間として認めてくれた・・・彼は俺達を受け入れてくれた・・・許される存在である俺達を

俺達は分からなくなつた・・・何が正しいのか・・・何が俺達にとつて光となるのか・・・

そもそも光とはなんだ？・・・

影とは何なんだ？・・・

・・・何故・・・父サバークさんは俺達を造つたんだ？・・・

・・・俺達の存在意義は何だ？・・・

・・・俺達はどうしてこの世に生を受けた？・・・

・・・どうして俺達はこんなに苦しまなければならないんだ？・・・

・・・その答えは誰が持つてるんだ？・・・

・・・誰でもいい・・・答えを教えてください・・・

マンティスは自分で自問自答しながらもカブトを追つた・・・俺達は人間だ・・・彼はそう言った・・・俺達は造られた存在・・・な

のに彼は俺を拒絶することなく人として・・・もう残り少ない命・

・・・俺達の命はタイムリミットに確実につき果てようとしている・・・俺には

はわかる・・・身体が悲鳴を上げている事を・・・俺達は・・・確実に死が近づいている・・・俺達は死んだら何処に行くんだ？・・・無に消えるのか？・・・いや・・・まだ消えるわ

けにはいかない・・・答えを・・・俺達の生きている意味を見つけるまは・・・死ぬわけにはいかない・・・自分達の生まれて



きた本当の意味を知るために・・・俺達は影かもしれない・・・  
でも心は俺達モノ・・・他のコピーではない・・・それだけは  
自身が持てる・・・  
例え俺達の存在全てが否定されようとも・・・全てを失っても・・・  
・・・俺達のもつかめる光があると信じて・・・何か  
が生まれると信じて・・・

第10話「俺達・・・」(後書き)

マンティス達の心情エピソード

彼らの活躍をどうか最後まで見てやってください・・・彼らの思  
いは純粋なモノでしかありません

次回もお楽しみに

## 第11話「ボクは・・・」

ボク達は生まれた意味を知りたかった・・・ボク達の命は短命である  
と聞かされたときは泣きたいくらい哀しかった・・・だってボク達は  
生まれて間もないのにすぐに死んじゃんだよ？・・・そんな僕達にお父さん  
は光サパークの存在と倒れと言ってきた・・・そして彼らを倒して彼らになり  
変わって・・・そうすればボク達はボク達として認められるって・・・  
ボクはソレを信じていた・・・でもガタツクは・・・ボクを一人の存在と  
して認めてくれた・・・

ボクは嬉しかった・・・初めてボクを一人の人間として認めてくれた・・・

彼はこの闘いが終わったら地球で暮らそうと言ってくれた・・・でもボクに  
そんな資格はない・・・手を汚し過ぎたんだ・・・今更後戻りなんて出来  
ない・・・

ボク達が求める光って何なんだ？・・・

彼らを殺す事か？・・・

彼らになり変わる事か？・・・

ボクは・・・分かっていたのかもしれない・・・

本当の光の意味を・・・

第11話「私は……」

私は世界が砂漠になることなんてどうでもよかった……ただ私たちが幸せになれば……だが彼らを殺す事が本当に幸せになる事に繋がるのだろうか？……私は黒い戦士……そして彼も黒い戦士……同じ黒い戦士なのに光と影がハッキリしている……何故私は影になる事を強いられた？……

私はただ自分の人生を自分の思う様に生きたいだけ……ただそれだけです……

私は……それだけの為にホーンドの力をモノにした……それだけの為に……

ですが彼は……ダークカブトは私を殺そうとしなかった……彼は言った……

《お前は敵ではない》と……私は彼に殺されたかっただけなのかかもしれない……この苦しみから解放されたかっただけなのかもしれない……

私は……ただの臆病者だ……ただ逃げただけだった……

彼はそんな私の心を見抜いていたのかもしれない……

私は必ず・・・彼の優しさに応えて見せる・・・この思いを・・・  
彼につたえるために・・・

## 第12話「アタシは……」

アタシは彼女が羨ましかった……いつも笑って、泣いて、怒って……そんな風に気持ち素直に表せる彼女が……アタシも彼女みたいになりたかった彼女みたいに笑って、泣いて、怒ってみたりしたかった……仲間たちと一緒に楽しく暮らしたい……ただそれがアタシの望みだった……

そのためにアタシはただ戦う事を強いられた……父サバークから言われて……

アタシはそれ従った……マンティス達と一緒にいたから……ただソレだけが目的だった……

一人になるのが怖い……一人で消えていくのが怖い……アタシ達は確実に死ぬ……その時はタイムリミット確実に迫っていた……

アタシは一人が怖い……孤独が怖い……でも彼女の翼はアタシを照らしてくれる……彼女の光がアタシを癒してくれる……アタシは一人じゃなかったのかもしれない……

マンティス達や……オリジナルのアタシも……全てと繋がっている……

もうアタシは孤独じゃない……だから……アタシも彼女の思いに応えたい……例えこの命が尽きようとも……

第13話「驚愕サバークの正体！？ムーンライトVSダークプリキュア最後の戦

前回までのあらすじ

クモジャキーとコブラー ज्याを浄化したマリンとサンシャイン二人の心の花は宙<sup>そら</sup>へと舞い元の持ち主へと帰って行った。その頃カブト達もゼロメンバース達を説得しブロッサムとムーンライトと合流するべく先に進む。

第13話「驚愕サバークの正体!? ムーンライトVSダークプリキュア最後の戦

なんとかコブラージャとの戦いを制したサンシャインとポプリだったのだが既に二人ともエネルギーを使い果たしてしまい動くのも厳しい・・・ポプリはもうヘトヘトだと床に倒れこんでしまう・・・

サンシャイン「ポプリ・・・」

マリ「サンシャイン!!!」

サンシャイン「?・・・マリッ!!!」

ポプリ「コフレ!!!」

カブト「お　い!!!二人とも」

マリ&サンシャイン「!?・・・カブト!!!」

コフレ「ガタツク!!!、ダークカブト!!!」

ポプリ「フェアリー!!!」

其処にマリ、コフレ、カブト、ガタツク、ダークカブト、フェアリーが合流する。どうやら全員戦い勝ったようだ

マリ「コブラージャは?」

サンシャイン「うん・・・」

ポプリ「クモジャキーは?」

マリ「楽勝　・・・と言いたいところだけどアタシもぎりぎりなんとかかって感じ・・・」

コフレ「マリはとっても頑張ったです」

カブト「そうか・・・とにかく全員合流出来て何よりだ!!!」

サンシャイン「ゼロメンバーズは?」

カブト「・・・全員に生きている。大丈夫だ彼らも戦う意思はもうないから・・・もう襲って来ないよ」

マリ「え?あれだけカブト達を倒す事に執着してたのに?」

マリは思わずキョトンとしてしまった・・・アレだけ自分達が生き残る事に執着していたのに何で今頃?・・・その答えをカブトの代わりにガタツクが答える・・・



ガタツク「アイツらも気がついたんだ・・・自分達がたった一人の存在だつて事に」

ダークカブト「だからもう襲つて来ない・・・俺達はそう信じる」  
フェアリー「だつて・・・もうアタシ達のコピーじゃないもの・・・ちゃんど心が有るんだから彼らには生きる自由を上げたいの・・・それがアタシ達の唯一出来る償いなんだから・・・」  
サンシャイン「皆・・・」

カブト達は顔を下げてそう言う・・・彼らは自分達のコピー・・・どんな経緯があるにしても自分達にも責任はあるのだ・・・だからこそ彼らを救うのは俺達の責務・・・そんな思い詰めた空気を切り裂くようにマリンが明るい声を上げる・・・

マリン「・・・そうだね!!・・・うっしゃー!!後はデューンとサバーク、ダークプリキュアだけだね!!!早くブロッサム達に合流しよう!!!」

カブト「ああ!!」

全員がそう意気込んだその時なんと壁の穴から大量のスナッキー軍団が現れた・・・コイツら一体何匹いると言うのだ?軽く5百体はいるであろう・・・コレは流石の6人も焦る・・・

マリン「ああ!!?・・・またスナッキー!?!」

ポプリ「しつこいでしゅ〜!!!」

カブト「ったく・・・流石に敵の本拠地だけに数では不利か・・・」

ガタツク「このままじゃ消耗戦になつてこつちが不利だ・・・」

ダークカブト「だが今はやるしかない・・・ここで止まるわけにはいかない!!!」

フェアリー「くっ!!!」

スナッキー「キキ　!!!」

マリン「はあっ!!!たああー!!!」

カブト「クロックアップ!!!・・・ライダーキック!!!」

ガタツク「うりゃああー!!!ライダーカッティング!!!」

サンシャイン「サンフラワーイーグリス・インパクト!!!!」

ダークカブト「クナイガン・ガンモード!!!!」

フェアリー「やあああっ!!!!ライダーバースト!!!!」

流石に敵のアジトである事もありスナツキー軍団のストックは凄まじいもの・・・恐らくコレを全雌させてもまた新しい軍隊がくるであろうしいくら雑魚とは言えどもこれらをさばくのはかなりの重労働である事は事実・・・それに雑魚を相手にしていたらブロッサム達と合流出来なくなる可能性もあるのだ・・・こうなれば仕方ないとカブトとガタツク、ダークカブトとフェアリー、マリンとサンシャインは二人1組のペアを組むと凄まじい勢いでスナツキー達を殲滅にかかる・・・だがやはり数ではスナツキー達に分がありマリソン達は体力的に不利に立たされる・・・このままでは確実に自分達は捕えられてしまう・・・それはブロッサム達の信頼を裏切ることにもなる・・・それだけは絶対にできない!!!!ブロッサム達の信頼に応える為に負けるわけにはいかないのだ・・・

サンシャイン「倒しても倒してもキリがない・・・」

ポプリ「ぶ〜疲れたでしゅ・・・」

カブト「はあ、はあ、はあ・・・このままじゃ・・・数でやられる」

ガタツク「くっ!!!!!!」

ダークカブト「何か手は?・・・打開策は・・・」

フェアリー「そんなのあったら・・・やってるって・・・」

マリン「よぉ〜し作戦会議よ!!!!」

カブト「はい?・・・」

カブトは”この場で?”と思ってしまった・・・こんな所でわざわざ作戦会議などして敵に通用するほど甘くはないだろ?と思ってしまった・・・当然スナツキー達は容赦なく襲ってくるのだが・・・

マリン「たあ〜んま!!!!!!」

コフレ「タイムです〜!!!!!!」

カブト「(止まったよ!!!!!!?)」

なんとマリンの声にスナツキー達は止まってくれた……”お前達敵では？”とカブトは心の中でツッコミを入れてしまうのだが……すぐに全員集まってひそひそ会議を始めるのだった……マリン「こうなったらさーか八かスナツキーに変装してみようよ！」

ポプリ「えっ~~~~!!スナツキーにでしゅか?!」

マリン「しーっ!!!!」

カブト「成程な!!敵に変装して溶け込むと言うわけか」

ガタツク「さっすがマリン!!」

サンシャイン「その後は？」

マリン「何気ない顔して移動してブロッサム達と合流するんだよ」

コフレ「あゝそれいいです」

ダークカブト&フェアリー「異議なし!!!!」

マリン「じゃあ次の一撃の後ね」

サンシャイン「分かった!!!!」

カブト&ガタツク&ダークカブト&フェアリー「了解!!!!」

マリン「プリキュア!!!!」

マリン&サンシャイン&コフレ&ポプリ&カブト&ガタツク&ダークカブト&フェアリー「おー!!!!!!!!」

サンシャイン「スナツキーの諸君お待たせしました」

スナツキー「……キキッ?……キキキ~~~~っ!!!!!!!!」

スナツキー達はどうやら居眠りしてしまっただった……サン

シャインの言葉にスナツキー達は向っていくのだが……サ

マリン&サンシャイン「プリキュア・大爆発

スナツキー達はマリンとサンシャインの合体技に飛ばされてしまう

スナツキーは思った……俺達の存在って一体?……

ブロッサム「ムーンライト……!!!!」

ムーンライト「何故戻ってきたの？」

ブロッサム「おばあちゃんは助けました!!私もムーンライトと一

緒に……?」

その頃ダークプリキュアとムーンライトは互角の戦いを繰り広げていた……。お互いに一步も譲らない肉弾戦を繰り広げていきながらお互いの意地と意地がぶつかり合う……。そこにブロッサムが助太刀にへと現れる……。今度は自分も戦うとブロッサムが身構えるのだがその彼女の前にムーンライト手が出て制止する……。ムーンライト「その気持ちは嬉しいわ……。でもここは私だけで」  
ブロッサム「……分かりました」

ブロッサムは彼女の意思を察して後ろに下がる……。今の私は彼女の戦いを邪魔できない……。ならば彼女が本当にピンチになった時に……。その時までこの二人の戦いの邪魔はさせない……。ダークプリキュア「お前を倒し私は本当の私になる!!!!!!はああー!!!!!!」

ダークは黄色い眼光を放ちながらムーンライとに突進していく……。彼女が本当の私になる……。それはマンティス達のように彼女になり変わると言う事なのだろうか……。だがそれだけならばあそこまで凄まじい闘志を見せられないだろう……。一体彼女の本当の目的とは?……

徐々に二人の戦いにも流れが出来始める……。ダークプリキュアの邪悪な野望をムーンライトの光が打ち勝つかのようにダークプリキュアを追い詰めていく……。そしてトドメとばかりにキックを放とうとした時に突如黒い光線が彼女を跳ね飛ばしてしまう……。シプレ「ムーンライト!!!!!!」

ブロッサム「あ!!!!!!」

なんとその正体は彼女の生みの親であるサバークだった……。ムーンライト「サバーク!!!!!!」

サバーク「久しぶりだな?ムーンライト!!!!!!」

ブロッサム「あの人サバーク博士?」

サバーク「ふっふっふ!!!!!!」

その頃どうやって手に入れたかは知らないがスナツキーに変装した  
えりか達はブロッサム達に合流するため先に進んでいた・・・スナ  
ツキー達はどうやら変装に気が付いていないらしくえりか達はやり  
過ぎす事で何とかごまかしている・・・

スナツキーA「キキキー」

えりか「キ？」

スナツキーA「キキキー!!!!」

えりか「キキキキキッ!!!!」

いつき「キキキキキキ!!!!」

大人「・・・・・・（何でこんな事で気がつかない?・・・・・・コイツら  
間抜けか?」

大人のそんなツツコミはさて置きどうやらスナツキー達はプリキュ  
アを探している様であった・・・此処は何気ない感じで離れようと  
したのだが・・・・・・

スナツキーB「キキ　　!!!!」

えりか「・・・・・・なんかマズイ感じ?」

いつき「どうする?」

大人「このままじゃ・・・・・・」

ポプリ「キ　　!!!!プリキュアでしゅキ　　!!!!」

スナツキー達はポプリの言葉に反応して一斉に走り出す・・・なん  
とかこの場を回避する事が出来た

いつき「ナイス!!!!ポプリ」

夕「偉い!!!!」

えりか「今のうちに逃げるっキー!!!!」

の筈だったのだがスナツキーの一体がどうやらえりか達の正体に気  
がついたらしく彼女達を追うのだった

えりか「おばーちゃん!!!!」

薫子「スナツキー!!!!」

大人「ちょ、違う・・・・・・ちょ、ちょ、ちょい待ち!!!!」  
いつき「ボク達です!!!!」

薰子「えりかちゃん、いつきちゃん、それに大人君に琢磨君、傑君に夕ちゃんも!!!」

大人「無事でよかった・・・」

コフレ「やっと会えたです!!!」

薰子「皆よく来てくれたわね・・・どうしたの!？」

えりか「はあ~~~~」

大人「ふう~~~~」

いつき「ぷう~~~~」

えりか「おばあちゃんの顔を見たら・・・」

いつき「安心して力が抜けて・・・」

大人「此処まで・・・長かったあ〜」

琢磨「流石に・・・俺でも疲れた〜」

傑「ふう~~~~」

夕「はあ~~~~」

やっと薰子と再会できた・・・薰子が無事という事はつばみ達の無事であろう・・・戦いはまだ終わってはいなかったが此処までの疲労が一気に自分達の身体にのしかかってきたのだ・・・休んではいられないのだがやはり身体の悲鳴には勝てない・・・

コフレ「マリンじゃないけど《こころが我慢の限界よ》です・・・」

薰子「コツペ!!!」

コツペはお腹から心の種が入ったココロポットをを取りだす・・・

しかし何の意味が？

えりか「こころの種？」

すると光が放たれる・・・暖かくも安らかで心がいやされる・・・それだけではない・・・身体の疲れが自然と抜けていくかのような安らぎの光だ・・・コフレ達はそれを体中に浴びていく

コフレ&ポプリ「気持ちいいです~~~~」

そしてその光はえりか、いつき、大人、琢磨、傑、夕の身体の中に入っていく・・・まるでエネルギーを充填するかのようだ・・・その光を本当に優しく暖かい・・・6人の疲れは一気に癒されて全

員が元気にあふれる

えりか「なんか元気が出てきた!!!!」

いつき「うん力がみなぎって来たよ!!!!」

大人「コレがこころの種の真価」

琢磨「すっげえ!!!!」

傑「うん!!!!」

タ「よつし!!!!コレで勇気100倍!!!!」

薫子「これまで頑張って集めたこころの種が皆に力を与えてくれたのよ」

そうこれはただの奇跡などではない・・・今地球に残っている人々の思いが集まって起こった奇跡なのだ・・・自分達は8人で戦っているのではない・・・世界中の人々と繋がっているのだ・・・えりか達はそんな思いに目を輝かせながら歓喜に浸る・・・だがそんな中スナッキー達が追い付いてきた・・・

大人「・・・どうやら団体さんのお出ましまいただね？」

琢磨「たつく!!!!懲りねーな？」

傑「しょーがねーよ敵もそれだけ必死というわけだ・・・」

タ「でも遅かったね・・・今のアタシ達はフルパワー全開だよ!!!!」

えりか「うん!!!!」

いつき「さあ〜て行きますか？」

大人「ああ!!!!皆行くぞ!!!!」

えりか「やるつしゅ!!!!」

いつき&タ「うん!!!!」

琢磨&傑「ああ!!!!」

コフレ&ポプリ「プリキュアの種いくですー!!!!!!(しゅ!

!!!!)」

えりか&いつき「プリキュア・オープンマイハート!!!!!!」

えりかはココロパヒューム、いつきはシャイニーパヒュームを取り

だし青、黄色の心の種をセツトしていきパヒュームの聖なる光を受けて青い戦士と金色の戦士に姿を変えていく・・・もう今の自分達に敵はない！！そう表現したかのように力強く気高く伝説の戦士の姿に変身する！！！！

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン！！！！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン！！！！」

大人&琢磨&傑&タ「！！！！変身！！！！！！！！！！」

電子音：「！！！！HEN SIN！！！！！！！！！！」

大人&琢磨&傑&タ「！！！！キャストオフ！！！！！！！！！！」

電子音「！！！！CAST OFF！！！！！！！！！！」

電子音「！！！！CHANGE BEETLE！！！！！！！！！！」

電子音「CHANGE STAG-BEETLE！！！！！！！！！！」

電子音「CHANGE BUTTERFLY！！！！！！！！！！」

カブト「光を支配せし太陽の神・・・仮面ライダーカブト！！！！！！！！！！」

ガタツク「戦いを支配せし戦いの神・・・仮面ライダーガタツク！！！！！！！！！！」

！！！！

ダークカブト「闇を支配せし黒点の神・・・仮面ライダーダークカブト！！！！！！！！！！」

ブト！！！！！！！！！！

フェアリー「聖なる翼を持せし白銀の神・・・仮面ライダーフェアリー！！！！！！！！！！」

！！！！！！！！！！

全員が変身を終えて名乗り上げを終えるころにはスナッキー達が此方の目と鼻の先まで来ていた・・・だがマリン達は慌てることなくチャージしたパワーをスナッキー達にフルパワーでぶつける様にパンチを放つ！！するとスナッキー達はボーリングのピンのように四方八方に飛んでいくのだった

マリン&サンシャインフェアリー「しゅ！！！！！！！！！！」

カブト&ガタツク&ダークカブト「しゅわ！！！！！！！！！！」

その頃ムーンライトとダークプリキュアの戦いはダークプリキュア



の有利に進んでいた・・・というのもサバークの乱入によって形勢が崩れてしまいムーンライトは必然的にサバークとダークプリキュアの二人を相手にすることとなってしまったからである

ムーンライト「くっ!!!!!ああああああ!!!!!!!!!!!」

ブロッサム「ムーンライト!!!!!二人だけの戦いを邪魔しないでください!!!!!」

サバーク「うおおお!!!!!!!!!」

ブロッサム「きゃああっ!!!!!!!・・・くっう!!!!!!」

ムーンライト「ブロッサム!!!!!!ぐうっ!!!!!!?」

ブロッサムがサバークの攻撃を受けて悲鳴を上げてしまう・・・ムーンライトは彼女が心配になり声を上げてしまうのだがそれをダークプリキュアが隙ありをばかりにムーンライトにパンチの嵐を浴びせる

ダークプリキュア「消えろ!!!!!そして私が新のムーンライトになる!!!!!!」

真のムーンライト?・・・どういう意味なの?・・・貴女は貴女じゃない?・・・例え私を消したとしても貴女は貴女にしかねない・・・それは紛れもない事実の筈・・・何をそんなに焦っているの?・・・分からない・・・彼女の意図が・・・ムーンライトはそんな事を考えダークプリキュアと戦う・・・彼女の闇を照らすために・・・彼女がどんな思いで自分を敵視しているかは分からない・・・だがそれでも彼女を光を照らせるのは自分しかいない・・・

ブロッサム「はあ、はあ、はあ・・・」

サバーク「お前など所詮その程度・・・結局は史上最弱のプリキュアのままだ」

ブロッサム「いいえ・・・私は少しずつだけど変わったんです・・・チェンジしたんです!!!!!!」

サバーク「お前は変わってなどいない・・・弱いプリキュアのままだ」

ブロッサム「確かに昔の私は弱くて臆病でとても引つ込み思案でした．．．でも！！えりかと出会って

プリキアになって気づいたんです！！太陽のように強く明るい人も．．．月のように深く静かな人も．．．みんな心のどこかで悩みを抱えては苦しんでいて．．．それでも光を求めては一生懸命生きているんだって！！！」

サバーク「はっ！！！！！」

ブロッサム「私は一人で殻に籠っていては分からなかった人の思いを知ったんです！！！」

私は昔小さかったころには人と接するのが怖かった．．．引つ込み思案で父や母おばあちゃん．．．そして肉親以外ではかつて幼い頃に兄の様に立っていた大人しか心が開けなかった．．．私は怖かった．．．自分が否定されるのが．．．でもそれは私の思い込みだった．．．えりか、いつき、ゆり、琢磨、傑、夕達の仲間に出会って、プリキアになって私は変わった．．．そんな全ての人々に応えるために私負けるわけにはいかないんだ！！！！サバーク「人の思いなど必要ない！！弱ければ何も守れないではないかあ！！！」

ブロッサム「今の私には大切な仲間がいて愛する家族がいて大好きな友達があります！！私はこの世界が大好きです！！ちつぽけでも史上最悪なプリキアでも皆の心を必ず守って見せます！！その気持ちだけは誰にも負けません！！！」

ムーンライト「．．．（成長したわねブロッサム）」

ダークプリキア「はあーーーー！！！！何！？」

ムーンライト「プリキアの．．．いいえこの世界を守る戦士達の全ての思いを受けてみなさい！！！」

ブロッサムの言葉にムーンライトの闘志に火がついた．．．私のいつまでも立ち止まってはられない必ず影を消し去り過去に生きるのを止めるために私は戦う！！！」

サバーク「あああああつ!!!!!!!!!!」

ブロッサム「シプレ!!!!!!」

シプレ「はいですう!!!!!!」

ブロッサム「はああー!!!!!!」

ブロッサムは猛スピードでサバークにパンチするがサバークはそれを瞬間移動で避けるだが同時にシプレがマント化を解除して……

・ シプレ「プリキュア・ぜえ〜んぶペア〜ンチ!!!!!!」

自分のカラダ全てを使ってサバークの顔に覆いかぶさり視界をふさぐ……

サバーク「ぐううつ……邪魔だ……ど、退けえ……」

ブロッサム「はあああつ!!!!!!」

サバークはシプレの処理に戸惑っている内にブロッサムにケリ飛ばされてしまうその頃ムーンライトとダークプリキュアの激闘は……

・ ムーンライト「はああつ!!!!!!ふん!!!!!!」

ダークプリキュア「ぐううつ!!!!!!?……がはああつ……はああつ!!!!!!」

ムーンライト「ふんつつ!!!!!!やあああつ!!!!!!」

ダークプリキュア「がはあああつ!!!!!!……!!!!!!?」

ムーンライト「はあああああつ!!!!!!」

ムーンライトの凄まじい攻撃にダークプリキュアは追いつめられてしまっていた……ムーンライトはすかさずトドメに入る……ダ

ークは壁に身体を叩きつけられてしまいすぐには動けない……もう終わりだと思ったその時……

サバーク「ダークプリキュア!!!!!!」

サバークが彼女の盾となりムーンライトの光線を受けたのだ……そしてサバークの仮面が割れて彼の素顔が明らかとなった……な

んとその素顔は……

サバーク「ぐうつ……がああ……ああ……」

ムーンライト「……！！！！……お父さん！！！！」

ブロッサム「え？サバーク博士がムーンライトのお父さん！？……  
・はっ！！だからおばあちゃんは……」

月影博士「私は……一体？」

薫子の言葉の意味はこう言う事だったのだ……なんとその素  
顔は3年前に行方不明となつたゆりの父である月影博士だった……  
・こんな非情な再会は運命か？それとも神のイタズラか？正義の戦  
士と悪のマッドサイエンティスト……こんな皮肉が認められ  
るはずがない……ムーンライトはあまりのショックに変身を解除  
してしまいゆりの姿に戻る……そして父に近づく……やっ  
と会えた最愛の父に……

ゆり「お父さん！！！忘れたのですか？ゆりです……貴方の娘の  
ゆりです！！！！」

月影博士「ゆり？……ゆり！！！！」

ゆり「お父さん！！！！」

ダークプリキュア「ぐっ！！！！……来るなあ！！！！」

ダークプリキュアは狂つたようにそう喚いてあたりに衝撃波を発す  
る……そして睨みながら荒げた声を上げる……

ダークプリキュア「よく私の父を傷つけてくれたな？」

ゆり「！？……何言っているの？」

ダークプリキュア「何を？寝ぼけた事を！！私を生み出したのはサ  
バーク博士だからな！！！！」

ゆり「！！！！」

ダークプリキュア「私はサバークは博士によつて造られた存在……  
その理由はただ一つ……それはムーンライト！！貴様を倒す事だ  
！！！！」

ゆり「私を倒す！？……そのためにお父さんが？お父さん！！！！何  
かの間違いですよ？お母さんと私を置いてこんな事になるなんて

「!!!お父さん!!!!!!」

月影博士「くっ……」

ゆり「!!!!!!……そんな……」

嘘だ……サバークが私の父……お父さんだったなんて……父はこころの大樹を探す旅に出て行方不明となった筈……なのに何で砂漠の使徒なんか……それも私を……実の娘の私を倒すためにダークプリキュアを生み出した?……こんな事実……私は受け入れられない!!!

ゆりはシヨックに耐えきれずに心の種をその場に落として膝まづいてしまう……彼女の父がサバーク……そしてこの世界を滅ぼす事に加担した……こんな事……彼女にとっては信じられない……いや信じたくない事実だった……彼女にとっては信じられない……サバーク博士の為に前には消えてもらおう!!!」

ダークプリキュアはそう言ってゆりに迫る……全てはこの為だった……ダークプリキュアはサバークの事を父としてみていた……自分を造ってくれた親として……だが自分は所詮は造られた存在……故に月影ゆりというもののコピーの様なモノ……ならばサバークがゆりの父親だった時の記憶を永遠に封印しておき自分を娘としてもらおう……これこそがダークプリキュアの本当の目的だったのかもしれない……

ゆりは何もできずにその場にへたり込んでいるがその前にブロッサムが乱入してダークプリキュアの攻撃を受けとめる。

ブロッサム「うっつ!!!!!!」

ダークプリキュア「えええい!!!邪魔をするなあ!!!!!!消えろ、消えろ、消えろ、消えろ、消えろ、消えろ、消えろおー!!!」

ブロッサム「くっ!!!!!!……ゆりさん、しつかりしてください……ゆりさん!!!!!!ゆりさんのお父さんがこんな事になったのにはきつと何か深いわけがあったんです!!!!!!そのお父さんを守るためにも此処で負けるわけにはいきません!!!!!!」

ゆり「ブロッサム・・・」

ブロッサム「ゆりさんは言いました《ダークプリキュアに打ち勝つ事がかつての自分に打ち勝つ事だ》って私の憧れる強くて優しいゆりさんは決して自分に負ける様な人ではありません!!!・・・お父さんを自分の本当の気持ちを信じてください!!!」

ゆり「自分の気持ち・・・私はお父さんを・・・」

ブロッサム「私達プリキュアの・・・いいえこの世界を守る仲間の思いはゆりさんと共にあります!!!」

ブロッサムは何かダークプリキュアの漆黒の光線を自分のピンク色の波動で打ち消す・・・ゆりはその姿に驚いた・・・ブロッサムがダークプリキュアの技を退けた・・・彼女は此処まで強くなったのか・・・なら私も自分の弱さに決着を打つ時だと決心してムーンライトに変身するために藍色のこの種の種を手にする・・・もう何があっても屈しない!!!私父の為・・・世界の為に戦い続ける!!!!!!

ダークプリキュア「おのれえ!!!!!!!!!」

ダークプリキュアは漆黒のエネルギーボールをから漆黒の槍を造る・・・自分の野望の邪魔はさせまいと粗ぶる姿を見せつけながら・・・ブロッサムは思った・・・次の一撃には耐えきれない・・・だが此処でゆりが手を伸ばしていく・・・ブロッサムと共にそして漆黒の槍をこころの種から発せられる結界によって防御する・・・二人は無事だった・・・勇ましさを放ちながらダークプリキュアに自分達の存在を見せつける・・・だがブロッサムは限界を迎えてその場に倒れそうになるがそれをゆりが受けとて彼女を座らせる・・・

ブロッサム「ゆりさん・・・」

ゆり「キュアブロッサム・・・貴方のお陰で私はもう一度戦う勇気を取り戻したわ・・・ありがとう!!!」

ゆりはブロッサムにつぼみに心から感謝の言葉を送ったブロッサムもゆりに笑顔を返す・・・もう大丈夫だ・・・そう思ったのだ・・・

私は彼女に何度も救われた・・・今度は私が彼女の優しさに応える番・・・必ず自分の影を倒す！！・・・それが私の戦いの本当の決着ヒリオトでもあるのだから・・・もう逃げない・・・絶対に！！！！

ゆり「此処からは私が・・・貴女や皆の思いを胸に！！！！」

ゆりは前に出る・・・仲間の思いを胸に全ての思いを受け継ぎ自分のた戦いに勝つために・・・そしてココロポットを取りだして変身する

ゆり「プリキュア・オープンマイハート！！！！」

ココロポットから放たれた様々な色のこころの種が彼女の周りに集まり三日月の様に欠けた藍色の種が一つの円い満月の様な形になるそしてこころの種をココロポットに装填し光と共に彼女の姿は銀色の月の戦士へと姿が変わる

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト！！！！」

ムーンライトは名を上げダークプリキュアに近づく最後の戦いをする為に・・・

ムーンライト「これで終わりにしましょう」

ダークプリキュア「良いだろう私達はどちらかが消えるまで戦う運さ命！！！！」

ムーンライト「例えば私が消えたとしてもプロツサムがいる、マリンがいる、サンシャインがいる、カブトがいる、ガタツクがいる、ダークカブトがいる、フェアリーがいるわ・・・」

ダークプリキュア「そいつらも全て倒すだけの事」

ムーンライト「簡単には倒されない・・・それがプリキュアとライダーの絆！！！！」

そう例え自分が倒されても私の仲間がいる限り私は消えない！！！！大切な仲間とともに今まで生きた日々は誰にも消せないのだから・・・

ダークプリキュア「下らんな！！！！この一撃でケリをつける！！！！」

ムーンライト「望むところ！！！！」

互いにタクトを向けて自分達の最強技で決着をつける気だ・・・

今度こそは私が勝つ！！ダークプリキュアはその野心に捕らわれていた・・・彼女の力ムーンライトがこれまでの仲間との戦いと絆でどれほど強く  
なったか理解できないまま・・・

ダークプリキュア「プリキュア・ダークパワーフォルテツシモ！！」  
「」

ムーンライト「プリキュア・フローラルパワーフォルテツシモ！！」  
「！！」

光と影の波動が激しくぶつかり合う・・・銀色のオーラのムーン  
ライトと漆黒のオーラのダークプリキュアとの最後のぶつかり合い  
だ・・・二人とも一歩も譲らないだが・・・だが此処にムーン  
ライトにピンク、水色、黄色、赤、青、黒、白銀の光が集まる・・・  
・そう仲間達の思いが彼女に更なる力を与えるのだ・・・  
ダークプリキュア「ば、バカなあ！！！！」

ムーンライト「勇気、愛、友情、優しさ、悲しみ、喜び、沢山の気  
持ち、皆の心、仲間との絆・・・命と心に満ち溢れたこの世界を私  
は守る！！！！！！」

ダークプリキュア「ぐうううっ・・・ぐおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！」

ダークプリキュアは信じられなかった・・・バカな・・・コレが  
人の心の・・・絆の強さ？・・・今の私にはない・・・何故だあ  
！？・・・

ムーンライト「ハートキャッチ！！！！！！」

ダークプリキュアはそのまま爆風を立てた・・・そしてそのまま  
地面へと落ちていくのだった・・・私は・・・  
負けた・・・そんなバカな・・・一度は勝てたのに・・・  
・・・こんな・・・事・・・認め・・・たく・・・な・・・  
・・・い・・・



第13話「驚愕サバークの正体！？ムーンライトVSダークプリキュア最後の戦

はい。サバーク博士の正体・・・皆さんはTVの前でどういう心境  
でしたか？・・・私は正直なせこつなつたかの経緯が知りたいです  
！！！！マジで！！！！

さて次回はラスボス再び・・・果たしてブロッサム達はカブト達は  
勝てるのか！？

次回もお楽しみに

第14話「最終章? 憎しみVS愛 プリキュア・ライダーチームVSデューン

前回までのあらすじ

サバークの正体は何と3年前に失踪したゆりの父であった・・・ゆりはあまりのショックに戦意を失い闘う事を止めてしまう・・・だがブロッサムに彼女の姿に彼女のころはもう一度闘う勇気を取り戻せた・・・そして仲間達の思いが詰まった渾身のフォルテツシモがダークプリキュアを貫いていく!!!!!!

プリキュアとライダー達が激闘を繰り広げている中で地球では・・・いや日本では夕焼け空を見ているケンジとななみがいた・・・町にはデザートデビルが自分達を探しているかのように徘徊していた・・・

・  
ななみ「番くん・・・私達どうなっちゃうのかしら?」

ななみは不安そうにそう言う・・・デザートデビルが徘徊しているこの砂漠の町は・・・いや町だけではなく世界は地球は本当に助かるのかな?・・・私達の未来は本当にあるのかな?そんな不安から出てきた言葉だった・・・しかしケンジは笑いながらななみに言葉を返す

ケンジ「心配しなくていい・・・俺達皆がプリキュアや仮面ライダーを信じていれば・・・大丈夫だ!!!」

風が吹く夕暮れの中ケンジはそう言う・・・大丈夫だ・・・プリキュアも仮面ライダーも絶対に俺達の大切な世界を取り戻してくれる・・・今までだってそうだ・・・俺達が信じていれば絶対に彼女達は負けない・・・俺はそう信じる・・・果たして彼らの思いは彼女達に届いているのか・・・それは後ほどはつきりとわかってくるだろう・・・

ダークプリキュア「ぐう・・・ぐう・・・がああ・・・ぐうつ・・・ああああああああああ!!!!!!」  
ムーンライト「・・・」

ダークプリキュアは苦しんでいた・・・片方しかない漆黒の翼がバラバラになり黒い破片をばらつかせながらフラフラと倒れそうになっていた・・・そしてとうとう断末魔の様な声を上げて仰向けに倒れた・・・ムーンライトコレで光と影の戦いは決着がついた・・・ビシオもう争う事は無くなったのだ・・・

ムーンライト「・・・グス・・・お父さん!!!」

そして私は過去の私を完全に乗り越える事が出来た・・・ムーンライトはタクトをしまい振り返る・・・そこには父がいた・・・会いたくて会いたくて堪らない父にやっと会えた・・・ムーンライト・・・いやゆりはその思いを今まで溜めに溜めていた父への思いを涙で表現するかの様に普段の彼女ならつばみ達には絶対に見せない涙を目にタツプリと浮かべて父の元へ走るそして抱きしめた・・・今までの思いを涙で現わしながら・・・私は今まで寂しい思いを誰にも打ち明けられなかった・・・仲間でさえも・・・涙で濡らした自分を・・・弱々しい自分を見せなくなかった・・・でも今だけは素直になる・・・やっと最愛の父に会えたのだから・・・ブロッサム「良かったですね!!ゆりさん」

ブロッサムとシプレは後ろで二人の再会に涙していた・・・哀しい再会であつたけれどもそれを乗り越えて二人は元の家族に戻る事が出来た・・・これからはお互いに再生の時間を迎える事になるかもしれないけど・・・この二人なら絶対に乗り越えられる・・・ブロッサムはそう思っていた・・・だが月影博士は思い詰めた表情のままムーンライトに語りかける・・・

月影博士「ゆり・・・私はお前を抱きしめる資格は無い・・・ムーンライト「・・・!?!」」

月影博士「全ては私の心の弱さが引き起こした事だ・・・あらゆる命と心を見守るころの大樹・・・私はその秘密を解き明かせば皆を幸せに出来る」と信じていた・・・魔法のように・・・皆が幸せになる方法などないという言葉さえ耳に入らないほどに・・・幸せは皆が少しずつ頑張つて掴むもの・・・研究に行き詰つた私はデューンの誘いに乗り心を奪われ差そして”サバーク”として世界を滅ぼす手先になつてしまった・・・ゆり・・・私は・・・」

私は・・・弱さに負けてデューンの僕となつてしまった・・・そして愛する娘を苦しませてしまった・・・そんな私に娘を愛する資格などない・・・彼は罪悪感に捕らわれているのだ・・・確かに研究

のためとはいえ侵略者の手先になどなる事は許されない行為だ・・・  
・だが過去を悔いていても何も生まれない・・・彼はそんなジレンマにとらわれながらも娘に自分の思いを曝す・・・それが今私に出来る娘に対する償い・・・だがその空気を断ち切る様に漆黒の影が再び動き出す・・・そうダークプリキュアだ・・・彼女は満身創痍になりながらも落としたプリキュアの種を掴んで立ち上がりムーンライトを睨みつける・・・

ダークプリキュア「キュアムーンライト!!!!!!うう・・・  
サバーク博士から離れるお!!!」

彼女は最後の最後まで父を取り戻そうと力を振り絞る・・・フラフラになりながらも・・・ブロッサム、ムーンライト、月影博士は彼女の姿に哀しみを抑えきれない・・・彼女の胸のクリスタルが砕け散りもう命が残り少ない事を見せつけるかのように・・・最後の命の灯火が消えようと自分も自分を造ってくれた・・・いや生み出してくれた父をムーンライトから取り返すかのように・・・  
ムーンライト「・・・?!?・・・お父さん」

ムーンライトは父を渡すものと睨みつけるのだが月影博士がゆりの肩に手を置く・・・ムーンライトは驚いた表情で彼を見るのだが彼はゆりに最後のケジメをつけさせてくれと目で訴えて彼女を離れさせる・・・ムーンライトは戸惑ったが彼のを信じる事にした・・・  
・もう何処にも行ってほしくないというのが本音だが・・・  
月影博士「ゆり・・・すまない・・・私はお前を苦しめるためにダークプリキュアを造ってしまった・・・キュアムーンライトを倒すためだけに存在する心のない人形・・・もういいんだダークプリキュア・・・もういいんだ・・・」

ムーンライト「・・・」  
月影博士「ゆり・・・この娘はこころの大樹を研究して手に入れた技術とお前の身体の一部を使って造られたお前の妹だ!!!」

ムーンライト「!!!（私の妹!?!?!彼女が?だからダークプリキュアは・・・私を）」

月影博士は彼女の哀しき正体をムーンライトにつたえる．．．彼女が私の妹？．．．私と彼女には全く同じ血が流れている．．．姉妹．．．じゃあ私は妹と命を奪い合っていたの？．．．こんな哀しい事が認められるわけない．．．

月影博士「私は娘同士を闘わせてしまった．．．ダークプリキュア．．．お前は私の娘だ！！」

ダークプリキュア「お父さん．．．」

ダークプリキュアは知らなかった．．．私がムーンライトの妹．．．私と彼女が似ていたのはただのクローンではなかった．．．私は父（月影博士）の娘でもあり．．．ムーンライトの．．．ゆりの妹．．．私って．．．バカみたい．．．でも最後に娘って言うてもらえてうれしかった．．．ありがとう．．．お父さん．．．コレで私はもう心残りは無い．．．そしてさようなら．．．お姉ちゃん．．．こんな形だったけど．．．あえて嬉しかった．また生まれ変わる事があるなら．．．今度もお姉ちゃんの妹がいいな．．．あ．．．り．．．が．．．と．．．う．．．

ダークプリキュアは最後に父（月影博士）と姉ゆりに今まで見せた事のない純粹で優しい笑顔をみせて光を放って消滅していく．．．父に抱きしめられながら月光に解けていくかの言うに黄金の光の粒子となって．．．彼女に心があり違う形でゆりと．．．そして父親として月影博士と出会えていれば．．．こんな悲しい事があっていいのだろうか？．．．此処まで辛い思いは今までにない．．．ブロッサムも目に涙を浮かべながら彼女の最期を見届けた．．．姿が完全に消えるまで．．．月影博士の元にいた最期の光は別れを言うかの様にゆっくりと宙そらへと飛んで行った．．．彼はその姿が見えなくなるまで見送った．．．彼女が生まれ変わって人になれるのならば今度は．．．必ず幸せにして見せるという思いを胸に秘めながら．．．

月影博士「くっ．．．うう．．．」

デューン「はははははは．．．とんだお涙頂戴だね．．．とつても面白かったよ．．．月影博士君はいつもボクを楽しませてくれるね．．．ふっ」

だが悲しみに浸るのも此処までだった．．．突然拍手の音が響き渡る．．．全員がその音のする方向に目をやるとそこには満月を背にして塔の上デューンが立っていた．．．先程までの事をまるで何かのショーを見ていた観客のように客観的な態度だ．．．全員の怒りが彼に向けられた．．．だが彼はそんな事は感じないとばかりに無邪気な笑顔を見せる．．．そして彼は其処から飛び降りる．．．それに合わせるかのように月影博士が怒りを剥き出しにした表情を見せつけながら5、6歩歩く．．．

月影博士「デューン!!!」

デューン「怒ったって駄目さ月影博士．．．力が欲しいとボクに頼んだのは君だよ？フランスで研究に行き詰っていた君は自分で僕らの仲間となった．．．君の研究の成果はここの大樹の守りを破るのに大変役に立ったよありがよう月影博士．．．お陰で地球を砂漠に出来たよ．．．」

月影博士「くっ!!!」

デューン「最期の希望プリキユア．．．そして人類に造らせたライダーシステムを破壊してボクが絶望というものを味合わせてあげよう．．．」

ブロッサム「(」私が人類に造らせた”．．．どういう事？マスクドライダーシステムはZECTが造ったんじゃないの?)」

ブロッサムはデューンのセリフに何か引っかけかかっていた．．．彼が人類に造らせた?．．．造ったのはネイティブの筈．．．まさか50年前にネイティブを送り込んだのも．．．デューン!?

デューンはマツハの如くのスピードでブロッサム達に近づくが先に月影博士が怒りを糧にデューンに向かっていく

月影博士「はぁーっ!!!」

元は人間だが今の自分はサバークとしての力がまだ残っている．．．

せめて今までしてきた事の償いをしなくては必死にデューンにパンチとキックを見舞わせていくのだがデューンのスピードには付いていけない……

デューン「はははっはははっ!!! はははははっ…… ははっ!!!」  
月影博士の攻撃を軽くかわすと今度は自分の番だとキックで彼をケリ飛ばす……其処で流れは変わりデューンの猛攻が月影博士を襲う……トドメとばかりに赤黒い光弾を放つがムーンライトが割り込んでムーンライトリフレクションでガードする……  
ブロッサム「(ダークプリキュア……貴女の思いは忘れません……だから見ててください!!!)」

ブロッサムはダークプリキュアが落としたゆりのプリキュアの種を拾い上げると自分も闘うとデューン達闘っている月影博士、ムーンライトの元にへと走る

ムーンライト「ふんっ!!! ふう!!! はああっ!!!」  
デューンに「ははははっ!!!」

ムーンライトの攻撃も紙一重でデューンに当たらずにまるで遊ばれているかのようだ……そしてデューンはムーンライトの腕を掴んで投げると……紅いエネルギー波を放つ……今度はブロッサムが彼に向かう……

デューン「君もボクが憎いのかな？」

ブロッサム「はあああっ!!!」

光弾を跳ね返して反撃するがそれも効果がない……

デューン「あはははははははっ!!! 凄い凄い」

ブロッサム「はあああっ!!!」

ムーンライト「はああーっ!!!」

月影博士「はああっ!!!」

何度も何度もデューンに向っていくが彼には攻撃が通用しない……それでもあきらめずに3人は彼に向っていくのだが……  
デューン「君達は弱すぎる!!!!!!……ふふっ……はあああ

あー!!!」



デューンはソニックブームでブロツサム達を怯ませると今度は此方の番だと手にエネルギーを溜めていくと3人に衝撃弾が炸裂してブロツサムとムーンライトは変身が解除されてしまう・・・

つぼみ&ゆり「きゃあああああ!!!!!!」

月影博士「ぐうっ・・・あああ・・・」

コレが砂漠王の力・・・強すぎる・・・私達はこんな相手に本当に勝てるの?・・・つぼみは一瞬そう思ってしまっ・・・

デューン「あははは・・・」

つぼみ「ううっ・・・うう・・・」

デューン「強いものが弱いものを喰らう・・・何か問題あるかな?・・・ふっ」

デューンは笑顔でそう言うともう一度エネルギーを集め始める・・・今度は自分達を完全に消し去るつもりだ・・・アレを喰らったら私達は・・・いや私達だけじゃない・・・マリンもサンシャインもカブトもガタツクもダークカブトもフェアリーもおおちゃんも・・・それにデューン自身だって・・・彼のパワーは自分達の想像を超えている・・・彼には心がないのか?・・・このままじゃ私達は・・・誰もが諦めたその時月影博士がそのエネルギーの塊に近づく・・・

ゆり「お父さん!?!」

月影博士「ゆり!!!お母さんを頼む・・・ぬあああああああ

!!!!!!!」

ゆり「お父さん!!!!!!」

ゆりは急いで彼の元に向かう・・・彼はエネルギーを自身を犠牲にして消滅させるつもりなのだ・・・しかしそれは自爆も同じ・・・命は無い・・・月影博士はゆりに最期に自分の残された家族を頼むだけ言うと未熟なエネルギーを暴走させて爆発させる・・・ゆりが近づいたころには光と共に大爆発を起きた・・・爆風がやむと辺りには何も残されていなかった・・・ゆりの父親も・・・

ゆり「お父さん?・・・おとうさん!!!!!!」

そんな・・・折角会えたのに・・・またお母さんとお父さんと一緒に笑って暮らせると思つたのに・・・いや・・・お父さん・・・また私を残して行つちゃうの？・・・お母さんだつてこんな事望んでないよ？・・・何で？・・・一人で何で勝手に・・・

ゆりはそんな思いの中デューンの方を見る・・・アイツが私の父を利用するだけ利用した揚句には命まで・・・絶対に許せない！！！！！！

ゆり「デューン！！！！！！」

デューン「君もボクに憎しみをぶつけてくれるのかな？」

ゆりは怒りに支配されながらも立ち上がる・・・よくもお父さんを・・・大切なモノを失つた怒りで我を忘れて憎しみに支配されたまま・・・全身が逆立つほどの怒りがゆりの身体を渦巻いている・・・ゆりは”上等だ”と言わんばかりにデューンに近づいていこうとするのだが・・・それを止める手があった・・・そうつぶみの手だ

ゆり「放しなさい！！！！」

つぶみ「嫌です！！！！・・・自分の怒りや憎しみを晴らすために闘うなんて止めてください！！！！」

ゆり「でも私はアイツが憎いのよ？・・・アイツのせいで私はコロンやお父さんを失つてしまった・・・憎しみが力になるのなら私はそれでも構わないわ！！！！」

つぶみ「情けない事言わないでください！！！！私の好きなゆりさんはそんな事言いません・・・お願いです！！憎しみのまま戦えばきっと負けてしまいます・・・悲しみや憎しみは誰かが歯を食いしばって断ち切らなくちゃダメなんです・・・私たち頑張つてプリキユアしてきたのは・・・闘ってきたのは何のためなんですか？」

ゆりさん思い出してください・・・私達が未熟だった頃にいるいる教えてくれたじゃないですか・・・貴女は憎しみに落ちてはいけません・・・コロンや貴女のお父さんだつて喜ばない・・・そうです

よね？

つぼみは涙ながらにそう訴えた・・・私達の戦いは憎しみの戦いではない・・・人々の笑顔を皆の希望を守るための戦い・・・だから憎しみを断ち切ってくれと涙で顔を濡らしながら訴えるのだ・・・

ゆり「（つぼみ・・・でも私は・・・）」

つぼみ「コロンやお父さんがゆりさんに託したモノは何なんですか？」

ゆり「でも！！・・・でも・・・」

確かに私は憎しみの為に闘ってきたわけではない・・・でも・・・それでも私は・・・

つぼみ「月影ゆり！！・・・私が憧れたキュアムーンライト・・・貴女が何をしたいのか・・・何をすべきなのか・・・そして何のために闘うのか自分で考えてください！！！！」

今の言葉で目が覚めた・・・そうだ・・・私は憎みにとらわれてはいけないんだ・・・私は決めたじゃないか・・・あの時コロンのために、父の為に・・・そして今度は私と同じように誰かに愛されなかった私の妹のために・・・全ての人々の思いを受け継いで私は・・・いや私達は此処まで来たんだ・・・もう憎しみだけの為に闘う様な事は絶対にしない！！！！それがコロンと、父と、妹のために闘うと言う事・・・ならば私は闘う・・・皆の心の為に！！！！

ゆりはつぼみが持っていたプリキュアの種を手に取り自分が持っていた三日月に欠けた種と合体させる・・・この種は私だけの思いではない・・・父と妹の思いも込められている・・・今度は仲間だけではなく最愛の人達の力も受け継いだのだ・・・絶対に負けない！！！！

ゆり「私達は憎しみではなく・・・愛で戦いましょう！！・・・つぼみ・・・変身よ！！！！」

つぼみ「・・・はい！！！！」

つぼみ&ゆり「プリキュア・オープンマイハート！！！！」

つぼみ達はもう一度変身した・・・今度は憎しみなんかを心を支

配されまいと心に決めて・・・赤とと銀色の光に包まれて2人は伝説の戦士へと姿が変わっていく・・・

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!!!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!!!!」

ブロッサム&ムーンライト「はああああー!!!!!!」

ブロッサム達はデューンに向かっていく・・・デューンはまた捻りつぶしてやるとばかりに応戦するが殺気までの二人とは違うと言う事に気がつかなかつた事が彼の誤算だった・・・

ブロッサム「はっ!!!はあ!!!!!!はああー!!!!!!」

ブロッサムは彼にラッシュを放つが彼はそれをガードするだがすぐにブロッサムとムーンライトは二人の合体技のハート型のエネルギー波をデューンに放つそして尽かさずにブロッサム達は近づく・・・

デューンは流石にこのままではやられると危険を感じ二人に向かって余裕を崩した表情で向っていくだが二人には敵わない・・・いや寧ろ追いつめられていく・・・何故だ?二人相手にこのボクがこんな事あるわけがない・・・すぐにでも巻き返してやるとが我武者羅に攻めこんでいき隙を見て赤いエネルギー波を放つ・・・見事二人に命中して勝ち誇るが・・・二人は無事だった・・・太陽のようなシールドで守られていたのだ・・・この技はができるのは一人しかない

マリオン「にっ」

ブロッサム「あ!!!!」

そうマリオンとサンシャインだ・・・すぐにマリオンとサンシャインがデューンにラッシュを見舞わせるが怒りに任せたデューンの力負けしてマリオンが飛ばされる・・・そしてエネルギー波をでドドメを刺そうとしてその時・・・

マリオン「きゃあああー!!!!!!」

サンシャイン「マリオン!!!!!!」

デューン「貴様ら・・・調子に乗るのも其処までだ・・・コレで・・・消えるお!!!!!!」

電子音「MAXIMUM・HYPER・CYCLONE!!!!」  
今までにないぐらいのエネルギーを溜めてこの城ごとまとめて消し  
去るつもりだったが彼の真横から凄まじいエネルギー波がデューン  
に向けた放たれると彼は大爆発を起こして飛ばされてしまう。勿論  
あの技が出来るのは一人しかいない・・・  
ブロッサム「アレはマキシマム・ハイパーサイクロン!!という事  
は・・・」  
ハイパーカブト「危ないなあ・・・」  
ブロッサム「ああ!!カブト・・・皆あ!!!!」  
ハイパーガタツク「まあマリンらしいけどな」  
ダークカブト「今度は俺達も行くぞ!!!!」  
フェアリー「うん!!!!」  
デューン「貴様らあ!!!!・・・はああー!!!!!!」  
降り立ったハイパーカブト達に向かってデューンは形振り構わずに  
無差別に攻撃を仕掛ける・・・だが・・・自分の攻撃が当たらない  
どころがドンドンと流れがブロッサム達に傾いていく・・・先程ま  
で戦っていた相手とはまるで別人であるかのような強さだ・・・こ  
の力の源は何処から出るんだ?・・・破壊王であるこの僕が負ける  
などあり得ない!!!!・・・こんな事ボクは認めない!!!!!!  
マリン&ハイパーガタツク「はあああああ!!!!!!!!」  
デューン「ぐうっ!!?・・・がはああ!!」  
ハイパーガタツク「ハイパーカッティング!!!!!!」  
電子音「RIDER・CUTTING!!!!」  
デューン「ぐうううう!!!!???」  
マリンのマリンインパクトハイパーガタツクのハイパーガタツクダ  
ブルカリバーの斬撃がデューンの身体に命中してダメージを蓄積さ  
せる・・・ハイパーガタツクの斬撃で彼をふっ飛ばした方向にはダ  
ークカブトとサンシャインが待機していた・・・  
サンシャイン&ダークカブト「やああああー!!!!!!!!」  
サンシャイン「はあっ!!!!!!!!」

ダークカブトのアバランスラッシュ、サンシャインの得意の明堂院流で鍛え上げた格闘技が彼のカラダに突き刺さる・・・そしてコレで終わり絵だとはかりにサンシャインのサンシャインインパクトによるエネルギー攻撃と得意のキックがデューンの顔面に直撃していく・・・そして次は

ブロッサム「はあああつ！！！！やあああつ！！！！」

ハイパーカブト「ふんっ！！！！うおおおおおつ！！！！」

ハイパーカブトとブロッサムの猛攻が待っていた・・・デューンは必死に攻撃を見極めようとするのだが彼女達の凄まじい猛攻には耐えきれずダメージを受けていくしかなかった・・・

デューン「があ、げほお・・・ごほお・・・己えくよくも・・・」

フェアリー「はあああつ！！！！」

ムーンライト「ふん！！！！はあああつ！！！！」

追撃を受けながらも何とか体勢を立て直そうとする・・・だがそれをムーンライトとフェアリーがさせなかった・・・

ムーンライト「ふん！！！！」

サンシャイン「はああーっ！！！！！！」

マリリン「はああーっ！！！！」

ブロッサム「はあああつあー！！！！！！！！！！」

そしてブロッサム達はフラワータクト、シャイニータンバリンを構えるとブロッサム達はそれぞれの必殺技であるフェルテウェイブをぶつけてデューンに大ダメージを与えてやりあたりは大爆発を起す。爆風と爆炎がやむ頃にはフラフラのデューンが立っていた・・・

デューン「はあ、はあ、はあ、はあ・・・（な、何故だ！？・・・

さっきまでとはまるで別人じゃないか！！・・・こんな事・・・奴らの力の源は何処から出てくるんだ？・・・くっそお！！！！）」

マリリン&サンシャイン「プリキュア・フローラルパワーフォルテッ

シモ！！！！」

ガタツク「プットオン！！ガタツクバルカンエネルギー充填開始！

！！！！」

ハイパーカブト「集まれゼクター達よ！！パーフェクトゼクターガンモード！！！」

ダークカブト「クナイガンフルパワー！！アバランチシユート発射準備！！！」

フェアリー「フェアリーレイピア・ガンモード！！ライダーバースト発射準備開始！！！」

その間にハイパーガタツクはマスクドフォームに戻りガタツクバルカンのエネルギーを充填しハイパーカブトはもう一度マキシマムハイパーサイクロンの発射態勢に・・・ダークカブトはクナイガンフェアリーはライダーバーストの発射態勢に入る・・・またそれに合わせるようにマリンとサンシャインがフローラルパワー・フォルテツシモを開始する・・・そしてブロッサムとムーンライトも・・・

ブロッサム&ムーンライト「プリキュア・フローラルパワーフォルテツシモ！！！！！」

デューン「ぐおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」  
ガタツク「ガタツクバルカン・フルパワー！！！」

ハイパーカブト「マキシマム・ハイパーサイクロン！！！」  
ダークカブト「フルパワー・アバランチシユート！！！！！」

フェアリー「ライダーバースト・フルパワー！！！！！」

デューンはさせるものかと巨大化して黒いオーラを放ちながら黒い巨人となってフォルテツシモに対抗していく・・・だがそれもライダー達の渾身の一撃とブロッサム達プリキュアの奇跡の力が融合したフォルテツシモには必ずに力負けしてしまい彼の身体は貫かれていく・・・

デューン「あああ！！！！？？」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「ハートキャッチ！！！！！！！」

身体を突き通されてハート型の穴が開くと大爆発を起こす・・・そして仕上げのトドメの一撃の準備に取り掛かる。これで全てを終わ

らせてやるという思いを込めて。

ブロッサム「今・・・万感の思いを込めて!!!!!!」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「ハートキャッチミラージュ!!!!!!」

ブロッサム「皆行きますよ!!!!!!」

今こそ全ての人々の願いをこの一撃に込めて・・・ハートキャッチミラージュを召喚して自分達の最強の姿をその目に刻めというかのようにパワーアップの種をハートキャッチミラージュに装填する。

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「鏡よ鏡プリキュアに力を!!!!!!世界に輝く一面の花!!!!!!ハートキャッチプリキュア・スーパースルエツト!!!!!!」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト「花よ咲き誇れ!!!!!!プリキュア・ハートキャッチオーケストラ!!!!!!」

女神はデューンに近づいてくる・・・デューンは逃げようにも女神に後ろを取られてしまい逃げる事が出来なかった。コレがハートキャッチミラージュのいやプリキュアと仮面ライダー達の戦士達の力なのか?これ程の力があつたとは・・・完全な誤算だった・・・

ムーンライト「ふん!!!!!!」

サンシャイン「はああつ!!!!!!」

マリン「はああつ!!!!!!」

ブロッサム「たあああ!!!!!!」

デューン「あああつ!!!!!!?・・・ぐあああ!!!!!!」

ブロッサム「はああああ!!!!!!」

そして女神の拳が彼に振りおろされていく彼はただそれを呆然と見ることしかできなかった・・・果たして決着はついたのか?・・・



第14話「最終章? 憎しみVS愛 プリキュア・ライダーチームVSデューン

サバークさんとダークプリキュアの最期・・・衝撃的でしたね。

つぼみの成長も見ることが出来て感動の一言ですね。

さて今回はハトプリ本編は最終回!!! 楽しみで仕方ありませんね^^

そしてこの小説も・・・

次回もお楽しみに

スピンオフ？「疑問と答え」（前書き）

ブロッサム達がデューンと激闘を繰り広げていた頃のマンティス達は・・・

## スピンオフ？「疑問と答え」

マンティス「俺の答え・・・分からない・・・何が正しんだ？・・・」

マンティスは変身を解除した人間の姿でカプトを探していた

奴が言っていた事は正論だし否定のしようがない。だが俺には本当に分からないんだ何が正しいのかが何が善で何が悪なのか

《俺達が見たい事は本当に何なのか？》

《そんな疑問が頭の中でグルグルと回っている》

《サバーク博士の言う事が本当に善なのか？》

《本当に俺はカプトを殺す事で自分である事が出来ると言うのか？》  
いや例えアイツらを殺してなり変わったとしても俺は俺でしかない  
・・・分かってたじゃないか始めから全部

ただ俺達は一人の人間として人生を噛みしめたかった。でもサバークはそれを許してくれなかった

《俺は太陽が造り出した黒点かげであり黒点が太陽を支配するには太陽を呑みこむしかない》と生まれてすぐに叩き込まれた・・・嫌というほどに聞かされた

劣等感が渦巻いていた・・・俺の心の中に・・・でもそれを晴らす事はカプトを殺す事だと言われてずっと信じていた・・・でもアイツは俺を一人の人間だと認めてくれた・・・俺はその瞬間俺が今まで信じていたモノの何もかもが壊された・・・

じゃあ俺がしなければいけない事とは何なんだ？・・・俺の様な罪人が生きる道などあると言うのか？

マンティス「ぐうっ！！？？はあ、はあ、はあ・・・俺は・・・俺はまだ死ねない・・・答えを見つめるまでは！！！」

マンティスは歩いている途中で身体の激痛が走った。造られた存在故にその命は短命で更にはキャパシティダウンの副作用の影響で身

体は既にボロボロ・・・もう長くは無いと身体が悲鳴を上げているのが肌で感じた・・・けどまだ死ぬわけにはいかなかった・・・この身体が生きようとしている限り必ず答えを探す・・・それが今の俺の出来る事・・・そしてそれをカブトに伝えなければ・・・

爆発音「ドゴオーーーーーン!!!!!!」

マンテイス「アレは?・・・あそこは塔がある場所じゃないか・・・とうとうデューンが直々にアイツらを・・・ならば俺も其処に行かなければ・・・」

マンテイスは痛みが走る身体に鞭を打ち爆発があつた所に向かう。カブト達を助けるために・・・そして答えを見つけ出すために・・・そうしなければ死ぬに死にきれない・・・

アント「はあ、はあ、はあ・・・やっぱり広いなあ、此処は早く・・・追い付かないと・・・」

ホーンド「アント!!」

アント「!?!?!?・・・ホーンド!!それにモス!!君達も生き残ったんだ・・・」

ホーンド「ええ。どうやらそのようです。」

モス「アイツの言葉を聞いたら戦う意思がなくなってきたさ」

ホーンド「貴方もですか・・・私もです」

アント「・・・二人とも行く場所は同じだね」

ホーンド&モス「うん!!」

アント「じゃあ・・・行こう」

3人は別ルートから爆発音があつた場所に向かっていく。自分達の罪を償い答えを示すために・・・ボク達は生きていていいのだ・・・だったらその前にケジメをつける必要がある・・・

ボク達がしてきた罪を償うと言う・・・

ボク達の命は確実に消えつつある・・・でもボク達が生きる事を許されるのなら精一杯生きていきたい。残りの時間を自分のやりたい

事で埋め尽くしたい・・・でもその前にする事は沢山ある・・・  
今からやる事で命を落とす事になるかもしれない・・・でもそれでもやらないといけないんだ・・・それがボク達の償いだから・・・

4人はそれぞれ同じ目的地に向かっていた・・・これから待っている砂漠王の新しい姿を目の当たりにすることとなるのだがそれでも彼らには恐怖は無かった・・・自分達が生きるためにする事なのだから関係ないと開き直っている事もあるがカプト達の優しさに答えたいと言う気持ちが無意識に働いている事もあったのだ・・・哀しき影の戦士ゼロメンバース・・・彼らは光を求めていただけなのだ・・・人生という光を・・・自分達を一人の人間として認めてくれる存在を・・・人として必要な愛情を・・・それらに飢えていただけだったのだ・・・

彼らは塔へと向かう

自分達の人生の為に、ただ残された時間を悔いのない様に生きるために・・・例え造られた存在であろうと一人の人間として出来る事をする為に

スピノフ？「疑問と答え」（後書き）

スピノフです。ゼロメンバーズ達の心情変化を書いてみました。彼らには次回ハトプリ本編に絡められるように展開を考えています。

次回もお楽しみに

スピントフ？「宙に消えていった魂、闇から光へのプロローグ」(前書き)

父に認められたダークプリキュア……姉に最期の哀しい別れを強いられた彼女の魂の行先は……今回は次回作の伏線の意味があります。

彼女が生まれ変わる事が出来たらもう一度ゆりと再会し姉妹として過ごす事が出来るのか？……それは今の段階では分からない……  
・コレは彼女の転生記のプロローグである。

スピンオフ？「宙に消えていった魂、闇から光へのプロローグ」

宙そらに飛んでいる一つの光があった・・・それは金色の光を放っていた。

その光は消えることなくただ何処かにさまよっていた・・・まるで鳥のように優雅に・・・

この光の正体は光となったダークプリキュアだ。・・・

彼女の残骸はまるで何かを探しまわる様に飛びまわっている

そしてしばらくして光は砂漠化して青さを失った地球へと降りたつて行った・・・

まるで家にも帰るかのように静かに降り立っていた・・・

何故地球に降り立ったのか？それは今の段階では分からない・・・

これは哀しい運命を背負わされた彼女が闇から光へと転生する彼女の再生の物語の序章プロローグでしか無い・・・

果たして彼女が背負う新しい運命とは？

その答えは砂漠王との戦いが完結したのちに始まる物語が教えてくれるだろう・・・



スピンオフ？「宙に消えていった魂／＼闇から光へのプロローグ／＼」（後書き）

彼女は最期の最期でムーンライトの陰ではなく一人の存在として娘として認められました。それは彼女にとって救いでもあり最期の最期で父親に認めてもらいゆりのも一人の存在として認めてもらいました。

しかし彼女は消える運命は避けられなかった。これは非常に悲しすぎます。本編では彼女は消えてしまいましたが私の小説の中ではもう一度彼女に命を与えたいと思います。彼女のも幸せになってほしい故の思い故です。どうか彼女を暖かい目で見てあげてください。

スピノフ？「生存者の思い」（前書き）

大人達が激闘を繰り広げている中地球では残されたもう一人のカブト達が人々を守るべく戦っていた・・・プリキュアとライダーの勝利を信じて

## スピンオフ？「生存者の思い」

電子音「RIDER STING!!!」

ザビー「はああああっ!!!」

電子音「RIDER CUTTING」

ガタック「でりゃあああああーっ!!!!!!」

デザートデビル「グオオオオウオオオオウウウ!!!??  
??」

ザビー「はあ、はあ、はあ・・・コレであらかた片付いたかな？  
ガタック「ああ・・・しかし多すぎる・・・いくら相手と同じと  
は言えコレだけ多いとしんどいな」

黄色のハチと青いクワガタがデザートデビルを消滅させる・・・コ  
レでもう何十匹と消滅させてきたがまだまだ数が残っている・・・  
このまま消耗戦になれば不利なのは自分達であることはまず間違  
い・・・二人は一度変身を解除して須藤と新の姿に戻る・・・  
するとそこに矢車と影山、更に総司が現れる。

矢車「だらしないうぞ須藤!!!この程度で根を上げるなんてさては隊  
長になつてから訓練を怠つてたな？」

須藤「え・・・あ、それは・・・」

影山「凶星かい・・・」

新「それにしても数ではやはり俺達に分が悪い・・・早くアイツら  
がケリをつけるのを待つしかないのだが食料もいつまで持つか・・・  
」

総司「何を言っている？俺がいる限る負けることなどあり得ん。そ  
れに大人達もブロッサム達も俺とお前が鍛え上げたんだ。絶対に負  
けはしない」

須藤「・・・天道君の言うとおりで!!!俺達は残された生存者た  
ちの守備を任されたんだ。絶対に人々を味の怪物から守るんだ。」  
矢車「よく言つたな須藤・・・必ず俺達は俺達の仕事を全うするだ

けだ！！！！！」

全員「おう！！！！！！」

夕焼けで当たりが照らされながら総司達は必ずこの場にいる生存者を守り抜くと誓いあった。絶対に大人やつぼみ、えりか、琢磨、いつき、傑、ゆり、夕の戦士達は必ず砂漠王デューンを倒して戦いに勝ってくれる・・・そう信じて

その頃生存者たちは

ななみ「（一面砂だらけ・・・これアタシ達の町なんだよね・・・本当に）」

ななみは不安でいっぱいだったいつもは明るいのだが今回の様な場合は別である・・・自分達は生き残ったが他の人たちは水晶に閉じ込められている。プリキュアも仮面ライダーも勝ってくる・・・そう信じたい・・・でもしも負けたら？・・・地球は砂に埋もれた不毛の星となってしまうの？・・・そうなったら・・・そう思うと涙が出てきた・・・するとそこに生存者で最年長の鶴崎が来た・・・

鶴崎「志久・・・どうしたんだ？」

ななみ「先生・・・アタシ、怖いんです・・・もしもプリキュアや仮面ライダーが負けたらって思うと・・・」

鶴崎「・・・私もだよ。」

ななみ「え？」

鶴崎「私も怖い・・・いや私だけじゃない。生き残った皆が思っている事だと思う・・・もしも彼女達が負けたらって考えると怖い・・・」

ななみ「でも皆笑って・・・」

鶴崎「強がりだよ・・・全員ホントは怖がってるんだ・・・」

ななみ「・・・」

鶴崎「アタシ達は何もできない・・・ただ信じることしか・・・だから信じよう？」

ななみ「はい。」

確かにそうだった・・・私達には信じてしかできない・・・だっ  
たらその時が来るまで信じよう・・・彼らが勝つ事を・・・そして  
地球が元に戻る事を・・・

スピンオフ？「生存者の思い」（後書き）

生存者の気持ちを考えて書いてみました。噂によれば生き残った人々が最終話で活躍するそうです。本編最終回までもうすぐです。楽しみで仕方ありません！！

次回もお楽しみに

最終話「最終章??無限の力と無限の愛を持つ戦士達」(前書き)

前回までのあらすじ

月影博士とダークプリキュアの誕生秘話が明かされる・・・それは哀しさの一言であり誰もが涙した・・・しかしデューンはその悲しささえも利用していたのだった

怒りに任せて月影博士とムーンライトがぶつかるが月影博士は最期の最期で娘のムーンライトを守った・・・ゆりは怒りを力に変えてデューンに挑もうとするがつばみの言葉に目が覚める。

愛の力に覚醒したプリキュア達はデューンを打つべく仲間達と地球の人々の万感の思いが詰まったハートキャッチオーケストラがデューンに放たれる!!!!!!

最終話「最終章?無限の力と無限の愛を持つ戦士達」

ブロッサム&マリリン&サンシャイン&ムーンライト「鏡よ鏡プリキ  
ュアに力を!?!?!世界に輝く一面の花!?!?!ハートキャッチプリ  
キュア・スーパーシルエツト!?!?!」

ブロッサム&マリリン&サンシャイン&ムーンライト「花よ咲き誇れ  
!?!?!プリキュア・ハートキャッチオーケストラ!?!?!」  
ムーンライト「ふっ!?!?!」

サンシャイン「はああっ!?!?!」

マリリン「たああーっ!?!?!」

ブロッサム「やああああーっ!?!?!」

デューン「ぐあああああ!?!?!」

女神の拳がデューンに降り注がれていく・・・そして彼は光に包ま  
れると苦しみ始める惑星城から虹色の光が放たれていき不毛の地と  
なった地球絵を照らす・・・奇跡の光が希望を象徴するかのよう  
に・・・

ハイパーカブト「やっぱり凄い!」

ハイパーガタック「コレがプリキュアの奇跡の力・・・愛の力って

奴か・・・綺麗だ・・・」

ダークカブト「俺達のライダーシステム何か比じゃないな・・・流  
石だよ聖なる戦士!」

フェアリー「うん。コレでデューンも」

ハイパーカブト達は神々しい光を放つ女神に見とれていた・・・自  
分達にはない聖なる力その力は奇跡という表現の言葉以外全く思い  
つかないほど・・・凄い・・・これならフラワーに倒せなかった砂  
漠王のデューンを完全に倒せるかもしれない・・・そうさえ思えた  
のだ。

ブロッサム&マリリン&サンシャイン&ムーンライト「はあああああ  
あーっ!?!?!」



デューン「ぐああつ……ぐぐぐぐぐぐう！！！！！！……  
くうつ！！！！」

マリ「あああ！！？」

デューン「くうつ……ううう！！！！」

サンシャイン「ああつ！！！！」

デューン「ぐわっ！！！！たああーっ！！！！！！」

だがその奇跡の力をなんとデューンは消し去つたのだ……発生された虹色の光が消えていき漆黒の闇が再び包むのだ全員の絶望を再び煽るかのように……解放されたデューンは膝をついて息を整える……

ブロッサム「ハートキャッチオーケストラが……」

シプレ「効かないですう！！！！！！」

デューン「………やってくれたねプリキュア……でもねこの程度ではボクは倒せない……ボクの憎しみは消えないよ？憎しみは増殖し全てを破壊し奪いつくすまで消える事は無い……」

ブロッサム「！！！！！！！！」

ブロッサムはデューンに哀しい表情を見せた……彼の憎しみは自分達の今の力を完全に超えている……彼を倒すには今の力を超越する力がある……でもそんな事をしても彼は救われない……もしかしたら彼も誰かに愛されたいから憎しみに自身の心を染めてしまったのかもしれない……そんな思いさえ出てきた……

カブト「哀れだな……デューン！！！！」

デューン「何！？」

デューンのセリフに突如カブトが割り込んでいく……カブトの声は普段のように怒りは無くまるで彼の事を哀れむかのような優しい声で……

ハイパーカブト「憎しみを力に変えても俺達には勝てない！！絶対に……絶対に！！！！」

ハイパーガタック「そうだ……お前の力がどれだけ強大なモノだとしても俺達はそれを打ち砕く！！！！」

ダークカブト「俺達は絶対に諦めない!!!必ず俺達の未来を守り抜く!!!」

フェアリー「絶対に皆の未来を壊させたりしない!!!」

ライダー達は前に出る・・・そして自分達の決意をデューンに言い放つのだ。その言葉にシプレ達も感動して目を輝かせる・・・プロツサム達もその言葉に自然と笑みを取り戻す・・・そうだ私達は決めたじゃないか・・・絶対に負けられない・・・自分達の愛する人と未来を取り戻すために!!!スーパーシルエットの姿となったプロツサム達も前に出る・・・例えハートキャッチオーケストラが通用しなくても自分達は諦めない!!!

デューン「ほう？貴様たちが使っている力も元はボクが生み出したと言ってもそのセリフが言えるか？」

ハイパーカブト「何？」

デューン「気がつかないのか？冥土のみ上げになら教えてあげるよ・・・私は50年前にある惑星を支配した・・・その名は惑星ワーム・・・」

ハイパーガタツク「惑星ワーム!？」

デューン「その星にはボクの意志に惚れこんだモノがいてね・・・確かネイティブとか言ったかな?・・・ボクは彼らと取引をした」  
ダークカブト「取引だって?・・・まさか!!!」

デューン「黒い君は察しがいいね?そう地球を支配させるチャンスを与えたのさ・・・その代わりにお前達は今使っているライダーシステムをボクに献上するのが取引だった・・・でもボクの支配される事を拒みそれに反したモノがいた・・・それが惑星ワームの過激派一族だった・・・」

フェアリー「それがワームだったのね・・・」

ハイパーカブト「お前がああ戦いの本当の黒幕・・・だったんだな・・・ゆるさねえ・・・お前のせいで何人の人が犠牲になったと思ってるんだ!?お前のエゴのせいで・・・」

ハイパーカブトは怒りが込み上げてきた・・・アイツのせいで俺達

人間は実験台と同じように使われた．．．多くの犠牲もアイツが操っていたのか．．．絶対に許せない！！怒りと引く終身が彼を呑みこもうとしたのだがそんな彼にブロッサムが手を握る。

ブロッサム「カブト！！！落ち付いてください！！！！．．．貴方の気持ちも私に分かります．．．でも憎しみで戦ったらデューンと同じになります！！！それでもいいんですか！？」

ハイパーカブト「ブロッサム．．．ありがとうございます！」

そうだ俺達は憎しみを晴らす戦いはしない．．．そう決めたんだ．．．ブロッサムは本当に優しい．．．彼女の優しさはときに力になる．．．不思議ださつきまで自分に合った憎しみが消えて言った

デューン「まだ向ってくるか？いいだろう！！．．．君達の愛や思いなどボクの憎しみの前にはゴミだと教えてやろう！！！」

8人「うわああああああああつ！！！！！！！！？？？？」

するとデューンはあたりに赤い波動を放っていきながら周りを崩壊させていく．．．8人は波動に呑まれてしまうがブロッサム達のスパーシルエットの能力でハイパーカブトとハイパーガタックはダイクカブトとフェアリーを抱えて急いで宙そらに飛ぶ．．．

マリン「何？何なの？」

ダイクカブト「まさかデューンの奴．．．今まで本気を出してなかったのか？」

まさかデューンの本気は此処からなのか？．．．そんな予感が全員の心に走って行くのだった．．．

薰子「皆こつちへ！！！」

ブロッサム「あああ！！！」

ブロッサム達はコツペが作った結界の中に避難する．．．よく見るとその中には見覚えのある人影が．．．

ハイパーガタック「お前ら．．．」

マンティス「．．．ふん」

ハイパーカブト「生きてたんだな！！！」

どうやらマンティス達も薰子とコツペに助けられた様だった4人と

もバツが悪そうだったがマンティスが此処で口を開く・・・  
マンティス「まだ俺は分からない・・・何が正しいのか・・・だからその答えをお前達が俺に教えてくれ・・・」

ハイパーカブト「・・・マンティス・・・」

爆発音「ドオオオオオオオン！！！！！！」

全員「！！！！！！あああ・・・」

巨大な爆発音が発せられると惑星城が崩壊していく・・・そして何もかもが崩れ去り跡形もなく消滅してしまったのだった・・・

薫子「来るわ！！！！！！」

デューン「うおおおおおおおおおおおおつ！！！！！！・・・うわあああーーーーっ！！！！！！」

薫子の言葉を合図にしたかのようにデューンは巨大化して姿を現した・・・コレが彼の本気の力・・・此処まで凄まじいものだったとは思いもしなかった・・・デューンの怒りに溢れる声が宇宙にこだましていく・・・そして彼は地球に向って怒りの拳を放つ何発も何発も・・・地球の人々は無事だったがこのままでは地球自体が持たない・・・

マリ「笑っちゃうよね・・・立った14歳の美少女がデューンと闘うなんて」

コフレ「美少女は微妙ですっ！！！！」

マリ「・・・チョっくら地球を守ってこよう！！！！」

ブロッサム「はい！！！！」

マリは明るくそう言って全員に戦う意思の火をつける・・・それに続くようにサンシャイン、ハイパーカブト、ハイパーガタックが結界の外に出る・・・

サンシャイン「えりか！！ゆりさんは17歳だよ？」

マリ「ああーっ！！！！そうだった！！！！ゆりさん、ごめんなさい！！！！」

ムーンライト「うふ 行きなさい！！！！」

マリ「はい！！！！！！」

ムーンライトの合図に先ずはマリんとサンシャインが先にデューンの元に向かう次は自分の番だとムーンライトとが外に出ようとする・ブロッサム「ムーンライト!!! さっきは生意気な事言つてすみませんでした!」ムーンライトが一番悲しい思いをしてるのに「

ブロッサムはさっき自分がゆりに対して言つた発言をそう言つて謝るのだった・今思えば一番傷つきボロボロになっていたのにムーンライトだったんだ・それなのに私は自分の意見を彼女に貫き通した。それは彼女に復讐鬼になってほしくなかったかでもあるが故に事だったのだがそれはそれ・まだまだ未熟である自分が彼女にそれを言う資格は本当にあつたのだろうかという迷いがブロッサムに後悔の念を生み出しているのであつた・そんなブロッサムの思いを察したムーンライトが優しく彼女の肩に手を添えていくと・・・

ムーンライト「貴女の優しい気持ちと思いやりの心が私に大切なモノをくれたのよ・さあ、行くわよ!!!」

彼女は優しくそう言つた。今まで自分達を鍛えるために冷たく接していた彼女からは想像もできないほどの暖かさを感じた・・・ブロッサムは笑顔を取り戻していく。

ブロッサム「おばあちゃん行つてきます!!!」

薫子「うん!!!」

ムーンライトとブロッサムが飛び立ち残つたのはハイパーカブトとハイパーガタツクだけであつた

フェアリー「ちえゝアタシも空を飛べたら戦えるのになあゝ」

ダークカブト「しょうがないじゃんゝデューンのバカが惑星城ぶつ壊しちゃつたんだから」

ハイパーカブト「じゃあいつしよに行くか?」

ハイパーガタツク「掴まれよ・二人とも!!!」

フェアリー&ダークカブト「うん!!!」

ハイパーカブト「ちよつと飛ばすからしつかり捕まってるよ!!!」  
ハイパーガタツク「振り落とされて泣きわめくなよ?!!!」

残念ながらダークカブトとフェアリーは空を飛べないタメに外に出ることは出来なかつたのだがハイパーカブトとハイパーガタツクは二人を背中に乗せる最期の最期まで仲間と共に戦おうと言う事なのだ・  
・二人を乗せてハイパーカブトとハイパーガタツクはフルスロットルでバーストエンジンを発動させてブロッサム達の元に合流する8人の戦士はそれぞれの光を放ちながら巨大化したデューンの元にたどり着く。

デューン「来たか?・・・だが捻りつぶしてあげよう!!うあああ  
ーーーーっ!!!!!!」

デューンは巨大化してパワーアップした力でブロッサム達をねじ伏せようと拳を放つ。彼女達はそれを難なくかわして行くが今度はデューンの額に光が集まり光線が放たれて惑星城の残骸ごとブロッサム達を消滅させようという魂胆だ・・・

デューン「ふん」

デューンは勝ったと思いい鼻で笑う・・・だが爆風がやむと其処にはブロッサム、マリリン、サンシャイン、ムーンライト、ハイパーカブト、ハイパーガタツクの6人が堂々と彼の前に立ちはだかつていた・

デューン「うっ!?!?」

まさかあの攻撃に耐えたのか?そんな思いが彼の脳裏によぎった・  
・何故だ?何故自分の攻撃が通用しない・・・まさか彼女達の力は自分の想像を超えているのか?・・・そんな疑問が彼の脳裏を埋め尽くしていたが此処でブロッサムが哀しい口調で声を上げる・・・  
ハートキャッチミラージュで自分の巨大化しておぞましい姿を彼に見せながら・・・  
ブロッサム「デューン・・・哀しみが終わらないのは私達の力が足りないから・・・憎しみが尽きないのはまだ・・・私達の愛が足りないから・・・だから、だから・・・」

ムーンライト「だから私達は力を合わせましょう」  
マリリン「私も合わせる!!!」

サンシャイン「私も！！！」

ハイパーカブト「俺も！！！」

ハイパーガタツク「俺も！！！」

ダークカブト「俺も！！！」

フェアリー「アタシも！！！」

コフレ「コフレも！！！」

シプレ「シプレも！！！」

ポプリ「ポプリも！！！」

シプレ&コフレ&ポプリ「皆で力をあわせるですう！！！！！」

ブロッサムは思った・・・彼が憎しみで哀しい戦いを行うのはもしかしたら今までのプリキュアが彼に対する憎しみがあつたからかもしれない・・・だとしたら自分達は愛の力で闘うと決めたのだから最大の愛の力で彼を憎しみから生まれてくる悲しみから解き放つてあげればいい・・・それにムーンライトもマリンもサンシャインもハイパーカブトもハイパーガタツクもダークカブトもフェアリーもシプレもコフレもポプリも賛同して全員手をハートキャッチミラージュに添える・・・これ以上デューン自身にも哀しい思いをさせない為に・・・そしてその言葉に答えるかのようにハートキャッチミラージュが輝きを放つ！！！！

薫子「無限の可能性が・・・今、花開くわ！！！」

ブロッサム&マリン&サンシャイン&ムーンライト&シプレ&コフレ&ポプリ「宇宙に咲く大輪の花！！！」

ハイパーカブト&ハイパーガタツク&ダークカブト&フェアリー「インフィニティー・キャストオフ！！！」

その言葉を合図にプリキュアと妖精達全員の思いが合体して二つの光を放つ巨大な球体が現れる・・・球体に罅が入ると一つ目の球体からはハートキャッチオーケストラで発動する女神とはまた違う女神が

そしてもう一つの球体からはカブトの角とクワガタのツノをと超の羽を持つ黄金の仮面の戦士が降臨したその名は・・・

ブロッサム「無限の力と無限の愛を持つ星の瞳のプリキュア！！ハ  
ートキャッチプリキュア無限シルエツト！！！」

ハイパーカブト「無限の勇氣と無限の可能性の仮面ライダー！！仮  
面ライダーインファイニティー！！！」

デューンは信じられないとでも言う様な表情で二人と見つめていた。  
・コレが光・・・自分が今まで知らなかったモノなのか？・・・  
デューン「うおおおっ！！！！！」

だったらソレも破壊してしまうまでだとデューンは迷わずに拳を二  
人に放つが二人に拳が届くことなくはじかれてしまった・・・  
ブロッサム「憎しみは自分を傷つけるだけ」

インファイニティー「そしてその傷がまた憎しみを生み出す」  
デューン「！！？・・・うわぁーっ！！！！！」

デューンは何度も何度も拳を放つていくが二人にはその拳が届かな  
い・・・何故なんだ？どうして破壊王の拳が届かないんだ？・・・  
ボクは今まで憎しみを力に変えて全てを破壊して支配してきたんだ  
ぞ？なのにこんな事あり得るわけがない！！！！！

ブロッサム「喰らえこの愛！！！」

インファイニティー「憎しみという闇を打ち消す愛の光を！！！！」  
デューン「うっ！！！！？」

ブロッサム「プリキュア・こぶしパンチ！！！！」

インファイニティー「インファイニティーキック！！！！！」  
デューン「あっ！？・・・！！！」

二人の愛の力のパンチとハイキックがデューンの胸にに放たれた。  
・彼は恐怖が身から溢れていたがその恐怖は無くなっていった何故な  
らば痛みを感じなかったのだ・・・いや寧ろ暖かいコレが愛の力  
というものなのか彼は不思議そうに自分の胸を見つめた分の中にあ  
る憎しみが二人によって解放されていくかのように・・・そしてあ  
たりは大爆発を起こして3人を爆炎と爆風が包んでいくのだった。

・



そして月日は流れていき一年後の夏・・・地球は緑と青さを取り戻して自然豊かな星へと戻っていたのだ。その陰にはプリキュアと仮面ライダーの活躍があった事は誰もが知っている事であった・・・いつもの平日にえりかはつぼみと一緒に学校にへと行くこうとえりかがつぼみを待っていたのだ

えりか「あはははは〜」

????「えへへ・・・えへへへ!!」

つぼみ「お待たせしました　　!!!!・・・えりか!!!!」

えりか「おっ!?おーつぼみ!!!!」

つぼみ「《おーつぼみ!!!!》じゃありません!!いくらふたばが可愛いっからって頬つぺたつつき過ぎです!!私だっつつつきたいのを我慢してるんです!!」

えりか「えへへ・・・つい」

つぼみ「ふふ・・・ふたば行ってきますね!!お母さん行ってきます!!!!」

えりか「バイバイふたばちゃん〜」

ふたば「おおー!!!!」

アレから月日は流れて無事につぼみにも妹が出来たのだ。名前はふたば。その可愛さはえりかが夢中になるほどでありつぼみをしり目によくふたばの頬つぺたをつつくのがえりかの一つの日課となったのだ。いつもどおりつぼみとえりかはみずきとふたばに見送られながら学校へと向かう・・・のだがそのまえに行く所があった。

勿論それはいつきの家だった

えりか「妹っでいいよねえ〜」

つぼみ「いいですよえ〜」

えりか「アタシ妹だから妹の良さって分からなかったけど・・・妹

っでいいよね〜」

つぼみ「ふふふふ」

えりか「でもさつぼみがお姉ちゃんだなんてなーんか変!!!!」

つぼみ「むっ!!!!」

えりか「おねえちやえくん1000円ちょうだい!!」

つぼみ「もうえりかあ〜?」

えりかはどうやらふたばの可愛さに夢中であるようだ。二人はいつもどおりふざけ合いながらもいつきの家についた

いつき「はああつ!!やああーっ!!はああーっ!!!!」

其処には朝から稽古に励むいつきの姿があった。あいては手術後に無事に回復の兆しに向っている兄のさつきである。

えりか「おーい!!いつき。学校行くよ」

いつき「やあ!!おはよう」

つぼみ「おはようございます!!」

えりか「お兄さんもおはようございます!!」

さつき「うん。おはよう!!」

いつき「今支度してくるから待っててね」

つぼみ&えりか「うお!?!」

いつきは元気よく二人にそう言つて挨拶をする。いつもどおり元気な姿だったのだが何やら門下生の一人に見覚えのある顔が……

いや瓜二つだ……。あれは……

つぼみ&えりか「クモ……。?ジャキー!?!」

えりか「いつき!いつき!!!!」

つぼみ「あの方は?」

いつき「ああ。紹介してなかったね。昨日からこの明同院流に入門したクマモトさんです」

えりか「クマ?」

つぼみ「クモ?」

どうやら別人……。という事らしい。二人は目が点になりながらもそう言うのだった……。しかし……。似ているというか瓜二つだ……

・いや彼以外考えられない思う二人であった……。そしていつきが支度を終えて3人は学校に向かうのだった。

えりか「超ビックリしたよ」

つぼみ「朝から凄いサプライズです!!!!」

いつき「昨日《たのもう!!》ってクモジャキーぱい人が来たときはボクも《うわっ!!》とか行っちゃったよ」

つぼみ&えりか「ふふふふっ」

つぼみ「やっぱり元に戻っていたんですね!!」

いつき「ずっと病院にいてここ何年かの記憶がないんだって」

えりか「じゃあ他の二人もサソリーナっぼい人やコブラージャぱい人に戻ってるかもね うししし」

いつき「そうだね!!」

つぼみ「きつとそうですよ!!」

えりか「じゃ〜スナツキー達も？」

つぼみ「そうです!!みんな、み〜んなです!!」

時間は流れていき学校につく・・・そしていつもどおり授業を受けて放課後・・・3人は町が見える丘に立ち寄っていた・・・町はいつもと同じで何も変化がない・・・するとえりかはドヤ顔になると胸を張る。二人はまた始まった〜とでも言う様な顔になる。

えりか「私達は凄い事をしてしまった!!!世界が輝いているのも私達のお陰!!!立った14歳の美少女が地球を守ってしまった!!!」

つぼみ「私もう聞き飽きて堪忍袋尾がきれそうです」

いつき「毎日、毎日よく飽きないよね」

つぼみ「えりかは皆で無限ブリキユアになったのが衝撃的すぎて調子が戻らないんですね」

いつき「《無限の力》とか《無限の愛》とかえりかにはまだ早すぎたんだね」

えりか「うお!?お子ちゃま扱いしないでよ!!!つぼみだっていつきだった皆だつてえ!!!」

えりか「自分だけ子供扱いするなと二人に講義するのだ何故ならならば・・・」

〜回想シーン〜

つぼみ&えりか&いつき&琢磨&タ「我々は凄い事をしてしまった

！！！！

大人&傑「（まあ、たやつとるとこの子らは……）」

実はゆりと大人と傑を除くメンバーで特につぼみ、えりか、いつきの3人はさっきのえりかの調子でえばっていた事があったのだ……その事を思い出すと二人は顔を赤くして慌てる。

えりか「ってこの間まで言ってたじゃん！！言ってたじゃん！！言ってたじゃんあゝゝゝん！！！！……無限の力だよ！無限の愛だよ！地球を救っちゃったんだよ！！！！」

えりかの勢いにつぼみといつきは完全に飲み込まれてしまい何を言ったらいいのかと困惑してしまっただった……

えりか「あゝゝゝアタシの人生これ以上に何があるってのよ！？悩んじゃうなあゝ」

ゆり「えりか……まだそんな事言っているの？いつまでも終わった事にこだわっているものじゃないわよ？」

えりか「すみません」  
えりかのそんな悩みをばつさりと斬るゆり……一緒にシプレ達もいた。

コフレ「そうですっ！！！！えりかは過去の栄光にこだわりすぎです！！《人生は風の中……振り向くな振り向くな！！》です！！！！

ポプリ「いちゆきゝ久しぶりでしゅ！！！！久しぶりのいちゆきも超ラブリーでしゅ！！！！」

シプレ「ありがとうポプリ！！！！」  
つぼみ「シプレ……こころの大樹はお元気ですか？」

シプレ「はいでう！！」皆の心の種のお陰ですくすくそだっているですう！！！！

コフレ「コフレ達が見守っているから大丈夫です！！！！」  
ポプリ「ポプリもお守りしてるでしゅ！！！！」

デューンによつて枯らされたこころの大樹は新しい命を残していたの……それは今シプレ達が管理して見守っているから安心だろう……砂漠の使徒は完全に危機は去ったのだから

大人「お、やつぱりいた お〜い!!!!!!」

琢磨「勢ぞろいだな!!!」

傑「お、シプレ達久しぶり!!!」

タ「元気にしてた?」

其処に大人達も登場した。今まで多くの痛みと希望を共有してきた仲間がそろった・・・8人は空を見上げた・・・夏の暑さとセミの鳴き声が響く青い空を・・・

ゆり「今まではこころの大樹が見守ってくれていたわ。でもこれからが私達が、私達の心がこころの大樹を育てて見守っていくのよ。だからいつまでも無限の力とか無限の愛とかに頼ってちゃだめ。自分の人生なんだから。」

つぼみ&えりか&いつき「はい!!!!!!」

タ「ゆり〜いい事言うじゃないの!!!」

ゆりの言葉にその場にいた全員が感動してしまった・・・確かにこころの大樹は自分達を見守ってくれていた長い長い年月を・・・だけど今度は人々の心がこころの大樹を育てていく番なんだ。自分の人生は自分で切り開く・・・それがこころの大樹の最後のメッセージなのかもしれない・・・

えりか「しかし・・・人生とは何ともはや奥がふかいっしゅ〜」

いつき自分の精一杯の力で夢に向かいなさいってことだよ。えりかはプロのファッションデザイナーになるんでしょ?」

えりか「おおー!!!」

つぼみ「私はえりかの夢、精一杯応援させていただきます!!!!!!」

コフレ「コフレも応援するですっ!!!!!!」

ポプリ「ポプリも!!!!!!」

いつき「ボクも!!!」

シプレ「シプレもですう!!!!!!」

えりか「わー!!!い!!!!!!」

ゆり「(全くこの娘達はホントに現金なんだから)」

つぼみ「ゆりさんは？」

ゆり「え？」

つぼみ「ゆりさんの夢は何ですか？」

ゆり「私の夢？私も自分の人生を考えなくちゃいけないわね」

つぼみ「人生……」

いつき「ボクは、そくだな明堂院流の武術を続けながらいろんな事にチャレンジしてみたいな……」

えりか「例えば？」

いつき「それは秘密……」

えりか「教えてくれたっていいじゃん……」

傑「俺は……そくだね、外交官になりたい……。まだ自分が知らない世界をこの目で見てみたい……」

タ「アタシはそくだなあ、子供達を笑顔にしてあげたい……子供を守るような事をしたのかなあ」

琢磨「俺は一度日本を旅してみた。傑とちよつと被るけど」

えりか「みんな夢持つてるんですね、つぼみは？」

つぼみ「私はもう一度宇宙に行きたいです……今度は自分の力で……」

いつき「それって宇宙飛行士だね？」

えりか「流石アタシの親友夢がデカイね……」

つぼみ「いいえ。私達は親友じゃありません……私達は大親友です……」

大人「（夢か……俺の夢……）」

つぼみ「大人さんの夢は何ですか？」

えりか「聞かせてくださいよ……」

大人「俺の夢か……俺は皆の笑顔を守るような大きな人になる事かな？」

つぼみ「大きな人……」

えりか「凄い……！名前のとおり夢も大きい……」

大人「ははは」

全員の笑い声が丘に響き渡った……それぞれの人生を歩く事を誓って……つぼみは思いだしていたあの時の彼の事デューン

つぼみ「（そして……出来るなら草も花もない宇宙に少しでも花を咲かせたい）」

彼は最期の最後で私達の思いが届いてこころを持つ事が出来たんだ彼は自分が見つけたこころを抱きながら消滅していった……消える寸前で彼は笑っていた……無邪気な子供のように……彼は憎しみを消し去り清い心を持つ事が出来たのだ……彼にとってそれほどの幸せはないだろう……

つぼみ「（せめて……そうすれば）」

つぼみは一人残った町の風景を眺めていた……そして天空にあるプリキュアパレスには4人のプリキュアの石像が飾られていたのだった……

つぼみ「（私達4人のプリキュアが砂漠の使徒を倒し地球を守った事を人々は時がたつにつれ忘れていくでしょう……でも私はえりか、いつき、ゆりさんとプリキュアになって戦った事、大人さん、琢磨さん、傑さん、夕さんという仮面ライダー達という仲間と一緒に走り続けたこの一年を決して忘れません。何故なら私を成長させた未来の道まで見つけさせてくれた掲げ得のない大切な宝物だからです！！）」

つぼみはその思いを胸に丘を後にした。この一年沢山の事があり自分を成長させるかけがえのない時間と大切な仲間を手に入れる事が出来た。辛く苦しい事もあったけど仲間がいたから乗り越えられた彼女は今度は自分の夢に向かって走り続ける事になるだろう。かけがえのない仲間たちと共に……

そして時間が流れていきつぼみの部屋に一人の少女がブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト、カブト、ガタック、ダークカブト、フェアリーの写った写真を見ていた……手にはつぼみのココロパヒュームを持っていた……彼女もプリキュアになる

の  
だ  
ら  
う  
か  
？  
．  
．  
．  
そ  
れ  
は  
別  
の  
物  
語  
で  
語  
ら  
れ  
る  
事  
だ  
ら  
う  
．  
．  
．  
．  
．  
．  
．



**最終話「最終章??無限の力と無限の愛を持つ戦士達」(後書き)**

とうとう最終回になってしまいました!!!。皆さんは本編の最終回は如何でしたか?ボクは感動の一言でした。

ハートキャッチプリキュアはやはり素晴らしい!!!

では次回からは新作を執筆したいと思いますがこの小説はまだまだ完結させません。何故ならば私がこのハートキャッチプリキュアにハマるきっかけとなったストーリーをまだ描いていないからです!。  
!。更新は今までよりも遅くなるかもしれませんがどうかよろしく  
お願いします^^

ではでは次回もお楽しみに





お知らせ!!

どうもお久しぶりです。『仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア〜ライダーシステムと心の大樹』の作者ソラです!!。ハトプリの本編が終わり現在はこの小説の続編の『ウルトラマンティガ&ハートキャッチプリキュア!〜光と闇の調決戦』を執筆させていただいております。

さて本題ですがこの小説は最終話のあとがきにも書きましたがまだ完結にはさせません。理由はどうしても書きたいハートキャッチプリキュアの劇場版映画の『花の都でファッションショー』ですか!?!?』  
をどうしても書きたいからです!!

しかしDVDは3月16日発売と言うことになりまだまだ先になつてしまいます(泣)

正直早く書きたいですが3月16日にならないとDVDが発売されない以上は仕方ありません。故にもうしばらくお待ちください!!

土下座

もしかしたらアイデアが出たら番外編としてオリヴィエ&サラマNDERのエピソードを書くかもしれませんはまだ未定です!!。どうか皆さん長い目で待っていてください!!。

そして続編の『ウルトラマンティガ&ハートキャッチプリキュア!〜光と闇の調決戦』もどうかよろしくお願いします!!!!^^

## ハトプリ劇場版第プロローグ「狼男の噂」(前書き)

この物語はプリキュアと仮面ライダー達がZECTの野望を打ち砕いたすぐあとに語られる物語である。つぼみはフランスである少女と出会い彼の心の悩みを知る事になる。世界を破壊する者とプリキュアとライダー達のの戦いがフランスで繰り広げらる。

## ハトプリ劇場版プロローグ「狼男の噂」

パリのエッフェル塔にて二つの影が町を見下ろしていた。夜景はか  
なりきれいで普通の人間なら心が洗われるほど美しいものだ。

???「おおく麗しの都パリよ!!!我々は帰って来たぞ!!!  
ふん!!!幸運な事に月が満ちるまで後わずか失われた力も此処に  
ある!!!ふん・ふはははははは!!!今度こそこの世界を破  
壊する!!!」

???「.....」

一人の影の正体は赤毛の長髪にステッキを持った紳士調の男。もう  
一人は銀髪でマフラーをした少年であった。男とは対照的に少年は  
無口で無愛想な態度で町を見下ろしている。

???「砂漠の王にキュアアンジェ.....世界は本当に憎らしい  
ものばかりだそうだろうか?ルーガル」

ルーガルと呼ばれた少年は素早く男に近づくと男の杖の先端にあ  
った赤いクリスタルの様なものをくすね取った。

???「何をしている?.....それを返しなさい」

ルーガル「嫌だ!!!力も戻ったしもう充分だろ?」世界を破壊  
するなんてやめてよ!!!お願いだ.....男爵!!!!」

男爵と呼ばれた男はルーガルに近づく。目を赤く光らせながら取  
られた力の源であるたいせつな物を渡せと無言で訴えかける様に。

男爵と呼ばれた男「それを返せルーガル!!!!」

男の背後から蝙蝠の姿をした大量のスナッキーが少年に向かって体  
当たりを仕掛ける。少年は塔から落ちてしまう。

ルーガル「どうして分からないんだ.....父さん」

ルーガルは落ちながらも哀しげにそう呟いて涙を流す。彼はその  
まま父と呼んだ男から逃げる事しかできなかつた。それが自分の寂  
しかった人生を変えるきっかけの出会いを起こす事になるとはまだ  
知らずに.....。

夜が明けるてもパリは美しく華やかであった。それはテレビや雑誌で見るよりも華やかで素敵な町であった。そこにとある3人組の日本人の少女が観光がはしゃいでいるのだった。彼女達は赤髪の女の子が花咲つぼみ、紺色の髪の毛をした女の子が来海えりか、そして最後の一人のショートカットの茶髪の女の子が明堂院いつきである。つぼみ「ちよつとずれてます・・・もう少し左に・・・そこです！いい感じですよもう一枚」

いつき「フランスぽいなあ」

つぼみ「はい！！本やテレビで見るとよりもずっと素敵ですよ！！フランス、後は・・・あっ！！」

つぼみはよそ見をしていたためヘルメットをかぶった男性とぶつかってしまう。

男性「パルドン」

つぼみ「ああすみません」

つぼみが謝る前に男性は何処かに行ってしまうのだった。

えりか「パパから聞いたんだけどさあ最近出るらしいよ？狼男！！！！」

えりかはつぼみに近づくと狼の真似をしてつぼみにじゃれ始めた。

つぼみは正直言うと少し迷惑そうだった。

いつき「狼男ってあの伝説の？」

えりか「そうそう。夜になると街中は走り回る怪しい影がいるらしんだけどそいつの鋭い爪と金色の目はとても人間のモノとは思えないらしいよ？」

つぼみ「それより・・・退いてくださいよえりかあ！！！！」

えりか「そんな事言っただけホントは怖いじゃないの？」

つぼみ「べ、別に怖くなんてないですよ！！私だっただけ・・・」

3人の近くではえりかの姉の来海もかとその親友である月影ゆりが3人の様子を見ていたのであった。

いつき「ああ狼男だ！！！！」

つぼみ「えええ！？何処ですか？」

いつき「なんてね」

えりか「いえーい！！」

つぼみはえりかにそう言われてしまうと必死に否定する。するといつきは面白がつて狼男が近くにいと叫ぶ。するとつぼみは強がり  
が裏目に出て顔を青くしながらいつきに聞いてしまいがいつきの方  
を見るといつきがカメラを自分達に向けて写真を撮っていた。つぼ  
みはからかわれた事が悔しかったのか頬を赤くして眼に涙を溜めた  
表情になると・・・

つぼみ「ひどいですう~~~~！！！！！！」

つぼみの声がエツフェル塔近くで響き渡る。その近くでは昨夜の男  
爵と呼ばれる紳士調の男がルーガルーが上の空の表情で景色を眺め  
ていたり近くでスナツキーがルーガルーを探し、ルーガルーはそれ  
から逃げていることなど彼女達は全く知らなかったたのである。

その後しばらくつぼみ、えりか、いつき、ゆりの4人はフランスの  
街を歩き観光しフランスを観光していた。

えりか「おお、あの人カツコイイ！！」

いつき「皆凄くおしゃれだなあ」

えりか「ファツションも町だし当然でしょ」

いつきとえりかはパリの街を歩く人々のファツションセンスの高さ  
にテンションが上がっているのだがつぼみは何故か不機嫌そうだ。

もしかしたら先程いつきに弄られた事をまだ気にしているのかもしれない  
と思つた二人だつたが・・・。

つぼみ「いいえ。パリと言えば花の都なんですよお！！」

つぼみはえりかに近づきながら掴みかかる。

えりか「ちょ、何！？何なの！？」

つぼみの様子がいつもとは違い少し・・・いやかなりおかしい。思  
わずえりかは一步後ずさりしてしまう。何やら怪しいオーラを放ち  
ながらつぼみはヨロヨロしている。

シプレ「おばあちゃんが言ってたですう」



いつき「花屋さんなら其処にあるよ?」

いつきは近くにあったフラワーショップショップを指さす。

つぼみ「そーじゃくて!!!花の都と言うからには街中が色とりどりの花であふれていてそれはそれは素敵な・・・」

するとつぼみは珍しく駄々をこねた子供の様な態度になると自分が考えていたイメージを言う。

シプレ「素敵ですう」

つぼみ「はい!!!」

えりか「全然そんな感じしないけど?」

つぼみ「シプレ」

えりか「まあ秋だししょうがないじゃん」

シプレもそれに便乗していくのだがえりかの言葉で一気に妄想が吹き飛ばされてしまう。

つぼみ「ああ・・・」

いつき「花屋さんなら・・・」

つぼみ「それはさっき聞きました!!!」

つぼみはいつきにツッコミを入れる。いつきは思わず苦笑いしてしまふのだった。

いつき「あは(汗)」

つぼみ「私探してきます!!!」

つぼみはむくれた顔になるともう我慢できないと一人で何処かに向かつて走って行ってしまふ。

えりか「ああ!!!ちよつと待ちなよ!おお素敵!!!」

いつき「ホントだねえ」

えりか「んん!!!」

いつき「ああ!!!」

二人は不意によそ見をしてしまふがハツとなりつぼみが走っていった方を見るのだがそこにつぼみの姿はなかった・・・

えりか「つぼみ・・・何処行った?」

二人はやってしまったと思いなながらも時すでに遅くつぼみの搜索を

する羽目になってしまったのだ。た。

ハトプリ劇場版第プロローグ「狼男の噂」(後書き)

先ずは軽くプロローグです。恐らく短編になるかもしれませんがどうなるかは今のところ未定です。

次回もお楽しみに

## ハチプリ劇場編第1話「出会い」（前書き）

前回までのあらすじ

麗しの都のパリにてとある者の野望が密かに始まろうとしていた。

そんな事も知らずにプリキュア達はパリを訪れていた。

その地で渦巻く凶悪な悪意を持つ者の存在があるとは知らずに・・・

## ハチプリ劇場編第1話「出会い」

つぼみが勝手に何処かに姿を消してしまったその頃ルーガルはコウモリ型のスナツキーから必死に逃げていた。何日も逃げていたのか身形はボロボロの傷だらけであった。自らが男爵と呼んだ男から奪い取った赤い石見つめながら必死に逃げていた。スナツキーは実力行使だと炎の玉を彼に向かって放つが彼は慣れた動きでそれを回避する。街の建物から建物を移動しながら必死に逃げるルーガルだった。だが炎の爆風によって飛ばされてしまいレンガ造りの壁に身体を思いつきり叩きつけられてしまった。

ルーガル「うう・・・ああ・・・」

ルーガルは立ち上がると後ろを振り返る。するとスナツキー達は観念したかとその場で止まる。

ルーガル「コレがお前達の探し物だろ？コレが無きゃ流石の男爵だって何もできないもんな」

ルーガルは石を見せつけながらスナツキー達にそう問う。するとスナツキーは『早く返せ！！』とでも言う様に吠えてくる。

スナツキー「キーっ！！！！」

ルーガル「そんなに欲しけりや返してやるよ！！！！」

そう言うところルーガルは持っていた石を川に投げ捨ててやる。すると慌ててスナツキー達はそれを拾いに行くのだが・・・

ルーガル「なんてね。」

そう彼が投げたのはリンゴであった。今のうちにとルーガルはまた走り出してその場から姿を消すのだった。

つぼみ「はあくお花ありませんね・・・」

シプレ「ですう」

つぼみ「もしかしたらパリは花の都じゃないのかもしれないかもしれません・・・」

「

シプレ「ですう〜ってつぼみ!!!何を弱気になってるですっ?おはあちゃんか嘘をつくはずないですう!!!」

つぼみ「そ。そうですよね頑張つて捜しましょう!!!」

シプレ「ですう!!!」

つぼみ「それにしても・・・一体此処は何処ですか?」

その頃つぼみはというと勢いよく飛び出たのは良かったのだが花の姿など何処にもなくテンションが駄々下がりで今自分がどこにいるかも分からないままパリの街をさまよっているのだった。どうしたらいいか分からずに時間だけが過ぎていく・・・というか自分はえりか達に合流できるのかすら怪しくなってきたのだった。つぼみは不意に空を見上げると建物の屋根の上から足音が聞こえた来た。

つぼみ「うん?」

その数秒後に銀髪で白いマフラーをした少年が屋根から飛び降りてきた。その正体はスナツキーに追われているルーガルである。

ルーガル「ちっ!!!」

つぼみ「えっ!?!」

このままではぶつかってしまうのだがつぼみは固まってしまい動けない。ルーガルは間髪身体を動かして落下地点を調整する。つぼみは腰が抜けてその場に座り込んでしまった。

シプレ「つぼみ!!!」

ルーガル「ゴメン!!!大丈夫?」

つぼみ「あの・・・道をお聞きしてもよろしいですか?」

ルーガル「・・・真っ直ぐ行ったら大通りだよ」

つぼみ「ありがとうございます!!!」

ルーガルはそれだけ言うともた歩き出すのだが・・・

ルーガル「うっ・・・」

つぼみ「大丈夫ですか!?!」

ルーガル「あ、ありがとう・・・」

数日間逃げた事による疲労で倒れそうになったそれをつぼみが彼の腕を取り彼を支える。

つぼみ「貴方、傷だらけじゃないですか！！何処かで治療しないと……」

ルーガル「別に平気だから……」

ルーガル「はつぼみを無視して歩き出そうとする。このままいつまでも此処にいたら男爵に捕まってしまう。そうなたら今までの苦労は水の泡だ……。そうなる前に早くここを動かなければならぬ……。だがつぼみは彼の事がほつてはおけないらしく……」

つぼみ「あ、ちょ、ちょっと待ってください！！そもそも屋根から飛び降りて平気なわけありません」

ルーガル「うるさいな……。アンタには関係ないだろ？……！！（アイツら……。気がついたか……。）じゃあね！！！」

早くしないといけないのに何で邪魔をするんだ？コイツはと思つていたルーガル。空を見るとどうやらスナツキー達が二先程川に投げ捨てた物が偽物（リノゴ）と気がつたようだ……。早くしないとマズイ。そう思つたルーガルは1〜2歩下がるとまわれ右をしてつぼみに背を向けて走り出そうとしたが……

つぼみ「待ってください！！！」

ルーガル「うわあっ！！？」

またしてもつぼみに掴まれて体勢を崩してルーガルは倒れてしまった。

つぼみ「ご、ゴメンなさい！！！」

ルーガル「っ……。いい加減にしてよ！！どうして僕に構うのさあ！？」

つぼみ「貴方が怪我をして私の前にいるからです！！放っておけるわけありません」

ルーガル「親切もほどほどにしないといつか痛い目見るよ？」

ルーガル「はつぼみの後ろを見てそう言うところには大量のコウモリスナツキーが群がっていた。完全にやってしまったと思つたルーガル。コレはかなり面倒な事になってしまった。

スナツキー軍団「キーツ！！キーツ！！！！キーツ！！！！」

つぼみ「！！・・・コレは」

つぼみは驚いた。日本にいる筈のスナツキー達がパリに現れたのだから当然だ。

ルーガル「ボクに会った事もコイツらの事も忘れた方がいいよ・・・じゃあねっ！！！！」

今度こそ逃げなければと走り出したルーガル・・・だったのだがつぼみに手を掴まれて一緒に逃げる事になってしまった

ルーガル「ってまたかよ！！！！・・・おい！！何してんだ！？」  
一体この女の子は何処まで自分の事が気にかかるんだと彼は思いながら思わずツツコミを言いながらもつぼみと共にパリの裏通りを走る。

シプレ「つぼみ！！」

つぼみ「シプレ！！」

シプレ「砂漠の使徒です！！」

つぼみ「はい！！でもどうしてパリに！？」

つぼみ達が逃げる中スナツキー達は火炎弾を放って彼女達を足止めしようとする。そして彼女達に直撃したのだが・・・

つぼみ「え？・・・ええええええええええええええええ！！！？？？」

気がつくと自分が空を飛んでいる・・・というか舞いあがっている事に気がついたつぼみは目点になり思わず叫んでしまう。勿論つぼみが飛んだわけではなくルーガルがつぼみを抱えて飛びあがり火炎弾を回避したのである。

ルーガル「あんまり暴れないでよね！！」

つぼみ「うぐう・・・うわああああああ！！！！！！！！」

ルーガルは空に上昇してきたスナツキー達を踏み台にして建物の屋根に着地する。つぼみは高所恐怖症であるため終始おっかなびっくりの状態であった。

つぼみ「無茶すぎです！！！！」

ルーガル「怒鳴らないでよ！！だから僕のことなんて放っておけばよかったのに・・・忠告はしたからね」



ルーガルは自分に文句を言ってくるつぼみにそう言って黙らせた。最初から忠告はしたはずだから君にも責任はある・・  
というか何でこの娘は此処までして自分の事を気にかけるんだらうか?・・不思議だ。だけど今は逃げるのが先だ。

ルーガルは頭の中でそう考えながらもつぼみを抱えて走る。

つぼみ「貴方・・一体?」

ルーガル「気にしないでいいと思う・・な!!!」

ルーガルは一言そう言うのと更にスピードを上げて屋根の上を走る。

その頃・・・

えりか「何処に行ったんだつぼみ・・折角、琢磨さん達に連絡してアタシ達は自転車まで借りてダブル体勢で探してるのにつぼみ探して半日仕事だよホントもう参ったね〜こつ言う時に・・・  
いつき「!?・・・え、えりか!!!つぼみが・・・」

えりか「ああ?」

えりか達はというといなくなったつぼみ探しに時間を費やしていた。ゆりにこの事を連絡すると不味いのでバイクで移動できる大人、琢磨にも協力してもらい探しているのだが全く手掛かりはゼロであったためむくれていたえりかだったがいつきがルーガルと共に屋根の上を走るつぼみを見つけると・・・

えりか「つぼみーっ!!!」

いつき「・・・」

なんと自転車利用によって車よりも早いスピードでつぼみを追いかけているのだ。口では憎まれ口を叩きながらも実はかなりつぼみが心配だった様子であり先程とのギャップの差にいつきは汗をかいていた。

つぼみ「スナツキーが・・・」

ルーガル「ん!?」

しばらくするとスナツキーが何処かに向かって飛んで行ってしまふ。

なんとか危機は去つたと二人はホツとした様子になる。その後これで解散かと思われていたのだが・・・

つぼみはどうしてもルーガルの事が気がかりでしょうがなく彼の行くところについてきていしまうのだった。それが続く事5分後・・・

ルーガル「ついて来ないでよ!!!」

つぼみ「・・・」

15分後・・・

ルーガル「鬱陶うっとうしいよ!!!」

つぼみ「すみません」

30分後・・・

ルーガル「いい加減にしてよ!!!アンタ達一体何なんだよ?」  
もう我慢できないとルーガルはつぼみ達にそう問いただしてしま  
う。

つぼみ「わ、私達は通りすがりの旅行者です」

ルーガル「じゃあボクもそうだ」

つぼみ「ちよつと待ってください!!!貴方、今凄く困ってるんじゃないですか?」

つぼみの言葉にルーガルは黙つてしまう。確かに今ボクは・・・  
???「困つているのは・・・此方の方だよお嬢さん!!!」

突然男の声が割り込んできた。その正体はルーガルが奪い取った  
石の持ち主であつたあの紳士姿の男だ。

つぼみ「!?!」

???「全く・・・追いかけてはもう充分だろ?いい加減にアレ  
を返しなさいルーガル」

ルーガル「・・・サラマンダー男爵」

ルーガルは振り返ると紳士調の男にさういう。「サラマンダー」  
・・・それが彼の名なのだろうか?

サラマンダー「分かっているとは思うがアレはお前が持つていても  
なんの意味もないただの石だぞ?それに・・・あまり時間もないん  
でね・・・戻つて来い」

ルーガル「ヤダって言ったら？」

ルーガル「はそう言っただけで挑発するが。その次の瞬間に円を描いたスナッキーが彼を取り囲む。しまったと思った時には既に手遅れであった。」

ルーガル「うわああああああああ！！！！！！」

サラマンダー「心の花よ・・出て来い！！！！」

そして次の瞬間ルーガルは金木犀きんもくせいの心の花に狼のようなモノを宿した心の花のクリスタルの姿に代わる。サラマンダークリスタルに付いている水晶玉をもぎ取る。

サラマンダー「出でよ！！デザトリアン」

近くにあったオベリスクと融合させて巨大なデザトリアンを出現させた。

つぼみ「そんな・・・ヒドイです！！！！お知り合いじゃないんですか！？」

サラマンダー「まあね。だが我々と君とは無関係・・・口出しは無用だ」

サラマンダーはつぼみに笑顔でそれだけ言う。まるでこれ以上かわるなというかのようじ。

つぼみ「もういいです！！！！」

こうなったら自分が戦うしかない。つぼみはサラマンダーにそれだけ言うところをコロボットを取りだす。

シプレ「プリキュアの種いくですっ！！！！」

つぼみ「プリキュア・オープンマイハート！！！！」

辺りにピンク色の光で包まれた瞬間につぼみは私服からワンピース調のピンク色の衣装に変化する。そのすぐ後に妖精のシプレから赤い色のプリキュアの種が召喚される。つぼみはそれを手に取り変身アイテムのコロボパヒュームにそれを装填する。コロボパヒュームから光が放たれ胸に香水を噴きかけると光が発生しフリルがついたミニスカワンピースのコスチュームが彼女の身に纏われる。その次

にロングブーツが出現。次に手に香水を噴きかけるとリストバンドがそして髪の色が濃い赤からピンク色になりボリユームが多いポニールになる。最後に頭に噴きかけると髪を纏めるリボンとイヤリングが出現しココロパヒュームタッチしてキャリーにしまい変身が完了する。

つぼみのもう一つの姿・・・それはこの世界を長きにわたって守ってきた伝説の戦士の一人である事である。その名は・・・

??? 「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!」

つぼみの戦士の名前・・・それは大地の力を持つ優しさの戦士キュアブロッサムである。

サラマンダー「プリキュア・・・」

サラマンダーは驚いていた・・・まさかこの時代にも自分を封印した憎い戦士がいたとは・・・。此処はお手並み拝見だと暫し静観する事にしたのだった。

ハチプリ劇場編第1話「出会い」（後書き）

今回はコレで一区切りです。

大人達の登場は次回になると思います。

ではでは次回もお楽しみに

## ハトプリ劇場版第2話「心の叫びと狼の影」(前書き)

前回までのあらすじ

ルーガルはサラマンダーから必死に逃げていると一人の少女と出会った。それはパリの街が花の街だと信じていてそれを証明しようと花を探しに行ったつぼみであった。仕方なくルーガルはつぼみと共にパリの街をサラマンダーの追手から逃げる事になった。

2人は逃亡を続けなんとか追手は回避できたが今度はサラマンダーが直々に登場しルーガルをデザトリアンにしてしまう。つぼみはルーガルを助けるため大地の戦士キュアブロッサムへと変身する。

## ハトプリ劇場版第2話「心の叫びと狼の影」

シプレ「いっくですう〜!!!」

シプレはつぼみが変身した戦士キュアブロッサムに装備されるマントへと姿が変わるとブロッサムにそれが装備される。そして彼女は飛びあがりデザトリアンの前に立つ。

ブロッサム「やめなさあ〜い!!! 暴れちゃだめです!!!」

デザトリアン「いやだあ〜世界を破壊するなんていやだあああ!!!」

デザトリアンは彼女にはお構いなしに自分の心中を叫びながら暴れ回る。デザトリアンとは人の中にある心の花が砂漠の使徒の力で取りだされて心の花と現実世界にある形などは問わなはず他の物体と融合して生まれる怪物である。したがってベースとなる心にある本音を曝け出しながら暴れるのが特徴なのである。

デザトリアン「このままじゃいけない……でもボクはどうしたらいいんだああ!？」

ルーガルの本音はそう言う事だった。世界を破壊しようとするサラマンダーを止めたかったのだ。しかしなぜ彼はサラマンダーと知り合ったのか？

サラマンダー「何を今更」

サラマンダーは呆れた口調でルーガルが閉じ込められた水晶玉を見てそう言う。サラマンダーの口調から察するにルーガルはその事を初めから知っていたと言う事なのか？だがそう言う事になると何故サラマンダーの言うとおり何故今頃になって世界を破壊する事を拒み始めたのか？

デザトリアン「どうせ男爵は分かってくれない!!!」

ブロッサム「!?!?! きゃあああああ!!!」

苦悩の叫びを上げながらもデザトリアンはブロッサムを掴むと物凄い形相でにらみつける。

デザトリアン「分からない・・・でもボクは・・・もう逃げたくないんだああ！！！！！！」

一度哀しげな顔を見るとデザトリアンはブロッサムを放り投げようとする。がその前にデザトリアンの腕が爆発する。何事だと思ったデザトリアンは手を広げてしまいブロッサムを解放してしまうのだった。

ブロッサム「深い事情は存じませんが・・・貴方もチェンジしたいんですね・・・そう言う事ならこのキュアブロッサム全力でお手伝いします！！！！！！」

ブロッサムはデザトリアンとなり曝け出した本音を聞いて俄然ルーガルーを助けたいと思う気持ちが沸き起こってきた。彼女はそのまま突進して一気にデザトリアンと距離を縮めるがデザトリアンはそうはさせるかと彼女に向かってオベリスクの頑丈で太い腕で地面に叩きつけようとする。地面に土煙が上がる中ブロッサムは無傷でありデザトリアンの腕の上を走りデザトリアンを翻弄すると上空に舞い上がる。

ブロッサム「行きます！！！！」

マントとなったシプレと分離し太陽を背にしてデザトリアンとなったルーガルーを解放するために自分が持つ力を最大限に解放する準備を始める。胸のプリキュアの証であるクリスタルがピンク色の光を放つと彼女の真上に対デザトリアン専用アイテムの「フラワータクト」と呼ばれるが召喚される。

ブロッサム「集まれ花のパワー、ブロッサムタクト！！」

ブロッサムはタクトにピンク色の光を集めていきタクトにエネルギーを溜めさせる。因みに「フラワータクト」とは総称でありブロッサム専用のタクトは「ブロッサムタクト」と呼ばれるのである。

ブロッサム「はああああ！！！！」

ブロッサムはタクトにあるクリスタルドームを回して集めたパワーをタクトの先端に集める。これで準備は整った。

ブロッサム「花よ輝け！！！！プリキュア・ピンクフォルテウェイブ



「！！！！」  
ブロッサムタクトの先端からピンク色の花の形をしたエネルギー弾がデザトリアンに向って放たれていく。デザトリアンを浄化する唯一の方法であるのだ。

ブロッサム「はああああああああああああああああ！！！！」

デザトリアンにフェルテウェイブが直撃すると後ろにピンク色の花弁が現れる。このまま花の聖なる絵エネルギーを送り込んでしまえば浄化は完了……。だったのだが。

黒い狼の影「ガルルルルルルルルウウウウウウ！！！！！！！！！！」

ブロッサム「はっ！？」

黒い影が花弁にまとわりつくくとピンクフォルテウェイブの力を消滅させてしまった。

ブロッサム「そんなあ！？」

シプレ「あの子の心の花にオオカミがいるです！！！！」

ブロッサム「狼？」

今度はデザトリアンが反撃だとブロッサムを掴むとそのまま力強く投げ飛ばしてしまう。デザトリアンはそれを御池けるかのように猛スピードで移動を始める。

えりか「完全に見失ったわ」

その頃えりかといつきはつぼみを一度は見つけたのだがその後は何処に行ったか分からなくなり疲れた身体を休めていた。

「？？？」「おい、えりか！！、いつき！！」

えりか「ん？・・・ああ、大人さんと琢磨さん」

えりかがダラダラしているとそこに赤いバイクと青いバイクに乗った少年が声を掛けてきた。赤いバイクに乗っているのは上原大人。

青いバイクに乗っているのは漆山琢磨。彼らもとえりかのファッションショーに参加する事になり一緒にパリに来ていたのだ。

琢磨「ああ〜じゃないだろう・・・つぼみはいたのかよ？」

琢磨はえりかの態度に呆れた口調でそう言うとバイクから降りてバイクを二人の自転車の隣に止める。

いつき「それが一度は見つけたんだけど見失ってしまって」

大人「んで・・・俺達がバイクでせつせと探してる中サボっていると？」

大人もバイクから降りて二人に近づきふぎけた口調でそう言う。

えりか「そんな事ないですよ!!!!!!・・・こっちは自転車なんですよ？使う体力が違うっての!!!!!!」

えりかは大人の冗談にそう言い返すとむくれた顔になり拗ねてしまふ。大人は堪らず謝るがえりかは「ぶーぶー」と文句を言って大人と琢磨に絡む。

大人「冗談だよ。そんなにムキになるなって」

琢磨「はあ〜しかし・・・どうするよ？つぼみのヤツ何処に行ったんだか・・・」

いつき「そうですね・・・!?!?・・・あああ!!!!!!」

4人はため息をもらしながら今後つぼみをどうやって捜すか考えようとしたその時に空にピンク色に光る光が飛んでいるのをいつきが発見する。

えりか「ああああ!!!!!!」

大人「何?・・・どうしたん・・・な、なんじゃああ!?何でつぼみ・・・じゃないブロッサムが空飛んでるの!？」

えりかもそれを見て反応する。大人は二人の反応を面白がりながら二人が見ている方を見るとそこにはキュアブロッサムとなつたつぼみが空を飛んでいる・・・というか飛ばされているではないか・・・大人はそれを見た瞬間に絶句して3秒ほど固まると思わずツツコミを入れる

琢磨「んなこと知るかあ!!!!!!・・・ていうか何で変身しとんじやアイツはあ!!!!!!」

琢磨はそんな大人にツツコミを入れると何でつぼみがブロッサムに

変身しているのかを考えた。といつても理由は一つしか思い浮かばないがまさかパリにまで来てそんな事とは思ってしまふ。

コフレ「あああ!!!あれ!!!!」

大人「・・・何だ・・・まさかデザトリアンが出たとか言うんじゃ・・・デザトリアンが道路を走つとるう!!!???」

琢磨「な、何で・・・折角パリでのんびりできると思ったのに・・・」

琢磨の直感は当たっていた。目から炎の様なオーラを放ちながら道路を巨体に似合わない物凄いスピードでブロッサムを追いかけているデザトリアンがいたのだ。4人はというかえりか、大人、タクマの3人は相手口がふさがらなかった。

いつき「何でパリに？」

えりか「うう・・・い、いつき!!!!」

大人「・・・と、とにかく今は戦るしかないか・・・琢磨、行くぞ!!!!」

琢磨「・・・しかねえか・・・おう!!!!」

いつきも信じられないと言う表情でそう言う。だが今は迷っている時間はない。4人はそう判断しデザトリアンを撃退するべく自分達も変身の準備を始める

コフレ・ポプリ、プリキュアの種いくですう!!!!!!」

えりかといつこの二人はココロパヒュームと呼ばれるアイテムを取り出すと青と黄色の光に包まれていく。光に包まれると二人は私服からノースリーブのワンピースの様な服に代わりいつきは髪が伸びてロングヘアになる。二人の胸から青と黄色の光が放たれると妖精にその光が移り妖精達から青と黄色の種が召喚される。

えりか・いつき「プリキュア・オープンマイハート!!!!!!」

二人は身体に香水を噴きかけると身体の上から順番にコスチュームが変化していく。そして最後に髪の色がえりかは明るいブルー、い

つきは髪を金色のツインテールになり変身が完了する。

「????」海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!!」

「????」陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!!」

二人はそれぞれのメインカラーの光を放つとポーズをとり名乗り上げる。

大人「さあ来い、カブトゼクター!!!!」

琢磨「行くぜえ、ガタツクゼクター!!!!」

大人、琢磨の二人はカバンから銀色をメインとしたメカのようなベルトを取り出すとそれを腰に付ける。そして腕を空にかざすと空が割れて時空の亀裂が走る。そしてそこから赤いカブトムシと青いクワガタムシが二人の前に現れカブトムシは大人の手にくわガタムシは琢磨の手に止まる。よく見ればそれは実在のカブトムシとクワガタではなくそれをモチーフにしたメカであった。

大人・琢磨「変身!!!!」

電子音「HENSIN」

二人は同時に手に取ったメカをベルトに装填していくとベルトを中心に重厚な鎧と特殊素材のスーツに身を包んでいく。外見はまるでロボットのような仮面戦士である。

大人・琢磨「キャストオフ」

電子音「CAST OFF」

その後二人はベルトにセットしたメカの綱や顎を倒して変形させると鎧は四方八方に弾け飛んでいく。

電子音「CHANGE BEETLE」

電子音「CHANGE STAG BEETLE」

大人「光を支配せし太陽の神、仮面ライダーカブト!!!!」

琢磨「戦いを支配せし戦いの神、仮面ライダーガタツク!!!!」

二人の力・・・それはマスクドライダーシステムと呼ばれる人口兵器でありその力はプリキュアと同等かそれ以上の力を持つのだ。

ブロッサム「いやあああ~~~~」

シプレ「うわあああ~~~~」

ブロッサムは勢いよく宙を舞っているためデザトリアンの攻撃を避ける事は出来ない。デザトリアンは腕をロケットのごとく発射させてブロッサムにトドメを刺そうとするがその前にサンシャインが割り込んで敵の攻撃を得意の守りの力でガードをする。

ブロッサム「サンシャイン!!!」

サンシャイン「探したよ」

マリリン「まさかデザトリアンを連れてくるとわねえ!!!マリリンパクト」

カブト「まあ見つかったからよしとしますか・・・クナイガン!!!」

すかさずマリリンが飛びあがるマリリンインパクトをデザトリアンの腹にぶち込んでやりその後カブトの専用武器のカブトクナイガンのガンモードの射撃がデザトリアンに叩き込まれる。

ブロッサム「マリリン!!!」

マリリン「ちよつとどうなってるのよコレ!!!」

ブロッサム「す、すみません!!!」

ガタック「とにかくだ・・・このままだとマズイ。」

マリリン「そうね。一気に行くよ!!!」

ブロッサム・サンシャイン「うん!!!」

カブト・ガタック「了解!!!」

マリリンを中心に全員はこのデザトリアンを一気に叩き潰すべくそれぞれの必殺技の準備に入る

サンシャイン「はああ!!!花よ舞い踊れ、プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!!」

まずはサンシャインが専用武器シャイニータンバリンを手に取るとそれを鳴らしてエネルギーを充填させる。そしてそのまま溜めたエネルギーを一気に解放して巨大な太陽の様に輝く光のゲートを造り

出す。

ブロッサム・マリِنْ「はぁあ!! 集まれ2つの花の力よ、プリキュア・フローラルパワーフォルテツシモ!!!!!!」

次にブロッサムとマリِنْはフラワータクトのクリスタルドームを回して花のエネルギーをタクトの先端のクリスタルに集める。そしてフォルテツシモ記号の様なマークを描きブロッサムはピンク、マリِنْはブルーのエネルギーを身体に纏うを勢いよく飛びあがった。そしてサンシャインが作り上げた光のゲートに突進していくとブロッサムとマリِنْの身体は金色に輝きを放つ。

サンシャイン「プリキュア・シャイニング!!!!!!」

ブロッサム・マリِنْ「フォルテツシモ!!!!!!」

ブロッサム、マリِنْ、サンシャインの技が合体した必殺技のシャイニングフォルテツシモがデザトリアンに向っていく。

電子音『ONE、TWO THREE』

カブト・ガタツク『ライダーキック!!!!!!』

電子音『ライダーキック!!!!!!』

カブト「はぁぁぁぁ!!!!!!」

ガタツク「うおりぁぁぁ!!!!!!」

そして最後にカブトとガタツクはそれぞれのライダーコアのゼクタ―にあるフルスロットルボタンを押しエネルギーをそれぞれの虫の象徴であるツノに溜めるとそれを右足に移して脚に強烈なエネルギーを溜めこみ飛びあがるとデザトリアンに必殺技のライダーキックを放つ。そしてその直後に金色に輝くブロッサムとマリِنْがデザトリアンの身体にハート型の大穴をあける。

ブロッサム・マリِنْ「ハートキャッチ!!!!!!」

ハート型の大穴があいた直後にデザトリアンは爆発して周囲は爆風に包まれる。

ブロッサム・マリِنْ・サンシャイン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」

大爆発が起こった後デザトリアンを今度こそ浄化させるべくフラワ

「タクト、シャイニータンバリンからデザトリアンに向けて浄化のエネルギーを送り込む。3重の浄化のパワーには流石の狼の影も出だしは出来ずにデザトリアンはゆっくりと浄化されていく。」  
デザトリアン「ぼわわわあゝん」  
心の花は解放されてブロッサム達の元へと舞い降りる。

マリン「何よそれ？」

サンシャイン「狼？」

カプト「に見えるな・・・しかしこんな今まで見たことないな」  
マリンは心の花にある影にモノ不思議そうにそう言う。というのも今までこんな物を見たことないため当然だ。これがブロッサムでは単体で浄化できなかった原因である狼の影だ。

マリン「てか誰の花？」

ガタック「右に同じ。一体どんな奴がこんな花を？」

ブロッサム「ええ」と

ブロッサムが困惑しながらマリンとガタックの問いにどう答えようかと考えていると突然辺りが日食が起きた様に暗くなると同時に空気が一変してまるで時間が止まったかのように周りの物が動かなくなつた。

サラマンダー「この時代にもプリキュアが・・・そしてプリキュア以外にも邪魔になる物があるとは・・・さて、お取り込み中ですまないんだがそれを返してもらえるかな？プリキュア諸君」

その原因の張本人はサラマンダーであつた。サラマンダーは笑顔でブロッサム達にルーガルの心の花を返すように要求するが・・・  
ブロッサム「何言ってるんです！！自分でこんな事をしておいて・・・  
貴方、一体誰なんですか！？」

ブロッサムは当然そんな事をするわけがなかった。ルーガルをデザトリアンに変えた張本人にみすみす渡すわけがないのは当たり前である。

サラマンダー「私はサラマンダー。砂漠の使徒と言えば分かるかな

？この子は連れだ。宜しく……したくないね……プリキュア！  
！！」

サラマンダーの手はルーガルの身体を封印した水晶があった。アレがないとルーガルを元に戻す事は出来ない。なんとかしてアレを取り戻さなければ……。だが奴にはそんな隙は全くない。どうすればいいのかと考えていたその時……。

シプレ・コフレ・ポプリ『全部パンチですう！！！！！！』

サラマンダー「！？」

シプレ・コフレ・ポプリ『はいですう！！！！！！』

ブロッサム「皆！！！！」

遠くから妖精達の捨て身の突進攻撃で水晶を強奪するとそれをブロッサム達の元に落とす。ブロッサム達はすぐに水晶と心の花を合体させるとルーガルを元に戻す。かれは気を失っているようで身形はかなりボロボロであった。

サラマンダー「どうして君たちがルーガルの尻を庇う？お前達……そいつの正体を知っているのか？ルーガルは……」

ブロッサム「悩める男の子です！！！！」

ブロッサムはサラマンダーの言葉を止めるとそう言う。眼はかなり怒っているようでありそれは他の4人も同じであった。

ブロッサム「この子の心の叫びあれば貴方の事ですよね？」

サラマンダー「ふうん？」

ブロッサム「この子が少し変わっているのは分かります……でも困っているなら力になりたい……それだけです！！！！」

サラマンダー「……」

ブロッサムの言葉の後にマリンとサンシャインはサラマンダーを睨み無言で彼女と同意見だと言うかのようだった。サラマンダーは無言になり立ち上がるとため息をつく。

サラマンダー「ルーガル！！！！満月までには戻って来い。」

ルーガルはサラマンダーの言葉で目が覚めたがすぐに目を閉じてしまった。身体が衝かれて言う事を聞かないのだ。かれはその後数



時間ほど過去の夢を見る事になった。

ハトプリ劇場版第2話「心の叫びと狼の影」(後書き)

更新遅れてすみません。大学でゼミが始まり忙しくなり始めてきました。今後もペースは不敵になる可能性があります(大汗)

では次回もお楽しみに

### ハトプリ劇場版第3話「オリヴィエ」(前書き)

前回までのあらすじ

ブロッサムはマリン達合流して全員の力を合わせて強敵のデザトリアンを浄化に成功する。

ルーガルーをデザトリアンにした張本人である男の名はサラマンダーといいその正体は砂漠の使徒であった。サラマンダーはルーガルーに満月までには戻って来いと告げて姿を消すのだった。

### ハトプリ劇場版第3話「オリヴィエ」

此処はパリのモン・サン＝ミシエル。ボクはいつもきまった時間に礼拝堂で御祈りをしに行くんだ。そうすれば大天使様は願いを叶えてくれるってシスターさんが言っていた。だからボクは毎日この時間にはお祈りをしに行くんだ。いつかボクの願いがかなうと信じて???1「大天使ミカエル様いい子でいるのでボクのお願いを聞いてください。大天使様お願いします」

???2「お前の願い叶えてやるつもりも私も私の事を見つけられたらね……」

いつもと同じようにお祈りをしていたら声が聞こえた来たんだ……ボクは後ろを見てみると外への扉が開いていたんだ。それからボクは声が聞こえてくる場所に向かって行ったんだ。暗い暗い地下にね……しばらくして地下の一番下の部分についたんだ。そこには変な模様がある石板があったんだ。ボクは徐にそれを触ってみたんだけど……

???1「うわっ!?!……うう……」

触った瞬間にそれはあつという間に砕け散ったんだ。そして変な部屋に繋がった。その部屋は夜のお星様が広がってとつても怖かった。

???2「こつちだ……おいで」

ボクは声のする方に入って行った。最初はものすごく怖かったけど入ってみたんだ。するとそこには……

???2「やれやれ随分と小さいのが来たな。ようやっと俺の声が聞こえる人間がいたと思ったら……とはいえ400年ぶりの客人だ歓迎しよう」

そこにへおじさんがいたんだ。格好は変だけど怖くないって思ったんだ。

???1「おじさんが大天使様?」

????2「ふっ・・・違うなあゝ残念だが」

????1「じゃあ誰？」

????2「大天使様ではないが俺の方が強くてカツコイイ・・・ホントはな先ずは礼を言おう。俺の名はサラマンダー扉を開けてくれて助かったよ。お前いい子だな」

????1「うん!!!」

おじさんはボクの頭をなでていい子だと言ってくれた。パパとママがいないボクに取ってこれ程嬉しい事はなかったんだ。

????1「ねえお願い聞いてくれるんでしょ？」

サラマンダー「ああゝ・・・取り合えず言うだけ言ってみる」

????1「あのねボクパパとマンが欲しい」

サラマンダー「何だ？そんなの俺だって持ってねえゝよ」

????1「ええゝ」

サラマンダー「何なら一緒に探しに行くか？」

????1「うん!!!」

ボクはおじさんの手を取ってへんな部屋から一緒に出た。それから・・・ボクはいろんな場所に行った・・・色々な冒険をした・・・この時は知らなかったんだ・・・彼がボクの父親になってくれるってことに・・・

ルーガル「うっ・・・」

ルーガルは遠いあの日の記憶を夢で見ていたのだ。目が覚めるとそこは見覚えのない部屋だった。一言でいえば此処は何処かのアパートだ。でも何でこんな所でボクは・・・

えりか「あ、起きた。つぼみゝ少年起きたぞ　!!!」

足音とが近付いてきた方向を見るとそこにはつぼみが荒い息使いでルーガルを見る姿があった。ルーガルはすぐに状況が理解できた。どうやら自分は彼女に拾われて此処に無理やり連れてこられたらしい。

ルーガル「またアンタか」

ルーガル―はいい加減に慣れたのかつぼみをみながら皮肉を言つとつぼみは笑顔を見せた。どうやら今日の自分はお節介者と縁があるようだ。

えりか「見かけによらず口が悪いね」

いつき「えりか」

ルーガル―「此処は？」

つぼみ「私達がお世話になつてているアパートですから安心してください。今はゆっくり休んで・・・」

つぼみのセリフが言い終わる前にルーガル―はベットから起き上がる。

えりか「ちよつとちよつと！！！」

大人「お、おいおい・・・」

いつき「かなり疲れがたまつてる。無理しない方がいい」

つぼみとえりかは慌てて彼を止めようといつきは忠告するかのようルーガル―に声を掛けると彼は机に置いてあるあの石を見ながら声を出した。

ルーガル―「手当てしてくれた事には感謝するよ。でもボクとアンタ達は他人同士だ。これ以上迷惑はかけられない」

つまりルーガル―はつぼみ達に迷惑をかけたくないのだ。知り合いならともかく名前も知らない誰かの世話になるのは彼にとってプライドや信条の様なものが許さないのだろう。

ルーガル―「・・・ん？」

自分の肩を後ろから叩いてきたので思わず後ろを向くと頬を指で突かれてしまう。

ルーガル―「なっ!？」

えりか「アタシ来海えりか。ファッションに興味のある14歳の女の子。宜しく」

ルーガル―はえりかの行動に固まってしまつがえりかの笑みを見せられると何だか知らないが腹が立ってきた。

いつき「ボクは明堂院いつき。趣味って言うか武術をやつてるんだ

けど分かる？こう言うの！！！」

続いていつきが自己紹介をし武術の構えを見せる。見かけによらずかなり勇ましい。

大人「俺は上原大人。こう見えて料理が得意だ」

琢磨「漆山琢磨。趣味はバイクだ。分かるかな？ブルルンって走るやつ」

続いて大人と琢磨が自己紹介をする。

つぼみ「私は花咲つぼみです。まだ自己紹介してませんでしたね。貴方は？」

ルーガル「ルーガル」

こうなつてしまつたら自分も名乗るしかないとルーガルは小さい声でそう言った。

???「変わった名前ね」

えりか「ルーガル？ルーガルって・・・ルーって名前？ガルが名字」

つぼみが自己紹介した直後にもう2人少女が入ってきた。一体何人いるんだよ？とルーガルはツツコミたくなつたのだがその前にメガネをかけた少女が彼の元に寄つて来た。

???2「疲れていれば大人だつて休むし困つた時は人を頼るわ貴方にも少し休息よ」

ルーガル「・・・」

自分の反撃の隙を与えずに正論を言われてしまうとルーガルは何も言い返せない。このままでは本当に此処に自分は定住しなければならなくなるかもしれない・・・。

えりか「そーだそーだ！！言つてやつてよゆりさん」

???2「月影ゆりよ」

???1「えりかの姉のももか。宜しく！！」

ゆりとももかが自己紹介すると下から大声で男女の声が響いてきた。???3「おゝい皆頼まれてたものはこれでいいのか・・・って何？この状況は？」

???4「もしかして取り込み中？」

つぼみ「お帰りなさい傑さん、夕さん」

傑「ああ、ただいま。・・・この子は？」

夕「フランス人？」

全員「・・・」

全員は二人のボケに苦笑いする。そしてつぼみが状況を説明した。

傑「成程ね。あ、申し遅れたね俺は影山傑だ。」

夕「私は里中夕です。宜しく!!!」

つぼみ「はい。コレで全員お互いに顔と名前を知ってます私達全員

お知り合いですよね？」

えりか「異議なし!!!」

いつき「異議なし」

ルーガル「無理だよ・・・」

ルーガルは静かにそう言った。今の自分はこの事をしていてる場合ではないし早くサラマンダーを何とかしないと取り返しのつかない事になるしそれ以外にも自分は彼女達と一緒ににはなれない理由がある。それは他人には決して知られたくない自分の秘密だった。だから夜になる前に此処から出ないといけないと無理やりにもルーガルは暗い自分を見せて此処から出る口実を探ろうするのだが・・・つぼみ達は彼の様子を見てもしかしたらまだ照れているのではないかと思いつきながらも合図を送るとももかが声を上げる

「

ルーガルはその言葉に何か嫌な予感がした・・・どうやら彼女達は自分を此処にどうしても止めたいらしい。その後ルーガルの反論が出る前にアパートの一階に連れてこられると。

さくら「トレビアアーン!!!求めていた男の子のイメージにピッタリ」

えりかの母親の来海さくらは感激したようにそう言う。どうやらルーガルは彼女のイメージにピッタリである様でかなり気に入った



様子であつた。

えりか「ホント！？じゃしばらくその子を家においてもいい？」

ルーガルーの予感も当たつた。というか普通はこんな事あり得ないと心の中で思う。

さくら「どういふ事？」

えりか「いやなんて言うか親公認の家出中と言うか。別に怪しい者じゃないし」

さくら「……」

流之助「それはつまり自分探しの旅真つ最中という事かな？」

ルーガルー「……（何でこうなるんだよ……ていつかこの人たち警戒心と言うものがないのかよ？）」

結局ルーガルーはこのアパートに泊る事になつてしまった。

ルーガルー「アンタの連れつて警戒心とかないの？どうして赤の他人を気安く受け入れるだ？」

つぼみ「そうですね。《袖すり合うのも他生の縁》って知ってますか？」

ルーガルー「知らない」

つぼみ「日本のことわざ何ですけど道で袖がちよつと触れあつ様な些細な出会いも生まれる前からの運命という意味です」

ルーガルー「大袈裟だね」

つぼみ「はい。でも私は好きですよ。何も知らない人同士が偶然出会つてお互いに影響しあいながら変わつていけるのだとしたらどんな出会いも意味のある大切なものだと思います」

ルーガルー「ボクと……アンタも？」

つぼみ「勿論！！私とルー……ルーガ……ルーくん？」

ルーガルー「隙に呼んでいいよルーガルーつて狼男の事なんだ。男爵の付けたあだ名みたいなものだから」

ルーガルーはつぼみにそう言う。ルーガルーというのは自分の本当の名前ではない。もう長い間自分の名前を名乗つた事ないしそれを

知っている人も今は一人しかいない。

つぼみはふと庭にある金木犀に目がいった。そして無意識に出てきた言葉が・・・

つぼみ「オリヴィエ」

ルーガル「ん？」

つぼみ「オリヴィエではどうでしょう？ 貴方のあだ名です」

つぼみは彼の新しいあだ名を思いついた。由来は金木犀のフランス語だ。彼の心の花も金木犀だったしこれ程ピッタリなものはないだろうと思っただのだ。

ルーガル「金木犀？」

つぼみ「はい。どうですか？ 貴方の心の花も金木犀だったので」

ルーガル「単純」

ルーガル「は思わずそう言った。

つぼみ「・・・そうですね（汗）もうちょっと凝ったものを」

するとつぼみは慌てて何かほかにいいものがないかと考えるのだがルーガルは黙って立ち上がると

ルーガル「それで良いよ。隙に呼べって言ったじゃん」

狼男と呼ばれるにはそれなりの訳があるのだがそれもいたってシンプルな理由だ。でも新しい自分になる意味でも新しいあだ名で飛ばれるのはいいことかもしれないと彼は思ったのだった。

つぼみ「オリヴィエ！！私の事はアンタじゃなくてつぼみって呼んでくださいね」

ルーガル「オリヴィエ」・・・考えとく」

つぼみ「はい！！！」

オリヴィエはそう言った。綺麗な夕日もダンドント夜明けに近づいてくる。今夜は幸い雲が多いから満月は見えないだろう。でももしも満月の夜になったら・・・オリヴィエは秘密を抱えたままつぼみ達と共に一夜を過ごすのだった。

ハトプリ劇場版第3話「オリヴィエ」(後書き)

更新が遅れたぜ!!!すみませんですPSS2が調子悪くて(汗)

では次回もお楽しみに

ハトプリ劇場版第4話「暴走」(前書き)

前回までのあらすじ

オリヴィエとサラマンダーの出会い。それは幼い事一人ぼっちだった彼にとっては実の父親と同じ様な散在であったのかもしれない。オリヴィエは傷ついた身体を癒す為にしばらくつばみ達と共に暮らすこととなるのだった。

## ハトプリ劇場版第4話「暴走」

翌日天気は快晴で秋風が吹く清々しい気候となった。その日のつぼみ達はアパートの中庭に集まっていた。集まった理由はもうすぐ開催されるつぼみ達主演のファッションショーの練習をする為である。

ももか「大体こんな感じかな」

いつき「うわえ〜」

ももか「いやあ〜どうもどうも」

先ずは現役モデルにして高校生であるももかがお手本を披露する。やはり人気モデルは手慣れた様子であり周囲を圧倒するように可憐な動きを見せた。それを見ていたいつきは拍手を送る。

つぼみ「どうですオリヴィエ分かりましたか？ももかさん素敵でしょう。現役高校生スーパーモデルで皆の憧れなんですよ？」

オリヴィエ「・・・あのさあ〜狭いよ」

えりか「てか2人すぐ近くくない？」

つぼみ「そんな事ありませんよねオリヴィエ？」

オリヴィエ「・・・ちよ、押さないで・・・ああ〜っ！！！！」

ちよつとあつち行けよ！！！！」

つぼみ「ええ！？《あつち行け》なんて傷つきます。言葉使いから一緒に勉強しましょう！！！！」

ベンチに座っているつぼみは隣にいるオリヴィエにそう言い聞かせる。オリヴィエは鬱陶しそうに離れようとするがつぼみは更に近づいてくる。それに堪らずオリヴィエは大声でつぼみに文句を言うがつぼみも怯むことなく言い返してきた。

ももか「つぼみちゃんすつかり教育ママね」

いつき「可愛くて仕方ないって感じですね」

2人のやり取りの様子にいつきとももかは思わず笑いながら見つめる。オリヴィエとつぼみの今の様子はまるで弟の面倒を見る世話焼

きな姉とでも言うべきだろう。2人は何やらもめているがそこへ  
りかが割り入り2人を止める。

えりか「はいはい。分かったから次つぼみやってみようか？」

つぼみ「……」

えりかはメガホンでつぼみの頭をポンと叩くと次はつぼみが練習す  
る番だという。つぼみは顔に冷や汗を浮かべる。

オリヴィエ「はあ」

こでれうるさい教育ママから少しは解放されるとオリヴィエはため  
息をついてベンチに寄りかかるだらけた姿を曝す。

えりか「じゃ〜行くよ？さんはい」

えりかの合図を出すとつぼみは歩き始めるのだがその姿はかなりぎ  
こちなくてガクガクトした動きであった。

つぼみ「……う、うわっ!？」

数歩歩くとつぼみはつまずいて転んでしまう。転んだ彼女にいつき  
が駆け寄る。

いつき「大丈夫かいつぼみ？」

えりか「全然なっていないよ。学園祭の時を思い出して!!!」

オリヴィエ「ふっ」

つぼみが転んだのを見たオリヴィエはニヤリと笑みを見せた。どう  
やら自分に構いすぎた罰はちがあたったんだと思っっているらしい。

つぼみ「うう〜カッコ悪いです」

えりか「しょーがないな〜此処は1つ私が見本を見せるしかないっ  
しょ」

えりかは得意げにそう言うのだったがえりかが見本を見せる前に読  
書をしていたゆりがベンチに座っているオリヴィエに駆け寄ったの  
だった。

ゆり「オリヴィエ私と一緒に練習しましょ。貴方だってショーに出  
るんだから……ね？」

えりか「……こわ」

えりかはまだ慣れないゆりの態度に思わず呟いてしまう。やはり年

の差というのもあるのだろうか？近くで見ている大人達も若干苦笑いを浮かべていた。

ももか「いくわよ～さんはい！！！！」

つぼみ「オリヴィエ頑張つて！！！！背筋を伸ばして足曲げちゃだめですよ」

ももかの合図に合わせてオリヴィエとゆりは同時に歩き出す。オリヴィエは普通に歩けばいいのだろうと軽い気持ちだったのだが後ろにいるつぼみがうるさい事とや隣を歩いているゆりの様子を見ていと・・・

つぼみ「余所みしちやダメです！！オリヴィエ」

オリヴィエ「！？・・・わああつ！？」

なんとつぼみと全く同じ場所で全く同じ転び方をしてしまうのだった。つぼみは次に転んだ彼に駆け寄る。

つぼみ「あ、ああ～大丈夫ですか？」

えりか「ぷつ！！・・・はははははは！！！！つぼみとオリヴィエ仲良すぎでしょ～同じ転び方してるよ！！！！あははははは！！！！」

えりかは思わず大笑いしてしまうのだがそれは年頃の男の子であるオリヴィエのプライドを傷つける事になってしまふのだった。

つぼみ「オリヴィエ大丈夫ですか？また怪我を」

オリヴィエ「・・・たいよ」

つぼみ「え！？」

オリヴィエ「つぼみなんて大嫌いだ！！！！」

つぼみ「そんな・・・ひどい」

オリヴィエは狼のように眼を光らせるとつぼみに大声でそう怒鳴り散らすのだった。つぼみは真っ白になると眼に涙を浮かべて雫を数滴流すのだった。

今日の練習はコレで終わりとなったの。オリヴィエはえりかの部屋に呼ばれるとファッションショー用の服の寸法を計る手伝いをさせられることとなった。

えりか「はははははははは！！ふははははは」

オリヴィエ「笑いすぎだよ」

えりか「あはあく可笑しい許してあげなよ。はあくいこつち来て」  
えりかはさっきの出来事がかなりツボだったらしく未だに笑っていた。そのことにオリヴィエは膨れた顔になりながら黙らせようと一言文句を言うがえりかは気にする事はなかった。

オリヴィエ「散らかり過ぎだよ」

そして寸法合わせをする為に言われるがままに近づくのだが部屋に様々な物が散らばっているのを避けながらもえりかの元に近づくのだった。

えりか「いやあくちよつと夢中になり過ぎちゃって」

オリヴィエ「あんたモデルじゃなかったの？」

えりか「あんたじゃなくてえりか。アタシ服作るのが好きなんだよね」  
オリヴィエ「親も作ってるのに？」

えりか「そうだよ、でも昔はママもモデルだったんだ。もも姉も現役モデルだし。それが結構コンプレックスだったんだけどね」

オリヴィエ「・・・」

えりか「ちゃんと胸張って」

オリヴィエ「今は違うの？」

えりか「うん全然ないわけじゃないけどね。自分の得意な分野でもっと頑張ってみようってさ・・・よし、いいよ」

オリヴィエはえりかの過去を聞いて意外だと思っていた。おふざけが絶え無さそうなえりかがこんな純粋な気持ちがあったとは思ってなかったから当然かもしれない。

えりか「知ってる？ファッションにはね人の心を華やかにする魔法があるんだよ」

オリヴィエ「ふーん」

えりか「性格変えるのって難しいけどさ服変えるだけでなんか違う自分になった気がするじゃん？単純だけどそれでいいと思うんだよ」  
ね



オリヴィエ「よく分からないな……」

えりかの言葉の意味がオリヴィエには分からなかった。ファッションが持つ魔法なんてものがあるのだろうか？信じられないのかもしれない

えりか「ふははは でもつぼみも結構変わったんだよ？」

オリヴィエ「へえ」

えりか「まあ今のつぼみがあるのは一重にアタシのお陰というわけね」

えりかはまるでつぼみが変わる事が出来たのはずべ手自分のお陰であるという……いやというより言っている。オリヴィエはまたムツとした顔になる。

オリヴィエ「……（コイツ）そう言う事言って人から嫌われな  
いのが不思議」

えりか「何をお？弟子入りするか？」

オリヴィエの憎まれ口にえりかは大袈裟に反応して悪ふざけが始まりそのままオリヴィエの頭を抱える様にヘッドロックをすると頬を摘んでやる。つぼみとはまた違う感じでえりかは弟をからかう姉とでも言うべきかもしれない。

オリヴィエ「しないよ！！あたあたた」

えりか「オシャレして見た目は変わったけどいい所は最初から変わらないんだよね」

オリヴィエ「……？」

突然何か思いがこもった様な口調になるえりかその様にオリヴィエは不思議そうな顔になる。

つぼみ「えりか……何してるんですか！！！オリヴィエの顔が伸びちゃいます」

するとそこにつぼみといつきがやってきた。つぼみはえりかからオリヴィエを離させる。

いつき「おばさんがよんでるよ」

えりか「あ、おつかい」

そう言えばこの後自分は母に頼まれたお使いをしないといけないとえりかは嫌そうな顔になる。

いつき「ボクが行こうか？えりかは自分の作業を続けたい」「えりか「ホントに？いつきだーい好き ありがとう！！！」

そんなえりかの心情を悟ったいつきはえりかの代わりにおつかいを引き受ける事にした。えりかは調子よくいつきに感謝する。

いつき「オリヴィエも来るかい？」

折角だしといつきはオリヴィエを誘い一緒にお使いに行くこととなった。地下鉄に乗り込み目的地に向かう。

いつき「オリヴィエは凄く照れ屋なんだな？そう言う所とか」

オリヴィエ「……」

いつき「ボクの印象だから怒らないでくれると嬉しいな」

オリヴィエ「どうして自分の事を《ボク》って言うの？」

いつき「うん子供のころから守りたい人がいてね。自分は男の子の様に強くなるうと思っていたんだ家は代々武術家で兄が家を継ぐはずだったんだけど身体が弱くて……ボクがその代わりにしているうちに《ボク》って言う様になったんだ」

オリヴィエ「……」

トンネルを抜けると明るいパリの街の風景が目に入ってきた。そして目的の街の駅について2人は地下鉄から降りて階段を上がる。

オリヴィエ「男のふりしてるの辛くない？いつきは女の子じゃないか」

いつき「ふっ」

確かに昔は辛い一面があった。でも今は昔とは違ういつきは笑顔を見せる。そして2人はえりかの母に頼まれた物を取りに行く為にあの服屋についた。

いつき「ああわあいいいいいつ！！！！」

オリヴィエ「……」

頼まれた物とはファッションショーの為にデザインされた服であった。いつきはそれを見るなり目を輝かせていたのだった。

店員「お気に召していただけました？」

オリヴィエ「あ、はい。多分・・・凄く」

いつき「可愛い!!」

オリヴィエはいつきの意外な一面を見る事になった。最初に会った時の印象とはかなり違っていたので当然驚いた。

いつき「いやあく無事受け取れてよかったよねあの服凄く素敵だと思わない？ボクもつい感動しすぎたなあ。なあくんで・・・ああ

(汗)

その後2人は折角なので寄り道をする事にしたのだった。いつきの奢りでクレープを食べながら街を歩く。

いつき「結局、無理してただよでも可愛いものが大好きなんて言っちゃいけない気がしてたんだ。別に誰に去勢されたわけでもないんだけどね」

オリヴィエ「それはなんとなくわかる気がするよ」

いつきの言う事には何となく理解が出来た。自分もサラマンダーと旅をして理由は世界を破壊する為に力を取り戻す為のものだったと知った時は何も言えなかった。でも今は・・・

いつき「・・・君は偉いな」

オリヴィエ「バカにしてるの？」

いつき「まさかボクはつぼみ達がきっかけを作ってくれるまで自分からは何もしなかったんだ。君は違う」

オリヴィエ「逃げてるだけだよ」

いつきはオリヴィエを褒めるがオリヴィエは素直に喜べなかった。

今の自分はただサラマンダーから逃げてるだけでしかない。捕食者から逃げる獲物と大差はほとんどない。そんな自分などえらい筈などないと自虐的になる。

いつき「行動してる。立派さ」

ポプリ「オリヴィエえらいでしゅ〜いつきもえらいでしゅ〜」

いつき「あはは」

オリヴィエ「そんな風に考えて事無かったな」

いつき「僕だつてなかつたよ。皆と会うまでは……でも分かつたんだ人に自分を知ってもらつて大切な事なんだなつて」  
オリヴィエ「うん」

確かにそうかもしれない。でもボクは……。オリヴィエは過去の自分を見つめる様な顔になりながら変死をした。今のボクは本当に正しいのか？……ただ逃げる事で本当にサラマンダーを止めらるのか？色々な事が頭を駆けめぐっていくのだった。

時間は流れ夕焼け空が辺りを包んでいくように空は茜色に染まつていた。2人は地下鉄を利用しアパートへの帰路を歩いていたのだつた。

いつき「オリヴィエの事、分かるうとしてくれる人もいるだろう？」  
オリヴィエ「つぼみの話？」

いつき「君は構われるの苦手みたいだけどほととけないだよ。心の声を聞いているから余計ね」

オリヴィエ「……」

いつき「昼間の事ならもう気にしてないと思うけど……？」

階段を上がり扉を開けようとするのだがオリヴィエは途中で止まってしまう。

オリヴィエ「……先に入っていていいよ」

いつき「《本当は嫌いじゃないです》って素直に言っちゃいなよ！  
！！」

いつきはウィンクしてつぼみに自分の素直な気持ちを書いてしまえと言う。オリヴィエは黙つたまま階段を上げる。

扉を開けるとダイニングルームの明かりがついていた。そしてそのすぐ後に扉の音に気がついたつぼみが出てきた。

つぼみ「！？」

いつき「おお！可愛いわ」

オリヴィエ「……っ！……！」

つぼみは髪をおろしピンクの花のリボンとワンピースの姿になって

いた。オリヴィエは昼間とは違う彼女の姿に言葉を失う。

つぼみ「お帰りなさい。遅かったから心配し・・・あいた!!」

えりか「ちよつと真だ針付いてるんだから・・・お帰り」

いつき「衣装合わせかい？」

えりか「うん。2人も宜しく」

いつき「素敵だよつぼみ。ねえオリヴィエ？」

オリヴィエ「・・・」

えりか「どう？可愛いっしょ」

オリヴィエ「・・・っ・・・」

どうやら凶星の様であり言葉が出ないオリヴィエは思わず目をそらしてしまふ。つぼみは笑顔を見えると・・・。

つぼみ「オリヴィエ・・・似合いますか？」

オリヴィエ「・・・うん」

つぼみ「ありがとうございます」

さくら「つぼみちゃあくん」

つぼみ「はい!!」

えりか「つぼみって時々ホント凄い」

オリヴィエ「えりか」

えりか「？」

オリヴィエ「ファッションって凄いね」

えりか「ふ・・・ふふふ」

いつき「えりか？」

えりか「とーぜん!!」

オリヴィエは改まって昼間にえりかの言った言葉の意味を理解した。えりかはオリヴィエの当たara待った態度に笑うと自信満々の笑顔を見せる。その後全員ファッションショーにお披露目する特別出材の服に着替える衣装合わせをする。その途中ゆりも帰宅してきたので全員で写真を撮ることとなった。だがオリヴィエは笑顔になれないでいた。

ゆり「楽しいときは素直に笑ってもいいのよ？」

オリヴィエ「……………」

オリヴィエは何とか笑おうとするがその顔は正直言って笑顔とは言い難いものだった。

えりか「凄い顔!!!」

つぼみ「惜しいですよ!!!もっとうっ、うっでふう。うっ!!!」

オリヴィエ「……………」

ももか「ああ……逃げた」

つぼみに笑顔をレクチャーされるがオリヴィエはそのまま黙って逃げる様にその場から立ち去りアパートの一室に入ってしまったのだ。

えりか「怒っちゃった」

ももか「アンタがからかうからでしょ」

オリヴィエは暗い部屋に座り込んだ。なんで素直になれないだろう

?ボクはただ……………。

コフレ「パリで飲むキュアフルミックスは一味違うですっ」

シプレ「フレンチですっ」

ポプリ「オリヴィエどうしたでしゅ?」

シプレ「コフレ・ポプリ『ちゅーちゅー、ちゅーちゅー』」

オリヴィエ「笑顔つて……………やっぱいい」

オリヴィエは途中で話すのをやめる。こんな能天気な奴らに相談するのは間違いな気がすると思っただからであろう。オリヴィエは下を向いて考える。そしてため息をつくと雲に隠れていた月明かりが部屋を照らしてきた。

オリヴィエ「!?……………うっ!!!?……………ああああ……………(しま

った……………今夜は満月……………このままじゃあの姿をつぼみ達にあの

姿を……………)」

コフレ「オリヴィエ?」

シプレ「大丈夫ですか?」

コフレ「皆に師らせるですっ!!!」

オリヴィエ「何でもないので……………皆には秘密にして」

するとオリヴィエのカラダに異変が起こる。彼の身体が光り出すとオリヴィエは苦しみ始めるのだった。シプレ達は駆け寄るつぼみ達を呼ぼうとするがそれをオリヴィエが止める。

ポプリ「オリヴィエえ〜」

オリヴィエ「うう．．．ああ．．．」

オリヴィエは何とか苦しそうになりながらも声を押し殺す。今あの手が解放されたらきつとつぼみ達はボクの事を．．．そうならないうちに必死に身体から解放されそうな力を押さえつける。ポプリは彼のその姿に堪らず駆け寄る。

つぼみ「オリヴィエ、謝りますから機嫌を直して．．．」

オリヴィエ「ああああ．．．うううっ！！！」

つぼみ「!?!」

そこにつぼみがオリヴィエの機嫌を取ろうとノックして部屋に入ろうとしたのだが扉からオリヴィエの苦痛の音が聞こえてきたので何事だと思いい扉を開けるとそこには苦しんでいる彼の姿が．．．。

つぼみ「オリヴィエ．．．どうしたんですか!?!」

オリヴィエ「何でもない」

つぼみ「そんな．．．何でもないわけない．．．」

オリヴィエ「いいから!!!」

最悪のタイミングでつぼみが来た。このままでは自分のあの姿が彼女に．．．オリヴィエはなんとかつぼみを部屋から追い出そうと突き飛ばしのだが彼の鋭利な爪がつぼみの服の袖を引き裂いてしまう。オリヴィエ「ゴメン．．．つぼみ．．．っ!!!」

オリヴィエは謝り手のを伸ばそうとしたがその手は既に人のものとは思えないほど鋭くなっていた．．．彼は彼女に手を近づけるのを躊躇してしまう。

オリヴィエ「っ!?!?．．．ああああ」

つぼみ「オリヴィエ!!!」

オリヴィエ「来るな!!!」

身体から発せられる鼓動音。オリヴィエはだんだんと激しくなるそ

れを無理矢理押さえつける様に堪える。つぼみはオリヴィエに近づこうとするがそれを拒むようにオリヴィエが止める。

オリヴィエ「ほっておいてよ……ボクは大丈夫だから頼みよ……」

オリヴィエは涙を流しながらつぼみに近づかないでくれと請う。このままじゃ本当に自分の力の正体がばれてしまう。それだけは何としても……

つぼみ「……大丈夫、大丈夫ですよ」

つぼみはオリヴィエの肩を掴むとそのまま抱きしめて彼を落ちつかせる。するとオリヴィエの身体から光はなくなり伸びていた爪も元の長さに戻る。

オリヴィエ「どうしよう?……つぼみ」

つぼみ「大丈夫です。私たちがいますから……大丈夫」

つぼみは理解できた。オリヴィエが自分を煙たがるように振る舞っていたのは彼にある何かを知られたくないから。ならばその秘密ごと受け入れる様にオリヴィエに優しい声をかけた。

えりか「いつき・ゆり」

大人・琢磨・傑・夕

部屋の外にいるえりか達も黙って聞いていた。オリヴィエが抱える闇は想像を絶するものに違いない……だけど今の彼を守るのは自分達だけしかない。ならば守って見せると目線で誓い合うのだった。

サラマンダー「……ふっ」

サラマンダーは満月を眺めていた。恐らく彼が力をコントロールできていないと分かっているのだろう。そして次の日の満月こそ自分の計画の始まりだと確信を抱いているのだった。



ハトプリ劇場版第4話「暴走」(後書き)

お待たせしました久々の更新です。2作目の長編に熱くなりすぎて更新する機会を逃してました(汗)

では次回もお楽しみ

## ハトプ劇場第5話「オリヴィエの消失」(前書き)

前回まであらずじ

噂の狼男の正体はオリヴィエであった。オリヴィエが人を避ける理由は自分の化け物じみた力の事がばれるのを恐れたからであった。彼の抱える力を知ったつばみは彼を勇気づけ誓う。絶対に守り抜くと……。

## ハトブ劇場第5話「オリヴィエの消失」

大人「オリヴィエが俺達を避けたい理由はそう言う事だったのか」  
琢磨「・・・ああ。いざとなったらオリヴィエ、つぼみ達を守れるのは俺達3人つてことになるな」

その日の夜に大人、琢磨、傑の3人は集まっていた。プリキュアと同等の能力を秘めた仮面ライダー<sup>マスクド</sup>の面々の内で男であるのは自分達であるから故の責任感とでも言うべきものが無意識に表面化してきたのかもしれない。

傑「もしもアイツが暴走して俺達に牙を向けるようになったら・・・その時は俺達は」

大人・琢磨「全力で人々を守る」

大人達は別の決意を固めていた。もしもオリヴィエが理性を失ったその時はせめて自分達3人だけでも全力で彼と闘うという。それが自分達に与えられた責務でもありライダーの力を手に入れた時の誓いでもあるのだ。

翌日の早朝・・・秋の清々しい空気と心地よい風が身体に降り注いでくる・・・オリヴィエはパリの街を散歩しながらサラマンダーとかつて世界中を旅した事を思い出す・・・。

このまま自分が消えたらどんなに楽になるだろう？

だれも悲しまないのだろうけど・・・彼女は本気で悲しむのかな？怪物だと知ったこの僕がいなくなる事を・・・。

日差しがとつても眩しかった。今の自分には本当に眩しかった。思わず手で光をさえぎってしまうほどに・・・。

この世界が滅んだら今見ている綺麗な朝日を見る事さえもできなくなるのだろうか？

ゆり「随分早いよね・・・貴方も散歩？」

そんな事を考えていると聞きおぼえるのある声がしてきた。前を見

ると優しい笑顔をしたゆりがいた。どうやら見つかってしまったらしい。オリヴィエは頷くとその後ゆりと一緒に散歩を続ける。

ゆり「昨日はごめんなさい」

オリヴィエ「え？・・・あ、ああ。」

ゆり「余計な事言っちゃったわね、私・・・」

初対面の時の強気な印象がない事に若干だが戸惑うオリヴィエ。橋の下の河川敷を歩いていると犬がオリヴィエの元に近寄って来た。

ゆりはその様子を見てみるとオリヴィエは何やら不機嫌そうな顔になってしまう。

オリヴィエ「・・・何？」

ゆり「いいえ。動物、好きなの？」

オリヴィエは照れ隠しにマフラーで口元を隠す。どうやらゆりの言った事凶星であるみたいだ・・・その後も2人は川沿いを歩きながら散歩を続ける。

オリヴィエ「飼った事ないんだ・・・ずっと茶毘に出てたから」

ゆり「旅？」

オリヴィエ「・・・」

ゆり「綺麗ね」

オリヴィエは服のポケットからあの赤く光る石を取り出すとそれをゆりに渡す。ゆりは宝石のように輝くそれを見ると率直な感想を言う。

オリヴィエ「男爵の力の結晶だよ・・・ずっとそれを探してたんだ・・・バラバラになってたから探すの大変だったよ。男爵も凄いい嫌がらせだって呆れてたよ」

オリヴィエはそれだけ言うと先に歩き始める。自分の男爵との過去の全てはその石の為に会った様なものであると軽い口調でそう言う。ゆり「一つ聞いてもいいかしら？」

オリヴィエ「答えなくてもいいならいいよ？」

ゆり「貴方とサラマンダー男爵って・・・」

『親子なの？』その問いを聞いた瞬間オリヴィエの動きは止まった。

ボクにとっての彼は……小さい頃、孤独だった自分を外の世界に連れて行ってくれた存在だった。そして自分に怪物の力を与えた元凶……でも彼との思い出は……。

オリヴィエ「違うよ……連れまわされていい迷惑だよ」

本音を言えなかった。本当はずっと求めていた親の感情を抱いていた事を……言える筈がなかった。少なくともぴりキュアである彼女には。

その後も2人は散歩を続ける。今からアパートに戻ってもまだ朝食には早いだろうからもう少し出歩いたぐらいが丁度いいだろう。

ゆり「私、父ともう3年以上会っていないの。フランスで行方不明になったって聞いてるけど本当の事は分からないわ……父に会えたら色々聞きたい事が沢山ある。貴方はそう言う後悔をしてはダメよ？」

ゆりは少なくともオリヴィエには自分と同じ後悔をしてほしくないからの事だろう。

2人はそのままあてのなく気の向くままに歩いているとトンネル前の辿り着いた。勿論、何の躊躇もなく歩いていくがオリヴィエが突然止める。

ゆり「どうしたの？」

突然止まるオリヴィエにゆりは問いかける。オリヴィエが見ている方に視線を合わせるとそこには先客の影があった。その正体はあの男だ。

サラマンダー「よう、元気そうで何より」

ゆり「サラマンダー……逃げなさいオリヴィエ。」

ゆりはすぐにオリヴィエの前に出るとオリヴィエに此処から逃げるように促す。それを聞いたサラマンダーはスツと前が出る。

サラマンダー「これは勇敢なお嬢さんだ……しかしプリキュアでもないのに私に立ち向かうとは、勇気と無謀を履き違えていないか？」

ステッキで手をパンパンと鳴らしながらサラマンダーは近づいてくる。だがゆりは怯まない・・・自分に隠された力がある事をサラマンダーが知らないから当然だろう。

ゆり「それはどうかしら？」

眩いばかりの光がゆりから発せられるとゆりの服装が光のワンピース調の衣装になりかけていたメガネも消える。ココロポットから数多の輝きを放つ心の種がゆりの半分に割れたプリキュアの種に集まり融合して1つの種の硬いを形成するとゆりは高らかに叫ぶ。

ゆり「プリキュア・オープンマイハート!!!」

そしてプリキュアの種を装填すると銀色と藤色の光に包まれていき髪の色から衣装もワンピースから煌びやかなコスチュームに変化していく。そして最後にココロポットを左胸に押しつけると青いバラのようなエンブレムが出現する。ゆりにもう1つの姿・・・それは月光の光を受けた戦士。

???「月光に冴える1輪の花、キュアムーンライト!!!」

オリヴィエ「ゆり？」

まさかゆりもプリキュアだったとは・・・驚くオリヴィエとサラマンダー。

サラマンダー「全く、お前達は本当にいつもに邪魔ばかりしてくるな」

ムーンライト「お生憎ね」

サラマンダー「そこを退け!!!・・・話があるのは君じゃない」

なにやら奇立ちを募らせているサラマンダーが必要としているのはオリヴィエのようだ。

ゆり「オリヴィエ・・・行きなさい。早く!!!」

ムーンライトはオリヴィエが逃げる隙を作ろうとサラマンダーとの距離を縮めるとサラマンダーに向かってチョップを叩き込むがサラマンダーはそれをステッキで防御する。

サラマンダー「すぐ熱くなるのは若い証拠だ」

ムーンライト「貴方よりはね」

2人はそう言い合うとすぐに格闘戦が繰り広げられる・・・両者とも技量は互角だ。

サラマンダー「はははあ!!やるね?」

ムーンライト「オリヴィエ、行きなさい!!!」

サラマンダー「あ、こら待て!!!・・・ルーガルー、話があると言っているだろう!!!」

オリヴィエはムーンライトの姿を見て逃げる事を決意し走り出す。

それを見たサラマンダーはムーンライトのパンチを手で受け止めるとそのまま彼女の手を掴みながら彼に呼び掛ける。だがオリヴィエは聞く耳を持つわけがない。

サラマンダー「手間のかかる」

やれやれとサラマンダーは指を鳴らすとオリヴィエ、ムーンライトはサラマンダー共に姿が消えて何やら大きなコンサートホールのような場所へと連れて来られてしまったようだ。観客席には溢れんばかりの和のスナッキーがいた。

ムーンライト「此処は?」

サラマンダー「おや、どうしてプリキュアがいるんだ?」

サラマンダーはムーンライトが何故この場にいるのかと疑問に思ったが自分の手を見てすぐに答えが出た。サラマンダーは一度ステッキを回転させるとムーンライトの手を握りながら一礼して手を離す。ムーンライト「貴方、本当に砂漠の使徒なの?人間を狼男に変えたり心の花にも興味は無さそう」

ムーンライトはサラマンダーの行動に疑問があった。砂漠の使徒であるはずならば心の花に逸早く興味を抱くはず・・・だがサラマンダーはその心の花に興味を示さずルーガルーを狼男に変えたりと不可思議な行動場ばかり。

サラマンダー「・・・折角だ昔話でも聞いていきたまえ。祖国を追われた男の復讐の話だ・・・この私サラマンダーのね」

サラマンダーが語り始めると同時に舞台<sup>ステージ</sup>の明かりは落ちてスポットライトが彼を照らす。

つぼみ「うわあく素敵です流石おじさん」

えりかの父「はははははは！！！！」

えりかの母「狼男の話って結局どうなったの？」

ももか「さあ、勘違いだったんじゃないの？」

つぼみはえりかの父がカメラで撮った写真を眺めて感激していた。

そのすぐ前にはテレビを見ながらえりかの母とももかがテレビで狼男の話をしている。そしてそのすぐ後にゆりがアパートに帰って来た。

つぼみ「あ。ゆりさん見てください！！これ昨日おじさんが撮った写真なんですけど……」

なにやらゆりの様子がおかしい。つぼみの察し通りゆりに全員は中庭に呼び出されてある話を聞かされた……それは……。

つぼみ「どういふ事ですか？」

ゆり「今言った通りよ。あの子はサラマンダーが連れていったわ」

つぼみ一同『！！！？？』

つぼみ「どうして……ゆりさんも一緒だったのに！！！」

ゆりの話ではなんとオリヴィエがサラマンダーに連れ去られたと言う事だ。全員が尾炉どきの顔が隠せない……中でもつぼみは動揺が隠しきれずゆりの腕をつかみながら詳細の報告を求めるほどだった。

ゆり「つぼみ、落ちついて聞いて。オリヴィエは自分の意思で出て行ったのよ」

強い視線でゆりはつぼみにそう言う。オリヴィエがどうして出て行ったのか……それはゆりが更に語ることとなる……サラマンダーの過去と共に。



ハトプ劇場第5話「オリヴィエの消失」(後書き)

久々の更新です。

ではでは次回もお楽しみに

ハトプリ劇場版第6話「決意」(前書き)

前回までのあらすじ

オリヴィエは自分の意思でサラマンダーの元へと戻ってしまった。  
ゆりはつばみ達に語り始める。サラマンダーの過去を……

## ハトプリ劇場版第6話「決意」

場面はムーンライト、サラマンダー、オリヴィエが飛ばされた劇場に戻る。舞台の中央にはサラマンダーがいてスクリーンに映像を流しながら説明を始めた。

サラマンダー「我々の出現で心の大樹がプリキュアを誕生させた事は知っているね？つまり我々はつ常に対の存在・・・ということだ」  
ムーンライト「最初の砂漠の使徒は初代のプリキュアに敗れたと聞いているけど」

ムーンライトは冷たい口調でそう言い返した。サラマンダーは彼女の言葉を聞いて何やら昔話でもするかのように手を広げて再び語り始めた。

サラマンダー「ああ、キュアアンジェは強かったな・・・封印された数百年、一度だって忘れた事はなかった・・・この屈辱！！！！」  
苦虫を噛みしめたような顔になりながらサラマンダーはそう言った。彼にとっては封印された事が一番の屈辱であったようだ。

サラマンダー「こんな星簡単に破壊できると思ってたんだが・・・」  
ムーンライト「貴方達も目的は世界の砂漠化でしょ？」  
ムーンライトはサラマンダーのセリフに疑問を感じた。砂漠の使徒は世界を砂漠化し地球を手に入れることのはずであって地球の破壊ではないはず・・・彼女の問いにサラマンダーはすぐに答えを吐き捨てた。

サラマンダー「関係ない。生まれた時私はただ知りたかった・・・  
・自分達の存在、王の心の内を。だがそれが心を嫌う王の怒りを買ったらしい。アンジェに敗れ封印された数百年で私が得たものはどこにも居場所のない世界への絶望と砂漠の王とプリキュアへの復讐心だけだった。」

サラマンダーはそういいながら今度はオリヴィエへと近づいて行った。

サラマンダー「ルーガル。お前、最近力のコントロールが上手くできないんじゃないか？フランスに戻って来た時忠告すべきだったがあの場所には私の力が強く残っている。数百年かけて培われた憎しみの力だ。」

サラマンダーの言葉にオリヴィエの顔は震えが見え始めてきた。そんなオリヴィエを余所にサラマンダーは更に説明を続けた。

サラマンダー「それが張れると引き合ってお前の力を増大させているのだよ。今は”本体”のお前が持っているが暴走した力はお前の心を呑みこみ力のままに暴れる獣にするだろう」

ステッキでオリヴィエのマントを捲るとポケットに入れていたあの石が禍々しいばかりの紅い光を放っている。そのままサラマンダーはステッキを床に起きオリヴィエの手を取った。

サラマンダー「明日の満月には化け物の完成だ」

サラマンダーの顔は笑みでいっぱいになっていた。オリヴィエはその顔を見て何故か最初にサラマンダーに出会った時の顔が脳裏に浮かんだ。

サラマンダー「世界は我々のような異物を受け入れない。賢いお前なら分かるよな？だから全て壊して終わりにしよう・・・一緒に来いルーガル・・・その為の数年間だ。」

サラマンダーはステッキを持って立ち上がる。対するオリヴィエは彼の言葉を聞いて神戸を垂らしながら何も言わなくなった・・・  
ムーンライト「ふっ!!!」

その次の瞬間ムーンライトが床を蹴り上げサラマンダーに向かってパンチを一発叩き込んでいったのは言うまでもないだろう。だが当然サラマンダーには直撃することはなく右手で防御されていた。

ムーンライト「この子に謝りなさい・・・」

腕を掴まれながらもムーンライトはそう言った。サラマンダーは彼女に何を言っているのだと言うかのような目線を送り込んでいた。

ムーンライト「誰も貴方達を受け入れない？全てを破壊して終わり？・・・甘えないで!!!」

そして追撃とハイキックを放つもそれはステツキで受け止められた。サラマンダーは移動を始めるがムーンライトは彼に対する攻撃の手を一切緩めなかった。

ムーンライト「貴方は何も分かってないわ!!!何百年も自分の心に蓋をしたまま周りの事なんて何も見てないのね!!!」

移動しながらもムーンライトの一方的な攻撃は続くのだがサラマンダーには直撃する事はなかった・・・しかしそれでもムーンライトは攻撃を止めない。

ムーンライト「あの子どんな思いでいるか考えた事ある?」

サラマンダー「・・・やれやれ今度のプリキュアは随分おせっかいだな!!!」

ムーンライト「自分の事ばかりでオリヴィエと向き合う事も出来ない世界を語る事は・・・出来ないわ!!!」

ムーンライトにそう言われるとサラマンダーの表情が一瞬だけ変わった。一度離れた2人はまた攻防を始める。

ムーンライト「オリヴィエ!!!。貴方はどうしたいの?しっかり自分の言葉で伝えるのよ!!!。後悔する事のないように!!!。・・・貴方の意思を見せなさい!!!」

ムーンライトの言葉にオリヴィエは脳裏に様々な光景が浮かんできた。つばみ達に出会った時の事、そしてサラマンダー達に出会った時の事も・・・自分が今どういいのか・・・それは・・・。

ムーンライト「フツ!!!。・・・はあああああ!!!」  
ムーンライトはフラワータクトを出しエネルギー波をサラマンダーに向けて放射していく。願わくばこのままサラマンダーを倒す気であるのだ。

サラマンダー「グオッ!!!??」

力に競り負けサラマンダーは壁に叩きつけられてしまった。小さく咳をしながら「ひどいな」とつぶやいている。

ムーンライト「サラマンダー、全てを破壊しても何の意味もない、貴方は決して満たされない・・・本当に分らないの?」

ムーンライトの目はいつの間にか悲しさが強くなっていて彼を哀れむようになっていた。その表情を見てサラマンダーの態度が一変する明らかに怒りの目に切り替わっていた。

サラマンダー「その目……あの時と同じ目だ……俺を哀れむ様な……その目を……止めるおおおおおおおおおっ！！！！！！」

始めて感情らしい感情を見せてきたサラマンダーは赤い光を身に纏いながらムーンライトに向かっていく。対するムーンライトも銀色の光を身に纏いサラマンダーを迎え撃つように飛び出す。眩い光が放たれる……どっちが勝ったのだろうか？

ムーンライト・サラマンダー「……」

オリヴィエ「……止めてよ2人とも」

光がやむとムーンライトのタクトとサラマンダーのステッキをそれぞれ片手で受け止めているオリヴィエの姿があった。

オリヴィエ「男爵の言うとおりたしかにボクは化け物だ……皆と一緒ににはいられない」

ムーンライト「オリヴィエ……貴方」

ムーンライトがそう言って瞬間にオリヴィエは彼女の後ろに回り込んでいたそして腕を彼女に振り上げ……

オリヴィエ「ショーに出られなくてゴメン。あと、つばみに……【ありがとう】って」

オリヴィエはそれだけ言うとムーンライトの首に手を振り下ろした。流星のムーンライトでも至近距離ではよけようがなくその場にゆっくりと倒れ始める

ムーンライト「そう言うのは……自分で伝えなさい……」

倒れた彼女は気を失ってしまった……サラマンダーはそれを見てため息をつくと歩き始めた。

サラマンダー「行くぞ。」

オリヴィエ「……」

その数秒後にはオリヴィエも姿を消すのであった。

ゆりから話を聞いた一同は何も言葉が出なかった。とくにつぼみはシヨックが隠せないようで何も言わずにその場から走って行ってしまった。

大人「ちょよ、……おい!!!……あのバカあゝッ!!!えりか、追いかけてよう!!!」

えりか「うん!!!」

また迷子になってしまったら面倒な事になると大人とえりかはつぼみをダツシユで追いかける。つぼみの走りではそう遠くにはまだいけないはずだと必死に2人はつぼみを追いかけるのだった。

大人「見えてきた……っ!!!」

えりか「ちよつと!!!」

つぼみの姿が見えてきた。目の前には自転車がありあのままではぶつかってしまう。……ぶつかる紙一重の所でえりかがつぼみの上着を掴んで彼女を止めさせるのだった

つぼみ「……えりか、大人さん」

えりか「突然走り出してんじゃないわよ!!!迷惑でしょうが!!!」

大人「全くだ……また迷子になるつもりか？」

そういうと突然つぼみは突然泣き出してしまった……当然2人は慌ててしまう。通行人が次第に集まり始めてしまったからだ……取り合えず何とかしようとして大人とえりかはつぼみと共にアパートに戻る。

大人「えりか……」

つぼみ「フランスの方達って親切ですね」

えりか「そりゃあんだけ泣けばね」

つぼみ「？」

えりか「いや、何でもない」

ボケなのか天然なのかとえりかはつぼみの行動にそう思いながら今はあまり触れないでおこうとそう言った

大人「……（ハンカチと花もくれたもんな……）」

となりで大人も反応に困っていた……まさかいきなり白昼堂々と大泣きされるとは思わなかったから仕方ない。適当に歩いているとつぼみは突然語り始めた。

つぼみ「私、一人で迷子になった時お花も見つからないし言葉も通じないし凄く心細かったんです……だからオリヴィエが声をかけてくれたとき凄くうれしくて……悩んでるのを知った時何かしてあげたいと思っただんです。」

つぼみはまた泣きながらそう言った。単純なおせっかいなどではない……自分があの時どうしようもなく泣きそうになっていた時助けてくれたオリヴィエ……そんな彼の悩みを苦しみを痛みを知った時それを癒してあげたい……自分を助けてくれた恩返しをしたい……ただそれだけであったのだ。

つぼみ「写真……見せようと思っただのに……どうして」

また大粒の涙を流しながらそう言うつぼみ……もうオリヴィエに会う事は出来ないのかと思っっているのだろう。

えりか「写真見せに行けばいいじゃん……追い掛けてくるなどは言われてないでしょ？……おりゃあ〜っ！！！」

えりかは明るい口調でそう言った。そしてつぼみに近づいていくとそのままつぼみを優しく抱きしめてやった。

えりか「大丈夫……つぼみの気持ちはちゃんとあの子に伝わってるよ」

つぼみはえりかの言葉を聞いて感動が隠せないのか目に更に涙を溜める。そして大人の顔を見ると大人は無言で笑顔を見せて頷いた。

えりか「だからなくなって……だーいじょぶに決まってるでしょ！！つぼみにもアタシ達がいるんだからさ！！！」

えりかは自信満々にそう言った。そのすぐ後にいつき、ゆり、琢磨達も外に出てきたをが確認できた

ゆり「つぼみ、薫子さんに連絡を取りたいの」

いつき「サラマンダーの事を聞いてみようと思っただけ」



つぼみ「・・・皆、行つてくれるんですか？」

ゆり「当り前でしょ？」

つぼみがそう聞くとゆりは当然だとそう言ったそれに続きいつきも優しい口調でつぼみに話しかける

いつき「ボクらプリキュアとしては砂漠の使徒の野望を阻止しないと」

えりか「まーね」

ゆり「問題はオリヴィエの事だけじゃないのよ？」

つぼみ「はい！！」

つぼみはまた眼に涙を溜めていた。だが今度は笑顔を見せている・・・すると大人はやれやれと言う様に口を開く。

大人「おいおい、俺達は仲間はずれかよ？」

それに続き琢磨も・・・

琢磨「今まで砂漠の使徒と戦ってきたのはプリキュアだけじゃない・・・だろ？」

更に傑も・・・。

傑「大体、どうやって移動する気だ？・・・歩きでなんてないだろ？」

そして最後に夕が・・・

夕「皆、一緒に・・・だよ！！！！」

それに合わせカプトゼクター達も集まってきた。気持ちは全員1つ・・・絶対にオリヴィエを助ける・・・今夜の満月が現れるその前

までは・・・必ず！！！！

ハトプリ劇場版第6話「決意」(後書き)

久々の更新(汗)

実家ではDVDを見れなかったのでどうも更新できませんでした。

次はなるべく早く更新します・・・ではでは次回もお楽しみに

ハトプリ劇場版第7話「大決戦!!」(前書き)

前回までのあらすじ

オリヴィエは自分の意思でサラマンダーの元へと戻ってしまふ。ゆりが語ったサラマンダーの過去と野望、そしてオリヴィエのカラダの中に秘められた秘密を・・・タイムリミットは満月まで・・・つぼみ達はオリヴィエを助ける事を決意する!!!

## ハトプリ劇場版第7話「大決戦!!!」

時間は流れ夕日がパリの街を照らし始めていたその頃・・・サラマンダーとオリヴィエは最初に出会った思い出の場所に来ていた。サラマンダーは夕日を眺めながら寂しそうにしている・・・この場所で封印された数百年・・・とうとう自分の復讐を完結させる時が来たと思っっているのだろう。

サラマンダー「この景色が見られなくなるのは惜しいね」

オリヴィエ「だったら止めなよ」

これは本音なのだろうか？・・・心を持たない砂漠の使徒からは考えられないようなセリフだ。本当に寂しそうで名残惜しそうなサラマンダーを見てオリヴィエは後ろからそう言った。その言葉を聞いてサラマンダーはオリヴィエの方に向き直る。

サラマンダー「不満そうだな？」

オリヴィエの言い分に対してサラマンダーはそう言い返した・・・オリヴィエはそんな彼の顔を見ながら決意に溢れた目を見せる。

オリヴィエ「もう一度言う・・・世界を破壊するなんて止めてよ・・・ボクはアンタの様に世界を語ったりできないしアンタの憎しみも分からない。だけど1人ボッチの寂しさは知ってるよ！？この数年間散々な目にあっただけど・・・悪い事ばかりじゃなかった」

オリヴィエは思い起こしていた・・・サラマンダーと過ごしたこの数年間を・・・彼と共に世界中を旅した事を・・・色々な事があつたけど1人だった自分にとっては楽しかった。

オリヴィエ「世界はボクらを受け入れないかもしれない少なくとも【ボクの世界】には男爵がいたよ!!!!・・・あの約束に日からずつと!!!!」

夕日が自分たちを照らす中でもオリヴィエはサラマンダーに訴えかける。例え自分達は異物で世界に受け入れられないとしても自分には遠いあの日に彼と出会った事で1人ではなくなつた・・・

オリヴィエ「世界を破壊するなんて止めよう・・・此処には大切な人達がいるんだ」

それだけでも十分だと思っていた・・・だけどそれは違ったつぼみ達に出会って色々な事を教わった・・・たった数日間だったけどオリヴィエにとっては自分を<sup>チェンジ</sup>変化する十分な時間だったのだ・・・オリヴィエの目を見てサラマンダーは何か思いつめた様に夕日の方向に身体を背けてしまった。

オリヴィエ「男爵！！！」

サラマンダー「たった数年で・・・お前、随分大きくなったんだな・・・驚いたよ」

サラマンダーは何かを悟った様にそう言った。まるで本物の父親であるかのような・・・優しくも虚しさが混ざった様な複雑な声で・・・彼の後ろでオリヴィエは決意を固めた目になっていた。

オリヴィエ「ボクはもう逃げない力づくでも止めて見せるよ・・・父さん！！！」

サラマンダー「面白い。その牙・・・私に立てて見せるお！！！！」夕日が沈んだのを合図に2人の戦いは始まった。オリヴィエに向けてサラマンダーは炎を放つもそれを避けた後上から拳を叩き込んだ。だがそれは軽々と回避されてしまう。

オリヴィエ「人は人との出会いの中で変わっていける・・・ボク達も一緒じゃないのかぁ!?!」

オリヴィエはサラマンダーに格闘戦を挑みながらもそう言って自分の考え・・・いやつぼみ達と出会った事で学んだ事をサラマンダーにぶつける。しかしサラマンダーはそれに対して・・・

サラマンダー「生憎・・・私は砂漠の使徒でね！！！！」

オリヴィエ「この・・・分からず屋！！！」

炎の衝撃波をオリヴィエにぶつけながらそう言う。オリヴィエはそれを回避しながら瞬間移動したサラマンダーとの距離を一気に縮め始めた。

オリヴィエ「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！



それと同時に突如ハート型のゲートが出現し中からブロッサムとマリリンが登場する。またそれに合わせ地上からはバイク音が響きカブトとガタツクも到着する

ブロッサム「オリヴィエっ!!!」

ムーンライト「プリキュア・シルバーフォルテウェイブ!!!」

???「ライダーバーストおお!!!!!!!」

それと同時に同じころサラマンダーがいた異空間でも同じように来客が現れていた。その正体はムーンライトとサンシャイン、更には黄色い目に黒いカブトムシの姿をした黒点の神こと仮面ライダーダークカブト、蝶をモチーフにした白銀の翼を持つ仮面戦士仮面ライダーフェアリーであった。

マリリン「アンタ・・・何してんのお!？」

全てを破壊し尽くしたオリヴィエにマリリンはそう問うた。明らかにオリヴィエの様子はおかしい・・・

ブロッサム「狼男?」

マリリン「それだあ!!!」

ブロッサムはふとそう呟いた。狼男の正体はオリヴィエだとしたらこの状況の説明は簡単出来る

カブト「成程な・・・だからオリヴィエはあそこまで俺達と距離を置いていたのか」

オリヴィエ「・・・」

マリリン「っ!???」

ブロッサム・カブト・ガタツク「マリリン!？」

全てが理解できた彼らを見捨ててオリヴィエは一気に距離を縮めるとマリリンの首根っこを掴んでしまう・・・そのスピードはカブト達ライダーのクロックアップを思わせるような俊敏さであり隣に居た筈のブロッサム、カブト、ガタツク達は一瞬だけ何が起こったか理解できなかった

マリ「うわあああああつ！！！！」

マリはそのま物凄い勢いで神殿の外壁の残骸に叩きつけられてしまった。まずは1人目とオリヴィエはマリンの首を放すとギリギリした目をブロッサム達に向けた。

ブロッサム・カプト・ガタツク「！！！！」

そしてそのまま前に移動するオリヴィエはブロッサムに向かって回し蹴りを放つが間一髪カプトが身代わりとなった事でブロッサムは無傷で済んだ。

カプト「ぐっ……なんてパワーだ……素早さじゃマスクドじゃ無理だな……」

防御力が高いマスクドフォームでいたので無傷で済んだカプトだがオリヴィエの攻撃はそれだけで済まされずまたしても一瞬で距離を縮められ気が付けば目の鼻の先にオリヴィエはいるのだった。

カプト「しまっ！！……ぐあああああ~~~~っ！！！！」  
何発か蹴りを受けるとカプトはそのまま殴り飛ばされてしまった。  
ガタツク「カプトお！！！！」

慌ててガタツクはカプトに駆け寄る。その間に今度は1人になったブロッサムにターゲットは絞られてしまう。

ブロッサム「っ！！！！……オリヴィエ……私です。分かりませんか？」

またしても一気に間合いを詰められるとブロッサムの首を掴みギリギリと締め始めるオリヴィエ。ブロッサムは彼の顔を見ながらそう言うも声は届いていないのかオリヴィエは尖った爪でトドメを刺してやると一気に衝きたてようとしていく。

マリ「マリインパクト！！！！」

間一髪マリがオリヴィエの手に向かってマリインパクトを放ちブロッサムを救いだした。だがその腕をつかむとマリは地面に身体を叩きつけられてしまう。そしてながられた後かは彼女の顔を踏みつける……そこに溜まらずガタツクが助けに入る

ガタツク「いい加減にしるおっ！！！！」



既にキャストオフしているガタツクはカリバーをオリヴィエに叩き込むもそれは片手で受け止められてしまった。

ガタツク「何っ!?」

動揺しているガタツク・・・だがこれで動きは封じられたとマリリンが下からキックを飛ばしオリヴィエから離れる。飛ばされたカブトもやってきて3人でオリヴィエを取り囲んだ。

ブロッサム「マリリン、カブト、ガタツク、オリヴィエ・・・止めてください!!!」

マリリンは素早く離れ距離を置きカブトはクナイガンでガタツクはガタツクカリバーを構えいつでも飛びかかれるように体勢を整えているのを見てブロッサムは請う様に叫ぶ。だが3人はブロッサムに対して冷徹にも首を横に振った

マリリン「駄目だよ・・・届いてない!!!」

カブト「すまんブロッサム」

ガタツク「ライダー・・・カッティング!!!」

3人に向かってオリヴィエは近づくと飛び上がり手に爪を向ける・・・マリリンは青い光を集め、カブトはクナイガンをクナイモードに変形させ矢先にエネルギーを溜めガタツクはカリバーを1つに合体させる。

マリリン「はあああっ!!!」

オリヴィエ「ウオオオッ!!!」

カブト「だりやあああっ!!!」

ガタツク「ふんっ!!!」

4人の技がぶつかり合うと爆発が起きて辺りは爆風に包まれた・・・決着はついたのかと誰もが思うだろうが決着などついてはいなかった。

マリリン「ブロッサムっ!!!」

ブロッサム「・・・っ・・・止めてください4人ともお!!!」

なんとブロッサムが4人の攻撃の間に入り込み全ての技を受け止めていたのだ・・・いくらプリキュアと言えどもこんな無茶をすれ

ば只で済むはずはない。

3人は急いで技を解きオリヴィエはその場から離れた。少しブロッサムはふらつきながらもオリヴィエの方を見ている・・・何かを確信したように。

マリン「ブロッサムオリヴィエはもう・・・」

ブロッサム「いいえっ!!!・・・あの子は狼男じゃありません・・・オリヴィエのままです!!!」

マリンの言葉を途中で遮りながら言葉を続けた・・・よく見ればオリヴィエの瞳からは涙が流れている・・・ブロッサムはまだオリヴィエを信じるとでも言うのか?・・・まだオリヴィエの心は生きているとでも言うのか?

ブロッサム「謙遜 真実 変わらぬ魅力・・・貴方にピッタリな金木犀の花言葉です!!!」

マリン・カブト・ガタツク「っ!!!」

ブロッサムは押し倒され今にもブロッサムを噛み殺そうとしている・・・まるで狼男の様に・・・そんな彼のおぞましい姿を見てもブロッサムは必死にオリヴィエに訴えかける

ブロッサム「私達の事を思い出してください!!!!」

オリヴィエ「グルルル・・・ガアアウト!!!!」

オリヴィエは獣のように吠えながらブロッサムに襲いかかる。

その頃ムーンライト達はサラマンダーに攻撃を仕掛けているが全く攻撃は通らない炎と赤いシールドで守られているからだ。

ムーンライト「はあああっ!!!!」

ムーンタクトを剣の様に振りおろしてサラマンダーに攻撃するがやはり通らない・・・

ムーンライト「どうして・・・どうしてこんな風にしか生きられないのぉ!?!?」

サンシャイン「オリヴィエと共に生きる道だつてある筈だ!!!!」  
炎が辺りを包み込んでいきながらもムーンライトはサラマンダーに

そう言う・・・それに続きサンシャインがサンフラワーイージスからヒマワリ型のエネルギー弾を何発も浴びせ始めるも炎で全てを掻きけされてしまった。

ダークカブト「そうやって逃げているばかりじゃ何も変わらない・・・何でそれに気が付かないんだあ！！！！」

フェアリー「オリヴィエだって貴方と共に生きたいと願っている・・・どうしてそれを叶えてあげないのよお！！！！」

今度はダークカブトはクナイガンとフェアリーのフェアリーレイピア・ガンモードの高出力エネルギー砲を放つもバリアで防がれてしまう。彼の灼熱の炎にはムーンライト達の声は届かないのか？

ムーンライト「今からでも遅くは無いわ・・・変える事は出来ないのおおっ！！！！！！！！」

ムーンライトがタクトをサラマンダーに向けて突き出す。それと同じころ外ではオリヴィエの猛攻にブロッサム達は追いつめられカブトもキャストオフした状態になっていた。カブトは一度弱らせるしかないマリリンに遠距離援護を頼み自らはオリヴィエにクロックアップで近づくとライダーキックをオリヴィエに向けて放つ・・・だがマリリンの光線に対して人影が割り込んできた。

カブト「・・・っ！！！！」

ライダーキックはギリギリオリヴィエのカラダの前で止めたカブト・・・ブロッサムはマリリンの光線からオリヴィエを庇うとリボンが消滅し力なくその場に倒れこんでしまった

マリリン「ブロッサム！！！！。無茶し過ぎ！！！！」

マリリンが大急ぎでブロッサムに駆け寄り彼女を抱きかかえた。ブロッサムは苦笑いしてマリリンの心配を余所に行っている・・・

カブト「お前・・・ホントにバカだ！！！！・・・この大バカ野郎！！！！・・・一歩間違ったら怪我じゃ済まないぞお！！！！！！」

ブロッサム「ご、ゴメンなさい」

あと少して本当にブロッサムも殺してしまう所だった・・・カブトは本気でそう怒鳴りブロッサムを叱った・・・それに対しては流石

にマズイと思つたのか力ない声でブロッサムは謝つた。

マリ「っ！！！」

カプト・ガタツク「はっ！！！！」

マリ「あんた……」

マリンの反応を見てふとカプト達はオリヴィエの方を見た……オリヴィエは泣いていたのだ……涙の線を頬に作りその場に膝をついたのだブロッサムはオリヴィエに近付きボロボロになった身体にはあわなほどの最高の笑みを見せた。

ブロッサム「怪我は……ありませんか？鳴かないでください。」

そしてそのまま優しくオリヴィエの身体を抱きしめた……オリヴィエは彼女の体温を……血の流れを肌で感じると正気が戻つたのか目の色が変わっていく……怪物から少年の目に戻っていくのがカプト達にも分かつた。

オリヴィエ「……」

ブロッサム「サラマンダー男爵にちゃんと伝えられましたか？チェンジ……出来たんですね」

オリヴィエ「うん」

指でオリヴィエの涙をぬぐいながらブロッサムはそう聞く。オリヴィエは問いに対して静かにうなずいた。

同時刻サラマンダーの手はムーンタクトを掴んではいたが身体に罫が入っていたのを見て全員は驚いていた。

ムーンライト「その身体……」

サンシャイン「崩れてる」

サラマンダー「あちこちガタが来ていてね何百年ここで過ごしたと思っっているんだ？」

サラマンダーは次の瞬間ステッキでムーンライトをふっ飛ばすと魔方陣からエネルギーを解放し始めたそして禍々しい風に包まれる。

サラマンダー「共に生きる道などない！！私の連れは元より孤独と憎しみだけだあっ！！！！……どうせ1人に戻るんだ……わざわざ知らせてやる事もないさ」

サラマンダーは意味ありげなセリフを言い残して辺りを光で包みこ  
んでしまったサンシャインのサンフラワーイービスに全員隠れるも  
それだけでは防げるものではなく全員は光の中に消えていつてしま  
った。

ブロッサム・マリリン・カブト・ガタツク「うわああああああああっ  
!!!!!!!!!!!!」

突然地下から赤い光が飛んできたと思ったら全員飛ばされてしまう・

・地下から爆発と共に巨大な龍の姿が現れたのだ。

龍「トランムンギシャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!!!!!!!!!」

咆哮をあげて飛び回るその龍の姿は今まで見た事のない桁違いの怪  
物であった。

マリリン「何アレ? . . . 冗談でしょおツ!!!!!!」

信じられなかった . . . 龍は左目が宝石の様なもので隠されえてい  
た . . . オリヴィエはそれを見て信じられないと言う様な目になる  
そしてその龍は街に向かって炎を放つ . . . 街に直撃される前にポ  
プリ達がイービスを発動させて防いだのだが . . . 長くは持ちそ  
うにない。

ポプリ「でしゆう~~~~っ!!!!!!!!!!」

シプレ「頑張れですうポプリ!!!!!!」

コフレ「根性ですっポプリいつ!!!!!!」

シプレとコフレも一緒に踏ん張るがすぐにイービスに罅が入り亀裂  
が大きくなる . . . . 砕かれるのも時間の問題だ。

ポプリ「う、う、う . . . . もうだめだしゆう~~~~っ!!!!!!」

もう限界だ . . . . ポプリは涙ながらにそう叫ぶ。

突如辺りに白い花弁が散らばると白い学ラン姿の青年が龍に向かっ  
てパンチを一発放って炎を止めさせた。

シプレ・コフレ・ポプリ「コツペ様あつ!!!!!!!!」

そして後ろからポプリの後ろから現れたのはもう1人のハイパーカ  
ブト . . . . 上原大人の師匠の天道総司が変身する仮面ライダーカブ

トも姿を見せていた。

更に続けてコツペが殴り飛ばし更

オリヴィエ「男爵う！！！」

マリン「アレがサラマンダーっ!？」

オリヴィエ「力が暴走してるんだ・・・きつともう駄目だ元には戻れないよ」

ココの封印をオリヴィエが破壊してしまった事で全ての力がサラマンダーに乗り移ってしまったのだ・・・そしてそれを制御できずに本能のままに暴れる怪物となってしまったのだ。オリヴィエは絶望にうなだれ顔を地面に向けてしまった・・・もはや全てが手遅れだったのか!？

ハトプリ劇場版第7話「大決戦！！」（後書き）

今更ですがスイートの劇場版も始まりましたね。

早く見なければ（汗）

では次回もお楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6763o/>

---

仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア～ライダーシステムと心の大

2011年11月16日21時54分発行